立山山古墳群

福岡県八女市所在立山山（たちやまやま）古墳群の発掘調査報告

八女市文化財調査報告書

第　10　集

1983

八女市教育委員会

立山山古墳群

1, 立山山古墳群全景

2，8号墳出土垂飾付耳飾り

3, 8号墳出土埴輪

4, 23号墳出土珠文鏡

5, 24号墳出土四獣鏡

序

今回の発掘調査は、八女市北部スポーツ公園建設によりその端を発したものです。

文化財分布図によれば、当初この区域には4基の古墳が認められ、それらを中心に調査をすすめてまいりましたが、最終的には30基に及ぶ古墳等の調査となり、そのなかで我が国の歴史を知るうえで貴重な出土品の発見もなされました。

調査は、県教育委員会及び市土地開発公社ほか関係各位のご指導・ご協力によりすすめ、所期の目的を果たすことができ、その調査結果について今回刊行のはこびになりました。

この資料が、郷土の歴史や岩戸山古墳とそれに連なる八女古墳群との関連を知るうえで、貴重な資料となるものと確信するものです。

なお、本書の刊行にあたり、調査及び原稿の執筆を担当された県教育委員会、東海大学助教授佐田茂氏をはじめ、発掘作業をされた関係各位のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和58年5月31日

八女市教育委員会

教育長　坂　田　不二夫

例　　言

1．本書は、八女市の北部スポーツ公園造成に関わる立山山古墳群の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は八女市教育委員会が遂行し、福岡県教育委員会ならびに東海大学助教授佐田茂が援助した。

3．出土遺物の整理は九州歴史資料館において、岩瀬正信氏の指導のもとに行なった。

4．出土鉄器・鏡の保存処理は、九州歴史資料館技術主査横田義章氏にお願いした。

5．出土人骨の鑑定は九州大学医学部教授永井昌文氏に、赤色顔料の分析は福岡県衛生公害センター・環境科学部長森彬氏に依頼し、その結果を収録した。

6．遺構・出土遺物の実測・計測ならびに製図・浄書については、調査担当者と文化課諸兄のほかに、特に豊福弥生・平田春美・大場澄恵・平島文博の各氏に多大な援助を受けた。

7．写真は、遺構については伊崎が、遺物については九州歴史資料館主任技師石丸洋氏と平島美代子氏、伊崎が撮影した。

8．本書の執筆は次のとおりである。

Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ……伊　崎　俊　秋
Ⅳ－Ａ・Ｂ－３・Ｃ……　〃
Ⅳ－Ｂ－１・２……副　島　邦　弘
Ⅴ－１……永　井　昌　文
Ⅴ－２……森　　彬
Ⅵ……伊　崎　俊　秋
Ⅶ－１・２・３……　〃
Ⅶ－４・５……佐　田　　茂
Ⅷ……伊　崎　俊　秋

9．表字の揮毫は、八女市教育委員会教育長坂田不二夫氏による。

10．本書の編集は、佐田と伊崎が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に至るまで……1
　2．調 査 体 制……1
Ⅱ．遺跡の環境……3
　1．地理的環境……3
　2．八女丘陵とその周辺の歴史的環境……4
Ⅲ．調査の概要……21
Ⅳ．調査の内容……25
　A．古墳時代の調査……25
　　1．2号墳とその周辺……25
　　2．8号墳……29
　　3．9号墳……63
　　4．21号墳……65
　　5．22～27号墳……67
　　6．28・29号墳……93
　　7．30・31号墳……97
　　8．32～39号墳……101
　　9．11・40～42号墳……112
　　10．12号墳……120
　　11．石棺墓・石蓋土壙墓・木棺墓……124
　B．旧石器・縄文時代の調査……130
　C．その他の遺構と遺物……143
Ⅴ．自然科学系の調査……146
　1．立山山人骨……146
　2．立山山1号住居跡出土赤色顔料の分析……147
Ⅵ．立山山古墳群調査史抄……148
Ⅶ．総　括……155
　1．遺構・遺物総説……155
　2．陶質土器と古式須恵器……167
　3．垂飾付耳飾り……178
　4．竪穴系横口式石室……183
　5．八女古墳群出土の埴輪……185
Ⅷ．おわりに……196

図 版 目 次

巻頭カラー　1．立山山古墳群全景（大成航空提供）
2．8号墳出土垂飾付耳飾り
3．8号墳出土埴輪
4．23号墳出土珠文鏡　　5．24号墳出土四獣鏡

PL. 1．立山山古墳群航空写真（南から）〈大成航空提供〉
2．(1) 2号墳石室近景〈発掘前〉　(2) 2号墳石室近景〈発掘後〉
(3) 1号住居跡全景（西から）
3．(1)昭和40年頃の8号墳〈江下淳氏提供〉　(2)調査前（昭和56年）の8号墳
4．(1) 8号墳全景（南西から）　(2) 8号墳石室（南西から）
5．(1) 9号墳遠景（北東から）　(2) 9号墳近景（南から）
(3) 9号墳埴輪出土状態（南から）　(4) 9号墳埴輪出土状態（南から）
6．(1)21号墳全景（南西から）　(2)21号墳石室全景（西から）
7．(1)21号墳石室全景〈天井石除去後〉　(2)21号墳石室内
8．(1)23号墳全景（西から）　(2)23号墳全景（西から）
9．(1)23号墳石室全景（西から）　(2)23号墳石室内
10．(1)24号墳全景（東から）　(2)24号墳主体部（南から）
11．(1)24号墳主体部（南から）　(2)24号墳遺物出土状態
(3)四獣鏡出土状態
12．(1)25号墳石室全景（西から）　(2)25号墳遺物出土状態（東から）
(3)25号墳遺物出土状態（東から）
13．(1)26号墳全景（南西から）　(2)26号墳全景（北東から）
14．(1)27号墳全景（南から）　(2)27号墳石室（西から）
15．(1)28号墳全景（南から）　(2)28号墳主体部（南から）
16．(1)29号墳全景（西から）　(2)29号墳主体部（北から）
17．(1)30号墳主体部（南西から）　(2)30号墳主体部〈蓋石除去後〉
18，(1)31号墳全景（南から）　(2)31号墳主体部（北から）
19．(1)32号墳全景（東から）　(2)32号墳主体部（北から）
20．(1)33号墳全景（西から）　(2)33号墳主体部（北から）

PL. 21. (1)34号墳主体部（北から）　(2)31～42、11・12号墳全景（東から）
22. (1)35号墳全景（東から）　(2)35号墳主体部（南から）
23. (1)36号墳全景（南から）　(2)36号墳主体部（南から）
24. (1)37号墳全景（西から）　(2)37号墳主体部（東から）
25. (1)37号墳主体部〈蓋石除去後〉　(2)37号墳主体部（北から）
(3)棺外鉄器出土状態
26. (1)38号墳全景（北から）　(2)38号墳主体部
27. (1)38号墳鉄刀出土状態　(2)38号墳主体部〈蓋石除去後〉（南から）
28. (1)39号墳全景（東から）　(2)39号墳主体部（南から）
29. (1)11号墳全景（西から）　(2)11号墳主体部（南から）
30. (1)40号墳全景（西から）　(2)40号墳主体部（南から）
(3)40号墳〈蓋石除去後〉（北から）
31. (1)41号墳全景（西から）　(2)41号墳主体部（北から）
(3)41号墳主体部〈蓋石除去後〉(南から)
32. (1)42号墳全景（西から）　(2)42号墳主体部（北から）
33. (1)42号墳主体部〈蓋石除去後〉　(2)側壁と小口壁の接点
(3)側壁と小口壁の接点
34. (1)12号墳全景（東から）　(2)12号墳主体部（南から）
35. (1)C 1 号（東南から）　(2)C 1 号蓋石除去後（北西から）
(3)C 2 号（北から）　(4)C 3 号（北から）
36. (1)C 5 号（北から）　(2)C 5 号蓋石除去後（南から）
(3)SC 1 号（北から）　(4)SC 1 号蓋石除去後
37. (1)SC 2 号（北から）　(2)SC 2 号蓋石除去後
(3)SC 3 号（南から）　(4)SC 3 号蓋石除去後
38. (1)SC 4 号（北から）　(2)棺外鉄剣出土状態
(3)蓋石除去後（北から）
39. (1)M 1 号（北から）　(2)D 1 号（北から）
40. (1)K－2（西から）　(2)K－3（南から）
41. (1)SR－1（東から）　(2)SR－2（西から）
(3)SR－3（東から）
42. 1 号住居跡・9 号墳・8 号墳・8 号墳近辺出土土器
43. 8 号墳出土円筒埴輪
44. 8 号墳出土埴輪の調整痕

45．８号墳出土埴輪の調整痕・布痕・ヘラ記号
46．８号墳出土形象埴輪①（人物）
47．８号墳出土形象埴輪②（人物・猿・馬具・その他）
48．８号墳出土形象埴輪③（馬・猪）
49．８号墳出土形象埴輪④（家・盾）
50．８号墳出土装身具
51．８号墳出土鉄器
52．23号墳出土土器
53．23号墳出土珠文鏡・玉類・鉄器
54．22号墳出土土器・鉄器、24号墳出土土器・四獣鏡
55．24号墳出土玉類・鉄器・鹿角製刀装具
56．25号墳出土珠文鏡・鉄器
57．27号墳出土土器、29・30・37・38・11・40・41号墳出土鉄器
58．12号墳出土土器・玉類・鉄器、Ｃ１，ＳＣ２・４号出土鉄器
59．立山山Ｊ区出土石器・土器、採集土器
60．立山山採集土器・石器
61．立山山採集石器
62．立山山採集石器、Ｋ－１・２・３号土器

挿　図　目　次

Fig. 1．立山山古墳群位置図…… 3
2．十連寺古墳の排水溝……〈*photo.*〉 7
3．石人山古墳採集土器実測図…… 7
4．弘化谷古墳全景（南から）……〈*photo.*〉 7
5．丸山塚古墳墳丘測量図…… 9
6．茶臼塚古墳墳丘測量図…… 9
7．真浄寺２号墳（１号石室）……〈*photo.*〉 10
8．真浄寺２号墳（２号石室）……〈*photo.*〉 10
9．立山山３号古墳石室……〈*photo.*〉 11
10．立山山10号墳採集土器実測図…… 11

Fig. 11．立山山10号墳墳丘測量図……12
12．立山山13号墳遠景（調査後・東南から）……〈*photo.*〉12
13．三助山窯跡群採集土器実測図……13
14．立山山古墳群より八女平野部を望む……〈*photo.*〉15
15．立山山古墳群周辺遺跡分布図……20
16．八女丘陵とその周辺の遺跡分布図……〔折込〕
17．調査区北半発掘前の状況（東南から）……〈*photo.*〉21
18．〝川祭り〟の飾り……〈*photo.*〉22
19．８号墳埴輪出土状態……〈*photo.*〉22
20．〝川祭り〟の飾り……〈*photo.*〉24
21．八女郡黒木町霊厳寺の奇岩……〈*photo.*〉24
22．立山丸山古墳と立山山２号墳周辺地形図……25
23．２号墳と周辺遺構配置図……26
24．２号墳石室実測図……27
25．１号住居跡実測図……27
26．１号住居跡出土遺物実測図……27
27．２号墳周辺遺構出土遺物実測図……28
28．１号住居跡（北から）……〈*photo.*〉28
29．８号墳地形測量図……29
30．立山山古墳群地形図・遺構配置図……30
31．立山山古墳群地形測量図……〔折込〕
32．８号墳石室実測図……31
33．８号墳出土土器実測図①……33
34．８号墳出土土器実測図②……34
35．円筒埴輪模式図……35
36．８号墳出土埴輪実測図①……36
37．８号墳出土埴輪実測図②……37
38．８号墳出土埴輪実測図③……38
39．８号墳出土埴輪実測図④……39
40．８号墳出土埴輪実測図⑤……40
41．８号墳出土埴輪実測図⑥……41
42．８号墳円筒埴輪出土状態……〈*photo.*〉42
43．８号墳出土埴輪（楕円形）実測図⑦……43

Fig. 44. 8号墳出土埴輪（楕円形）実測図⑧……44
45. 8号墳出土埴輪（朝顔形）実測図⑨……45
46. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑩……46
47. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑪……47
48. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑫……48
49. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑬……48
50. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑭……49
51. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑮……50
52. 8号墳出土埴輪（形象）実測図⑯……51
53. 8号墳出土装身具実測図……52
54. 8号墳出土鉄器実測図①……55
55. 8号墳出土鉄器実測図②……56
56. 8号墳出土鉄器実測図③……57
57. 8号墳出土鉄器実測図④……58
58. 8号墳出土鉄器実測図⑤……59
59. 8号墳付近近世墓埋土中出土土器実測図①……60
60. 8号墳付近近世墓埋土中出土土器実測図②……60
61. 8号墳埴輪出土状態……〈*photo.*〉62
62. 9号墳墳丘測量図……63
63. 9号墳埴輪出土状態断面図……64
64. 9号墳出土埴輪実測図……64
65. 21号墳石室実測図……〔折込〕
66. 21号墳地形測量図……65
67. 21号墳出土土器実測図……66
68. 22～27号墳地形測量図……〔折込〕
69. 22号墳出土土器実測図……67
70. 22号墳出土鉄器実測図……67
71. 23号墳石室実測図……〔折込〕
72. 23号墳出土土器実測図①……69
73. 23号墳出土土器実測図②……70
74. 23号墳出土土器実測図③……71
75. 23号墳出土土器実測図④……72
76. 23号墳出土珠文鏡拓影……73

Fig. 77. 23号墳出土玉類実測図……73
78. 23号墳出土鉄器実測図①……74
79. 23号墳出土鉄器実測図②……75
80. 23号墳前庭部側壁……〈*photo.*〉 75
81. 24号墳主体部実測図……76
82. 24号墳出土土器実測図①……77
83. 24号墳出土土器実測図②……78
84. 24号墳出土土器実測図③……78
85. 24号墳出土四獣鏡拓影……79
86. 24号墳出土玉類実測図……80
87. 24号墳出土鉄器・鹿角製刀装具実測図……81
88. 25号墳石室実測図……82
89. 25号墳出土土器実測図……83
90. 25号墳出土珠文鏡拓影……84
91. 25号墳珠文鏡出土状態……〈*photo.*〉 84
92. 25号墳出土鉄器実測図①……85
93. 25号墳出土鉄器実測図②……86
94. 25号墳出土鹿角製刀装具実測図……86
95. 25号墳石室（西から）……〈*photo.*〉 86
96. 26号墳出土土器実測図……87
97. 26号墳出土埴輪実測図……87
98. 27号墳石室実測図……88
99. 27号墳出土土器実測図①……89
100. 27号墳出土土器実測図②……90
101. 27号墳出土土器実測図③……91
102. 27号墳出土埴輪実測図……91
103. 28・29号墳地形測量図……92
104. 28号墳主体部実測図……93
105. 28号墳出土鉄器実測図……94
106. 28・29号墳全景（北東から）……〈*photo.*〉 94
107. 29号墳主体部実測図……95
108. 29号墳出土土器実測図……96
109. 29号墳出土鉄器実測図……96

Fig. 110．30・31号墳地形測量図…… 97
111．30号墳出土鉄器実測図…… 97
112．30号墳主体部実測図…… 98
113．31号墳主体部実測図…… 99
114．発掘作業スナップ１……〈*photo.*〉 100
115．32～39号墳地形測量図……〔折込〕
116．32号墳主体部実測図……101
117．33号墳主体部実測図……102
118．33号墳主体部内の近世骨壺……〈*photo.*〉 102
119．34号墳主体部実測図……103
120．35号墳主体部実測図……104
121．36号墳主体部実測図……105
122．37号墳主体部実測図……106
123．37号墳出土鉄器実測図……107
124．発掘作業スナップ２……〈*photo.*〉 107
125．38号墳主体部実測図……108
126．38号墳出土鉄器実測図……109
127．39号墳主体部実測図……110
128．39号墳出土土器実測図……111
129．39号墳出土埴輪実測図……111
130．11号墳主体部実測図……112
131．11・40～42号墳地形測量図……〔折込〕
132．11号墳出土土器実測図……113
133．11号墳出土鉄器実測図……114
134．40号墳主体部実測図……115
135．40号墳出土土器実測図……115
136．40号墳出土鉄器実測図……115
137．41号墳主体部実測図……116
138．41号墳出土土器実測図……117
139．41号墳出土土器実測図……117
140．42号墳主体部実測図……118
141．12号墳地形測量図……120
142．12号墳主体部実測図……〔折込〕

Fig. 143. 12号墳出土土器実測図……121
144. 12号墳出土玉類実測図……121
145. 12号墳出土鉄器実測図……122
146. 12号墳主体部東半部……〈*photo.*〉 123
147. C 1 号実測図……124
148. C 1 号出土鉄器実測図……124
149. C 2 号実測図……125
150. C 3 号実測図……125
151. C 4 実測図……125
152. C 5 号実測図……126
153. S C 1 号実測図……126
154. S C 2 号実測図……127
155. S C 2 号出土鉄器実測図……127
156. S C 3 号実測図……127
157. S C 4 号実測図……128
158. S C 4 号出土鉄器実測図……129
159. M 1 号実測図……129
160. 旧石器・縄文時代遺物集中地点と J 区位置図……130
161. J 区遺物出土状態実測図……131
162. J 区出土土器実測図……132
163. J 区出土石器実測図……133
164. 立山山出土土器（押型文）実測図①……134
165. 立山山出土土器（撚糸文・無文）実測図②……135
166. 立山山出土土器（後～晩期）実測図③……136
167. 立山山出土石器実測図①（細石器・石鏃）……137
168. 立山山出土石器実測図②（礫器・剝片）……138
169. 立山山出土石器実測図③……139
170. 立山山出土石器実測図④……140
171. K－2 実測図……141
172. K－3 実測図……142
173. K－1・2・3 土器実測図……142
174. D 1 号実測図……143
175. S R－1・2・3 号実測図……144

Fig. 176. 近世の銭貨……145
177. 近世の銭貨……〈*photo.*〉 145
178. 波多野晥三氏調査記録（21号墳)(『筑紫史論』第三輯より転載)……151
179. 立山古墳出土鉄器実測図……152
180. 八女古墳群出土須恵器①……153
181. 八女古墳群出土須恵器②……154
182. 立山山古墳群墓道復原図……156
183. 立山山古墳群変遷図……157
184. 立山山古墳群の周溝径と主体部主軸長相関図……159
185. 大萩地下式横穴36号出土鉄金具付木片(報告書より転載)……162
186. 竹並Ｈ－26号横穴墓出土鉄器（報告書より転載）……163
187. 陶質土器・須恵器の甕（各報告書より転載）……170
188. 「影塚」古墳出土土器実測図（筑後市郷土館蔵）……174
189. 「八女出土」土器実測図（筑後市郷土館蔵）……175
190. 田川郡香春町長畑１号墳出土垂飾付耳飾り実測図……180
191. 糸島郡前原町大門古墳出土垂飾付耳飾り実測図……180
192. 立山山古墳群石室平面プラン……184
193. 八女古墳群出土の円筒埴輪①……186
194. 八女古墳群出土の円筒埴輪②……188・189

表　目　次

Tab. 1. ８号墳出土玉類計測表……54
2. 立山山出土縄文土器比率表……140
3. 立山山古墳群一覧表……〔折込〕
4. 垂飾付耳飾り発見地名表……〔折込〕
5. 立山山古墳群内竪穴系横口式石室計測表……184
6. 八女古墳群埴輪出土古墳地名表……185
7. 八女古墳群主要古墳の編年……192

Ⅰ．はじめに

1．調査に至るまで

八女市では、4万市民の健康づくりと市民融和のため、「何かひとつやろう体力づくり」をキャッチフレーズにスポーツの振興をはかってきた。昭和54年度の総合体育館の建設に引き続き、マスタープランに基づいて野球場、グラウンド建設の推進に努力してきている。これの企画・遂行には教育委員会社会体育課があたり、今般、地元の協力により、市内東北部・八女市大字本字立山の丘陵上の一角に約5万平方メートルの用地の確保を終え、昭和55年度より北部スポーツ公園の造成を行なってきたところである。

丘陵上のⅡ期工事区内（グラウンド用地）には遺跡分布地図で3基の古墳と包含地の存在が記載されていたため、工事以前に、八女市教育委員会社会教育課からの連絡を受けて1981年3月1日、福岡県文化課調査第一係長宮小路賀宏が現地の分布調査を行なった。社会体育課としては、Ⅰ期工事分の土量不足のためⅡ期工事区域については早急に調査を行なって欲しい意向であり、社会教育課と県文化課とで協議した結果、試掘後に4月および5月から発掘調査を行なうこととした。

年度が改まって1981年4月3日に文化課調査第一係技師伊崎俊秋が試掘を行ない、これをもとに4月13日から発掘調査にとりかかった。

さらに、このスポーツ公園への進入路が変更されることとなり、1982年7月に立山山2号墳とその周辺の発掘を行なった。

2．調査体制

発掘調査は、八女市北部スポーツ公園計画の事業主体である八女市社会体育課および土地開発公社から社会教育課へ調査の執行委任がなされ、そこから更に県教育庁文化課へ担当職員の派遣依頼がなされて実施されたものである。社会教育課は、また、東海大学九州教養部助教授佐田茂にも当該発掘の調査員を委嘱した。

計画予定地の買収・造成については八女市土地開発公社が一切を行ない、発掘調査に要した経費も同公社の負担するところとなった。

関係者は次のとおりである（昭和56・57年度）。

八女市土地開発公社		理事長	斉藤清美（市長）		
		副理事長	大坪重敏		
		常任理事	江渕与曽喜		
八女市教育委員会		教育長（現）	坂田不二夫		
		〃（前）	今村久信		
社会体育課	課長	藤田稲穂	社会教育課	課長	松延繁太
	係長	松崎側次		係長	山口龍一
	史員	松崎仁利		史員	伊藤周二
	〃	馬場光雄		〃	田中博文
				〃	川口美文
				〃	松尾弘子
				臨時職員	川口一敏
東海大学九州教養部助教授・福岡教育大学講師			佐田茂（調査担当）		
福岡県教育庁管理部文化課		課長	藤井功		
調査第一係	係長	宮小路賀宏	調査第二係	主任技師	石山勲
	主任技師	井上裕弘		〃	橋口達也
	〃	酒井仁夫		〃	浜田信也
	〃	川述昭人		〃	中間研志
	〃	副島邦弘		〃	池辺元明
	〃	木下修			
	技師	伊崎俊秋（調査担当）			
九州歴史資料館		技術主査	横田義章		

調査協力　九大学生　田中秋郎

筑後考古学研究会（会長・佐田茂）　堤諭吉・江口寿高・古賀正美・有田正吾ほか多数

教楽木建設・福島建設・地元立山町内の皆様

大成航空（航空写真）

なお、福岡県文化財保護指導委員・木附光雄氏、梅光女学院大学教授・波多野晥三氏、北九州市立歴史博物館主幹・小田富士雄氏、九州大学助教授・西谷正氏には、調査中に現地にて御指導・御助言をいただいた。また、佐賀県文化課、福岡市文化課、大牟田市教育委員会社会教育課文化財係の諸氏・諸兄にも種々御助言をいただいた。記して深甚の謝意を表します。

II. 遺跡の環境

1. 地理的環境（Fig. 1）

立山山古墳群は八女市大字本字立山に所在し、所謂八女丘陵上にある。

八女丘陵は地理的・地形的には、九州脊梁山脈から派生したところの水縄（耳納）山地の一支丘陵であるが、この丘陵の北側が筑後川の支流・広川によって深く開析されているため、東西に狭長な丘陵となっている。北側が急斜面であるのに対し、南側は矢部川の流路に開けた八女平野に続く緩やかな斜面をなす。地形的には、八女丘陵は西は三潴郡三潴町西牟田あたりを限りとし、東は八女市豊福・立山付近が付け根となっている。しかし、古墳群との関係からいえば、東限は星野川が山間部から平野部へ出てきたあたり——八女市山内付近——までを指すのがふつうである。この間はおよそ10数kmを測る。なお、この八女丘陵を指して古くは人形原台地、長峰丘陵などとも言われていたが、現在ではほとんど八女丘陵の名称を用いている。

立山山古墳群は八女丘陵上の東端に近く存し、標高75～90mの高位段丘上に立地する。この古墳群ののる高位段丘は、八女丘陵のほとんどがそうであるが、新生代第四系の旧洪積層を基盤としている。当古墳群から西へ石人山古墳までは約7km、岩戸山古墳まで約3.5km、東へ童男山古墳まで約2kmの距離を測る。

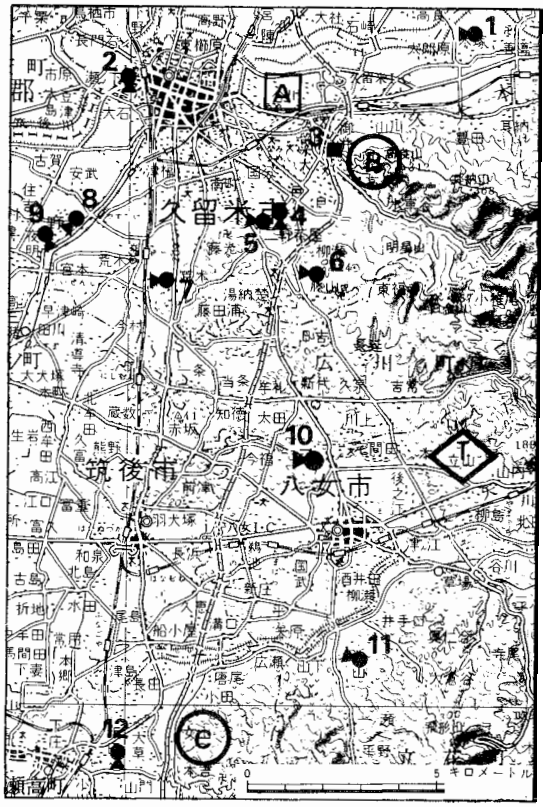


Fig. 1　立山山古墳群位置図（1/200,000）

T. 立山山古墳群

1. 木塚古墳	6. 甲塚古墳	11. 茶臼塚古墳
2. 日輪寺古墳	7. 鷺塚古墳	12. 車塚古墳
3. 祇園山古墳	8. 銚子塚古墳	A. 筑後国府
4. 石櫃山古墳	9. 御塚古墳	B. 高良山神籠石
5. 浦山古墳	10. 岩戸山古墳	C. 女山神籠石

2．八女丘陵とその周辺の歴史的環境（Fig. 15・16）

八女丘陵とその周辺といえば、石人山・岩戸山・乗場等々を代表とする古墳・古墳群であまりにも著名であり、これら全体の古墳群は筑紫国造家ならびにそれと何らかの関係を有する人たちの奥津城と考えられている。この古墳群を形成するに至る経済的基盤が前代から連綿と醸成されてきたことは言を俟たないところであるが、それにしても古墳とその群の質・量に圧倒された感があるのは否めない。ここでは『福岡県遺跡等分布地図』（以下、「県分布地図」とする）を基調にして、八女丘陵とその周辺で現在までに知られている遺跡を時代を追って概観していくことにする。

なお、八女地方とその周辺を取り扱った参考文献をこの項の末尾に一覧し、本文中の註にひく際には、〝参1・参A〟のように記す。

i．旧石器時代

九州全域でも旧石器時代に属する遺物は、近年数多く発見され、枚挙に暇ない程になってきた。そのほとんどは旧石器時代末期に近いもので、ナイフ形石器・尖頭器・細石器等が多い。それに対して前期旧石器は全国で何ヶ所かの遺跡が挙げられているものの、それらの遺物に対して否定的見解を示す学者もあって評価が一様ではない。

八女地方近隣で旧石器時代の遺物を出土した遺跡として、まず山門郡瀬高町清水（きよみず）周辺の数ヶ所――日吉坊・大谷・大中尾・小谷など――が挙げられ（参4）、礫器その他が確認されている。特に礫器については前期旧石器の可能性もあるが、層位的な問題も含めて断定的なことは言えないという。この立山山でも遺構は確認していないものの礫器が出土しており、一部には縄文早期の押型文土器に伴うものもあるが、幾つかは前期旧石器とすべきものもあるようだ。

後期旧石器時代の遺物は、広川町赤坂・平原（参2）、この立山山、そして久留米市で10数ヶ所（参20）が知られている。趨勢としては、近隣に発掘調査が及ぶようになればなるほど、その分だけ該期の遺跡も増えてくるのはまちがいなかろう。

ii．縄文時代

八女丘陵上ではこの立山山で、早期の押型文土器片と局部磨製石斧・打製石鏃などが採集され、また、晩期の甕棺あるいは埋甕・土壙が確認されている。豊福の周辺でも石鏃などが採集されるというから、時期不詳ながらも遺跡の存することは疑いなかろう。少し広い範囲内で知られている遺跡を挙げておく。

●広川町平原（参3）――1970年調査。早期の遺物のみ。押型文・撚糸文・条痕文土器、石鏃、台形状石器、サイドブレイド、スクレイパー、磨石、石錘、砥石。

●八女市下山(参1)――押型文土器、石組炉
●八女市今福(参1)――押型文土器、
●八女市国武(参12)――1981年調査。早期末。押型文土器、石鏃、石皿、磨石、砥石。石組あり。
●筑後市裏山(参18)――1963年調査。押型文土器、局部磨製石斧、石錘、石鏃。

全体としては丘陵上・低台地上を問わず押型文土器を出土する早期の遺跡が目立つ。今のところ前期～中期の土器等は報告されていないが、早晩確認されるであろう。

iii. 弥生時代

北部九州の玄界灘沿岸にまず根をおろした弥生文化は東へ南へと拡散してゆくが、筑後地方に波及するには若干の遅れをみるものの、それほど大きく遅れてはいない。小郡市西島遺跡(註1)にみる土器・石器は弥生初頭期の特徴をよく示している。小郡地域では前期前半～中頃には津古内畑遺跡(註2)・みくに保育所内遺跡(註3)・横隈山遺跡(註4)等で新たな展開をみせてゆく。久留米市近辺では木塚遺跡第1号土壙墓(註5)出土土器に古式の様相を認めることができる。

八女市近辺でもあまり遅れることなく、やはり前期前半の古い段階に、新来の要素を備えた文化が花ひらき、その後はおもに中位段丘上に弥生文化の発展をみることができる。

所謂亀ノ甲式の標式となった亀ノ甲遺跡(参6)は1962～63年の調査で前期前半～末の溝1条、竪穴4基、そして中～後期の甕棺墓20基、箱式石棺墓25基、土壙墓21基を検出した。溝内出土の彩文の壺形土器の存在は注意されてよかろう。甕棺からは貝輪、素環刀の出土がみられ、以前には石棺からの仿製鏡の出土も確認されている。

亀ノ甲遺跡の北隣にある室岡山ノ上遺跡(参13)は1981年に土取りに先立って調査された。弥生前期末～中期前半の竪穴住居跡6軒、貯蔵穴14基、溝2条、甕棺墓1基、箱式石棺墓2基、土壙墓3基を検出しているが、住居跡を確認したことは大きな成果であろう。

さらに1982年には、室岡北小路遺跡の調査が宅地造成に先立ってなされた。ここは1962～63年の亀ノ甲遺跡の西南50mほどの地点である。弥生時代のV字溝（前期）と貯蔵穴、甕棺墓(中期初～前半と後期後半～末)、住居跡、土壙、箱式石棺墓等々を検出している。(註6)

弥生時代にこの地域で稲作を行なっていたことの明確な物証として、八女市岩崎の焼米を出した竪穴がある。(参C)中期の貯蔵穴と看做され、米は全てジャポニカ種である。

他に近隣では筑後市狐塚(参19)、八女市西中ノ沢・坊野・野口・道添(参5)等の遺跡が発掘調査されている。これらはいずれも集落として、あるいはまた土器編年の面から良好な資料を提供してくれている。

八女市周縁での甕棺の出土遺跡はまだ10ヶ所前後であり、時期や墓地構成を僅かなりとも知りうるのは室岡所在の遺跡（亀ノ甲・北小路）だけである。先に触れたように、亀ノ甲の甕棺から貝輪・素環刀などが出土しているのは注目さるべきことである。また、後期も後半～終末

とう、一般には甕棺葬の終わった時期のものがわりと多いことも刮目しておきたい。

武器形青銅器の出土例をみると、この近辺では八女市吉田野間で銅矛13本(参B)、広川町吉常八ノ久保で銅矛・銅戈各1本(註7)、同藤田天神浦で銅矛18本(註8)がある。これらは発見されたのが江戸時代から明治時代初期の頃であり、現存しないものが多く、型式を決め難いが、およそ中細から広形のものと推定されている(註9)。こういった一括埋納の遺跡の存在は、中期後半以降に国産青銅器を使っての共同体祭祀が、この周辺でもとり行なわれていたことを示している。その祭祀行為をとりしきるところの統率者的性格を付与できる司祭者の存在もまた、漠然とではあるが伺い知ることができよう(註10)。

iv. 古墳時代

古墳時代に至ると八女地方は俄然活況を呈してくる。4世紀代の状況はほとんどわからないが、5世紀以降の八女丘陵上の古墳群は目を見張るものがある。全体とすれば、八女丘陵上に古墳が、丘陵付け根のあたりに古墳と窯跡が、そして低台地上に集落が遺存しているといえる。ここでは、a. 古墳、b. 窯跡、c. 集落に分けて見てゆく。

a. 古　墳

八女地方といえばすぐにも古墳を想起するほど古墳の多い所ではあるが、近年それらの幾つかが発掘調査され、実態が僅かずつでも明らかにされつつある。広川町鈴ヶ山・山の前・平原の各古墳群は九州縦貫自動車道路線内にあって、調査後に消滅した(参3)。広川町東山(参15)・熊添(註11)・大塚1号(参16)・山王山(参17)・熊(参16)・高塚1号(参17)、八女市城の谷(参14)の各古墳はこの4～5年のうちに工場造成・土取り等のために調査されたものである。以上の古墳はいずれも八女丘陵周縁部といってよいが、今回の立山山古墳群の調査は、丘陵奥部にある塚ノ谷・牛焼谷の古墳群(参9・10)を除けば、八女丘陵そのものに初めて本格的な開発の手がのびたものであったといえる。願わくば、これが最初で最後のものであって欲しい。

八女丘陵に立地する古墳は現在知られているものが150基程あるが、低墳丘のものなどまだ存する可能性が高いので、おそらく300基前後が数えられよう。これらのうち、代表的なものについては言い尽くされた感もあるが、西の方から順次概観しておこう(Fig. 15・16)。

十連寺古墳(註12)(清導寺古墳)

三潴郡三潴町西牟田に存し、八女丘陵の最西端に位置する。病院建設のため半壊の憂き目にあっていることもあって墳形を決め難いが、「円墳だとすると直径38m……前方後円墳とすれば全長約56mの帆立貝式となる(註13)」であろうという古墳である。主体部は輪切りにされた状態で崖面に露出しており、古式の横穴式石室であろうという意見と竪穴式石室だとする意見とが

あるが、現状の観察のみではどちらとも断じきれない。崖面に現れている石室は最下段から扁平割石（片岩系）の小口積みで、内面は一面に赤色顔料の塗布を見る。床面幅1.3～1.4m、現存高1.8～1.9mを測り、床面には角礫を敷いている。控え積みらしき石材も見られる。この石室は完全に盛土中に構築されているらしく、現在の墳頂から石室天井までは1m強しかない。この石室の東北方には、床面に粘土を敷いて天井に厚さ2～3cmの扁平石を乗せた、幅約30cm、高さ20～25cmの排水溝らしきものが見られる(Fig. 2)。

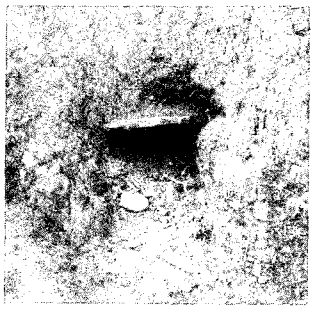


Fig. 2　十連寺古墳の排水溝

出土遺物が全く知られていないため時期比定を困難にしているが、石室形態が上述のいずれであろうとも6世紀代に下ることはなく、新しく見積っても5世紀後半代までと思われ、おそらく石人山古墳よりも古くおかれるべき古墳であろう。ともあれ、時期的にも地理的にも極めて重要な位置を占めるものである。

石人山古墳（註14）

全長110mの三段築成の前方後円墳である。前方部と後円部の境に、この古墳を守護するが如き武装石人が立ちはだかっている。石室は後円部中央よりやや前方部寄りにあり、初期の横穴式石室で内に横口式家形石棺を納めている。この石棺の屋根には同心円文・直弧文のレリーフがあしらってあり、石棺系装飾古墳の白眉とされるものである。墳丘周辺からは円筒埴輪のほか、家・人物・馬・犬・短甲などの形象埴輪も発見されている。そして近年採集されたものに陶質土器としうるものもある。岩戸山古墳が筑紫国造磐井の墓と断定される前、この古墳が比定されていたが、今では磐井の父か祖父の墓であろうとされ（参I）、5世紀後半代に位置づけられている。

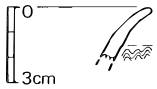


Fig. 3
石人山古墳採集
土器実測図（1/3）

1938年に国指定史跡となり、更に1978年には（参O）八女古墳群としての広域指定内のひとつとなった。また、1982年5月に福岡県文化課と九州歴史資料館が墳丘測量調査を行なっている。

弘化谷古墳（Fig. 4）（参P）

石人山古墳の東に位置する円墳で、直径約35m、周堤を含めると径約59m、高さ6mの二段築成の大型のものである。1971年に内部主体が現われ、装飾古墳であることが確認された。装飾は玄室奥壁

Fig. 4　弘化谷古墳全景（南から）

の石屋形にあり、靱、双脚輪状文、円文、三角形文が描かれている。6世紀中頃に比定される。1973年に県指定となり、1978年には八女古墳群のひとつとして国指定を受けた。

神奈無田古墳(参V)

前方部の低い小形の前方後円墳であったらしいが、古墳はすでに跡形もなく、ただ円筒埴輪を有していたことが知られている。採集した埴輪は筑後考古学研究会が保管している。

岩戸山古墳(註15)

全長132m、周堤を含めると156mにもなる二段築成の前方後円墳で、北部九州では最大の規模を誇る。後円部東北側に一辺43mの別区を有する。筑紫国造磐井の寿墓であり、九州のみならず全国的にみても造営者と年代のわかる貴重な古墳である。阿蘇凝灰岩でつくられた石製品が多数発見されており、種類も人・馬・靱・刀・猪・鶏など豊富である。埴輪は円筒のほか、形象に人物・馬・鶏・琴などがある。6世紀前半代に比定されるから横穴式石室を内部主体としている可能性が高いが、今のところ不明のままである。1955年に国指定を受け、1978年には八女古墳群のひとつとして指定になった。なお、1980年5月に県文化課・九州歴史資料館とが墳丘測量を実施した。

乗場古墳(註16)

全長70mの二段築成の前方後円墳であるが、土取り等で墳形の損傷が著しい。後円部に南に開口する複室の横穴式石室を有し、前室・後室の壁面と袖石に三角形文、同心円文が彩色されている。円筒埴輪がめぐらされ、周濠もあったが、今は存しない。『筑後将士軍談』(参A)によると石人もあったらしい。遺物としては、玉・耳環・帯金具・馬具(杏葉・辻金具・鞍)・鐔・金銅製環頭柄頭〈単鳳式〉・責金具・須恵器・人物埴輪・円筒埴輪などが知られている。6世紀中頃～後半に比定され、筑紫国造磐井の子・葛子の墓所ではなかろうかとの推測もなされている。1923年に国指定をうけ、1978年に八女古墳群のひとつとしての指定となった。

善蔵塚古墳(参V)

全長90mの前方後円墳で、石室等は不明であるが、肩甲着装の人物埴輪が知られている。二段築成で、前方部幅が後円部径より大きい。6世紀中葉～後半のものと推定されている。1978年に八女古墳群のひとつとして国指定を受けた。

丸山塚古墳(註17)(Fig. 5)

径30～33m、高さ5.3mの円墳で、もとは周庭帯もあったらしい。複室の横穴式石室を有し、後室奥壁と羨門・玄門の袖石に円文・三角形文・蕨手文などの彩色が見られる。6世紀後半代

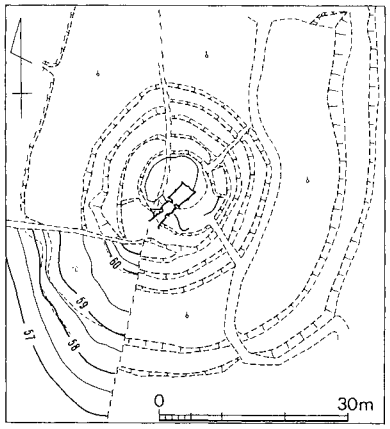


Fig. 5　丸山塚古墳墳丘測量図
(1/1,200)

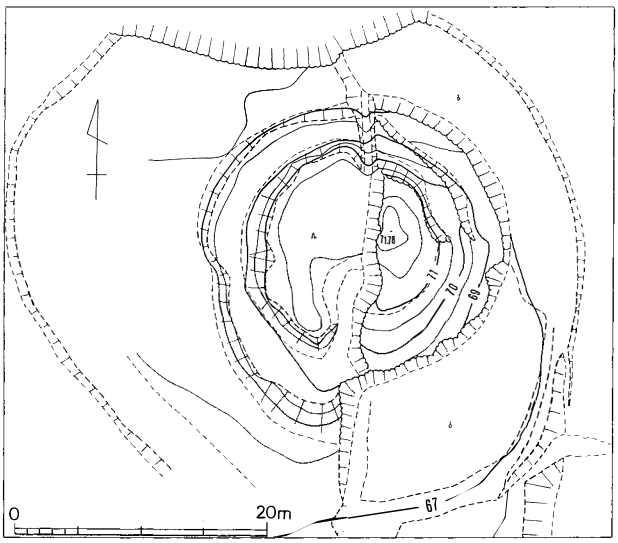


Fig. 6　茶臼塚古墳墳丘測量図 (1/600)

と推定されている。1978年に八女古墳群のひとつとして国指定。

茶臼塚古墳(註18) (Fig. 6)

径約24m、高さ5.3mの円墳であるということのほか、石室等も今のところ明らかでない。1978年に八女古墳群のひとつとして国指定を受ける。

鶴見山古墳(参V)

全長82mの前方後円墳で、後円部は周濠・二段築成の様子がよくわかるが、前方部は北側半分が削平されている。後円部に南西に開口する横穴式石室を有する。円筒・人物等の埴輪が知られ、6世紀中頃～後半の所産と考えられている。

釘崎古墳群(参9・T・V)

全体で20基弱の古墳群であるが、これまでに破壊された古墳も少なからずあろうかと思われる。この古墳群中の1～4号について若干触れておく。

1号墳は全長27mくらいの前方後円墳で前方部を北に向ける。円筒埴輪が採集されているが石室はまだ明らかでない。

2号墳も全長約45mの前方後円墳で、円筒と盾かと思しき埴輪が採集されている。

3号墳は全長35mほどの、前方部を南に向ける二段築成の前方後円墳であったが、1970年に削平され消滅した。単室の横穴式石室だったらしく、仿製四乳文鏡・単龍式環頭大刀・直刀・鉄鏃・轡・鐙・雲珠・辻金具・鉸具・鉋・刀子・須恵器・土師器・円筒埴輪などの多くの遺物が知られている。6世紀中頃～後半に比定される。

4号墳(庚申塚)は径16mほどの円墳のように見えるが、前方部を西に向ける前方後円墳と見てとれぬこともない。判定は確認調査を俟たねばならないが、前方後円墳とすると全長30mく

らいになる。円筒埴輪が採集されている。

本古(ほん)墳群（Fig. 7・8・15）
（参M）

「県分布地図」での1～3号は明確にマウンドを有する古墳としての確認はできないが、石棺や竪穴系の石室が存するのでそれをとりあげているようである。

4号墳（真浄寺3号墳）は現在草木繁茂して墳丘規模を知り難いが、見た目にも高さ5m程で径は30mを越える大きな円墳である。

6号墳（真浄寺2号墳）もまた径30mをこす大きな円墳であり、今のところ石室が2基確認されているもののいずれも墳丘中心になく南に偏しているので、あるいは第1主体部たる石室が存する可能性を秘めている。(註19) いま知られている2基の石室のうち東側にあるもの（仮に1号石室とする）が通常真浄寺2号墳として取り扱われているもので、竪穴系横口式石室である。1960年に土取りのため石室が露出した折、岩崎光氏が応急調査するところとなり、短甲2・大刀3・鉄鏃20・アサヒ貝製品4が出土している。もう1基の石室（仮に2号石室とする）はやはり横口式の形態をとるが、横口部はきわめて狭小と見受けられ、実際のところ追葬を行ないえたかどうか疑問な所もある。この6号墳の墳丘からはタガの突出した円筒埴輪と形象埴輪の破片が採集されている（本書Ⅶ－5参照）。

Fig. 7　真浄寺2号墳〈1号石室〉

Fig. 8　真浄寺2号墳〈2号石室〉

なお、岩崎光氏によると本6号墳（真浄寺2号墳）の西75mに真浄寺1号墳の存することとなっているが、現在では確認しえない。
（参M）

立山山古墳群（PL. 1、Fig. 15）
（参1・10・M）

「県分布地図」には20基が記されており、今回

の調査区内にそのうちの２・８・９(一部)・11・12の各号墳が存したが、新しく検出した分を加えると全体の基数は大幅に増える。

ところで、この立山山古墳群はその一部がこれまで岩崎光・波多野晥三・小田富士雄氏による若干の発掘あるいは分布調査の洗礼を受けている。ところが、３氏ともそれぞれ独自に古墳の号数を呼称していて、いま我々が拠ってたつ「県分布地図」のいずれと対応するのか明確でない。その個々の対照については研究史の意味もこめてⅥでまた触れる。

以下、今回の調査対象外の古墳で注意にのぼったものについて若干記しておく。

丸山古墳は全長46ｍの前方後円墳で、八女丘陵上に立地する11基(註20)の前方後円墳のうち最も東に位置している。石室はまだ明らかでないが、周辺からは円筒埴輪片が採集されている。1978年に八女古墳群のひとつとして国指定史跡となった（Fig. 22)。

３号墳は団蔵塚と称されている古墳で丘陵斜面にあり、南に開口する巨石使用の複室の横穴式石室を有する。巨石の使用とその形態から童男山古墳と近い年代が考えられる(Fig. ９)。

４・５号墳は３号墳の近くに存することになっているが、再三の踏査にもかかわらず現認しえなかった。

10号墳は今次の発掘中に墳丘測量を行なった。北から伸びてきた丘陵鞍部上の傾斜面に築造されている（Fig. 11)。見かけ上は径15ｍ、高さ２～４ｍを測る。西半分は削平され、そこに西南に開口する複室の横穴式石室が見えている。石室内は土砂の流入が多く詳細は不明。北側墳裾あたりで須恵器の甕胴部片を採集した（Fig.10)。

７号墳・13号墳はみかん畑中にあって墳丘を少し削られているようだが、それでも径20ｍをこす大きな円墳である。

16・17号墳は高さ１ｍにも満たぬ低墳丘の古墳である。

なお、丸山古墳と２号墳は中位段丘上にあって他と立地を異にするから、本来は別のグループにすべきかと思われる。

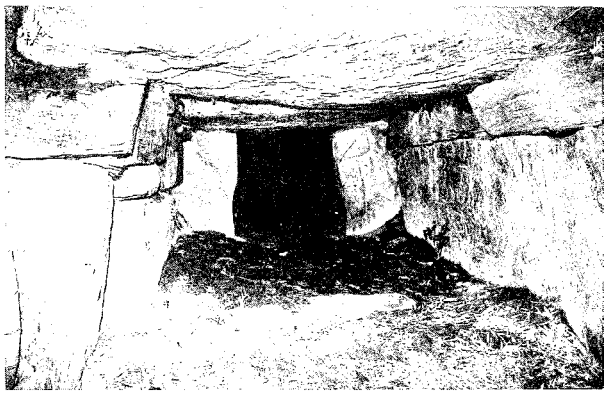


Fig. ９　立山山３号墳石室

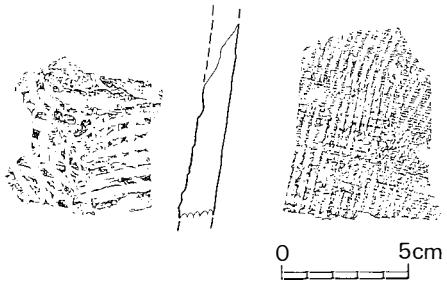


Fig. 10　立山山10号墳採集土器実測図（1/3)

童男山古墳
(註21)

標高102ｍ余に築かれた大きな円墳であり、南西に開口する複室の横穴式石室をもち、所謂巨石墳として名高い。後室の奥壁に接して石屋形があり、左壁沿いにはくり抜きの棺床が置かれている。遺物は知られていないが、石室構造等から６世紀末頃の築造とされる。1956年県指定史跡。

なお、著名な矢野一貞の『筑後将士軍談』(参A)にも〝山内村古塚〟としてこの古墳の記載があり、「類似の石室構造をもつもの４基も紹介されている。さらに「……筑紫君磐井ガ墓ト云伝フ、……」等等の記事を見る。また、西牟田西著『筑後地鑑』には「川崎邑外高阜処、有塚山。土俗呼為童男草女。邑人語日、昔童男草女自秦来時、棄船於此処。船化為石。故以為名。……」と記載され、この古墳の名称の由来が知られる。

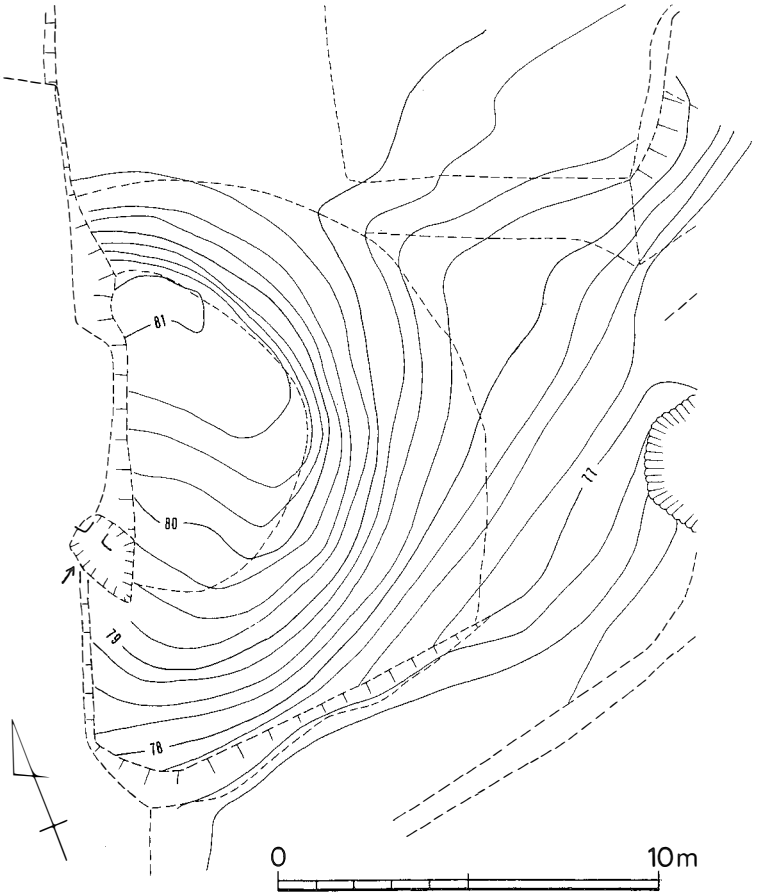


Fig. 11　立山山10号墳墳丘測量図（1/200）

Fig. 12　立山山13号墳遠景
（調査後・東南から）

b．窯跡（Fig. 15）

八女古窯跡群の発見と調査の経緯（いきさつ）については小田富士雄氏がその報告の中で述べられている。（参7）現在までに調査を受けたものは12基あるが、人知れず壊されたものや未知のものを合わせるとかなりの数になろう。（註22）この八女古窯跡群調査の意義は、まず第一に筑後地方の須恵器編年、ひいては九州の窯跡出土須恵器編年の嚆矢となったこと、第二に立山山窯跡における埴輪焼成窯の検出、という二点に集約される。須恵器の編年作業はその後小田富士雄氏の精力的研究のもとに、特にⅢ期以降については充実してきているが、埴輪窯については九州での類例増加はない。以下に窯跡群として把えられているものを簡述しておく。一部奈良時代に属するものもここで扱う。

塚ノ谷窯跡群（参7）

4基の窯を調査しているが、3号窯は残存状況悪しく、構造はあまり明瞭でない。1号窯は焼成室が階段状をなし、7世紀前半代のものである。2号窯は1号窯より若干後出し7世紀中葉～後半のものとされる。1・2号窯の双方から円面硯が出土しているのは刮目すべきことである。4号窯はこの中で最も古く6世紀後半に比定されている。

牛焼谷窯跡（参7）

今のところ1基のみの確認である。床面は2期に分かれ、新しいⅡ期において須恵器と瓦が焼かれている。7世紀中葉～後半の所産だが、この時期に瓦を使った遺跡は近辺では知られていない。

三助山窯跡群（参7）（Fig. 13）

1965年に岩崎光氏が10基を確認するところとなり、その遺物が紹介されているが、6世紀後半から7世紀後半に及ぶ須恵器が知られている。1981・1982年にこの三助山近辺を踏査した際、窯跡の破壊された所があり、Fig. 13に示す須恵器を採集した。恐らく10基では到底足りぬ数の窯跡が存したのであろう。

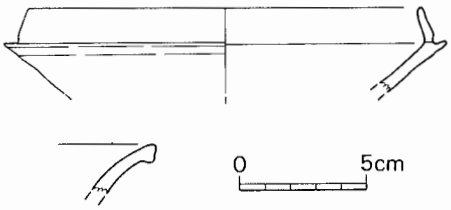


Fig. 13　三助山窯跡群採集土器実測図（1/3）

中尾谷窯跡群（参8）

4基のうち3基を発掘している。6世紀中頃～後半期のもので、八女古窯跡群中では今のところ最も古いものである。立山山8号墳の須恵器の一部はこの窯跡から供給されているらしい。

管の谷窯跡群
(参9・10)
２基が確認されており、１号窯が奈良時代後半、２号窯が同前半の所産とされる。八女古窯跡群中では最も新しい時期のものである。１号窯では瓦の生産も行なっている。

立山山窯跡群
(参10)
埴輪を焼成した窯である。２基が調査されているが、１号窯の東側に２基ほど、２号窯の西側にもう１基ほどが存するような地形的状況を示している。九州での埴輪窯跡の正式調査はこの立山山窯跡が初めてであり、また西日本地区としても稀少例であって、その意義はきわめて大きい。１号窯が２号窯より新しく、２号窯出土土師器は鬼高期相当のものとして概ね６世紀前半～中頃に比定されている。なお、八女丘陵上の古墳のうち割と多くが埴輪を有しているが（現段階では40基ほどがおさえられる)、それを全てこの窯跡群から供給したものか、それともまだ別に埴輪窯が存するのか分からない。

c．集落

弥生時代までは八女丘陵の高位段丘上にも多く住居を構えていたと思われるが、古墳時代以降になると生活の場は中～低位段丘へと変わってくる。しかし、今までのところはまだ集落の様相は部分的にしか明らかでなく、全体像は捉えにくい。

広川町平原遺跡(参2・3)では６軒の竪穴住居跡が検出されている。確実なのは３軒のみであるが、時期的には６世紀後半代に比定されている。

八女市室岡野口遺跡(参5)では竪穴住居跡５軒、掘立柱遺構４棟、溝状遺構８条を検出しており、５世紀～６世紀後半の間に営まれたものである。

室岡道添遺跡(参5)では竪穴住居跡18軒を検出し、そのうち７軒は５世紀前半代に属し、残りは古墳時代後期の所産とされる。

以上を除けば正式な調査を受けたものはほとんどなく、まだ中～低位段丘上には多くが眠っているようだ。

v．歴史時代

ほぼ７世紀代以降を歴史時代とするが、奈良・平安・鎌倉と続く中で全体に遺構・遺物の検山例は乏しい。以下に特徴的なものを拾い上げて記す。

奈良時代以前（飛鳥・白鳳期）に八女市管の谷１号窯(参9)・牛焼谷窯(参7)では瓦が焼成されている。平瓦と丸瓦のみで軒瓦は見ないが、これらの供給先は特定できていない。というより、この時期（７世紀後半）に属する寺院跡等が八女地方ではまだ知られていないから、どこに運んだか分からないのである。寺でなく大氏族の居館での使用とかも考えられるが、もとよりそういう

遺跡は知られていない。しかし、これより早く７世紀代の塚ノ谷１・２号窯(参7)に円面硯が見られることは、文字を知り、かつ使用すべき状況が存したということの証左であるから、屋根を瓦で葺き、文字を使用する場所の存在をやはり考えねばならない。最も可能性が高いのは私寺院であろう。硯・瓦の供給先がさして遠くでないとすれば、八女地方で今後その遺構が確認されるかも知れない。(註23)

経塚出土地として、まず八女市城の谷があり、それは特に経筒の発注者・製作者等の問題を提起されている。現在までに筑後地方で経塚が知られているのは久留米市域で７ヶ所と筑後市若菜八幡宮・広川町堂ノ平・矢部村大塚山・瀬高町日吉坊・浮羽町国本・田主丸町観音寺・同森部天満宮の計15ヶ所を数える。(参14)このうちの若菜八幡宮出土滑石経は県指定である。(註24)

時が流れ、14世紀後半の南北朝の動乱は九州でも北朝方・南朝方の対立となり幾多の抗争が繰り返される。九州では南朝方が優勢であったが、室町幕府は九州探題として今川了俊を派遣し南朝方を抑えた。この動乱の時に山城の形成がなされる。

やがて応仁の乱（1467年）に端を発して戦国の世となるが、九州でも諸大名の興亡は著しいものがある。豊臣秀吉によって九州平定がなされるまで抗争は止むことなく続き、その戦略的拠点として多くの山城・平城が築かれては壊されていった。山城はその存在は文献に散見しえても、実際の規模・内容等が明確なものはほとんどない。八女地方近隣の城跡には、知徳城・川瀬城・鬼の口城・酒井田城・山崎城・福島城等等がある。(註25)

関ヶ原の戦役後は田中吉政が32万５千石の筑後藩主となったが、1620年には改易となり、立花柳川藩（10万石）と有馬久留米藩（21万石）の２つが成立して幕末に及ぶ。久留米藩の中で忘れられないのは藩士であった矢野一貞である。彼の著わした『筑後国史(筑後将士軍談)』(参A)には岩戸山・石人山等々の古墳の記述と図面が掲載されており、貴重な文献となっている。

筑後地方の近世陶磁器類は、その実態は詳らかでないものがほとんどであるが、名称としては20前後を数える。代表的なものに二川焼・水田焼・星野焼・朝妻焼・柳原焼・赤坂焼・蒲池焼などがあり、これらの幾つかは現在にもひき継がれている。磁器では染付が圧倒的であり、陶器も含め日常雑器を主とする。

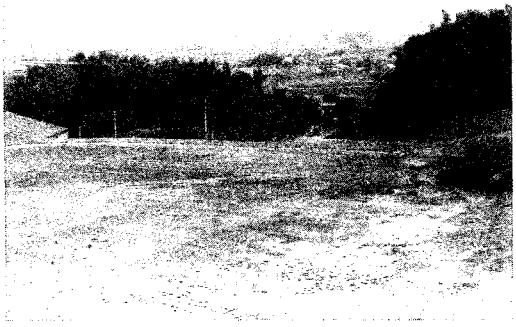


Fig. 14　立山山より八女平野部を望む

註１．山本信夫「小郡市西島出土の弥生時代遺物」　九州考古学49・50　1974

註２．小郡町教育委員会『津古内畑遺跡』　1970

小郡町教育委員会『津古内畑遺跡――第２次――』　1971

註３．小郡市教育委員会『みくに保育所内遺跡、吹上・北畠遺跡』（小郡市文化財調査報告書　第８集）1981

註４．小郡市教育委員会『横隈山遺跡』　1974

註５．久留米市教育委員会『木塚遺跡』（久留米市文化財調査報告書　第14集）　1977

註６．このときの調査では、箱式石棺墓のうちの１基から紡錘車１点の出土があったのみで、甕棺墓・箱式石棺墓への副葬品は他には見られなかった。

註７．参Ａ

高橋健自『銅剣銅矛の研究』　1925

1982年９月、広川町教育委員会を介して調べたが、大字吉常のうちに八ノ久保なる字名は存しない。通称としてもないとのことであった。その縁辺には大字大久保と大字長延久保という地名があり、このいずれかであるとすれば、久保の方が地形的にも蓋然性が高いように思われる。Fig. 16にはそこを示している。

註８．参Ａ

高橋健自『銅剣銅矛の研究』　1925

註９．九州歴史資料館『青銅の式器』　1980

註10．集落が全掘された訳ではないから断定はできないけれども、八女市西中ノ沢・坊野・野口・道添の各遺跡の弥生後期に属する住居跡は全てが長方形であり、その主軸方向はほぼ北東――南西となっている。これは当時の集落内に何らかの他律的規制が働いていた結果と考えられはしまいか。規制を加えた段層の住居は明確でない（一部は高床の住居に住んでいたと推察する）が、彼らは死後においては箱式石棺か甕棺に葬られ、かつ仿製鏡か舶載鏡片を副葬しいるほどの者たちであったと考えられよう。なお、こういった他から卓越してきた階層が次の時代にまで血脈を存続しえたかどうか、仮に存続したとしてもそれが筑紫国造家とどう関連するかなどについては知る術がない。

註11．1980年に発掘調査されている。未報告。

註12．参Ｘ

柳田康雄「三・四世紀の土器と鏡」（『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』）　1982

註13．註12柳田論文Ｐ．906

註14．参Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈ・Ｋ・Ｎ・Ｏ・Ｖ　その他多数あり。

註15．参15・Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｋ・Ｎ・Ｏ・Ｑ・Ｖ・Ｗ　その他多数。

註16．参10・Ａ・Ｄ・Ｅ・Ｖ等。

註17．参Ｅ

石山勲「丸山塚古墳」『福岡県百科事典』　1982

註18．この古墳に触れた文献はほとんど見ない。いま、国指定の際に作成された地形測量図（石山勲氏等による）を Fig. 6に示す。

註19．柳沢一男氏は１号石室が墳丘中央下部にあるとされているが、実際は東南に偏しており、もう１基の石室の存在を考慮できる。

柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」(『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』)　1982

註20．10基ともいわれるが、ここでは釘崎古墳群中に4基あるものとする。

註21．参9・A・E・H・V等

名称由来の童男草女は、秦の始皇帝の命を受けた徐福が不老不死の薬を求めて、東の蓬来の島へ旅立つ時に連れていたと言われる。いま、この童男山古墳では、その伝説にまつわる〝童男山くすべ〟が毎年行なわれている。

註22．いま知られている箇所（群）は10に満たないが、鹿子島山古墳群の存する尾根の南斜面では2ヶ所で窯跡の存する徴候が指摘されている（参T）。

註23．筑後国府・国分寺へ硯・瓦を供給したとするには、時期的に若干のズレがあるのと、距離的な面から否定的に考える。なお、筑後国内で知られている10世紀代までの寺院跡は井上廃寺、高隆寺跡、観興寺跡の3ヶ所である。

九州歴史資料館『九州古瓦図録』1981

註24．宮小路賀宏・杉山洋「九州経塚分布地名表」　考古学ジャーナル153　1978

註25．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIX　付録〔福岡県中世山城跡〕』　1979

参考文献

1．福岡県教育委員会　『福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）』　1980

2．福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　I』　1970

3．福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　III』　1972

4．福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XIV』　1977

5．福岡県教育委員会　『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XIX』　1977

6．八女市教育委員会　『亀ノ甲遺跡』　1964

7．八女市教育委員会　『塚ノ谷窯跡群』――八女古窯跡群調査報告　I――　1969

8．八女市教育委員会　『中尾谷窯跡群』――八女古窯跡群調査報告　II――　1970

9．八女市教育委員会　『管の谷窯跡群』――八女古窯跡群調査報告　III――　1971

10．八女市教育委員会　『立山山窯跡群』――八女古窯跡群調査報告　IV・総集篇――　1972

11．八女市教育委員会　『岩戸山古墳』　1972

12．八女市教育委員会　『八女南部圃場整備事業地内埋蔵文化財予備調査概報』（八女市文化財調査報告書　第7集）　1982

13．八女市教育委員会　『室岡山ノ上遺跡』（八女市文化財調査報告書　第8集）　1982

14．八女市教育委員会　『城の谷遺跡』（八女市文化財調査報告書　第9集）　1983

15．広川町教育委員会　『東山古墳群』（広川町文化財調査報告書　第1集）　1981

16．広川町教育委員会　『大塚1号墳』（広川町文化財調査報告書　第2集）　1982

17．広川町教育委員会　『山王山古墳』（広川町文化財調査報告書　第3集）　1983

18. 筑後市教育委員会　『裏山遺跡調査概報』　1966
19. 筑後市教育委員会　『狐塚遺跡』　1970
20. 久留米市史編さん委員会　『久留米市史』第1巻　1981

A. 矢野一貞　『筑後将士軍談』
筑後遺籍刊行会『校訂　筑後国史　筑後将士軍談』　1926・1927
B. 中山平次郎　「銅鉾銅剣並に石剣発見地の遺物(一)」考古学雑誌8－8　1918
C. 中山平次郎　「焼米を出せる竪穴址」考古学雑誌14－1　1923
D. 島田寅次郎　『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書　第一輯』　1925
E. 石橋為次　「八女郡古墳調査表」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書　第三輯)　1928
F. 武藤直治　「石人山古墳」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書　第八輯)　1932
G. 武藤直治・鏡山猛　「筑後一條石人山古墳」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書　第十二輯)　1937
H. 島田寅次郎　「石器と土器・古墳と副葬品」(福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書　第十三輯)　1939
I. 森貞次郎　「筑後風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」考古学雑誌41－3　1956
J. 森貞次郎　『岩戸山古墳』中央公論美術出版　1970
K. 森貞次郎　「磐井の反乱――古墳文化からみた磐井の反乱――」『古代の地方史』1　1977
L. 岩崎　光　「八女市室岡弥生遺跡中間報告」八女史学1号　1962
M. 岩崎　光　『八女・山門』　1967
N. 小田富士雄　「古墳文化の地域的特色――九州――」日本の考古学Ⅳ　1966
O. 小田富士雄　「磐井の反乱」『古代の日本』3　角川書店　1970
P. 渡辺正気他　「弘化谷古墳」日本歴史276　1971
Q. 波多野晥三　『筑紫史論』第三輯　1975
R. 板楠和子　「有明文化圏の形成」『古代の地方史』1　1977
S. 古賀正美　「八女古墳群分布調査報告(1)」筑後考古　第7号　1978
T. 山下雄・古賀正美　「八女古墳群分布調査報告(II)」筑後考古　第8号　1979
U. 大石道義　『八女丘陵――歴史的風土の保全と適正利用――』
観光資源調査報告Vol. 7　1979
V. 佐田　茂　「筑後地方における古墳の動向――在地豪族の変遷――」
(『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』)　1980
W. 佐田　茂　「筑紫君磐井の乱」(『久留米市史』第1巻)　1981
X. 堤　昭南　『今昔三潴路』　1982

〔補遺〕

○　1982年に調査された八女郡星野村大草平遺跡では、黒曜石の原石が多量に出土し、ここが原産地とされている。当立山山でも黒曜石の原石が2個ほど採集されていて（PL. 61)、その供給地が大草平遺跡近辺である可能性も考えられる。

星野村教育委員会『大草平』（星野村文化財調査報告書　第1集）　1983

○　久留米市祇園山古墳（Fig. 1－3）は八女丘陵上には存しないが、きわめて重要な位置を占める古墳である。一辺約23m、高さ約6mの方墳で、筑後地方では最古の畿内型古墳とされる。大形の箱式石棺を内部主体とし、墳丘裾部に営まれた甕棺は古墳と同一時期の所産であるとされ、調査者は3世紀末に比定されている。

福岡県教育委員会『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』XXⅦ　1979

○　参考までに筑後地区の国指定史跡を列記する。

小郡官衙遺跡	（小郡市大字小郡字向築地）	1971年指定
楠名・重定古墳	（浮羽郡浮羽町朝田）	1922年指定
塚花塚古墳	（浮羽郡浮羽町朝田）	1922年指定
日岡古墳	（浮羽郡吉井町若宮）	1928年指定
珍敷塚古墳 附　鳥船塚古墳、古畑古墳	（浮羽郡吉井町富永）	1953年指定
寺徳古墳	（浮羽郡田主丸町益生田）	1968年指定
安国寺甕棺墓群	（久留米市山川町）	1980年指定
浦山古墳	（久留米市上津町）	1951年指定
御塚・権現塚古墳	（久留米市大善寺町）	1931、1979年指定
日輪寺古墳	（久留米市京町）	1922年指定
下馬場古墳	（久留米市草野町）	1944年指定
高良山神籠石	（久留米市御井町）	1953、1976年指定
高山彦九郎墓	（久留米市寺町）	1942年指定
八女古墳群――石人山・乗場・岩戸山・弘化谷・善蔵塚・丸山塚・丸山・茶臼塚――	（八女郡広川町・八女市・筑後市）	1978年指定
女山神籠石	（山門郡瀬高町大草）	1953、1977年指定
石神山古墳	（三池郡高田町上楠田）	1976年指定
潜塚古墳	（大牟田市黄金町）	1977年指定
萩ノ尾古墳	（大牟田市萩尾町）	1961年指定

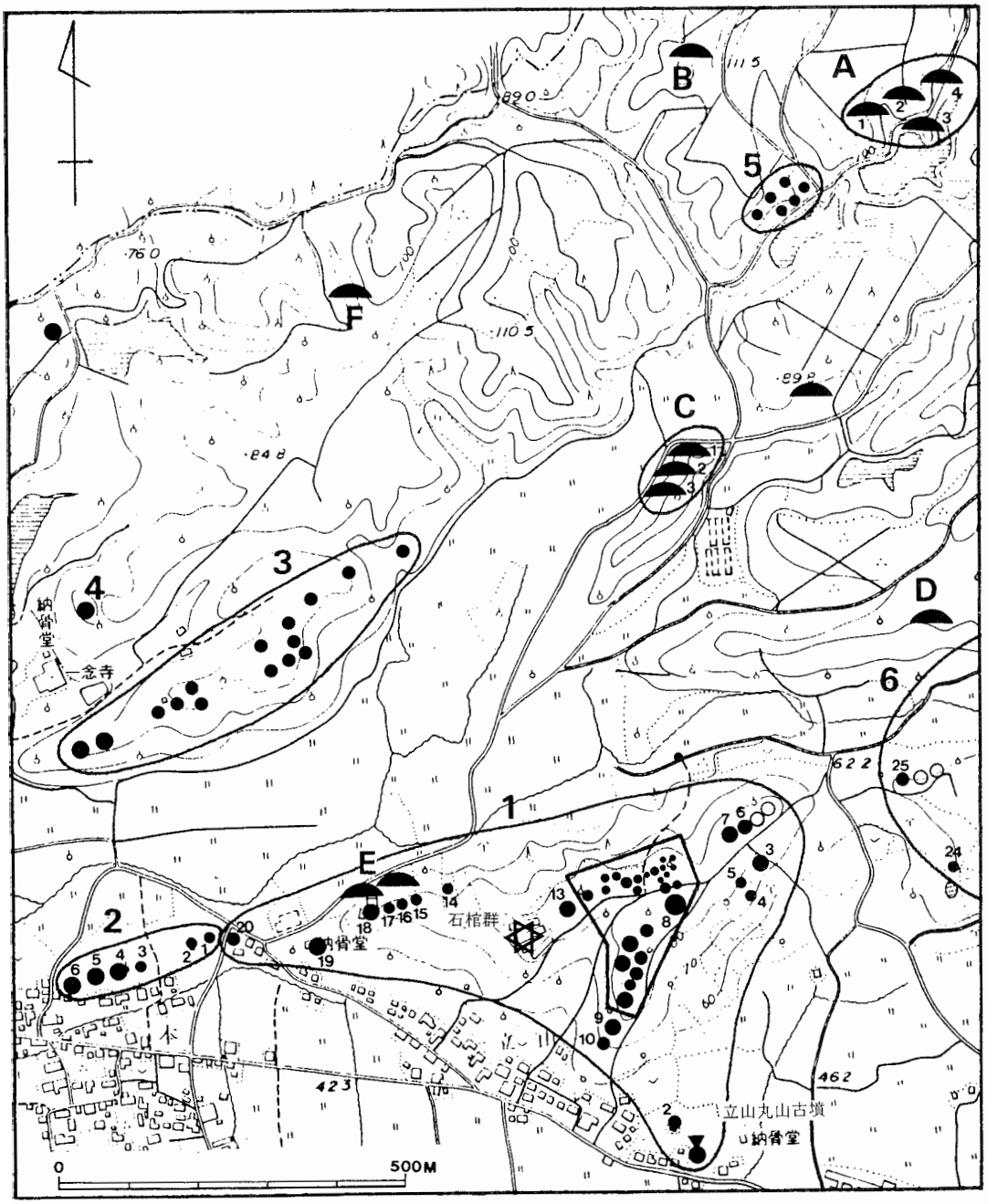


Fig. 15　立山山古墳群周辺遺跡分布図（1/10,000）

1. 立山山古墳群	4. 一念寺古墳	A. 塚ノ谷窯跡群	D. 三助山窯跡群
2. 本古墳群	5. 牛焼谷古墳群	B. 牛焼谷窯跡群	E. 立山山窯跡群
3. 鹿子島山古墳群	6. 平原古墳群	C. 中尾谷窯跡群	F. ハスワ窯跡群

1. 十連寺古墳
2. 瑞王寺古墳
3. 石人山古墳
4. 弘化谷古墳
5. 欠塚古墳
6. 高塚１号墳
7. 熊　古　墳
8. 大塚古墳群
9. 鈴ヶ山古墳群
10. 東山古墳群
11. 山の前古墳群
12. 平原古墳群
13. 熊添古墳群
14. 神奈無田古墳
15. 岩戸山古墳
16. 乗場古墳
17. 善蔵塚古墳
18. 茶臼塚古墳
19. 丸山塚古墳
20. 鶴見山古墳
21. 釘崎３号墳
22. 庚申塚古墳
23. 釘崎２号墳
24. 釘崎１号墳
25. 鹿子島山古墳群
26. 本古墳群
27. 立山山古墳群
28. 立山丸山古墳
29. 平原古墳群
30. 日当山古墳群
31. 童男山古墳
32. 城の谷古墳
33. 鬼熊横穴群

A. 立山遺跡（旧石器・縄文）
B. 豊福遺跡（縄文・弥生）
C. 八ノ久保（銅矛・銅戈出土地）
D. 岩崎遺跡（弥生）
E. 下山遺跡（縄文）
F. 今福遺跡（　〃　）
G. 国武遺跡（　〃　）
H. 室岡遺跡群〈亀ノ甲・山ノ上・北小路〉（弥生）
I. 岡山小学校遺跡（弥生）
J. 道添遺跡（弥生・古墳）
K. 野口遺跡（弥生・古墳）
L. 坊野遺跡（弥生）
M. 西中ノ沢遺跡（弥生）
N. 赤坂遺跡（旧石器）
O. 平原遺跡（旧石器・縄文・古墳）

Fig. 16　八女丘陵とその周辺の遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ．調 査 の 概 要

i　調査前の状況

1981年４月３日に試掘に訪れた時には、遺跡地は全体に荒地の様相を呈していた。８号墳は封土がほとんど削られて僅かに２ｍ弱の不自然な残丘があるのみで、周辺に赤色顔料の付着した石材が散乱していなければ古墳であることも疑わしい程の状態であった（ＰＬ．３－(2)）。

Fig．17　調査区北半の発掘前の状況（東南から）

８号墳を別にして、他は僅かながらでも墳丘を有していたはずではあるが、開墾・植樹等でかなり削平を受け、セイタカアワダチ草やクマザサが繁り、かつ近世墓地の墓石が転がっている中で地形的な微妙な変化――高まりを若干なりとも見出しえたのは、21・26号墳（註１）くらいのものであった。11・12号墳については石材の一部が不自然に露出していたため、その存在が知られていたものである。なお、８号墳の墳頂にはもと掘立ての小屋があったという（ＰＬ．３－(1)）。

ii　調査方法

古墳については、既述のように明確な高まりのある墳丘を確認しえた古墳はほとんどなく、周溝・主体部その他が平面的に把えうることから、調査予定地内の表土を重機によって全面剝ぎとる方法をとった。地表面から20～30cmで古墳時代の遺構面となる。発掘対象面積は10,000㎡をこえている。

旧石器～縄文時代についての調査は、古墳関係をおおよそ片付けたあとに、41・42号墳と12号墳との間に幅３ｍ、長さ11ｍのトレンチを設けて行なった。さらに、24号墳・31号墳・36号墳の周辺において、小さなトレンチを設定して土層をみたが、古墳時代の遺構面から20～60cm程で基盤となっていた。

iii　調査の経過

表面観察からは見つけることのできなかった遺構が多かったこともあり、調査日誌を繰りつつ経過をたどってみよう。

1981（昭和56）年

4月3日(金)　小型のユンボにて試掘。8号墳の周溝と21号墳を確認。

4月13日(月)　器材搬入。立山集落の中を流れる小川（水路）には川祭りに使われた飾りの竹がまだそのままにあり、目をひいた。（註2）いよいよ発掘にかかり、ユンボにて全面表土を除去することとす。21号墳の天井石を検出。八女市長来観。

4月14日(火)　21号墳の石室内部が閉塞の隙間より見え、一面赤色顔料塗布とわかる。8号墳の発掘にも着手。

4月17日(金)　25号墳、C1検出。

4月20日(月)　8号墳周辺の表土を除去す。周溝が現われ、径34mの大きな円墳とわかる。

4月22日(水)　8号墳主体部発掘開始。横穴式石室でかなり胴張のプランを呈す。

4月23日(木)　21号墳の閉塞石をはずして内部を検証するに、かつて波多野晥三氏の調査を経しものとわかり、複雑な心境を覚ゆ。8号墳周溝にブリッジあり、埴輪は依然として大量に出土す。八女市長来観。

4月25日(土)　8号墳周溝より人物埴輪の頭部出土。他に家・馬等の形象も多し（Fig. 19）。

4月30日(木)　8号墳石室より垂飾付耳飾り出土。

5月1日(金)　これまでに22～29号までを検出す。

5月5日(火)　23号墳周溝より古式の須恵器出土。この石室も竪穴系横口式石室である。

5月8日(金)　22・23・24・27号墳周溝より古式須恵器出土。午後から現地にて記者会見。

5月11日(月)　28号墳主体部出土の鉄剣が盗難にあう。安全月間にて、福岡県教育庁次長以下巡検す。

5月13日(水)　25号墳主体部より珠文鏡出土。

5月19日(火)　24号墳主体部内の人骨腰部付近より鏡出土。

5月22日(金)　23号墳主体部より珠文鏡出土。

5月27日(水)　11・12、38～42号墳まで検出し、順次発掘を進行さす。九大助教授西谷氏来観。

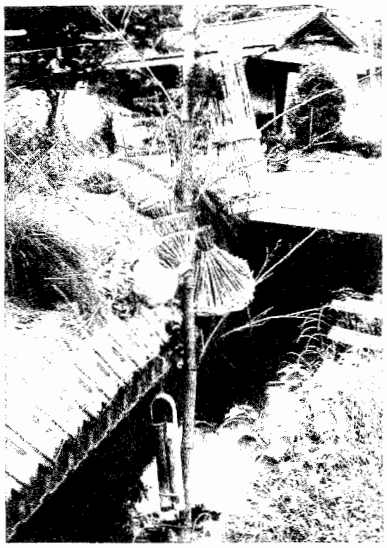


Fig. 18　〝川祭り〟の飾り

Fig. 19　8号墳埴輪出土状態

5月下旬から県文化課諸兄の来援を受け、実測が急テンポで進む。

6月6日(土)　午後より近隣の名勝地を見学す。黒木町のフジ、霊厳寺の奇岩などを見る。

6月8日(月)　30～37号墳まで発掘進行。この日、川祭りについての聞きとりをする。(註3)北九州市立歴史博物館主幹小田富士雄氏来観。

この頃より雨多し。

6月15日(月)　進入路の関係で9号墳の裾部を発掘。

6月21日(日)　現地説明会を催し、約 120名の参加を得る。

7月1日(水)　平板測量と遺構実測をすすめる。古墳以外の遺構の検索に努む。

7月3日(金)　12号墳と41・42号墳の間にトレンチを設定し旧石器～縄文時代の調査をす。

7月11日(土)　器材撤収。3ヶ月間の長きにわたる調査を終了。セスナ機による航空写真撮影。

1982（昭和57）年

3月23日(火)　運動公園への進入路変更に伴ない、2号墳を発掘することとなり現地へ赴くも、調査にとりかかる態勢なく延期す。

7月5日(月)　2号墳とその周辺の発掘にかかる。石室はちちぶのお観音様お堂建設の際にかなり破壊されており、ほとんど旧状を留めない。溝と住居跡検出。

7月9日(金)　全ての発掘終了し、撤去す。

iv　調査結果

3ヶ月余の発掘調査で得られた遺構・遺物は次のとおりである。

旧石器時代――遺構はなし。遺物は礫器・マイクロブレイド。

縄文時代――甕棺あるいは埋甕らしき土壙3基（晩期）

遺物に押型文土器、晩期土器、石器（鏃・石斧等）がある。

古墳時代――古墳27基（9号墳も含む）

石棺墓（C）5基

石蓋土壙墓（SC）4基

木棺墓（M）1基

住居跡1軒

遺物は須恵器・土師器・埴輪・鏡・垂飾付耳飾り・玉類・鉄器（武器・武具・馬具等）

時期不詳――土壙（D）1基、配石遺構3基

註1．近世墓地は江戸時代以降、最近にまで及んでいたが、目についたもので最も古い年号は天明丑の年（17

81）であった。

註２．

立山集落の〝川祭り〟（Fig. 18・20）

立山には60数軒あるが、それが４組に分かれている（１組――東組、２組――中組、３組――西組、４組――住宅組）。各組はそれぞれが〝川祭り〟を行なう。

〝川祭り〟は本来、田植えが終わった７月頃（川開きの頃）に行なっていたが、諸般の事情もあり６～７年前（組によっては３年ほど前）から、４月の花見の頃（現今では大体４月の第１か第２の日曜日）に花見と併せて行なっている。この行事は本来は子供たちの水難防止を祈願してのものだが、酒を酌み交わしてのおとなたちの親睦も大きな要素である。

Fig. 20　〝川祭り〟の飾り

〝川祭り〟行事の実際は、

立山集落の中を流れる川（水路）にしの竹を１本立てて（１組で１本だから立山全体では４本になる）、その竹には鰹節や蛸・酒樽・盃などを模した造形物をとりつける。鰹節は木で造り、蛸は昔は茅（萱）でつくっていたが、今はビニールなどで代用している。酒樽・三段盃・魚は麦ワラ（あるいは稲ワラ）でつくる。こういった模造品をつくるのは男たちの仕事であり、男たちがつくっている間に女たちは酒宴の用意をする。各組の各家庭は子供がいなくても全員参加し、子供（中学生まで）のいる家は子供を連れて参加する。おとなたちは酒宴をはり、子供たちには菓子類が配られる。

以上が発掘に参加した人たちからの聞きとりである。本題は子供たちの水難防止祈願行事でありながらも、その背景にはこのような時節の行事を介しての、集落内の親睦と団結の深化という意味あいが強く伺われる。なお、聞きとりの範囲内では、この行事がいつから行なわれているのかは、30年以上になるということしか知りえなかった。

註３．

〝黒木のフジ〟は胸高の周囲 2.2m、フジ棚の面積約 2,000m²あって、1928年に国指定天然記念物となっている。

〝霊厳寺の奇岩〟は1960年に県指定天然記念物となる。これは筑紫溶岩に覆われた山地が開析されたもので、安山岩、凝灰岩の柱状露出となっている。通称珍宝岩で、殊に秋の景観がすばらしいという（Fig. 21）。

Fig. 21　八女郡黒木町霊厳寺の奇岩

Ⅳ．調 査 の 内 容

A．古墳時代の調査

以下に古墳ごとに記してゆくが、計測値等の詳細はTab. 3を参照されたい。周溝の平面プランは円形と、円形の歪んだいびつな形態をとるものがあるが、全て円墳として扱う。

なお、22～27号墳、28・29号墳のように、いくつかの古墳をひとまとめにしているのは説明上の便宜的なものであり、これが特定のグループをなすとかいうものではない(Fig. 30・31)。

1．2号墳とその周辺 (Fig. 22・23)

立山山2号墳は立山丸山古墳の東北方50～80mの所に存した。標高54m強で、中位段丘上に立地する。2号墳は〝ちちぶのお観音様〟と俚称されるお宮によって既に大半が削られており、僅かに左側壁部分の残存をみるのみであった。その周辺には溝状遺構と土壙、そして住居跡1軒を検出した。

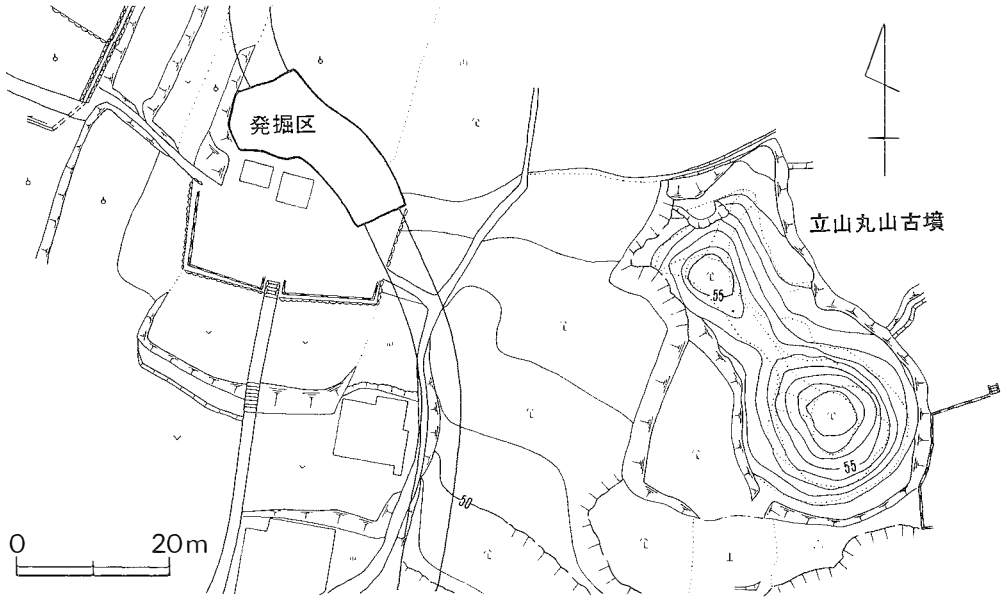


Fig. 22 立山丸山古墳と立山山2号墳周辺地形図 (1/1,000)

2号墳（PL. 2 −(1)(2)、Fig. 23・24）

i．規模

墳丘は既になく、その本来の規模を知ることはできないが、直径20mをこえない程度の円墳と思われる。M4の埋土が他と異なっていたので、あるいはこれが周溝の一部となるかも知れないが、埋土中出土の土器は古墳築造期を示していない。M4を周溝とすれば径16m程となる。

ii．主体部

主軸をS−80°−Eにとり、西に開口する横穴式石室と思われる。床面及び奥壁・右側壁は大きく削られ、左側壁の腰石4個とその上に最大7段の石積みを見るにすぎない。玄室長 2.7mくらいで僅かに胴張りをもつプランのようである。羨道・墓道については全くわからない。周辺から土師器片が若干出土したのみで、時期を知る手がかりとなる遺物はない。ただ、1号住居跡より後出すると思われることから6世紀代の築造としておきたい。

1号住居跡（PL. 2 −(3)、Fig 25・28）

（不整）方形プランの竪穴住居跡である。2号墳との関係は、直接の切合いは知りえないが、2号墳より古く住居跡が存したものと解される。⅓程を検出したのみで、他は調査区域外にかかる。柱穴は一列に並ぶもの4個がみられ、壁下にある2個が深い。本来は主柱4本で、その内側にまた補助柱4本が立つ構造であろうか。竪穴の深さは検出面から25cm程で、床面には全周しない周壁溝をみる。南西側の壁に近い所

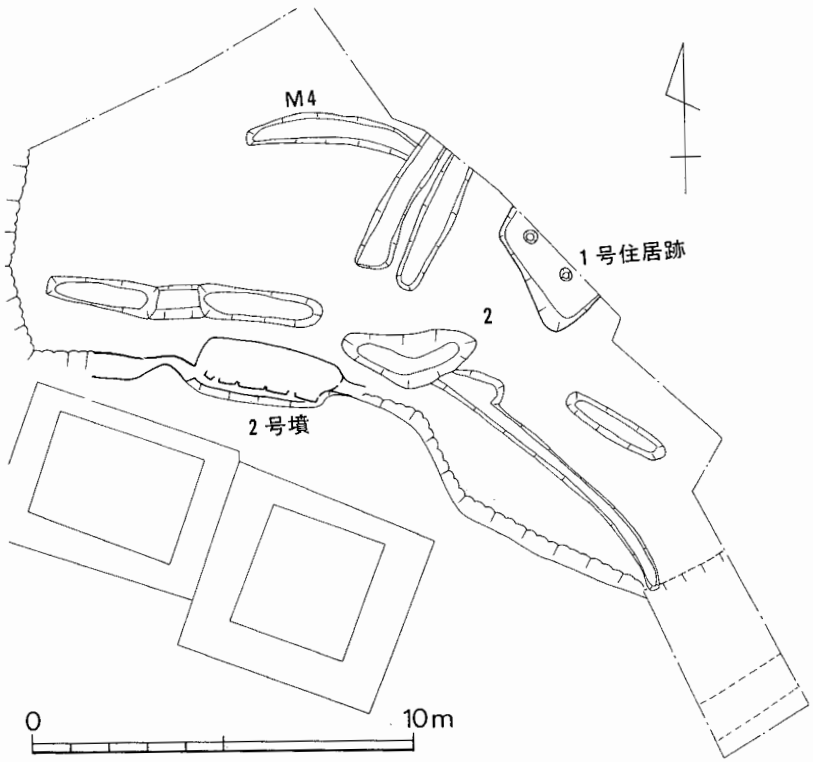


Fig. 23　2号墳と周辺遺構配置図（1/200）

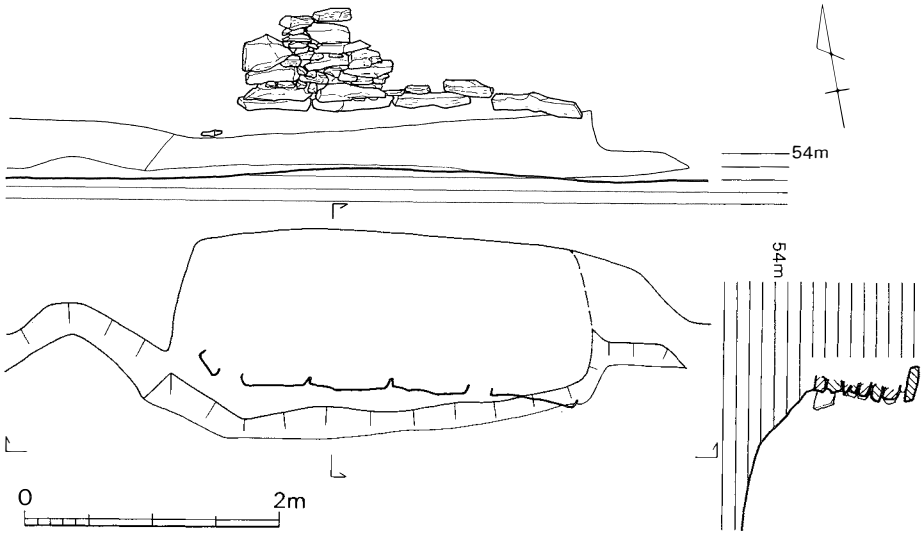


Fig. 24　2号墳石室実測図（1/60）

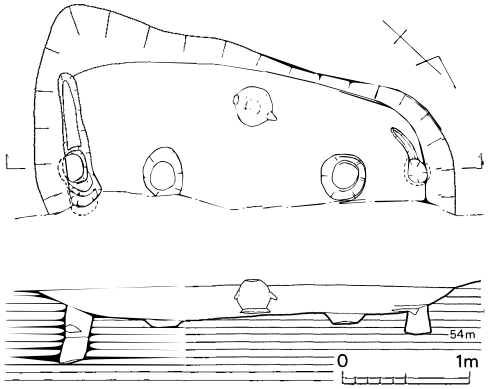


Fig. 25　1号住居跡実測図（1/60）

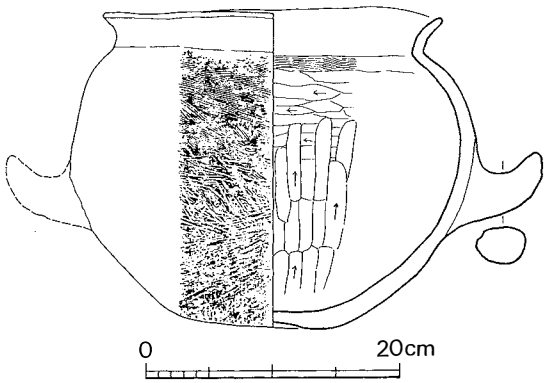


Fig. 26　1号住居跡出土遺物実測図（1/6）

に把手付甕が倒立した状態で出土した。この甕の中には砂混じりの赤色顔料が充満しており、何か特別の用に供されたものとも考えられる。

甕（PL. 42、Fig. 26）　牛角形の把手付きであるが片方は欠失する。口径26.7cm、高さ25.0cm、胴部最大径32.0cmを測る。底部は平底に近い中凹みの丸底で、全体に2次的な煤が付着している。口縁部内外は横なでし、外面は刷毛目調整であるが、把手より上は細い原体(8本/cm)で横ないし右斜めに施し、把手以下は粗い（4本/cm）刷毛目が縦横に走る。内面は研磨に近いヘラ削りで、胴部中位から方向がかわる。頸部付け根には横刷毛目が残る。把手は粗い刷毛目のあとなでて仕上げる。砂粒多くして焼成良好。赤褐色を呈する。

溝状遺構その他（Fig. 23）

溝４条と土壙４基を検出した。Ｍ４については２号墳周溝の可能性もあるが、他は２号墳の墳丘削平後に掘られた遺構と思われる。

Fig. 27－１・２はＤ２から出土した。瓦質に近い粗製の土器であり、いずれも外面はタタキ、内面は刷毛目を施す。時期不詳。３はＭ４から出土した高台付埦で、瓦質に近い焼成となる。

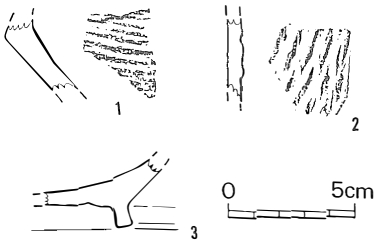


Fig. 27　２号墳周辺遺構出土遺物実測図（1/3）

小結

２号墳については規模、主体部の構造、時期等のあらゆる点で不分明である。しかし、想定しうる見解を示すならば、直径16mくらいの円墳で、西に開口する横穴式石室を主体部とし、およそ６世紀代に比定されるであろう。

１号住居跡は全体の大きさは不明だが、４本主柱の方形プランとなり、５世紀中葉～後半の所産と思われる。推測をたくましくすれば、住居跡内に赤色顔料を入れたまま遺棄された把手付甕があることより、この住居跡の営造者は高位段丘上に築造された古墳、特に竪穴系横口式石室をもつ古墳(21～23･25･27号墳)の被葬者たちと、何らかの関係を有したとも考えられる。

Fig. 28　１号住居跡

2．8号墳

i．規模（PL. 3・4、Fig. 29）

周溝の外径34mに及ぶ大きな円墳である。かつては墳丘高も5mはあったらしいが、調査着手時には2m弱の残丘しか見られなかった（PL. 3）。その僅かに残る墳丘断面で見るに、黒色～茶褐色の旧表土を整形してその上は全て盛土である。周溝はほぼ正円プランで、石室の入口方向（南西部）と、石室主軸の斜め左方（東北部）とに幅 0.9～ 1.4mのブリッジを持つ。この周溝の中心点は石室の中心とは一致せず、石室奥壁の所が中心となる。

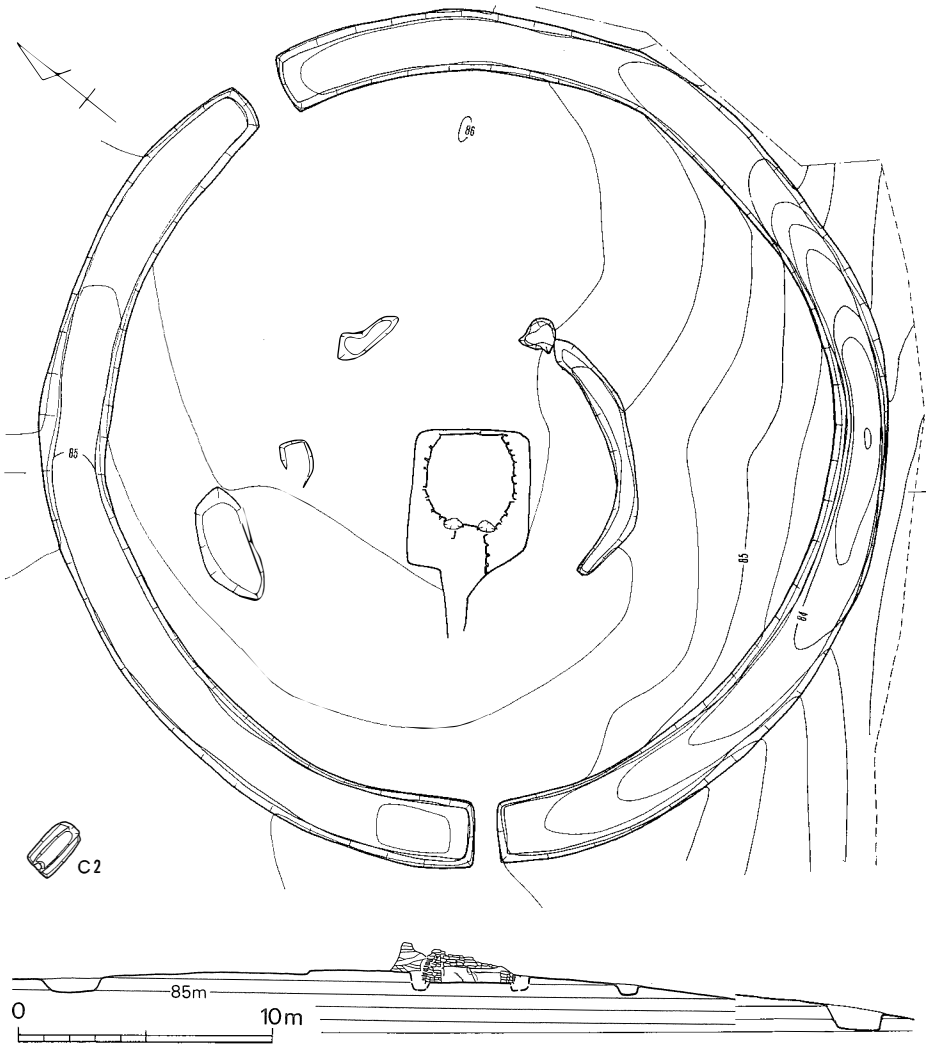


Fig. 29　8号墳地形測量図（1/300）

Fig. 30　立山山古墳群地形図・遺構配置図（1/1,500）

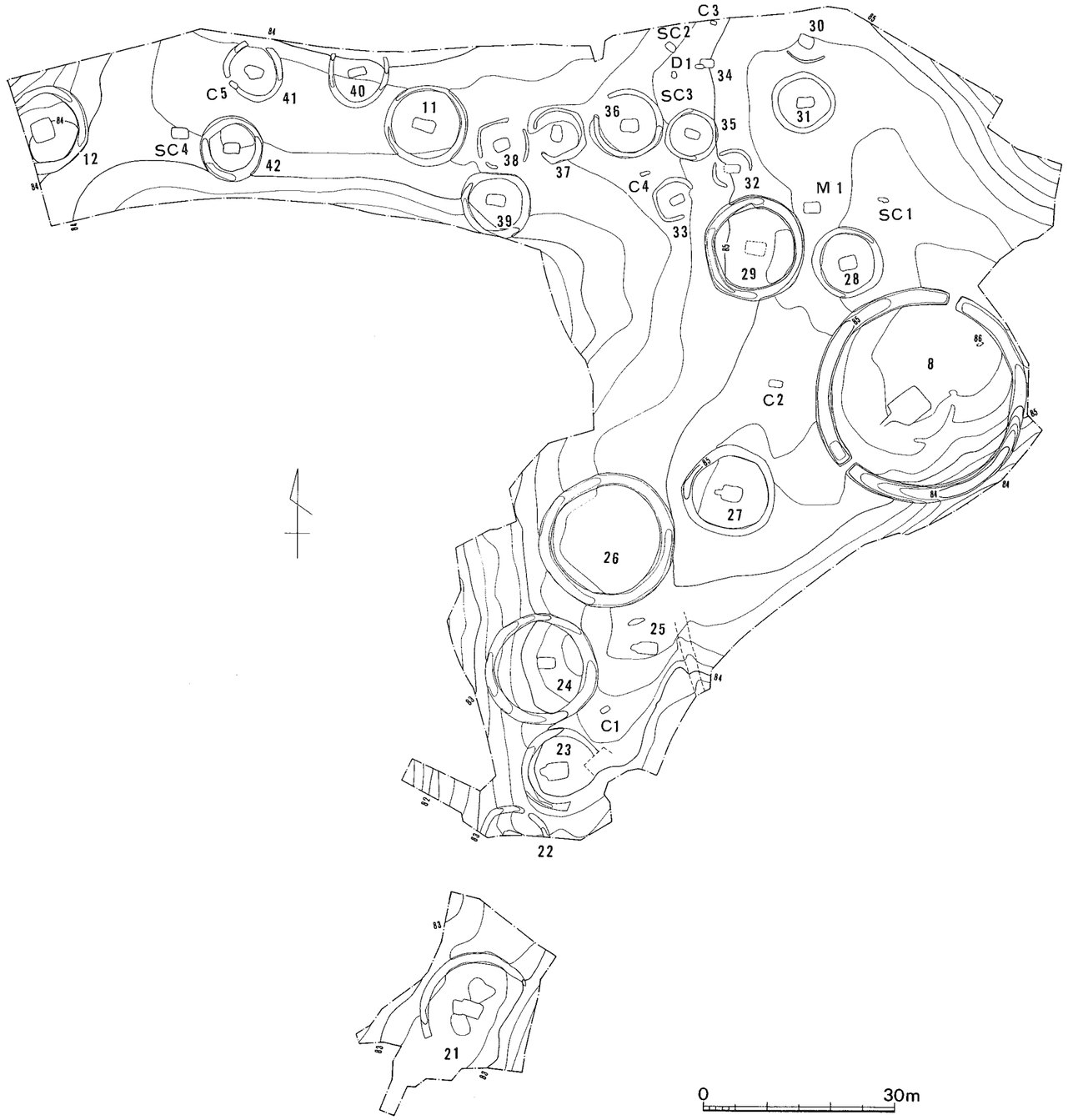


Fig. 31 立山山古墳群地形測量図（1/800）

また、このブリッジのある周溝と石室との間に、もうひとつの溝が見られる。いまこれを内周溝と称するが、これの中心は石室中心と一致し、径約13.5mを測る。

ii．**主体部**（PL. 4 −(2)、Fig. 32）

単室の横穴式石室で南西に開口する。

掘り方は旧表土を切り込んで長さ5.35m、幅4.80mの長方形に掘られるが、深さは 0.5mをこえず、石室の大半は墳丘中に構築されていたことになる。

墓道は掘り方より3m弱までを認めたが、幅1mをこえないものである。これは、あるいは石材を運んできた時の痕跡とみてよいかも知れない。

羨道は右側壁の最下部4列だけが残るが、本来これ以上のびるものではなかろう。

玄門は袖石2個が立っていたらしいが、いまは根じめ石の残る抜跡を見るのみである。玄門幅は框石の幅0.65mと同じとみてよい。框石と玄室床面とは15cmの段差をみる。

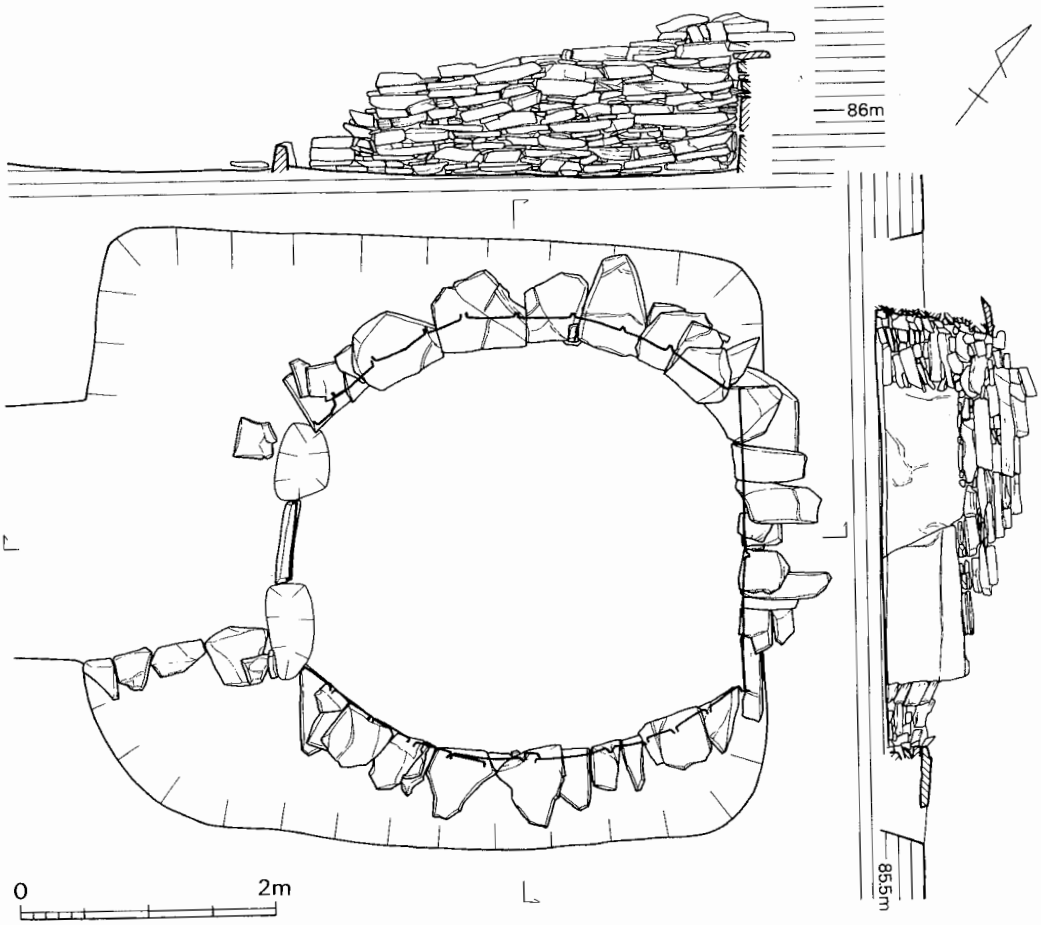


Fig. 32　8号墳石室実測図（1/60）

玄室は主軸長3.56m、奥壁幅2.33m、玄門側の幅２m、中央部幅3.46mを測り、かなりの胴張りプランとなる。奥壁は腰石１枚で、その上は扁平割石を水平に平積みおよび小口積みし、少しずつ持ち送って内傾さす。側壁は最下段から扁平割石の平積みであるが、全体に奥壁側が高く、玄門側に低く積む手法をとる。最下段から徐々に内傾する持ち送りをみる。

iii. **出土遺物**（巻頭カラー２・３、PL. 42～51、Fig. 33～60）

石室内と周溝からの出土遺物を列記すれば次のとおりである。

石室内　装身具……垂飾付耳飾り・耳環・勾玉・切子玉・管玉・ガラス丸玉
　　鉄器……武器――鏃・石突・鞘金具
　　武具――挂甲・弓付属金具
　　馬具――鉸具・留金具・座金具等

周溝内　須恵器……坏・高坏・長頸壺・提瓶・甕
　　土師器……高坏
　　円筒埴輪……（楕円形・朝顔形を含む）
　　形象埴輪……人物・馬・猪・猿・刀・家・盾

石室内の出土遺物は本来の位置を保つものはなく、攪乱を受けた埋土中から発見された。周溝内から出土した須恵器・埴輪等は、溝底にてつぶれた状態のものもあったが、当初は墳丘裾部に立て巡らされていたはずのものである。なお、この項の最後に説明を付すところの近世墓埋土中出土土器は、この８号墳のものであったと考えられる。

１．土器

須恵器（PL. 42、Fig. 33～34）

坏蓋・坏身・高坏・提瓶・長頸壺・甕がある。

坏蓋（１・２）　１は口縁端を欠くがほぼ完形に復原できる。復原口径13.8cm、器高5.2cm、口縁高 2.1cmを測る。口縁内側には段があり、あまり鋭くない稜の下には沈線を巡らす。天井部はヘラ削り。胎土良だが焼成がややあまい。緑灰色を呈す。２は小破片からの復原で口径約16.5cmになる。１に比して扁平な形状となる。口縁内側には僅かに段をもち、天井部との境には稜はなく沈線が巡る。天井部ヘラ削りで他は横なで。胎土良、焼成良好、灰黄色を呈す。

坏身（３）　立上り部分の小破片で全形は復しえない。立上り口縁内側には僅かに沈線が入る。横なで調整。砂粒多く含むが焼成堅緻。暗灰色を呈す。

高坏（４・５）　いずれも脚部片である。成形・調整は須恵器と何ら変わらないが、焼成は土師器よりも若干良好といえるものであり、所謂〝擬土師須恵器〟(註２)の類とみなされる。４は外面にカキ目を施し、内面はしぼりと横なで。黄橙色をなす。５は外面の調整不明。内面にしぼり痕をみる。黄白色をなす。いずれも胎土は良質である。

提瓶（６）　これも先の高坏と同じで、成形は須恵器としてよいが焼成は土師質で、かつ肩部に黒斑もあって、より土師器的である。これの場合は〝擬須恵土師器〟に含まれようか。口径 5.2cm、器高10.9cmで、胴部最大径 8.8cm、扁平面と丸みのある面とは 6.1cmを測る。耳は持たない。扁平面はヘラ削り、底部はヘラ削り後になで、丸みのある面はなで、口頸部は内外とも横なでを施す。砂粒多いが胎土良。赤橙色を呈す。

長頸壺（10）　口頸部のみで胴部を欠く。口径 5.8cm、頸部長10cm。頸部中程に７条の沈線が入る。内面にしぼり痕をみる他は横なで。

甕（７～９、13～19）　全て大甕の部類に入る大形品の破片である。７～９は口頸部破片で、７・８は波状文をもつ。８は断面にて粘土を貼りつけた様子がよく観察できる。９はやや胎土が粗く焼成もあまいが、７・８は胎土良で焼成堅緻である。13は口径48cmになり、頸部には３

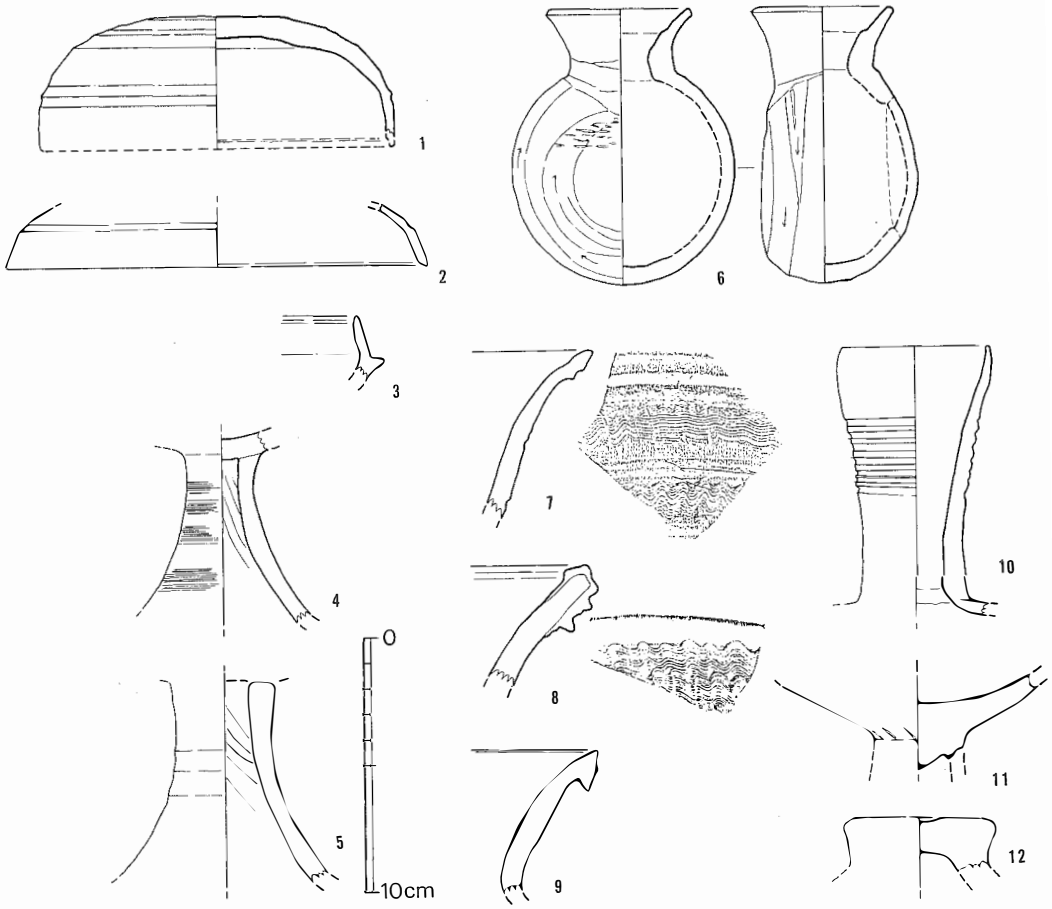


Fig. 33　８号墳出土土器実測図①（1/3）

条ずつの沈線が２段と波状文が入る。肩部は外面が縦平行タタキで、内面は同心円を完全になで消す。頸部は横なでらしい。胎土良、焼成堅緻。自然釉がかかり緑灰色を呈する。14は頸部～肩部片だが焼きひずみが大きく、肩部は外上方へのびてゆく形状となる。頸部沈線間に波状文が入り、肩部は細いタタキの上をなでている。肩部内面は同心円が鮮明である。頸部と肩部の境目は粘土接合の様子が伺われ、接合面の剥離した所にもタタキ痕を見るので、頸部と肩部以下は成形を別にしていることが知られる。15～19は胴部破片で、外面は縦平行タタキ及び格子目タタキを施し、その前後にカキ目の入るものもある（18・19)。内面は同心円の上を刷毛目及びなで・擦過等で調整する。全体に胎土は良質で焼成良好。灰色～小豆色をなす。

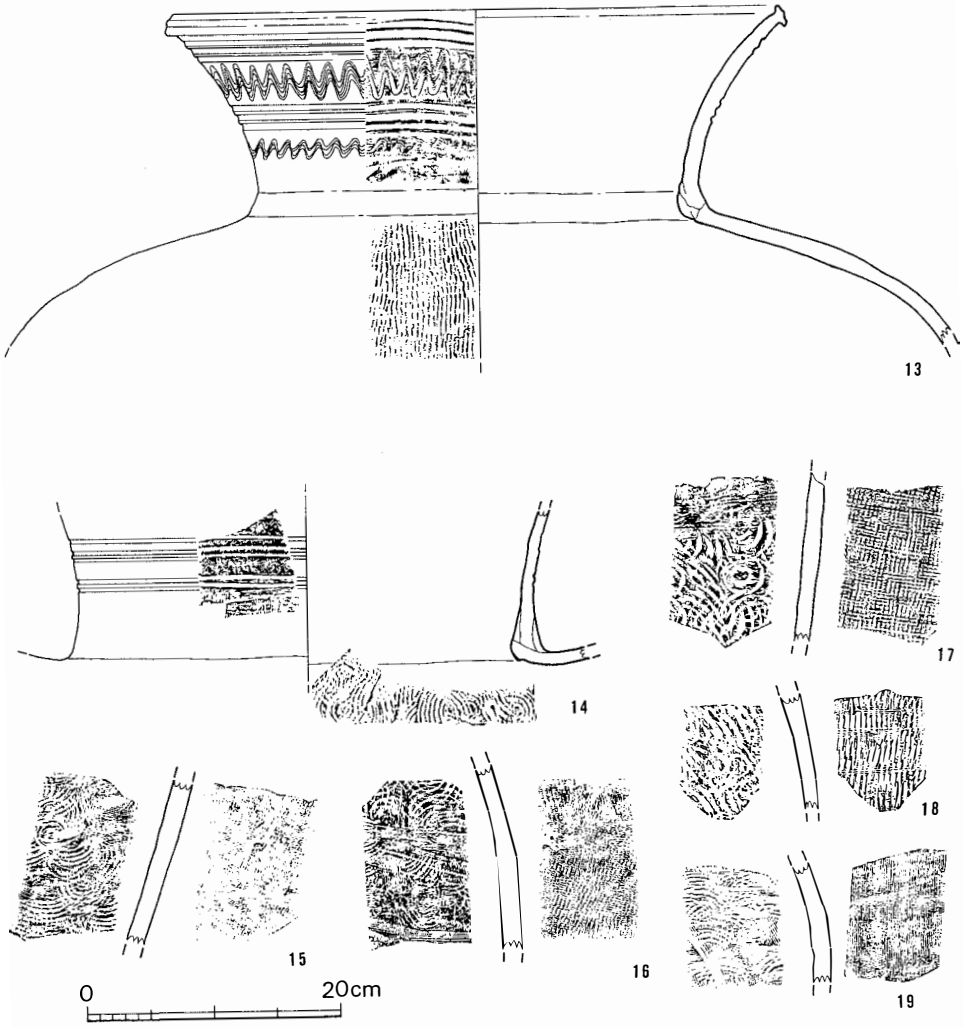


Fig. 34　8号墳出土土器実測図②（1/6）

土師器（Fig. 33）

高坏（11）　坏部底面の破片で、なでによる調整を施す。脚部と坏部境目の外面にはしぼりの痕跡がみえる。胎土良、焼成良好、黄橙色を呈す。

弥生土器（12）　ただ１点のみの出土であり、蓋の一部と思われる。胎土不良で焼成あまく赤橙色をなす。調整は器面風化のため不明。周辺に弥生時代の遺構は全く認められないから、古墳築造の際に運んできた封土中に入っていたとしか考えようがない。

埴輪（巻頭カラー３、PL. 43～49、Fig. 36～52）

円筒埴輪（楕円形・朝顔形を含む）と形象埴輪があり、円筒埴輪は遺物整理用パンケース(61×39cm、深さ15cm）にて82＋α 箱分があり、そのうち須恵質のものは６箱を占める。形象埴輪は10箱前後を数えた。

円筒・形象いずれも、至近の距離にある立山山窯跡群で焼成されたことはまず間違いないところである。窯焼成でありながら、発注者（古墳の被葬者(註３)と一族）あるいは工人自身の意図的なものとして、または窯内における火まわりの問題として、結果的に須恵質のものと土師質のものとが焼成されている。形象埴輪には須恵質のものは見当らないので、この焼成の違いは意図的なものと私考されるが、ことに円筒においては偶然性もあったに違いなかろう。

円筒・形象両埴輪について、以下の共通点・相違点が指摘できる。

① 円筒埴輪には須恵質・土師質のもの両方をみるが、形象埴輪には須恵質のものはない。

② 円筒・形象ともに微砂粒を多く含むが、割合に良質な胎土である。ただ、円筒・形象双方を比べてみると、後者の方が前者よりも細やかで選ばれた胎土を用いている。

③ 土師質のものの色調は全て赤味がかった黄色（*reddish yellow*）を呈する。

④ 窯焼成であることの証左でもあるが、黒斑は全然認められない。

円筒埴輪（PL. 43～45、Fig. 36～45）

須恵質と土師質があり、須恵質のものは全体の１割程度である。また、普通円筒埴輪のほかに楕円形（偏円筒）埴輪と朝顔形円筒埴輪があり、これの説明は項を別にして述べよう。須恵質といえども須恵器と同等の堅緻な焼成を示すのはごく僅かであり、半須恵質と称した方が妥当なものが多い。土師質のものは先に述べたように *reddish yellow* を呈するが、須恵質のものは灰青色～灰橙色をなす。以上の焼成の違いとそれに起因する色調の違いを除けば、須恵質・土師質を問わず胎土・調整等は共通する。以下に、全体に共通する点を列記して、その後に個

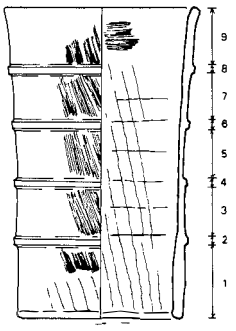


Fig. 35　円筒埴輪模式図

1. 基　底　部　4. 2段目突帯
2. 1段目突帯　5. 2　段　目
3. 1　段　目　8. 4段目突帯
（口縁下１段目突帯）

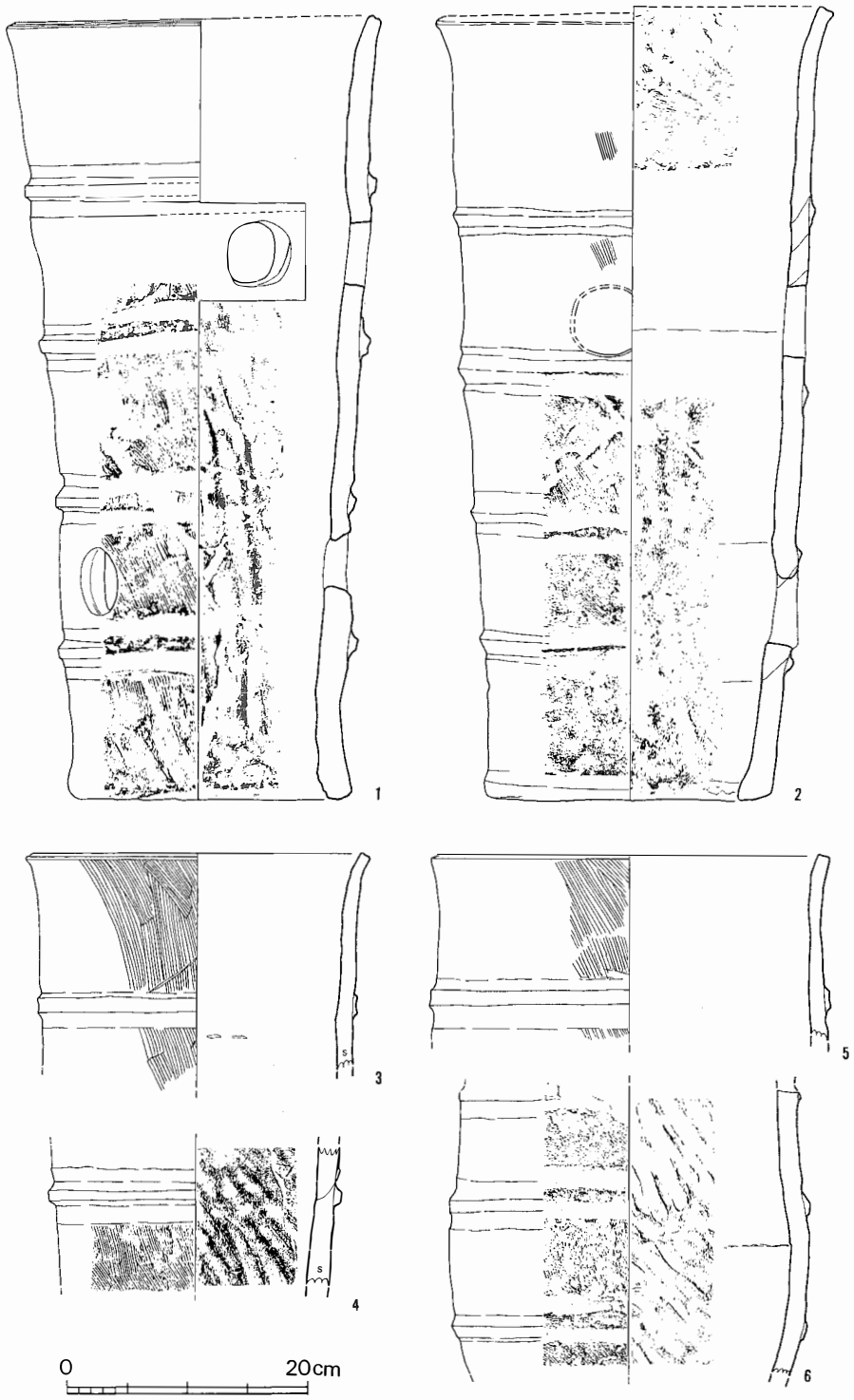


Fig. 36　8号墳出土埴輪実測図①（1/6）

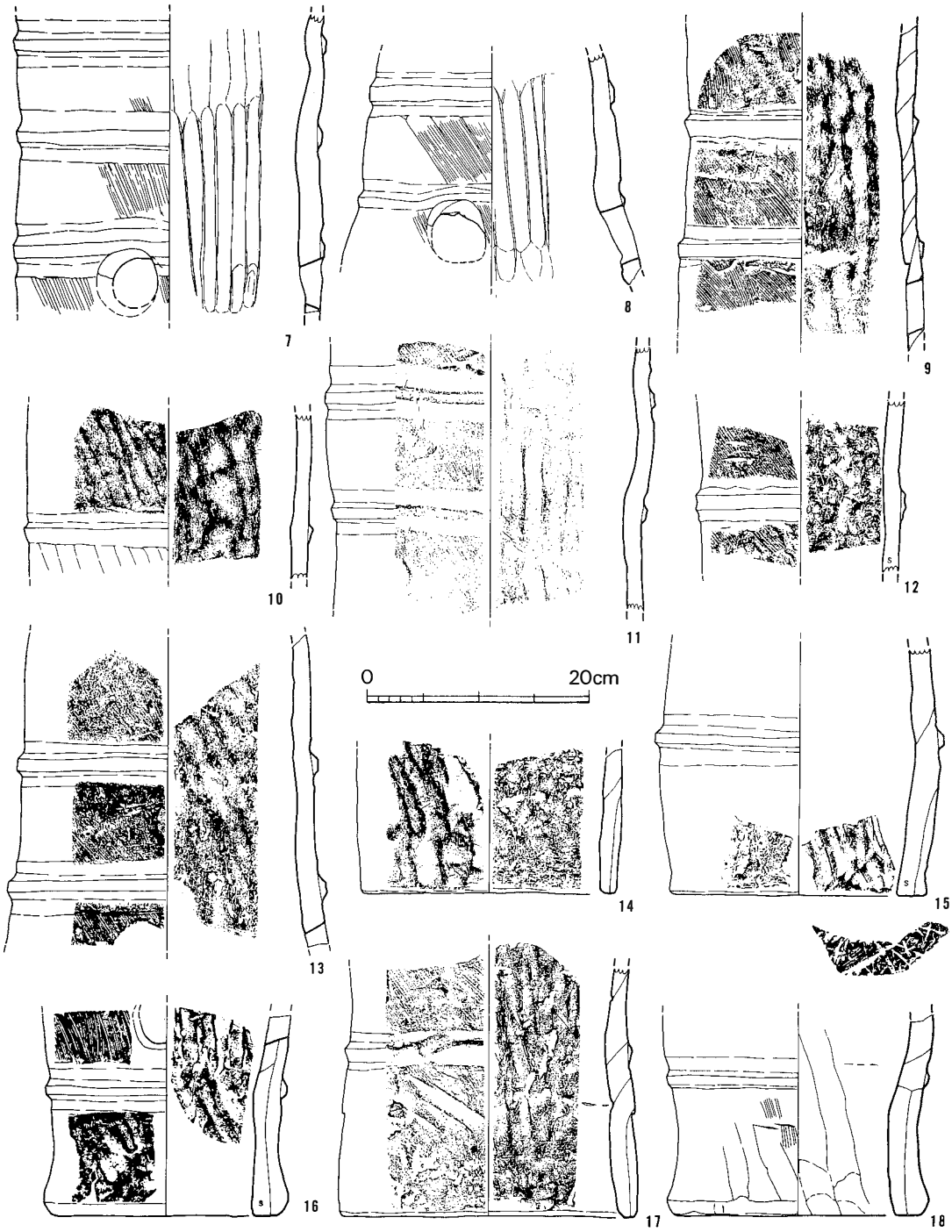


Fig. 37　8号墳出土埴輪実測図②（1/6）

々について気づいた点を述べる。特に断わらない限り、全てについて下記のとおりである。なお、須恵質のものについては断面図最下部に「S」の記号を付す。また、各部分の呼称についてはFig. 35のとおりとする。

a．胎土は砂粒を多く含むが、それほど粗悪でもない。

b．須恵質のものは当然ながら焼成良好。土師質のものはごく普通の焼成であるものの、遺存度の良好なものとそうでないものとがある。

c．成形・整形と器形については以下の如し。

- 基底部は幅10～15cmの粘土帯を一周以上巡らして輪をつくる。断面に必ずといってよいほど、縦に粘土の肌分かれする線を見るので、一周のみで接合したのではなく重複部分を持つはずである。
- 基底部の上におよそ2cm以上の粘土紐あるいは粘土帯を巻上げか輪積みかしてゆく。このいずれであるかは前者の可能性が高いというのみで断定はできない。
- 粘土接合面は必ず外面が高く内面が低い左斜め方向となる。その傾斜については一定のルールはない。

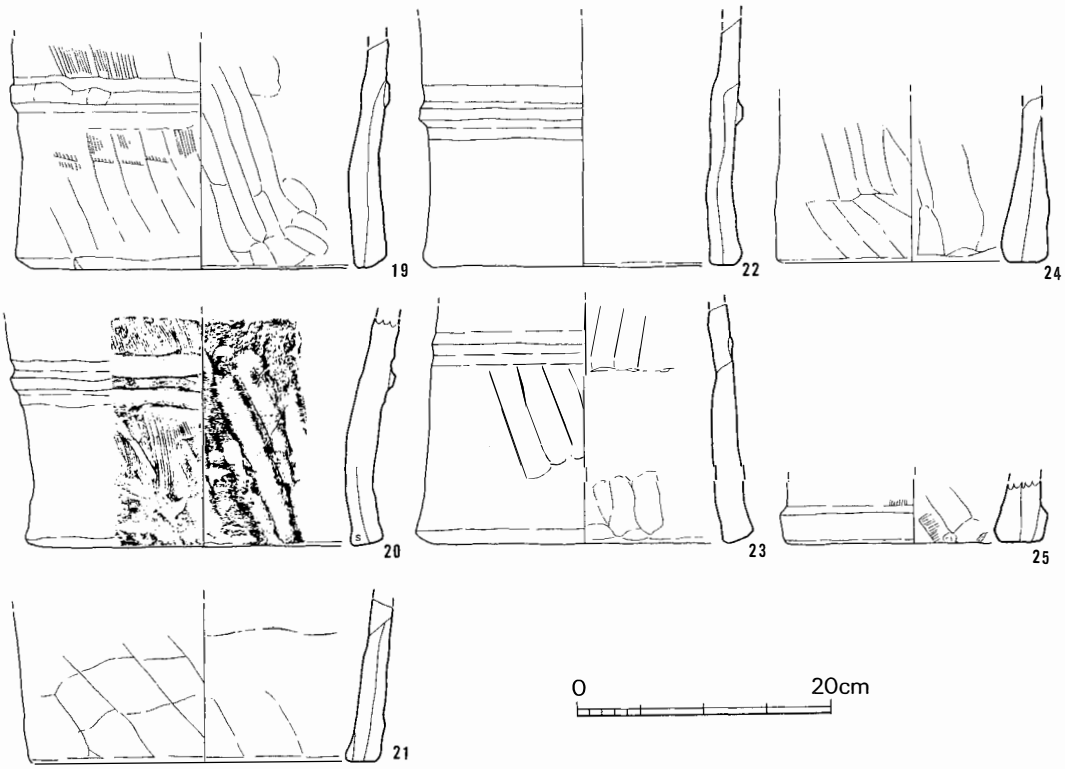


Fig. 38　8号墳出土埴輪実測図③（1/6）

- 底部は成形時のワラ様圧痕をみることが多い。（PL. 45－15）
- 底辺内外は川西氏のいわれる底部調整を明瞭に認めるものはない。
- 底部外面に面をとるものがいくつかある。（註4）
- 突帯は、すべて刷毛目調整後にはりつけて、断面三角形のもの、台形のもの双方をみるが、1個体中で併用するものも稀にある（8・9）。
- 突帯の突出度は全体に低く、1cmをこすものはない。
- 押圧技法、断続なで技法はみられない。
- 突帯はFig.36の1と2では4条をみることができ、他もほとんど同様であろう。（註5）

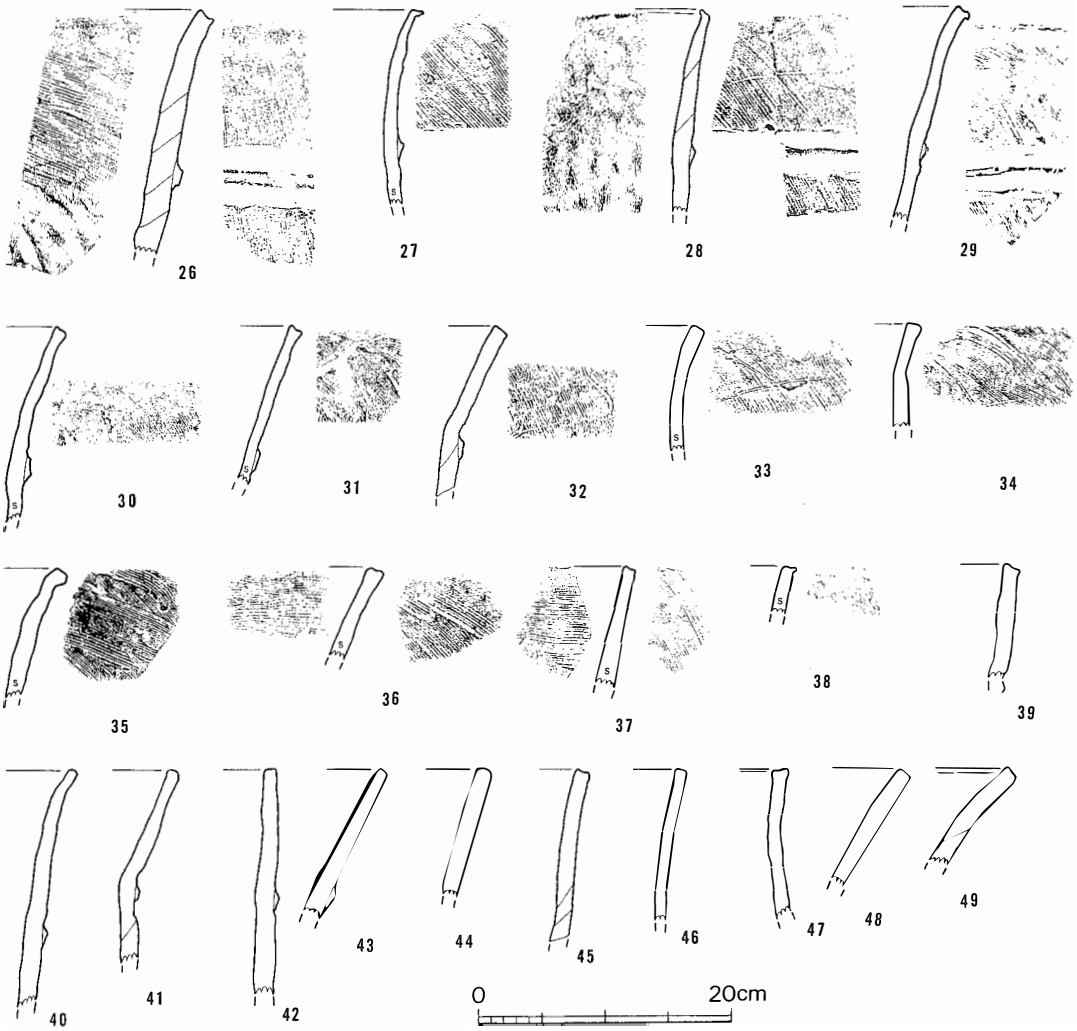


Fig. 39　8号墳出土埴輪実測図④（1/6）

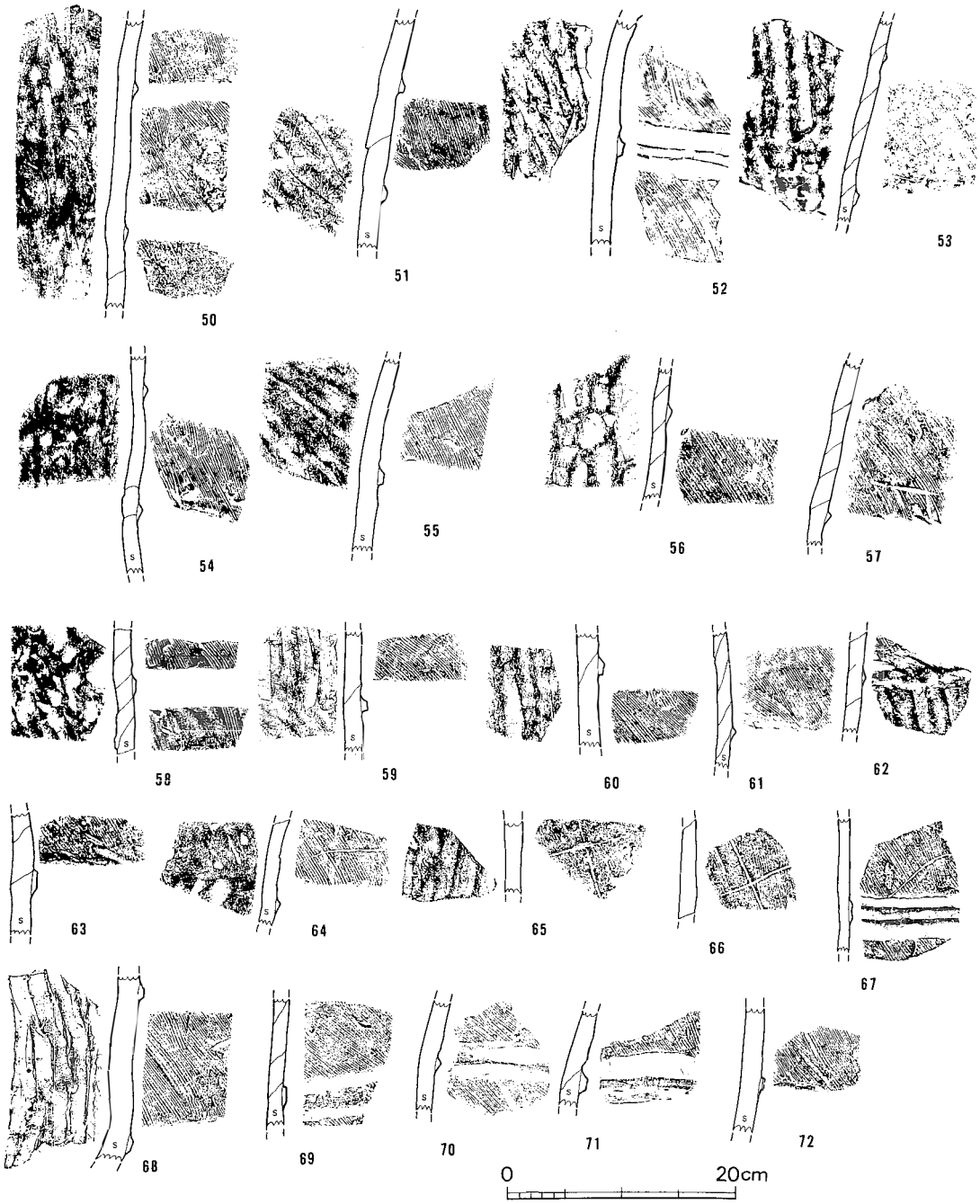


Fig. 40　8号墳出土埴輪実測図⑤（1/6）

- 透孔は円形のみで、完形の１・２はともに、１段めと３段めに２個ずつ有する。他も同様と考えられる。
- 口縁部には特に目立った変化はない。

d．調整については次のとおりである（PL. 44・45）。

（外面）
- 基底部は縦ないし右斜めのなで上げか刷毛目を全て下から上へ施す。
- なでは削りに近い程に強列だが、指頭で布等を使ってのものと考えられる。
- 突帯周辺は横なで。突帯は刷毛目調整後にはりつけている。
- １段めより口縁部までは、右斜め刷毛目で、下から上へと施す。口縁周辺は横なでをみる。なお、横刷毛目はほとんどみないがごく稀に存する。
- 刷毛目を施す際、板小口にたまっていた粘土が器壁につく〝粘土だまり〟をよく見る（PL．45）。
- ヘラによる刻線（ヘラ記号）をいくつかみることができる（３・28・30等）。
- 布圧痕（11・15・29・68～72・100）や籾痕（14・68）も見られる。

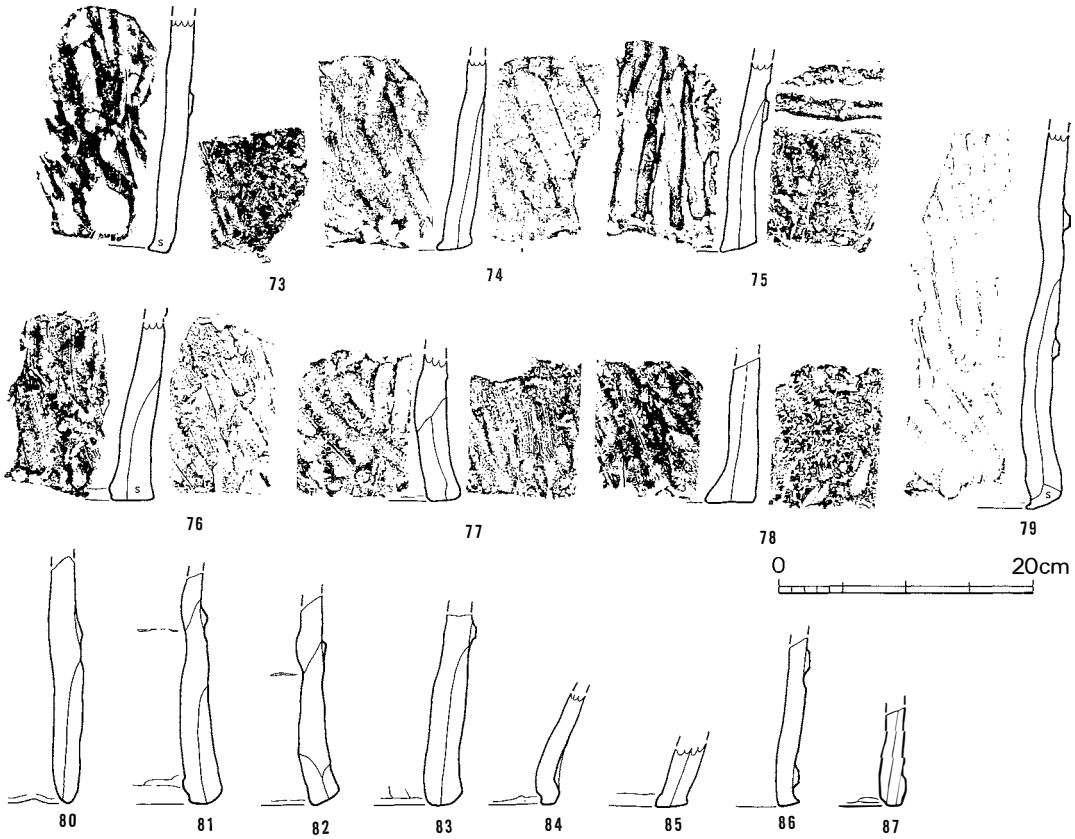


Fig. 41　8号墳出土埴輪実測図⑥（1/6）

（内面）　• 基底部から口縁下まで右斜めあるいは縦方向に、下から上へのなであげがほとんどで、口縁部は横なでを施す。口縁近くでまれに刷毛目をみることもある。粘土接合の痕跡が明瞭にわかる例も多い。

普通円筒埴輪（１～87）

当８号墳出土円筒埴輪で完形に復原できたのは１・２のみであった。１は口径29.5cm、底径22.4cm、高さ64.7cmを測る。突帯は断面台形をなす。２は口径31cm、底径24cm、高さ66cmとなる。三角形をなす突帯は均等な高さでは一周せず、途中で垂れ下がっている。

３～25は径を復原しえたもので、26～87は断面のみを知りうる。４は外面の刷毛目がよく観察でき、原体の幅約 2.5cmでそこに14条をみる。７の刷毛目単位幅も 2.5cm程である。８・９は台形と三角形の突帯が併用されている。17は基底部外面に板圧痕をみるとともに、１段目突帯の一部に押え痕をみる。しかしこれは62とともに断続なで技法とは言い難い。20の底部内面には蓆らしき圧痕をみる。25は86・87と同様、基底部最下部に突帯を付すものである。37はきわめて焼成がよく、須恵器と同等の灰色に発色する。

楕円形埴輪（88～100）

偏円筒埴輪と称してもよいかもしれないが、破片中には楕円形と知りえぬものも少なからずあろうから実数はもっと多かろう。径をとって実測図を示すものの、その径は任意の箇所であり、厳密に長径・短径を示すものではない。図中の楕円形を示す線でａは口縁のもの、ｂは口縁下１段め突帯、ｃは口縁下２段め突帯の平面ラインである。

88は長径34.6cm、短径約22cmになり、透孔は短軸方向にある。突帯周辺の横なで後にも二次調整に刷毛目が１次調整と同じ方向に施されている。89は口縁の一部が外傾している。透孔は長軸に近い所に存す。100の底径は復原で長径35cm、短径21.5cmくらいとなろう。透孔は長軸側にある。

朝顔形円筒埴輪（101～108）

これも朝顔形に開く口頸部をみないとそれといえないので、実数としてはまだ多いはずである。頸部の屈折点には必ず突帯を貼りつけているらしい。

102は頸部径25cm。106は刷毛目の上に楕円形のあと斜格子を刻んでいる。

Fig. 42　８号墳円筒埴輪出土状態

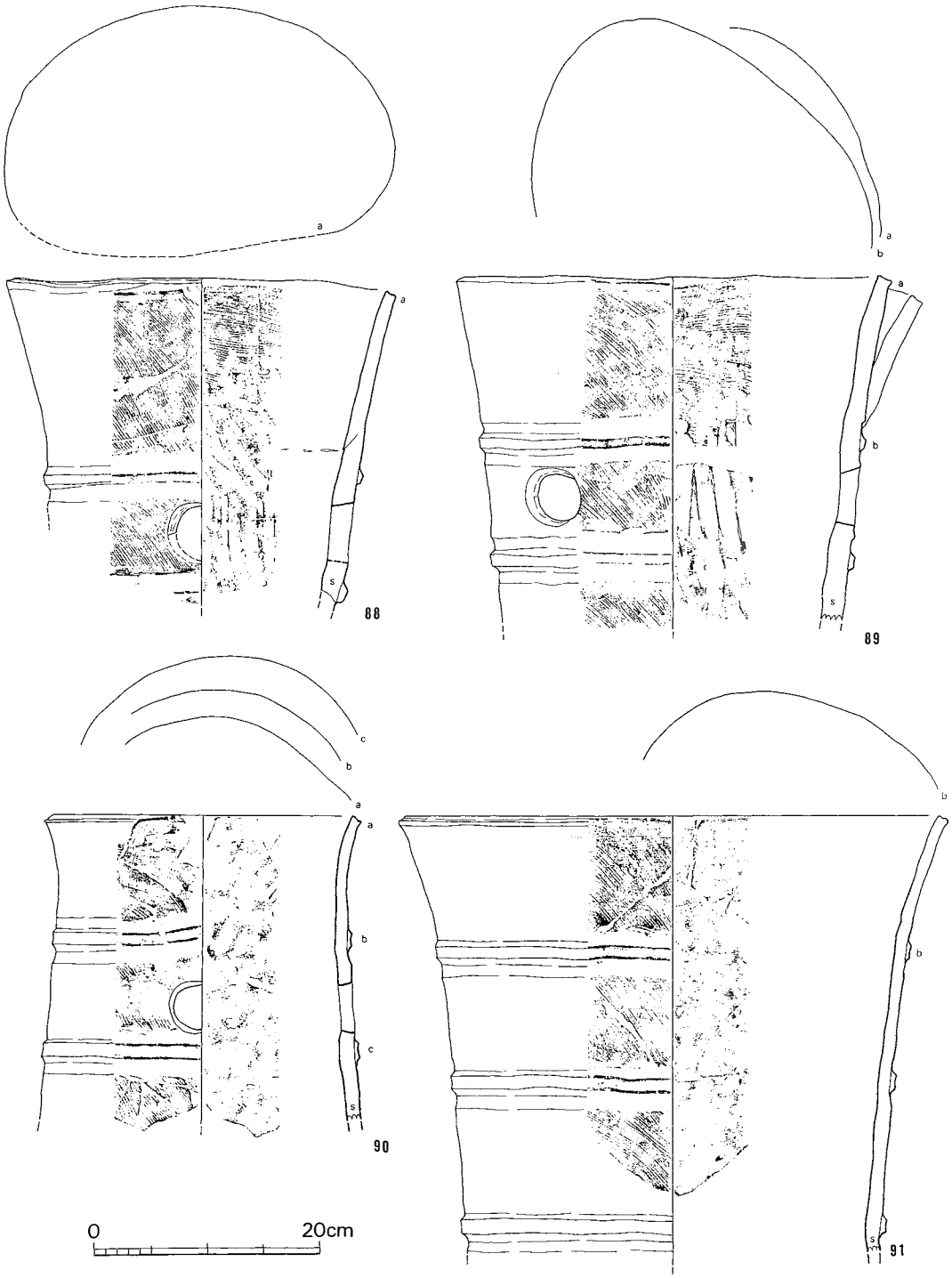


Fig. 43　8号墳出土埴輪（楕円形）実測図⑦（1/6）

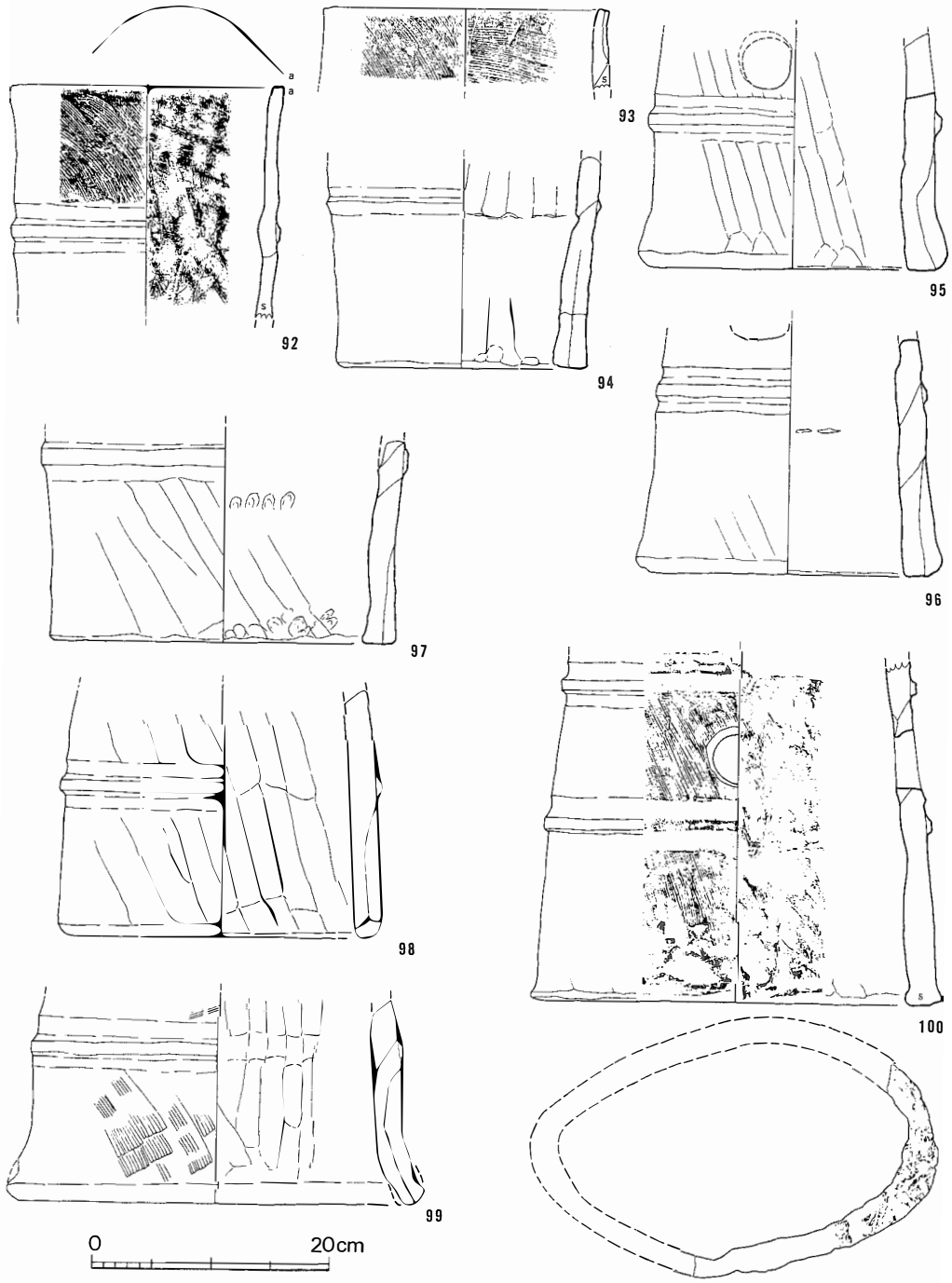


Fig. 44　8号墳出土埴輪（楕円形）実測図⑧（1/6）

形象埴輪（PL. 46～49、Fig. 46～52）

人物・馬・猪・猿・家・盾等々がある。いま図示しているもののうち、人物（１）、馬（16）、猪（21）は欠失部分が大半を占めるが、全形を知るために完形復原している。復原部分についてはスクリーントーンで示す。他の破片資料も含めて、調整はほとんどなでによる。

人物（１～15）　円筒の上に、靴をはいて襷がけの人物が直立し、両手は肘を曲げて何かを持つかの如く前に突き出す、それが一般的な形状のように思われる。しかし図示していないけれども、胡座した部分の破片もあるので直立人物だけではないようだ。

１はりりしい顔つきの男子像である。この人物は首飾りより上の顔面は左美豆良を除いて完全に残っている（Fig. 61）。顔高13.5cm、頭幅11.6cm、頭長10.5cmで、全体に角張った頭形を示す。器壁は顔面が１～ 1.5cm程である。顔面は鼻から目の下に僅かに稜線を見ることができるが、これが刺青を表現したものかどうかはわからない。髪は中央から二つに分け、それを後頭部でまとめて背の方へ垂らす。頭頂部は若干のへこみをみる。側頭部は耳を隠して美豆良を結い、肩の上まで垂らしている。首には径 1.6cm程の12個の玉が飾りとして表現されている。肩部には服の縫目を表現したのであろう二個一組の刺突文を有する。襷がけかどうかはわからない。腕の所の刺突文は環状に表現される。

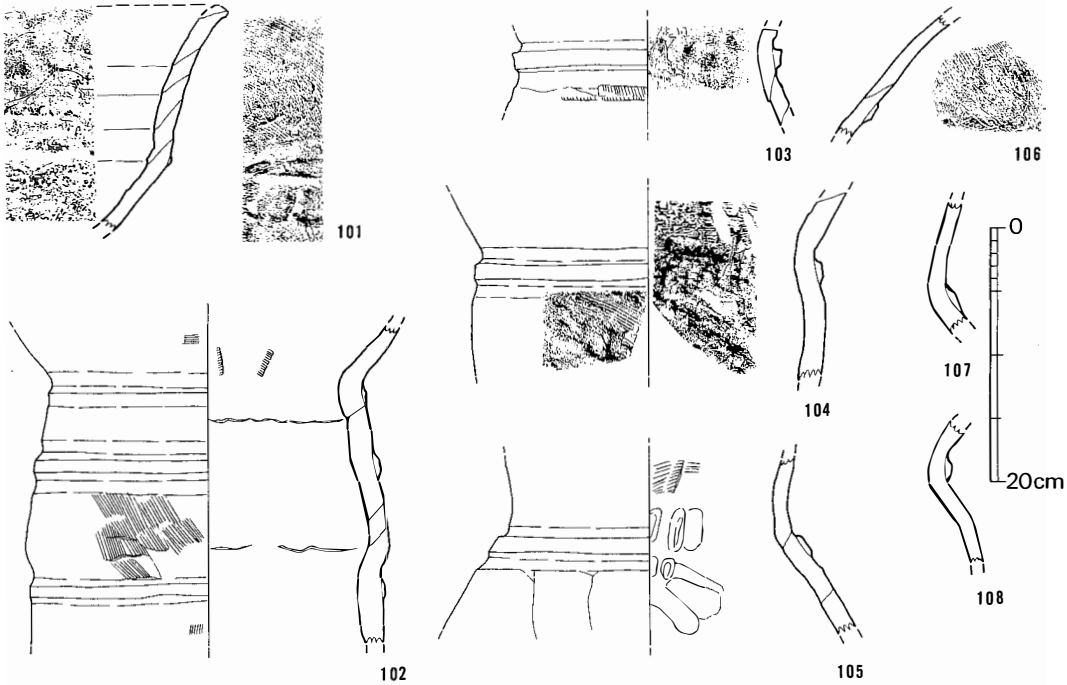


Fig. 45　8号墳出土埴輪（朝顔形）実測図⑨（1/6）

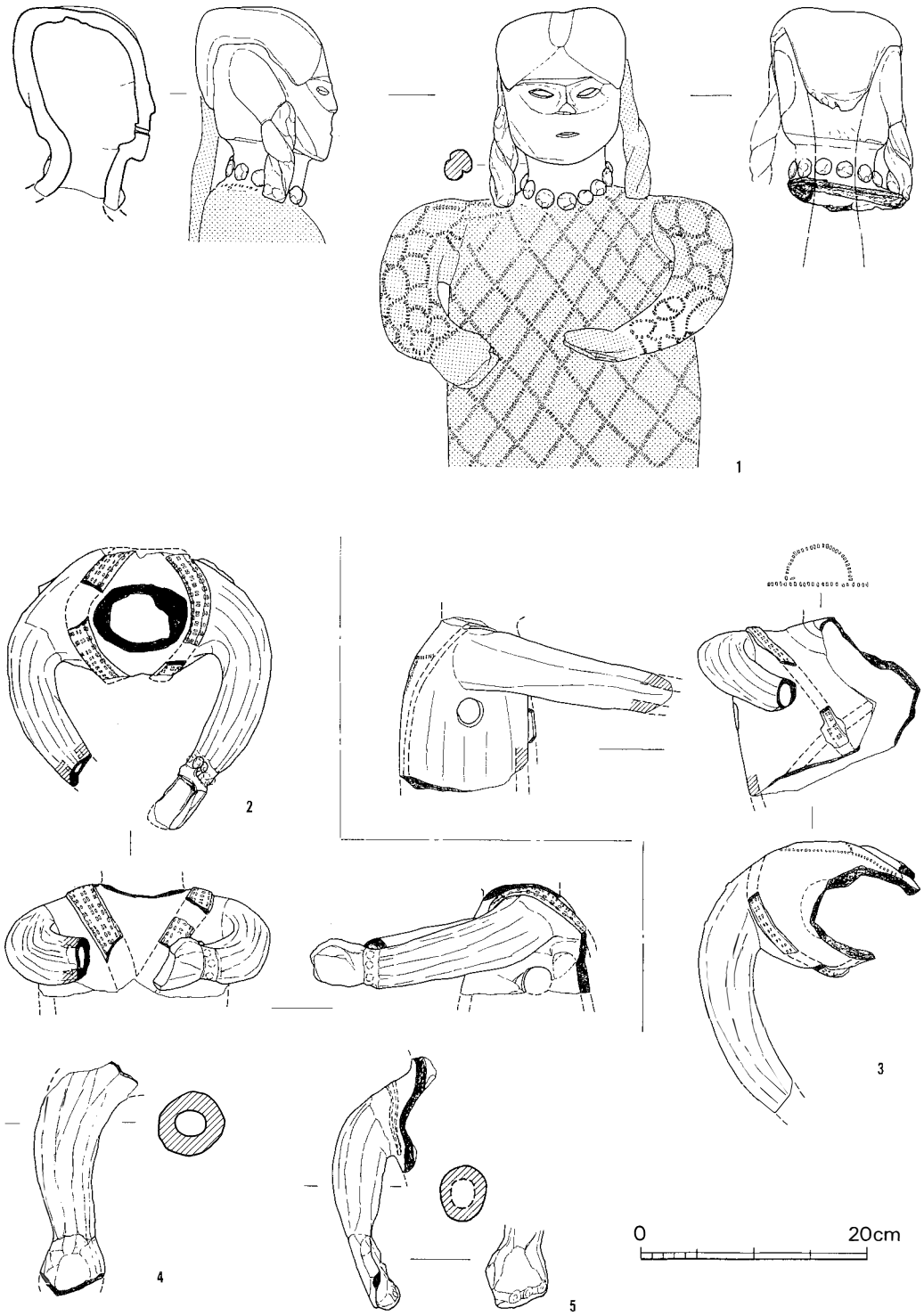


Fig. 46　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑩（1/6）

2は襷の幅が他より広く表現されている。左手首には7個分の玉が見られ、うち2個が残存し他は欠落している。脇には透孔とヒレをもつ。器壁は概ね1cmの厚さがある。

3も2と同様である。背中には刺突文が半月形に表現されている。脇にヒレはない。

4・5は丹塗りの痕跡をとどめるが、全面に塗られていたものではないようだ。掌には指の表現が僅かながら見られる。

6は背の部分で襷には×印の刻線が一部に施される。7は円筒の上にのる人物の足の部分で、靴にあたる部分は欠失する。足首には何か装飾を表現していたらしい剝離痕を見る。

8～10は足の部分で、11～15はその下につく靴を表現したものである。11～13は右足で14・15は左足となる。13を除き甲および側面部分に刻線や刺突文を施す。

以上の人物像が全体で何体分あるかは破片のみで推定しにくいが、おそらく最低10体はあろう。

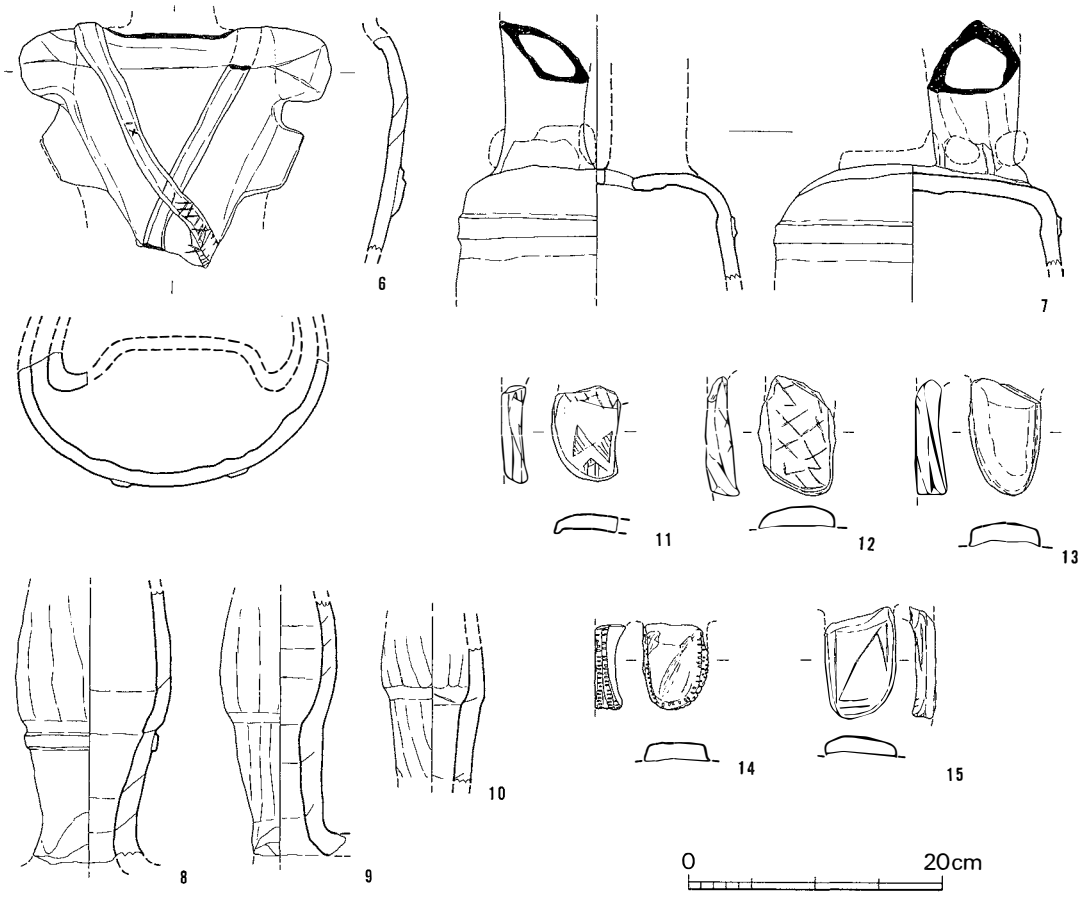


Fig. 47　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑪（1/6）

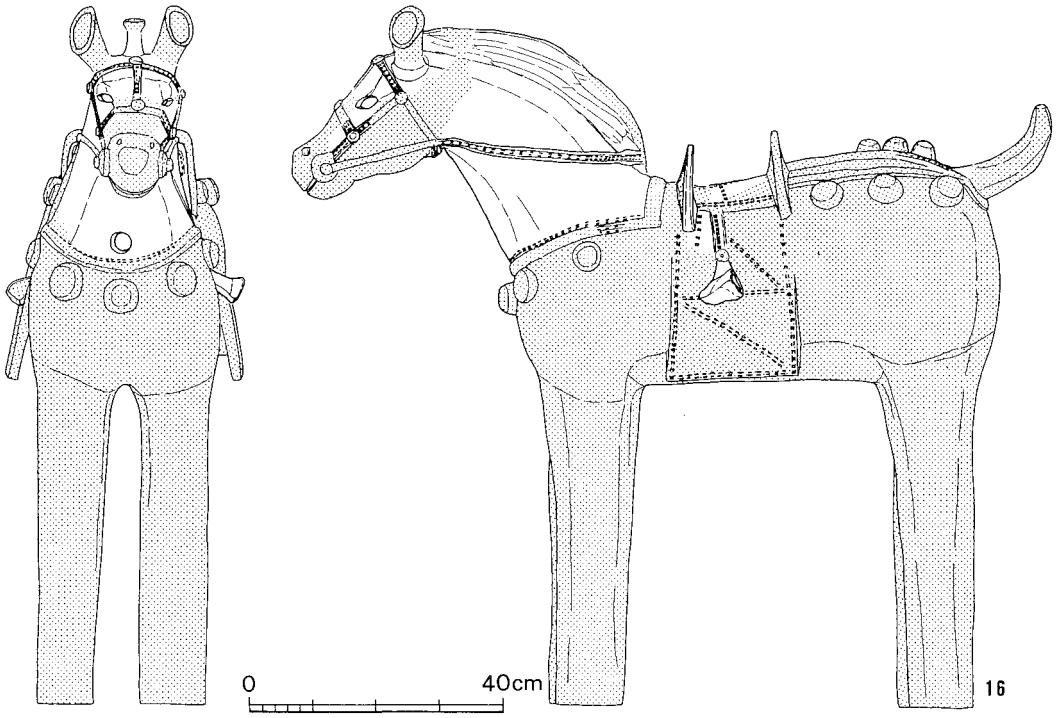


Fig. 48　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑫（1/12）

馬（16～20）　16は顔面～首・鞍・尻繋付近の一部が原形で、大部分は復原している。頭部は口・鼻の周辺を欠くが、角張った形の風格のある顔面を伺い知ることができる。頭絡は恐らく革紐を辻金具を介して結構しているが、項革・顎革とされるものは見当らない。また、図では頬革の下に、鏡板からのびて咽喉革につながるものを復原して表現するが、この部分は実際に存したかどうかわからない。手綱は確実に咽喉革とつながっている。頭頂部の両耳の間で、たてがみの前面にはたぶさの表現らしい突起をみる。18はその部分の破片である。鞍は前輪、居木の一部、そして片方の鐙が原形である。壺鐙と鞍とはやはり革紐でつなぐ表現をとる。尻繋の雲珠は半球形を表現するだけらしい。胸の所には透孔1個をみる。参考までに復原値を示せば、全長 120cm、高さ 110cmである。

（註6）

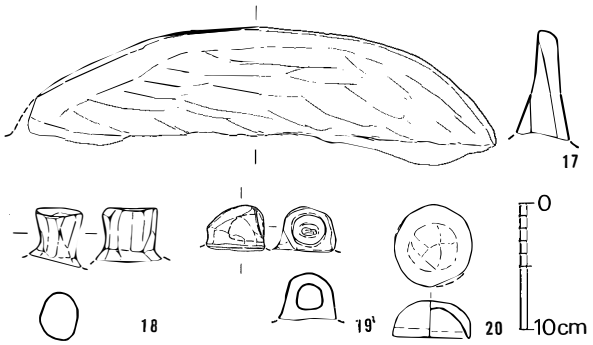


Fig. 49　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑬（1/6）

17はたてがみ、19は壺鐙、20は雲珠を表わしている。23も馬の足かも知れない。たてがみが存することより、最低もう1頭はあったことになる。

猪（21）　鼻と耳を除く頭部と、前足・後足の片方のみが原形で他は復原している。両目は左右対称とならず、右目の方が吊り上がった格好となり、それだけでも野性味を感じとることができる。口はそれほど大きくは突出していない。全長61cm、高さ54cmに復原している。

猿（22）　顔面の一部のみであるが、猿を表わしたものとしてよい。全体の表情等はこれのみでは推察しえない。

大刀（25）　柄の部分の造形と考えられる。柄尻より 2.6cmの所に僅かに段がつき、柄頭装具と柄本体との境目としてよいだろう。断面は楕円形を呈する。

家（27・28）　家の棟（27）および平側の柱組（28）を表わしたものであろう。

盾（29～36）　盾の一部分と考えられる。盾持の武人になるかどうかは、武人とすべき人物を見ないので否定的である。盾を支える円筒部は29・30よりすれば楕円形となるらしい。29は刺突文で囲った方形区画中にヘラ先で×印を入れる。30・31は刺突文の区画の中に、同じ刺突文を×形に施す。32～36はヘラ先による複線山形文が何段かに連続して刻まれる。32により観

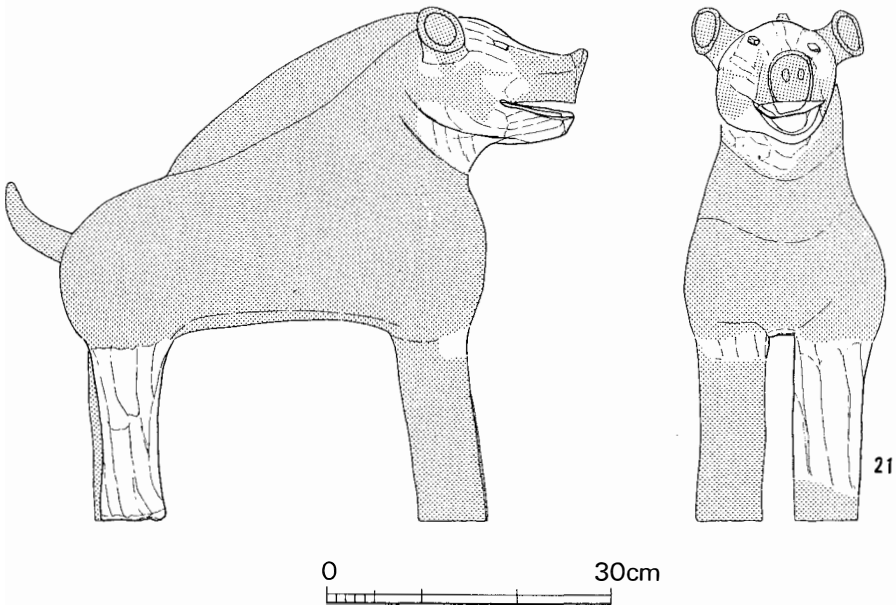


Fig. 50　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑭（1/8）

察したところでは、山形文を上下に画する横線をまず刻み、その後に山形の右側を全部刻んでから左側を全て刻むという順序になる。33には孔が2個あり、1個は貫通していない。34・35は同一個体と思われ、34に貫通する2孔、35には貫通しない3孔をみる。36も同様の山形文を施し、貫通する1孔をもつ。29・30には丹塗の痕跡を見る。31については、あるいは馬具の障泥の一部かも知れない。

その他（24・26・37・38）

24は片方へ湾曲した粘土板上に紐を巻いたような形を表現する。手甲の一部であろうか。

26はL字形のハンマーらしき形状をなすが、側面に剝離した部分を見るので何かに取り付いていたことがわかる。農夫が肩にかついだ鍬の一部かとも考えられる。

37は盾と違って、直角よりやや鈍角になる屈折部分があるので、あるいはきぬがさの一部であろうか。表裏ともなでで仕上げており、丹塗りの痕跡をみる。38はヒレ付内筒と思われる。表面は縦横に刷毛目を施し、その上をなでているので粘土が被っている。透孔の一部を見ることができ、突帯も付されるようだ。

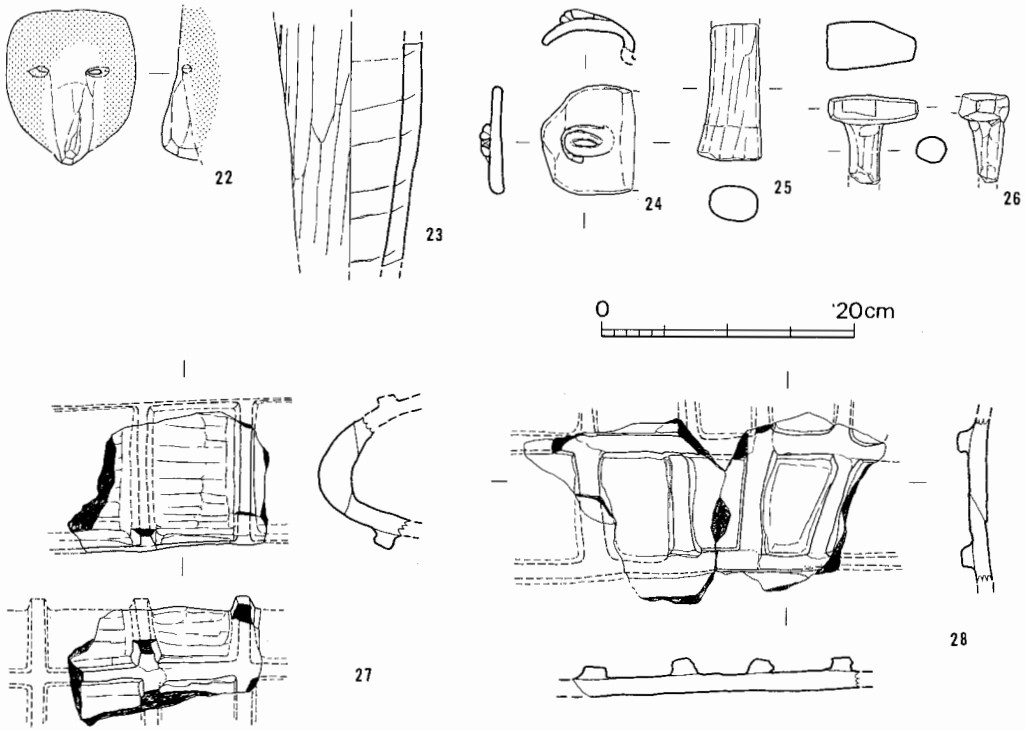


Fig. 51　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑮（1/6）

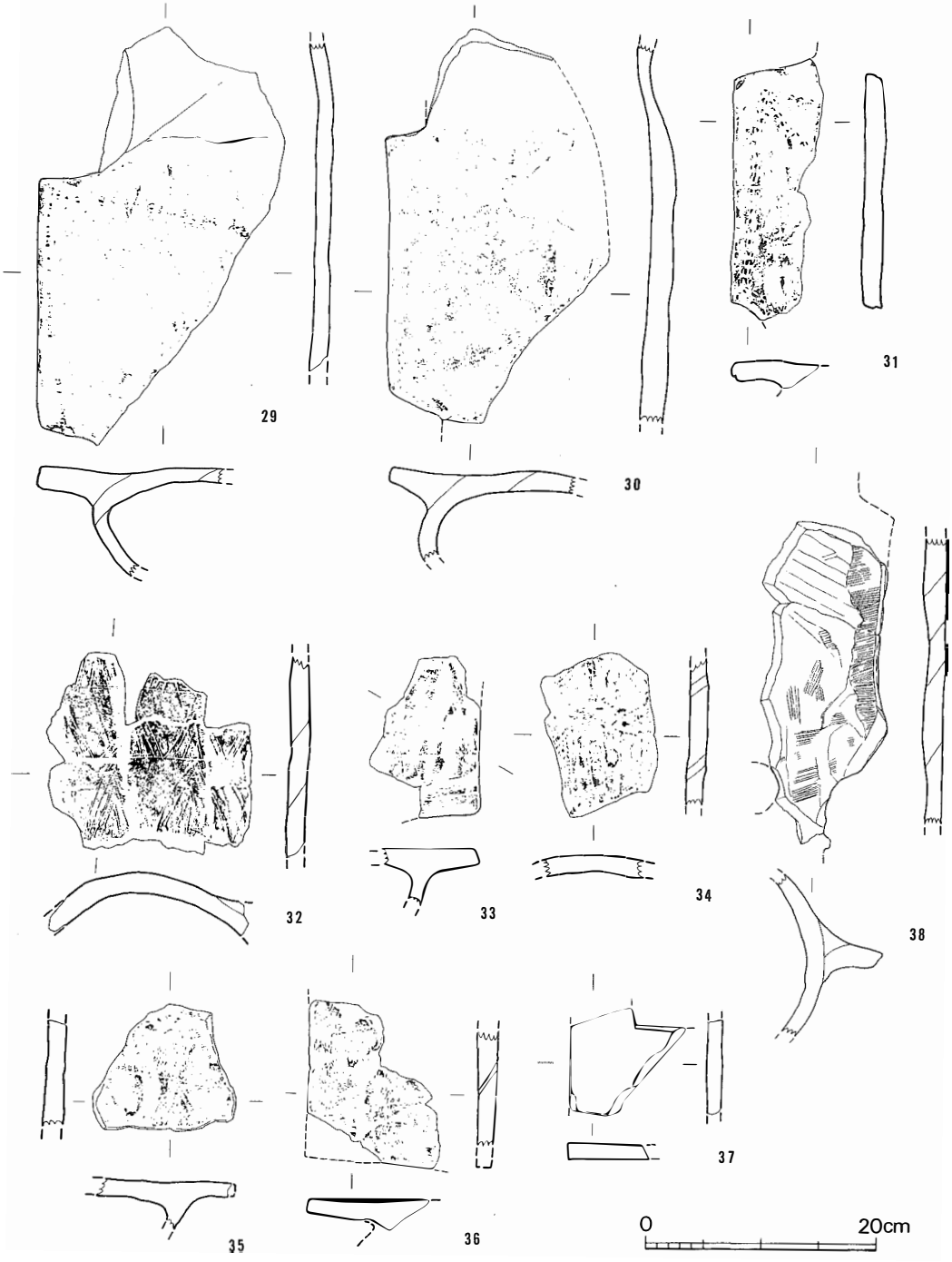


Fig. 52　8号墳出土埴輪（形象）実測図⑯（1/6）

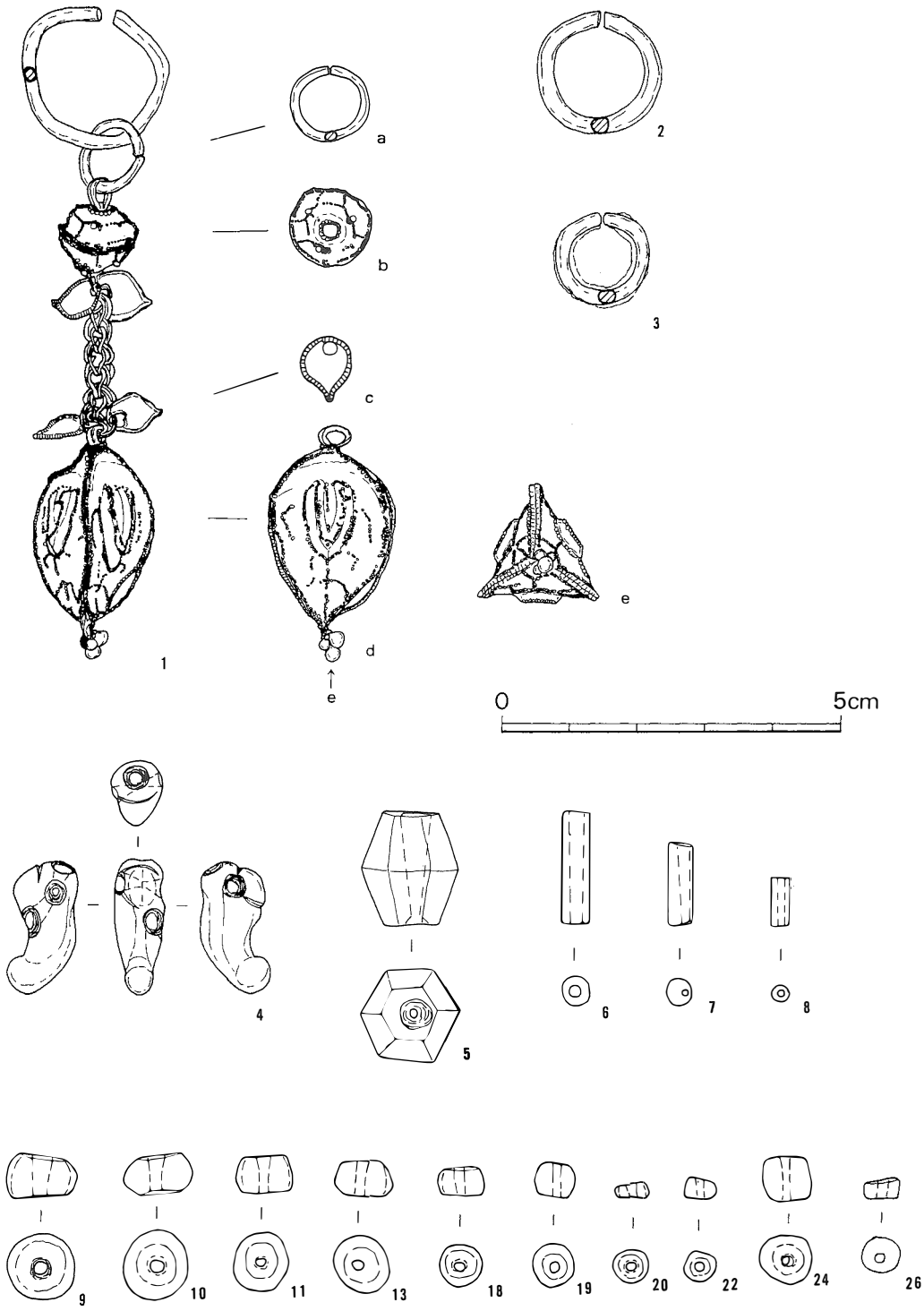


Fig. 53　8号墳出土装身具実測図（1/1）

2．装身具（巻頭カラー2、PL. 50、Fig. 53）

垂飾付耳飾りと耳環、玉類がある。玉類についてはTab. 1の計測表を参照されたい。

垂飾付耳飾り（1）　ほぼ純金に近い、細金細工（Filigree, フィリグレー）の粋を凝らした耳飾りで、1個のみ存した。通有の耳環に小環をつけ、球体の中間飾を経て、心葉形瓔珞を上下端に混じえる兵庫鎖を垂らし、垂下飾には山梔子形の三面体が付く。全長95.0㎜、重さ12.2ｇをはかる。いま少し、各部分を詳しく説明する。

耳環は最大径21.8㎜の若干角張った円形をなす。径 2.1㎜の針金を曲げたもので、切れ目は2㎜程の間隔があく。

小環（ａ）は最大径12.0㎜を測り、切れ目はぴったりとくっついている。断面は径 1.5㎜の円形をなす。これに2重に折り曲げた金線がとりついて、中間飾を貫通して兵庫鎖につながる。

中間飾（ｂ）は半球体2個を接合して球体としたもので、幅17～19㎜、高さ26.2㎜を測る。直径 0.4㎜程の金の細粒を吹きつける細金細工の手法を駆使している。

兵庫鎖は中間飾と垂下飾の間の約 2.2㎝間に6連をみる。一連が1個の針金の輪ではなく、2重に折り曲げたものを互い違いに上下連接した複雑な形状をなす。2重折り曲げの1単位となる針金12個でもって兵庫鎖を形成している。

心葉形瓔珞（ｃ）は兵庫鎖の上下端に各2枚ずつが取り付けられる。長軸長 8.7㎜、短軸長 7.5㎜を測り、これの外縁は丸縁となって、そこに刻みを入れる。金粒の吹付けではない。

垂下飾（ｄ・ｅ）は卵形に切り取った薄板を三面体に蠟付けし、その接ぎ目には刻目を入れ、さらにその外縁には金粒を吹きつけて縁どりをする。また三面ともに、中央はＶ字形の膨らみがあり、その周縁とそれ以外にも金粒を吹きつけて加飾する。三面体の最下端には水滴状の4個からなる連球飾をみることができ、その基部にも金粒が吹き付けられる。

耳環（2・3）　ともに銀製で黒っぽく銹化している。2は径18.6㎜で 1.7ｇ。3は径14.1㎜、 0.7ｇをはかる。

勾玉（4）　淡緑色をなす翡翠製で全長19.5㎝。異形と称してよい程で、頭部・尾部ともに特異である。頭部の穿孔は2つあり、いずれも両面から行なう。1個は通有のものと同じ位置で穿孔されているが、もうひとつは頭頂部から腹部へ斜めに穿たれる。また、丁字頭を意識したであろうけれども、かなり変形した刻みが施される。

切子玉（5）　水晶製。穿孔は片方から行なう。

管玉（6～8）　他に2個体分の破片がある。

ガラス玉（6～22）　18個を検出した。色調に6種類をみる。

臼玉（26）　滑石製で1個しかない。

Tab. 1　8号墳出土玉類計測表

（単位：mm）

No.	種　別	長さ(高さ)	最大幅(径)	最小孔径	色　調	備　考
1	勾　玉	19.5	9.15	2.15	yellow green	両面穿孔
2	切子玉	16.15	13.45	0.9	透　明	片面穿孔
3	管　玉	16.45	4.4	1.6	dark green	〃
4	〃	12.3	4.1	1.05	greenish white	
5	〃	7.15	2.8	1.1	grayish yellow green	
6	ガラス玉	6.35	9.95	2.0	deep blue	ひびが入る
7	〃	7.65	9.3	1.7	〃	〃
8	〃	6.1	9.9	1.65	〃	〃
9	〃	5.7	9.65	1.9	〃	〃
10	〃	5.55	10.0	2.3	pale green	
11	〃	5.65	8.7	1.6	deep blue	気泡入る
12	〃	5.4	8.4	1.35	〃	〃
13	〃	5.5	8.3	1.45	〃	〃
14	〃	5.9	7.7	1.3	〃	
15	〃	5.3	7.55	1.25	〃	気泡入る
16	〃	5.15	7.6	1.55	〃	〃
17	〃	6.25	7.8	1.15	〃	〃
18	〃	4.75	6.35	2.0	dull blue green	〃
19	〃	5.2	6.25	1.25	deep blue green	〃
20	〃	2.5	4.85	1.05	dark blue	〃
21	〃	2.7	5.35	1.1	dark yellow	
22	〃	3.1	4.3	1.4	dull yellow	
23	〃	3.6	4.25	1.2	yellow	
24	土　玉	6.5	7.5	1.2	bluish black	
25	〃	6.3	7.0	1.55	olive	
26	臼　玉	3.05	5.25	1.55	grayish yellow green	

3．鉄器（PL. 51、Fig. 54～57）

武器・武具・馬具があるが、用途を特定し難いものも見られる。

鏃（1～19）　大きく無茎式（A）と有茎式（B）に分かたれ、有茎式はさらに5分類できる。総数50本以上を数える。

A　類（1・2）　1は柳葉式に近く、2は三角形式とすべきか。

B Ⅰ類（3～6）　広根式で、3は現存長 8.8cm。

B Ⅱ類（7）　圭頭式である。

B Ⅲ類（8～10）　8は片丸造の切刃式で、9・10は切刃とならない。

B Ⅳ類（11・12）　鏃でなく別の用途があるかも知れない。片小爪・互小爪式となろうか。

B Ⅴ類（13）　片刃式である。

石突（20）　小破片である。内部に木質が遺存す。

鞘金具（21）　復原長径4cm弱となろうか。内部に木質が銹着す。

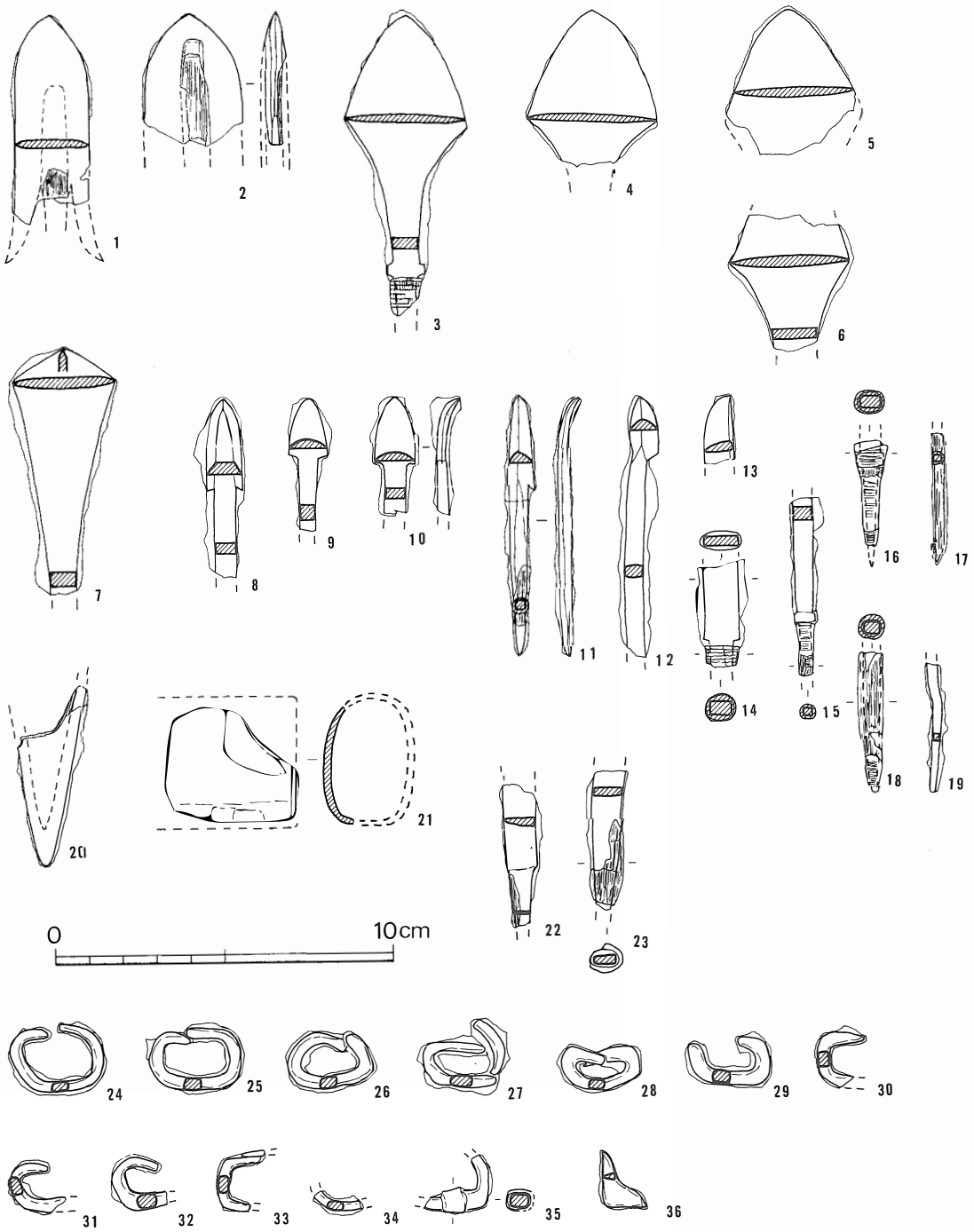


Fig. 54　8号墳出土鉄器実測図①（1/2）

挂甲小札（37～82）　破片が多数あり、その一片一片を１個体とみるならば1000個を超えるが、なかには同一個体の破片もあろうから、それをある程度差し引いて考えると実数600～700枚くらいとなろう。そのうち完形品として残る小札は67枚ある。挂甲一領の小札の枚数は 800～1000枚といわれるから、ほぼ一領分が出土したことになる。

形態的には頭円下直となる一般的形状のもの（Ａ）、平面的には同形状ながら湾曲をもつもの（Ｂ）、そして肩部付近に用いられたであろう、別形態のもの（Ｃ）とがある。Ａはさらに大きさ（幅と長さ）により９種類に分けられる。参考までに、数ええた枚数を〈　〉に記しておこう。（註７）

Ⅰ類　幅 4.2cm、長さ不明（37～39）　〈７〉

Ⅱ類　幅 3.8cm、長さ不明（40）　〈１〉

Ⅲ類　幅 3.4cm、長さ不明（41）　〈２〉

Ⅳ類　幅2.9～3.0cm、長さ不明（42・43）　〈10〉

Ⅴ類　幅 2.5cm、長さ不明（44）　〈６〉

Ⅵａ類幅2.2～2.3cm、長さ6.0～6.5cm（45～49）　〈144〉

Ⅵｂ類幅 2.1cm、長さ 6.5cm（50～58）　〈76〉

Ⅶ類　幅1.9～2.0cm、長さ 6.1cm（59）　〈30〉

Ⅷ類　幅1.9～2.0cm、長さ 5.2cm（62～65）　〈13〉

Ⅸ類　幅2.0～2.2cm、長さ3.5～4.4cm（66～74）　〈25〉

Ⅵ類については見た目ではあまりかわらないようでもあるが、僅かに異なるので２つに分けている。

ＢはＡのⅥ・Ⅶ両類と同じ法量で、ただその中央部が湾曲するものである（75～78）。

Ｃは幅 2.1cmの湾曲したものを綴じ合わせたもので、１つの長さがいかほどになるかは不明（79～82）。肩部付近に使用されたものか。

Ａ～Ｃともに威し孔および綴じ孔を持つのは必定であるが、いまは銹のためはっきりしないものが多い。ただ、41・43・57・58・62・78等々においては、威し方あるいは綴じ方の一端を伺い知る紐が一部に残存している。55・56には布が銹着す。74は最も小型の小札が×状に銹着

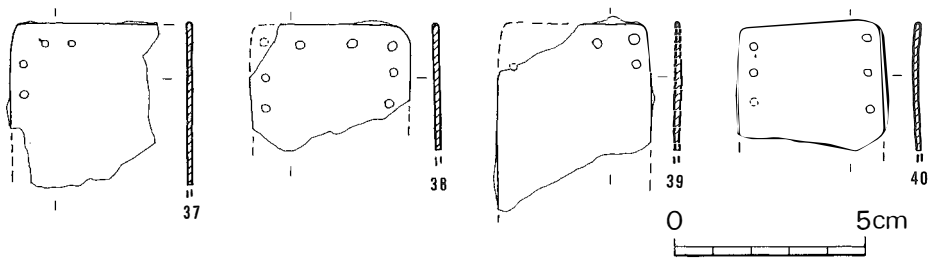


Fig. 55　８号墳出土鉄器実測図②（1/2）

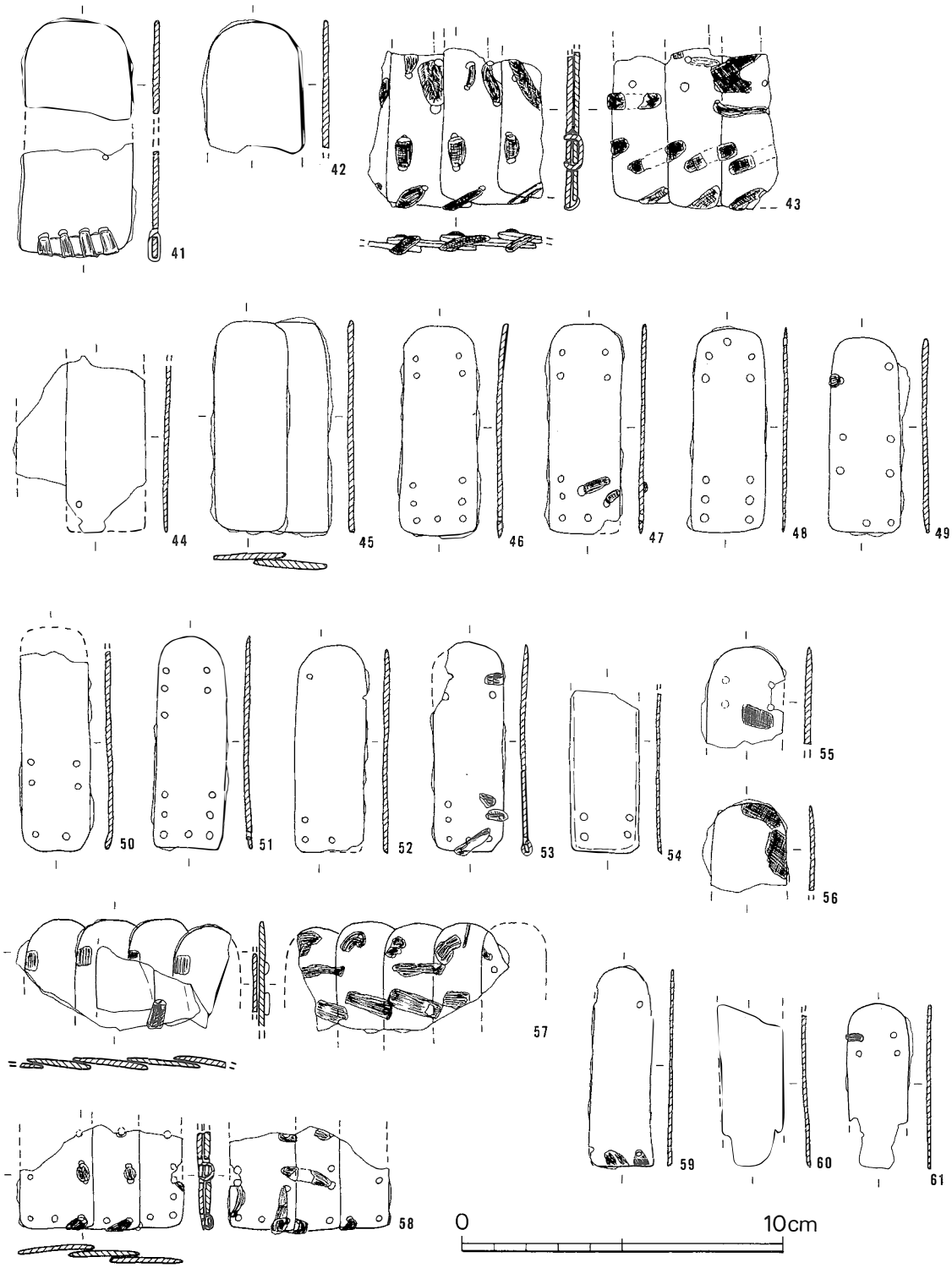


Fig. 56　8号墳出土鉄器実測図③（1/2）

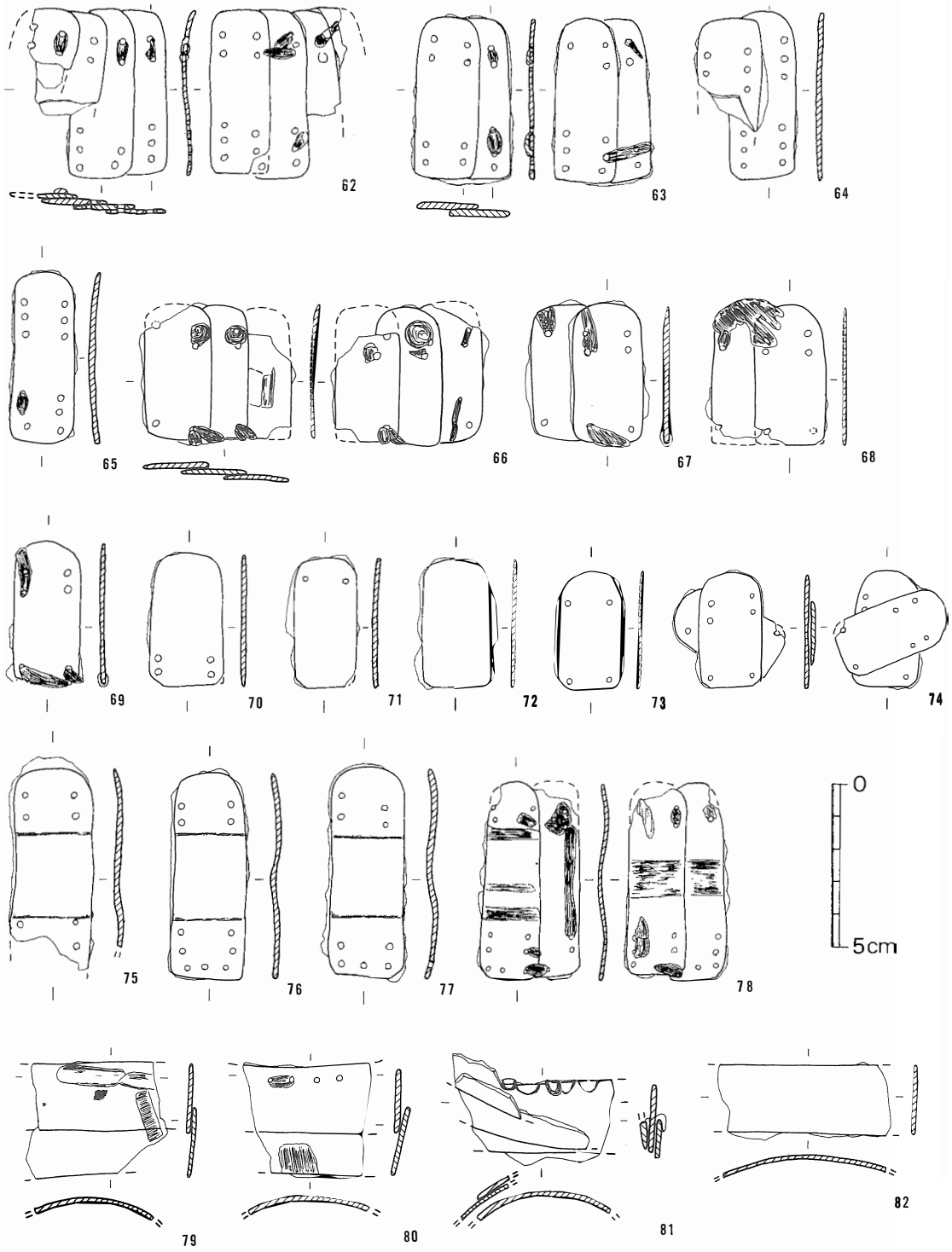


Fig. 57　8号墳出土鉄器実測図④（1/2）

しているが、これが本来のものかどうかはわからない。

弓付属金具（96～104） 市毛勲氏が両頭座金付留金具と称されるものであるが、弓に付属する金具として用いられた可能性が高いので武具として扱う。皮を巻いた鉄円筒の中に断面方形の鉄棒を差し込んだものである。花弁の形ははっきりしないが、101の上に示した模式図の如くとなろう。96には皮革らしき繊維が付着し、101には横（長軸に直交する）方向の木質を見る。全長 2.7～ 3.2cmで、２つの花弁の間は 1.7～ 2.0cmを測る。（註８）

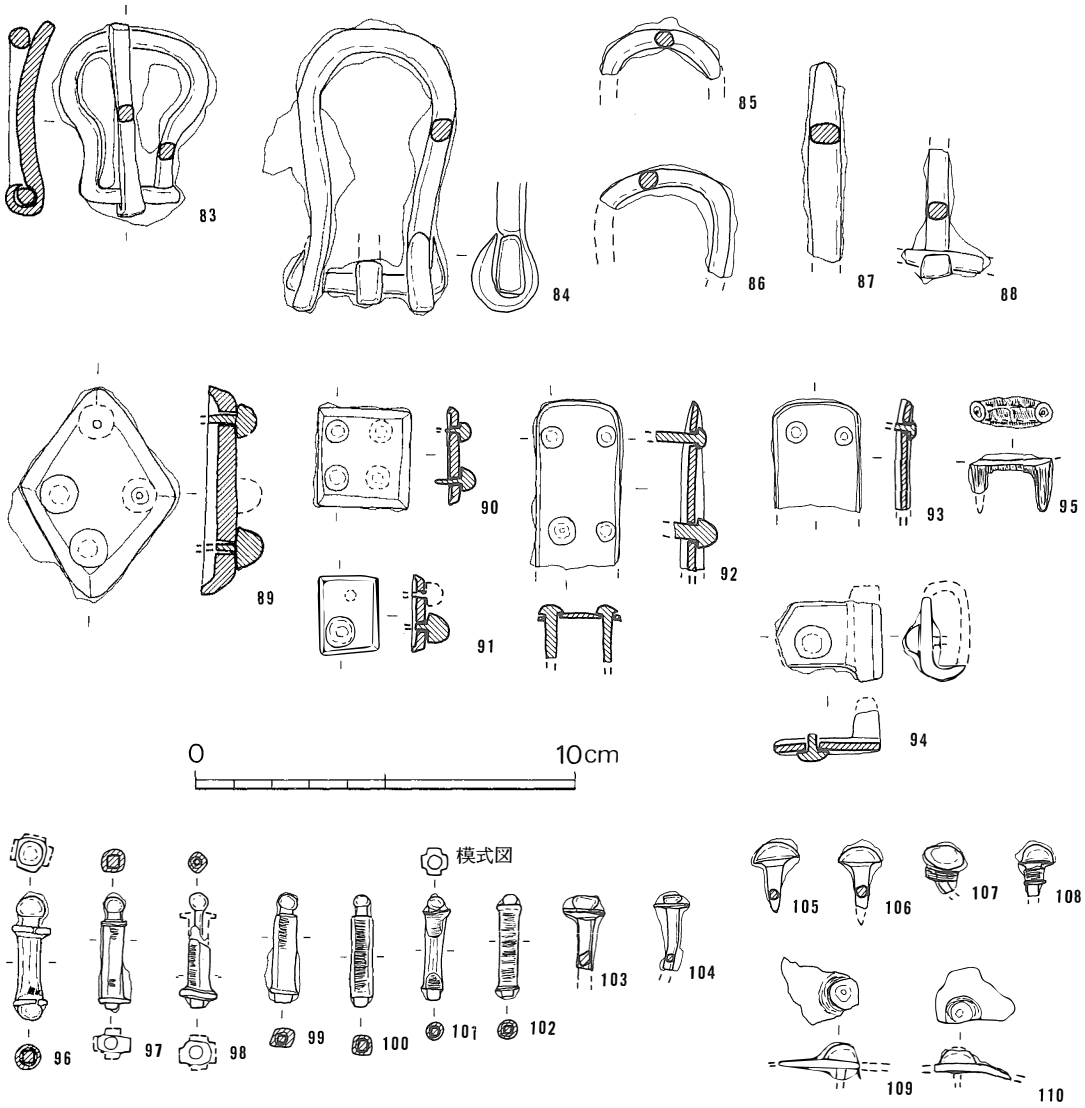


Fig. 58　8号墳出土鉄器実測図⑤（1/2）

鉸具（83～88）　83は完形品である。本体の長さ 4.4cm、刺金の長さ 5.0cm。83と84とでは本体のつくりが異なり、84は軸部が別造りである。87・88は刺金の破片。

留金具（89～95）　89は菱形をなし鋲が4個つく。長軸長 5.6cm。中央にもうひとつ鋲がつくかも知れない。鉄地金銅張りである。90は一辺 2.5cm前後の正方形で4鋲をもつ。鉄地金銅張り。91は2×1.5cmの長方形で2鋲をもちやはり鉄地金銅張りである。92・93は同形品で、93も4鋲となろう。94は帯締めがつくもので、鋲は1個しかない。95は鋲の先端のみで、鋲頭と本体を欠く。木質が銹着している。

帯締め金具（24～35）　全体に厚すぎる気もするが、83・84の鉸具や、90～95の留金具と一連のものとすれば、幅2cm前後の帯あるいは革紐の締め金具とすることができよう。24は最大幅 2.2cmを測る。12個とも断面は隅円長方形を呈している。35には別の薄い金具が付随しており、用途が異なるのかも知れない。

鋲（59～62）　留金具でも大きいもの、例えば43のようなものにとりつける鋲らしいが、ただ62は鋲頭のすぐ下に木質を見るので、直接に木質に打ち込まれていたものと考えられる。

座金具（63・64）　鋲をもつ金具であるが、どこに取り付くものかは不明。

不明鉄器（22・23・26）　22・23は双方とも刀子の一部のようでもあるが定かでない。22は関らしき段をみるものの身となる所には明確な刃部を見ない。36は何かの縁金具であろうか。

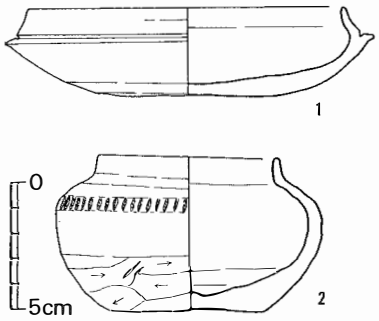


Fig. 59　8号墳付近近世墓埋土中出土土器実測図①（1/3）

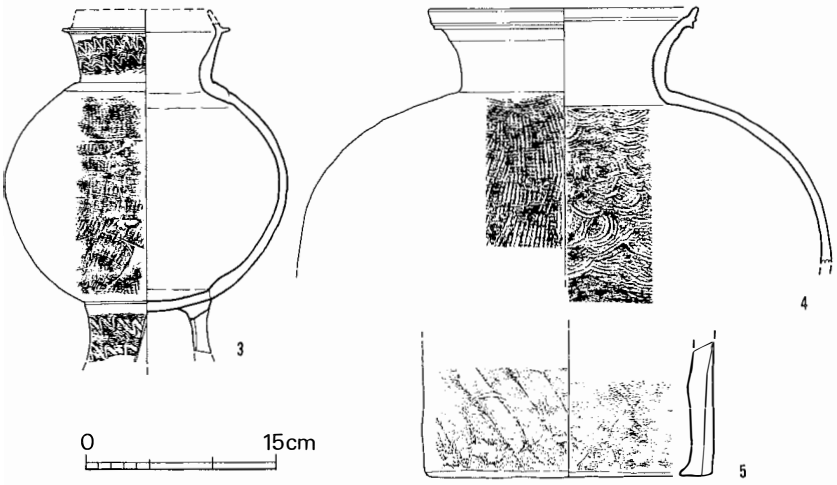


Fig. 60　8号墳付近近世墓埋土中出土土器実測図②（1/6）

近世墓埋土中出土土器（PL. 42、Fig. 59・60）

８号墳出土土器と同一個体とみなされる破片があるので、もともとは８号墳に属するものであったとしてよい。

須恵器（１～４）

坏身（１）　口径12.4cm、器高 3.4cmを測る。受部と立上りの境には切り込みに近い沈線が入る。底体部はヘラ削り、立上りの内外は横なで、内面はなでを施す。胎土良、焼成良好。

坩（２）　口径７cm、器高６cm。底部はヘラ削りで平底となし、体部下半も手持ちヘラ削り。それ以外は横なでを施す。肩部に刺突文が巡る。蓋を被せて焼成した痕跡を口頸部にみる。胎土良、焼成良好。

脚台付有蓋壺（３）　脚台の大半と口縁の立上り部分を欠く。脚台は三角形透しが三方に入る。胴部はほぼ球形に近く、最大径22.1cm。外面は平行タタキ、内面は同心円が入り、いずれもその上をなでる。脚台と頸部には同様の波状文が巡らされる。胎土良好、焼成堅緻。

甕（４）　口径21.1cm、胴部最大径42cmに復原される。胴部外面は縦平行タタキで擬格子目となる部分もある。内面は同心円の上を部分的になで。口頸部は内外とも横なで。肩部に自然釉が付着している。焼成良好。

円筒埴輪（５）

調整等は８号墳出土のものと全くかわらない。

小結

当８号墳は直径（外径）34ｍを測る大円墳である。墳丘については、1965（昭和40）年頃までは小高く５ｍ前後はあったらしいが、その後に蜜柑園造成等で削平されてしまい、調査着手時にはほとんど見る影もなかった（PL. ４）。

途切れ途切れながらも内周溝のみられたことと、そこから若干なりとも円筒埴輪片が出土したことは注意される。今後の類例増に期待したい。

出土遺物のうち埴輪については、円筒・形象ともに量的にも内容的にも種々の貴重な資料を提供してくれた。供給源は至近の距離に存する立山山窯跡群と考えて間違いあるまい。楕円形埴輪は近年になって注意されており、今後、その意義を問い質してゆく必要があろう。

垂飾付耳飾りは出色であり、考古学的意義（註９）のみならず美術工芸的にも秀逸さを持つものである。これについては他の類例も含めて後述しよう。

挂甲の小札がほぼ一領分したことも、九州における類例の稀少性を考えると、この古墳の価値をさらに高かしめるものである。これについても別に若干触れたい。

この８号墳が八女丘陵上で占める位置は、時間的にも空間的にも極めて重要であり、磐井と

その後の動向を知るには欠かせぬものといえよう。

出土した須恵器は型式的には幅があり、一概に築造時期を土器のみでもって言えないところがあるが、石室構造や他の出土遺物との関連から、およそ6世紀中葉に近い前半に築造され、同後半までは確実に使用されていたと考えられる。なお、この8号墳出土須恵器の一部は、中尾谷窯跡群より供給されたものと思われ、殊に甕の口縁部片・胴部片には類似した資料をみることができる。

註1．この内周溝からも円筒埴輪片が20点ほど出土している。春日市門田2号墳に見られる内周溝には遺物はなく、墳丘築造の過程で埋められたとされている。この内周溝が墳丘形成の際に何らかの機能を持ったであろうことは推察できるが、具体的にどう与ったかは知りえない。
福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』　第1集　1976

註2．福岡県教育委員会『野間窯跡群』(岡垣バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集)　1982

註3．八女市教育委員会『立山山窯跡群』(八女古窯跡群調査報告Ⅳ)　1972
調査された2基のうち、当8号墳出土埴輪はどちらかというと1号窯出土品と類似しているが、未調査の中に供給窯があるかも知れない。

註4．川西宏幸「円筒埴輪総論」　考古学雑誌64－2　1978

註5．突帯上の一部を指先にて押えつけるようになでた例を2点ほど見る（17・62）が、連続して全周するものではないようだ。

註6．増田精一「埴輪馬にみる頭絡の結構」　考古学雑誌45－4　1960

註7．末永雅雄『増補　日本上代の甲冑』　1981

註8．市毛勲「古墳出土の鉄製留金形小品について――その名称と用途をめぐって――」　古代学研究87 1978

註9．豊中市教育委員会『史跡　大石塚・小石塚古墳』　1980

註10．八女市教育委員会『中尾谷窯跡群』　1970

Fig. 61　8号墳埴輪出土状態

3．9号墳

北から伸びてきた丘陵が急に傾斜をかえて下降する分岐点の所に立地する。21号墳・10号墳とは約35m離れている。進入路関係で削平される墳裾の最小限の部分を調査し、主体部は発掘していない。

i．規模（PL. 5、Fig. 62）

墳丘は東側が大きく削られ北西部に残丘を見るが、現況で墳裾と思われる所から頂部までの比高約3mを測る。見かけの直径20～23mと見なされたが、検出した埴輪列が墳域の外縁をなすとすれば、直径18mくらいの円墳となる。

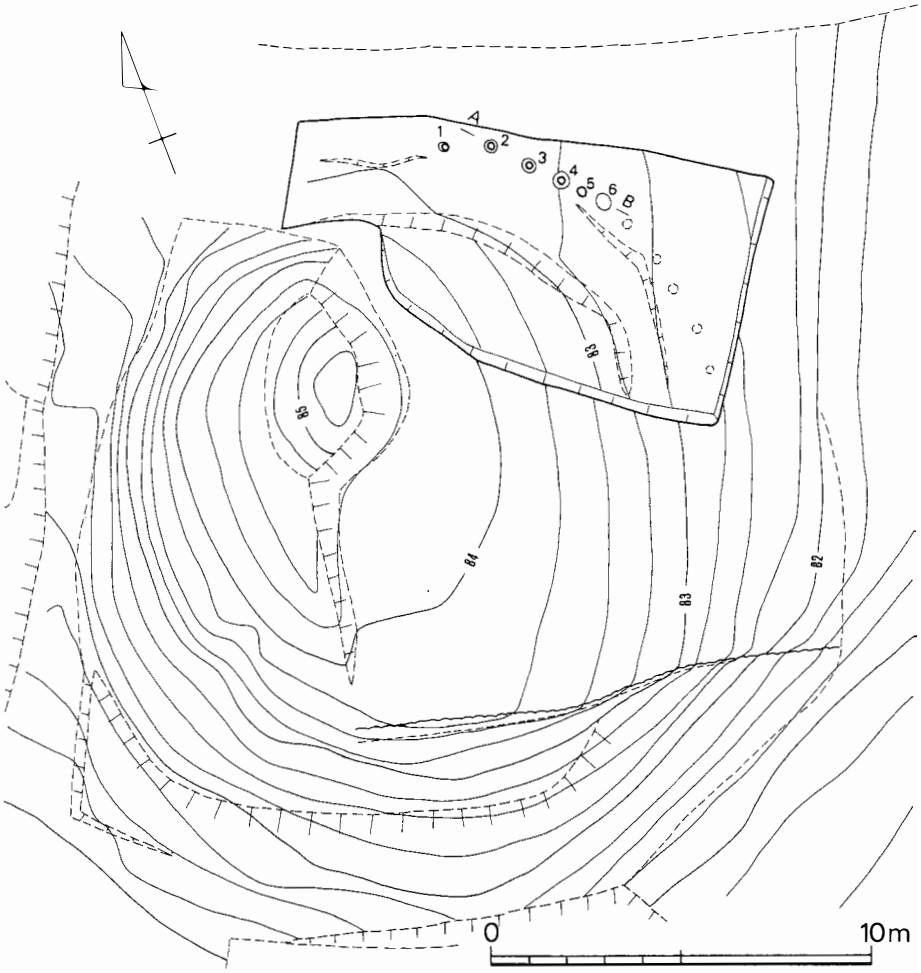


Fig. 62　9号墳墳丘測量図（1/200）

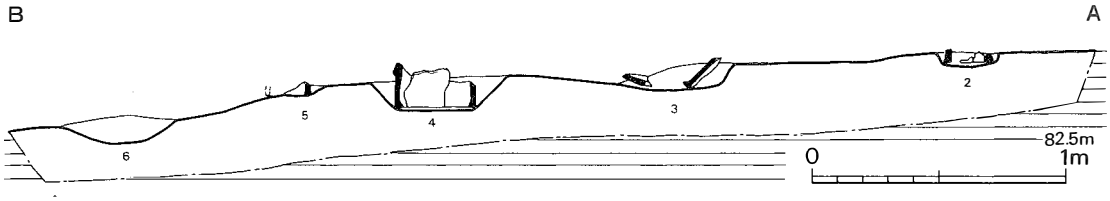


Fig. 63　9号墳埴輪出土状態断面図（1/30）

埴輪列（Fig. 63）は5本分は埴輪基底部が残っていたが、あと6本分の掘り方と思われる浅いくぼみを確認した。埴輪列のすぐ手前（墳丘中心部より）に小さな段があり、さらに埴輪列の内側2mには大きな段をなす削り出しがみられる。これよりすれば二段築成となる可能性もある。

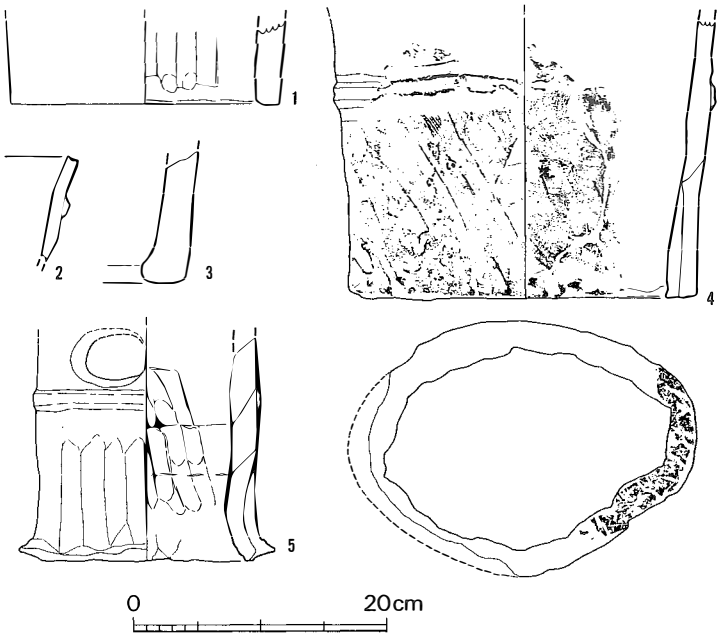


Fig. 64　9号墳出土埴輪実測図（1/6）

ii. **主体部**

不明であるが、10号墳や21号墳等と同じく南西方向に開口する横穴式石室であろう。

iii. **出土遺物**（PL. 42、Fig. 64）

No.を記すものはFig. 63の番号と同じである。また、埴輪の成形、調整等は8号墳のものとほとんど同じであるので省略する。

1はNo.2で楕円形になるらしい。図示した底径は21.2cm。底面には植物質繊維の圧痕をみる。2・3はNo.3で、口縁と基底部破片であるが同一個体かどうかは不明。2は風化著しく調整不明。口縁は波状となるか。3は楕円形になるようだ。4はNo.4で楕円形の須恵質埴輪である。底部長径27.5cm、短径20cmを測る。5は出土部位不明で、底径20cmを測る。なでが著しい。

小結

9号墳は直径18m程の円墳で二段築成の可能性をもつ。裾部には円筒埴輪列が巡らされ、周溝は持たない。主体部は未発掘であるが、恐らく西南に開口する横穴式石室であろう。

埴輪は土師質・須恵質の双方を含むが、楕円形となるものがほとんどらしい。時期的には、6世紀中葉～後半と思われる。

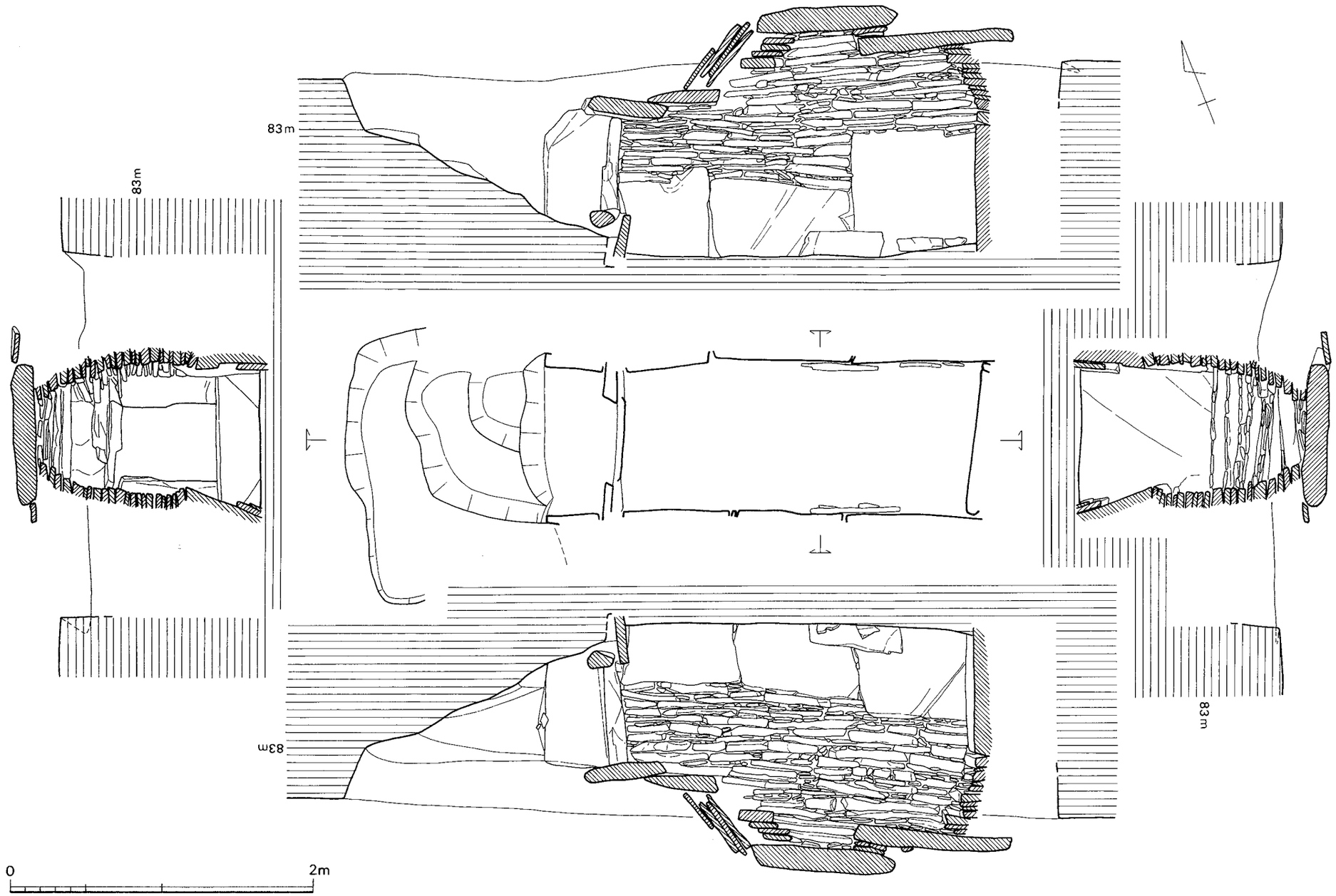


Fig. 65　21号墳石室実測図（1/30）

4．21号墳

i．規模（PL. 6、Fig. 65）

近世墓の改葬後の墓石が散乱している中で、見た目にも若干の高まりが認められ、古墳が存するであろうと思われた。また、古墳の周辺には近世墓としての石組み（石棺）が数基みられた。周溝は全周しないが、南側は近世墓による攪乱がひどくて判然としなかった。しかし、東側は地形的に低くなっている故、もともと全周していないものといえる。復原すれば径18.1mのほぼ正円となる円墳であるが、周溝の中心は石室の中心とは一致せず石室奥壁のあたりになるようだ。

墳丘は石室中心から6mあたりまでは旧表土を残して整形し、その上には、近世墓による攪乱を考慮に入れても、盛土を行なった形跡が明確には認められない。多分に、削り出しでの高まりと、主体部掘り方を掘削した際の排土でもって〝墳丘〟を形成した程度と思われる。

ii．主体部（PL.7、Fig.67）

主軸をS－68°－Eにとり、略西方に開口する竪穴系横口式石

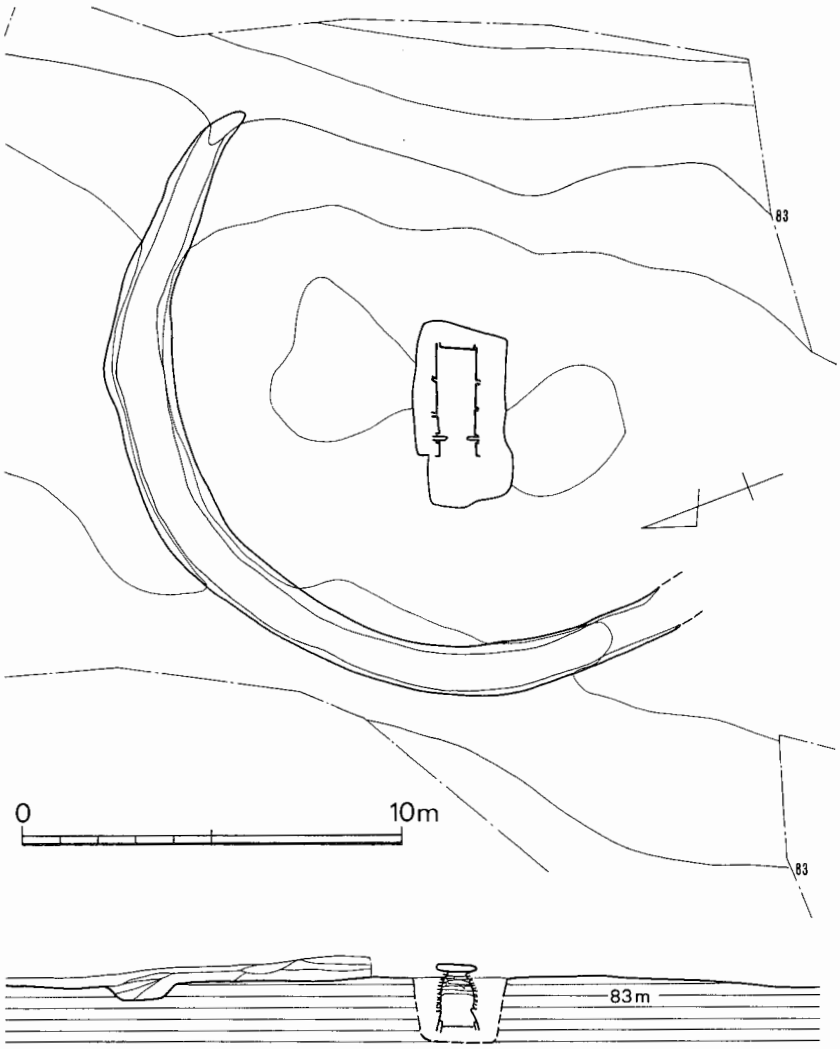


Fig. 66　21号墳地形測量図（1/200）

室である。

掘り方は長軸 3.3m、短軸 2.3mのやや歪んだ長方形プランをなし、それに長さ 1.3m、幅 1.6m程の墓道を附設したものである。掘り方の深さは 1.3mくらいで、石室天井石の上面は掘り方面より 0.4mほど飛び出す。墓道の南側は攪乱を受けている。

墓道は3段の階段状となり、約32°の角度で玄室へ降る。閉塞は4枚の大きめの扁平石と小さな石とでなされていたが、2次的様相が伺われた。前庭部側壁は両側とも1枚の板石を縦に据えている。玄門は両袖石間が約 0.5m、框石と楣石間の高さ0.62mを測る。框石と玄室床面とは25cmの段差をもつ。

玄室は主軸長 2.3m、奥壁幅1.02m、玄門側幅0.91mの僅かに羽子板状を呈するプランで、高さは最高1.47mを測る。奥壁1枚と左右両側壁3枚ずつは腰石として石材を縦に立て、その上は扁平石の平積みとなる。側壁腰石の接ぎ目には補強材の配置も見られるものの、右側壁はバランスを保ちえず内傾している。腰石上の平積み部分は、小石でのパッキング等を行なって、主石材の上面レベルがほぼ同じになるようにとの配慮が伺われる。側壁と奥壁とが接するコーナー部分は、双方から交互に主石材が入りこむ形態をとる。右側壁の奥壁寄りと、左側壁の玄門寄りの2ヶ所に突起をもっている。

石室縦断形は凸形となり、あるいは〝家〟の構造を意識しているのであろう。縦断面図でわかるように、玄門側の天井付近の石積みが乱れているのは、波多野晥三氏調査の際に、ここから出入りしたものらしい。石室内には石材10個ばかりがたてかけてあったから、天井部の石を落し込んだとみられる。

iii. **出土遺物**（Fig. 67）

波多野氏の報文によれば「鉄鏃と用途不明鉄棒と折り曲げた銅板1枚」(註1)があったという。我々の調査に際しては、当然ながら石室内に遺物は存しなかった。墓道部分を発掘中に、攪乱土中から須恵器片1点が出土したけれども、調査中に紛失した。

Fig. 67は主体部西側周溝直上出土の須恵器である。坩か、大型の瓿の肩部と思われるが、器形は特定できない。胎土は精良で、焼成堅緻。灰白色をなし一部が黒ずむ。内外ともなで調整。

小結

すでに触れたように、この古墳はかつて波多野晥三氏が調査されたものであった。

石室の構造は、石棺の様式を引継ぎ、石棺の一方の小口壁中央に構口を設けた形制となる。前庭部側壁が板石を立てているのも、まさしく石棺の遺制である。周溝直上から出土した土器が当古墳に伴なうものかどうか判然としないが、いまは伴なうものとし、須恵器としては古いものでI型式第1～2段階に属するものと考える。実年代としては5世紀前葉に比定する。

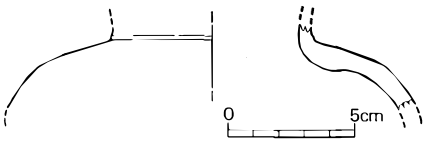


Fig. 67　21号墳出土土器実測図（1/3）

註1．本書Ⅵ参照

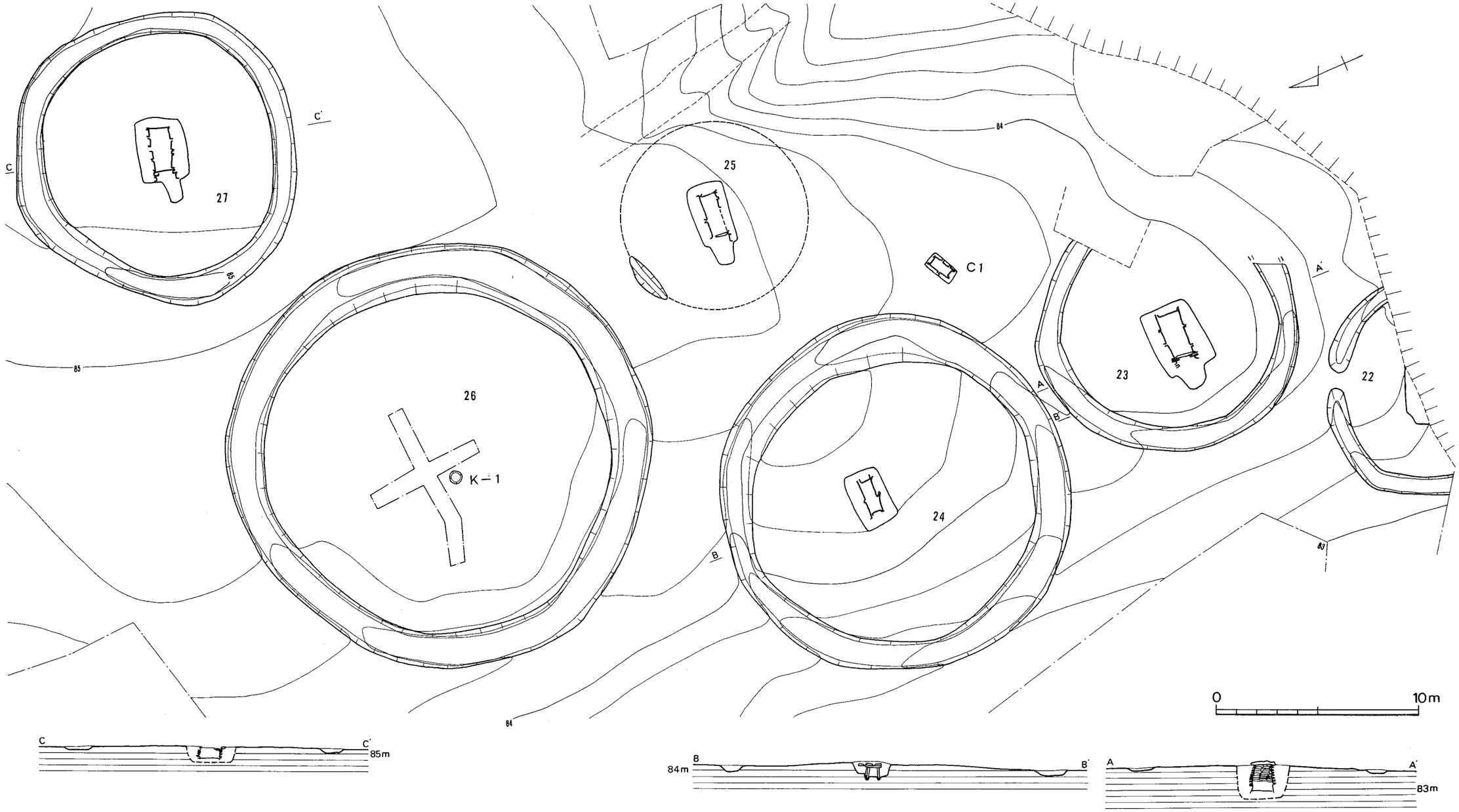


Fig. 68 22～27号墳地形測量図(1/200)

5．22～27号墳

a．22号墳

i．**規模**（Fig. 68）

主体部を含む南半分を削平されたが、残存する周溝により径11mの円墳とわかる。34号墳側には幅 0.8mのブリッジを有する。

ii．**主体部**

主体部は残っている一部の掘り方の様相より、21・23号墳と同じく西に開口する竪穴系横口式石室であったと思われる。

iii．**出土遺物**（PL. 54、Fig. 69・70）

石室入口側の周溝内から須恵器・土師器・鉄鏃が出土した。土師器は細片で図示に耐えない。

須恵器（Fig. 69）

聰（1）　ほぼ完形で、口径 8.0cm、器高 9.2cm、胴部最大径 9.4cmを測る。孔より上は内外とも横なで、孔以下は外面が左回りのヘラ削りで内面がなでを施す。頸部の波状文と胴部の刺突文はあまり繊細ではない。小砂粒を含み焼成良好。暗灰色を呈する。

甕（2・3）　胴部破片で、同一個体であろう。両方とも外面は4本／cmの平行タタキ、内面は同心円の上をなでて消す。胎土中に砂粒多く、黒灰色を呈する。

鉄器（Fig. 70）

鏃　主体部が盗掘された際に周溝内に入りこんだものと思われる。片刃式である。

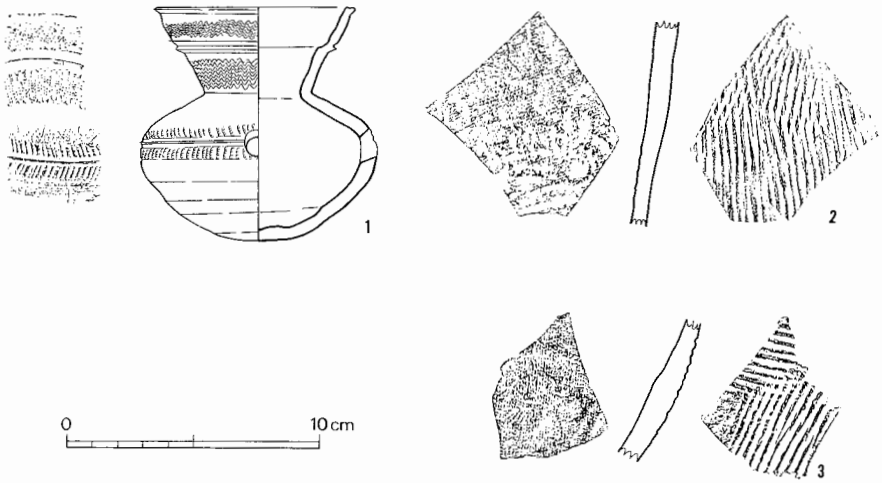


Fig. 69　22号墳出土土器実測図（1/3）

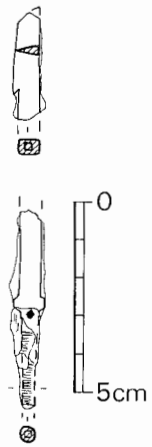


Fig. 70　22号墳出土鉄器実測図（1/2）

b．23号墳

i．**規模**（PL. 8、Fig. 68）

周溝の東側⅓程を水漕および建物跡により削平されているが、径約13mを測る。周溝の中心点は石室中心とは一致せず、石室奥壁が該当する。

ii．**主体部**（PL. 9、Fig. 71・80）

西に開口する竪穴系横口式石室で、掘り方は長方形プランをなし、それに幅 1.3m、長さ0.85m程の墓道がつく。墓道平面プランはやや丸みを持っており、21号墳ほど角張っていない。掘り方の深さは1.2～1.3mで、天井石のみが地上に出る形となる。

墓道は略２段の階段状部から傾斜して玄門に至るが、その角度は約33°を測る。閉塞は扁平石５枚に河原石を添える格好となるが、一度はずされたような形跡がある。前庭部側壁は河原石を、右側が１列で３段、左側が２列５段を積みあげる。玄門は両袖石間が 0.5m、框石と楣石の間が１mある。框石と玄室とは20cmの段差をみる。

玄室は両側壁と奥壁に扁平石を横位置に、20～40cmの高さにおいて腰石とし、その上を平積みする。石積みの手法は21号墳と変わりなく、石の上面レベルが揃うようにとの配慮をみる。突起はない。縦断面は筥形をなし、21号墳の如き凸形にはならない。

iii．**出土遺物**（巻頭カラー４、PL. 52・53、Fig. 72～79）

石室内の遺物の出土状態は荒らされた如くであり、プライマリーな位置は留めていないと思われた。珠文鏡は鏡背を上にして出土した。周溝からは土器が主に入口方向から出土した。

１．土器（PL. 52、Fig. 72～75）

須恵器

坏蓋・坏身・坩・樽形瓶・高坏・甕（中形・大形）が出土している。

坏蓋（１～４）　１は撮みを持ち基部径13.4cm、総高 5.1cmを測る。稜が丸みを持つのと、口縁が外反する形状は特徴的である。天井部には櫛歯様の原体にて２段に、撮みに近い方が１cm、他が 1.5cmの間隔で刺突文が入る。天井部はヘラ削りらしいが風化のため定かでない。その他はなで。胎土良、焼成ややあまい。灰白色をなす。２は略完形で、基部径12.4cm、高さ 4 4cm。全体に筥形に近い形状を示す。口縁は直立し長い。稜も口縁内傾の段も極めてシャープである。口縁内外は横なで、天井部は右回りのヘラ削り。胎土精良にして焼成堅緻。灰色。３は口縁が外開きとなり、全体に丸みを持つ点を除くと調整・焼成・色調等は２と同様である。基部径13.2cm、器高 4.6cm。４は２に近い形状で、諸特徴も同様である。ただ、天井部のヘラ削りは左回りとなる。

坏身（５～９）　５は基部径10.8cm、器高 4.8cmで、底体部は左回りのヘラ削り、口縁内外は横なでを施す。口唇部はごく僅かにくぼみ、その内側は極めてシャープな稜線を見せる。胎

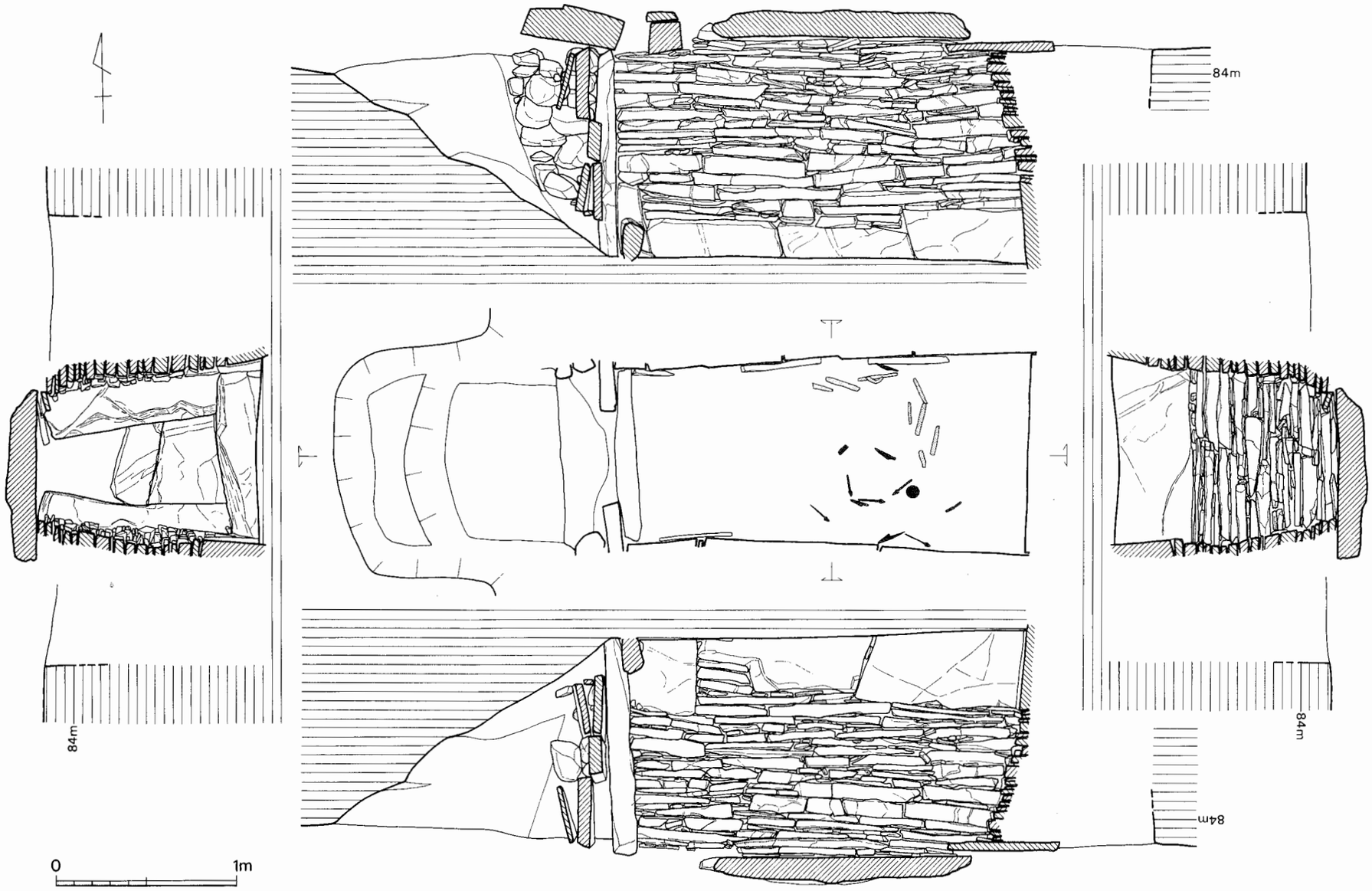


Fig. 71　23号墳石室実測図（1/30）

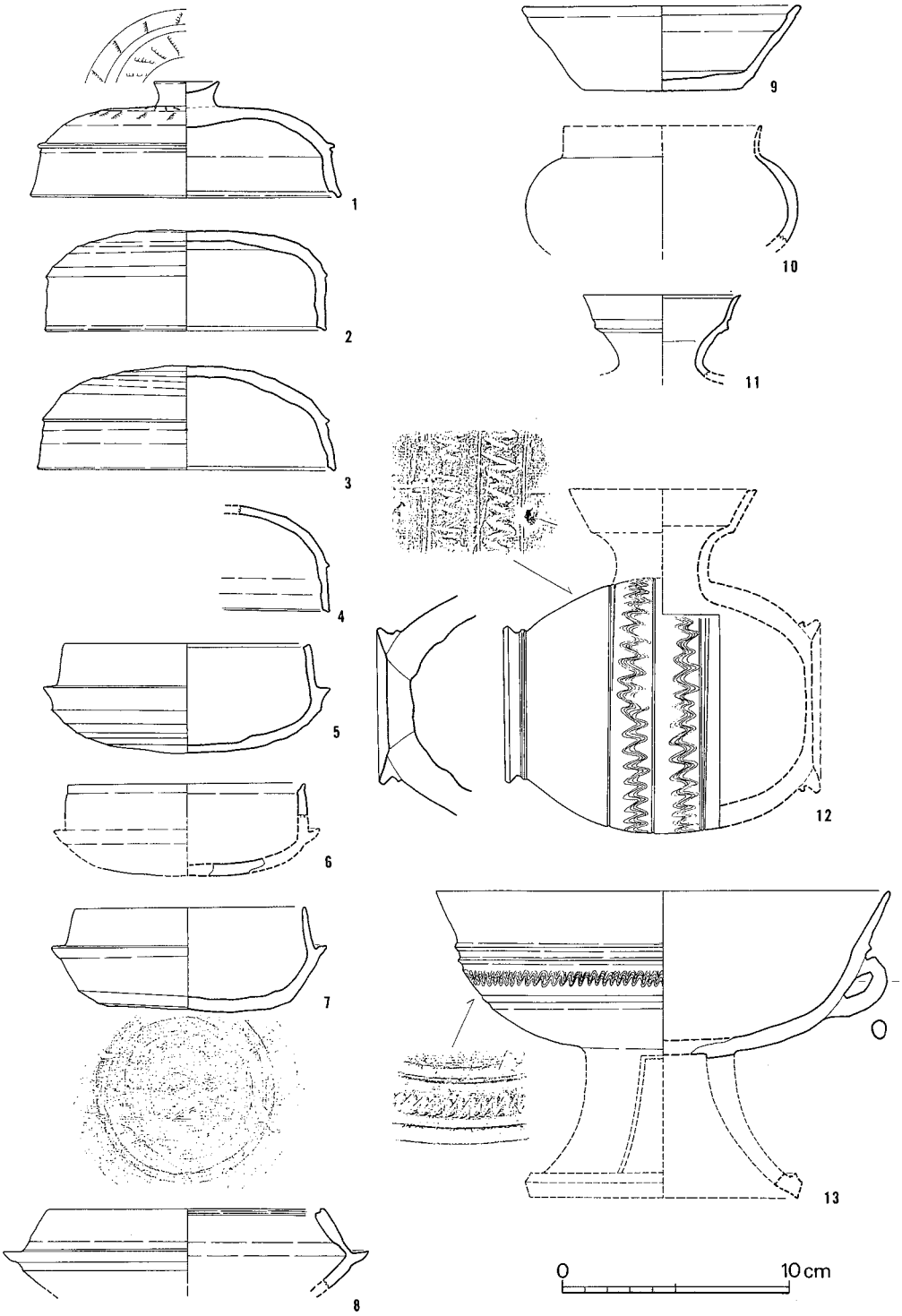


Fig. 72　23号墳出土土器実測図①（1/3）

土精良で焼成はややあまい感じを受ける。灰色を呈す。3の坏蓋とセットになるようだ。6は復原実測で、基部径10.3cm、器高4cmを測る。7は基部径10.2cm、器高 4.6cmで、口唇部は面をとらずに尖り気味となる。底体部のヘラ削り部分は多くない。受部に自然釉が少しかかるが、ここに蓋をして焼成した痕跡をみる。砂粒多いが焼成堅緻。底部にヘラ記号を持つ。8も復原実測で、立上りの形状に特徴をみる。基部径12.7cmに復される。9は埦の形状であるが、後代の混入らしい。器表の磨滅著しく調整は全くわからない。胎土は良好だが焼成ややあまい。灰白色を呈す。

坩（10）　胴部最大径は12cm程になる。胎土良で焼成良好。灰黄色をなす。

聰（11・12）　11は口頸部のみであり、あるいは壺かも知れない。口径 6.9cm。胎土極めて精良。12は樽形聰で、口頸部と胴部の半分は欠失する。残存部分に孔をみないが聰としてよかろう。大半が復原図であるが、特に断面図は図の如くなるかどうか定かでない。残存部分の断面は図中左に示すものである。胴部はなでによる調整で、沈線で画された中に粗い波状文が2条巡る。ぼってりした印象が強い。焼成やや軟質で灰黒色を呈す。

高坏（13）　坏部しかみないが、脚部は他の類似例を参考に復原して示した。口径19.9cm、坏部深さ約 6.6cmを測る整美な土器である。脚部には透しが4ヶ所に入る。坏部は脚との接合点から丸みをもって広がり、大きく内湾して伸びたあと僅かに外反して口縁に至る。耳が1個

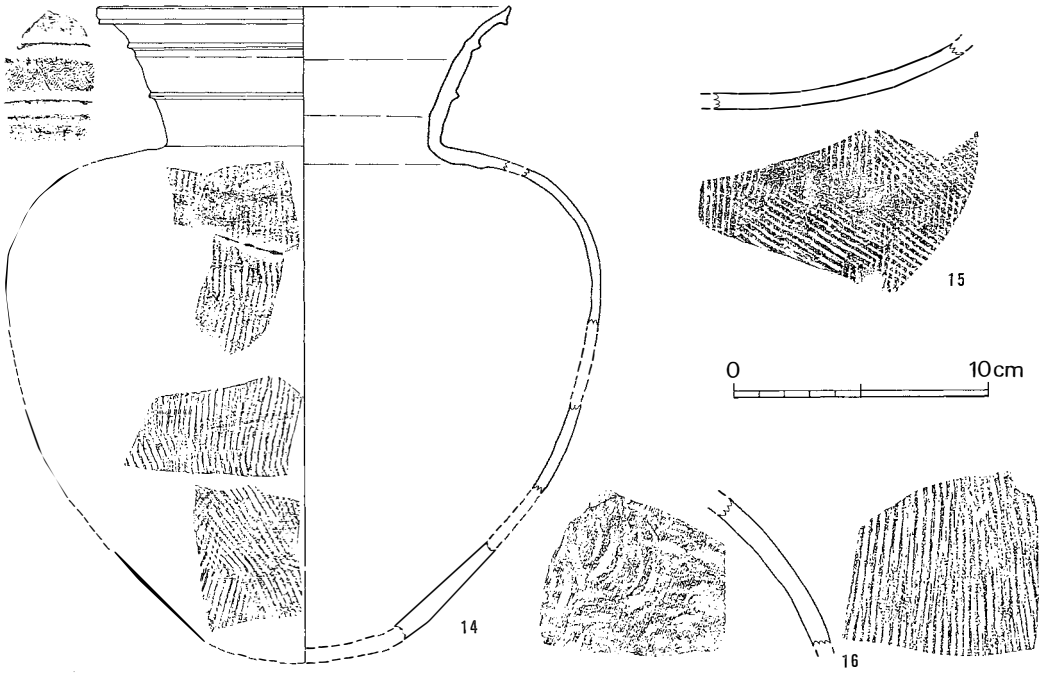


Fig. 73　23号墳出土土器実測図②（1/3）

あり、同じ箇所には繊細な波状文が巡る。およそなでによる調整がほとんどで、底部付近はヘラ削りのあとなでる。内面は自然釉がかかり、灰緑色を呈する。胎土精良で焼成堅緻。

甕（14～19）　14は肩部以下は復原図である。口径16cm、復原器高は26cm程であろう。肩部の張りが著しい。肩部～胴部の外面は平行タタキ、内面はなでを施す。口頸部は２条の突帯の間に細やかな波状文が入る。口縁は跳ね上がるような形状を示すが、その下には三角突帯が張り出す。15は底部付近の破片で、外面は平行タタキ、内面は同心円の上をなでる。16は肩部の破片。内面には同心円が残る。17～19は大形の甕である。17は口径23cm、胴部最大径50cmを測る。外面は平行タタキの上をなで、内面は同心円を完全になで消す。口頸部は横なで。口縁下すぐに三角突帯を持つ。部分的に自然釉の付着をみる。胎土良、焼成堅緻。18は口径23cm、胴最大径45.6cmを測り、肩部の張りが著しい。胴部外面は平行タタキの上にある間隔をおいてカキ目を巡らす。内面には同心円とは異なる圧痕をみる。口縁外側は幅広の面をとり、その下に三角突帯を持つ。突帯下はカキ目が巡る。その他内外は横なで。胎土良にして焼成堅緻。19は底部付近らしい。外面は擦過に近い削りのあとなで。内面は同心円の上をなで。粘土の接合痕が知られ、粘土帯の幅６～７cmである。

土師器（20～26）

埦（20～24）　全部で８個体分ほどあるが図示しうるのは５個である。全てに通じて、胎土は微砂粒を若干含み、焼成良好。本来は丹塗磨研土器であり、やや明るい茶色をなす。内外ともなでおよび磨研を施す。20・21は十字形のヘラ記が底部に入る。21～23は口縁下の外面が僅かに屈折して稜線が生ずる。口径・器高は、20が15.3と 6.4、21は15.5と 6.4、22は14.3と 6.2、23は16.5と 5.5、24は16.5と 5.3（単位cm）をそれぞれ測り、全体に深みがない。

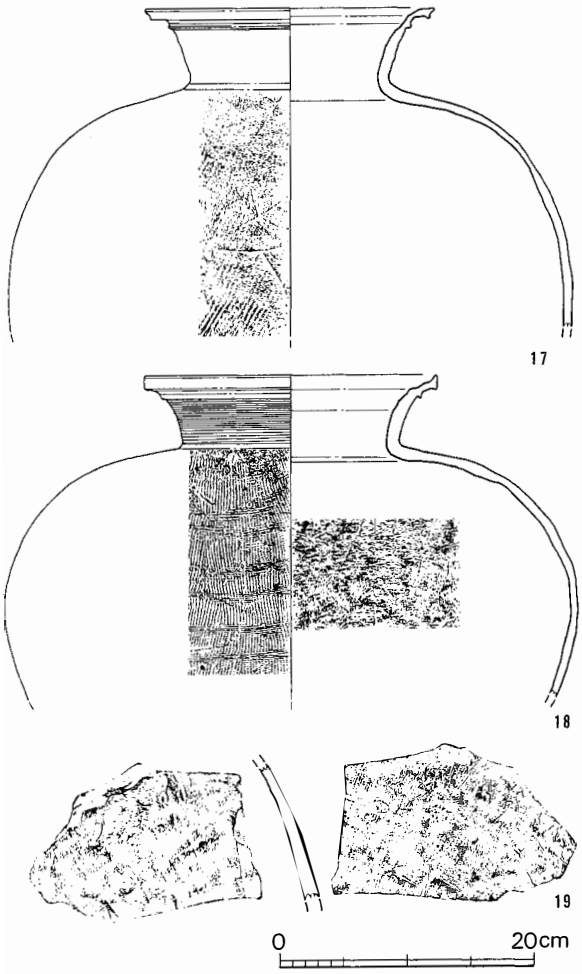


Fig. 74　23号墳出土土器実測図③（1/6）

高坏（25・26）　5個体分あり、そのうち図示可能なのは2個体しかない。25・26とも器表の磨滅著しいが、内外ともになで調整らしい。25の内面は研磨とみえる。25の口径17.8cm。

2．鏡（巻頭カラー4、PL. 53、Fig. 76）

珠文鏡である。面径 75.45mm。鏡面の反りは約 1.8mm。鏡面に布の付着をみる。鏡背は、鈕――珠文帯（12個）――波文帯――外向鋸歯文帯（49個）――外縁となる。縁はほぼ平縁としてよいが、断面はシャープな形をとる。緑錆著しいが文様はよくわかる。波文帯は一部に乱れる所を見る事ができる。鈕孔に紐の一部が残存している。

3．装身具（PL. 53、Fig. 77）

総数1027個の玉類が出土したが、そのうちの23個を図示している。計測表は省略した。

棗玉（1・2）　質の悪い碧玉製と思われる。両面から穿孔。1は長さ12.85mm、最大径9.1mm。

鉛玉（3）　おそらく鉛の玉であろう。あるいは後世の混入品であるかも知れない。径9.55mm、重さ 2.2g。

ガラス玉（4～75）　小玉が75個ある。ほとんど濃いブルーで風化著しい。4が高さ6.15mm、径 8.4mm。75は高さ2.05mm、径3.85mm。

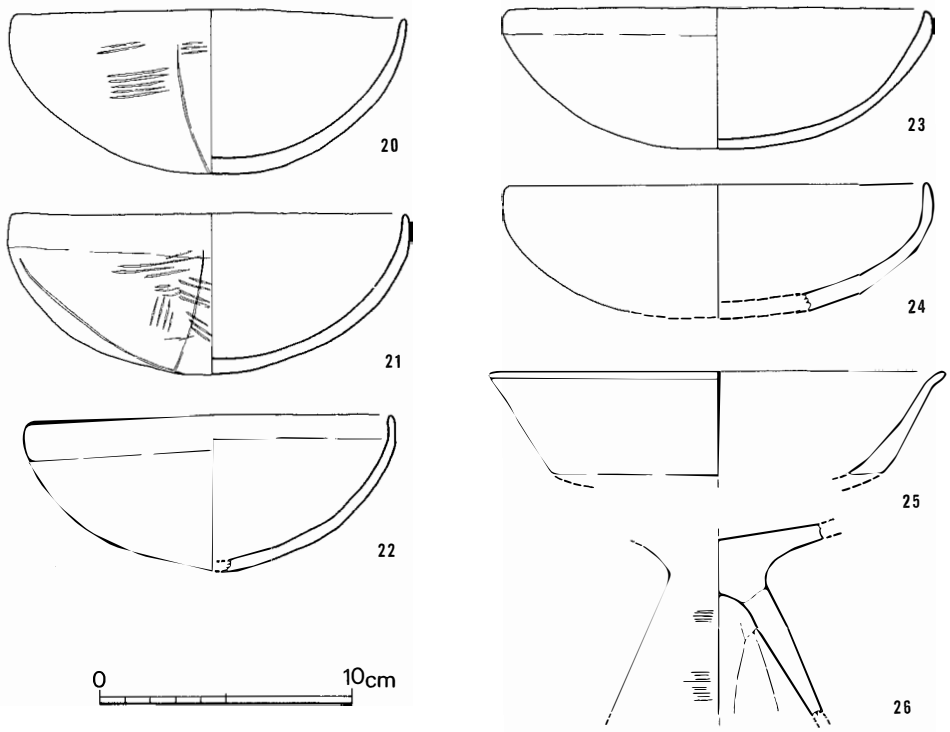


Fig. 75　23号墳出土土器実測図④（1/3）

臼玉（79～1027）　棗玉と同じ材質で、質の悪い碧玉と思われる。949個を数える。高さ１～４㎜、径３～５㎜、孔径１.5㎜前後のもので、黒灰色を呈する。

４．鉄器（PL. 53、Fig. 78・79）

鏃・剣・刀子・馬具が出土した。

鏃（１～10）　３つの型式がある。１は平根柳葉式で逆刺が深い。透しを持つようである。全長14.5㎝。２～７は両丸造三角形式である。ほぼ完形に近い２の現存長が18㎝。箆被に竹か木らしいものの遺存をみる。８は片刃式で現存長15.7㎝。

剣（11・13）　11は鹿角装で、鹿角が関の所まできていないのは、ずれたのか、あいた部分に別の装具をみるのか定かでない。剣身には木質が銹着している。関

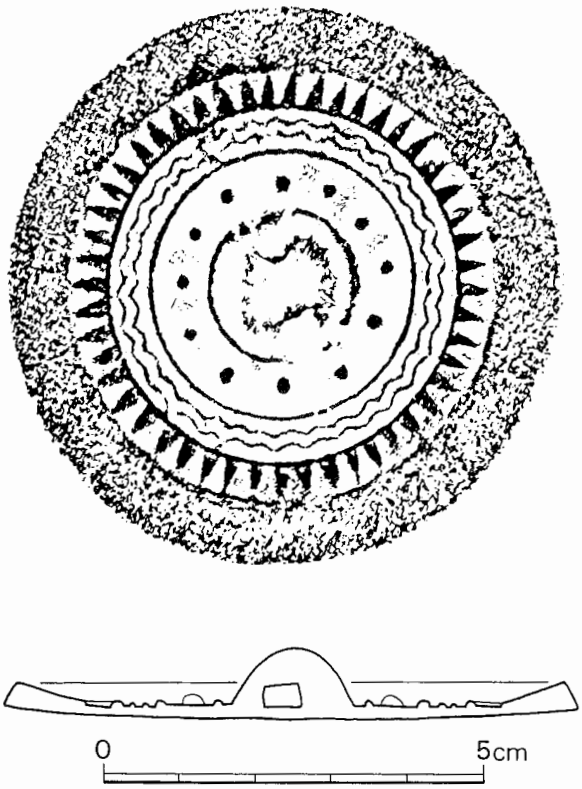


Fig. 76　23号墳出土珠文鏡拓影（1/1）

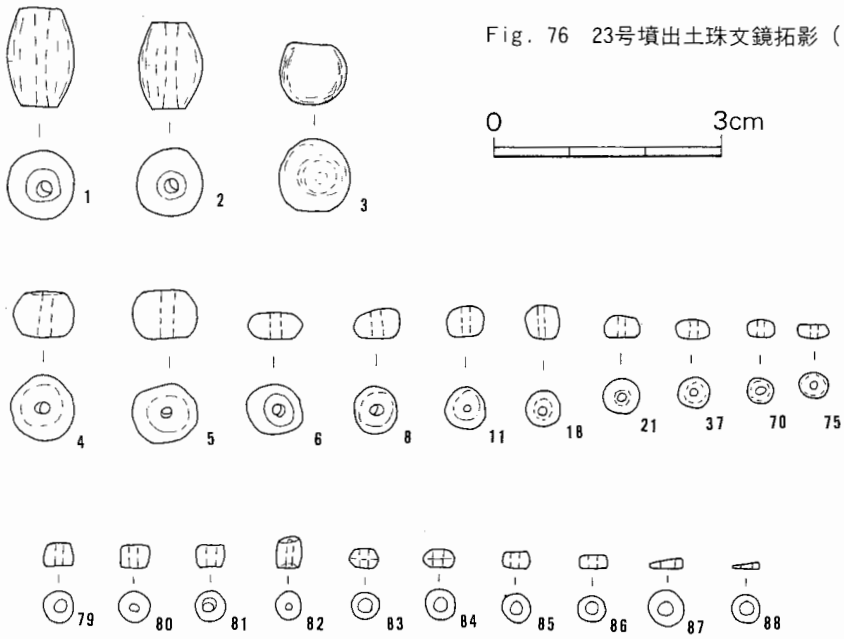


Fig. 77　23号墳出土玉類実測図（1/1）

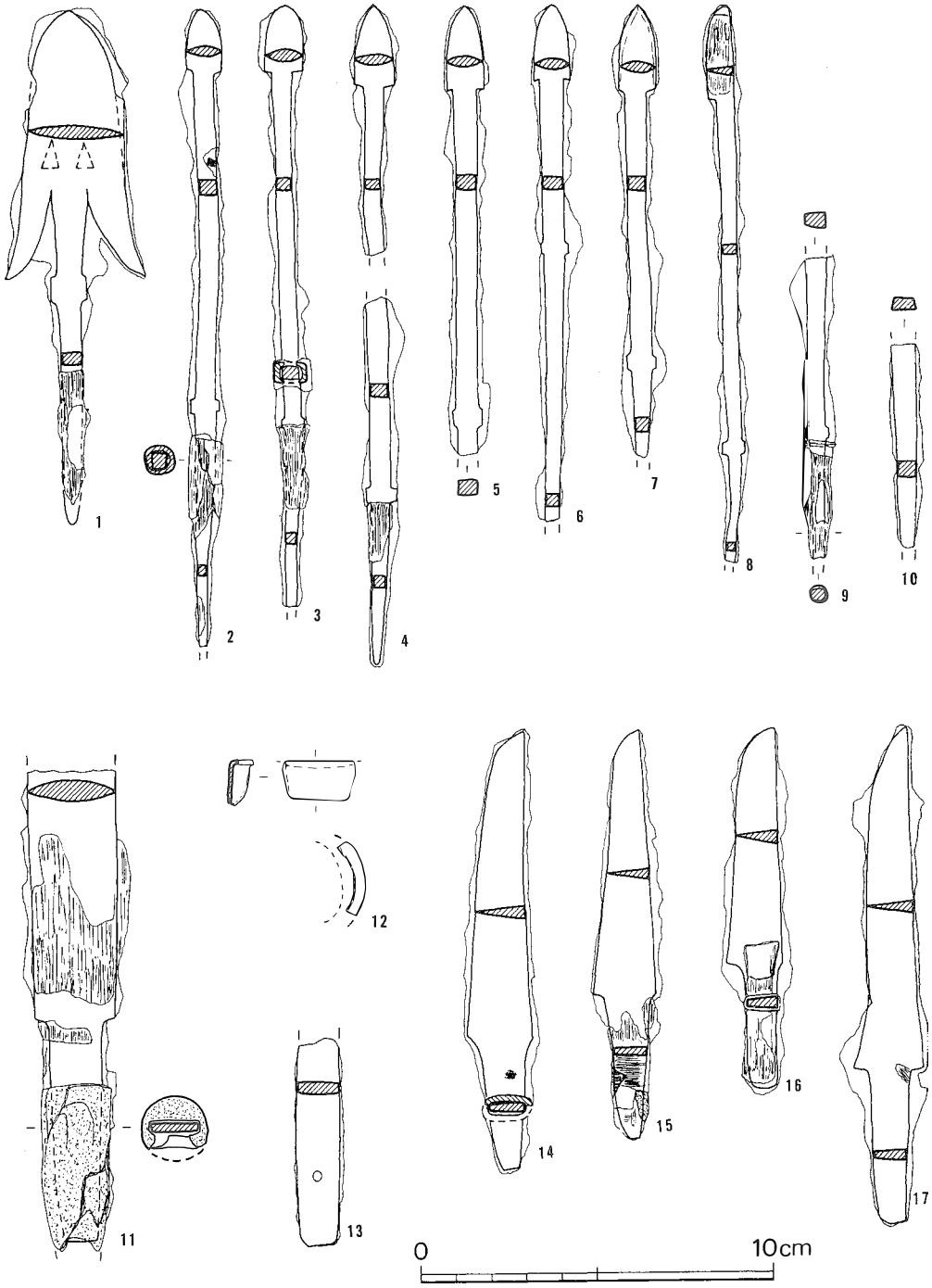


Fig. 78　23号墳出土鉄器実測図①（1/2）

幅 2.3cm、茎長 6.2cm。13は茎のみで目釘孔1個をみる。

鞘口金具（12）　小破片で断定はできないが、鞘尻・柄口とするよりは、鞘口であろう。

弓付属金具（21・22）　8号墳にみられた金具とは形態上に若干の差異があるものの、ここでは弓に付属する金具としておきたい。全長3.7～3.9cmを測り、両頭間の芯棒は断面円形を呈する。

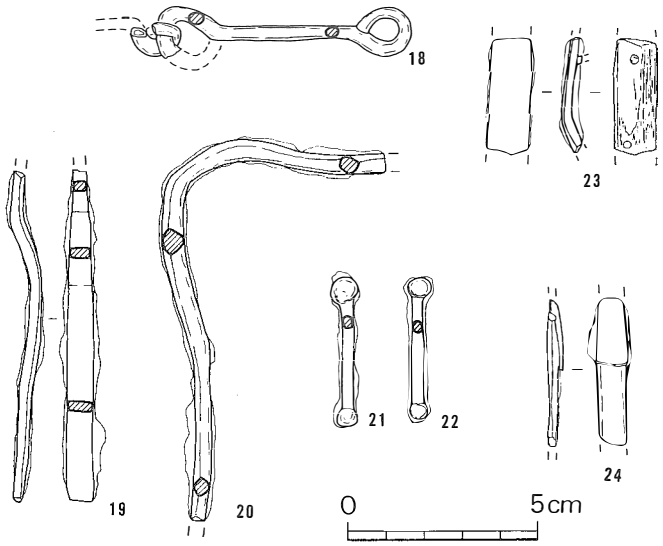


Fig. 79　23号墳出土鉄器実測図②（1/2）

刀子（14～17）　4本あって、17のみは西側周溝内からの出土である。全て完形で、茎には木質及び鹿角等々の装具の痕跡をみる。全長は14が12.4cm、15は11.55cm、16は10.1cm、17が14cmを測る。

馬具（18～20・23・24）　確実に馬具と断定しきれぬものもあるが、ここでは別の可能性も呈示しつつ述べる。

18は少し細身であるが銜としてよかろう。二連どまりと思われる。径3～4mmの鉄棒の両端を輪状に折り曲げている。これにねじり等はみられない。19は鐙の縁金具と思われるが、鋲がみられないので、あるいは鑷子の可能性もある。20は鉸具にしては大きすぎるが、別の用途を想定しえない。23・24は鞍の縁金具であろう。23には鋲がみられ、木質も銹着している。

Fig. 80　23号墳前庭部側壁

c．24号墳

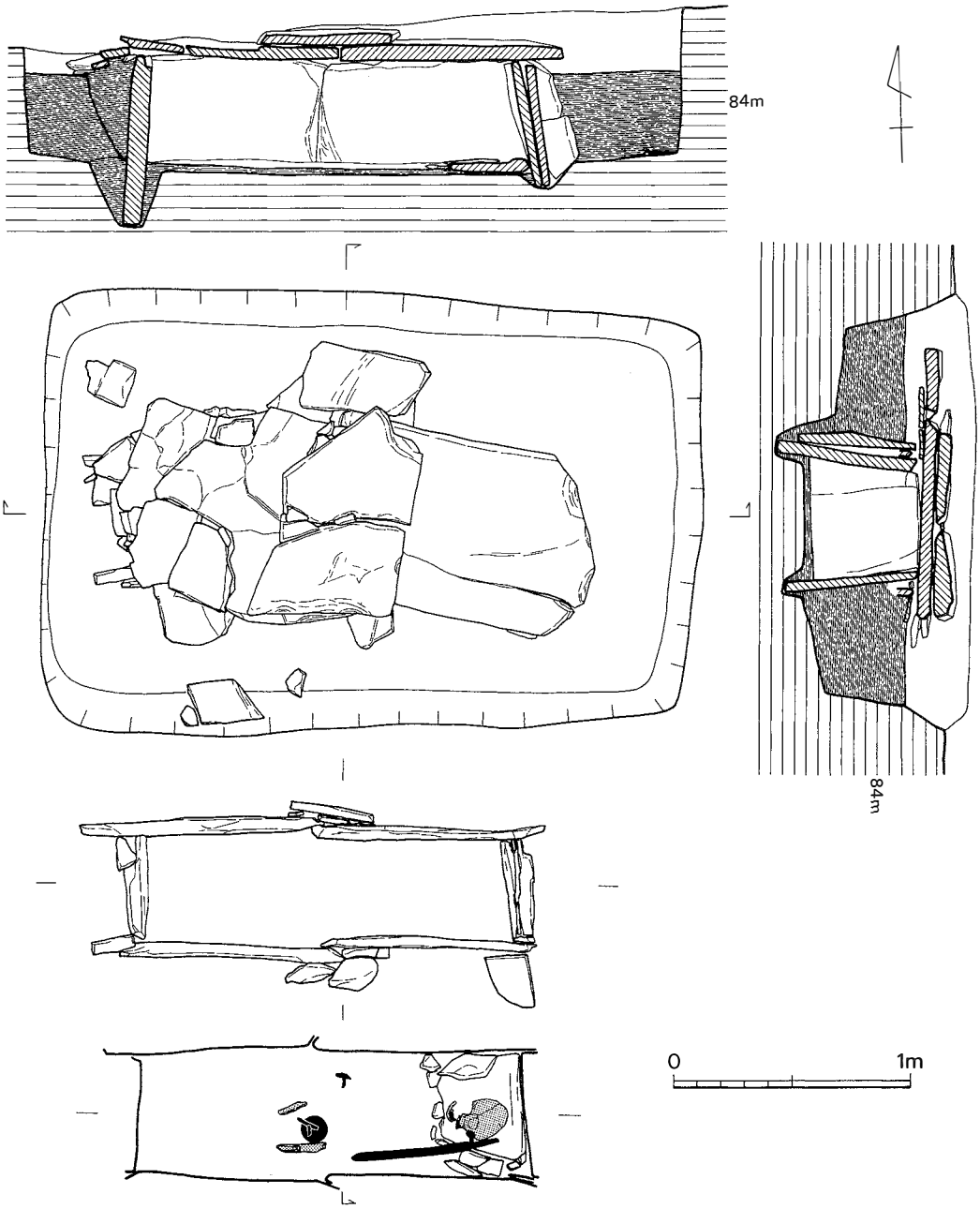


Fig. 81　24号墳主体部実測図（1/30）

ⅰ．**規模**（PL. 10、Fig. 68）

径17.7mの円墳である。主体部は周溝内の中心より北東にずれており、もう1基を造営しても平面的には何らおかしくないようにみえるが、1基のみしか造られていない。

ⅱ．**主体部**（PL. 10・11、Fig. 81）

箱式石棺である。掘り方は2.77×1.84mの長方形プランで黒ボク層から70cm程切りこんでいる。石棺蓋石は基本的に大きなもの2枚を置くが、西側（足位）の足りない部分には小さなもの数枚をおく。また中央部の蓋石接ぎ目には更に石を蓋せる。控え積みではないが、余った石材若干を周辺に置いている。

石棺は側壁2枚、小口1枚を箱形に組合わせたもので、側壁が小口壁をはさむ形式となる。西側小口部外側は側壁がはみ出た分だけ空間をもつような形になる。側壁、小口壁ともに内傾し、床面は人が臥すに十分の広さをもつ。頭位には大きな扁平石を枕としておいている。

ⅲ．**出土遺物**（PL. 54・55、Fig.82～87）

頭を東におく伸展葬人骨1体と、頭葬品として鉄鏃・鹿角装鉄剣1口・鉄釧・鉄刀子・四獣鏡・玉類が出土した。滑石玉類は左側頭部付近から多く出土している。鏡は背面を上にして、その上に鉄鏃・鉄刀子がのっていた。

周溝内からは、東側より陶質土器が、北側より土師器が出土した。なお、円筒埴輪片5点も出土している。

1．土器(PL.54､Fig.82～84)

陶質土器（Fig. 82）

口縁～胴部の破片である。復原して口径27.8cm、頸部径22.6cm、胴部最大径52.2cmを測り、器高は65cm前後になろう。かなり張った肩にほぼまっすぐにのびあがる頸部がつき、口縁は如意形に開く。口縁下 1.5cmぐらいに三角突帯がつく。胎土精良で焼成良好。口頸部内外が黒灰色で、他は黄灰色を呈す。胴部外面は横および、右斜め平行タタキの上をなでる。部分的に左斜

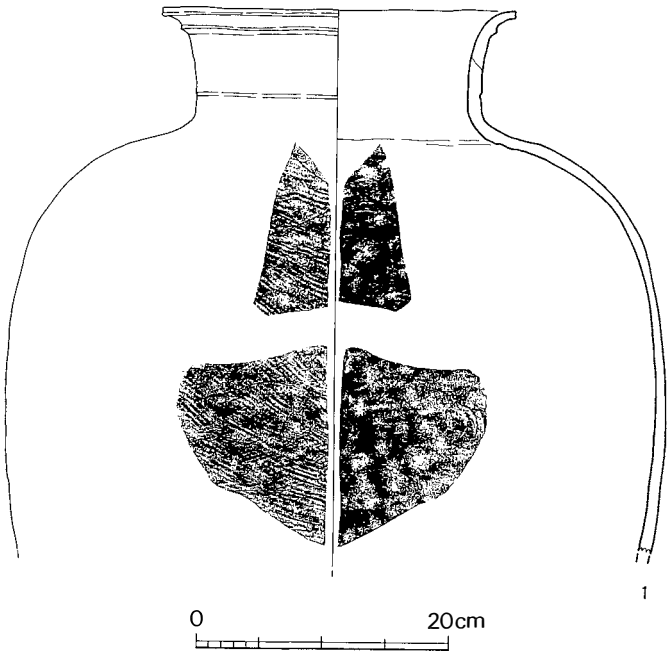


Fig. 82　24号墳出土土器実測図①（1/6）

めの平行タタキもある。内面は同心円をなでて消す。口頸部は内外とも横なで。

須恵器(2～4)

後代の混入品かとも思われる。3点とも同一個体の破片とみてよい。外面は格子目タタキ、内面は同心円と、一部に変形格子目が入る。表面の格子の1辺は約 0.5cm。胎土はあまり良くなく、焼成やや軟質。黒灰色を呈す。

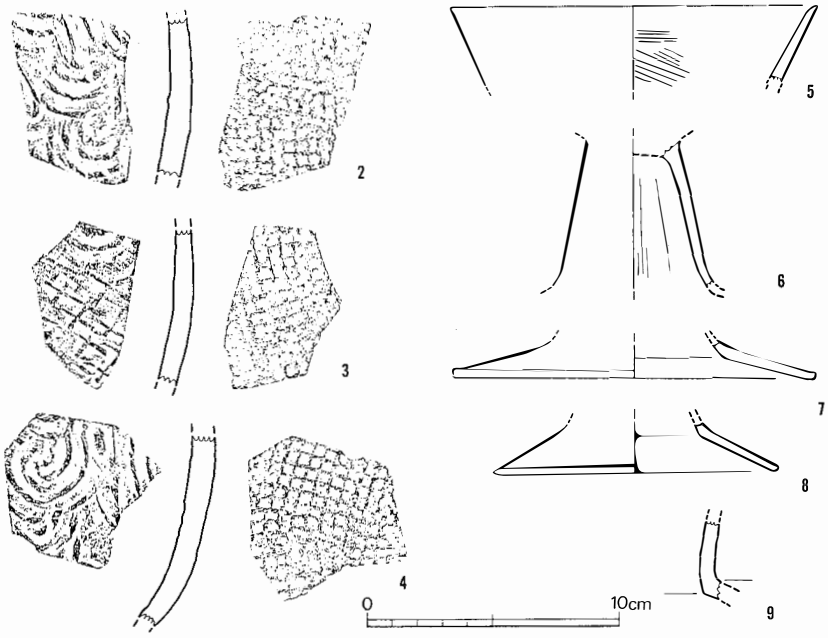


Fig. 83　24号墳出土土器実測図②（1/3）

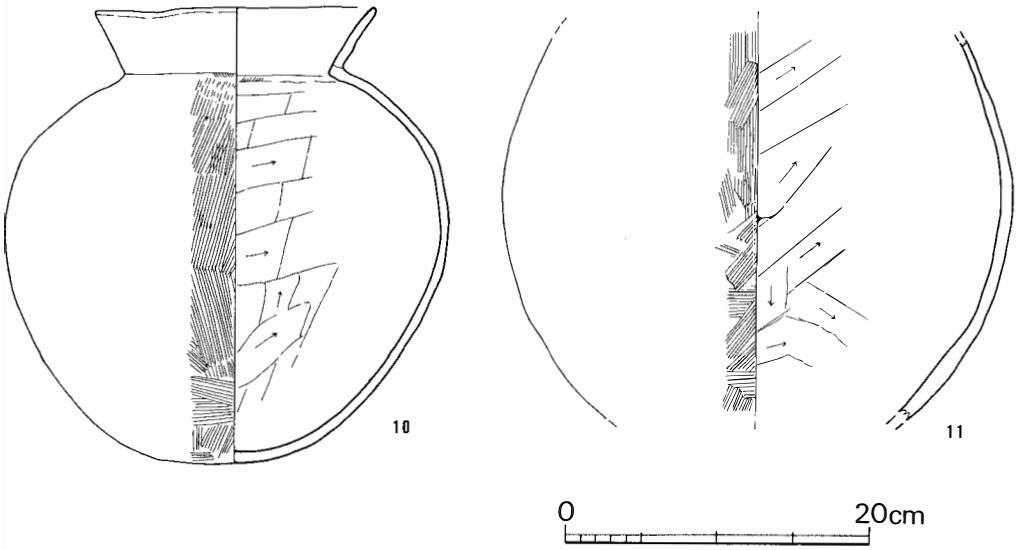


Fig. 84　24号墳出土土器実測図③（1/5）

土師器（５～11）

高坏（５～８）　完形になるものはなく、全て小破片である。５は内面が刷毛目の上をなでている。７・８の脚部は内側に明瞭な屈折をもつ。なべて砂粒多く含み、焼成はふつう、赤褐色を呈す。

甕（９～11）　10が完形に復原できた。球形胴に外開きの口縁を付すが、胴部最大径はやや上位にある。口縁は横なでによる微妙な変化を有す。胴部外面は刷毛目（約５本／cm）、内面は頸の一部に刷毛目をみるのみで胴部はヘラ削り、胎土は粗さがあり、焼成ふつう。やや黒ずんだ黄褐色をなす。11についても10とほぼ同じ。

２．鏡

面径103.50mmの四獣鏡である。鏡面の反りは約 3.5mm。鈕――四乳・四獣――二連の外向鋸歯文帯――外縁となる。外縁は丸みをもっており、厚さ 2.4mm。鈕の孔には紐が残り、また紐ズレの痕跡が明瞭で、孔の近くにはいま鏡面へ通ずる穴があいている。獣形は全く本来の形態からトランスフォームされ、勾玉形のものを２個連接した如くで、先の方から細い首がのびて、乳間に獣面がくる。しかし、その４組

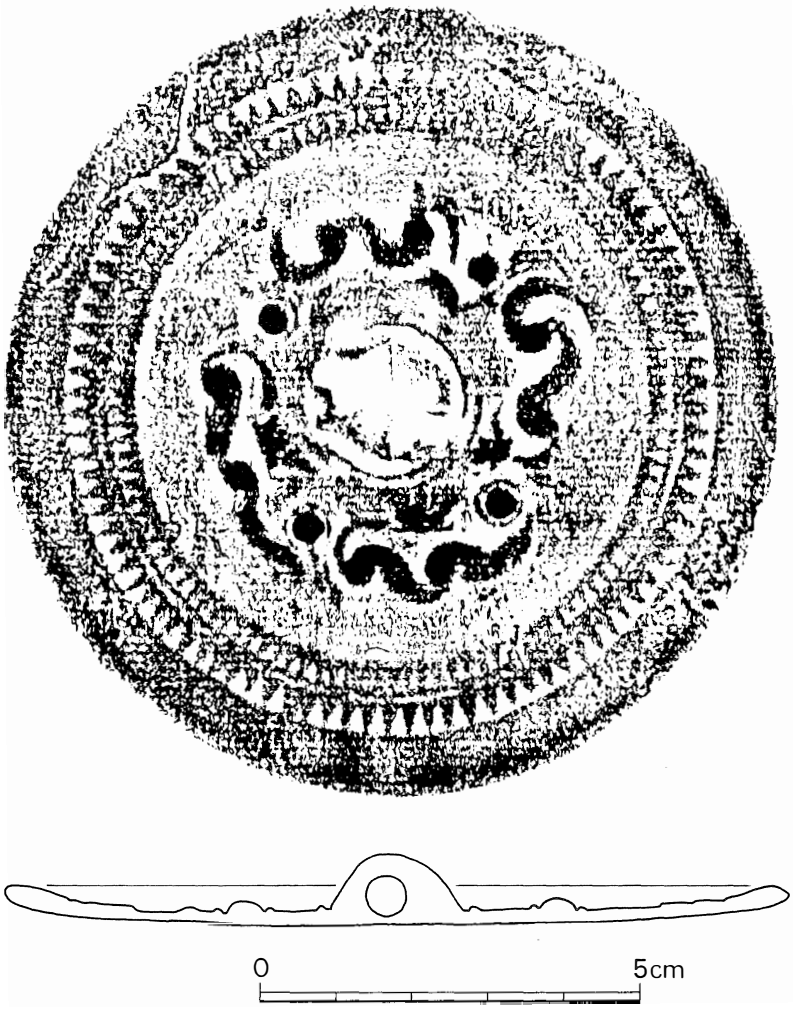


Fig. 85　24号墳出土四獣鏡拓影（1/1）

の獣面もそれぞれ対称する位置にはない。四乳は圏座をもつが四乳を結ぶと正方形より若干いびつになる。外縁に布の付着をみる。銅の地肌はにぶい赤銅色となり、緑錆著しいが、銅質はわりに良さそうである。全体に手ずれの痕跡をつよく認める。

3．装身具（PL. 55、Fig.86 ）

滑石製臼玉 29 4個を検出した。そのうち10個を図示する。高さ１～３㎜、径２～４㎜で孔径１～２㎜の計測値中に納まるものであるが、形態的には孔の形状も加味すると６種程に分けられる。色調は透明に近いものから黒灰色のものまである。

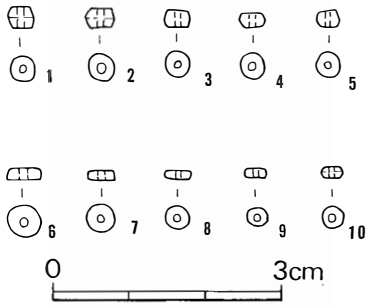


Fig. 86　24号墳出土玉類実測図 (1/1)

4．鉄器（PL. 55、Fig. 87）

鏃（１）　茎のみで、鉄棒に木の皮をまき、それを竹筒にさしこんでいるらしい。

刀子（２）　身の基部に刃がないので鏃のようでもあるが、いまは刀子として扱う。身の長さ 4.2cm。身の鋒付近に布の銹着をみる。

釧（３）　装身具として扱うべきであるが、この項で述べる。厚さ２㎜、幅７～９ ㎜の鉄板が径6.5～7.1cmの環になるが、つなぎ目が見当らないのであるいはこの釧自体は鋳造かもしれない。一部に布が銹着す。この親環に径 1.5cm前後の小環がとりつけられている。

鹿角装剣（４）　直弧文の入る鹿角製の刀装具をつけた剣である。全長60.6cm、身の長48.7cm、関幅3.55cm、茎幅 1.6cm。剣身に木痕をみるので、鞘入りで副葬したものと思える。

直弧文の入った鹿角装具は、いま剣にとりついたままのものは柄口の部分にあたると思われる。直弧文はごく一部しか残っておらずその構成は不明とせざるをえない。別に剣と遊離して検出された鹿角装具もその部位は定かでないが、おそらく、復原図のような着装状態になろうと思われる。但し、この復原図中の直弧文は構成原理を無視して描いている。４ｄの部品についてはどこに用いられたか不明。

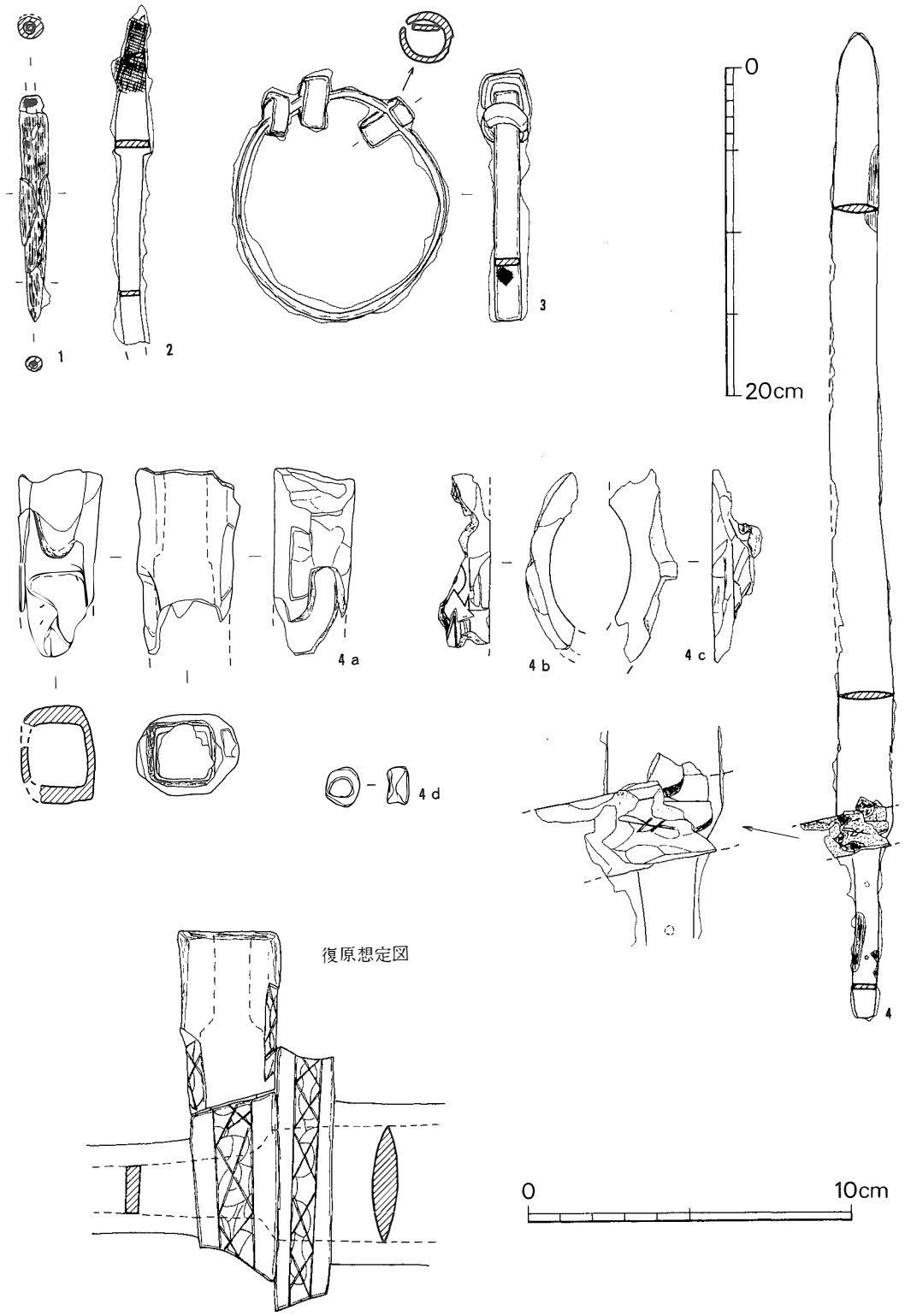


Fig. 87　24号墳出土鉄器・鹿角製刀装具実測図（1/2, 1/4④）

d．25号墳

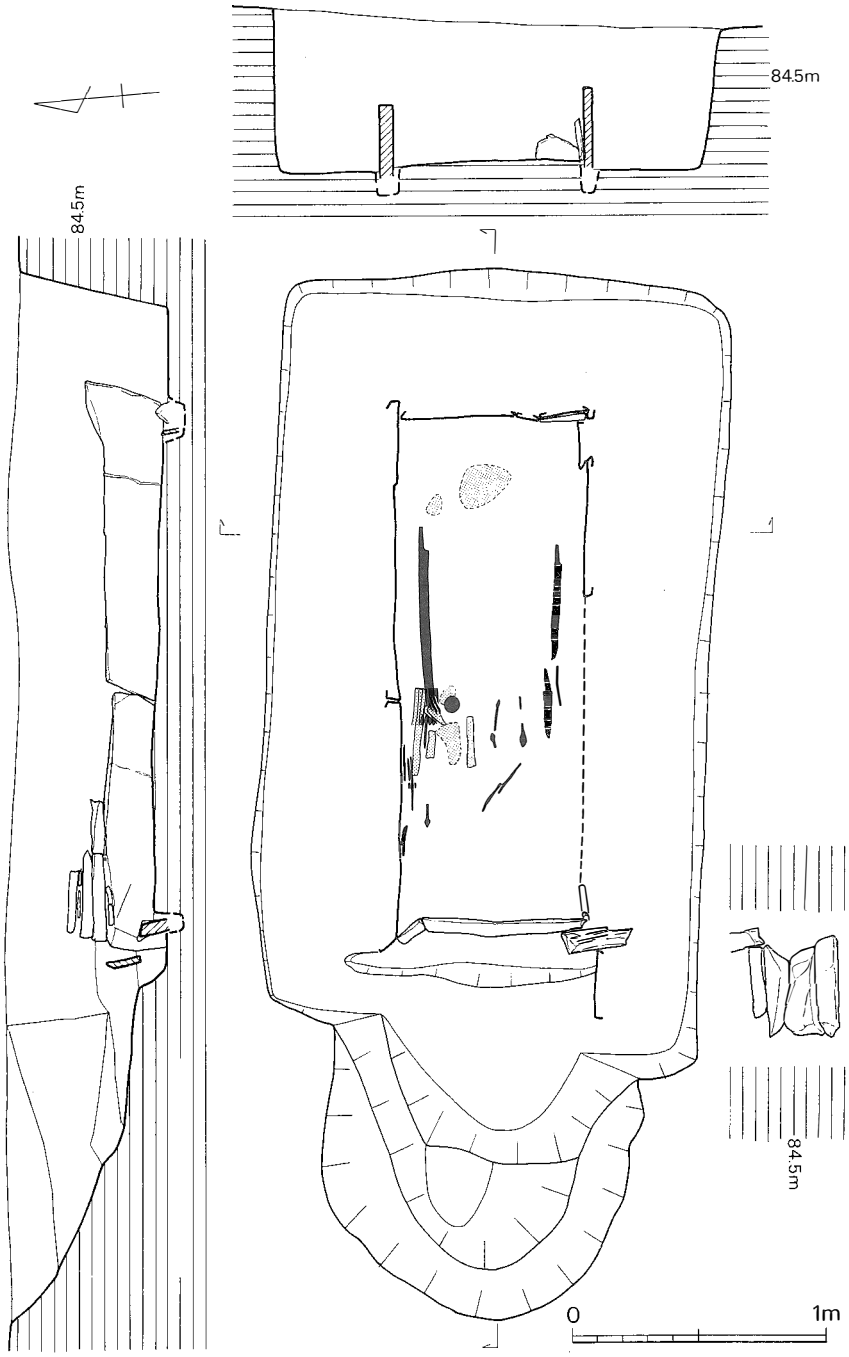


Fig. 88　25号墳石室実測図（1/30）

ｉ．**規模**（Fig. 68）

主体部の北側に僅かに周溝の残存をみるのみで、石室中心が周溝中心とすれば径9.5ｍの円墳となる。

ii．**主体部**（PL. 12Fig. 88・95）

西に開口する竪穴系横口式石室である。既にかなり破壊され、腰石と側壁の一部を僅かに残すのみであった。

掘り方は、きちんとした長方形で、それに幅1.2ｍ、長さ１ｍ余の円みをもったプランの墓道が附設する。墓道はゆるやかな約22°の傾斜で２段階に降りて玄門に至る。前庭部側壁は右側の一部しか残っていないが、扁平割石の平積みである。袖石は板石を縦に立てていた形跡がある。框石と玄室床面とは５cm程しか段差がない。

玄室は狭長な長方形プランをなす。右側壁は１枚しか残ってないが、左右側壁とも２枚を横長においていたものと思われる。奥壁は裏ごめ材しかみられなかったが、１枚を腰石にしていたことがわかる。腰石上は扁平石の平積みであり、左側壁に一部残存するをみるのみである。石室高がいかほどであったかわからないが周辺の削平を考えても石室の半分は掘り方より上に出て盛土中にあったものと思われる。

iii．**出土遺物**（PL. 56. Fig. 89～94）

石材が多くぬきとられている割には遺物はよく残っていた。ほぼプライマリーな遺物配置と思われる。鉄器の武器と工具、珠文鏡が出土している。奥壁側（東側）を頭位とする伸展葬で、被葬者の左側に刀・短剣・鏃、右側および直下に大刀・鏃・刀子・鏡があった。珠文鏡は鏡背を上にして出土したが、その周辺は黒ずんでおり、布袋様のものに包まれていたらしい。僅かに残存していた周溝内からは須恵器・土師器の出土をみた。

１．**土器**（Fig, 89）

須恵器(1)

壺か埦になろうと思われる口縁である。復原口径13.1cm。口縁下２cm強の所に段をもつ。内外とも横なで。胎土精良にして焼成堅緻。黒灰色～黄灰色をなす。

土師器

埦（２）　全形は不明である。内外ともヘラ研磨を施す。胎土精良で焼成良好。赤橙色をなす。

坩（３）　口縁部の小破片で全形は知りえない。器表面磨滅して調整は不明。胎土良。赤橙色をなす。

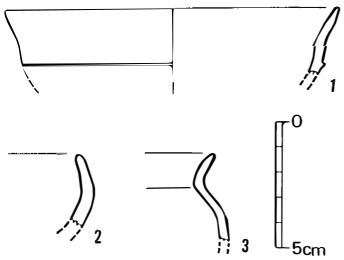


Fig. 89　25号墳出土土器実測図 (1/3)

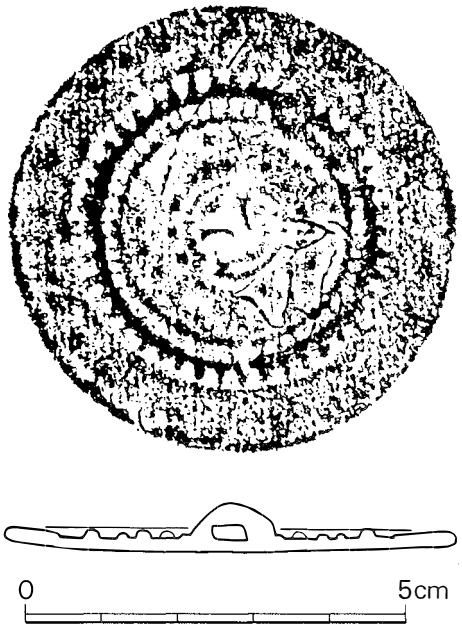


Fig. 90　25号墳出土珠文鏡拓影（1/1）

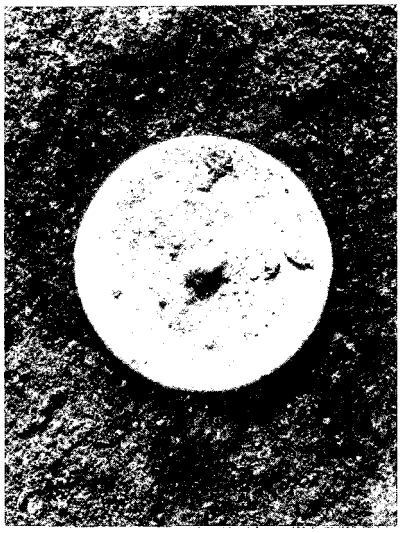


Fig. 91　25号墳珠文鏡出土状態

2．鏡（PL. 56、Fig. 90. 91）

珠文鏡である。面径59.30mm。鏡面の反りは約2mm。縁は平縁となる。背面は中央から鈕――珠文帯（2列）――斜行櫛歯文帯――外向鋸歯文帯――外縁となる。鋳上りが不良で、鏡背の文様は不鮮明である。鈕孔には紐が残り、鏡背上にも紐の一部が遺存する。何かに包まれて副葬されたもののようである。

3．鉄器（PL. 56、Fig. 92・93）

鏃・剣・大刀・刀子がある。

鏃（1～18）　3型式に分かれる。1・2は広根式の定角形で、1の全長11.8cm、3～10は片丸造で3は大きく折れ曲がる。3～8は完形になり6の全長20.7cm。11～15は片刃式で完形の12が全長16cm。

短剣（20）　全長27.3cm、関幅約3.1cm。茎の目釘孔は1個らしい。身・茎ともに木質が遺存する。

刀（21・22）　21が全長45.4cm、身長37.7cm、関幅2.7cmを測る。柄は茎を木ではさみ、その上を鉄板で覆う形態となる。22は全長76.25cm、身長66.6cm、関幅3.4cmを測り、目釘孔は2個あるらしい。2本とも木質の銹着をみる。

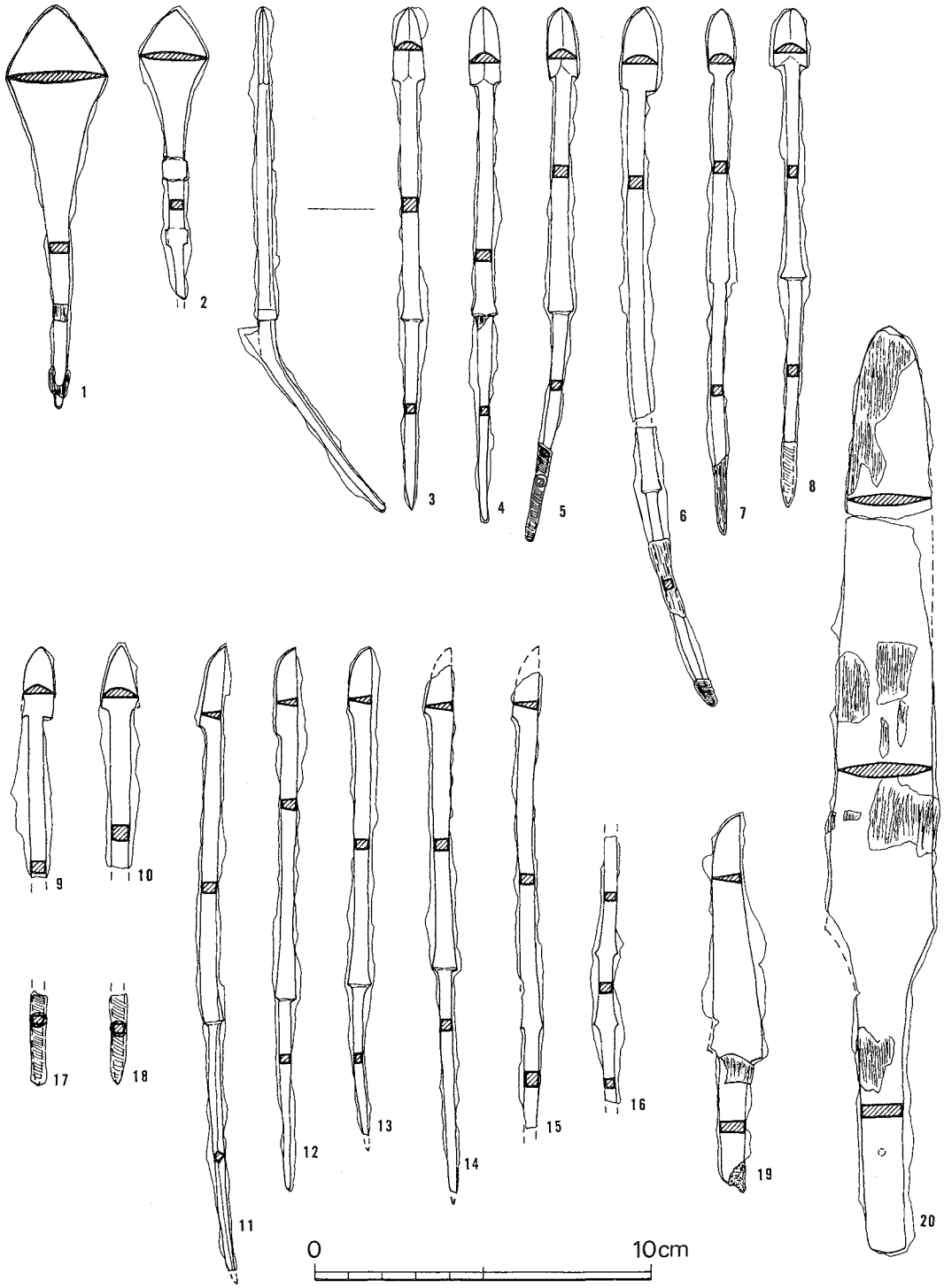


Fig. 92　25号墳出土鉄器実測図①（1/2）

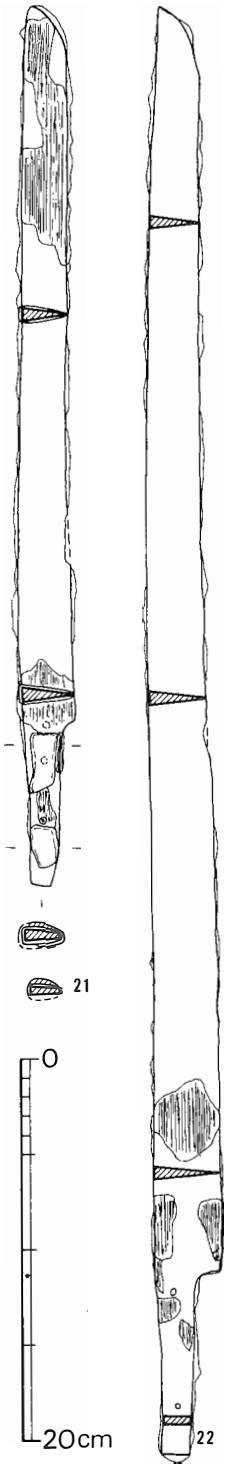


Fig. 93　25号墳出土鉄器実測図②（1/4）

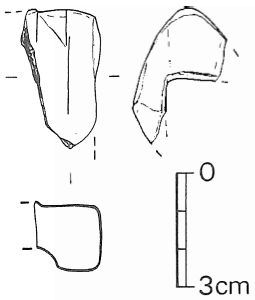


Fig. 94　25号墳出土鹿角製刀装具実測図（1/2）

刀子（19）　全長10.9cm、身長7.2cm。身は湾曲が著しい。

鹿角（Fig. 94）　剣か刀に付属する装具であるが、破片のため鞘口につくか柄口につくかは不明。直弧文を持つらしいが、風化著しいため詳細不明とせざるを得ない。

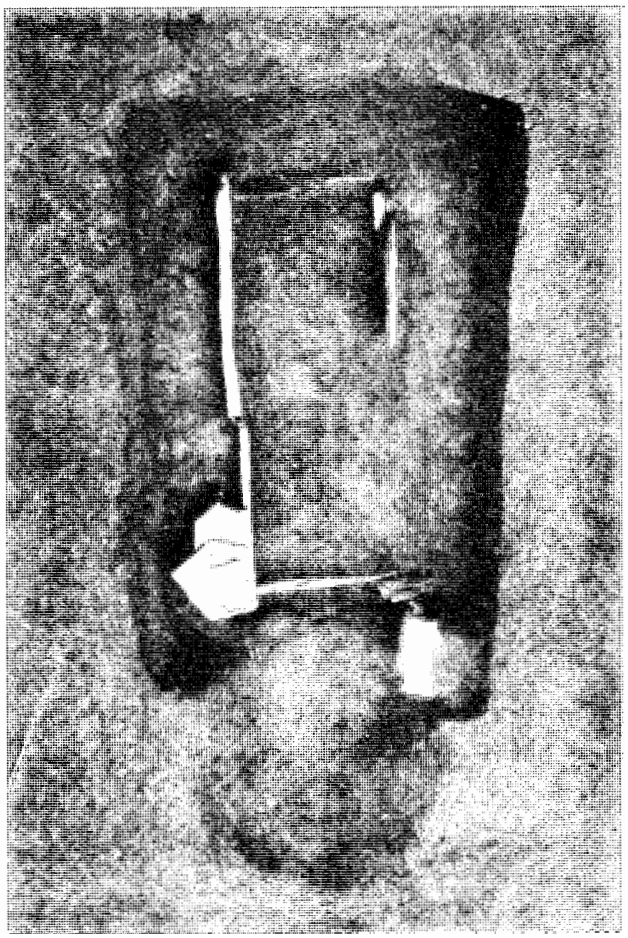


Fig. 95　25号墳石室（西から）

e．26号墳

i．規模（PL．13、Fig．68）

径約21mの円墳である。周溝幅も1.7～2.4mと広い。発掘以前にも、近世墓の墓石が散乱する中で、周辺に比して若干の高まりをみることはできた。

ii．主体部

周溝の中心点よりやや東寄りに、赤色顔料の塗られた扁平石が1枚、塗布面を上にして存したが、主体部についてはトレンチを設けてさがしたものの、掘り方も見つけることができなかった。おそらく、主体部は全て墳丘の中に構築されていたのであろう。K－1が周溝中心付近にあって破壊されていなかったことも、その想定を裏づけるものである。

iii．出土遺物（Fig．96・97）

周溝内からは須恵器の出土はなく、土師器と円筒埴輪片（11点）をみる。

土師器（Fig．96）

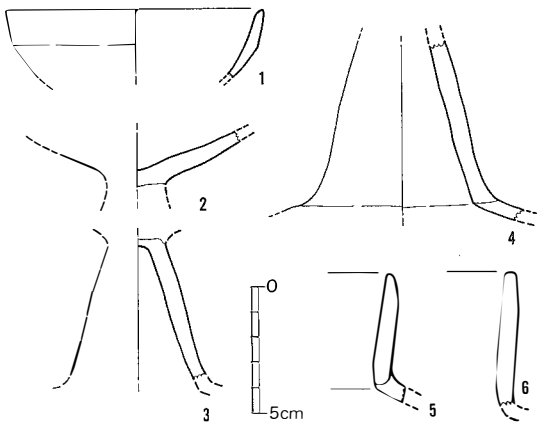
埦（1）　あるいは鉢になるかも知れない。内外とも磨滅が著しいが、ヘラ研磨しているようだ。復原口径10cm、外面口縁下には僅かな稜をみる。胎土良・焼成良好・黄褐色を呈す。

高坏（2～4）　破片のみで全形は知りえない。磨滅が著しいため調整をよく観察できないが、外面丹塗磨研らしい。脚部内面はヘラ削り、脚部はエンタシス状の膨らみをもつ。孔の有無は不明。胎土精良で焼成良好。赤褐色を呈す。

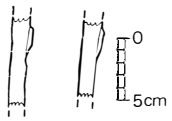
甕（5・6）　口縁部破片のみで、口径まで復原しえない。磨滅著しいが、内外ともなでを施すようだ。5は外面に一部細い刷毛目が残る。胎土は良質だが、焼成はややあまい。

埴輪（Fig．97）

11点のうち2点を図示する。径までは復しえない。断面台形の突帯を付す。調整は下明。砂粒多いが、胎土良。焼成ややあまい。赤味黄色をなす。



Fig．96　26号墳出土土器実測図（1/3）



Fig．97　26号墳出土埴輪実測図（1/6）

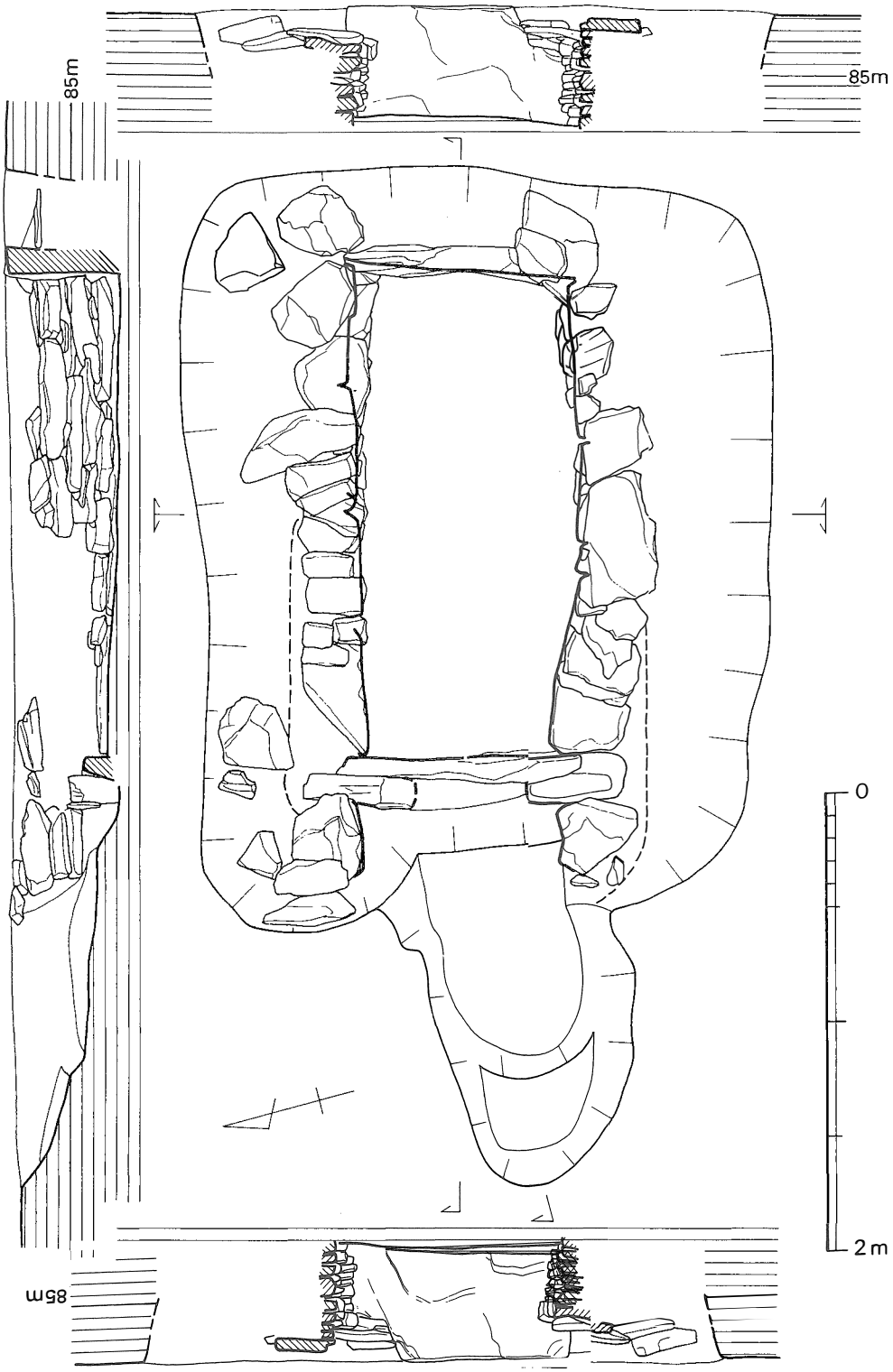


Fig. 98　27号墳石室実測図（1/30）

f．27号墳

i．規模（PL．14、Fig．68）

径14.5mを測る円墳で、主体部入口側（西）は若干突出した形状となる。周溝の中心は石室中心よりも玄門側にずれているようで、玄門から石室長の1/4付近にあるらしい。

ii．主体部（PL．14、Fig．98）

西に開口する竪穴系横口式石室である。

掘り方は長方形プランで、羽子板状となる。

墓道は長さ1.2m、幅0.9m程のものが、石室主軸より南にふれて附設される。削平を考慮に入れても傾斜はあまりなく、現況で約12°となる。前庭部側壁は両側とも扁平石の小口積みで、一列しか置かない。袖石は上半が折損あるいは抜かれているが、玄門幅は50cmくらいと思われる。框石と玄室床面とは10cmの段差がある。

玄室は左側壁がほぼ直線的であるのに対し、右側壁は若干の胴張りをもつ。両側壁とも扁平割石の平積みないし小口積みで、最下段には各々4枚を用いる。奥壁は高さ50cmのものを1枚立てている。壁面の石積みは21・23号墳とあまり変わらないが、石材そのものの面取り等は前者より粗く、むしろ8号墳のそれに近い。石室高は不明だが、石室の半分は盛土中にあったものと思われる。

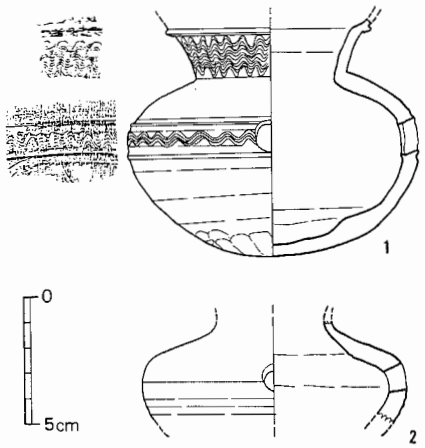
iii．出土遺物（PL．57、Fig．99～102）

主体部内にはごく僅かに人骨片が遺存していた。周溝から須恵器・土師器・埴輪が出土している。なお、墓道埋土中より押型文土器片と黒曜石片が出土した。

須恵器（PL．57、Fig．99・100）

聰（1・2）　図示した以外に底部片2個体分がある。1は口縁部を除けばほぼ完形品である。胴部最大径11.4cm、頸部径5.9cm。復原すれば器高10.5cm、口径9.5cm程になろう。胴部孔の所と頸部に波状文を施す。底部は静止ヘラ削り、その上の孔の所までと肩部は回転ヘラ削り、口縁部と内面は横なでで調整する。肩部には焼成時の気泡をみる。胎土精良、焼成堅緻。淡い灰色を呈す。2はなで肩気味になるもので、復原胴径10.4cm。外面の孔以下がヘラ削りである他はなで調整。胎土良、焼成良好。淡灰黒色を呈す。

甕（3・4）　3は中形のもので、肩部以下は図上での復原である。復原口径16.2cm、胴部最大径は26cm前後になろう。口縁と接して三角突帯を巡らすので、



Fig．99　27号墳出土土器実測図（1/3）

口縁の外形は三角形状を呈する。頸部中央あたりに２条の突帯を付し、その上下に波状文を有する。口頸部は内外とも横なで調整。肩部・胴部は外面平行タタキであるが擬格子状となり、その上をなでる。内面は同心円をなで消す。胎土には部分的に粗さがあり、焼成良好。全体に灰黒色を呈す。４は胴部片で外面は１単位が９条程の平行タタキを施し、部分的になでる。内面は細めの同心円の上をなで。胎土良、焼成良好。淡灰黒色をなす。

土師器（Fig. 101）

埦（５～６）　５は厚ぼったい形成で、瓦質に近い焼きしまりである。底部はヘラ削りでその他は横なで。内面には不自然な刺突による小穴をみる。口径12.6cm。器高2.95cm。黄茶色。６は23号出土品と形態的に類似し、口径16cm、器高5.2cm程を測る。本来は丹塗磨研土器である。外面口縁下には僅かに稜をみる。胎土良、焼成良好、黄茶色。

高坏（７）　埦の可能性もあるが高坏とする。口縁下で屈折し、その下はヘラ削り、他は横なでのあとヘラ研磨を行う。胎土精良、焼成良好、黄茶色。

脚台付埦（８・９）　８と９とで相互補完する器形になろう。両方とももと丹塗で、ヘラ研磨したあとなでている。胎土精良で焼成良好、赤褐色をなす。８の復原口径18cm、９の脚台径9.9cm。

坩（10・11）　両方ともと丹塗磨研土器で、器形もほぼ同様である。10は内面がなで、外面は横刷毛目および研磨のあとなでる。復原口径11.5cm。11の内面は削りのあとなでおよび研磨。口縁内部と外面は横方向の研磨である。口径11.4cm、器高9.0cm、胴部最大径12.5cmを測る。いずれも胎土精良で焼成良好。茶色をなす。

埴輪（Fig. 102）

約50点が出土した。１～５は円筒埴輪、６は形象埴輪の破片である。全てが器表の磨滅著しい。胎土は良

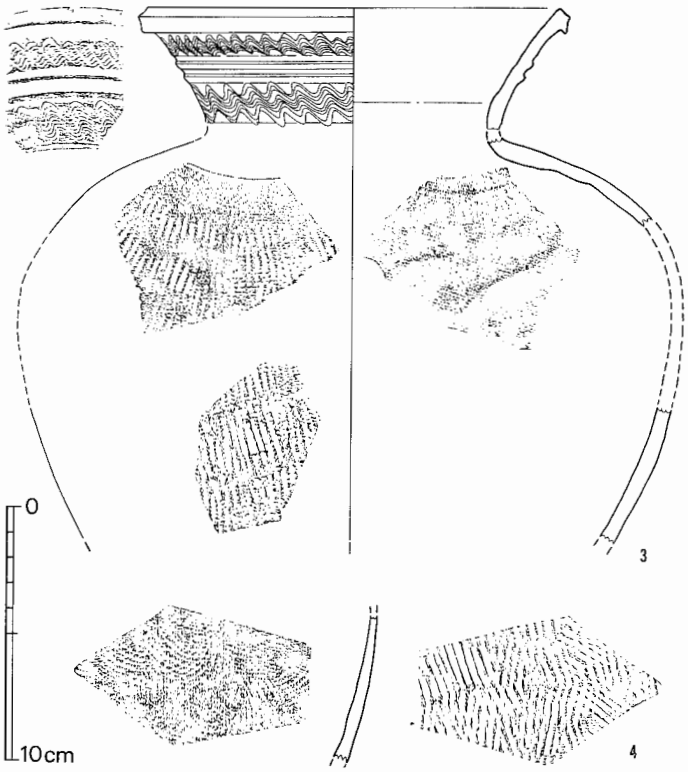


Fig. 100　27号墳出土土器実測図②（1/3）

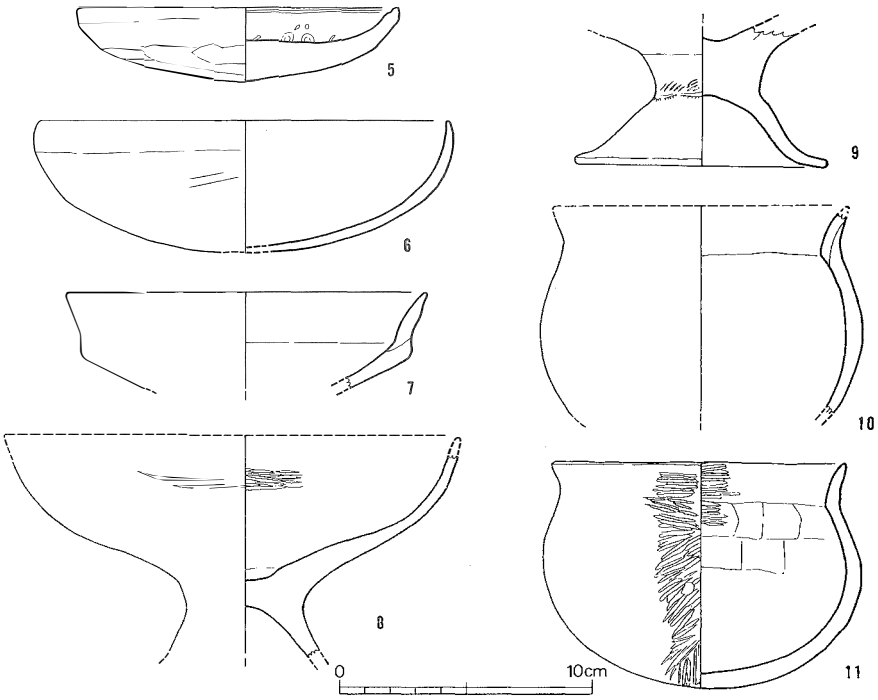


Fig. 101　27号墳出土土器実測図③（1/3）

好で、焼成がややあまい。赤味黄色を呈す。これらが当初よりこの古墳に伴なうものであるかは疑問とせざるをえない。1は口縁部片で内外に刷毛目をみる。6はおそらく馬の障泥の部分になるものであろう。

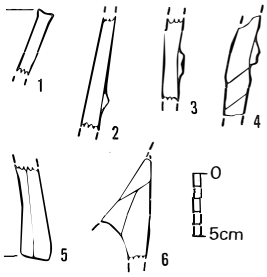


Fig. 102　27号墳出土埴輪実測図（1/6）

小 結

竪穴系横口式石室を有する23・25・27号墳についての構造的問題と、出土遺物のうち陶質土器・須恵器、鏡、鉄器等の個々については別に詳述するのでそれを参照されたい。

遺物のうち24・26・27号墳から埴輪片の出土を見るが、これは多分に8号墳のものが混入したのであろう。

各古墳の年代は、24・26号墳が5世紀初頭～前葉、22・23・25・27号墳が5世紀中葉から後葉の古い頃に比定する。

なお、21号墳には壁面に2ヶ所の突起がみられたが、23号墳にはなかった。

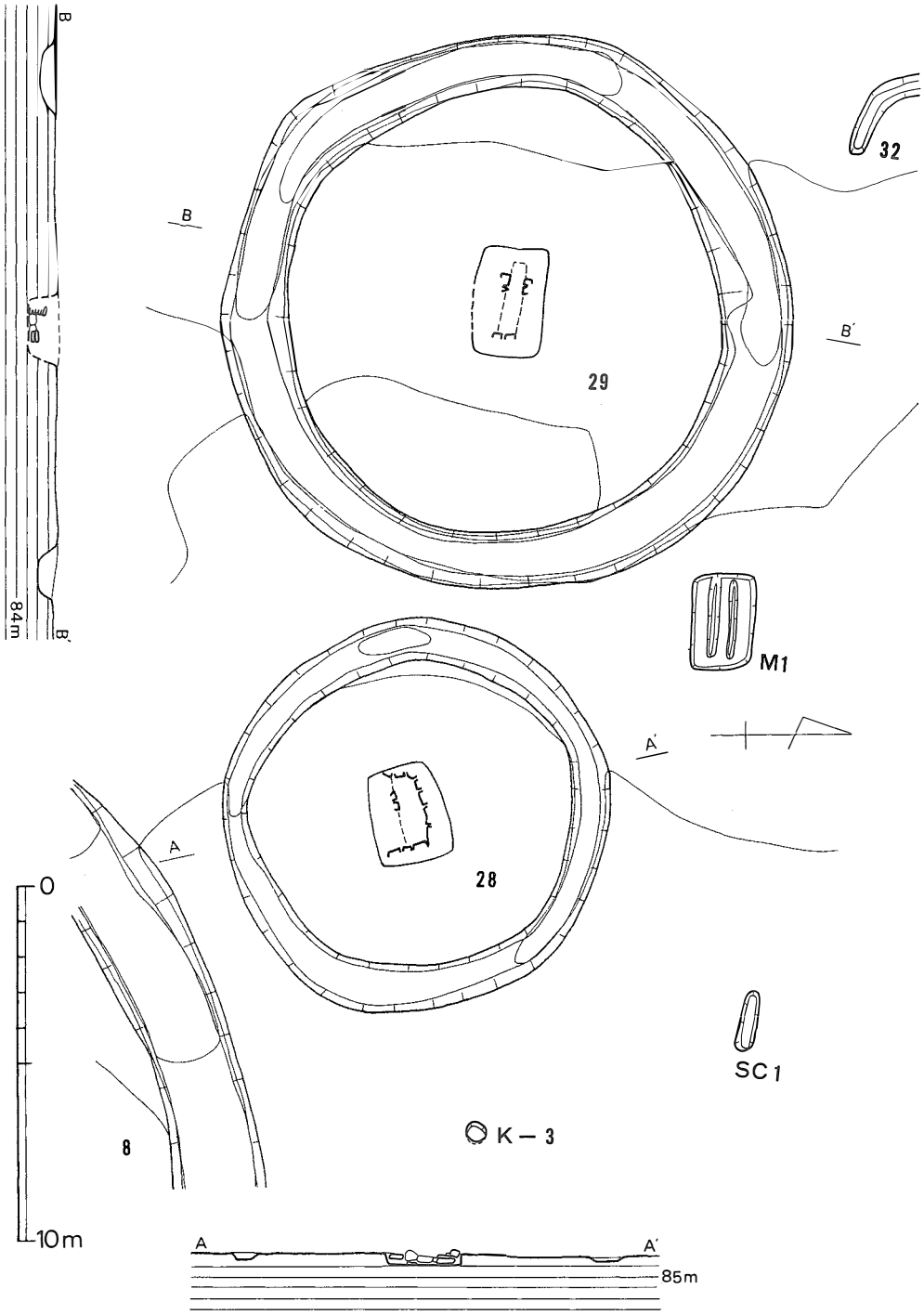


Fig. 103　28・29号墳地形測図（1/200）

6．28・29号墳（Fig. 103・106）

a．28号墳

i．規模（PL. 15、Fig. 103）

径11mの円墳で、周溝の中心は石室の中心と重なるようだ。

ii．主体部（PL. 15、Fig. 104）

竪穴式石室である。南側の側壁は石材がほとんど抜き取られて破壊の著しいが、おおよその形状は知りうる。北側壁は4個の石を最下段におき、若干の胴張りを呈する。ひとつ特徴的なのは西側小口部と側壁との接点で、ここに1個の石を入れこんで、丸みをもたせた形状となる。頭位は東側であろう。

iii．出土遺物

ほとんど土に帰した如くだが、人骨が僅かに遺存していた。北側壁に近く鉄剣が副葬されていたが、調査中に盗難に遭い、いまは茎の一部のみが存す。他に刀子がある。周溝からは三角

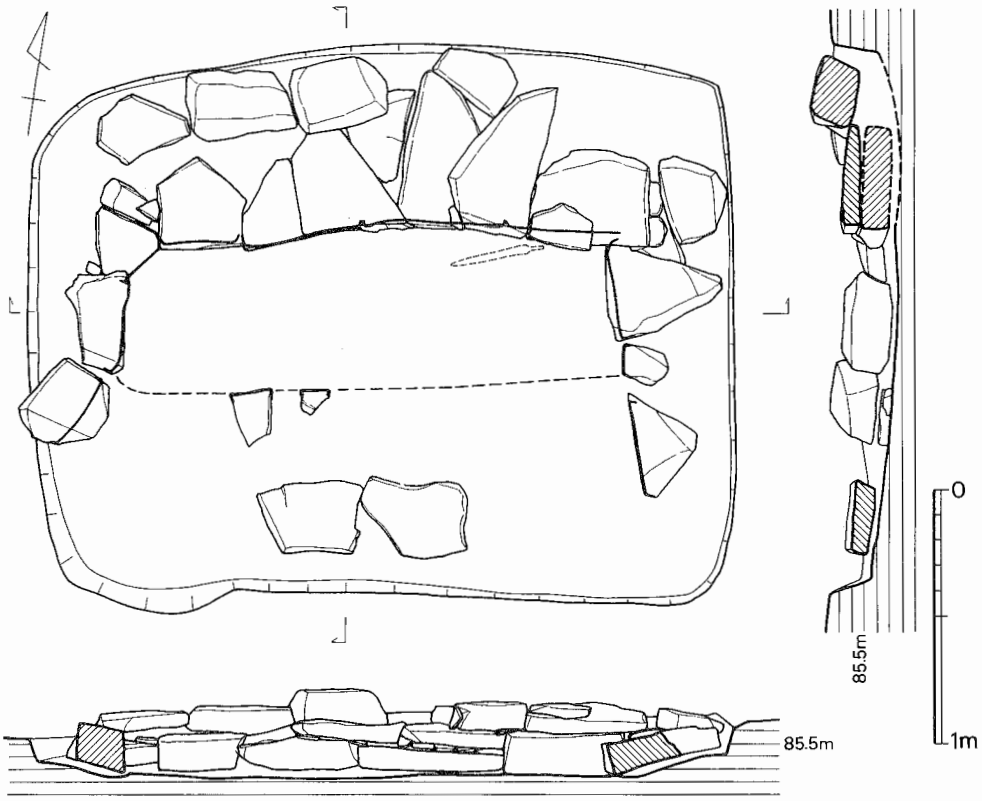


Fig. 104　28号墳主体部実測図（1/30）

突帯をもつ円筒埴輪片１点をみたが、８号墳からの混入であろう。

鉄器（Fig. 105）

剣（２）　茎のみである。幅1.6㎝。

刀子（１）　石室内の出土。柄は折れ曲がっている。関幅1.6㎝。

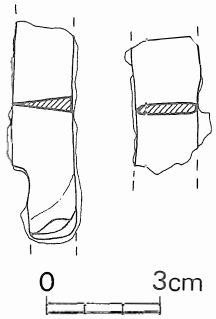


Fig. 105　28号墳出土
鉄器実測図（1/2）

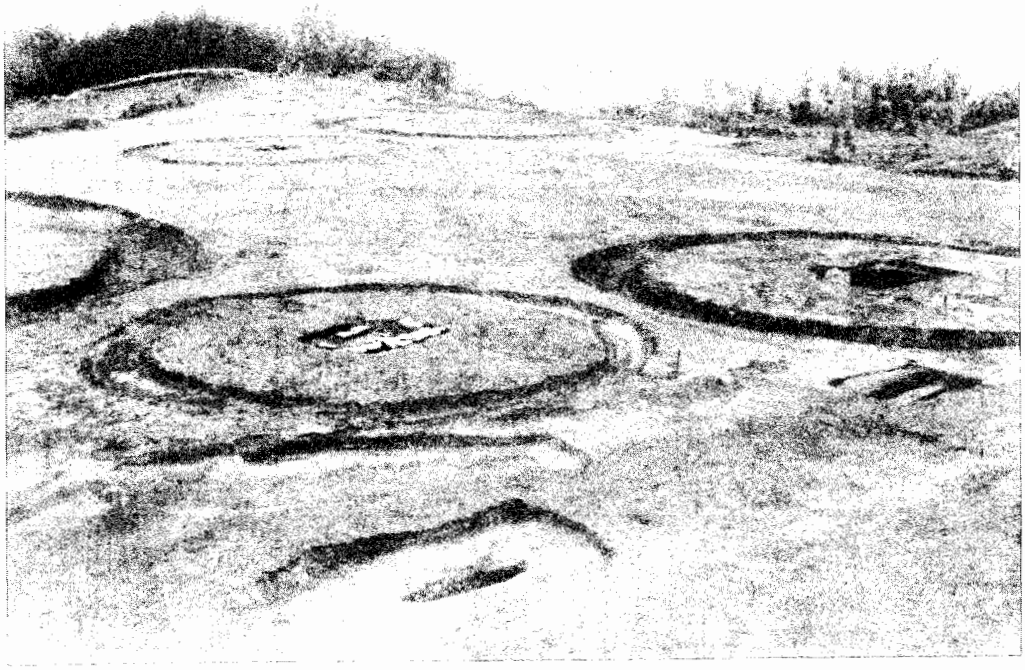


Fig. 106　28･29号墳全景（北東から）

b．29号墳

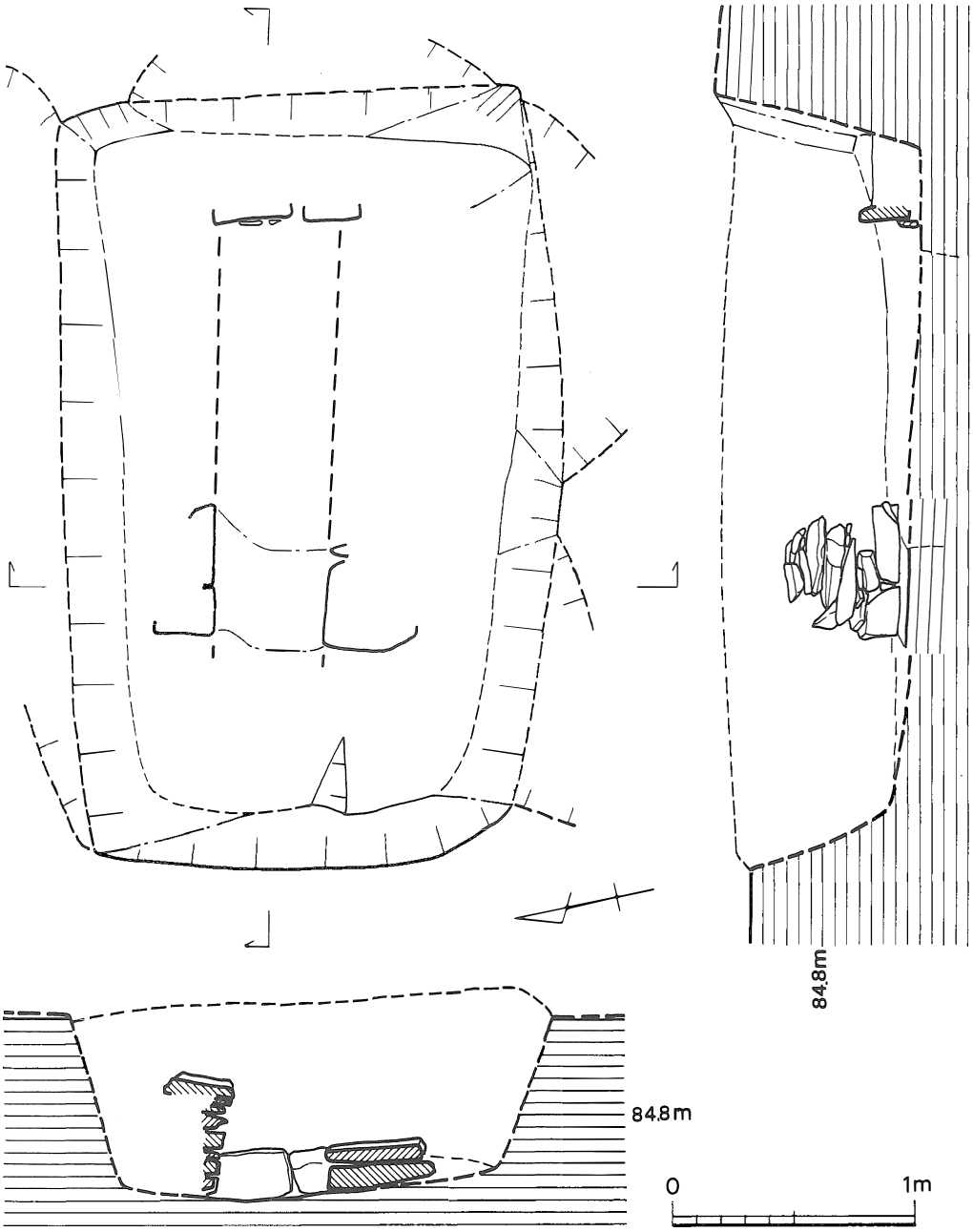


Fig. 107　29号墳主体部実測図（1/30）

ⅰ．**規模**（PL. 16、Fig. 103）

径16m程の円墳である。近世墓地によって至る所を蚕食された状態であった。

ⅱ．**主体部**（PL. 16、Fig. 107）

竪穴式石室である。多くを近世墓地の造営により破壊されていて、旧状を留める所は少ない。東側が頭位であろうか。

ⅲ．**出土遺物**

主体部掘り方内から鉄器片が、周溝から須恵器・土師器・円筒埴輪片約15点の出土があった。

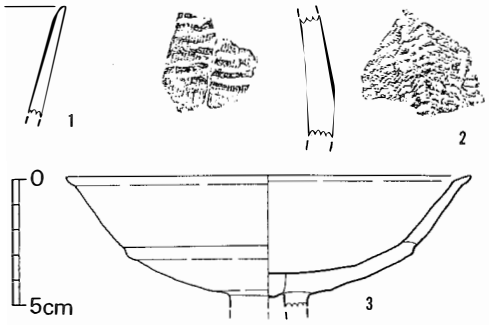


Fig. 108　29号墳出土土器実測図（1/3）

1．土器（Fig. 108）

須恵器

壺（1）　長頸壺か二重口縁の壺になるものと思われる。内外とも横なでで、胎土良。焼成に若干のムラあり。茶灰色を呈す。

甕（2）　胴部片で外面格子目タタキの上をなで、内面は同心円の上をなでる。胎土良、焼成ややあまい。黄灰色。

土師器

高杯（3）　坏部破片を図上復原したものである。脚付け根から大きく開く形状だが、坏部中途に膨らみのある屈折点をもつ。口縁端部は特徴的に外反している。内面は横刷毛目の上をなで、外面は横なで、胎土良で焼成あまく、器面の磨滅著しい。赤橙色。

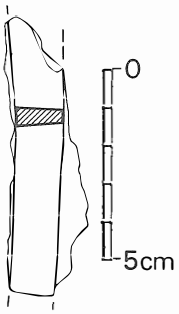


Fig. 109
29号墳出土鉄器
実測図（1/2）

埴輪

朝顔形になるものと思われる破片を含めて15点が出土している。胎土・焼成等は全て8号墳のものと規を一にしており、おそらく8号墳からの流れこみであろう。

鉄器（Fig. 109）

刀か剣の茎部分と思われる。

小　結

2基とも竪穴式石室であるが破壊が著しく、構造的には不明点が多い。出土遺物も少なく時期を決め難いが、およそ5世紀前葉～中頃に比定されよう。

7．30・31号墳（Fig. 110）

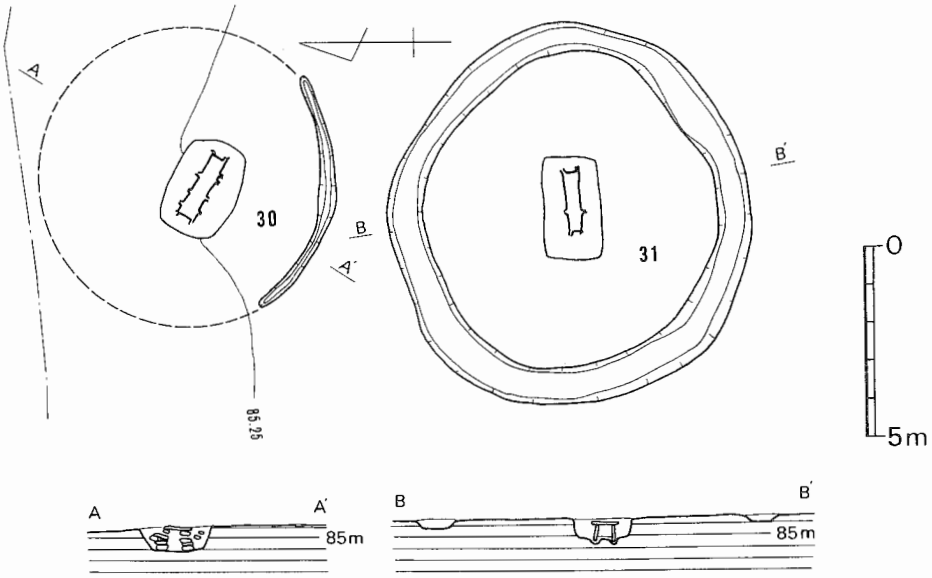


Fig. 110　30・31号墳地形測量図（1/200）

a．30号墳

i．**規模**（Fig. 110）

周溝は南側の¼程しか残っていないが、復原すれば径８ｍ前後となる。このとき周溝の中心は主体部の中心とは一致しない。

ii．**主体部**（PL. 17、Fig. 112）

竪穴式石室である。蓋石は大石１枚と小さな石１個を置く。控え積みで露出している石材は割に多い。床面は東側が広いので、こちらが頭位となろう。両小口壁は１枚石を立てる。側壁は大きな石材、小さな石材を併用しての小口積みである。全体に頭位側をきちんと積み、足位に向かって荒くなる感じを受ける。

iii．**出土遺物**

周溝には遺物はなかった。棺外南側の頭位に近い所で蓋石下面くらいのレベルに、鋒を東に向けて刀子が置かれていた。棺内に遺物は見ない。

鉄器（PL. 57、Fig. 111）

刀子　鋒を欠くが、復原長10.8cmを測る。関幅1.5cm。

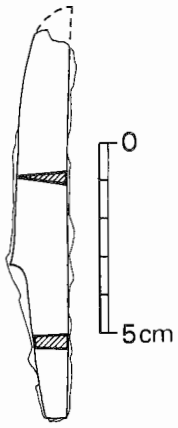


Fig. 111
30号墳出土鉄器実測図（1/2）

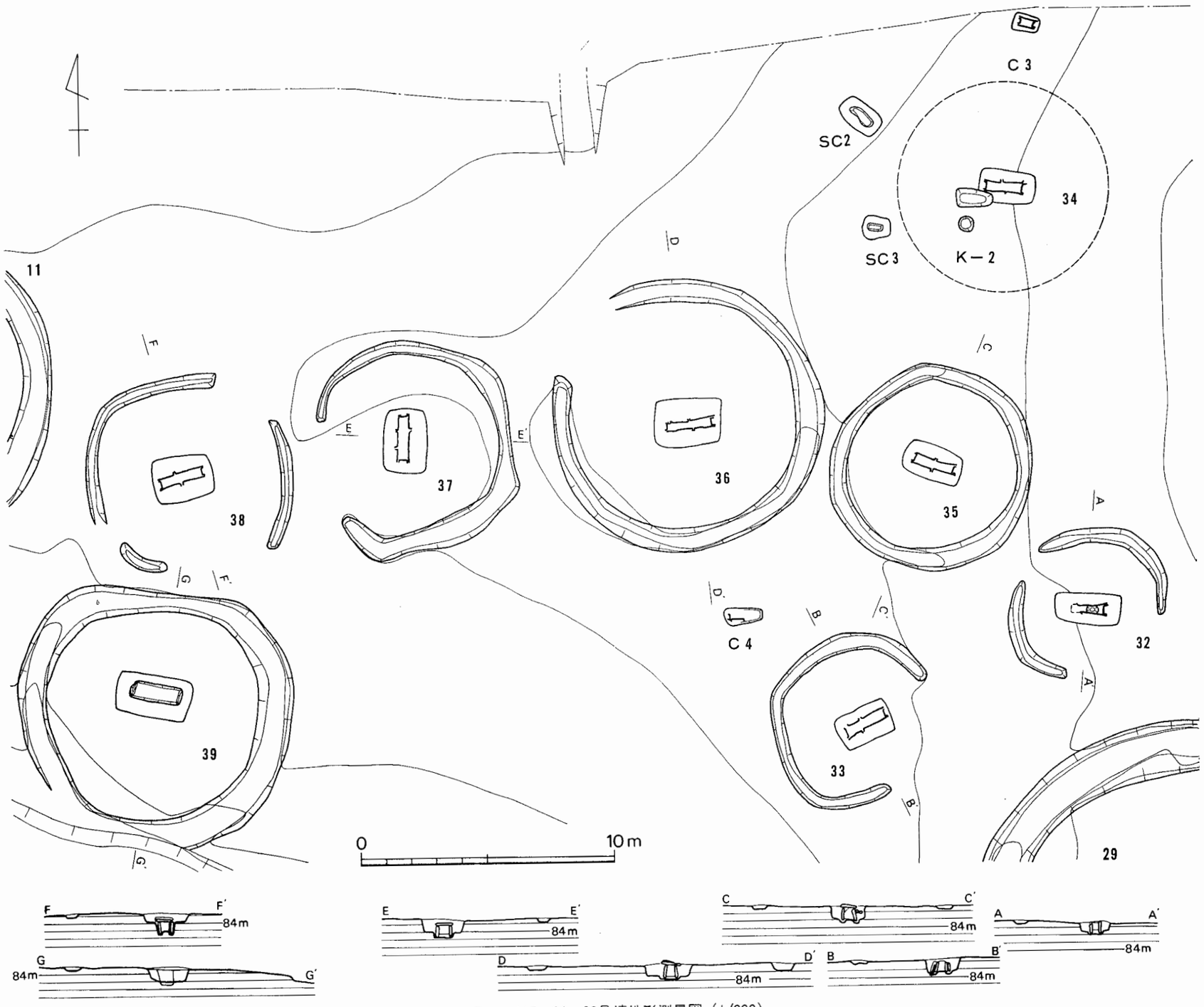


Fig. 115　32～39号墳地形測量図（1/200）

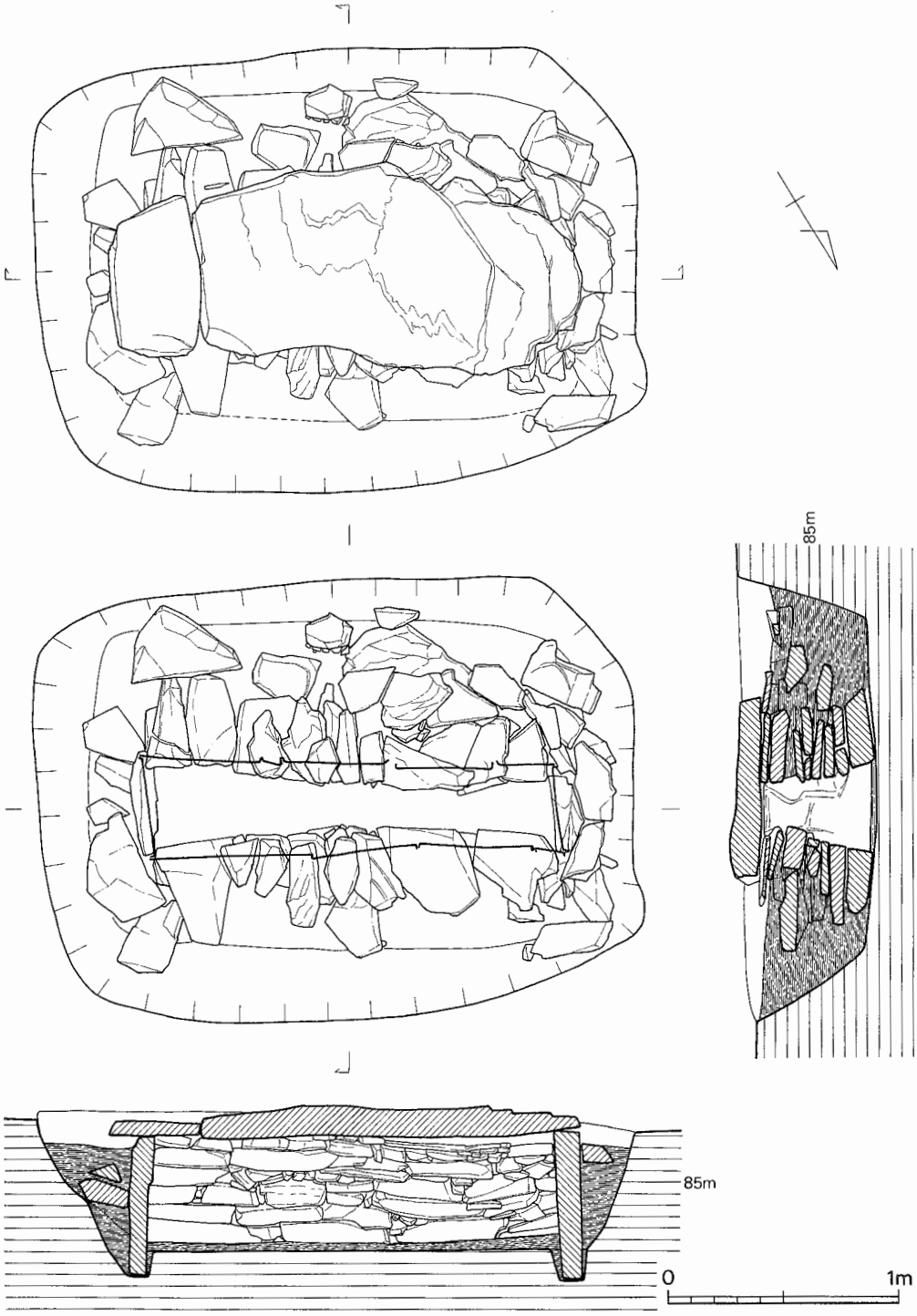


Fig. 112　30号墳主体部実測図（1/30）

b．31号墳

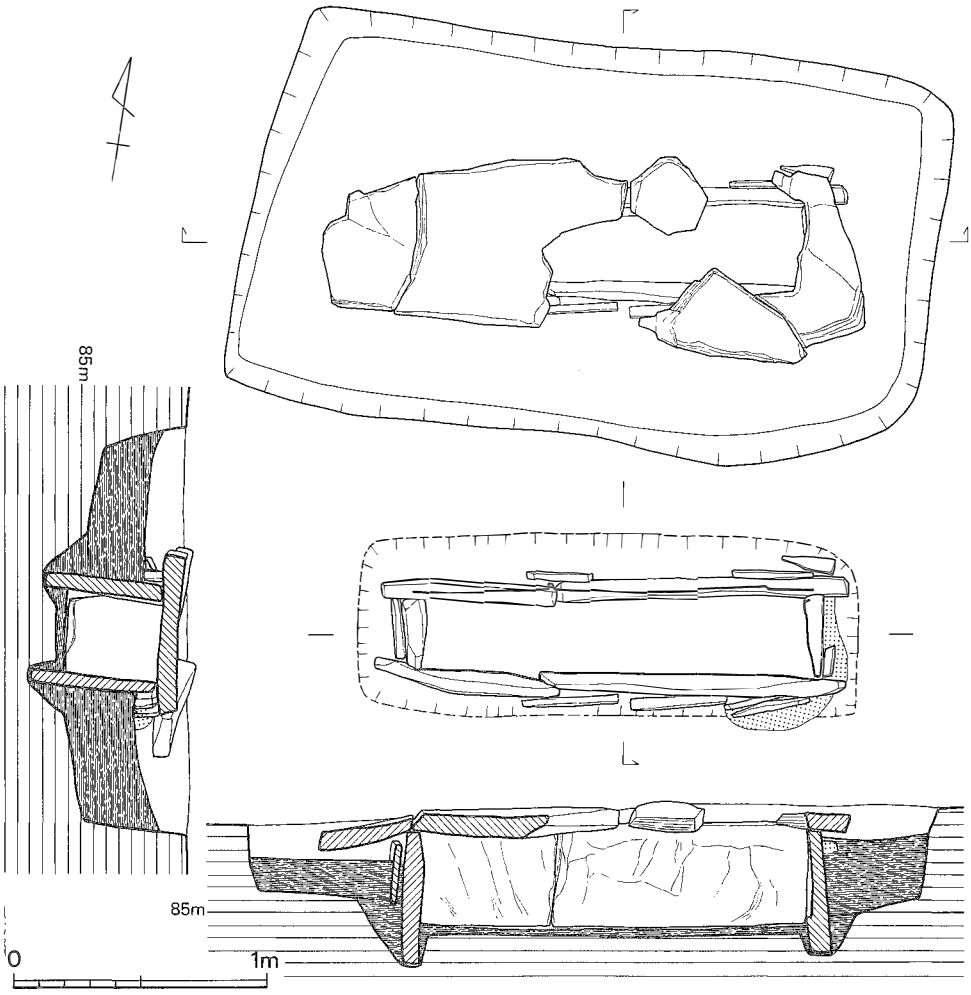


Fig. 113　31号墳主体部実測図（1/30）

i．**規模**（PL. 18、Fig. 110）

若干いびつな形となるが、径10m程の円墳である。

ii．**主体部**（PL. 18、Fig. 113）

箱式石棺である。蓋石は割れているが2枚を使用している。頭位は東側であろう。両側壁は2枚ずつを用い、小口壁をはさみこむ。棺外の側壁接ぎ目には補強材を置き、また東側小口壁周には灰白色粘土がみられる。

棺内外・周溝からの出土遺物はない。

小　結

30号墳は竪穴式石室であるが、28・12号墳とは異なり、小口壁には１枚の石を据えている。側壁は最下段から小口積みで、控え積みもあるので、石棺系とするには若干の躊躇を覚える。

31号墳は32号墳以下の石棺を主体部とする古墳と同じもので、時期的にも同じ頃と考えてよいだろう。両方ともほぼ５世紀初頭～中頃の築造として大過ない。

Fig. 114　発掘作業スナップ１

8．32～39号墳（Fig. 115）

a．32号墳

i．規模（PL. 19、Fig. 115）

周溝が全周せず、かつ部分的に四角張った所もあるが、円墳としてよい。径6ｍ程となる。

ii．主体部（PL. 19、Fig. 116）

石棺であるが攪乱が著しいため、特に西側については不明点が多い。いま主軸長1.2ｍで止まっているが、あるいはもう少し延びる可能性もある。床面内に攪乱時の穴がみられる。頭位は東側であろう。

周溝・主体部内外ともに出土遺物はみられない。

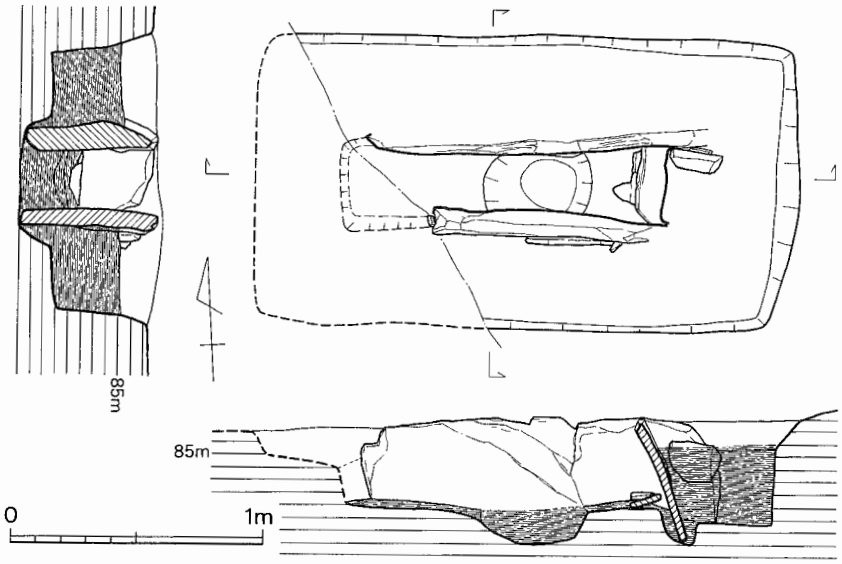


Fig. 116　32号墳主体部実測図（1/30）

b．33号墳

i．規模（PL. 20、Fig. 115）

南東側の周溝が欠け、四角い形状に近いが、やはり円墳とした方がよい。径6.5ｍくらいとなる。

ii．主体部（PL. 20、Fig. 117）

箱式石棺である。蓋石は西側の１枚しか残っていないが、本来は２枚であろう。側壁は２枚を用い、棺外の接ぎ目に補強材を置く。側壁・小口部ともかなり内傾する。床面は西側の方が広くなるが、頭位は東にとり、地山削り出しの枕を有する。この枕上には近世の骨壺が置かれていた（Fig.118）。

他に出土遺物はない。

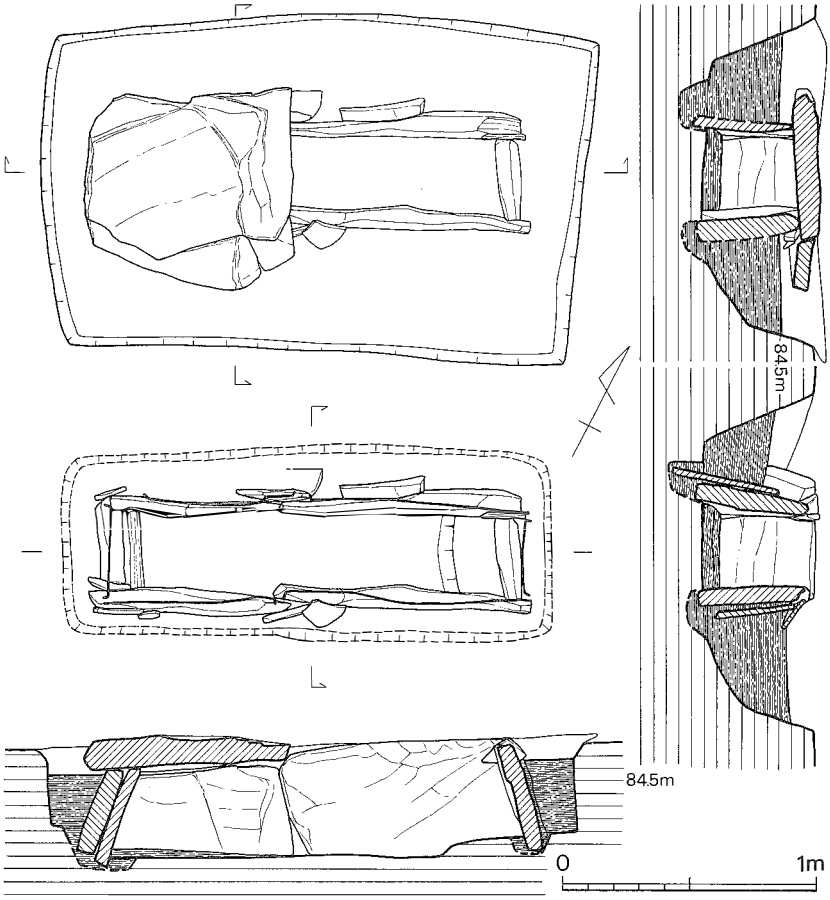


Fig. 117　33号墳主体部実測図（1/30）

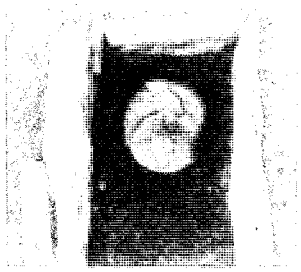


Fig. 118　32号墳主体部内の近世骨壺

c．34号墳

i．規模（Fig. 115）

明確な周溝はみられないが、他との位置関係から１基の独立した古墳と考える。８ｍ前後の径を測る円墳であろう。周辺にあるＣ３号・ＳＣ２号・ＳＣ３号等は当墳に伴う可能性もあるがはっきりしない。

ii．主体部（PL. 21、Fig. 119）

掘り方の一部をＤ１号に切られた箱式石棺である。蓋石はすでに取り去られていた。床面幅の広い東側が頭位であろう。西小口壁は幅の足りない分だけ小石を入れて間隙を埋める。

出土遺物はみられない。

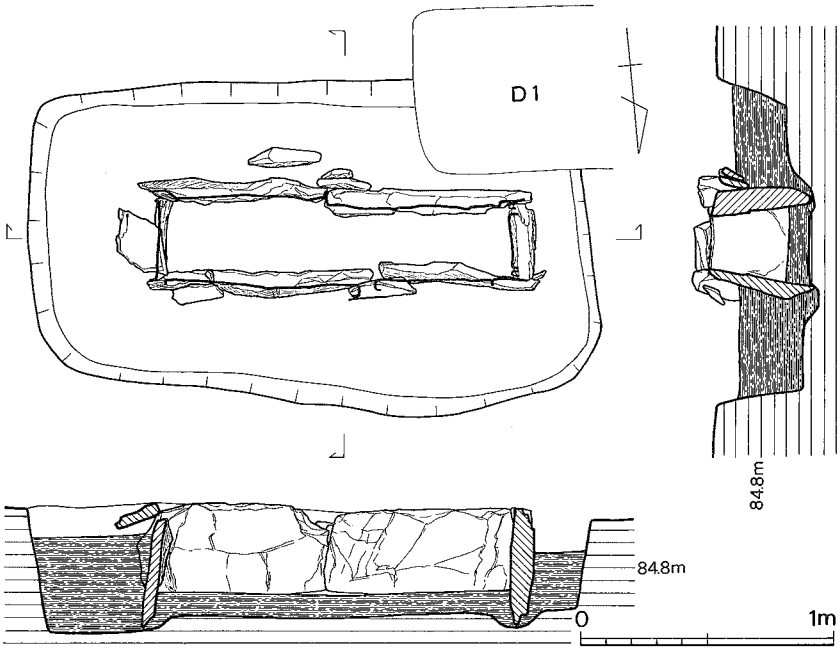


Fig. 119　34号墳主体部実測図（1/30）

d．35号墳

ⅰ．**規模**（PL. 22、Fig. 115）

ほぼ正円に近い周溝が巡り、径約８ｍを測る。主体部は僅かに北側に偏する。

ⅱ．**主体部**（PL. 22、Fig. 120）

箱式石棺である。蓋石は２枚存したものと思われるが、いまは１枚しかない。棺材周縁には灰白色粘土で丁重な目張りを施す。側壁は両方ともほぼ同形同大の石材を対角線上に配置して、小口壁をはさみこむように組合わせる。棺外の西小口部と南側壁中央部には小さな扁平石を集めて置いているものの、その下には何の施設もなかった。

出土遺物は全くなかった。

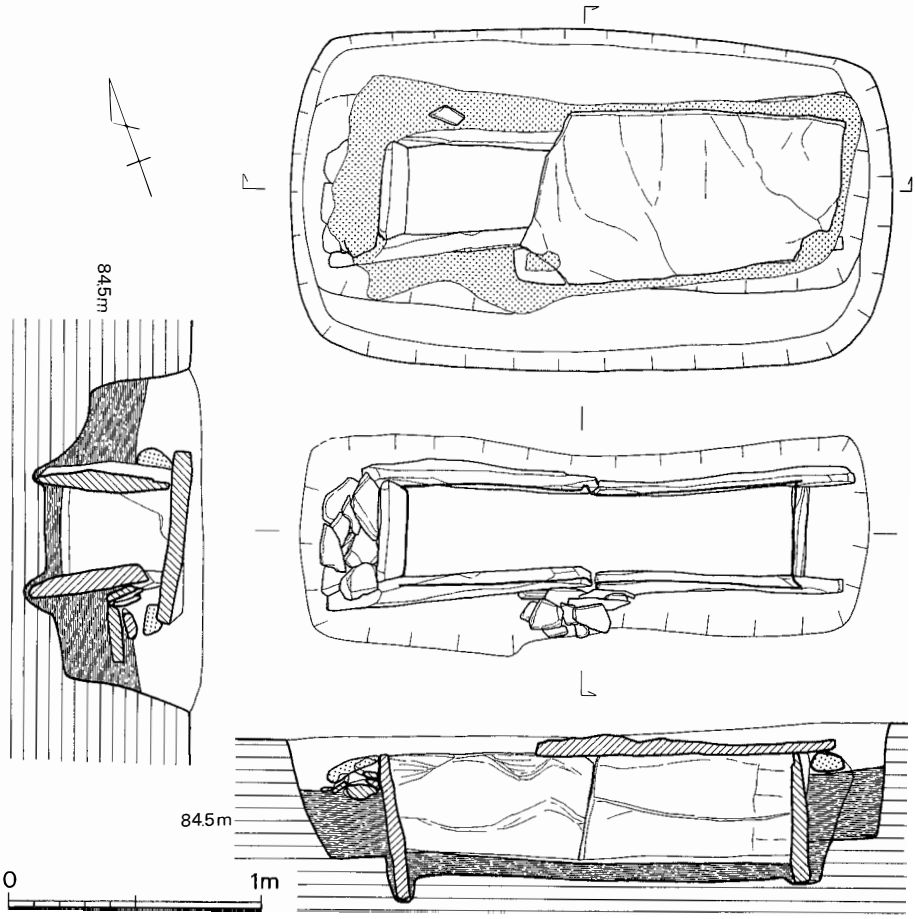


Fig. 120　35号墳主体部実測図（1/30）

e．36号墳

i．**規模**（PL. 23、Fig. 115）

径11ｍ弱の円墳で、北東側の周溝は途切れている。主体部は若干南側に偏す。

ii．**主体部**（PL. 23、Fig. 121）

箱式石棺で、蓋石は３枚あり、粘土で目張りする。棺外両小口部にも粘土を置いていた。頭位は人骨の痕跡の認められた東側であろう。

出土遺物はない。

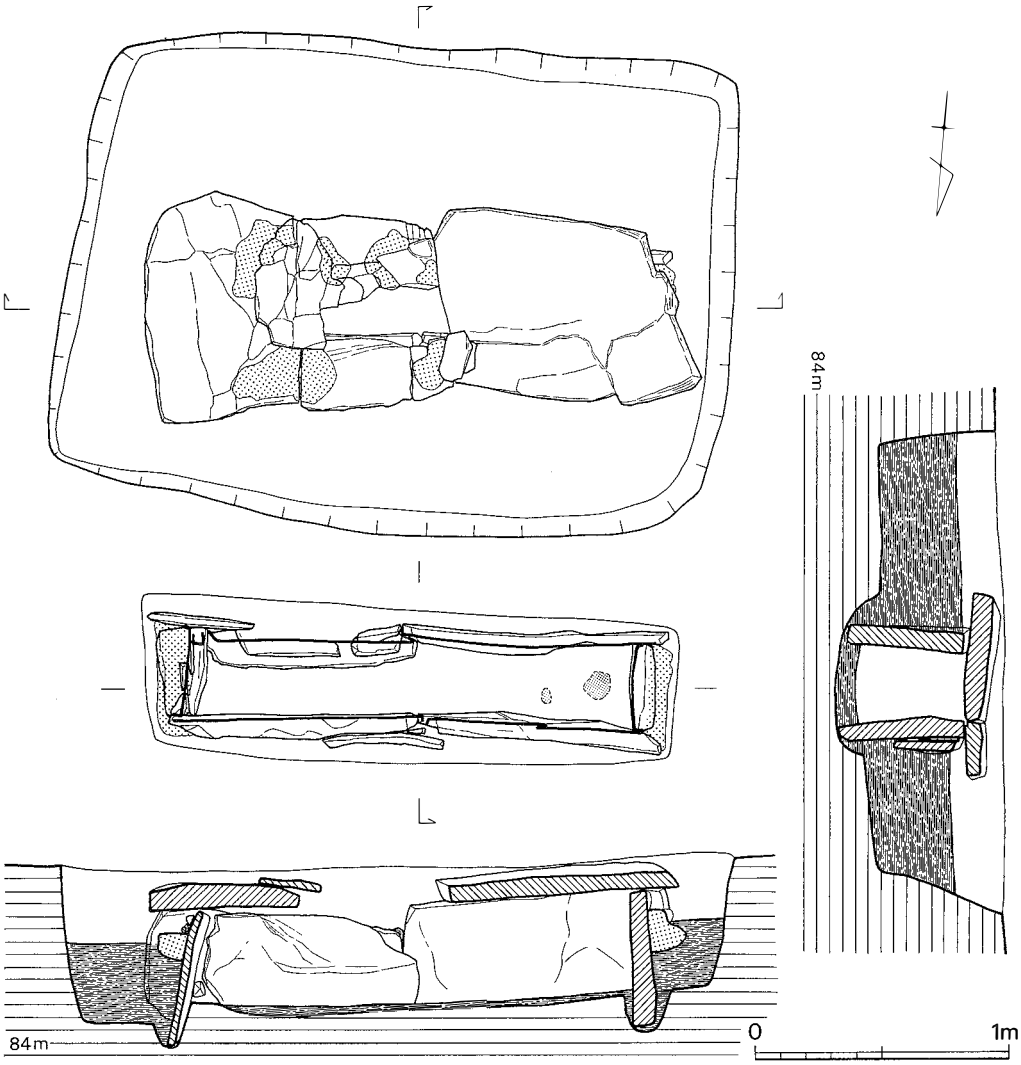


Fig. 121　36号墳主体部実測図（1/30）

f．37号墳

i．**規模**（PL. 24、Fig. 115）

周溝は隅円の方形に近い形状となるが、やはり円墳とすべきで、径８ｍ前後を測る。周溝は西側が途切れている。

ii．**主体部**（PL. 24･25、Fig. 122）

箱式石棺である。この主体部のみが、他の箱式石棺とは主軸方向を異にしている。掘り方は長方形というより台形に近い。蓋石は頭位が最も大きく、計３枚をかぶせる。粘土目張りが著

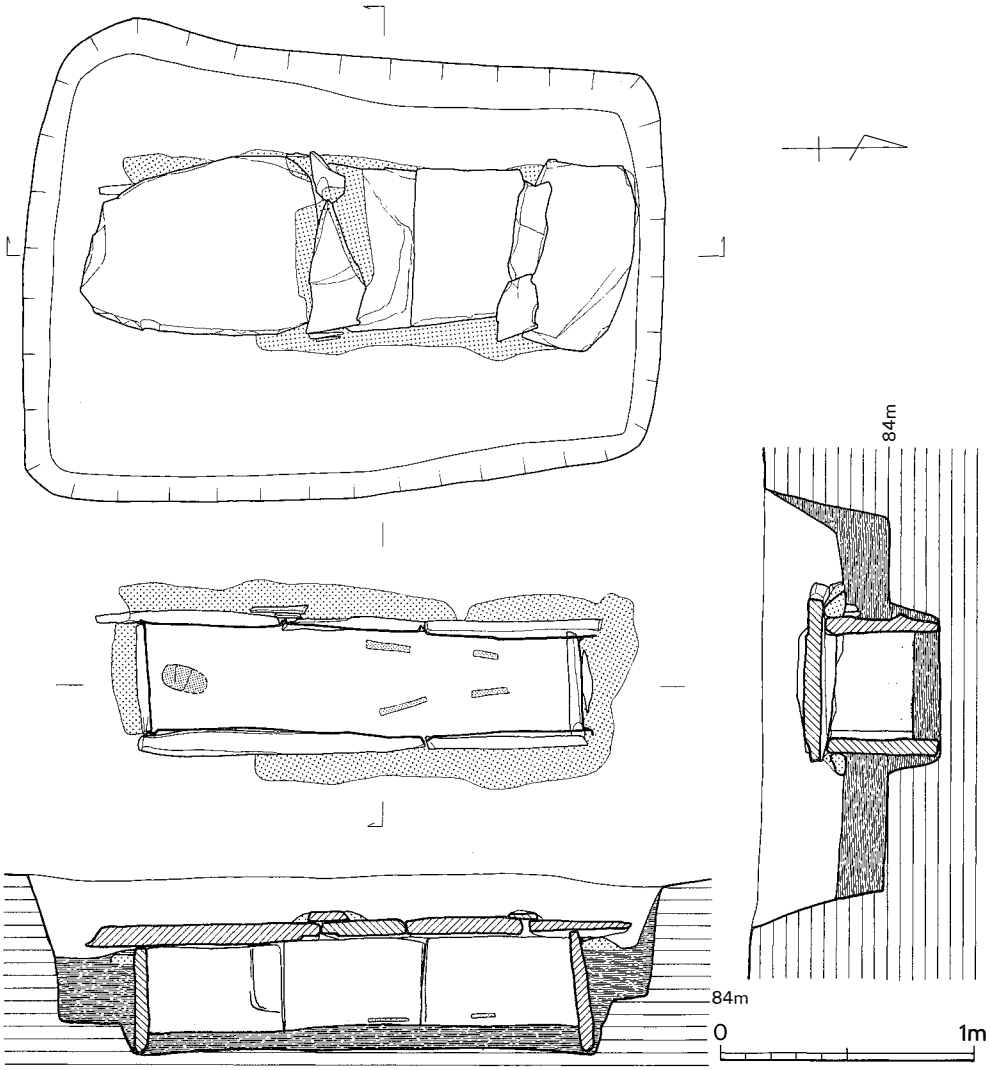


Fig. 122　37号墳主体部実測図（1/30）

しい。側壁は東側が２枚、西側が３枚を用いる。人骨は頭骸骨と肢骨の一部を認めた。

iii．出土遺物

周溝からは遺物は出土していない。主体部棺外東側の蓋石下に鉄鎌と鉄刀子が副葬されていた。刀子は鋒を北に向け、鎌は先端を北に、刃部を東側に向けている（PL. 25－(3)）。

鉄器（PL. 57、Fig. 123）

鎌（１）　全長14cm、最大幅3.7cmで、背部の厚さ0.3cmと薄手である。折り返しは１cm強の長さが60度くらいに曲がる。刃部は外湾刃となる。

刀子（２）　現存長9.7cm、刃部長7.1cmを測る。銹が著しい。

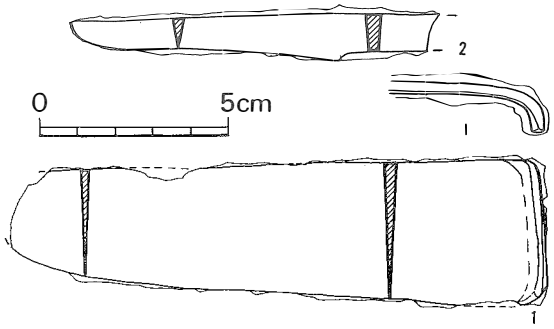


Fig. 123　37号墳出土鉄器実測図（1/2）

Fig. 124　発掘作業スナップ２

g．38号墳

i．**規模**（PL. 26、Fig. 115）

途切れ途切れで丸みのある方形に近い形状に溝が巡るが、やはり円墳とすべきで、径8m程となる。

ii．**主体部**（PL. 26・27、Fig. 125）

箱式石棺である。蓋石は2枚で頭位の方が大きい。2枚の接ぎ目には小石を置き、その上を粘土で目張りする。蓋石下の棺体との間にも粘土が充填されている。側壁はいずれも2枚の石

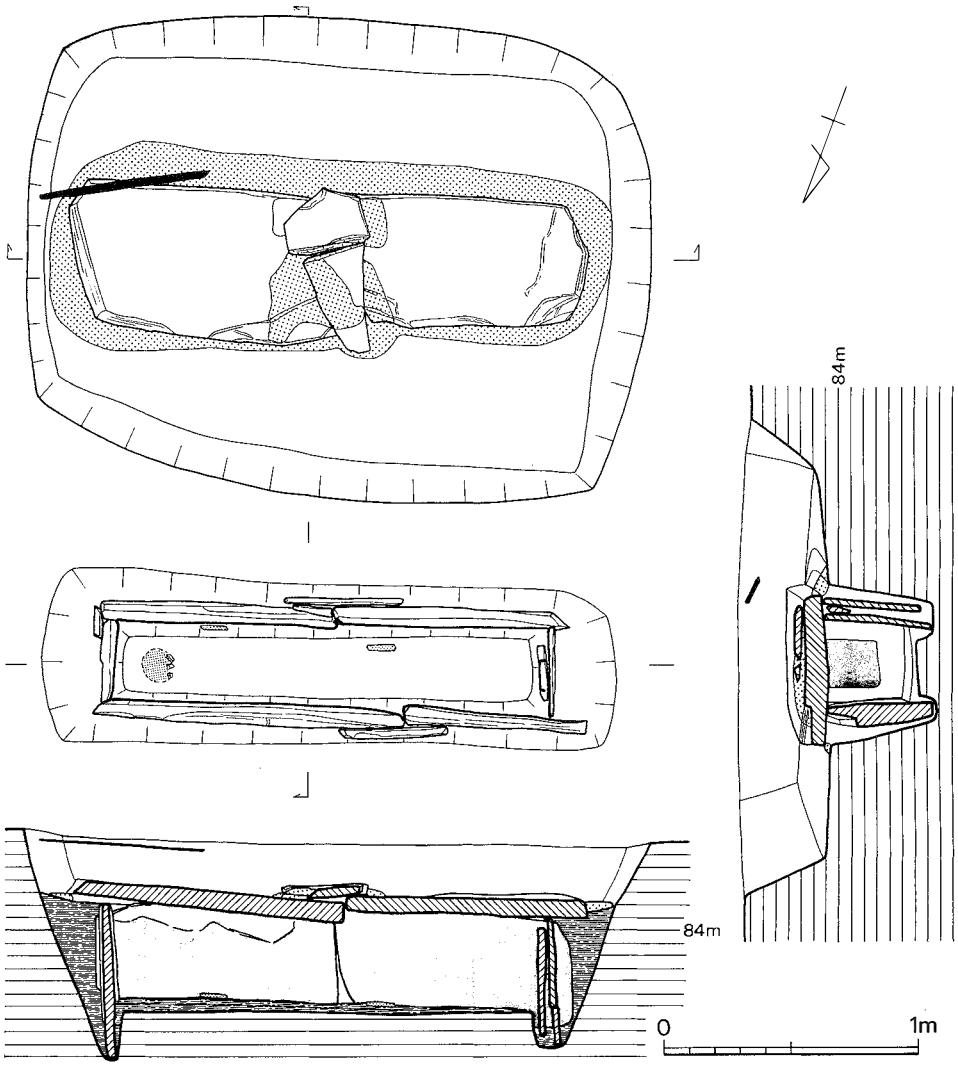


Fig. 125　38号墳主体部実測図（1/30）

を用い、接ぎ目には棺外に補強材を置く。頭位は東側で、歯と人骨若干が遺存していた。内面は赤色顔料を塗布するが、頭部小口壁は全面でなく一部にのみ塗っている。足位小口壁には内面にもう1枚の板石を立てている。

iii. 出土遺物

頭部側棺外の蓋石上に、かなり浮いた状態で鉄刀1口が出土した。鋒を西に向けている。

鉄器（PL. 57、Fig. 126）

刀　全長67.6cm、刃部長55.6cm、関幅3.0cm、背厚0.7cm強を測る。茎に目釘孔は2個が存するようである。銹化著しいが、木質の遺存が見られないので抜き身での埋置かも知れない。

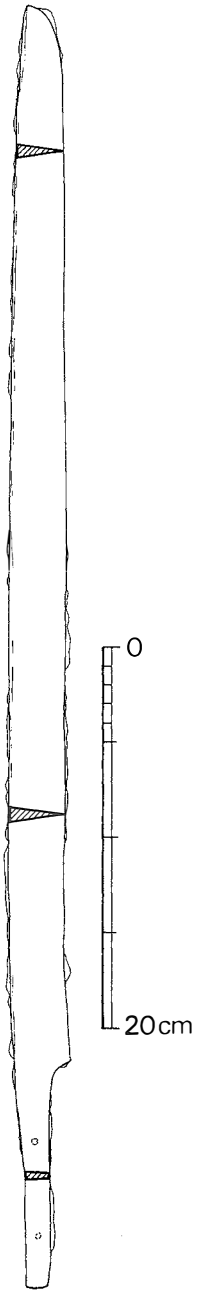


Fig. 126
38号墳出土鉄器実測図
(1/4)

h．39号墳

i．**規模**（PL. 28、Fig. 115）

北側の38号墳側が押しつぶされたようになる円墳である。これを見ると、38号墳を意識して避けて周溝が掘削されたのかも知れない。径11m弱を測る。主体部は全体に北の方へ偏して存する。

ii．**主体部**（PL. 28、Fig. 127）

組合木棺であり、当古墳群中ではこの1基のみが他と異なる。両小口部は棺材の掘り込みが見られるが、側壁には見られない。両側板が小口板をはさみこむ形式となるようである。板材は厚さ5cmをこえないものが使われている。

iii．**出土遺物**

周溝から須恵器・土師器・円筒埴輪片が出土している。主体部内には人骨の細片若干が遺存していたのみで、他に副葬品等はない。

須恵器（Fig. 128）

坏蓋（1・2）　1は復原で基部径15.4cm、器高3.8cm程になろう。撮みの有無は分からな

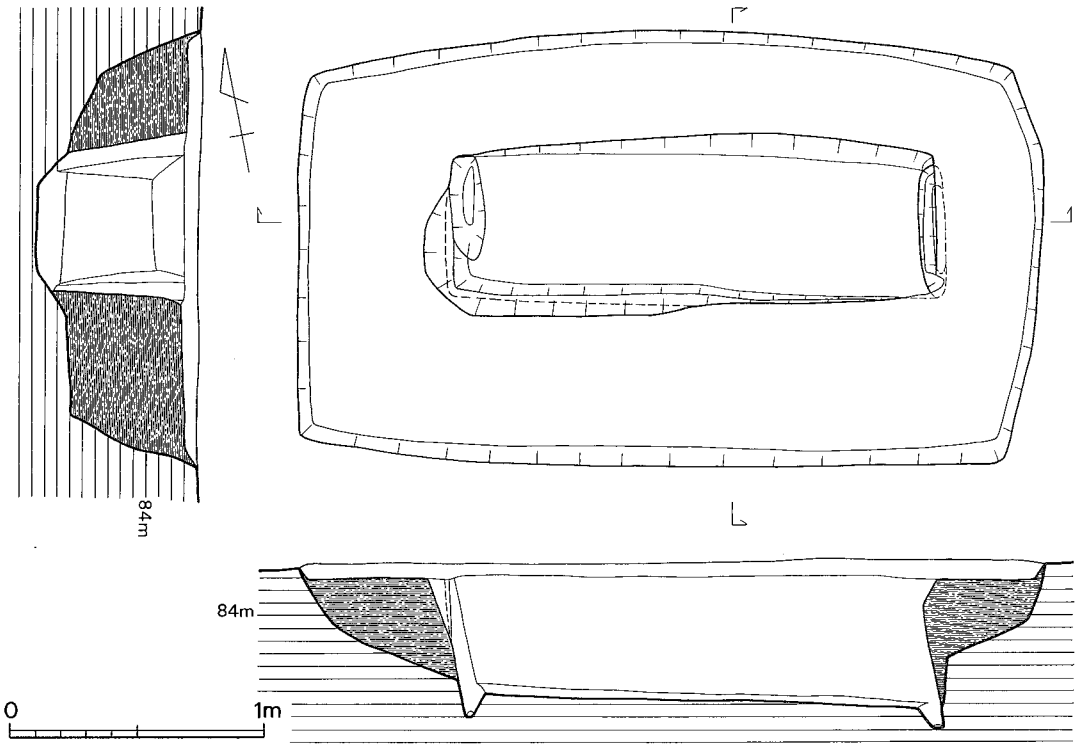


Fig. 127　39号墳主体部実測図（1/30）

いが、つくものと思われる。かえりは見られず、その箇所には僅かな沈線が入る。全体に通有の器形に比して扁平さが見られない。口縁内外は横なで、天井部内面はなで、外面は左回りのヘラ削りを施す。2も1とほとんど同じ器形になるであろう。胎土良、焼成ややあまい。

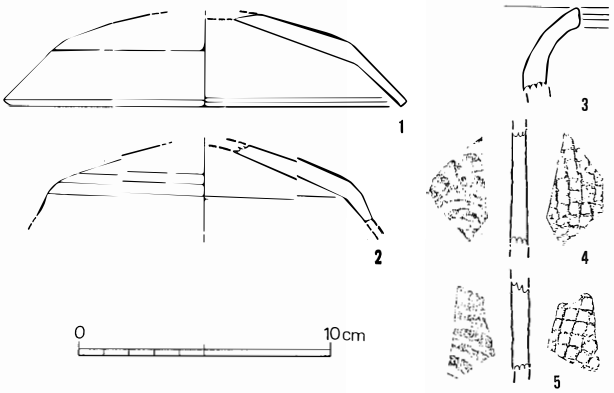


Fig. 128　39号墳出土土器実測図（1/3）

甕（3～5）　3は口縁の破片で、口唇にはなでによる沈線が入る。内外とも横なでを施すが、内面の下部には同心円が僅かに残る。胎土良、焼成堅緻。4・5は胴部片で同一個体の破片とみてよい。外面は一辺4㎜程の格子目タタキを施し、内面は同心円が入る。

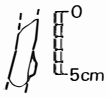


Fig. 129
39号墳出土
埴輪実測図
（1/6）

土師器は破片1点のみで図示に耐えない。円筒埴輪片は3点あり、断面台形の突帯をもつ（Fig. 129）。

小　結

32～39号墳のうち、39号墳が組合木棺である他は箱式石棺を内部主体とする。石棺はおよそ共通した形態を示し、特に異なったものは見られない。ただ、ほとんどが東西方向に主軸をとる中で、37号墳のみは南北の主軸となる。

土器は39号墳周溝から見られたのみで、それも7世紀後半に比定しうるものであって、到底築造時期を示しているとは思われない。箱式石棺も組合木棺もほぼ単一の時期に連続あるいは併行して営まれたものと思われ、次項に述べる11号墳が示す時期（5世紀初頭～前半）と同じ頃に比定されよう。

なお、遺構配置図でわかるように、33・36～39号墳に囲まれて広場の如き空白地帯がみられる。これは次項の11・40～42号墳間にもあって、墓前祭等に関わる広場かも知れない。

また、33号墳主体部内に骨壺が置かれていたが、埋置の時期を特定できないにしても興味ある事実である。

9．11・40～42号墳（Fig. 131）

a．11号墳

ⅰ．**規模**（PL. 29、Fig. 131）

径13m弱の円墳で、この周辺では若干大きめである。主体部の中心点よりもやや東にずれた所に、周溝の中心が求められる。

ⅱ．**主体部**

（PL. 29、Fig. 130）

箱式石棺で、蓋石はすでにない。発掘前には蓋石の一部である石材2枚が棺内に立てかけてあった。棺材の周縁には分厚く粘土を置いている。両側壁とも2枚の石を使って両小口をはさみこむ。南側壁は接ぎ目に空間が生じ、そこは外側から別の小石材で補っている。頭位は東になろう。

ⅲ．**出土遺物**

棺外北側の粘土上に鉄剣・鉄鎌が副葬されていた。また、周溝内から須恵器・土師器が出土している。

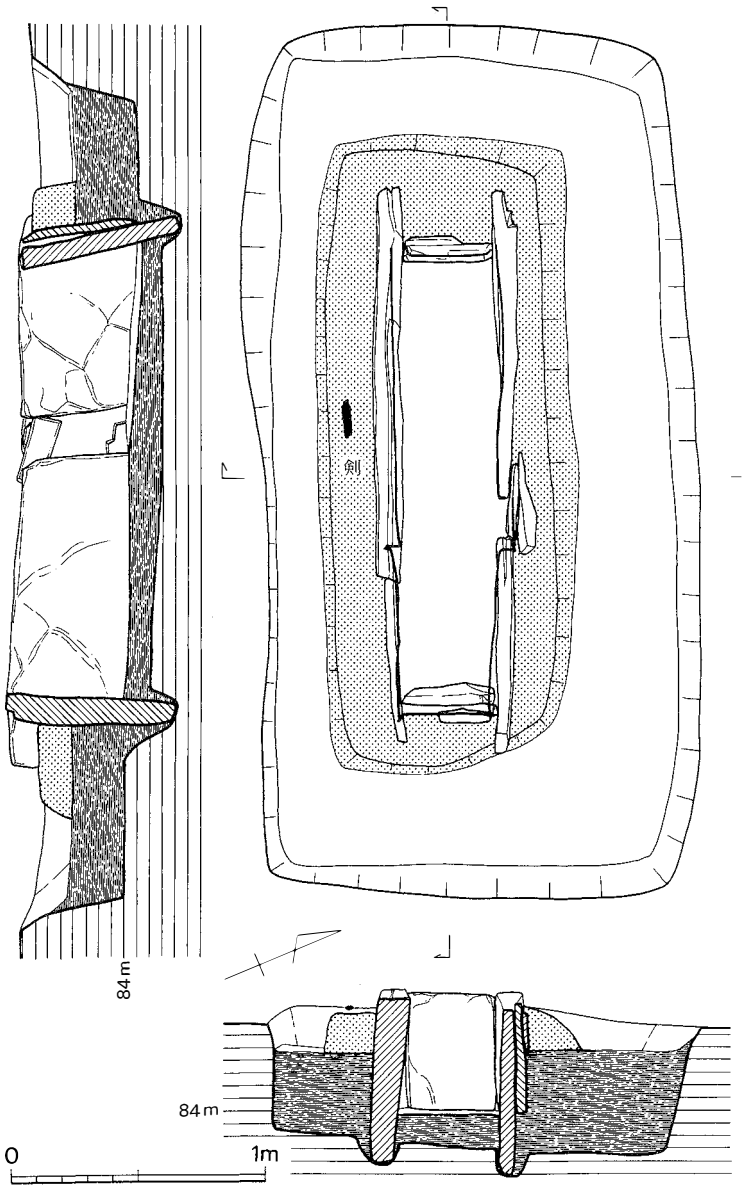


Fig. 130　11号墳主体部実測図（1/30）

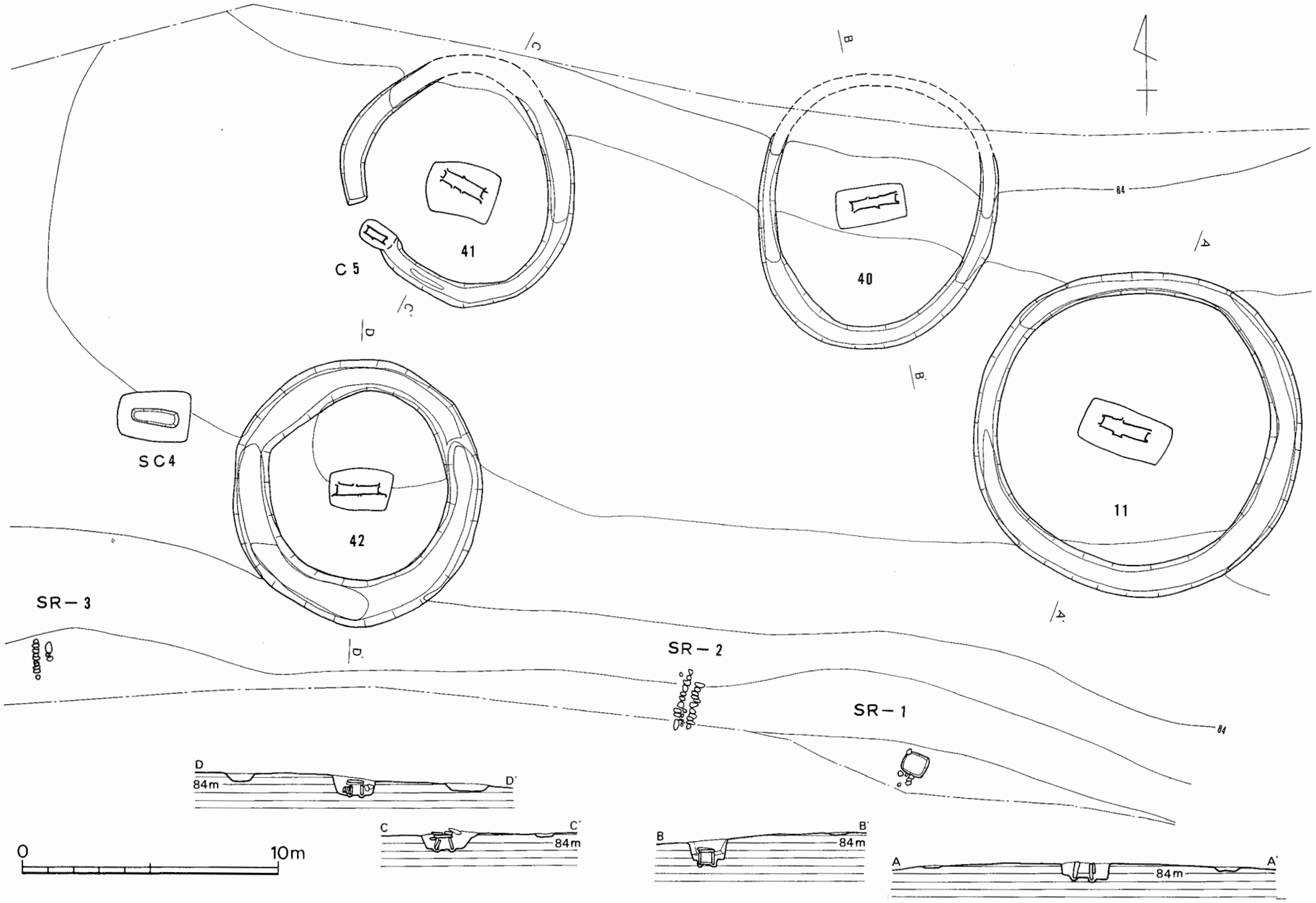


Fig. 131　11・40～42号墳地形測量図（1/200）

1．土器（Fig. 132）

須恵器

甕（1）　赤褐色の瓦質のものであるが、小破片のため詳細は知りえない。後代の混入品と思われる。内外とも横なでを施す。胎土良、焼成良好。

土師器

高坏（2～7）　2の坏部は屈折点の接合部から折損しており、擬口縁を示す。風化著しく調整は不明であるが、脚部内面はなでつけている。3・4は脚部片で、3はエンタシス状に膨らみをもち、4も僅かにその傾向をみる。双方とも裾部で明瞭な屈折を見るものと思われる。3は外面が縦ヘラ削りで、内面は刷毛目のあとに削りとなでを行なう。4は内外面ともヘラ削りである。ともに砂粒を多く含む。焼成良好。5～7は接合はしないが同一個体の破片らしい。脚部内面はヘラ削りであるが、他は器表面風化のために調整は不明。本来は全面丹塗りである。全体に薄手のつくりで胎土精良、焼成ややあまい。

甕（8・9）　頸部～肩部の破片で、全体の器形は知りえないものの、やや肩が張った形状

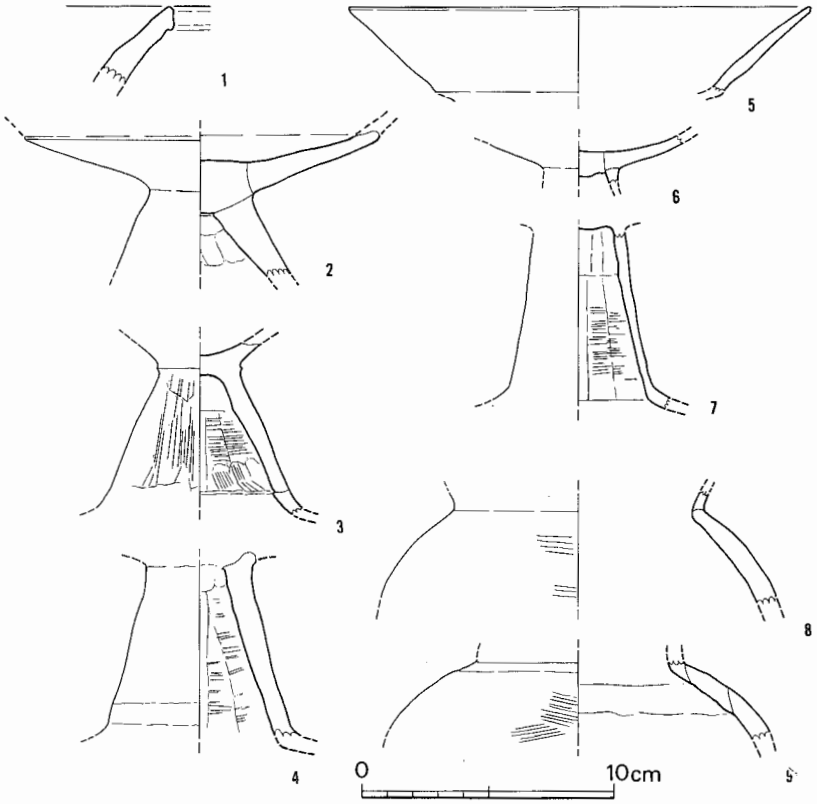


Fig. 132　11号墳出土土器実測図（1/3）

になるらしい。いずれも外面は刷毛目のあとなで、内面はなでつける。頸部は横なで。胎土良、焼成ふつう。

2．鉄器（PL. 57、Fig. 133）

剣（1）　鋒と身の破片である。身幅2.3cm。鎬はみられない。鋒に近い方に木質が銹着す。

鎌（2）　大型の鎌である。大刀の一部とする可能性もないではないが、細身にすぎることより鎌とする。最大幅 4.1 cm。

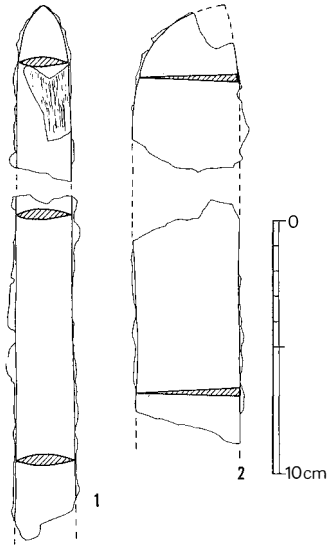


Fig. 133　11号墳出土鉄器
実測図（1/2）

b．40号墳

i．規模（PL. 30、Fig. 131）

地形的に低くなってゆく北側は周溝が巡らないが、全体に楕円形に近い形状となる。

ii．主体部（PL. 30、Fig. 134）

掘り方は狭長な長方形だが、他に比して深く、掘り込み面から箱式石棺の蓋石まで約40cmの空間をもつ。蓋石は2枚で、頭位と思われる東側に大きな石材を置く。石の接点と周縁には粘土目張りを施す。側壁は2枚の板石で、内面に赤色顔料の塗布は見られない。

iii．出土遺物

周溝から土師器甕が出土し、主体部棺外に鉄刀子1本が副葬されていた。

1．土器（Fig. 135）

土師器

甕　口縁部の小破片である。口頸部は内外とも横なで、肩部外面はなで、内面はヘラ削りを施す。

2．鉄器（PL. 57、Fig. 136）

刀子　茎を欠くもので、現存長9.9cmを測る。関の背の所に布が銹着す。

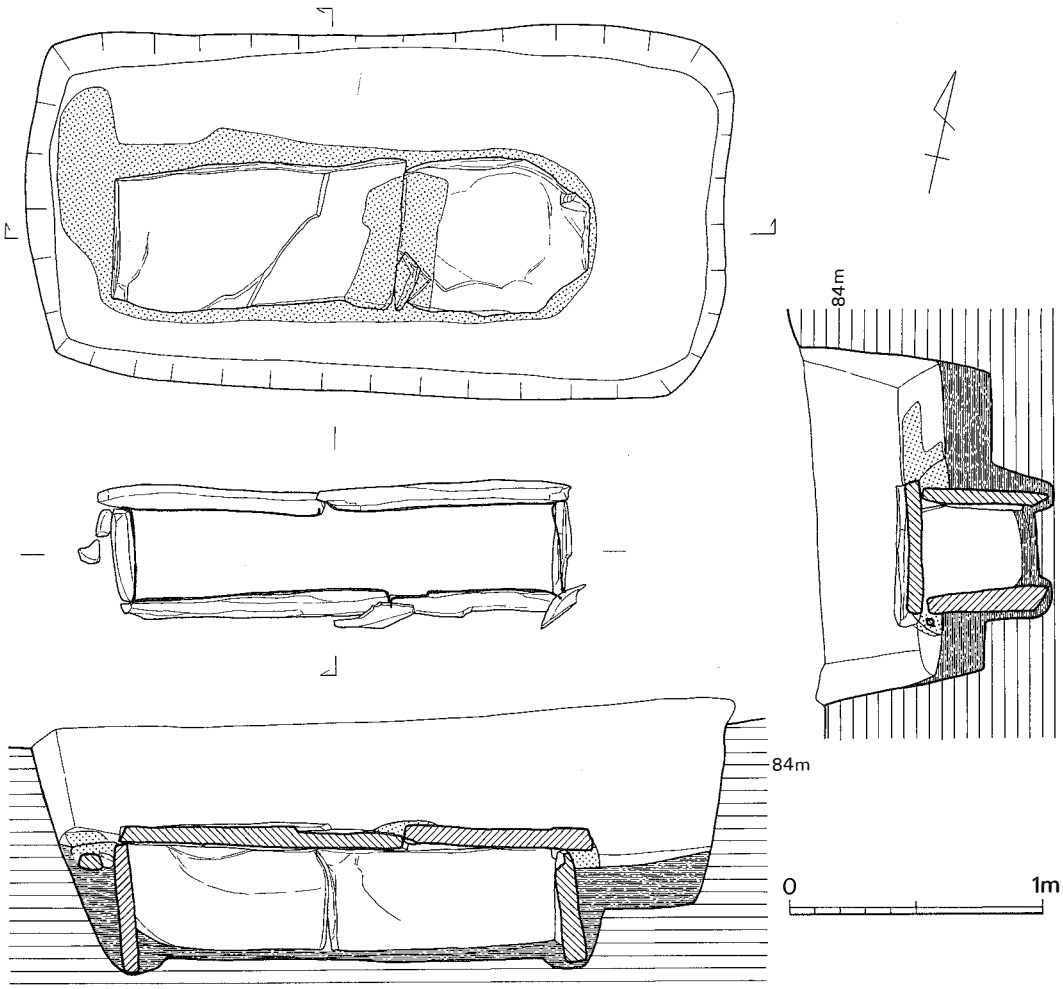


Fig. 134　40号墳主体部実測図（1/30）

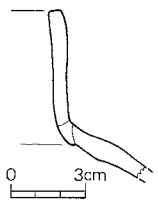


Fig. 135　40号墳出土土器
実測図（1/3）

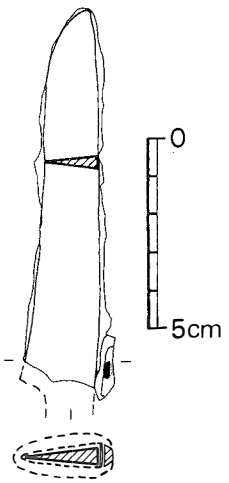


Fig. 136　40号墳出土鉄器実測図（1/2）

c．41号墳

i．規模（PL. 31、Fig. 131）

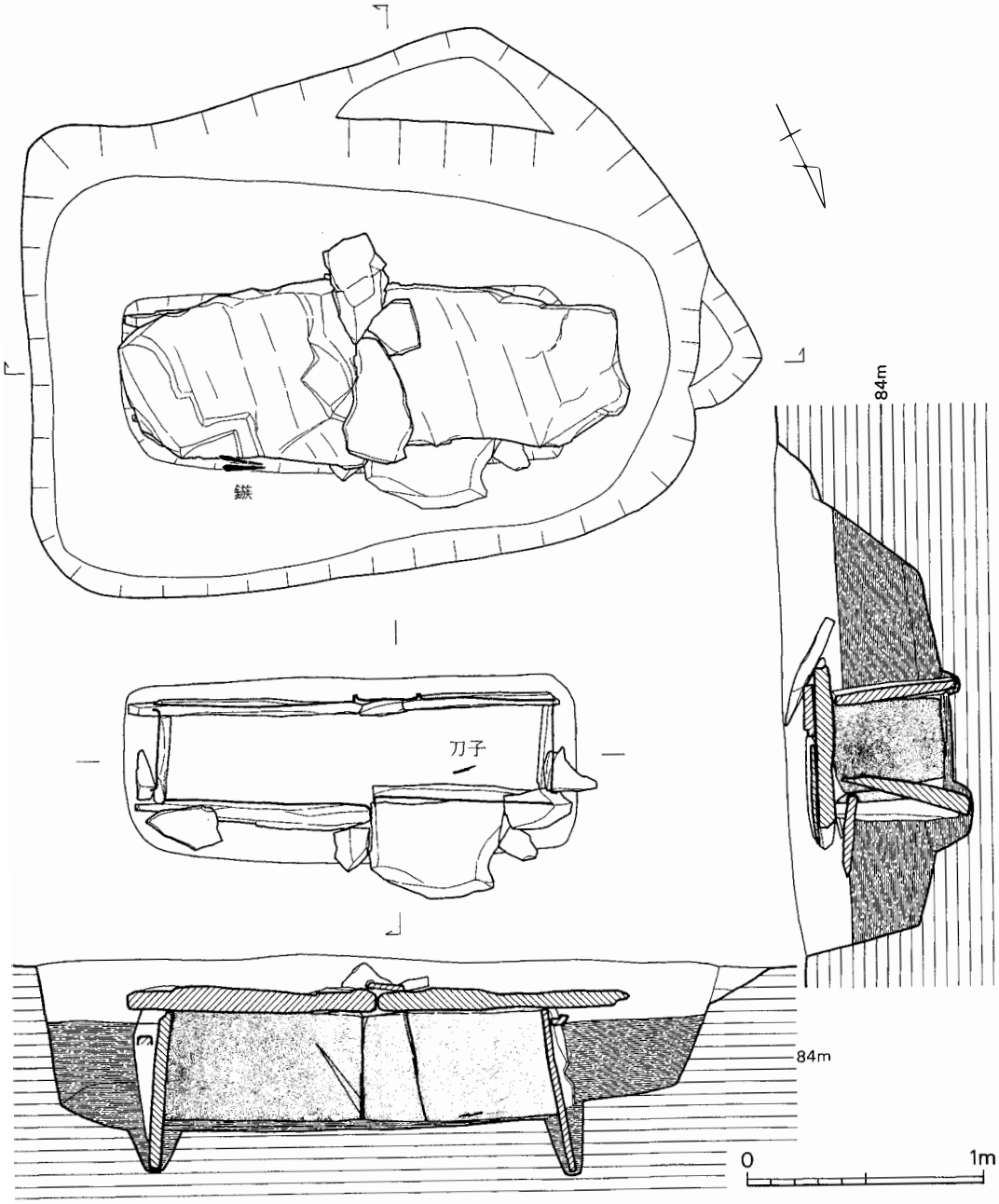


Fig. 137　41号墳主体部実測図（1/30）

ややいびつな円形を呈し、北側は地形的に低くなるので周溝をもたない。南西側には周溝内に小型の箱式石棺があり、それの西側は幅0.7mのブリッジとなる。

ii．**主体部**（PL. 31、Fig. 137）

箱式石棺である。掘り方はややいびつながら長方形になるが、その主軸上に石棺がのらない。蓋石は2枚を用い、接点には扁平な小石材を何枚か置く。北側の棺外蓋石下には控え積みではないが、板材5～6枚を置いている。両側壁とも2枚ずつで、小口壁をはさむ型式となる。

iii．**出土遺物**

周溝内から土師器高坏が、主体部内から鉄刀子、棺外より鉄鏃が出土している。棺外副葬の鉄鏃群は北側の蓋石下に、鋒を東に向けて束ねた如くして置かれていた。

1．土器（Fig. 138）

土師器

高坏　各部分の破片の実測図を合わせて図上にて復原した。脚裾部は内面に明瞭な屈折があり、筒状部はエンタシス状となる。坏部は丸みをもってのびあがるらしい。脚部内面は横ヘラ削り、外面はヘラ磨きらしい。胎土精良、焼成良好。

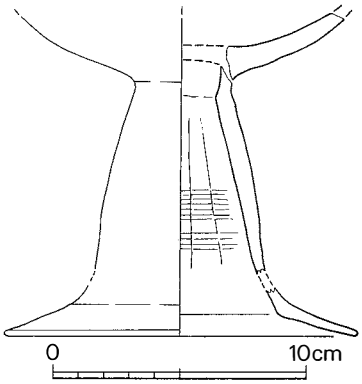


Fig. 138　41号墳出土土器実測図（1/3）

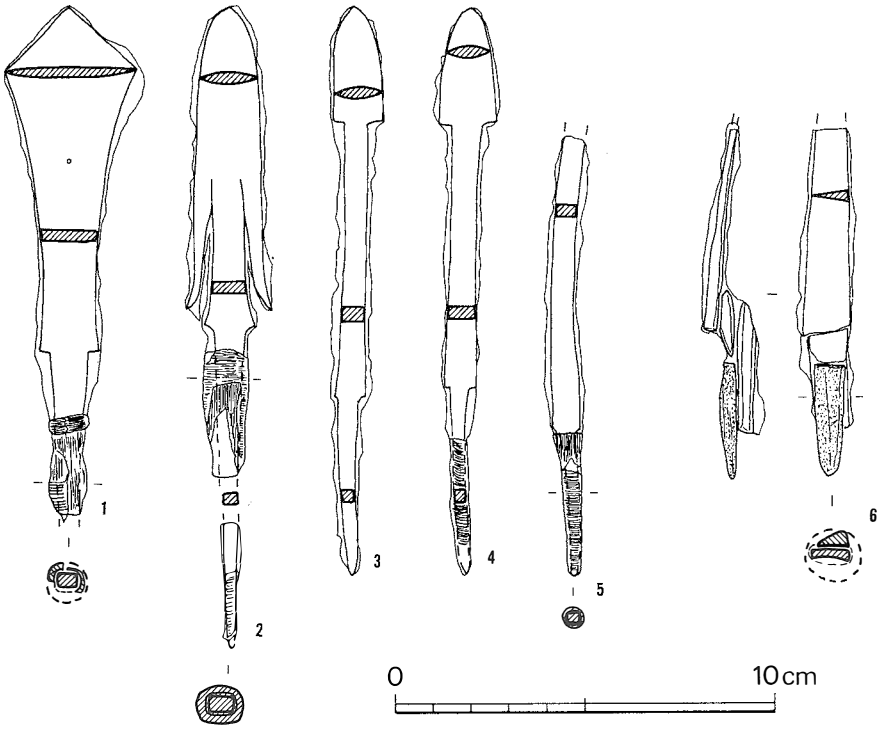


Fig. 139　41号墳出土鉄器実測図（1/2）

2．鉄器（PL. 57、Fig. 139）

鏃（1～5）　1は定角形をなすが、身の中央はスリムになる。刃部長9.0cm。身の中程より先端側に孔を見ることができ、透しの一部と思われるがその全形は知りえない。茎には竹か木の残存を見る。2は柳葉形をなし、逆刺はきわめて深い。箆被に竹らしきものを見るが、これは楕円形に近い。現存長12.3cm。3・4は両丸造の三角形式で、完形である。刃部に若干の違いをみるが、つくりはほぼ同じで全長も同じ14.9cmを測る。

刀子（6）　棺内に存した。三つに折れて銹着しているが、鋒はもともと欠いていた。柄には鹿角が一部に遺存している。

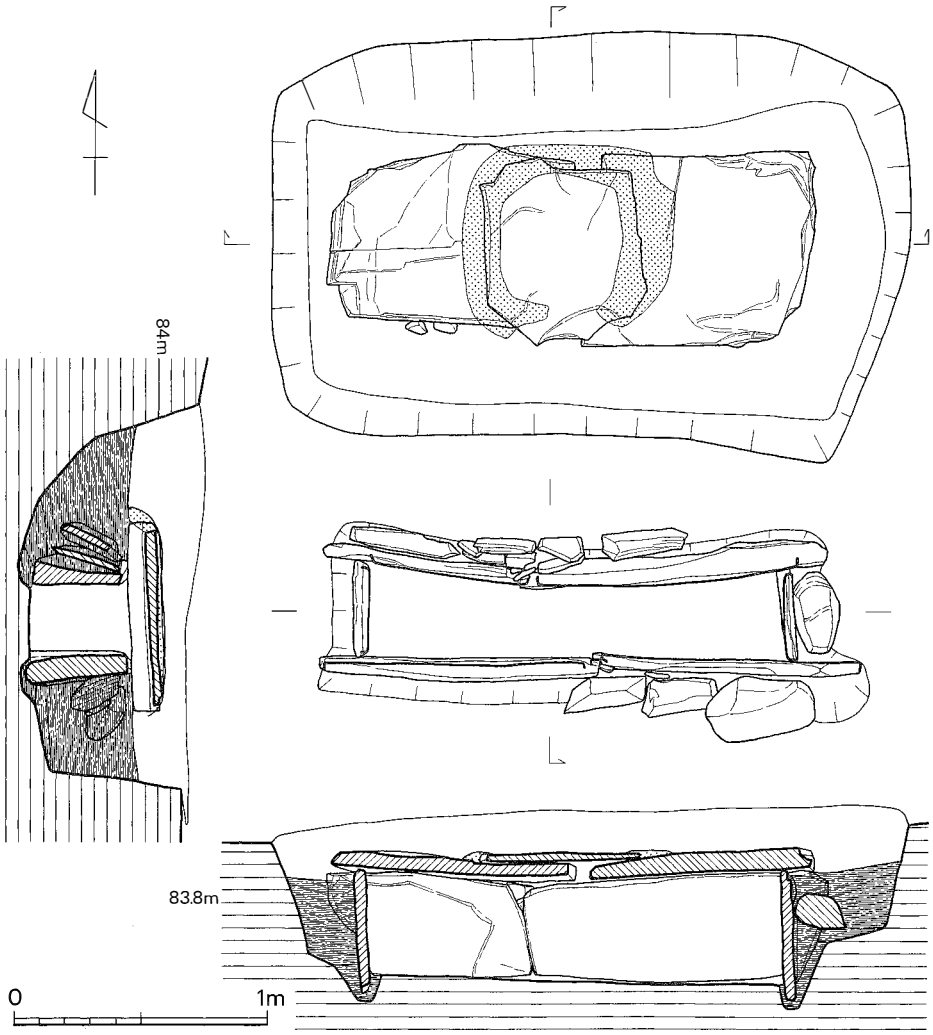


Fig. 140　42号墳主体部実測図（1/30）

d．42号墳

i．**規模**（PL. 32、Fig. 131）

やや南北に長い円墳で、径10m前後を測る。主体部の中心と周溝の中心とが一致する。

ii．**主体部**（PL. 32･33、Fig. 140）

箱式石棺である。蓋石は2枚を架けたあと、接ぎ目の所にもう1枚を被せ、その周縁を粘土で目張りする。棺材の裏込めの補強材として、棺外に両側壁に接して石材をいくつか置いている。東側小口部にも河原石が置かれている。両側壁は2枚を用い、小口壁をはさみこむ。東側の小口部においては、側壁が小口壁をきっちりはさみこむように、側壁の方に若干の抉りを入れている（PL. 33－(2)(3)）。

出土遺物は周溝、主体部内外とも見られなかった。

小　結

以上に説明してきた4基も、先の33・36～39号墳にみられた如く、中央の広場を囲むかのように配列されており、そこに墓前祭に関わる墓地構成を見ることも可能と思われる。

42号墳を除いて、僅かながらも周溝からは土器が、主体部内外からは鉄器が出土し、ことに土師器が出土したことは古墳の築造時期を知る手がかりとなる。11号･41号墳出土の高坏は、24号墳出土のものと器形・手法上で大差なく、ほぼ同時期の所産とみてよい。これにより、各古墳を大略5世紀初頭～前葉に比定する。

10．12号墳

ⅰ．**規模**（PL. 34、Fig. 141）

径14ｍ前後になる円墳である。周溝西側は未発掘区域にかかる。

ⅱ．**主体部**（PL. 34、Fig. 142）

竪穴式石室である。発掘前には、蓋石の一部が石室の上に立って存した。本来２～３枚の蓋石であろう。

掘り方は方形に近く、主体部主軸はやや南に寄っている。控え積みの石材も多く存し、竪穴式石室としては小規模ながらオーソドックスなものといえる。両側壁とも４個の石を地山面に横に置いて最下部とし、その上に扁平石を平積みおよび小口積みで５～７段積み上げる。間隙は小石でパッキングする。小口部は地山を掘り下げて、高さ35cm前後、幅50cm以上の石を横長に埋め込み、その上に小口積みにしてゆく。床面は、地山上に３～４cmの厚さに土を敷いて床とするが、この中に径１cm前後の石が含まれているのは、敷石のつもりなのかどうか判然としない。頭位は東である。

ⅲ．**出土遺物**（PL. 58、Fig. 143～145）

石室床面には人骨の一部が置在し、装身具・鉄器類が副葬されていた。頭骸骨は本来の位置から転げ落ちて肢骨の近くにある。本来の頭骸骨の北側にはガラス玉と勾玉、そして鉄刀子が存した。足位小口部南コーナーには、鉄斧２と鉄鎌１が壁にたてかけるようにして置かれていた。

周溝からは土器若干が出土している。

１．土器（PL. 58、Fig. 143）

須恵器

甕（１・２）　１はやや軟質の土器で、胎土は良好であるが焼成はあまい。灰白色を呈し、復原口径は20.0cmを測る。口縁端部のつまみだしに特徴をみる。肩部はかなり張り出していくようであるから、胴径に比し、頸部のかなりしまる器形になりそうである。外面肩部に平行タタキ痕が見え、それ以外は横なでを施す。頸部内面には指おさ

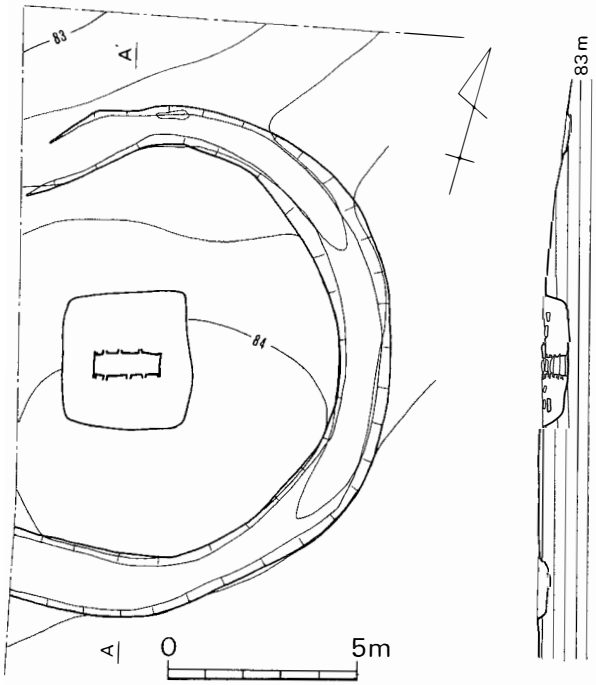


Fig. 141　12号墳地形測量図（1/200）

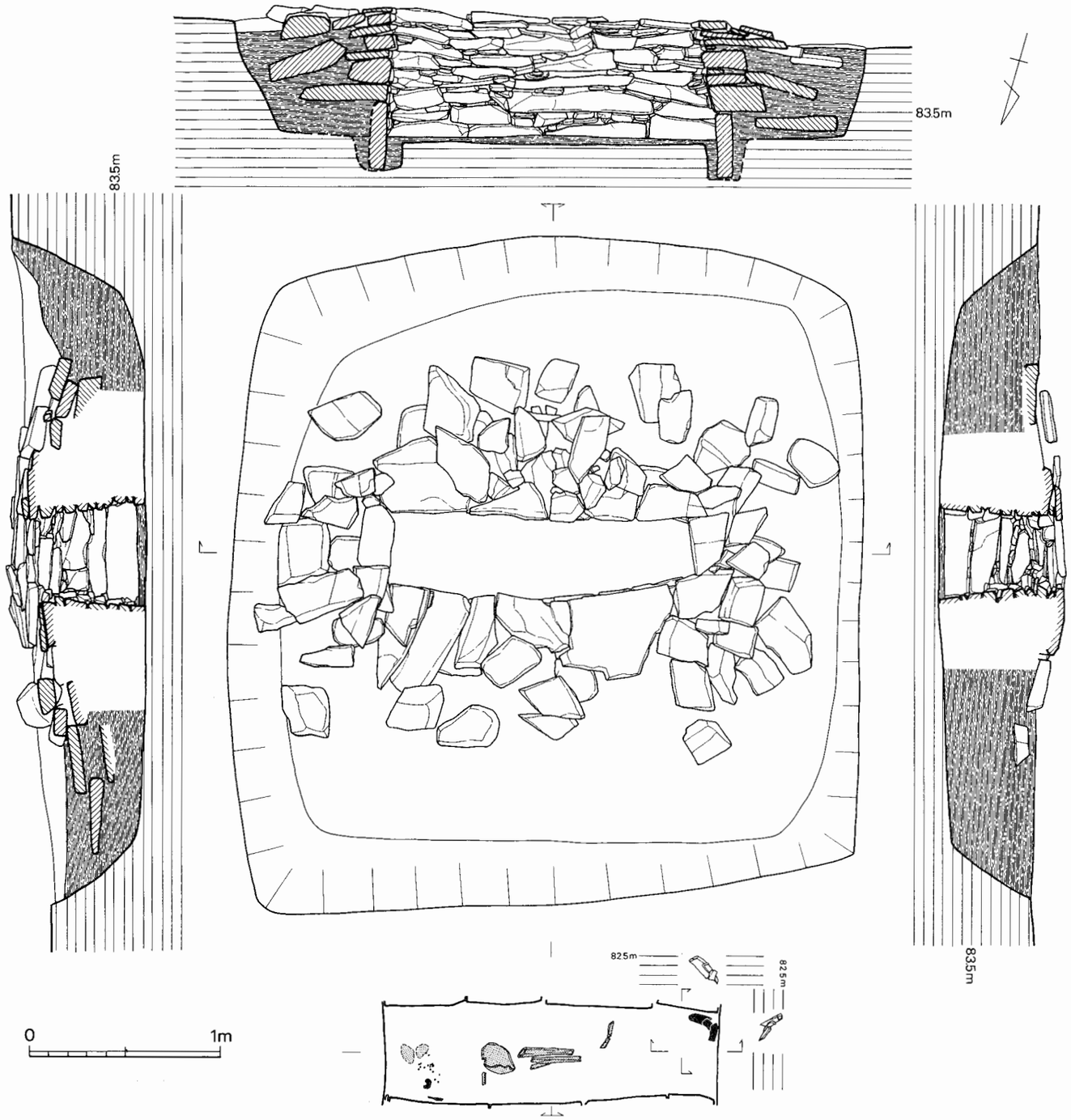


Fig. 142　12号墳主体部実測図（1/30）

え痕をみる。2は胴部破片で、1とは全く別個体である。外面平行タタキで、擬格子状になる。内面は同心円。胎土良、焼成堅緻、灰黄色を呈す。

土師器

甕（3・4）　3は復原口径16cmを測る。頸部にはなでによるつまみあげの小さな突帯をもつ。内外とも横なでらしい。4は小破片で口径までま知りえない。肩部外面が横刷毛

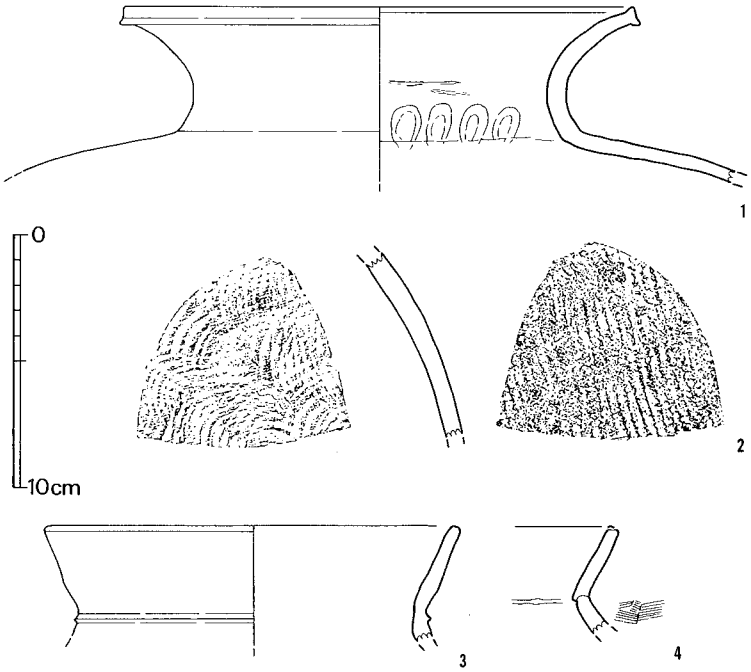


Fig. 143　12号墳出土土器実測図（1/3）

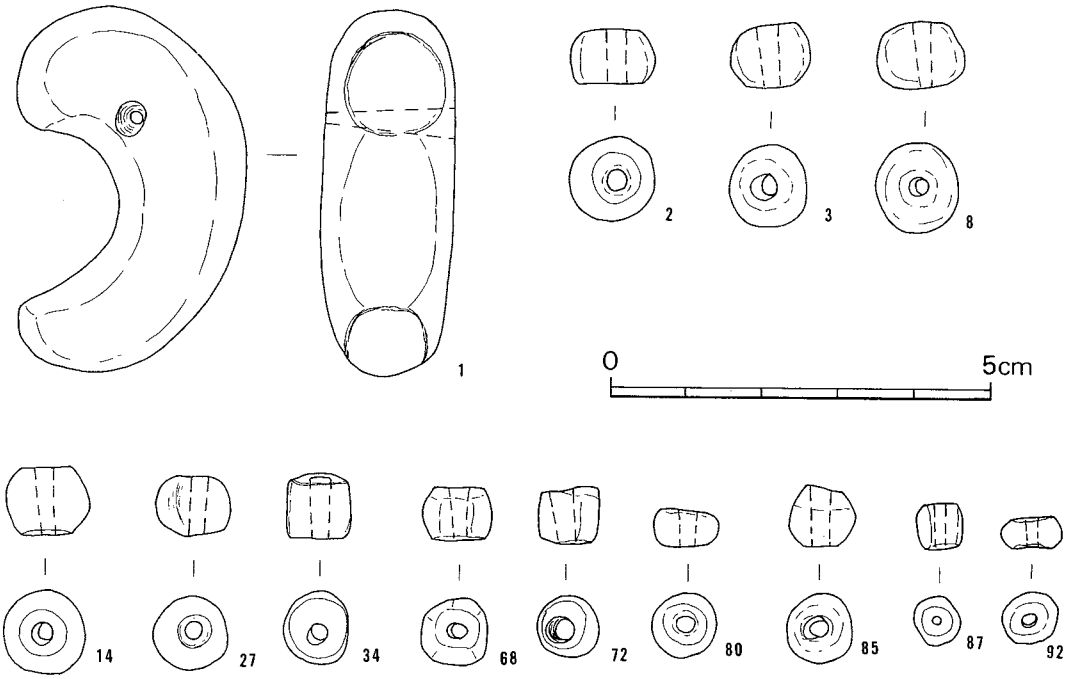


Fig. 144　12号墳出土玉類実測図（1/1）

で、それ以外は横なでを施す。頸部内面は粘土の接ぎめが明瞭である。3・4とも砂粒を多く含むが、焼成はふつうで黄褐色を呈す。

2．装身具（PL. 58、Fig. 144）

勾玉1個とガラス玉105個以上が出土した。

勾玉（1）　硬玉製と思われ、片面から穿孔する。全長47.95mm・頭部幅21.5mm・重さ40.4g。明るいオリーブ色を基調に、薄緑の脈らしき節理をみる。

ガラス玉（2～92）　105個以上を数えるが、12個を図示した。丸玉および小玉であり、高さ3.5～10mm・径5.5～11mm・孔径1.3～3.5mmの中にほとんどが納まる。全体にガラスの質はあまりよくなく、青～藍系統の色調をなす。

3．鉄器（PL. 58、Fig. 145）

斧（1・2）　大小2型あり、1は全長14.5cm・刃部幅6.2cm。刃部には稜がついて本体と区別できるようだ。袋部は折り返しの方が若干丸みをもつ。内面には本質が銹着す。2は1と比したら半分くらいの小型品で、全長8.3cm・刃部幅3.0cmを測る。刃部は若干鈍い感じもするが、稜がついて本体と区別できる。折り返し部分（袋部）と本体の境目あたりの側面は少し段

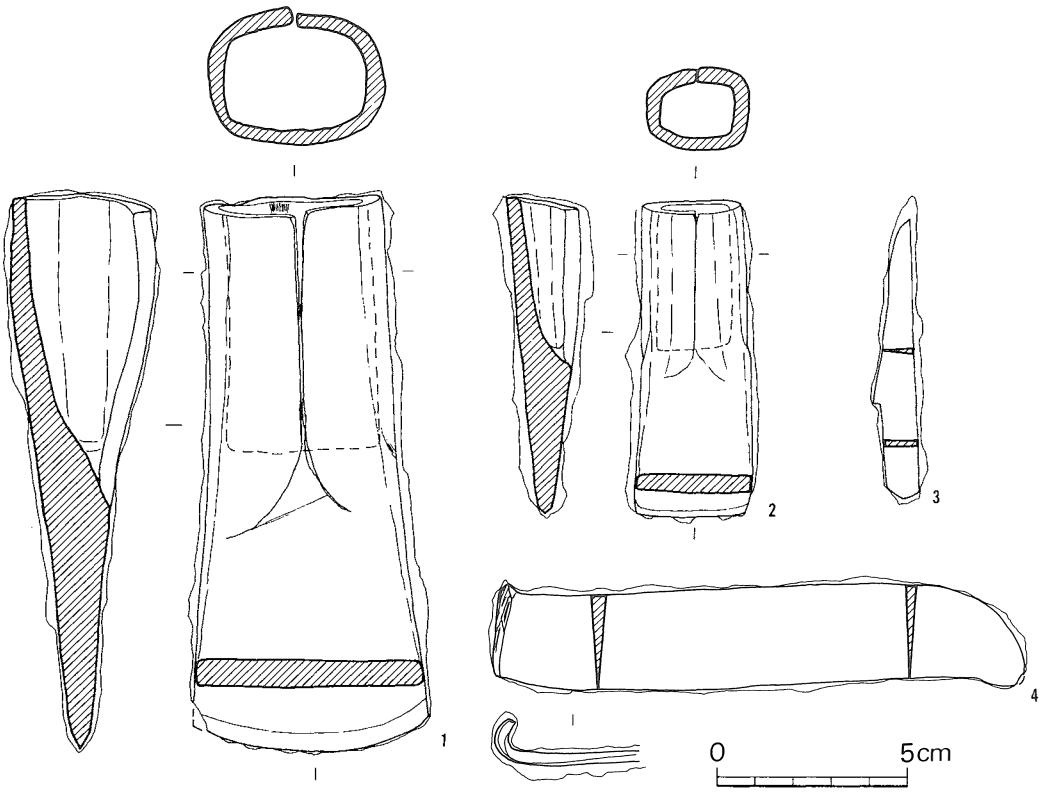


Fig. 145　12号墳出土鉄器実測図（1/2）

がつく。

刀子（３）　全長7.3cm・刃部長4.8cm・関幅1.15cmの小型品で薄手のつくりである。

鎌（４）　全長14.0cm・身幅2.50cmを測る。刃部は折り返しから少し外弯気味にのびてゆき、先端近くに至ると急に内弯する。柄を装着して右利き用に使用すれば、鎌が柄をとりまく形状となり、柄は鎌本体により一部かくれることになる。左利き用だと、そのまま裏返しにするから、柄は全体が見えることになる。通常は折り返しはこの逆であり、この手の形成が左利き用なのか、あるいは偶然このように折り曲げたのかはっきりしない。

小　結

小型ではあるが、整美な竪穴式石室である。人骨を鑑定していただいた永井先生の所見によれば、２体分あって１体は男性であるが、もう１体は女性である可能性が強いとされている（本書Ⅴ－１参照）。追葬か合葬かは定かでないが、本来単体埋葬の形式である石棺・竪穴式石室への複数体埋葬の例を加えたことになる。

周溝出土土器は須恵器の位置づけが問題となるが、陶邑Ⅰ型式第１～２段階併行とし、５世紀前半でも中頃に近い頃に比定したい。

Fig. 146　12号墳主体部東半部

11．石棺墓・石蓋土壙墓・木棺墓

周溝を持たず、古墳の周辺に存したが、いずれの古墳に伴うものか断定できない。ただ、C5号については41号墳に付属するとみてよいだろう。石棺墓5基、石蓋土壙墓4基、木棺墓1基をここで扱う。時期的には箱式石棺を主体部におく古墳とほぼ同じ5世紀前葉のものとみて大過あるまい。

a．C1号（1号石棺墓）（PL. 35、Fig. 68･147）

24号墳の東南にあり、恐らく24号墳に付属するのであろう。大きさからみて小児用と思われる。蓋石は大きな扁平石3枚と、その上下および接ぎ目に幾つかの石を置いており、そのあり方は24号墳主体部の態様に類似する。側壁は北側2枚、南側3枚で、南側は2箇所の接ぎ目に補強材を置く。

出土遺物（PL. 58、Fig. 148）

棺内の中心よりやや西側の北側壁に近い所に鉄刀子が副葬されていた。

鉄刀子　全長11.45cm、刃部長7.9cm、関幅1.8cmを測り、両関となっている。茎には木質の錆着をみる。

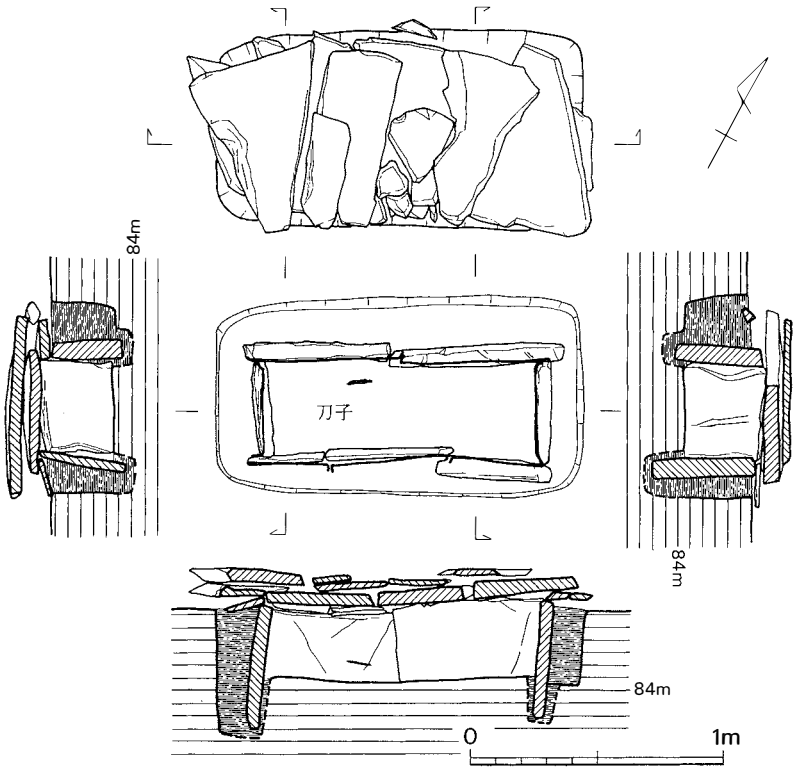


Fig. 147　C1号実測図（1/30）

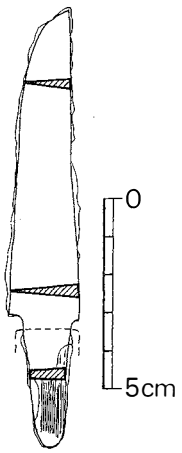


Fig. 148
C1号出土鉄器
実測図（1/2）

b．C 2 号（2 号石棺墓）(PL. 35、Fig. 29・149)

8号墳の西にあり、棺材はほとんど抜き取られていて僅かに2片の石材を見るのみである。側壁部に棺材用の掘り込みはなく、小口部も東側にのみ掘り込みがある。両側壁が小口壁をはさむ形式となる。8号墳に付属するものであろうか。出土遺物はない。

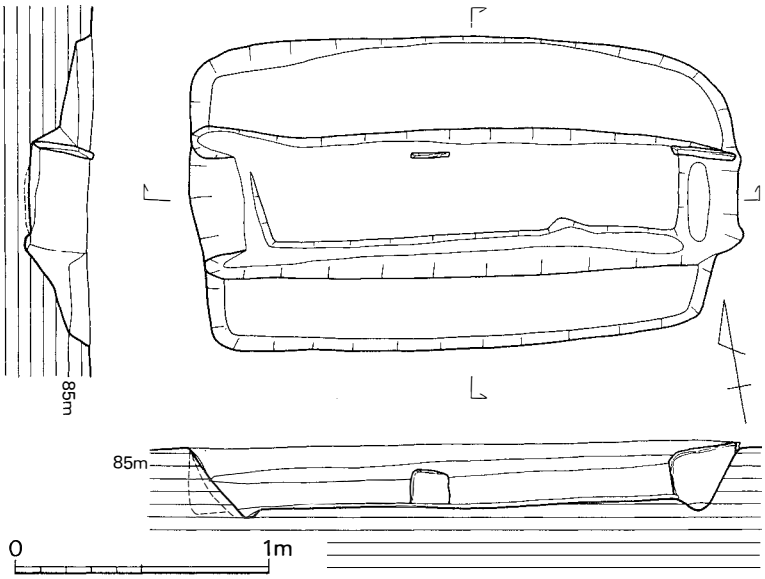


Fig. 149　C 2 号実測図（1/30）

c．C 3 号（3 号石棺墓）(PL. 35、Fig. 115・150)

主軸長55cmの小さな小児用の石棺である。蓋石は既になかった。側壁・小口壁ともに1枚ずつを用い、全体に内傾している。34号墳周縁に存するので、これに付属するのであろうか。

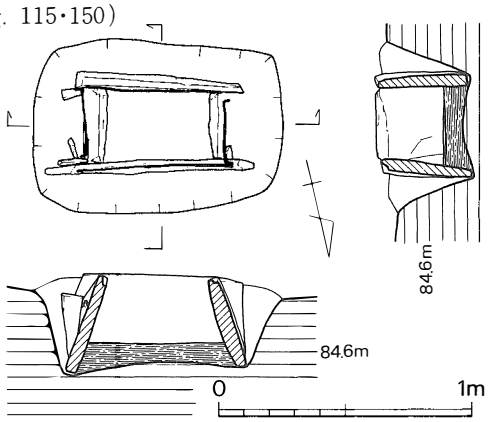


Fig. 150　C 3 号実測図（1/30）

d．C 4 号（4 号石棺墓）(Fig.115・151)

33号墳と36号墳の間にあり、破壊が著しく、僅かに小口壁・側壁の一部を残すのみである。掘り方もあまりはっきりせず、大きさ不明であるが、小児用と思われる。側壁の南側には粘土が置かれていた。

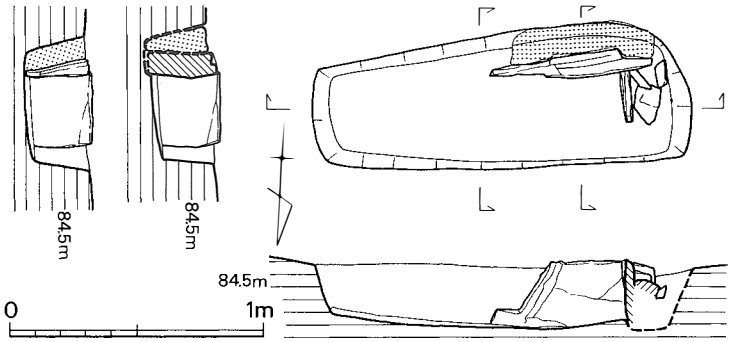


Fig. 151　C 4 号実測図（1/30）

e．Ｃ５号（５号石棺墓）（PL. 36、Fig. 131・152）

41号墳の周溝内にあり、周溝との切合いが認められないので、41号墳に付属するものとしてよい。掘り方は把えにくかったが、長方形プランである。蓋石は１枚を使う。側壁は南側に２枚を用いる。両側壁が小口壁をはさみこむが、殊に西側小口部は側壁が大きく外へ飛び出ている。小さいながらも整美な石棺といえる。

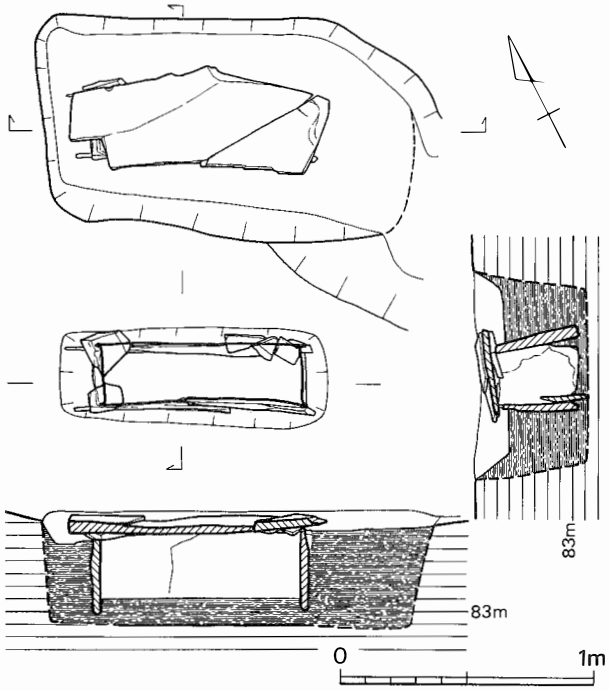


Fig. 152　Ｃ５号実測図（1/30）

f．ＳＣ１号（１号石蓋土壙墓）（PL.36、Fig.103・153）

28号墳の北東部に存した。精査したけれども二段掘りとはならず、素掘りの土壙に５枚の蓋石を被せたものである。蓋石の接ぎ目には小石を置くとともに粘土にて目張りを行なう。この目張りの粘土は、東半部２箇所は灰色＋赤褐色のものを用い、西半の２箇所は暗褐色のものを用いている。頭位は東とみてよかろう。

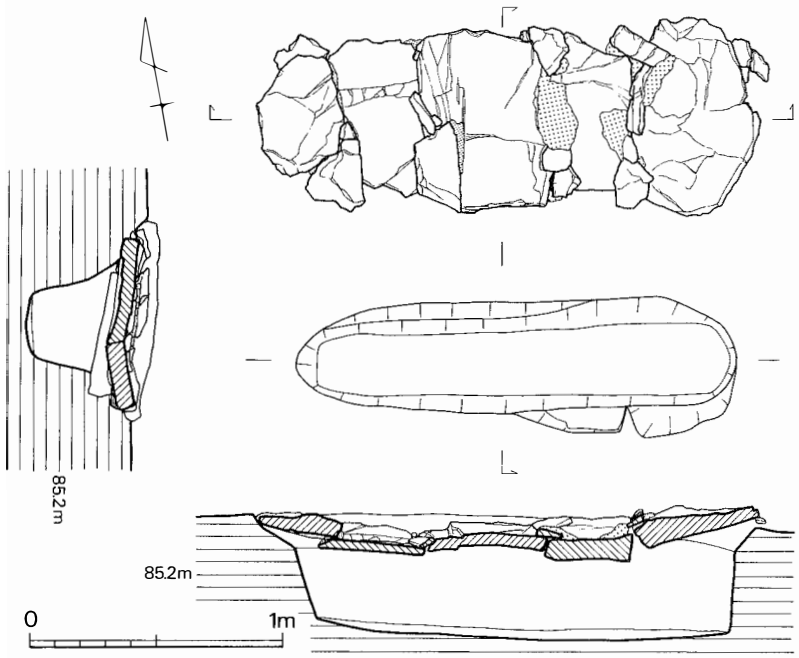


Fig. 153 ＳＣ１号実測図（1/30）

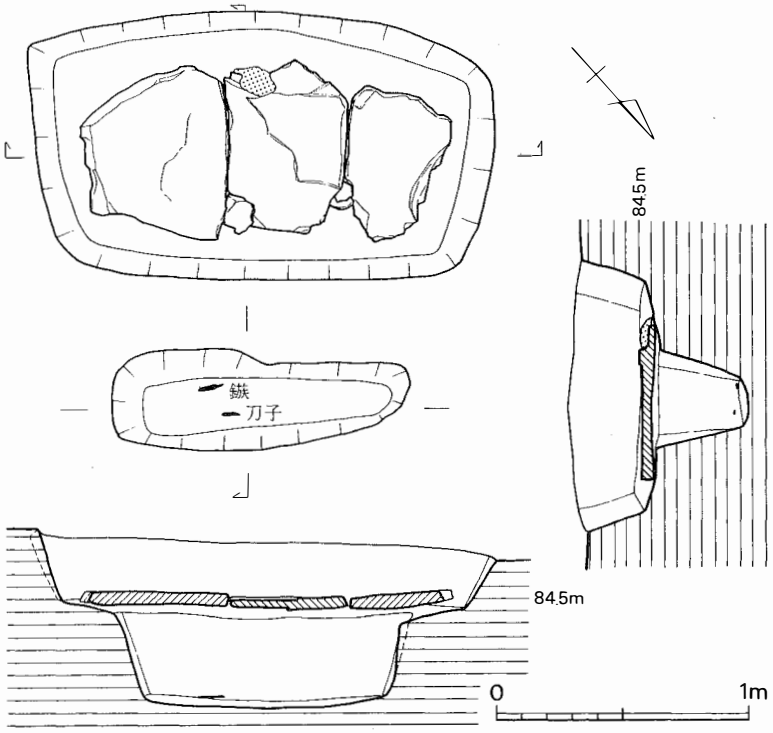


Fig. 154　SC 2号実測図（1/30）

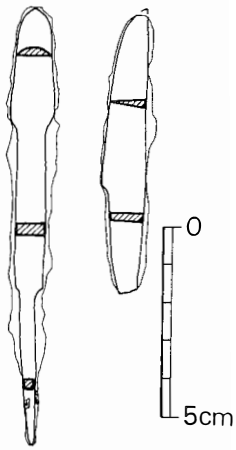


Fig. 155
SC 2号出土鉄器
実測図（1/2）

g．SC 2号（2号石蓋土壙墓）（PL. 37、Fig. 115・154）

34号墳の西北に存する2段掘りの石蓋土壙墓である。蓋石は3枚あり、頭位の東側が大きいもので、足位側へと順に小さくなる。蓋石上の一部に黄色粘土を見る。

出土遺物（PL. 58、Fig. 155）

中央より頭位寄りの北側に鉄刀子、南側に鉄鏃が、いずれも鋒を東に向けて副葬されていた。

鉄鏃（1）　完形品で全長11.4cmを測る。片丸造で逆刺はなく、なだらかな関を形成。する。茎には木質が銹着する。

鉄刀子（2）　小形品であるが、かなり研ぎ減りしたものである。全長7.5cm、刃部

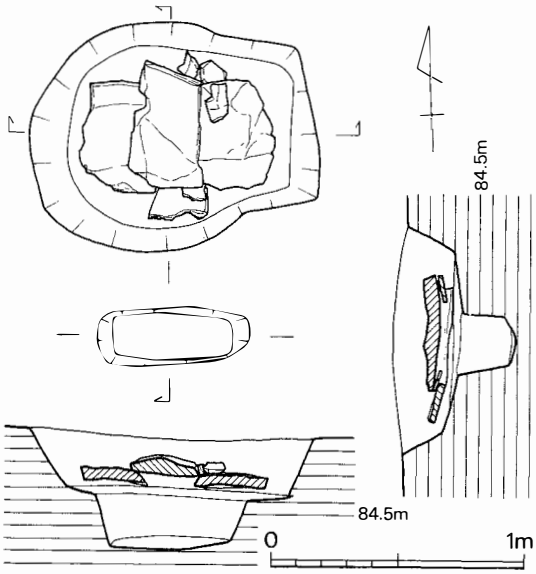


Fig. 156　SC 3号実測図（1/30）

長4.7cm、関幅1.1cmを測る。刃部に布が銹着している。

h．ＳＣ３号（３号石蓋土壙墓）(PL. 37、Fig. 115･156)

ＳＣ２号より５ｍ程南に存する。小さいながらも２段掘りの石蓋土壙墓である。掘り方の平面プランは帆立貝の形となるが、これが何を意味するのか不明。蓋石は両小口部側に２枚を置き、その中央に両方に架かるように、もう１枚を乗せている。

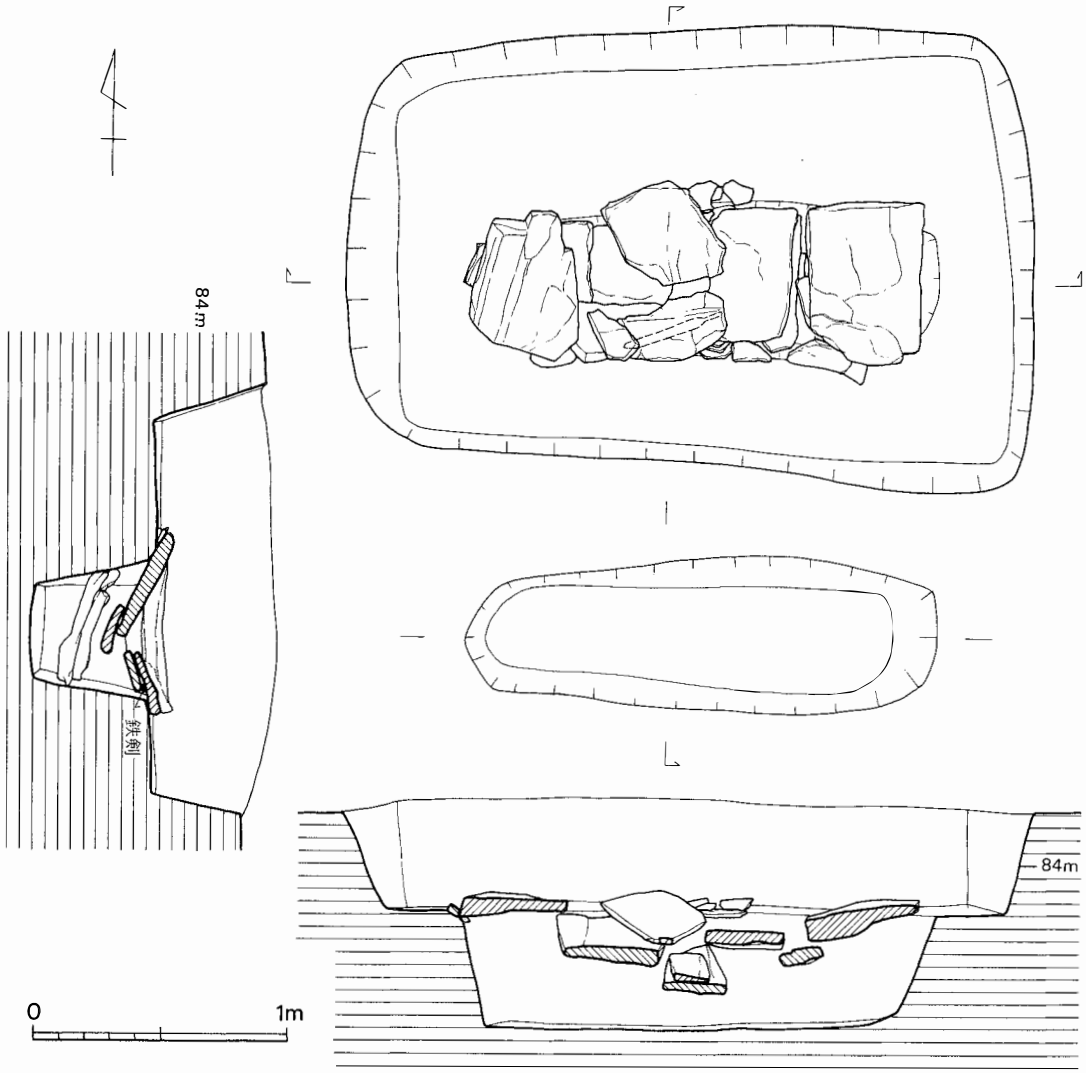


Fig. 157　ＳＣ４号実測図（1/30）

i．ＳＣ４号（４号石蓋土壙墓）（PL. 38、Fig. 131・157）

42号墳の西隣に存する。二段掘りの石蓋土壙墓で、蓋石は中央部が中に落ち込んでいた。蓋石は基本的には６枚であるが、その他に何枚かを重ねている。

出土遺物（PL. 58、Fig. 158）

南側の蓋石と蓋石の間の、表面からは見えない位置に鉄剣１口が副葬されていた。

鉄剣　茎と刃部の一部を欠くがほぼ完形に近い。現存長42.2cm、身長32.2cm、関幅3.5cmを測る。身には鎬は見られない。剣身に木質の銹着を見ないが、茎尻に近い方には木質とその上に糸巻きが若干残っている。

j．M1号（１号木棺墓）（PL. 39、Fig. 103、159）

28・29号墳の中間の北側に存する。石棺墓の棺材が完全に抜き取られたものである可能性も否定はできないが、ここでは木棺墓としておこう。両側壁の掘り込みのみを見る。

Fig. 158
ＳＣ４号出土鉄器
実測図（1/4）

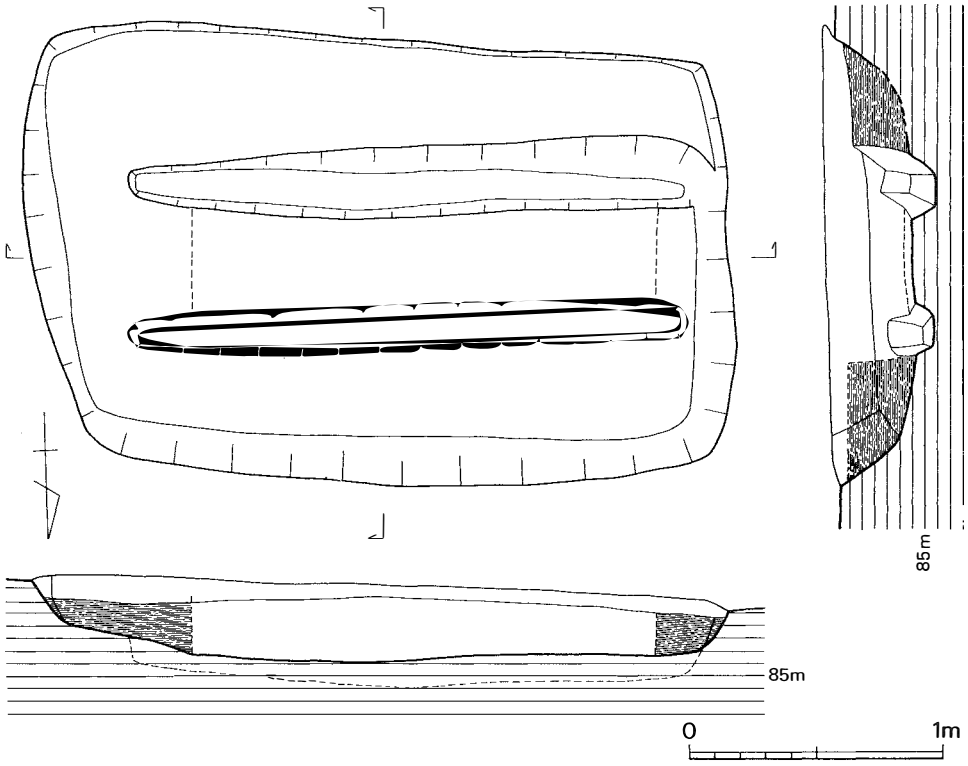


Fig. 159　Ｍ１号実測図（1/30）

B．旧石器・縄文時代の調査

立山の丘陵上で、古墳群より以前の時代については、昭和31年当時黒木高校の教諭であった川崎信暁・岩崎光氏等が踏査されている。その時の調査カードによると、「長峰台地の東縁耳納山脈前山の南縁にも近く高度60～80m、付近は立山古墳群であるが封土に黒曜石・石鏃片が散在し、押型文縄文破片もある。弥生期迄相当広く生活していたことが窺われる。」とされ、「出土品として縄文土器片石鏃は黒曜石の無柄で凹んだものが最も多く、三角鏃は3個で剝片は多数」と記入されている。その遺物は黒木高校に保管されている。

この川崎・岩崎氏の踏査以後、1980（昭和55）年まで当該遺跡は、福岡県教育委員会の『福岡県遺跡等分布地図（八女市・八女郡編）』の中で、遺跡番号110231で、立山縄文遺跡として挙がっている。その位置は若干相違してはいるが、今回の立山山古墳群の調査範囲も部分的に含まれている。

以上のことから、縄文早期の押型文土器の文化が見られることが、当然考えられていた。

押型文土器の出土する層位は、この付近では阿蘇系の火山灰が堆積した黒色土で、私達が黒墨層と称している中から採集されるのが常である。

立山山古墳群の調査範囲の中では、3ヶ所に多くの資料が出土する地点がある。Fig.160で示すX・Y・Zがそれである。その3ヵ所の中では、黒墨層の堆積はX・Yで見られる。一応この部分についてテストピットをあけることとし、Zの黒墨層がない部分については、12号墳と42号墳の間から、旧石器時代の細石器2点が出土していることから、押型文の時期よりも古い文化層を把握することを主眼と

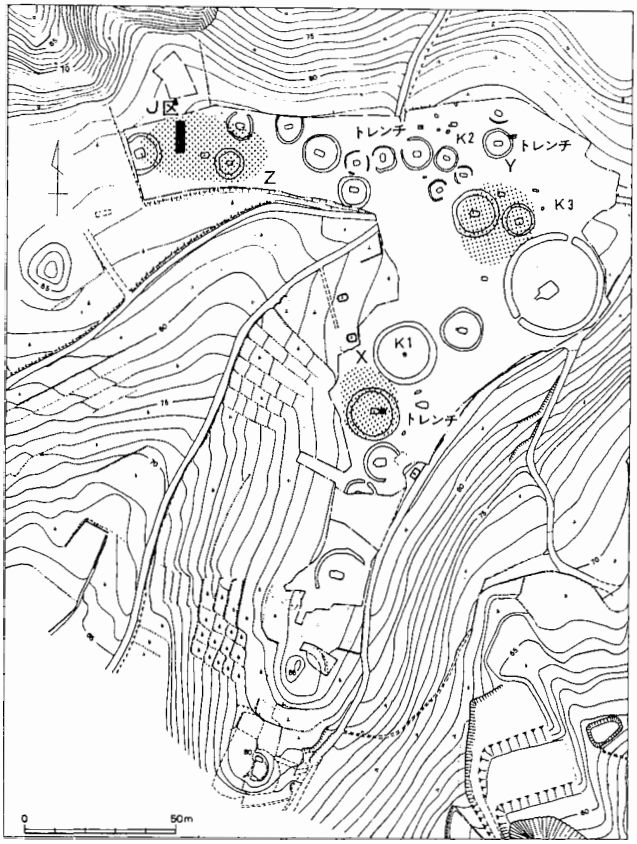


Fig. 160　旧石器・縄文時代遺物集中地点とJ区位置図
(1/2,500)

し、J区としてトレンチを設定した。J区を含め出土した資料はパンコンテナーで3箱分であった。その主体は石器の剥片が占めている。

1．J区(Fig.161)

3×11mの南北に長いトレンチを設定し、ドットによって1点ずつ取り上げることとし、原位置をおさえようと試みた。そして黄褐色粘土層の直上近くまで掘り下げてみた。

Fig. 161の平面図に示す様に、遺物出土状態を見ると、北側およびP1から東南方向に帯状に分布していることがわかる。また黄褐色粘土層、いわゆる新期ローム直上に分布することが理解できる。

P1は平面形が円形を呈し直径2.80mで、断面はほぼ北側に摺鉢状に落ち込み、肩を有しながら一段のテラスを持って上端になっている。中には灰褐色土がつまっていた。焼土としてあつかうかど

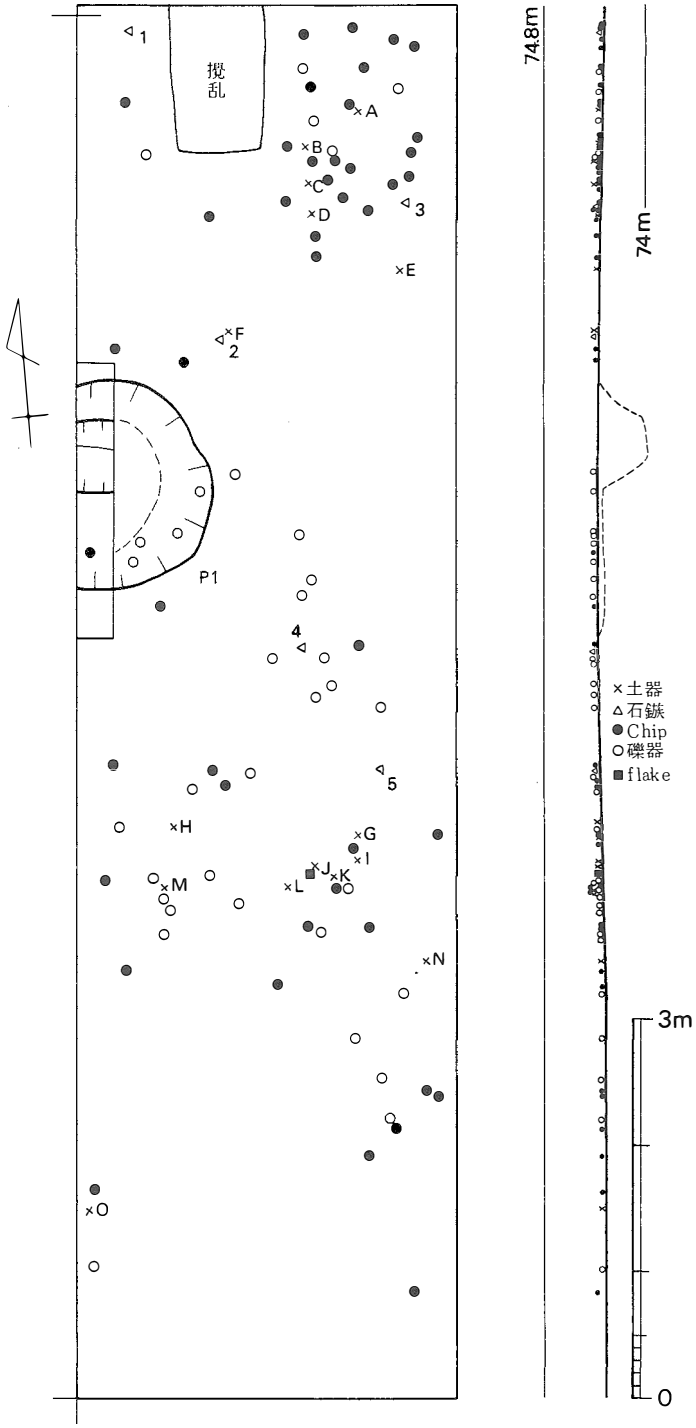


Fig. 161　J区遺物出土状態実測図（1/60）

うか疑問をもつが、ここではピットとして扱う。この上面で礫器が4点とchipが1点出土している。

原位置で捕捉されたものは石鏃5点・chip45点・礫器4点・剥片1点・押型文土器を主体とする土器15点である。

これらのうち、石器としては石鏃と掻器を、また土器では押型文土器を中心にとり上げる。

土器（PL. 59、Fig. 162）

J区からは原位置で15点の土器が出土している。そのうちの図示できるもの全てをとり上げた。その中での主体は楕円押型文であり、15点の8割強を占める。他は条痕文土器が1点、無文土器が2点ある。

Fig. 162の右側のアルファベットは、Fig. 161平面図で示した位置のアルファベットと同じである。1は横位方向に施文した楕円押型文である。胎土に細粒砂を含み石英粒が多く、器面の剥落を見る。焼成良好。色調は黄褐色である。2は胴部破片で縦位方向に施文したもので、胴部下半に指痕が残る。胎土に細粒砂を含み、長石・石英粒が多い。色調は暗褐色。焼成は良好であるが、器面には剥落が見られる。3は楕円粒が小さい殻粒文で、横位方向に施文している。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で焼成は良好である。4は口縁部破片で器面には横位方向

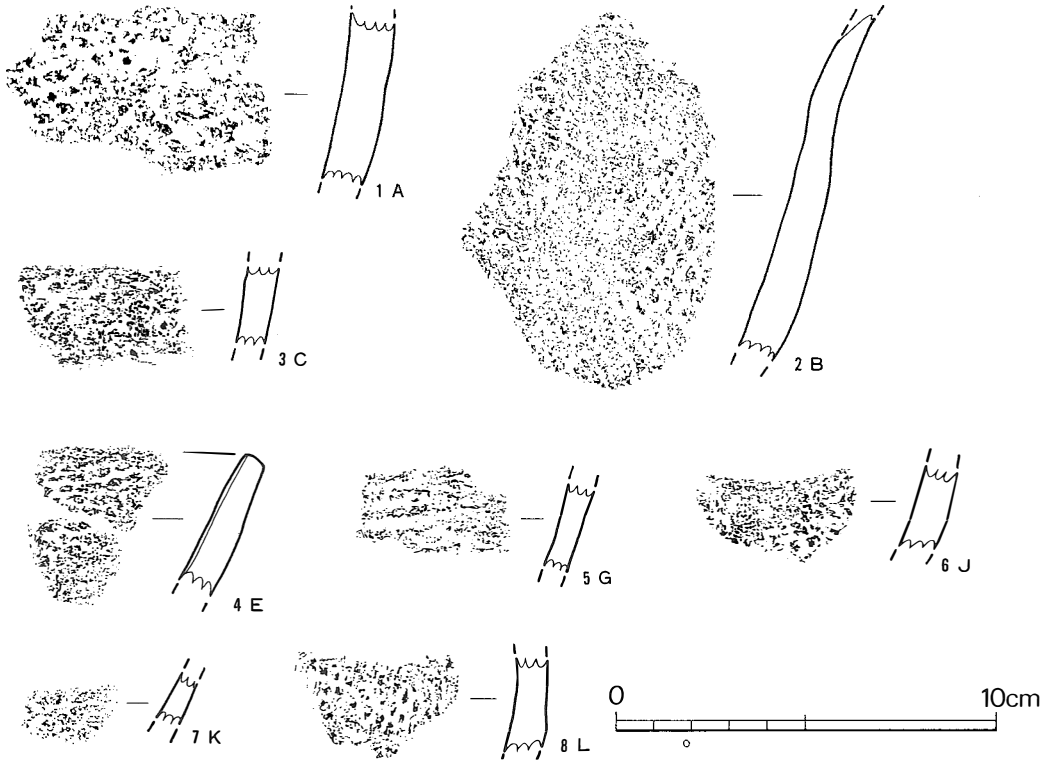


Fig. 162　J区出土土器実測図（1/2）

の穀粒文を施し、裏面に施文具による原位条痕を縦位方向に施文している。胎土に小石を含み、色調は黒褐色で焼成は良好である。5は条痕文土器で、胎土は押型文土器のそれと同じで、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。条痕は押型文原体を引いたものと同じ様な感じが強い。ここでは一応条痕土器として分類しておく。6は横位方向の施文で、胎土および色調・焼成は3と同じである。7は横位方向の施文で、胎土は細粒砂を含む。色調は暗褐色、焼成は良好で、胎土に若干繊維分が含まれている。8は施文方向が、横位方向と縦位方向に重なった部分であり、胎土に細粒砂を含み、色調は暗褐色、焼成は良好である。

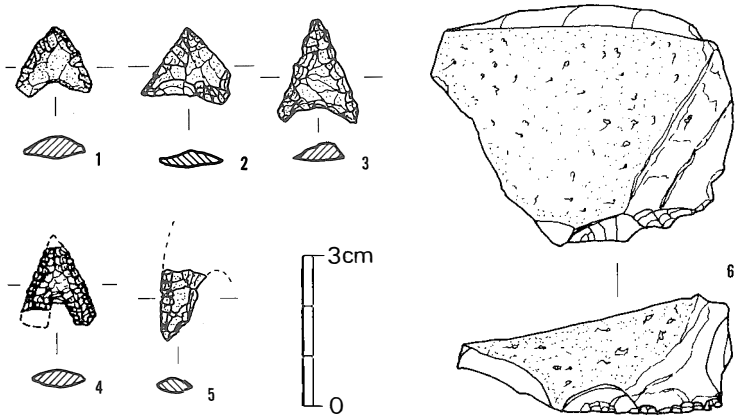


Fig. 163　J区出土石器実測図（2/3）

石器（PL. 59、Fig. 163）

1～5は石鏃である。Fig. 161の原位置平面図での番号と一致する。5は黒曜石製で、他はサヌカイト製である。1は抉りが少ない逆ハートのものである。2は三角鏃に近い形をとる。3は典型的な石鏃で抉りが少ない。4・5は抉りの深いもので、4は鍬形鏃脚部の破片である。5は押圧剥離を施したもので、断面は凸レンズ型を呈している。6は掻器で母岩原面の側縁部に剥離を加えている。コアー・スクレイパーとした方がよいであろう。石質はサヌカイトである。

以上、J区から出土した遺物について若干説明したが、旧石器の細石器文化の遺構や遺物は認められなかった。補足調査において、この面を20cm掘り下げたところで風化礫層をみたが、この層は遺物包含層ではなかった。

2．他地区からの出土遺物（PL. 59～62、Fig. 164～170）

主にX・Y・Z区その他から出土・採集した遺物について説明を行なう。

土器は60点、石器として認知されるもの40点前後である。時期的には縄文早期と縄文後～晩期に大別することができる。

i．縄文早期の土器（Fig. 165･165）

押型文土器に伴う撚糸文・条痕・押引文・無文土器等である。総数42点であった。その内訳は押型文土器24(楕円22・山形２)、条痕文土器７、撚糸文土器２、無文土器６、器面の剝落がひどいため不明としたものが３点であった。最後の小結の中で、若干押型文土器についてまとめてみたい。

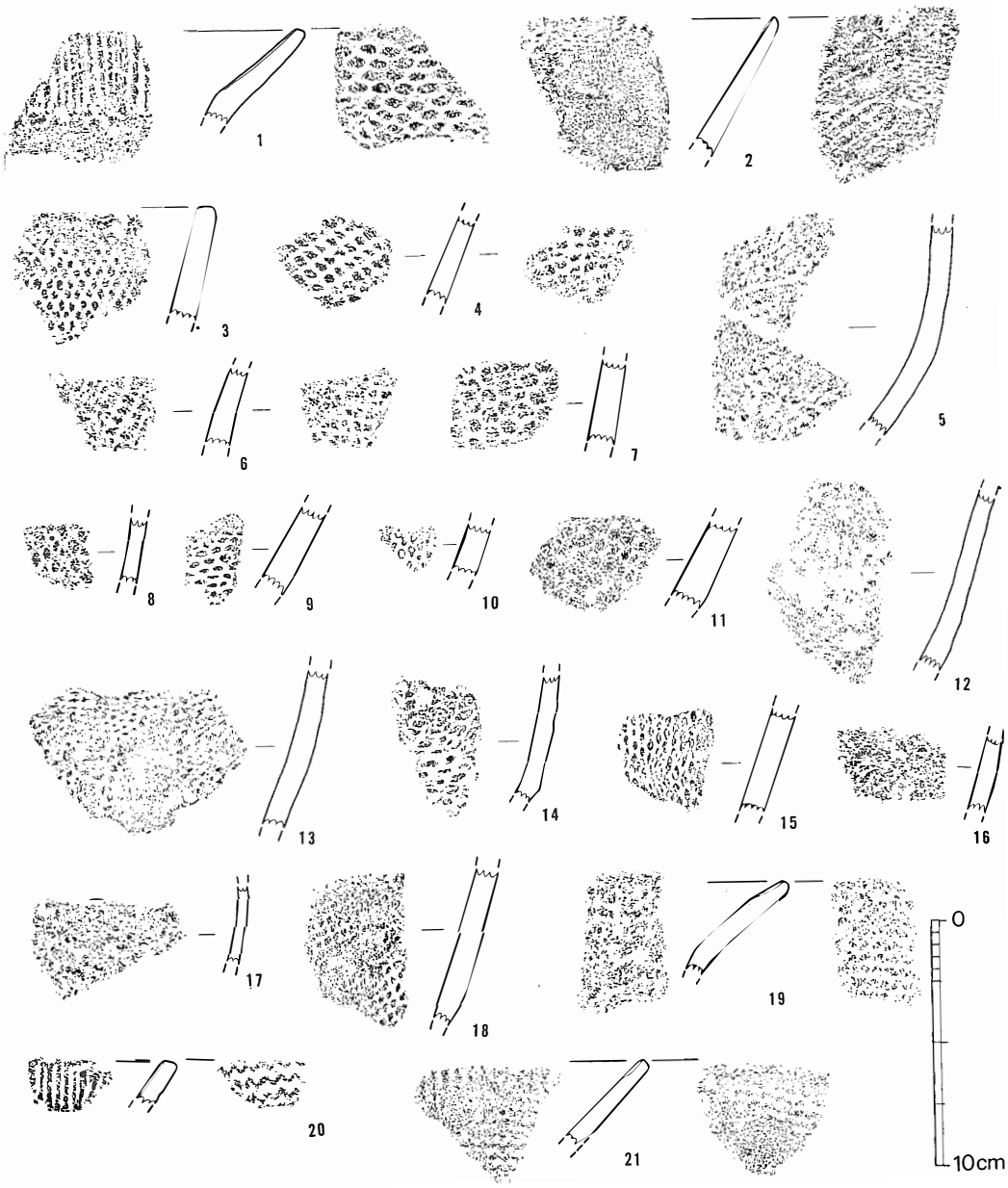


Fig. 164　立山山出土土器（押型文）実測図①（1/3）

押型文土器（１～21）　今回の資料の中で、口縁部の文様帯をもつものについては、Ａ：表面に押型文を施文し、裏面に原体条痕を施したもの。Ｂ：表面全体に施文し、裏面は同一原体で口縁部に施文しているもの。Ｃ：表面を施文し、裏面には施していないもの。Ｄ：表面は押型文を施文し、裏面には原体条痕とその下に横位の回転施文をみるもの。という４つの特徴をみることができる。

１はＡで、表面に大粒の楕円文が施文されている。裏面には、原体条痕が縦位方向に口唇直下から引かれている。しかし、原体条痕の直下に楕円押型文の一部が残っている。原体施文した上を消す様に原体条痕を施している。２はＢで、裏面に横位の施文を行なっている。ほぼ原体幅を示すものである。３はＣで、器面は縦位方向に回転施文している。４はＢで、表裏とも横位方向に回転施文を行なっている。20は山形文で、裏面に原体条痕を施したものでＡにはいる。21は同じく山形文で、裏面に原体条痕を施し、その下に山形文を回転施文しているものでＤにはいる。以上が、口縁部破片にみる特徴である。他の破片については、ふつうは横位方向に施文されるものが多いのが一般的であるが、ここでは縦位方向に施文されているものが目につく。３・８・10・15・18がそれである。また不整に施文しているものが、２・５・12・13である。胎土には細粒砂を含み、一部に石英粒が混入している。焼成は良で、器面の剝落をみる

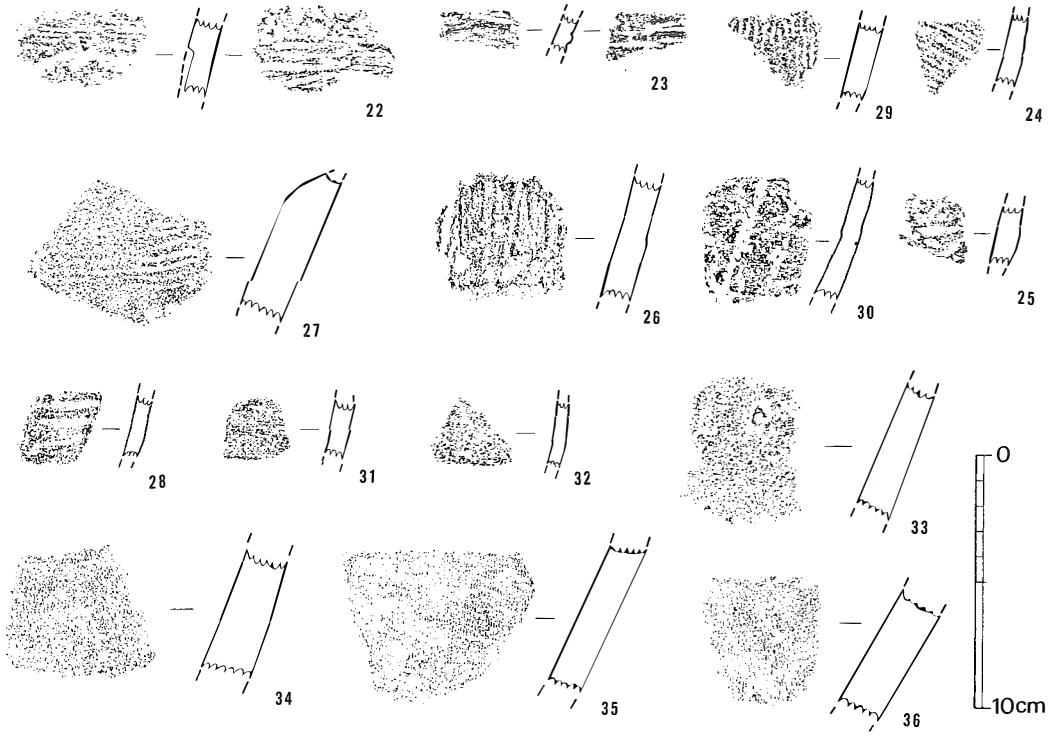


Fig. 165　立山山出土土器（撚糸文・無文）実測図（1/3）

ものが多い。色調は黄褐色から灰褐色を呈する。

条痕文土器（22～28）　条痕にもいろいろな形があり、22・23の様に表裏に条痕を有するものもある。24は原体条痕で、27も同じものと思われる。25・26・28は、アトランダムに引かれたものと考えられる。胎土には小石を含み、色調は黄褐色か黒色に近いものが多い。焼成は良好である。

撚糸文土器（29～30）　2点で、縦位方向に施文している。2点とも撚糸原体はLである。胎土・色調は押型文土器に類似する。焼成は両方とも良い。

無文土器（31～36）　器壁の薄いもの（31～32）と、厚いもの（33～36）がある。胎土に小石を含んでいるもので、色調は、厚手のものは赤褐色で、薄手のものは黄褐色を呈する。

ii．縄文後～晩期の土器（Fig. 166）

1～6は口縁部破片で、7・8が底部破片である。全て粗製土器で、器形的には浅鉢になるものが多い。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色から灰褐色を呈し、一部に黒斑をもつものもある。器面の調整は表面に研磨が施され、裏面はなで仕上げである。焼成は軟質であるため、調整の不明な部分がある。4は口縁部が若干の波状をなして、所謂リボン状の撮みを有し、直下に補修孔をもつ。7・8は平底をなしているもので、7は浅鉢の底部、8は深鉢の底部と考えられる。

時期的には縄文後期終末から晩期初頭に比定したい。

iii．石器（Fig. 167～170）

X・Z地点を中心に採集されたもので、パンコンテナー2箱分ほどであった。その中で石器

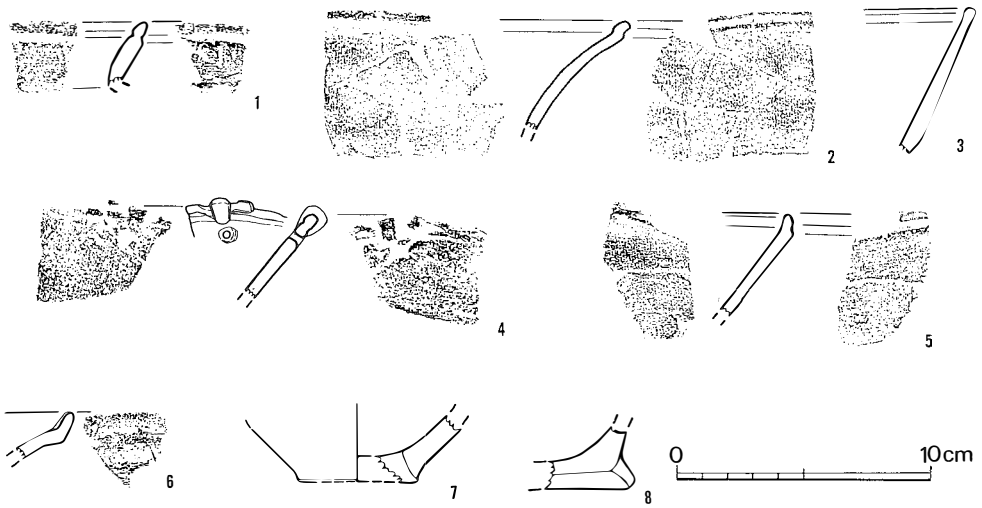


Fig. 166　立山山出土土器（後～晩期）実測図③（1/3）

と認定されたものについて説明を加えたい。

細石器（１・２）　細石刃で、両者とも黒曜石製のもの。１は石核から削ぎ取ったもので、打瘤面まで残っているスポール状のものである。2はその破片上端部と下端部が折れている。時期的所属は、旧石器時代の終わり頃の細石刃文化の所産である。

石鏃（３～24）　飛道具の一種で、３・４は抉りが深いもの、５～８は所謂、鍬形鏃といわれるもの、９～19までは逆ハート形のもの、21～23は脚部が折れたものである。24は三角鏃といわれるものである。黒曜石製のものは、３・４・６・７・９・11・12・19・20・23・24。他は安山岩製のものである。押型文土器と伴う鏃は鍬形鏃といわれるもので、その典型は６・７である。

剥片石器（25～27）　この３点は母岩から剥ぎ取ったもので、チャート製である。打瘤痕を残し、原面の一部を残している。他に73点の剥片があり、黒曜石製53、安山岩製20である。使用された剥片はなかった。

石核（28・29）　母岩として使用されたもので、両者とも原面を残している。29はツールとして使用されるもので、礫器としてもよいだろう。石質は両者ともチャート製。

礫器（30）　自然礫の一方を刃部としたもので、刃部は交互剥離を行なったものである。握斧の様に持ちやすいものを選んでいる。

磨製石斧（31～34）　31は断面が乳棒状を呈し、刃部は蛤刃である。磨きは中央部まで行なわれている。局部磨製で、石質は粘板岩である。32は小形の磨製石斧である。刃部は鋭利で、石質は硬質砂岩。33は刃部から中央部で割れたもので、刃部のみ局部磨製を行なっている。石

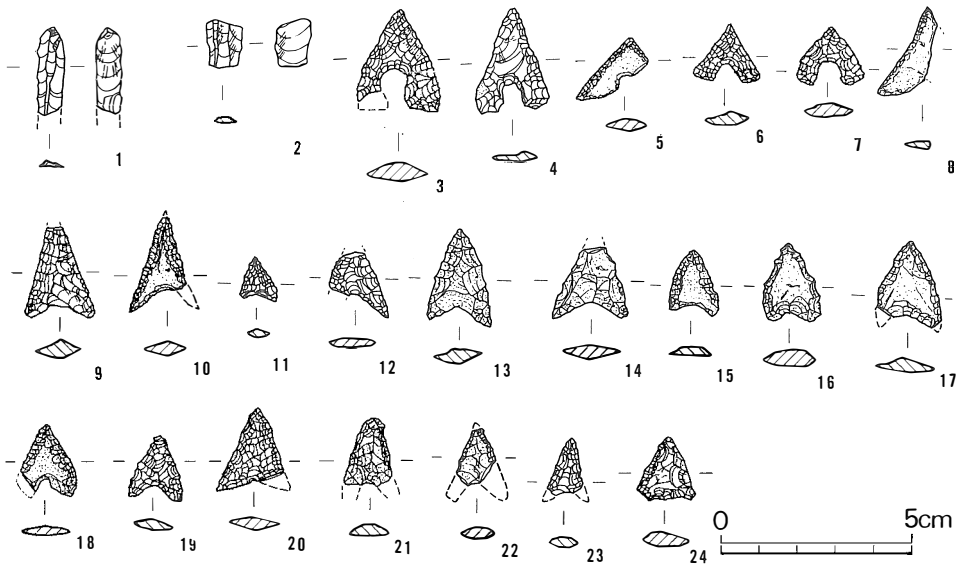


Fig. 167　立山山出土石器実測図①（細石器・石鏃）（1/2）

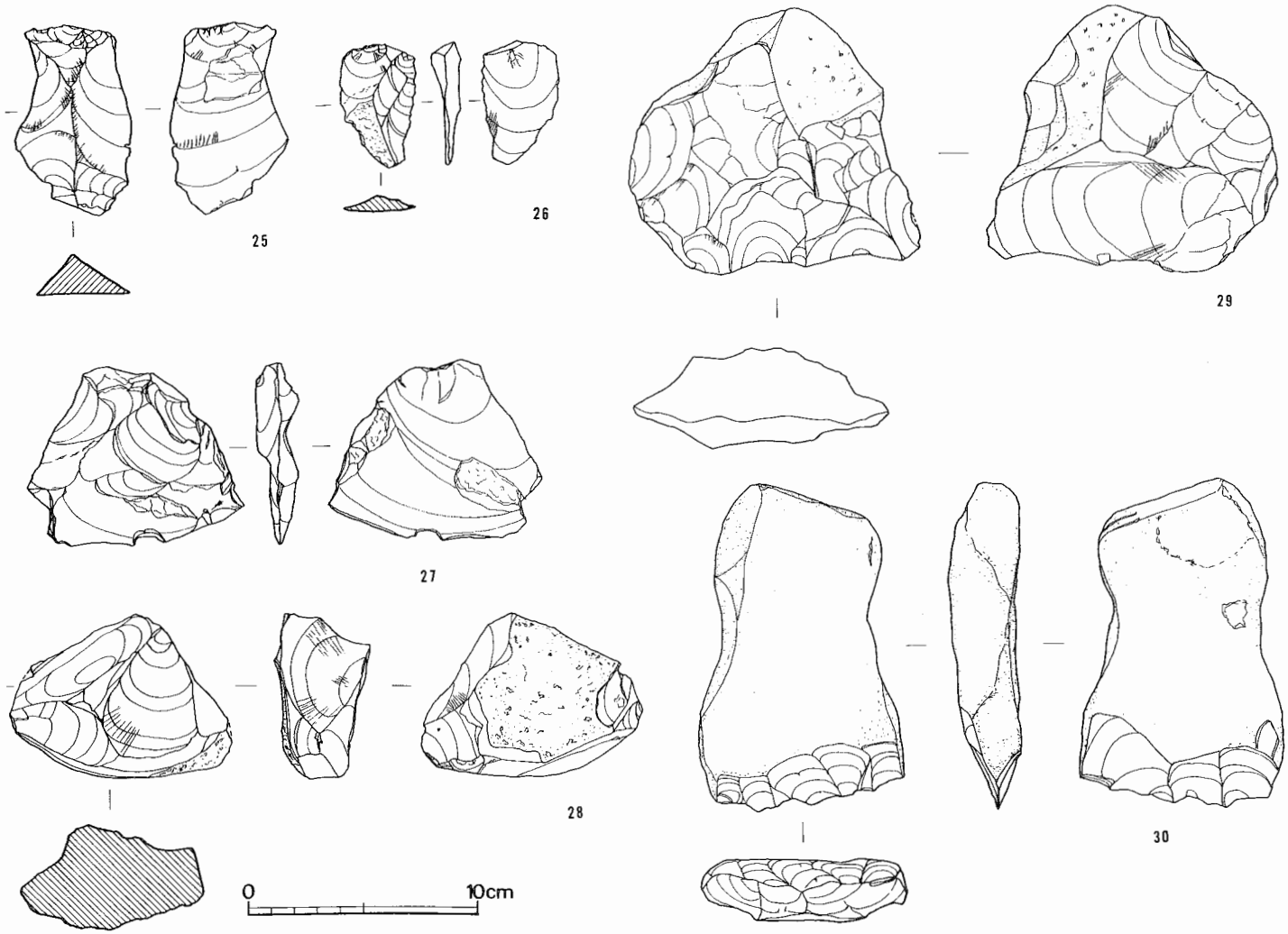


Fig. 168　立山山出土石器実測図②（礫器・剝片）（1/3）

質は緑泥片岩。34は全面を磨いたもので、刃部も相当に使用されている。玄武岩製と思われる。

砥石（35）　全面が使用されたもので、石質は硬質砂岩系である。

掻器（36・37）　36は安山岩製の縦長剥片の側縁部を刃部とし、サイドスクレイパーとして使用されているもので、刃部の剥離は細くチョッピングされている。37も側縁部を使用しているもので、安山岩製の小形のものである。

磨石（38）　石皿とセットとして利用されるもので、安山岩の河原石を素材とし、側縁部を使用している。

打欠石錘（39）　花崗閃緑岩の円礫を素材として使用したもので、長軸の両端を打欠いて紐掛けにしている。網のおもりとして利用されたものと考えられる。

小　結

立山山では、縄文早期の押型文土器時代に一つの生活面が全体を覆っていたが、古墳時代に至って約30基の古墳がこの狭い鞍部に築造されたため、その時に大規模な破壊が行なわれた。そして、その一部の残存をみるのが、X・Y・Zの3地点である。

縄文早期の土土器片総数は57点である。J区の15点を除くと42点で、それらを百分率で表示するとTab. 2の様になる。

これをみると、楕円押型文土器は総数の60%を超える。山形押型文土器と撚糸文土器は同じ数値

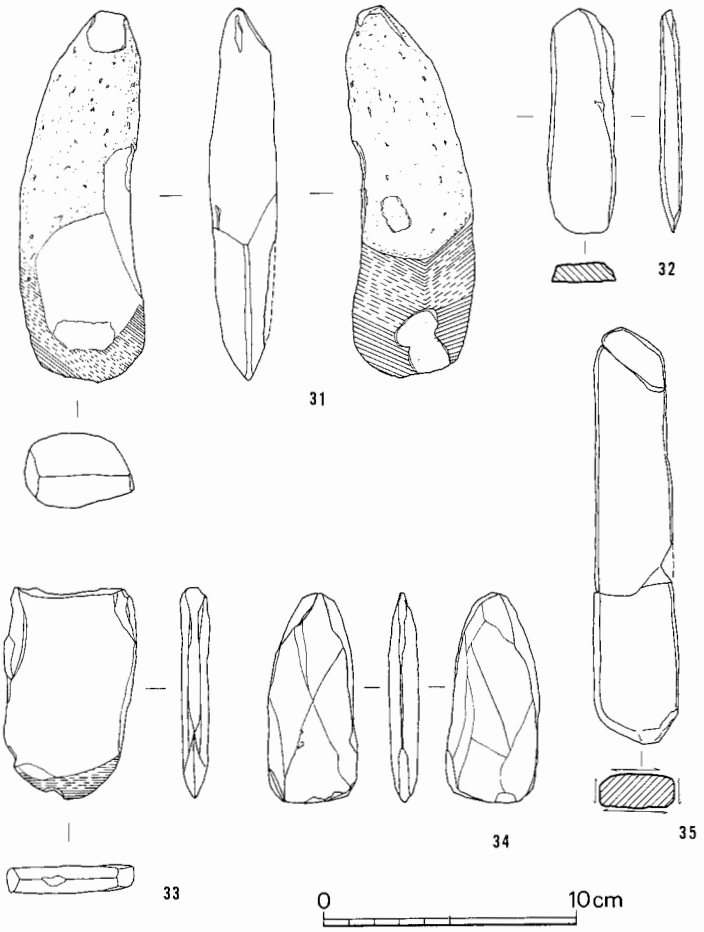


Fig. 169　立山山出土石器実測図③（1/3）

値で、条痕文土器が14%である。

1981年に、八女南部圃場整備事業に伴って調査した八女市国武遺跡は、(註1)押型文土器が95%を超えている。ここは八女の平野部の一画にあたり、当立山山遺跡とは標高差が50mもある。時期的には、立山山遺跡の方が、この平野部の土器群より一時期古い早水台式に該当する。

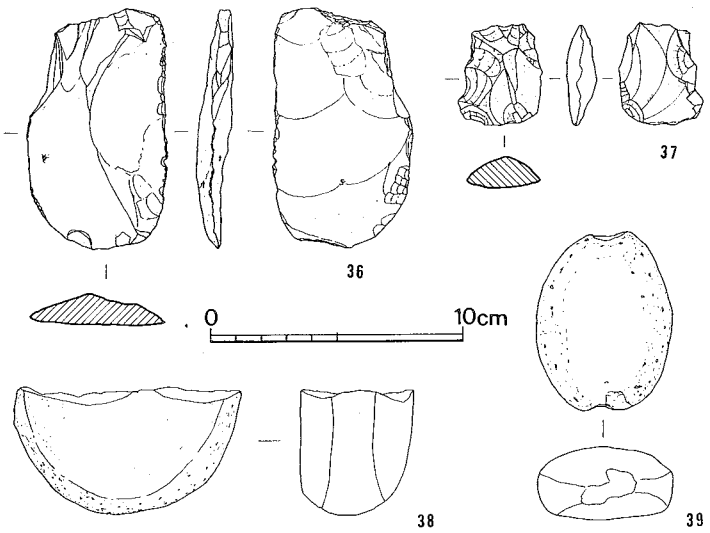


Fig. 170 立山山出土石器実測図④ (1/3)

Tab. 2 立山山出土縄文土器比率表

	数量	文様	%	J区	総数
押型文土器	24	楕円 22 山形 2	57%	楕円 13	64.9%
条痕文土器	7		17%	1	14.0%
撚糸文土器	2		5%		3.5%
無文土器	6		14%	1	12.3%
文様不明	3		7%		5.3%
計	42		100%	15	100 %

このことから、平野部と丘陵部との比較資料がみられる中で、縄文早期終末の押型文土器文化のあり方は、八女地方において一段階の広がりをもっていることが分かり、今後、筑後地方と西北部九州の押型文土器を検出した遺跡のあり方・様相の相違の比較対照が必要であり、一層の資料の増加が待たれる。八女地方における今後の調査が重要になってくるゆえんでもある。

また、縄文後期末から晩期初頭の資料も検出されたわけで、なお一層の詳細なる調査が要求される。実際に古墳時代以後の後世の攪乱がはいっていないところで、プライマリーな層序による平面発掘が希望されるわけである。しかし、これは非常に難しい一面をもつもので、地道な資料の蓄積が必要となってくる。そして、物を言わないこれらの資料が、私達に“歴史の何かを語ってくれるか”が問題となってくる。

註1. 井上裕弘・副島邦弘『八女南部・圃場整備事業地区埋蔵文化財予備調査概報』八女市文化財調査報告書第7集 P4～15 八女市教育委員会 1982

3．甕棺その他

甕棺および埋甕らしい土壙３基がある。Ｋの記号を冠して表記するものの、以下の如くであることをお断りする。

Ｋ－１は甕棺と称してよいかも知れぬが、合せ甕ではない。Ｋ－２については埋甕とするのが適切な表現のように思われる。Ｋ－３は、むしろ土器・礫の入った土壙とすべきであろう。

Ｋ－１（Fig. 68）

調査手順の初歩的ミスで図面・写真を欠くものであるが、26号墳の中心部付近に存したことは間違いない。主軸をほぼ南北にとり、径50～60cmの土壙内に埋置されていた。

Fig. 173－1aは底部を除いて図上での復原である。底径8.1cmを測り、胴部最大径は図では37.3cm。肩部がやや張って頸部で若干すぼまり、口縁へはほぼまっすぐにのびるものと思われる。外面は縦のヘラ研磨、内面は頸部が縦、その下２cmくらいが横のヘラ研磨、その下についてはなでか研磨かはっきりしない。底部外面は植物質繊維の圧痕をみる。胎土に砂粒多いが、焼成は良好。灰黄褐色を呈す。

１bは精製磨研の鉢の口縁部片である。胎土にはやや粗土がみられるが焼成良好。黄褐色をなす。

Ｋ－２（PL. 40、Fig. 115･171）

34号墳の近くにあり、S－81°－Eに主軸をもつ。東西57cm、南北62cm、深さ25cmの円形に近い土壙内に粗製の鉢を入れている。

Fig. 173－2は粗製の鉢形土器で、胎土はきわめて粗い。外面が横方向に条痕が走り（原体不明）内面はヘラなでらしい。焼成はふつう。茶褐色を呈す。

Ｋ－３（PL. 40、Fig. 103･172）

東西61cm、南北69cmの円形に近い土壙で、その中に花崗岩礫５個余りと縄文土器片５個程が入っている。深さは35cm。土器は床面になく、かなり浮いた状態である。

Fig. 173－３aは粗製の鉢で、一度屈折してから底部へのびる器形になろうか。口唇部には浅い刻みが入る。外面は横の擦過が施され、内面は不明。砂粒をきわめて多く含む。焼成ふつうで黒っぽい褐色を呈す。

３bはやはり粗製の鉢の胴部片と思われる。外面は横に条痕が走り内面はなでらしい。外面は黄褐色で、内面は黒色を呈す。

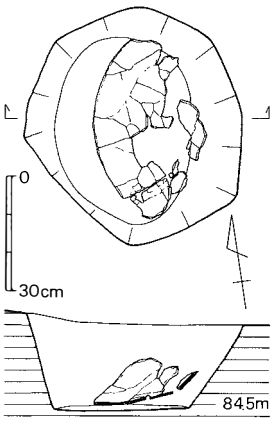


Fig. 171　Ｋ－２実測図
(1/20)

以上の３基は、時期的には縄文時代晩期初頭～後半に位置づけられる。この立山山で縄文期の遺構が検出されたことは、それ自体が大きな成果といえよう。生活遺構については北部九州全般でも検出例が少なく、当遺跡にても見出しえなかったが、上述した甕棺等は多分に住居の近くに営まれていたものであろうから、本来は近辺に存したものと思われる。

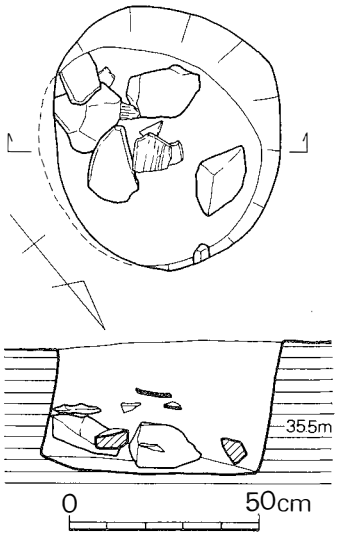


Fig. 172　K－３実測図
(1/20)

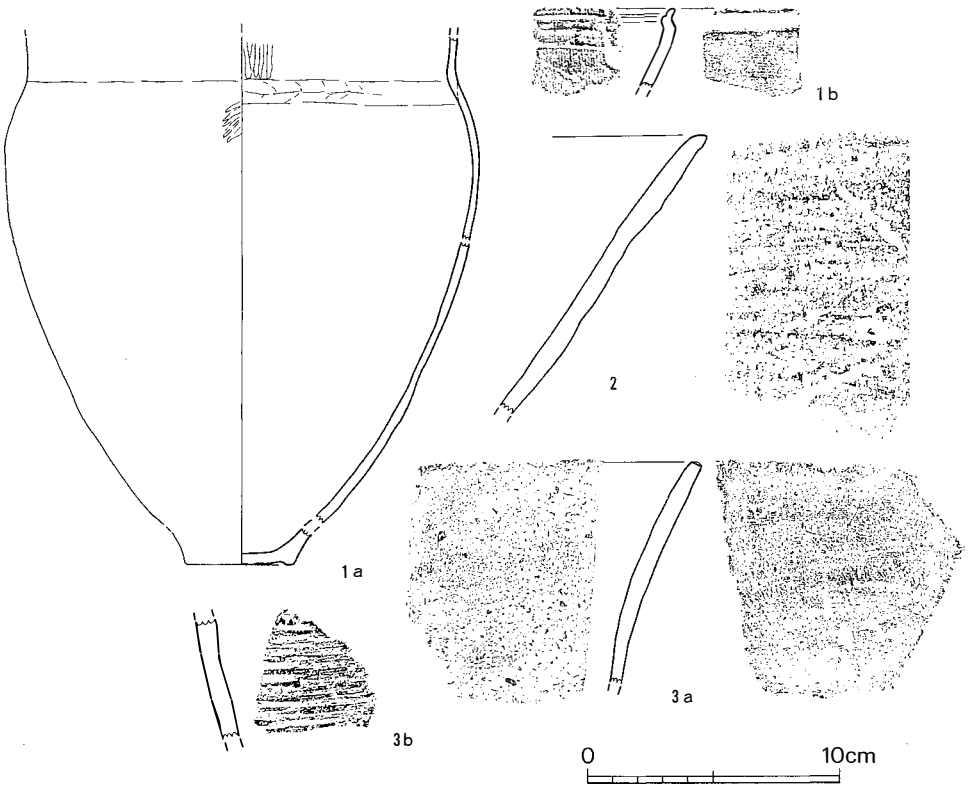


Fig. 173　K－１・２・３土器実測図（1/3）

C．その他の遺構と遺物

時期不詳の土壙１基と石組遺構３基、そして近世墓に伴なっていたと思われる古銭について触れておこう。

i．Ｄ１号（１号土壙）（PL. 39、Fig. 115･174）

34号墳主体部の掘り方を切って存する。土壙墓としてよいように思うが断定はできない。主軸はＮ－90°－Ｅで東西方向にあり、主軸長1.41ｍ、幅0.64ｍ、深さ0.2ｍ強を測る。埋土中より縄文晩期土器片が出土しているが、34号墳よりは後出するものである。時期的には不詳とせざるをえない。

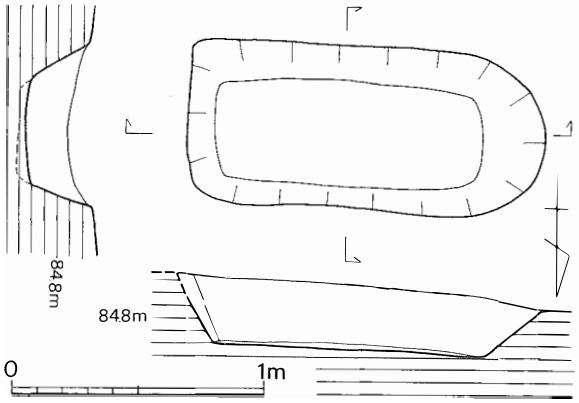


Fig. 174　Ｄ１号実測図（1/30）

ii．石組遺構（PL. 41、Fig. 115･175）

11・40～42・12号墳の存するあたりの発掘区南端に、自然石（河原石）を並べた石組遺構３基を検出した。

a．ＳＲ－１（１号石組遺構）

２列並行の石組は東に３個、西に２個の石を残して土壙と重複しており、土壙の方が新しい。右列の主軸はＮ－６°－Ｅをさす。２列間は約20cm。

b．ＳＲ－２（２号石組遺構）

最もはっきりとした２列の石組であり、その主軸はＮ－16°－Ｅをさす。東に11個、西に10個を配し、南側では２列の間に小礫10個ばかりが存する。２列間は13～15cm程を測る。

c．ＳＲ－３（３号石組遺構）

主軸をＮ－７°－Ｗにとり、東に３個、西に11個が並ぶ。東側は本来もっと存したであろう。２列間は約23cm。

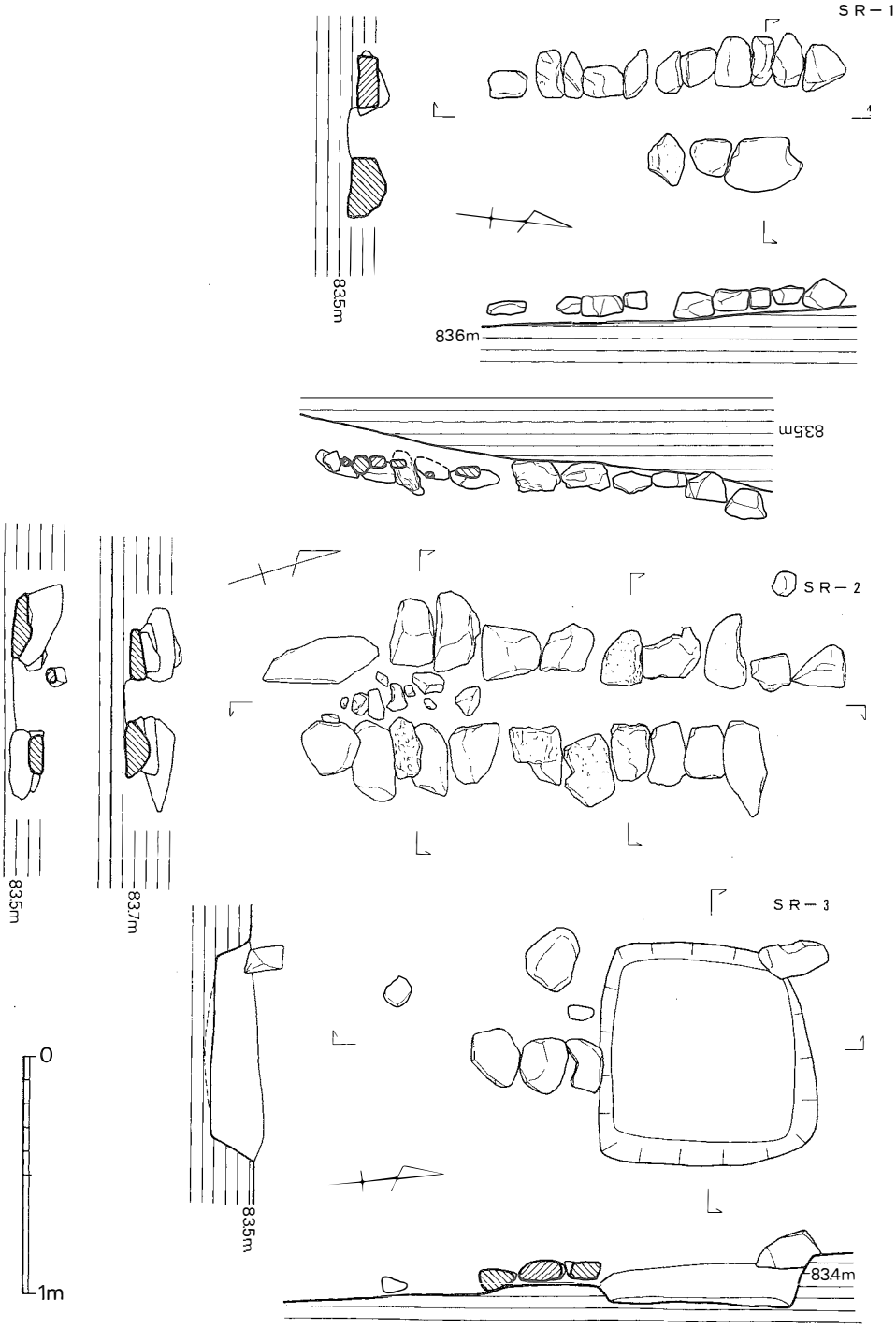


Fig. 175 SR1・2・3号実測図（1/30）

以上の石組遺構は、時期的にも、また機能としても見当のつきかねるものである。最も残りのよいＳＲ－２をみても、意識的に石を配列した様子は十分に伺えるが、その意味するところはわからない。排水溝とするには、その対象となるものが不明である。

iii．近世の遺物 (Fig. 176･177)

近世墓地に伴なっていたと思われる古銭６枚がある。「文久永寶」が１枚と「寛永通寶」が５枚あり、径2.2～2.7mmの法量の間に納まる。６枚とも26号墳の同溝発掘中に埋土中から出土している。

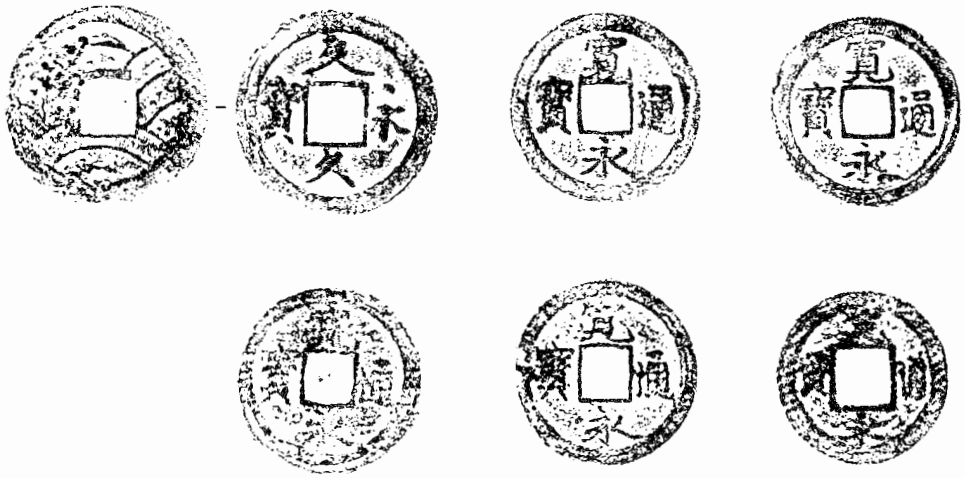


Fig. 176　近世の銭貨 (1/1)

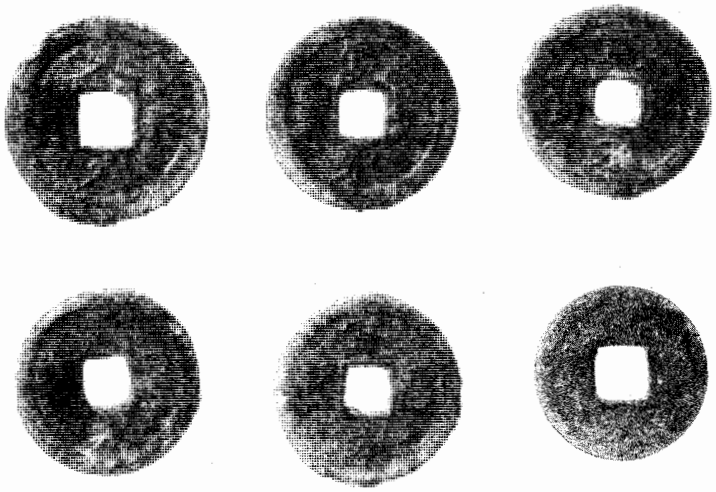


Fig. 177　近世の銭貨

V. 自然科学系の調査

1. 立山山人骨

九州大学医学部　解剖学教室　教授　永　井　昌　文

概括所見

全般に保存状態は不良で、ほとんどが頭骨・歯・四肢長骨などの破片を残しているに過ぎない。従って性別、年齢の推定には非常な困難を感ずるが、可能な限りの努力をして作成したのが下記の表である。

出土人骨鑑定表　　(　　)内はやや不確実

番号	埋葬形式	性別	年齢	保存状態	副葬品その他
23	竪穴系横口式石室	(♂)	成年	頭および四肢骨小片、歯冠13個	珠文鏡、玉、鉄鏃、鉄刀子その他 右側外耳道骨腫
24	箱式石棺	♂	熟年	腐食著しい頭骨のみ、他は長骨細片	四獣鏡、鉄剣、鉄鏃その他
25	竪穴系横口式石室	♂	成年	歯冠6個と主として下肢長骨片少量	珠文鏡および多数の鉄製品
27	同上	(♂)	成年	頭および四肢長骨の細片少量 下顎右側大臼歯冠1個	なし
28	竪穴式石室	(♀)	成年	ほとんど歯冠のみ歯13個	鉄剣
36	箱式石棺	♀	熟年	頭骨片のみ	なし
37	同上	不明	成年	頭及び四肢長骨の細片少量歯冠11個	鉄刀子、鉄鎌（棺外）
38	同上	不明	成年	歯冠18個と緻密質の薄い骨細片少量	鉄刀（棺外）
12 a	竪穴式石室	♂	熟年	頭蓋冠右半、下肢長骨体部歯10個	勾玉、ガラス玉、鉄斧、鉄鎌
12 b	同上	不明	成人	左大腿骨骨体中央部	

次に各項についてその概略を付記したい。

埋葬姿勢

写真・実測図から推してすべてが仰臥伸葬であったと思って大過ないであろう。

推定身長

根拠になる残存骨は四肢長骨の骨体中央部のみであるので推定は断念せざるをえなかった。

抜歯風習の痕跡

明確にその証跡を残すものは一例も無かった。保存状態が良ければあるいは一二証明出来たかも知れぬが、いずれにせよ当時、この地域でも既にこの風習は衰微していたと見て良くは無かろうか。

赤色顔料の使用および青斑

実検した10体のうち、23～25、36・37号墳人骨計５体に顔料の付着を認めた。いずれも顔面骨ないしはその周辺の骨である。骨消失のために見逃されていることも考えられるので、むしろ顔料を用いるのが葬送儀礼として一般的であったように思う。副葬品の豊富な遺体には必ずと言ってよいほどこの顔料が用いられている。

なお、24号墳人骨の左大腿骨上半部破片には青斑が認められるが、これはその付近に出土した四獣鏡の緑青によるものと思われる。

竪穴系横口式石室内の人骨について

この埋葬形式には異時埋葬（追葬）が考えられるので、23・25号墳の石室内人骨は複数体であるか単体であるか精査したが、複数体を示す明確な証拠は１例も得ることが出来なかった。

因みに12号墳の竪穴式石室内からは12ａと表記した熟年男性の骨以外に、これより細小で女性かと疑われ、明らかに別個体に属する左大腿骨体中央部12ｂが出土している。発掘以後の整理の段階での紛れこみで無ければ、合葬と見做さざるをえない。次項に記するような理由で後者は前者にくらべ腐食がはなはだしく大部の骨が消失したのであろう。

性別と墓域

上表に掲げた性別不明の人骨はどちらかと言えば女性の可能性が強い個体である。一般的に言って頑強な男性にくらべ「せん弱」な女性や子供の骨は長年の腐食に堪えかねて消失の度が強い。

もし仮に上記性別不明の人骨を女性と見做せば、性別によって墓域が相異するような傾向も看取されるが、この点は今後の出土例を俟って諸角度から慎重に検討する要があろう。

２．立山山１号住居跡出土赤色顔料の分析

福岡県衛生公害センター　環境科学部　部　　長　森　　彬
環境理学課　主任技師　田上　四郎

分析結果

検　　体	外　　観	鉄分	酸化鉄として
八女市立山山住居跡出土	暗赤色粉末	27％	38.6％

蛍光Ｘ線分析法により鉄を主成分とする赤色粉末であることを判定した。

鉄分の分析は原子吸光分析法により行った。

Ⅵ．立山山古墳群調査史抄

Ⅱ－２で触れておいたが、岩崎光・波多野晥三・小田富士雄の各氏は立山山古墳群中のいくつかの古墳および出土遺物について、これまでにある程度発表されている。長い間八女地方の調査に携わってこられた岩崎光氏には、1968年に文化財保護委員会が発刊した『全国遺跡地図（福岡県）』作成の際に基礎資料として八女市教育委員会に提出された遺跡調査カードもあり、そこには氏の長年の遺跡踏査の足跡を見ることができる。

しかし、三者ともに独自に呼称をなされているので、同じ古墳を指していながら違った名称も見られるようである。今回調査した古墳について触れているのもある。

立山山古墳群の30基弱の古墳が消滅したいま、研究史的意味もこめて各氏の記述を抄録し、かつ今回の調査した古墳との想定しうる対照を示したい。

なお、抄録したあとのコメント（→）では、今回報告分および「県分布図」中の古墳番号は〈　〉として示す。また、「　」は全て原文のままの引用であるが傍点は引用者が付した。

岩崎光

『八女・山門』1967より

「八女市忠見本真浄寺２号古墳

……内部構造～石室は頂上部より、南に寄っている。石室は西に羨門を設け、それから西へ２ｍ長さ２ｍ20、深さ１ｍ、巾は箱式石棺と同様天井石のところで50cm、東下底80cm、西50cmのかまぼこ型の竪穴式石室で、八女市八幡区川犬大屋敷古墳、八女市忠見区大籠日迫古墳、八女市忠見区立山１号古墳と類似している。…（Ｐ51）」

→ここで立山１号古墳としているものは（その時までに知られていたものとしては、次項に引用する波多野晥三氏が時和26年に調査されたものしかないはずだから）、恐らく〈21号墳〉のことであろう。

「八女　山門主要古墳一覧」から抽出　（Ｐ．66～68）

番号	遺跡名	所在地	地形	出土品	保管場所
2	竪穴式石室	八女市忠見	台地上（30）	人骨、貝輪	
13	立山古墳群	八女市忠見立山	台地線	金環、直刀、埴輪、鏡	岩崎　光
30	弘法山古墳	八女市忠見区立山	低地	埴輪、須恵器	
49	団蔵塚古墳	八女市忠見区立山	台地腹	巨石墳	

次に、岩崎光氏の遺跡踏査の足跡を知る資料として〝福岡県埋蔵文化財包蔵地調査カード〟がある。遺跡分布地図の基礎資料となるもので、本来は人目に触れないものであるが、ここに関係する所のみを引用紹介する。

A　「立山古墳群第１号墳

高度80ｍの長峰丘陵の上に設けられている高さ３ｍ50径22ｍの円墳。羨道の長さ２ｍ、石室の長さ２ｍ80最大巾２ｍ62内部の高さ２ｍ50アーチ形に積み上げてあるこの古墳の墓城の境界には埴輪が立っていた。形象埴輪も一部残っていた。羨道の入口の北西にはかめ、壺、高杯など須恵器多数出た。石室内部から扁平の丸石が密に重ねて敷きつめられ、鉄鏃、銅鏡、曲玉、丸子玉、金環、直刀など多数出ている。西南20ｍ北東20ｍには石棺があった。」（調査年月日・昭和26年８月４日）

B　「立山１号古墳

丘頂高度約90ｍで耳納山塊の支塊赤藪山塊の一部をなし、昭和39年所有者が果樹園造成のため全壊、跡形なく壊された。単室で石室底部には薄円板状礫をしている羨道が短かく胴張り４ｍである。羨道……南西」

出土品に「１．形象埴輪　小型武人　２．銅鏡（彷製）　３．鉄刀　４．土師壺、須恵器　大器台」

→Ｂの記述には調査年月日が見られないが、筆致を他と比較すると昭和40年のものらしい。Ａ・Ｂ双方の〝１号墳〟が同一のものか全く別なのか判然としない。Ａの記述では〈７号墳〉が該当しそうでもある。Ｂは全壊したという記述を重んずれば、〈26号墳〉とも考えられる。

C　「立山古墳群２～４号

第１号墳の東 130ｍには小円墳があったのでその石材一片が立てられているのを第２号墳とする、その南東50ｍにある第３号墳は径18ｍ高６ｍ美しい形の円墳で現在頂上に亭が建てられている。これは処女墳である。第４号墳はその北東50ｍにある高２ｍ径10ｍで西南向から須恵器が埋められていた」（調査年月日・昭和29年８月）

→このカードの裏に付されている地図でみるならば、断定的ではないが、１号墳が〈13号墳〉、２号墳が〈12号墳〉、３号墳が〈８号墳〉、４号墳は〈７号墳〉に比定できそうだ。

D　「石棺及び竪穴石室（立山古墳群２号）

高度80ｍの長峰丘陵の立山台地の斜面に並んでいたのを、昭和17年開こんの際に出したもので、巾40㎝長１ｍ60程のもので人骨の残っていたが、部落民は後難をおそれて埋めてしまった。竪穴石室の内部は、巾80㎝長１ｍで深さ80㎝　人骨はほとんど残っていなかったが貝輪が発見された。」（調査年月日・昭和18年、昭和24年）

→現在養鶏場があるあたりで、かつて石棺が多数出土したというからそこのことであろうか（Fig. 13）

E　「弘法山古墳（立山４号墳）

八女市岩戸山古墳の東２Ｋ、高度80ｍ上に設けてある。円墳で高さ５ｍ20、径30ｍ、昭和38年12月密柑園造成のため辺縁部を開いた。埴輪列、ふき石、須恵器などが認められた。この円墳はかぶと形をなし整美した形を示している』（調査年月日・昭和40年３月）

→これの添付写真は PL3－(1)とほぼ同じであり、まちがいなく〈８号墳〉をさしている。また、同じく添付の写真に須恵器５点が示されている。これは Fig. 180・181の3・5・9・21・26 に該当する。

F　「忠見立山古墳群第５号墳（団蔵塚）

団蔵塚は八女地方では童男山古墳に次ぐ巨石古墳である。高度70ｍの南斜面で石室の南側は１ｍ程低く石室の北側は６ｍの外側を蹄状に切断した外形。封土の高さは北側で２ｍ。内部は複式、玄室は巾２ｍ10、長２ｍ30、前室羨道も巾が広くて羨道部の巾は２ｍに達し、明るい。南側で巨石を用いているのが特色である』（調査年月日は昭和37年）

→まちがいなく〈３号墳〉のことである。

波多野晥三

『筑紫史論』第三輯（1975．10）より

「15．立山古墳の調査（P．287～294）

１号墳

八女市忠見立山にある古墳群の中で、ここにあげる１号墳は、昭和26年４月、……（中略）……実測調査を行なった古墳である。その後この調査については報告書を書かなかったし、現状が如何様に変化したか追跡調査も行っていない。ただその際の石室の実測図が手許にあり、また遺物は福岡教育大学考古学資料室に保管されており、それらをもとに記録して報告書にかえることにする。

立山１号墳は立山窯跡群で知られる丘陵の東端の墓地の北側にあった。忠見小学校西側の山麓から急な坂道を昇り、左側の墓地に入る平坦地に封土を削平され石室の天井石も取去られた状態で、石室の大部分が埋まり、前庭部の天井石が残っていた。……

―― 中略 ――

遺物としては鉄鏃と用途不明の鉄棒と折り曲げた銅板１枚があるだけで、須恵も土師も土器の出土はなかった。」

→これは間違いなく〈21号墳〉のことである(Fig. 178)。

「２号墳の埴輪

立山丘陵上の平坦面で１号墳から 200米くらい西南にあたる地点にある小円墳を２号墳と仮りに呼んでみる。１号墳が墓地のある木立の北側であれば、２号墳はその森の西南隅をはずれた所で、此処にたつと眼下に立山部落とその南方に拡る八女の水田地帯が一望される見晴しのよい場所に立地していた。墳丘は径10米たらずで高さも１米よりいくらか高かったと記憶するが計測はしていない。…（後略）」

→この項で「円筒はにわ」「人物埴輪　頭部」「形象埴輪残片」の３点を図示、説明されているが、そのうち人物の頭部のものは『立山山窯跡群』の報告書中では岩戸山古墳出土として取扱ってある（P. 79）。この２号墳がどの古墳に相当するか見当がつかないが、１号墳〈21号墳〉との距離と方角とが正しいとすれば〈２号墳〉が候補となる。しかし、〈２号墳〉の調査の際には埴輪は一点も出土していない。

「立山大塚の土器

ここで立山大塚と言うのは立山部落のま上の２号墳から北方に開墾された丘頂を 300米位行った正面にあった径約20米位の円墳を指している。……（後略）……」

→ここに図示・説明してある土器は『中尾谷窯跡群』の中において、小田富士雄氏が立山古墳群出土土器として一括してある（P. 33）。それは互いに全く同じ図である。ほぼ〈８号墳〉として間違いない。

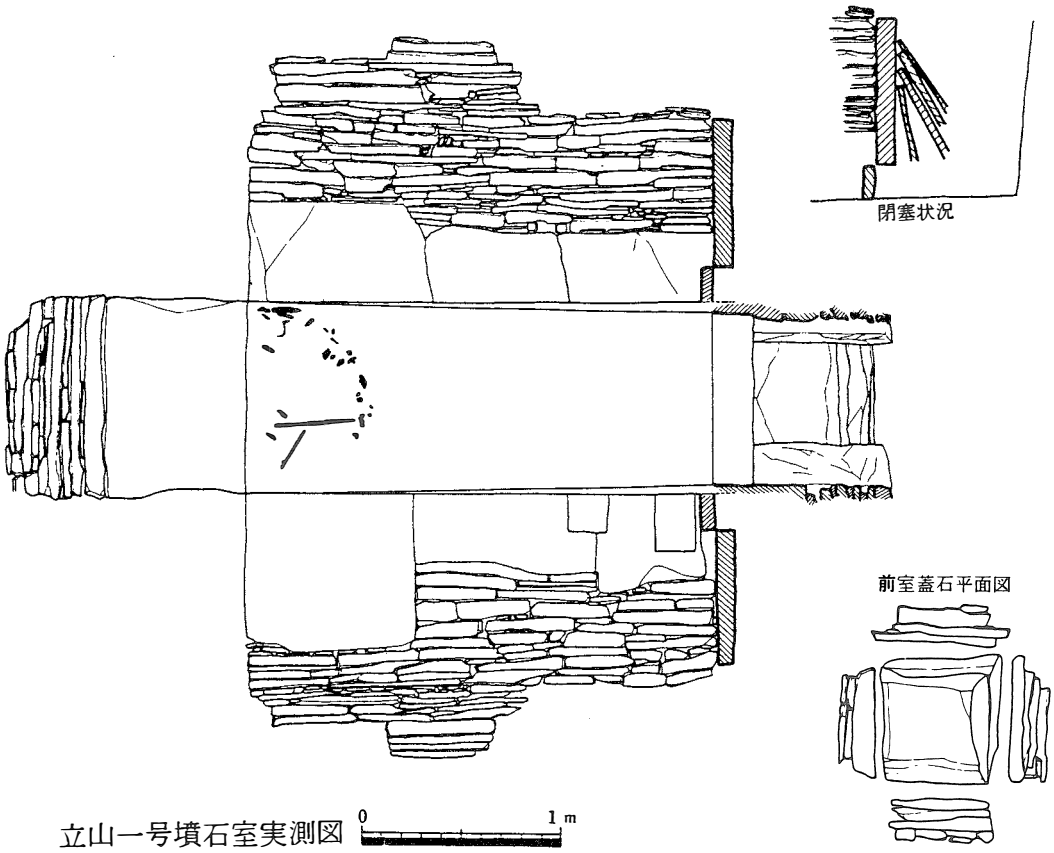


Fig. 178　波多野晥三氏調査記録（21号墳）（『筑紫史論』第三輯より転載）

小田富士雄

『塚ノ谷窯跡群』（1969）には立山古墳群の須恵器として、団蔵塚７点、立山古墳７点が図示されている。各々の位置関係等には触れられていない。

『中尾谷窯跡群』（1970）より

「八女市立山古墳群

立山部落の背後丘陵上にある古墳群で、立山古墳、団蔵塚古墳や東寄りの山麓には巨石墳１基がある。」

『立山山窯跡群』（1972）中の「八女地方における埴輪発見古墳一覧」（P.78）では、立山１号墳は円墳で横穴式石室をもち、形象埴輪として人（腕）・家・甲・馬をもつ。円筒埴輪は記載なし。団蔵塚は円墳で内部構造は？、円筒埴輪あり、となっている。

→以上をみるに、立山古墳（１号墳）とは恐らく〈８号墳〉であろう。団蔵塚は主体部不明というから〈９号墳〉、〈７号墳〉、〈13号墳〉あたりが候補となり、山麓の巨石墳、すなわち〈３号墳〉とは別のものを指しておられる。

追補

八女市中央公民館に保管されている鉄器・土器のうち、関連するものについて図示する。

Fig. 179 の鉄刀には「立山古墳」のラベルが付してある。全長58.8cmを測り、身・茎ともに木質が銹着している。

Fig. 180・181 の中で３と21には「1964年11月 こうぼう山古墳」と墨書のラベルが貼ってあるが、他に注記されたものはない。小田富士雄氏が報告された中に同じ土器の図示があり、それによれば次のようになる。

立山古墳 —— ９・14・17・19・26・27（『塚ノ谷窯跡群』第35図〈P. 71〉）

立山古墳群 —— 13（『中尾谷窯跡群』第23図〈P. 33〉）

平原（弘法谷）・日当山古墳群 —— １・３・５・８・12・13・16・18・21～23（同上書第24・25図〈P. 35～36〉）

釘崎３号墳 —— 28（『管の谷窯跡群』第26図〈P. 34〉）

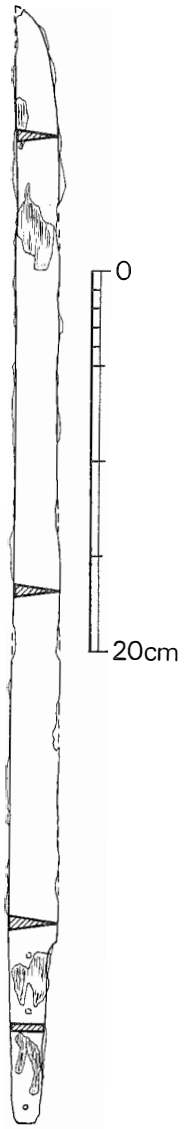


Fig. 179
立山古墳出土鉄器
実測図（1/4）

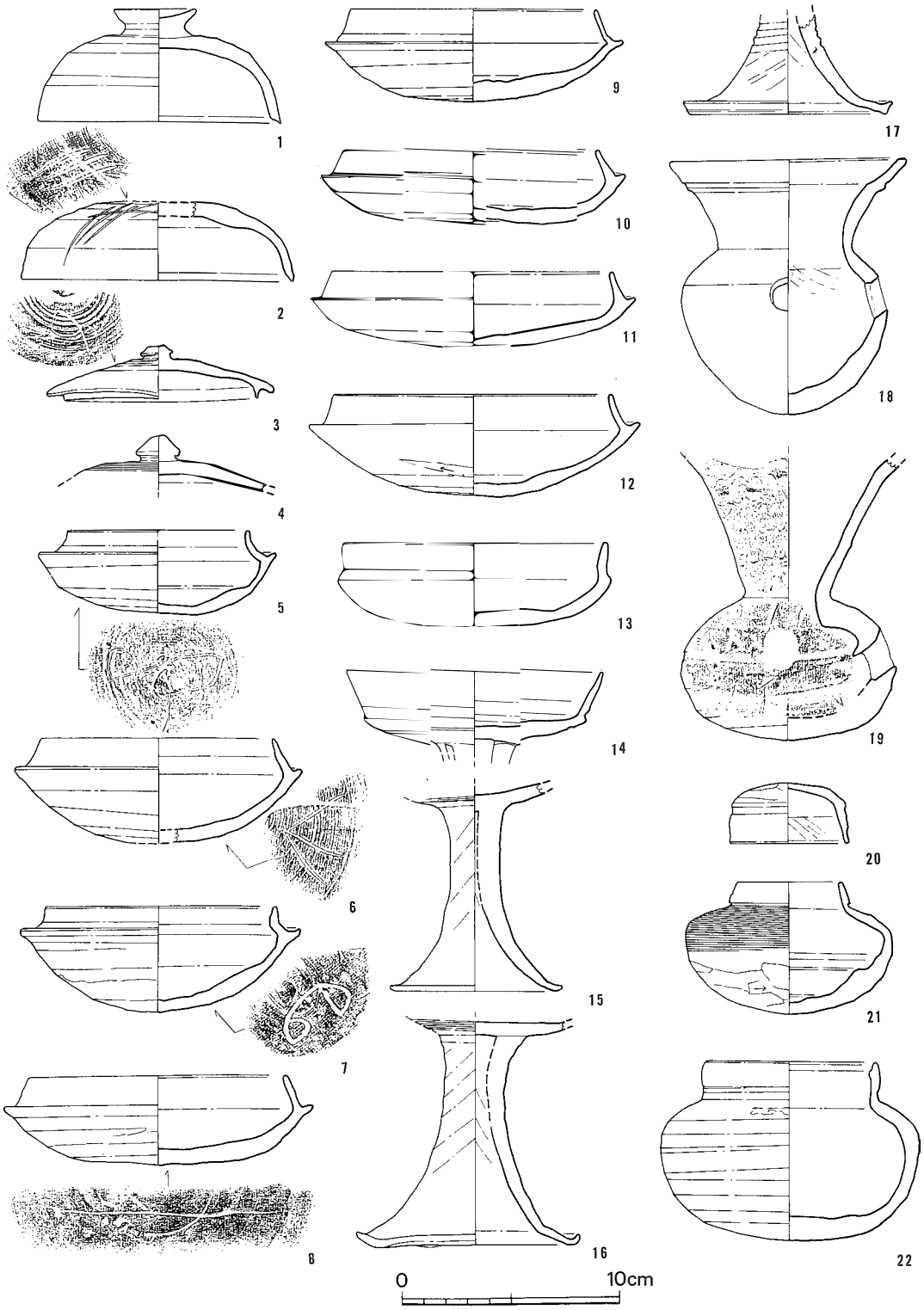


Fig. 180　八女古墳群出土須恵器実測図（1/3）

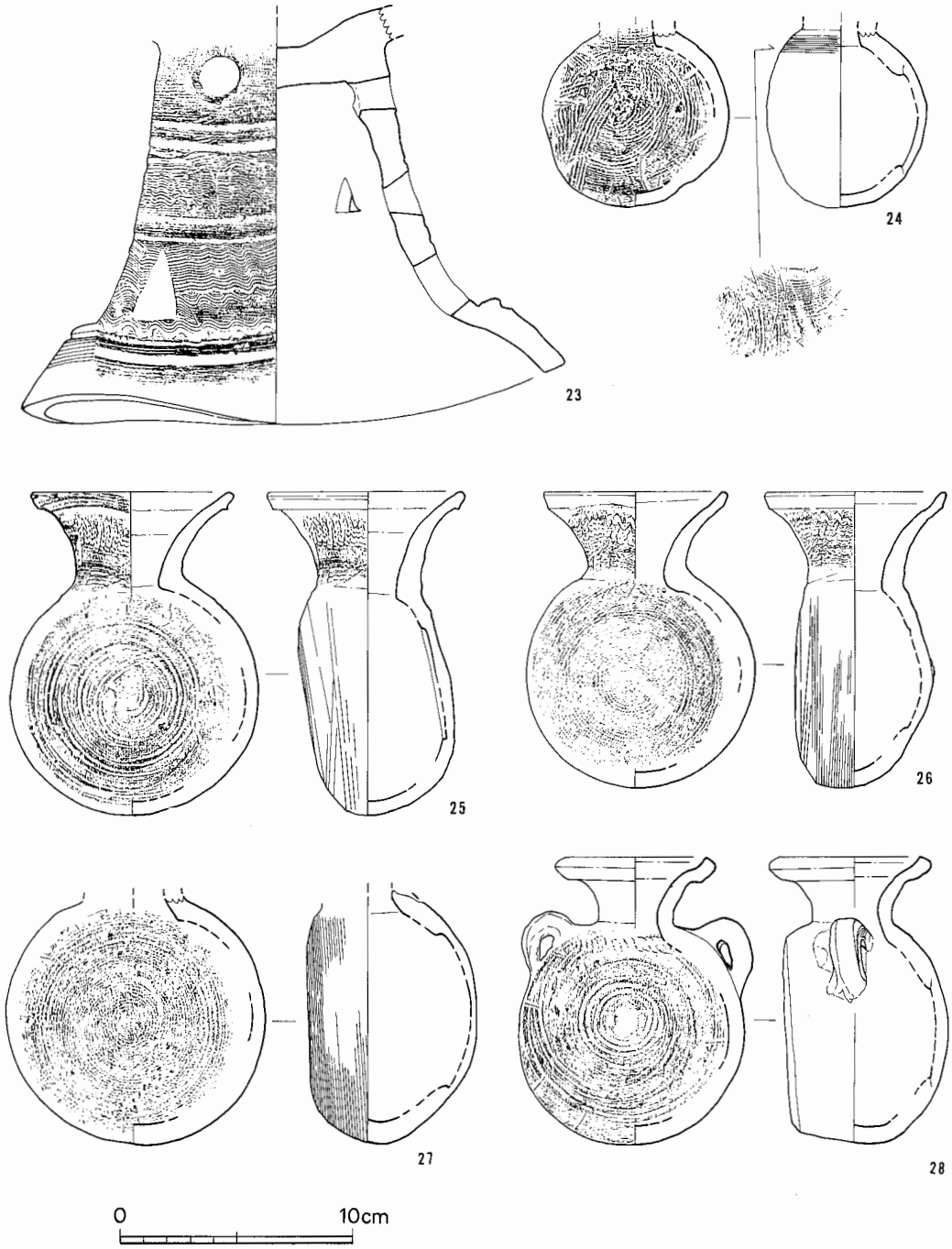


Fig. 181　八女古墳群出土須恵器実測図（1/3）

Tab. 3 立山山古墳群一覧表

No.	規模 外径 主軸	規模 外径 直交	規模 内径 主軸	規模 内径 直交	規模 周溝幅	主体部	主体部 赤色顔料	主体部 主軸	主体部 掘り方 長軸	主体部 掘り方 短軸	主体部 下端 主軸長	主体部 下端 奥幅	主体部 下端 前幅	主体部 下端 高さ	出土遺物 主体部内 人骨	主体部内 装身具	主体部内 鉄器	棺外 鉄器	周溝 鉄器その他	周溝 須恵器	周溝 土師器	周溝 埴輪	旧No.	備考
2	(16.0)	—	—	—	—	横穴式石室	○	S−80°−E															2	
8	34.0	33.6	29.0	28.7	2.8	〃	○	N−50°−E	535	480	356	233	200			垂飾付耳飾り・勾玉 管玉・切子玉・ガラス玉	挂甲小札・鏃・石突 鉸具・留金具・鉄・座金具			坏・壺・提瓶・甕	高坏・埦	円筒・形象	8	
9	(18.0)						—	—	—	—	—	—	—	—	—							円筒	9	
21	18.1		15.1		1.8	竪穴系横口式石室	○	S−68°−E	310〜345	230	229	102	91	147						坩?			31	
22	11.0		9.0		1.0		—	—	—	—	—	—	—	—	—				鏃	甕・甕	○		32	
23	(13.1)	13.0	(11.0)	10.5	1.3	竪穴系横口式石室	○	S−1°−E	364	247	215	110	97	121	あり	珠文鏡・玉	鏃・剣・刀子・馬具		刀子	坏蓋・坏身・高坏 樽形甕・甕	埦・高坏		33	
24	17.7	17.3	13.9	14.6	2.6	箱式石棺	○	S−87°−E	277	184	162	54	49	42	あり	四獣鏡・滑石臼玉	鏃・剣・刀子			甕	高坏・坩・甕	円筒片5点	34	
25	(9.5)				(0.8)	竪穴系横口式石室	○	S−85°−E	300	175	198	74	72	—	あり	珠文鏡	鏃・刀・剣・刀子			壺	坩・埦		35	
26	21.2		17.0		2.4	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	—						高坏・埦・甕	円筒片11点	36	
27	14.5	13.8	12.1	11.4	1.6	竪穴系横口式石室	○	S−76°−E	320	250	211	92	80	—	ごくわずかあり					甕・甕	埦・坩・台付埦	円筒・形象(約50点)	37	
28	10.9	10.9	8.5	9.2	1.2	竪穴式石室	○	N−81°−E	277	215	195	(62)	(57)	—	〃		剣・刀子					円筒片1	38	
29	15.8	16.0	12.7	12.5	2.0	〃	○	S−79°−E	(320)	(205)	(210)	(60)	(45)	—			剣の茎・刀子			坏蓋・壺・甕	高坏・甕	同筒片15	39	
30	(8.8)		(7.6)		0.4	〃	×	S−58°−E	258	191	178	44	38	47				刀子					52	
31	10.0	9.5	8.2	7.7	1.1	箱式石棺	×	N−82°−E	273	156	152	36	30	36									53	
32	6.1	(6.0)	5.3	(5.0)	0.6	〃	×	S−87°−E	215	115	(120)	30	(21)	—									55	
33	(6.8)	(6.5)	(5.9)	(5.4)	0.7	〃	×	N−63°−E	215	133	163	34	41	38									56	
34	(8.0)					〃	×	S−84°−E	222	128	138	32	29	(35)									51	
35	7.9	8.0	6.7	6.6	0.9	〃	×	S−70°−E	238	136	152	42	39	43									50	
36	10.7	10.8	9.0	9.0	1.1	〃	×	N−86°−E	264	192	171	34	31	41	痕跡あり								49	
37	8.4	(7.7)	7.0	(6.8)	1.2	〃	○	S−1°−W	253	172	170	42	36	35	あり			刀子・鎌					48	
38	8.2	(7.6)	7.2	(6.7)	0.6	〃	○	N−70°−E	246	188	170	31	35	38	歯・その他			刀					47	
39	10.9	(10.5)	8.4	(8.2)	1.5	組合木棺	×	S−79°−E	293	170	177	50	48	—	ごくわずかあり					坏蓋・甕	○	円筒片3	46	
11	12.8	12.5	10.5	10.6	1.4	箱式石棺	○	S−68°−E	342	171	180	42	36	(43)				剣・鎌		甕	高坏・埦・甕		45	
40	9.5	(10.7)	8.2	(9.3)	1.1	〃	×	N−78°−E	275	141	167	35	34	43				刀子			甕		44	
41	9.5	(9.4)	7.6	17.6	1.1	〃	○	S-63.5°-E	282	216	166	40	43	49			刀子・	鏃			高坏		43	
42	9.9	10.4	7.0	7.3	1.7	〃	○	S-89.5°-E	251	156	163	36	39	41									42	
12	(14.0)	13.3	(11.0)	10.4	1.8	竪穴式石室	○	N−74°−E	328	317	173	47	44	(67)	あり	勾玉・ガラス玉	斧・刀子・鎌			坏蓋・甕	埦・甕		40	
C1						箱式石棺	×	N−61°−E	145	77	107	41	40	30			刀子						C1	
2						〃	×	S−81°−E	216	122	169	32	37										C7	
3						〃	×	S-76.5°-E	98	67	55	33	28	(27)									C5	
4						〃	×	N−87°−E	(149)	(55)													C6	
5						〃	×	S-62.5°-E	(158)	(82)	79	23	23	21									C2	
SC1						石蓋土壙墓	×	S−80°−E	—	—	63	27	23	37									54号	
2						〃	×	S−47°−E	179	106	97	21	14	40			鏃・刀子						C4	
3						〃	×	S−88°−E	113	90	47	15	16	26									C3	
4						〃	×	N−89°−E	272	170	160	42	33	47				剣					41号	
M1						木棺	×	S−88°−E	275	175	183	50	44	—									D2	

Ⅶ. 総　　括

1．遺構・遺物総説

この立山山古墳群では、本文中で述べてきたように、遺構・遺物両面にわたって大きな成果を納めることができた。遺構と遺物のうち特に詳述する要のあるものは次項以下に譲り、この項ではその他全般を総説したい。

A．遺構について

(1). 古墳群の構造

発掘区内の30基弱の古墳は、地形的には、8号墳を分岐点として南西方向に分布する群（仮にA群とする）と、西方に分布する群（B群）とに大別される。A群は箱式石棺である24号墳を除くと、竪穴系横口式石室を主体部とするもので、基本的には複次葬の可能な構造である。B群に比して全体に規模が大きい。B群は竪穴式石室と箱式石棺（1基だけ木棺）を主体部におき、単次葬を基本とする。これらは墓道を想定することにより、また小群（単位）に分けられる。

墓道（はかみち）の復原は水野正好氏が4つの道を呈示されたが、当古墳群でも同様の復原が可能であると考える。　特にB群における復原は問題が多いが、（註1）一応想定してみる。根道は谷沿いに登ってきて8号墳の西に至る道が相当しよう。このとき、8号墳の西 —— C2号より西側 —— に遺構のない空白地帯があるのは、ここが谷頭であることを考慮に入れても、何か意味のあることかも知れない。ここから西南方向へA幹道、西方へB幹道がのびる（Fig.182－1）。

A幹道からは、1基毎に独立した様相の強い各古墳に、直接茎道がとりつく。竪穴系横口式石室は西に開口し、特に22・23・27号墳ではその入口側の周溝内から土器が出土している。24号墳についても土器は西側の周溝内から出土したので、この方向（足位部側）からの進入路（茎道）を考えることができる。

B群は当然ながら主体部に墓道がなく、土器の出土も乏しいので枝道・茎道の確定は難しいが、いまは2つの方法で2様の群構成を想定しよう。ひとつは、24号墳例の如く、足位部側に茎道がとりつくとして、箱式石棺・木棺を主体部におく13基（31～42、11号墳）に、2～3基を1単位とする6本の枝道を設定するものである。つまり6小群に分けられる（B1～B6）（Fig.182－2）。もうひとつは、位置関係から見たもので、空白地帯を重視して4～5基を1

単位とする3小群に分ける（Bi～Biii)(Fig.182－3)。このいずれをとるかで群構成のあり方と、その後の展開に違いが生ずるのは当然であるが、いまは2つの可能性の示唆のみにとどめたい。

竪穴式石室の4基は、28～30号墳の群（BⅠ）と、12号墳の群（BⅡ —— これは未発掘区域にまだ分布するであろう古墳と組みあって群をなすと思われる)とがある。

さて、今まで述べてきたことと大部分において重複するが、次に古墳の年代と主体部の相違とで分かつならば、調査区内で4つの群があり（Fig.183)、立山山古墳群全体とすれば6つの群を見ることができる。

Ⅰは箱式石棺を主体部とするもので、24号墳のみがA群中にあり他は全てB群にある。24号墳の規模と副葬遺物はB群と比べて数段の違いがあり、これは被葬者間の階層差の現われと見ることができよう。つまり、B1～B6群およびBi～Biii群の頂点に立つのが24号墳ということになる。5世紀初頭～前葉頃のことである（Fig.183－Ⅰ)。

Ⅱは竪穴式石室を主体部に置くもので、BⅠ・BⅡの2群をみる。これらは、それぞれの群でまとまっているのか、あるいは別に頂点

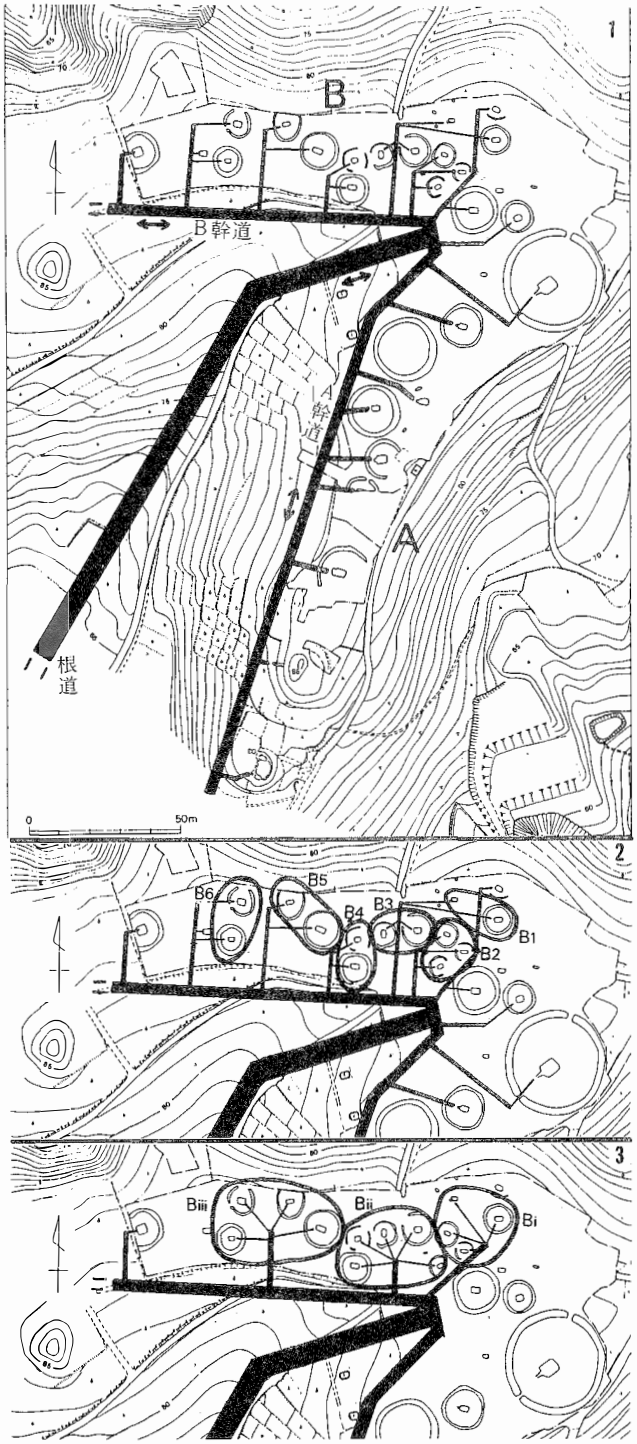


Fig. 182　立山山古墳群墓道復原図

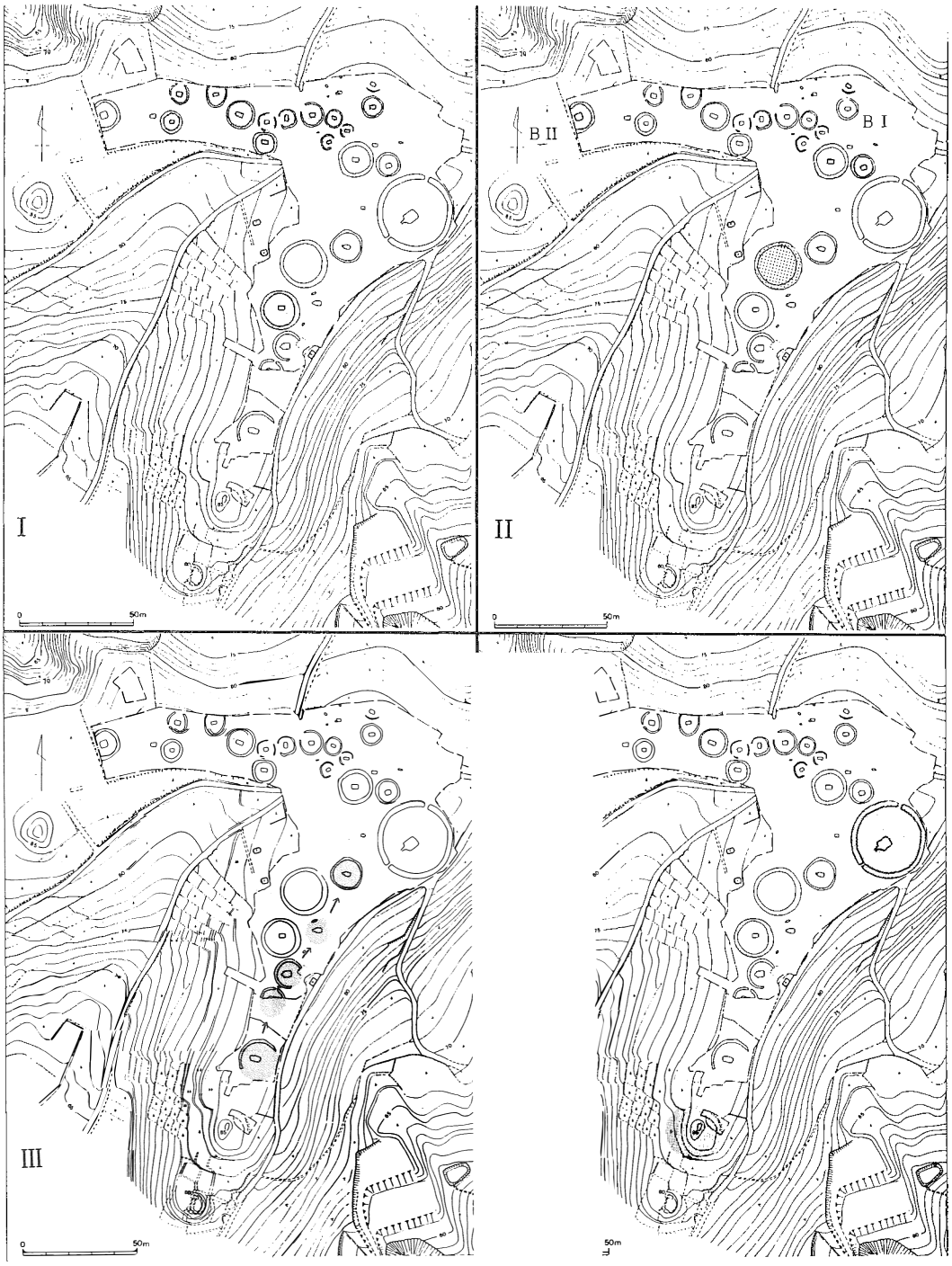


Fig. 183　立山山古墳群変遷図（1/1,500）

に立つ古墳の存在を見るのか定かでない。A群中の26号墳がもし竪穴式石室を主体部にしていたのであれば、先に見た24号墳のあり方と同じ性格を付与できよう。5世紀中葉前後の様相である（Fig.183－II）。

IIIは竪穴系横口式石室をもつもので、全てA群中にある。出土遺物と石室形態からみて21号墳が古く、22・23・25・27号の順に新しくなっていくものと思われるが、その年代的幅はあまり大きくないと考える。これらは石室構造からすれば追葬が可能であるが、人骨の遺存していた23・25号墳においては1体分しか見られない。恐らく追葬は行なっていないのであろう。21号墳から27号墳へと、同形態の（個人用の）古墳が継起的に築造されたということは、先に述べたI・IIのあり方とは根本的に異なるものである。この被葬者系列は24号墳・26号墳から引き継がれたもので、群構成に変化を見るということは、この古墳群を構成した背後の社会（集団）の質的変化によるものであろう。5世紀中葉以降のことである（Fig.183－III）。

IVに横穴式石室の8号墳がある。調査区内にはこれ1基しかないが、ほぼ同時期かやや遅れるものとして、規模が若干小さく思えるものの7・9・13号墳があり、これらはそれぞれが150m程の距離をおいて丘陵頂部に立地している（Fig.183－VI）。前代までの近接して群集するあり方とは全く異質であり、大きな変化をそこに見ることができる。また、立山丸山古墳は採集された埴輪から見る限り8号墳と時期的にはあまり変わらないものと思われる。とすれば、小さいながらも前方後円墳である立山丸山古墳は、上述の7～9・13号という円墳群の盟主たる位置を占めるのであろう。しかしながら、丘陵頂部に円墳群があり、裾部に前方後円墳があるという占地関係は、そこに何かしら意味があるようにも思える。

Vに調査区域外を含めてみると、8号墳等に後続するものとして複室の横穴式石室をもつ10号墳がこよう。これは丘陵先端の斜面に近い所に立地する。6世紀後半代の築造と考えてよかろう。

さらに10号墳のあとにくるものとして、VIに丘陵斜面に立地し巨石を使用した3号墳がある。童男山古墳と同じ頃、すなわち6世紀も終わりに近い頃の所産と考えられる。

以上述べてきたように、この立山山古墳群は5世紀初頭～前葉から6世紀代までの間に、多様な変化を示しながら連綿と築造がなされた。5世紀初頭頃に至って古墳が築造されるようになった契機は不明といわざるを得ないが、そのエネルギーの醸成がそれ以前にあったことは言を俟たないところである。この古墳群中では竪穴系横口式石室の最も新しい時期（5世紀後半の中頃）から横穴式石室の築造（8号墳）までに若干のヒアタスが見られ、その間に大きな変化のあったことが推察される。時は折しも筑紫国造磐井の存命中のことであり、当地方における政治的動向の反映とも見てとれよう。

(2). 主体部の構造

27基の古墳の主体部は、箱式石棺・組合せ木棺・竪穴式石室・竪穴系横口式石室・横穴式石室の５種類がある。以下に各々の特徴、類例等について述べる。

主体部が箱式石棺である古墳の、その石棺は13基とも形状等においてあまり大きな差異は見られない。掘り方は概ね長方形である。蓋石は１枚だけのものはなく、２～３枚を用いており、総じて頭位の方に大きめの石材が置かれている。全て側壁が小口壁をはさみこむ形式であり、例外はみない。側壁は２～３枚で、その接ぎ目には内外に補強材を置くものが多い。42号墳の主体部側壁は小口壁との接点部に抉りをみる。

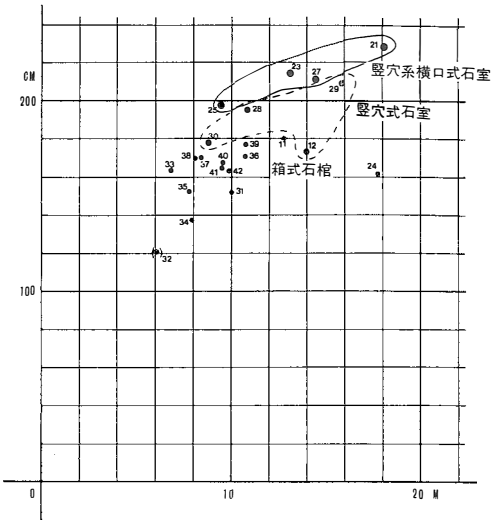


Fig. 184　立山山古墳郡の周溝径と主体部主軸長相関図

内法は主軸長138～180 cmで若干の幅を持ち、それはFig. 184でわかるように、総じて古墳自体の規模の大きなもの（周溝径の大きいもの）が主体部主軸長も長いという傾向がある。

13基のうち副葬品を有していたのは６基で、それも棺外に鉄器若干を置くものがほとんどである。そんな中で24号墳は四獣鏡・鹿角装剣・鉄釧等が出土していて他を圧している。石棺を主体部において同様の遺物を持つものに、近隣では八女市城の谷古墳、山門郡山川町面ノ上古墳があり、これらは５世紀前半代において小地域を統括した者の墳墓とみることができよう。このような古墳は、ある程度の空間的距離をおいて今後とも類例を増すであろう。

39号墳は組合せ木棺を主体部とするが、何故にこれのみが木棺であるのかはわからない。

竪穴式石室の構造がよく知れるのは30・12号墳の２基で、28・29号墳は破壊が著しく不明点が多い。ただ、側壁についてみると、最下段から小口積みか平積みによっているので、石棺系のものではない。４基ともにまがりなりにも副葬品を有していた。石棺を主体部とする古墳群のあとに、この竪穴式石室をもつ古墳群の造営をみたと考えるが、その契機は不明である。

竪穴系横口式石室については別に触れられているので詳しく述べないが、21・23・25号墳の周壁最下部が板石を立てて腰石とする構造は、この石室の系譜の基本は石棺にあったことを示しているといえよう。問題とすべきは27号墳石室で、右側壁は若干の胴張りプランとなって、時期的なヒアタスはあるものの８号墳石室に連なる構造をそこに見る。側壁を最下部から扁平割石の平積みおよび小口積みにするのは、ひとつには壁面の持ち送りを簡便に得たいがためとも思われる。

筑後地方における竪穴系横口式石室にも種々あり、山門郡瀬高町各木野（註２）、同蛇谷古墳（註３）、八女

市真浄寺２号墳、八女郡広川町平原７・５・３・１号墳、久留米市木塚古墳等はその構造のよく知れるものである。(註４)(註５)(註６)

B。遺物について

立山山古墳群で調査した古墳27基と箱式石棺墓等からは、８号墳の大量の埴輪を始めとして、須恵器・土師器・鏡鑑・装身具・鉄器等々かなりの数量の出土があった。以下に、いくつかの遺物について、項を分けて類例を拾いあげながら述べる。

(1). 23号墳出土馬具

23号墳出土鉄器のうち馬具として取り扱ったのは銜の一部・鞍金具・鐙金具？・鉸具？であった。いずれも明確に馬具と断言するには躊躇も覚えたが、他の用途に比定するよりも馬具とするのが最も妥当と考えられた。

九州で古い時期の馬具を出土したものとして熊本県江田船山古墳が知られていたが、福岡市老司古墳で５世紀初頭に位置づけられる馬具が出土し、さらに最近の発掘成果は同じ頃の資料の類例を追加している。(註７)(註８)福岡県甘木市池の上６号墳には鞍橋の縁金具・鞍・銜があって、老司古墳３号石室と同じ５世紀初頭頃に比定されている。(註９)この池の上墳墓群の場合は陶質土器の出土と相俟って、その由来が注意されるところである。同鞍手郡若宮町汐井掛Ｄ 200号土壙墓では鞍の金具のみがみられ、５世紀初頭頃かやや溯る頃のものと考えられている。(註10)これらは九州のみならず日本における初現期の馬具として貴重な例である。

以上の初現期のものに後続して、当立山山23号墳・宗像郡津屋崎町勝浦10号墳・宗像市浦谷Ｃ－５号墳等の出土品があるが、後二者においては剣菱形杏葉・輪鐙が見られ、(註11)既にそれ以前とは異なった様相を呈してきている。(註12)５世紀後半代の中頃から、副葬馬具にも変化を見ることができるようである．。

立山山23号墳の馬具は不確定要素も多いが、銜・鞍金具など実用的なもののみである反面、ごく一部の残片しか見られないので、この被葬者が馬と深く係わりを持っていたとは考えにくい。

(2). 鉄釧

24号墳主体部の被葬者右手首付近から鉄釧が出土した。鉄釧の存在そのものは稀有とは思わないが、当墳出土例は幅0.7～0.9cm、厚さ0.2cmの鉄板をリングにして径6.5～7.1cmの釧とした本体に、さらに径1.5cm程の小環３個を取り付けている。これは装飾的効果と、３個の小環が互いに触れあう時に生ずる音響的効果とを兼備したものといえよう。

寡聞にして多くの類例を知らないが、きわめて類似したものとして宮崎県西臼杵郡高千穂町

丸山石棺群52－B号出土品がある。ただ小環の数が2個という点のみが異なり、他はほとんど同じとしてよい。この〝鉄環〟(註13)の時期を調査者は弥生時代とされているが、石棺の構造や伴出の刀子・臼玉等からして弥生時代のものとは思われず、多分に古墳時代の所産であろう。

また、同都城市築池地下式横穴出土の〝鉄輪〟とされるものは直径0.4cmの鉄棒をリングとし、それに方形に形づくった小環4個(註14)を持つものである。細部の相違はあっても、基本的には上記のものと趣向を同じくするものといえよう。

佐賀県唐津市迫頭4号墳からも鉄環が出土していて、1個の小環を有するものである。計測値が示されていないため詳細不明(註15)であるが、同様なものと考えてよかろう。

(3). 鹿角装刀剣

24号墳から直弧文を有する鹿角装の剣が出土している。また、25号墳からも直弧文の有無は明瞭でないけれども、鹿角製刀装具の出土を見る。24号墳では、鉄剣自体に銹着しているものと遊離した資料とがあるが、鞘口・柄口のいずれかの装具であることは間違いない。出土時においても、遺憾ながら着装状態を知りえなかったが、おそらくはFig 87の復原図に示すような形態をとっていたものと思われる。

かつて、大牟田市古城山古墳にて直弧文入りの鹿角装具が出土した折の報告で、九州における類例11ケ所が集成されていた(註16)。その後10余年を経て、九州各地においていくつかの発見が報じられ、正確な実数を把んではいないが、20例に近いものと思われる。殊に、宮崎県下での地下式横穴から、鉄鏃・短甲等とともに、直弧文の施されていないものも含めて、鹿角装刀剣の発見例が多いのは注目される事象といえよう。福岡県下での直弧文入り鹿角装刀剣は、宗像郡津屋崎町勝浦17号墳(註17)で数口分が出土している。これ以外には今のところ新例の報告をきかない。刀装具に施された直弧文(註18)は、直線と弧線とを複雑に組み合わせた本来の姿のものと、ほとんどX字状の繰り返しとなる簡略化されたものとを見ることができるが、全体とすれば後者の方が新しいようである。

当立山山24号墳出土鉄剣の鹿角装具に見る直弧文は、古城山例と同様、整然とした施文であるが、いまは小破片のために全形を知りえない。同じ八女丘陵上にある石人山古墳の石棺屋根上に直弧文レリーフがあるのを考えれば、24号墳における直弧文の入った刀装具はきわめて示唆的な存在ではある。しかし、それ以上のことには言及しえない。

(4). 珠文鏡と四獣鏡

珠文鏡は23・25号墳から各1面が出土した。1975年の恵子若山遺跡の報告に際して、全国107面余の地名表が作成されているが、その後の資料増加は全国的に見ればかなりのものと思われる(註19)。福岡県内でも、この立山山古墳群の2面の他に、太宰府市宮ノ本5号墳、福岡市藤崎遺跡7号方形周溝墓(註20)、山門郡瀬高町名木野11号墳(註21)等の例(註22)を加えている。

立山山の２画は23号墳のものが面径7.545cm、25号墳のそれは面径5.93cmで、古墳時代の小形仿製鏡の中でも最も小さい部類である珠文鏡としては通有の大きさといえよう。先の恵子若山遺跡での地名表を参照して、面径の近似するものもいくつか見られはするが、同書でも指摘されているように同笵と思しき例は見当らないようである。また、出土古墳の中にはその地域での首長墓とみなされる大規模なものも存するが、全体からすれば、中小規模の二～三流クラスの古墳が多いといえよう。

四獣鏡は、鏡背文様の獣形がほとんど原形を失なって勾玉様のもの２個を連接した如き形状を呈し、一般の四獣鏡に比してかなり簡略化されているが、勾玉の頭部となす所からは細い首がのびて、その先に不鮮明ながらも獣面が鋳出されている。これほどまでにトランスフォームされた獣形をもつ四獣鏡は、寡聞にして多くの類例を知らないが、嘉穂郡稲築町漆生古墳例は(註23)やや似たものといえよう。

珠文鏡を出土する古墳もそうであったように、四獣鏡を出土する古墳もまた中小規模のものが多い。

近隣で仿製鏡を出土した古墳は、八女市城の谷古墳(註24)・釘崎３号墳(註25)、山門郡山川町面ノ上古墳(註26)等々がある。

(5). 弓付属金具

23号墳出土の２個と、８号墳出土の８個があり、弭か弭部分に用いられた金具である。

この種の金具は「両頭座金付留金具」の名称を与えられ、「鉄刀、鉄鏃との共伴が多く、武器・武具に関連した工芸品に使用されたもの」と推定されていたが、(註27)近年の出土資料はその想定を裏付けており、弓に付属する金具であることが確実となっている。

奈良県メスリ山古墳では鉄製矢等とともに(註28)銅製弭が出土している。この全長26.8cmを測る短冊状の弭の両端には２個ずつの「長さ4.6cm、直径0.3cmで先端に直径0.6cm、高さ0.4

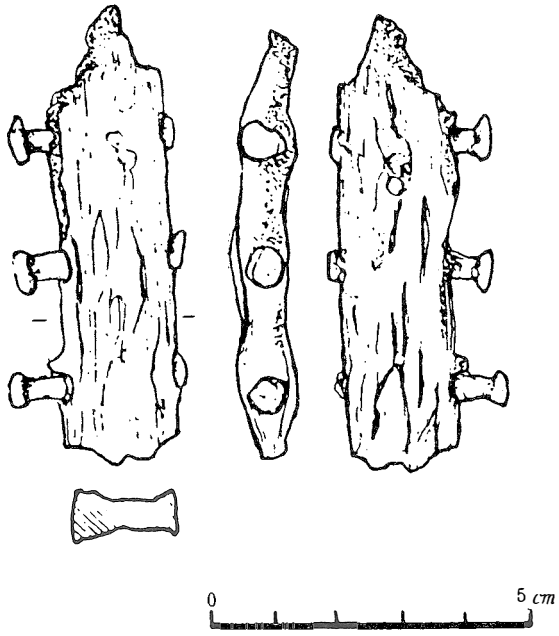


Fig. 185　大萩地下式横穴36号出土鋲金具付木片
（報告書より転載）

cmの半球状の頭をつけた円棒」が取付けられていて、これは銅製品ではあるけれども鉄製品に置きかえることもできよう。

宮崎県大萩地下式横穴36号[註29]では鉄製の武器・農工具、骨鏃等とともに「鋲金具付木片」が出土しており、「弓の弭に近い部分の残片である可能性」が指摘されている。この木片には3個の金具が付属している（Fig.185）。

福岡県竹並H－26号横穴墓[註30]出土品は、説明がないので詳しいことはわからないが、この種の金具に2孔をもつ鉄板が取付いているように見受けられる（Fig.186）。

千葉県持塚7号墳ではこの種金具が5個並んで出土しており、弓を副葬した状況そのままが知られる。[註31]

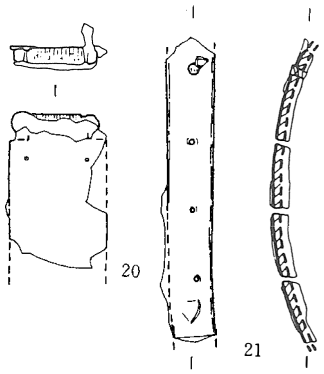


Fig. 186　竹並H－26号横穴墓出土鉄器（報告書より転載）

以上を見るに、この種の金具が弓の弭か弭の部分に使用されたことは疑いなく、弭としては特殊であろうから弭部分に付属するものと考えてよいと思われる。持塚7号墳では5個が片方に偏して並んでおり、対になるもう一方には遺存していない。もともと片方のみに付属するものなのか、偶々片方のみであったのか定かでないが、この種の金具が5個前後を1組として弭部分に用いられたことが知られ、もし上下両端に用いられたとすれば10個前後をもって1本の弓の金具ということになる。しかし、鞍手郡鞍手町銀冠塚[註32]では14個、宗像市相原2号墳[註33]で10個この立山山8号墳・朝倉郡朝倉町狐塚古墳[註34]で9個、福岡市高崎2号墳[註35]で7個、鞍手郡鞍手町向山4号墳[註36]で5個などの出土を見るが、ただの1個しか出土していない古墳も多数あり、出土数量は一様ではない。1個しか出土していない古墳については、この金具をもって弓の代用としたのかも知れない。

(6). 挂甲

8号墳からほぼ一領分に相当する挂甲小札が出土した。3～4枚が銹着して紐の残っているものもあり、威し方あるいは綴り方の一端を知ることができる。また、小札の形状には大きく3様あり、そのうちの頭円下直となるものは、大きさの異なるもの9種類が認められた。これらはそれぞれが綴られる部位に合わせて造られたものとすることができる。威し孔および綴じ孔は全般に銹化著しいために不明なものが多いが、最低4個は有しているはずであり、最大12個くらいであろう。

これらの小札を使って、本来の挂甲の姿（着装状態）を得原することは極めて難しいが、大阪府長持山古墳[註37]出土の得原された挂甲を見れば、それとほぼ同様の形状であったことは想像に難くない。ただ立山山例は、腰部付近に用いられたのであろう湾曲のある小札がそれほど長く

なく、湾曲の度合いも小さいように見受けられる。

今までに全国的に見ればかなりの古墳から挂甲が出土しているものと思われるが、九州では管見に触れたものに20基程がある。

いま、福岡県・佐賀県の分のみ列記する。

福岡県

勝浦10号墳（宗像郡津屋崎町）――― 前方後円墳
(註38)
新原奴山17号墳（　　同上　　）―― 前方後円墳
(註39)
荒無田１号墳（糸島郡志摩町）――― 円墳
(註40)
王塚古墳（嘉穂郡桂川町）――――― 前方後円墳
(註41)
山の神古墳（嘉穂郡穂波町）――――― 前方後円墳
(註42)
月の岡古墳（浮羽郡吉井町）――――― 前方後円墳
(註43)
塚堂古墳（　　同上　　）――――― 前方後円墳
(註44)
古畑古墳（　　同上　　）――――― 円墳
(註45)
前畑古墳（久留米市）――――――― 円墳
(註46)
立山山８号墳（八女市）――――――― 円墳
琵琶隈古墳（行橋市）――――――― 円墳
(註47)
番塚古墳（京都郡苅田町）――――――― 前方後円墳
(註48)
丸山塚古墳（　　同上　　）…… 円墳
(註49)

佐賀県

庚申堂塚古墳（鳥栖市）――――――― 前方後円墳
(註50)
塚山古墳（神埼郡三田川町）――――― 前方後円墳
(註51)
潮見古墳（武雄市）――――――――― 円墳
(註52)

これを見ると、前方後円墳が多く、円墳も大規模なものがほとんどである。他の出土遺物も豊富で、特に馬具には目を見張るものがある。これらの古墳は５世紀前半から６世紀代における地域毎の首長墓と思われ、北部九州については胸形君・的臣・筑紫君・筑紫米多国造等と有機的関連を有するものと考えられる。(註53) 彼らは挂甲に身を固め、飾りつけた馬に騎して配下の者たちに威儀を示したのであろうか。後に述べる垂飾付耳飾りを出土した古墳においても挂甲の出土例が多いのは、これらの遺物の属性を示しているものといえよう。

註１．水野正好「群集墳の構造と性格」古代史発掘６　　1975

２．瀬高町教育委員会『名木野古墳群』（瀬高町文化財調査報告書　第１集）　1977

３．近沢康治・村山健治「山門郡瀬高町蛇谷古墳調査概報」筑後考古　第３号　1976

４．小田富士雄「古墳文化の地域的特色 ―― 九州 ――」日本の考古学　Ⅳ　1966

5．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅲ　1972
6．久留米市教育委員会『木塚遺跡』（久留米市文化財調査報告　第14集）　1977
7．江田船山古墳編集委員会『江田船山古墳』　1980
8．福岡市教育委員会『福岡市老司古墳調査概報』　1969
9．甘木市教育委員会『池の上墳墓群』（甘木市文化財調査報告　第５集）　1979
10．福岡県教育委員会『若宮・宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告』第２集　1980
11．福岡県教育委員会『新原・奴山古墳群』（福岡県文化財調査報告書　第54集）　1977
12．宗像市教育委員会『浦谷古墳群Ⅰ』（宗像市文化財調査報告書　第５集）　1982
13．石川恒太郎・内藤芳篤「丸山石棺群発掘調査」（『宮崎県文化財調査報告書』第21集）宮崎県教育委員会　1979
14．岩永哲夫・田ノ上哲「築池地下式古墳発掘調査」（『宮崎県文化財調査報告書』第20集）宮崎県教育委員会　1978
15．唐津湾周辺遺跡調査委員会『末盧国』　1982
16．大牟田市教育委員会『筑後古城山古墳』　1972
17．今までにかなり多くの鹿角装刀剣が発見されているが、最近のもので直弧文を持つ例としてえびの市平松地下式古墳昭54－２号がある。
北郷泰道・岩永哲夫「平松地下式古墳発掘調査（昭54－２～４号）」（『宮崎県文化財調査報告書』第22集）宮崎県教育委員会　1980
18．註11に同じ。
19．恵子遺跡調査会・東洋開発株式会社『恵子若山遺跡』　1975
20．太宰府町教育委員会『宮ノ本遺跡』（太宰府町の文化財　第３集）　1980
21．福岡市教育委員会『藤崎遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書　第80集）　1982
22．註２に同じ
23．嘉穂地方史編纂委員会『嘉穂地方史』先史編　1973
24．八女市教育委員会『城の谷遺跡』（八女市文化財調査報告書　第９集）　1983
25．八女市教育委員会『管の谷窯跡群』　1971
26．村山健治「山門郡山川村面ノ上古墳概報」『筑後地区郷土研究』創刊号　1968
27．市毛勲「古墳出土の鉄製留金形小品について――その名称と用途をめぐって――」古代学研究87　1978
28．奈良県教育委員会『メスリ山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第35冊）　1977
29．茂山護「大萩地下式横穴36号発掘調査」（『宮崎県文化財調査報告書』第22集　宮崎県教育委員会　1980
30．竹並遺跡調査会『竹並遺跡』　1979
31．この古墳は註29文献にて紹介されている文献（田中新史「古墳出土の飾り弓――鋲飾り弓の出現と展開」『伊知波良』　1979）にあたれなかったため下記を参照した。
市立市川博物館『図録法皇塚古墳』　1981

32. 福岡県教育委員会『銀冠塚』（福岡県文化財調査報告書　第28集）　1963
33. 宗像町教育委員会『相原古墳群』（宗像町文化財調査報告書　第１集）　1979
34. 福岡県教育委員会『筑前国朝倉郡狐塚古墳』（福岡県文化財調査報告書　第17集）　1954
35. 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集　1970
36. 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 Ⅻ　1977
37. 『世界考古学大学』日本Ⅲ　その他に紹介されている。
38. 註11に同じ
39. 註11に同じ
40. 小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表」九州考古学22　1964
41. 川上市太郎『筑前王塚古墳』（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第11輯）　1935
梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』(京都帝国大学文学部考古学研究報告　第15冊)
1939
42. 註23に同じ
43. 島田寅次郎　『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第１輯　1925
44. 田中幸夫「筑後千年村徳丸古墳前方部石室に於ける埋葬の状と遺物の一二」 考古学雑誌25－1　1935
宮崎勇蔵「筑後国浮羽郡千年村徳丸塚堂古墳」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第10輯)
1935
45. 九州歴史資料館『田中幸夫寄贈品目録』　1982
46. 玉泉大梁「草野町宮崎邸内装飾古墳」(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書　第６集)　1931
『久留米市史』第１巻　1981
47. 鏡山猛「福岡県行橋市琵琶隈古墳」日本考古学年報８　1959
48. 波辺正気・松岡史「福岡県京都郡番塚前方後円墳」(日本考古学協会第24回総会研究発表要旨)　1959
49. 註40に同じ
50. 佐賀県立博物館『庚申堂塚調査報告書』（佐賀県立博物館調査研究書　第４集）　1978
51. 『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第19輯　1950
52. 武雄市教育委員会『武雄市潮見古墳』　1975
53. 佐田茂「筑後地方における古墳の動向～在地豪族の変遷――」(『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』)
1980

2．陶質土器と古式須恵器

I

いま、北部九州では多くの陶質土器の発見と相俟って、須恵器の生産開始、あるいは陶邑系須恵器のあり方等々が大きな関心を呼んでいる。

日本国内で生産されたものを須恵器[註1]とし、それ以前にあるいは同じ頃に朝鮮半島から持ち込まれたものを陶質土器とするとき、須恵器の源流が朝鮮半島にあることを思えば、須恵器の最初期のものと陶質土器とでは各々の識別が容易ならざる場合が少なくないのは蓋し当然といえよう。仮に、朝鮮半島から倭への渡来人たちが土器（陶質土器）を携えてきて定住し、今度はその地（倭国内）で窯をつくり土器を焼いたとすれば、その両者の土器は形態・手法等のうえでほとんど似通っているはずであり、極端に異なることはありえないだろう。

日本で最初に須恵器焼成が行なわれたとされている大阪府南部の一須賀窯と陶邑のＴＫ73・ＴＫ85・ＴＫ87・ＯＮ22などの製品を報告書で見るに、その一部は確かに朝鮮半島[註2]、殊に伽耶地方の土器との類縁性が指摘[註3]される。北部九州で今までに発見されている陶質土器も、多くはやはり伽耶地方との類似が認められる。

II

従来、日本で最初の須恵器生産は陶邑で始まり、地方窯が成立するまでの初期の40～50年間は陶邑からの一元的供給体制であった、とする認識が持たれていた。しかし、この数年来のうちに宮城県仙台市大蓮寺窯・金山窯[註4]・愛知県東山218号窯・城山２号窯、香川県宮山窯等々の窯跡[註5]が相ついで発見されるに及び、初期須恵器の焼成開始は、陶邑とほぼ併行か遅れる[註6]ことごくわずかという状況が、一部の限定された地域というでなしにおそらくは全国的拡がりの中で把えられるような状況となってきた。後述のように陶邑より古く須恵器の焼成がなされた可能性もある。

九州でもこれまでは、福岡市新貝窯跡、佐賀市神籠池窯跡の時期以前の古式須恵器が出土したとき、それらは一様に畿内周辺からの搬入品とする解釈[註7]が暗黙[註8]のうちに行なわれてきた。実のところ、九州に限らずとも窯がなくて（発見されなくて）製品のみ存するとなれば、何処からか将来されたものと考えるのはもっともなことである。事実、東北地方においては大蓮寺窯跡の発見までは、まさしく多賀城跡成立以前のすべての須恵器は搬入品との認識であった。しかし、仮に窯が確認されてその製品が陶邑の初期のものとほぼ同じようなものであった場合には、それまで陶邑産としていたものの多くを再検討せねばならぬのはまた当然のことであろう。九州ではいま知られているものとして、朝倉郡夜須町の城山山麓に、実態はまだ不分明ながらも、古式の須恵器を焼成した窯跡がある（小隈窯跡）[註9]。採集品のみで全ての判断はできないが、

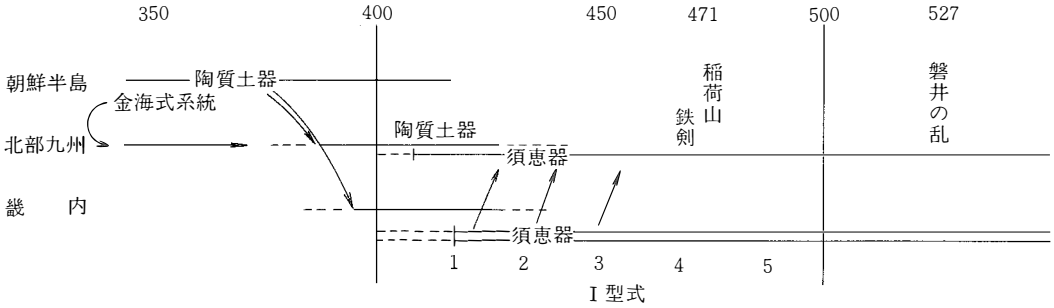
少なくとも今のところ九州で最も古い窯跡であり、陶邑でいうⅠ型式第1段階と同様の時期の資料もあって、ここの製品が、今まで九州において陶邑産と称されてきたものの中にある程度含まれていることは十分に考えられる。坏蓋・坏身の一部に口縁端部が特徴的に外反する資料をみるが、ともあれ、将来の正式な調査に期待するとしても、きわめて注目すべき窯跡である。しかしまた、陶邑で産した須恵器が九州へ流入してきていることも厳然とした事実であろうことをなおざりにはできない。

ところで、近年、甘木市池の上[註10]・古寺両[註11]遺跡で墳墓に供献・副葬された陶質土器・須恵器が多く発見されるに及び、このうちの陶質土器は渡来人たちが彼地から携えてきたものか、あるいは彼らが当地周辺にて窯をつくって焼成したものか、との論議を呼ぶに至った。窯跡が未発見の現在では前者の解釈、即ち将来されたものと考えるのが最も自然であり、おそらくそうであろうが、しかしもしそれらを焼成した窯跡の発見があれば、いま陶質土器としているものの大半は初期須恵器と改称されることとなる。考えるに、古寺遺跡にみるような大甕（D－6出土品、Fig. 187－1）あるいは初期の須恵器とされている甘木市小田茶臼塚古墳出土大甕[註12]など、高さ1mにも達しようというものを数百kmも離れた地から運んできたとするよりは（それが不可能でないことはわかるが）、当地にて製作されたのではないか、との感を強くするのである。しかし、たとえそうであったとしても、今までに甘木・朝倉周辺地域において多くの陶質土器が発見されているという事実は、その土器が今までの研究成果からみて彼地直系のものであることが疑いえないことである以上、少しもその意義を失なうものではない。

いま、日本国内で最初に須恵器焼成の行なわれたのが、陶邑なのか、あるいは他の地域、特に北部九州であるのかという懸案をふまえた上で、先にふれた朝倉郡夜須町小隈窯跡の採集資料が陶邑の最初期段階のものとあまりかわらないようであるとの観点から勘案すれば、現段階で私考する解釈は次のようになる。

すなわち、北部九州においては4世紀代から朝鮮半島南部からの（硬質の）陶質土器の流入がみられるが、やがて（おそらく4世紀末～5世紀前半のうちに）直接の渡来人たち自身か、あるいはその子・孫たちにより（朝倉郡周辺で）須恵器の焼成が始まった。同様の事象はやや遅れて瀬戸内～畿内周辺へと拡がってゆくものの、特に畿内においては、北部九州でのあり方と比べるならば、該期の政治的状況の絡みがあって様相が若干異なっていよう。つまり、九州ではわりと密かな状態で事が進む、換言すれば初期の試行錯誤的状況を呈するのに対し、畿内では政治的中枢の地ということを反映して、はじめから管理された体制の中で、大々的規模で進展してゆく。やがて陶邑産の製品が政治的レベルの流れに沿って九州へも流入してくることとなり、ある時期には在地産と陶邑産の各々の須恵器が、共伴するか否かは不明ながら、共存している状況[註13]となる。北部九州での須恵器生産は、以後、断続的に続いてはゆくものの、やはり畿内とは比べようもないほどに小規模なままであったとせざるをえない。上述したことを

図式化すれば次のようになる。



III

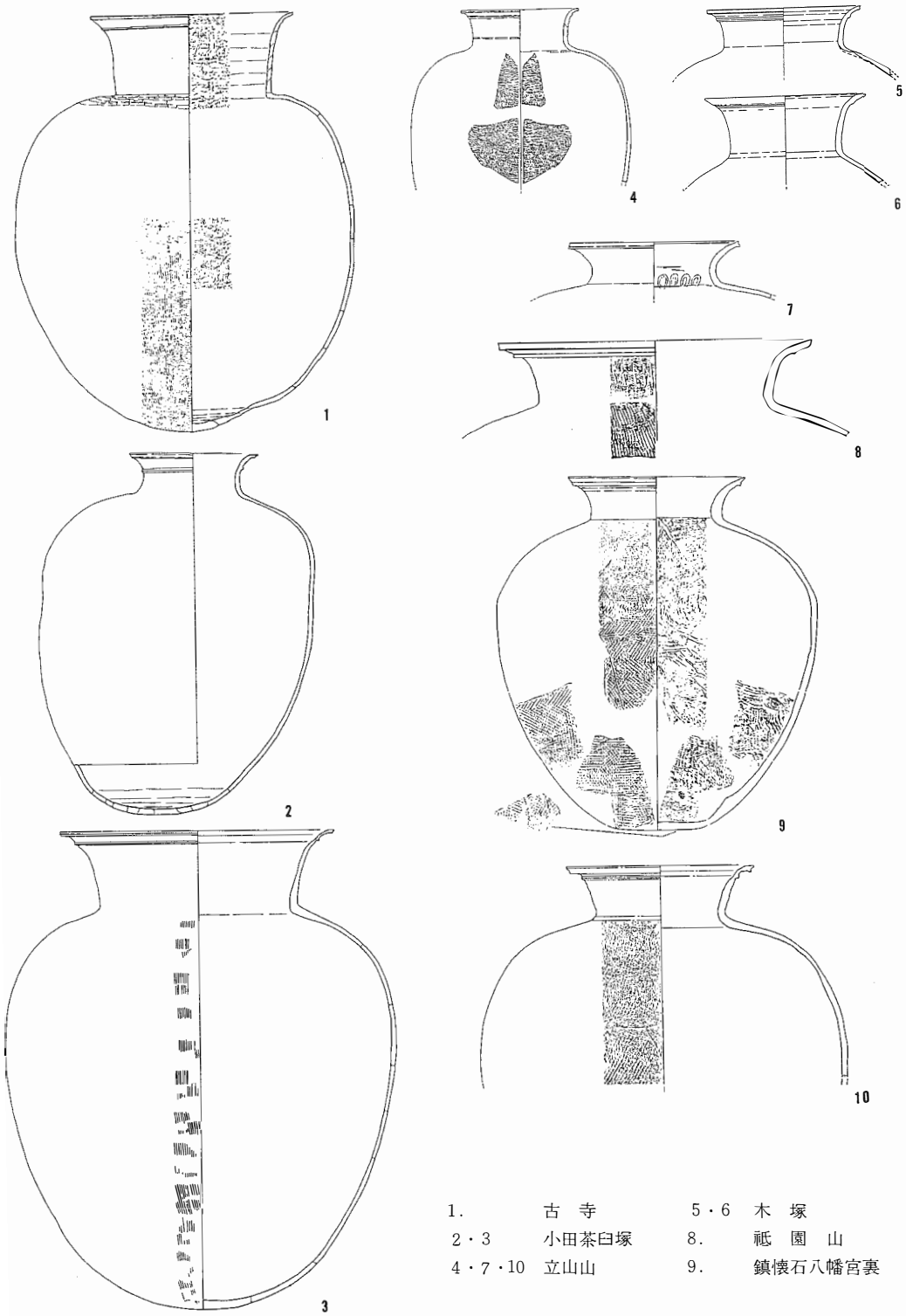
九州で発見される古式の須恵器については、先述の如く在地産のものがあるにしても、その編年は今一歩明瞭でないところが多いように思う。従来、古墳・住居跡出土品あるいは採集品を中心に編年がうちたてられたのであったが、なにぶん資料的な制約が多すぎたのは否めず、この点は、その後の資料の蓄積はずいぶんあったにしてもやはり、同時性の把えられる生産地たる窯跡出土品を欠いていることにおいては今も大してかわらないのである。個々の資料の編年的位置は型式学的方法により大半が決定できるが、型式内における器形のバリエーション等はやはり生産地にての把握が最も簡単かつ重要であろう。その点でも小隈窯跡の存在は刮目して余りあるのであるが、とりあえず今は、陶邑での編年体系を援用して検討したいと思う。

次に、立山山墳群における陶質土器、須恵器そして共伴する土師器をみてみたい。

IV

立山山古墳群の出土資料についてみると、21～25、27・29・38・11・12の10基の古墳での出土土器を問題とするが、21・25・29・39・11の各号については細片であり、かつ混入の可能性をもつものもあって、十分な検討に耐えない。また、22号は惜しむらくも主体部を削平してしまって、石室を含めた総合的検討を反故にせざるを得ないものである。

（ｉ）まず、24号墳周溝出土土器（以下、各号墳とも周溝出土という表現を省く）をみると、大甕（Fig. 82－１）は口縁～胴部の破片資料ではあるけれどもおよそ全体の器形を推定しうる。今比較しうる最も近似した資料は甘木市古寺Ｄ－６供献陶質土器（Fig. 187－1）である。同じ甘木市の小田茶臼塚古墳くびれ部出土大甕の２号および３号須恵器（Fig. 187－2･3）の口縁部とも似てはいるが、頸部、口縁部の立上り（開き具合）に違いをみる。さらに久留米市木塚古墳[註17]墳丘トレンチ出土須恵器（Fig. 187－５）および、同祇園山古墳[註18]裾部外周出土須恵器（Fig. 187－８）にも似るが、いずれも頸部の長さと肩部の張り具合、そして口頸部の開き方に差がある。



1.　古　寺　　5・6　木　塚
2・3　小田茶臼塚　　8.　祇　園　山
4・7・10　立山山　　9.　鎮懐石八幡宮裏

Fig. 187　陶質土器・須恵器の甕（各報告書より転載：縮尺不同）

古寺D－6出土土器と当24号墳の土器とを比べると頸部の長さにおいて24号例が若干短いけれども、それは器体の大きさに関係している故であり、他の点においてはほとんど同様の形状を示すといってよい。ただ全体としては古寺D－6出土土器のほうが古そうな様相を有するように思う。この古寺D－6の大甕は池の上II式に位置づけてあり実年代として5世紀初頭～前葉が充てられている。

24号墳の土師器甕は所謂布留式の形制を残しつつも新しい段階へ移行していく形状を示すと思われ、井上裕弘氏が編年された中での、下原遺跡出土土器と門田・辻田6号住居跡出土土器との間に位置づけられるであろう。(註14) 佐々木隆彦氏編年でいえば、今光Ⅳ期とⅤ期の中間くらいと思われる。(註15) これらの実年代は大略5C初頭～前葉と考えられている。

以上を総合すれば、24号墳出土土器は硬質の大甕が池の上II式併行の陶質土器と把えられる。その陶質土器と土師器の甕とが共伴し、実年代として5C初頭～前葉に比定して大過ない。

(ii) 次に12号墳出土土器(Fig. 143－1)は白っぽい灰青色を呈し瓦質に近いもので、これの位置づけに苦慮するところであるが、現段階では須恵器の最も古いものとして、I型式第1～2段階に属するものと考えておきたい。池の上Ⅳ式に併行し、実年代として5C前葉～中葉に比定される。

(iii) 22号墳は瓿が完形であるものの、他の器種が揃わない。23号・27号の両古墳は須恵器・土師器が割合に多く出土していて他と比較するに好都合である。

23号墳の須恵器は甕や坏の一部および壺に古かるべき様相を保つものもあるが全体としては陶邑編年のI型式第3段階に併行すると考えられる。そのI型式第3段階は、それまでの初期的形制の域を脱して須恵器が定型化する頃として把えられているが、当23号墳の須恵器は特に坏蓋・坏身において、一部に定型化したものをみる(Fig. 72－3・5)ものの、まだ定型化してないと考えうるもの(Fig. 72－1・8)も含んでいる・樽形瓿については、もともと特異な器形で、I型式に特有のものとされ、その存続期間は第3段階までとされている。九州での樽形瓿の出土例は現在までに当古墳を含めて10指に満たず、その特異性および稀少性が知られる。しかし当古墳のものは全体にぼってりとした感じが強く、(註16) どうみても最初期の粗々しいながらも何かしら研ぎすまされたような、際立ったイメージというものを受けない。やはり樽形瓿としては終焉を迎えようかとする型式と思われる。

さらに土師器の埦についてみると、I型式第4段階(TK23型式)併行とされている乙植木2号墳、(註17) あるいは蒲田2号住居跡出土の埦よりも深さにおいて浅く、かつ、口縁下に僅かに稜をみるような屈折を有するという特徴(註18)があって、より古い様相が伺える。これは次に述べる27号墳の土師器にも共通する。つまるところ、石室が追葬の可能な横口式の構造でありながらも出土人骨が一体であることからして、出土した土器はおそらく一回の墓前祭に供されたものであり、新古の相がみられるのは一型式（一段階）内での変化の相の現われとみてよかろう。

(iv) 27号墳出土土器は最も比較検討のしやすい坏類を欠くが前述のように、土師器埦において

23号墳出土のものとほぼ同じような様相を呈するから23号墳出土土器とあまり隔たりのない時期が考えられる。ただ、中形の甕においては、23号墳のものと比べて、口縁端の外側が膨らみを持ってきており、より後出することは明らかといえる。瓶は22号墳のものと比較できるが、大きさの違いと、27号墳のものがややシャープさに欠ける点を伺いうるのみで、明瞭な時期差を指摘しにくい。強いていえば、27号墳のものが後出しよう。以上を勘案すれば、27号墳の土器は23号墳と同じくⅠ型式第3段階に含めうるが、すでに第4段階に近い様相を持つものと解したい。

Ⅴ

これまでに主にとりあげた24・12・23・27号の4基の古墳は、内部主体が石棺、竪穴式石室、竪穴系横口式石室と3種に分かれ、おおよそこの順序で構造的に変化していると考えられる。石棺は弥生時代以来の伝統的形態であり、古くから存続している。竪穴式石室は発生の根源は明確でないが古墳時代以降のものとして、畿内的様相を帯びるものである。そして竪穴系横口式石室は、特にこの立山山古墳群および周辺に見られるものについては、石棺と竪穴式石室を折衷して造りあげた形状をなしている。さらに当古墳群における4基の竪穴系横口式石室を比較検討すると、4基それぞれが細部において構造的差異を有しており、それは時間的経過の中で変化したものとみなされる。すなわち、基本的には石棺からの流れを汲んで腰石に扁平石を立てて使用していて、21号墳はそれが前庭部側壁までその形態をとっている。23号墳は前庭部側壁が河原石の積上げであり、25号墳は前庭部側壁が扁平石の平積みをとり入れ、27号墳に至っては玄室両側壁が最下段から平積みである。また横口部に達する墓道の傾斜が、21号墳から27号墳へと徐々に緩やかになっており、変遷の過程を伺い知ることができる。つまり、竪穴系横口式石室は構造的には21→(22)→23→25→27号墳と変化している。

以上の主体部形態の変遷は、先に述べた土器の変化と対応させて考えることができ、流れとしては、石棺→竪穴式石室→竪穴系横口式石室という順序に従って、24→12→22→23→27号墳として土器の変遷も追える。

Ⅵ

ここで、先に触れたことであるが、須恵器の焼成開始の問題について、若干補足して説明しておきたい。もとより、この方面を深く考究してきた訳でもないので、あるいは飛躍しすぎとのそしりをまぬがれないであろうが、現段階で私考することを述べる。この稿のⅡの終わりに示したように、私は須恵器の焼成開始は畿内よりも九州の方が早く、5世紀初頭前後には始まったであろうと考える。

その理由は、まず第1に詳細は未だ明らかでないものの、朝倉郡夜須町小隈窯跡採集の資料が、陶邑のⅠ型式第1段階併行か、あるいはそれより溯りうるかも知れぬ土器を含んでいることである。そして、今までに甘木・朝倉地方で多くの陶質土器が検出されていることは当地方

に朝鮮半島からの渡来人集団が存したことの証左であり、彼らの一部が小隈窯跡の操業者であったと考えても何ら不思議ではないと思うからである。しかし、これだけでは畿内より早いと断定しうるわけではない。次なる理由はきわめて消極的ながらも、北部九州の地は常に朝鮮半島および大陸への門戸であり、まずは北部九州に根をおろしたものが東漸するという基本的認識による。つまり須恵器の焼成もまず北部九州に一度おちついたあと東漸したと考えるものである。弥生時代中期以降は常に畿内が他の地より先進地であったと説かれているが、実際上、畿内の優位を説く前に、まず足を踏み入れるのが北部九州の地であったということを強く考えたい。仮に北部九州に寄らずに山陰経由、あるいは関門を見やりつつ瀬戸内を通って畿内へというルートも十分に考えられはするが、どのような事情があれ、まず常識的には北部九州を経由する。その際、北部九州は経由するのみで何も残るものがなく、畿内の最高権力へ全てのものが直行したかというと、そうでもなかったろう。我々の認識は、とくに古墳時代以降は、中国大陸あるいは朝鮮半島からもたらされるものは全てがまず畿内の権力者のもとに持ち寄られ、その後、配布および伝播という形で地方へ拡散する、というものである。しかし、畿内より西の地方、つまり将来されたものの経由する地方においては、いろいろな物品および技術が一部は畿内に達する前か、あるいはそれと併行して北部九州なり他の地域にもたらされたのではなかろうか。畿内の相対的優位性はゆるぎないものであったはずだから、他の西日本の地へもたらされた要因として、ひとつには落し子的なもので偶然性をもつということと、もうひとつには、畿内勢力に対抗するアウトロー的勢力によって独自に将来されたとする考えとがあげられる。いま問題としている須恵器焼成についてはむしろ後者を想定したい。

それでは、甘木・朝倉地方が何故に渡来人と関連するのか？ この件については、玄界灘沿岸から奥まった地であることを考えれば、即座に結びつく案件を想定しがたい。ただ、時期的に下降し、直接に関係はしないけれども、日本書紀斉明天皇6年の条（660年）に朝倉橘廣庭宮云云の記事があることを想いうかべたい。九州歴史資料館の行なった3次にわたる調査のしめくくりにあたって渡辺正気氏は、大宰府より南の奥まった所に宮がつくられた理由として〝このあたりの筑後川の様相が、百済の都の扶余などの景観にもっとも相似たように思われる〟点をひとつにあげられている。(註19)

その他に積極的理由はないのであるが、あるいは古くから渡来人と関連する何らかの要因があったために行宮を造営した、つまり池の上、古寺両墳墓群にみるような、渡来人たちと結びつけうる様相が脈々と続いていたと考えられはしまいか。甘木・朝倉地方の親朝鮮的なあり方の存続を想定するものである。

さて次に須恵器焼成が5世紀初頭前後に始まるという時期的問題である。これまでの先学の所説は、4世紀末～5世紀初頭とする森浩一(註20)・倉田芳郎(註21)・都出比呂志(註22)、5世紀前半代とする原口正三(註25)、5世紀中頃とする吉田恵二(註24)・野上丈助(註25)、5世紀後半代とする横山浩一(註26)・田辺昭三(註27)等々

の諸氏のものがある。これらを越えてより古く、あるいはより新しく考える人はいないようで、ほぼ4世紀末～5世紀後半のいずれかの時期に須恵器焼成が始まったとみている。その根拠は日本書紀における記事を援用し、かつ新羅焼などとの関連から説いているのがほとんどといえる。

私が5世紀初頭前後と考えた理由は、ひとつに、真偽の程は別にしても広開土王の碑文において4世紀末～5世紀初頭期に日本(倭)と朝鮮(高句麗)とが交渉（戦い）を持ったという点を重視する。後世の豊臣秀吉の朝鮮出兵は別称〝やきもの戦争〟といわれているが、同様な事例が4世紀末～5世紀初頭の交渉時にもあてはまりはしないだろうか。もちろん、それ以前に、倭がひんぱんに朝鮮半島南半部と交渉のあったことも前提にしている。もうひとつには、埼玉稲荷山古墳出土鉄剣銘のワカタケル大王が雄略天皇であるならこの古墳はおよそ5世紀後半～末に位置づけられる。(註28) 出土した須恵器は陶邑編年でいうⅠ型式第5段階併行と思われ、そうであるならばそれ以前に四型式（4段階）があるわけだから、一型式が20～25年としてやはり、5世紀初～前葉が須恵器焼成開始期となる。私の考えでは、九州はそれより若干早いから、5世紀初頭前後となるわけである。

Ⅶ

最後に、八女丘陵上にある立山山古墳群の中で陶質土器が出土したことの意義について若干触れておこう。

八女丘陵上の古墳群については、これまで石人山古墳を最古とし、6世紀前半に比定される岩戸山古墳を中心として、ほとんど6世紀代の古墳を中心に論じられてきた。それは磐井の乱以後の古墳のあり方からみて、筑紫国造家の乱後の動勢が何如ようであったかをみようとする観点に立論の根拠をおくものが大半であったからにほかならない。そしてその結論としては、筑紫国造家に断絶はなく、その命脈は乱以後も何世代か続いたとするのが大方の意見である。(註29)

ところで、八女丘陵上での5世紀代の古墳の存在は石人山古墳以外には真浄寺2号墳が知られているくらいであったが、最近の知見では欠塚古墳も5世紀代の須恵器を出土し(Fig.188)、また石室形態等から十連寺古墳も古式の古墳であることがわかっている。さらに今回の立山山古墳群の調査で5世紀代に属する群集墳の在することが知られるに至り、翻って磐井の乱以前の様相の解明も重視されることとなってきた。考えてみれば今までは往々にして5世紀後半代とされる石人山古墳をもって、急にふってわいた如くに筑紫国造家の強大な勢力が八女地方に現出したとしか見られなかったが、仮に筑紫国造家が南下して八女地方に居ついたのであったとしても、もとよりそれ以前に、政治的エネルギーを支える基盤は当地にても培われていたはずであろう。

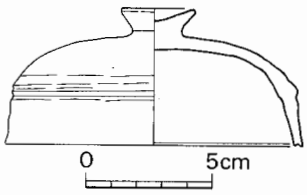


Fig. 188
「影塚」古墳出土土器実測図
(1/3)(筑後市郷土館蔵)

さて、石人山古墳はこれまで5世紀後半代に比定されてきたが、墳丘から埴輪の破片とともに陶質土器としうる土器が採集されている。その土器の年代比定の問題があるにしても、石人山古墳自体があるいはもう少し溯る時期の築造の可能性もある。

立山山24号墳での陶質土器が果たして将来されたものであるならば、この頃――5世紀初頭～前葉――には八女地方も彼地との交流と無縁でなく、それのイニシアチブをとる人も存したことであろう。

筑紫国造磐井は526年に新羅と結んで畿内政権への反抗ののろしをあげたものの、翌年には誅されたと日本書紀継体天皇条には記される。磐井が本当に新羅と通交し賂いを受けていたか否かはさておいても、6世紀前半代には確実に朝鮮半島と、筑紫国造家の奥津城となる根拠地・八女地方とで往来があったことを示しているものといえる。筑後郷土館に八女出土として収蔵されている土器（Fig. 189 ）は明らかに舶載されたものであり〝八女出土〟との注記を信ずれば、当地方と彼地との交流を端的に物語る物証である。

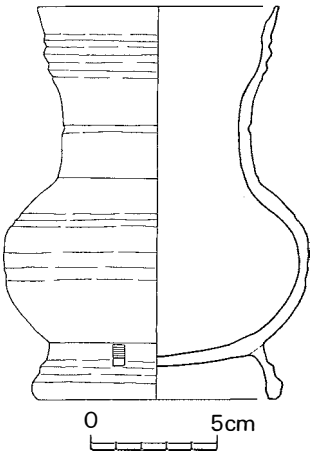


Fig. 189
「八女出土」土器実測図（1/3）
（筑後市郷土館蔵）

つまるところ、もともと北部九州に覇をとなえてきた筑紫国造家は、畿内政権の勢力伸長で、4世紀後半～5世紀前半代には本貫地を筑前から筑後に移したものと思われる。その頃に、彼我の交流の過程でもたらされた陶質土器が、さまざまの理由のもとに最終的には立山山24号墳にも供献されたものと考える。(註30) 24号墳自体は、他の石棺を主体部とする古墳に比べると、より大きく、多分にその中で盟主たる地位にあった人のものと考えられよう。筑紫国造家との関係は、その配下であったことは恐らく確かであり、彼地との交渉に携わった人であるかも知れない。その後も朝鮮半島との交渉が継続され、文物の流入のあったことは、8号墳出土の垂飾付耳飾りが如実に示している。

註1．立山山古墳群での陶質土器・古式須恵器の出土を契機に、私もこの問題に直面した。この稿の文章に軽薄な発想も随所に見られることは十分に承知しているが、予察的な意味をこめて、今後の展開の足がかりとしたい。なお、この稿については、柳田康雄・井上裕弘・橋口達也・佐々木隆彦氏等との対話において有益なサジェスションが得られたことに対し、深く感謝します。

註2．田辺昭三『須恵器大成』 1981

註3．田辺昭三『陶邑古窯跡群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ 1966

大阪文化財センター『陶邑』Ⅰ～Ⅵ（大阪府文化財調査報告書28～31） 1976～1979

註4．田辺昭三「陶邑の変貌」 古代の日本5 1970

註５．桑原滋郎「東北の須恵器」　世界陶磁全集２　1979

渡辺泰伸「東北古埴時代須恵器の様相と編年一須恵器編年試論一」
（考古学雑誌 65－４）　1980

註６．松本敏三「香川県出土の古式須恵器一宮山窯跡の須恵器一」
（瀬戸内海歴史民俗資料館年報 第７号）　1982

註７．小田富士雄「九州の須恵器」　世界陶磁全集２　1979

註８．木下之治・小田富士雄「神籠池須恵器窯跡」佐賀県教育委員会『帯隈山神籠石とその周辺』
（佐賀県文化財調査報告書 第16集）所収　1967

註９．甘木市教育委員会『古寺墳墓群』（甘木市文化財調査報告 第14集）　1982

註10．　〃　『池の上墳墓群』（甘木市文化財調査報告 第５集）　1979

註11．註９に同じ

註12．甘木市教育委員会『小田茶臼塚古墳』（甘木市文化財調査報告 第４集）　1979

註13．陶邑産須恵器と在地産のものとの見分けが大きなポイントとなろうが、形態・手法上で一律に区別しうるものとは思えない。胎土分析その他の自然科学的方法を活用して、明確な区別の基準設定が必要であろう。

註14．井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」（福岡県教育委員会
『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第７集）　1978

註15．佐々木隆彦「土師器について」（春日市教育委員会『赤井手遺跡』春日市文化財調査報告書 第６集）1980

東急不動産株式会社『今光遺跡・地余遺跡』　1980

註16．管見に触れるものに以下がある。

福岡市西区今山第５地点住居跡

同　二子塚古墳（『世界陶磁全集』２　1979）

春日市赤井手遺跡43号住居跡（春日市教育委員会『赤井手遺跡』　1980）

糸島郡志摩町御床松原遺跡（志摩町教育委員会『御床松原遺跡』　1983）

久留米市木塚古墳（久留米市教育委員会『木塚遺跡』　1977）

鹿児島県肝付郡串良町小原古墳群（立神次郎・中村耕次「鹿児島県串良町小原古墳群内発見の
古式須恵器」　古文化談叢 第５集　1978）

以上のうち、赤井手・御床松原・木塚の各資料は最も古いものである。

註17．福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』Ｘ　1977

註18．福岡市教育委員会『蒲田遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第33集）　1975

註19．九州歴史資料館『朝倉橘廣庭宮跡伝承地 第３次発掘調査報告』　1976

註20．伊達宗泰・森浩一「生活の変化――土器」　日本の考古学Ⅴ　1966

註21．倉田芳郎「須恵器」　新版考古学講座５　1972

註22．都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」（日本考考学会第17回例会講演要旨）
考古学雑誌67－４　1982

註23．原口正三「須恵器の源流をたずねて」　古代史発掘6　1975

註24．吉田恵二「須恵器」　地方史マニュアル6　1977

註25．野上丈助「古墳時代の生産組織と技術」　日本考古学を学ぶ(2)　1979

註26．横山浩一「手工業生産の発展」　世界考古学大系3　1959

註27．註2に同じ

註28．埼玉県教育委員会『埼玉稲荷山古墳』　1980

註29．佐田茂「筑後地方における古墳の動向―在地豪族の変遷」(『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』)　1980

註30．それでも筑紫君の勢力範囲が北部九州一帯に及ぶものであったことは、磐井の乱後にその子である葛子が連座させられるのを恐れて糟屋屯倉を献上したということからも伺える。

筑後の八女地方を奥津城の地と選んだことには、畿内政権の勢力伸長以外にも別の大きな理由があるのかも知れない。

〔補記〕

朝倉郡夜須町小隈窯跡以外にも、古手の須恵器を焼成したらしい窯跡が同町八並にも存するという。さらに、甘木市の池の上・古寺墳墓群と柿原古墳群の存する丘陵地にも窯跡の存する疑いがあるという。今後の踏査等に期したい。この点については中村勝氏の御教示による。

3．垂飾付耳飾り

立山山８号墳から出土した耳飾りは細金細工（Filigree フィリグリー）の技法を駆使したものであり、特に中間飾・垂下飾の表面に金粒を吹きつけた金粒細工（granulated work）と、兵庫鎖にみる二重の繋ぎのつくりは、きわめて優美かつ精巧というべきである。

後期古墳に多く出土する耳環（金・銀・銅地金銅張等々の環）も耳飾り（註１）であるが、ここではそれら親環に垂飾を付加したもの（註２）を取扱う（以下、「垂飾付」の表現を省き、単に耳飾りと記す）。

細金細工の技法的系譜は中近東を発生の地とし、やがて東漸したものとすることができよう。細金細工を施した装飾品は、古くエジプト第12王朝に遺品がみられ、その後ギリシア・エトルリア・中央アジアなどにおいて時期を異にしつつ発展する姿を見ることができる。

中国では、『天工開物』（註３）によれば金の産地は百余ヶ所あると記されるが、今までの考古学的成果をふりかえるに、中国本土での顕著な金・銀使用の製品を見ることが少ない。殷・周時代の青銅器類、あるいは著名な満城漢墓の金縷玉衣そして玉璧等を見ても、漢民族はむしろ青銅・玉石類をよく好んだように思われる。

一方、モンゴルから中国北辺部および東北地方にかけては金銀製の細金細工のある装飾品を多く見ることができる。それは、中央アジアから北方遊牧民族の間に流行したものの流れとみるべきもので、最近でも漢代の西溝畔匈奴墓地等での発見例がある。要するに、細金細工の装飾品は北方民族（スキタイ・匈奴等）を介した系譜で朝鮮半島（註４）そして日本へと流入していったものとみなされる。

朝鮮半島で装飾品として著しい発達を見せるのは冠および耳飾りとしてであり、特に耳飾りにみる金粒細工は目を見張るものがある。朝鮮半島での耳飾りは、出土地不詳で博物館・個人等に所蔵されているものもかなりあるらしいが、現段階では70以上の遺跡から出土していることを知る。それも新羅・伽耶地域において全体の約８割以上が出土している。なお、太環式とするもの、そして杏葉形瓔珞が輪状に多数垂下されているものの例は日本においてはみられない。

日本で発見されている耳飾りは朝鮮半島のものと比べたら、技法的に若干見落とりがすると説かれ、そのことが舶載でなく国内産であることを暗に示していたように思われる。確かに国内産のものもあろうが、立山山８号例を含めていくつかは舶載されたものがあると考える。

さて、日本ではこれまでに破片資料あるいは現存しないものをも含めて47例を知りうる。それらは未報告のもの、あるいは報文があっても原典にあたれなかったものが少なからずあるものの、とりあえず集成してTab. 4に示した。不完全な集成をもとに何をか言わんとするのは甚だ遺憾ではあるが、おおよその傾向等は伺い知れるので、知見の及ぶ範囲で抽出できる事象を

以下にかいつまんでみよう。その前に、まず耳飾り自体の形態的分類をしておく。

Ｉに、兵庫鎖の長さで２つに分ける。

Ａ：長条形――兵庫鎖が中間飾を介しても10連以上のもの。

Ｂ：短条形――Ａ以外のもの。兵庫鎖のないものも含む。

IIに、垂下飾の形状でわける。

１．扁平ハート形――杏葉形とすべきものもある。象嵌のあるものを１ａ、その他を１ｂとする。

２．三翼（四翼）形――見通し平面形は概ね３に近い。

３．山梔子形――三稜形をなす。

４．浮子形――片方が尖り気味になる円筒形をなす。

５．その他

以上の分類のうち、Ｉについては野上丈助氏が説かれているように、(註５)時期差を表象しているとしてよい。つまりＡが５世紀代、Ｂが６世紀代というおおまかな時期区分が可能である。Ｉ・IIともに地域性は考慮できない。

それでは箇条書きに述べる。

• 墳形のわかる39基の古墳のうち前方後円墳は17基を数える。最大規模は奈良県島根山古墳の全長 172ｍで、他は30～40ｍ級が多い。ただ、堀田啓一氏が指摘されるように、(註６)関東地方の古墳は大型のものとすることができる。

• 主体部構造は横穴式石室が最も多く、そのうちで複室構造となるのは熊本県大坊古墳の１基のみである。特色あるものとして、宮崎県下北方地下式横穴５号があり、これの被葬者の位置づけは重要である。

• 耳飾り以外の出土遺物も豊富なものが多く、鏡鑑類、武具、馬具等に顕著なものをみる。

• 福岡県セスドノ古墳・佐賀県島田塚古墳・愛媛県金子山古墳出土のＡ－1b類の垂下飾は心葉形のほぼ中央に、象嵌に似せたと思われる円形の打出しがある。三者ともに形態も非常に類似しているので、あるいは製作者間の動きが追える資料となるかも知れない。

• 垂下飾が山梔子形をなすものは福岡県立山山８号・同日拝塚・佐賀県宮の上（半田）・大阪府一須賀Ｂ－９号・奈良県割塚・三重県保子里車塚の計６例を数え、くしくも九州に３例、畿内周辺に３例となる。朝鮮半島においては、昌寧校洞31号・晋州郡一洞造山１号・武寧王陵婦墓その他に山梔子形の垂下飾を見るが、ハート形のものに比すと類例は多くない。

註１．細金細工は「金銀の可伸性を利用して、細い柔かな糸を撚糾し、組弁し、これを地板に蠟付けをして、一種の飾となし、かつこれに金銀の粒やガラス製小玉等を蠟付によって塡飾し、作り上げる細工をいふ」ものとし、金粒細工もこれに含まれる。

＊後藤守一『上古の工芸』　考古学講座 第25巻　1930

註２．有機質のものを垂飾としていたことも十分に考えられるが、腐蝕し去って見ることのできないものは対象としない。

註３．明代の著作であるが、技術的系譜は古く溯ってまで大いに参考としうる。

宋鷹星撰　藪内清訳注『天工開物』　東洋文庫 130　平凡社　1969

註４．田广金「近年来内蒙古地区匈奴考古」　考古学報　1983－１

註５．都出比呂志・野上丈助「手工業生産と民衆」（日本民衆の歴史(1)『民衆史の起点』）三省堂 1974

註６．堀田啓一「冠・垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」古代学研究49、1967

Fig. 190・191に、参考として長畑１号墳・大門古墳出土の耳飾りを図示する。なお、Fig. 191は東京国立博物館所蔵で、柳田康雄氏に原図の提供をうけた。謝意を表します。

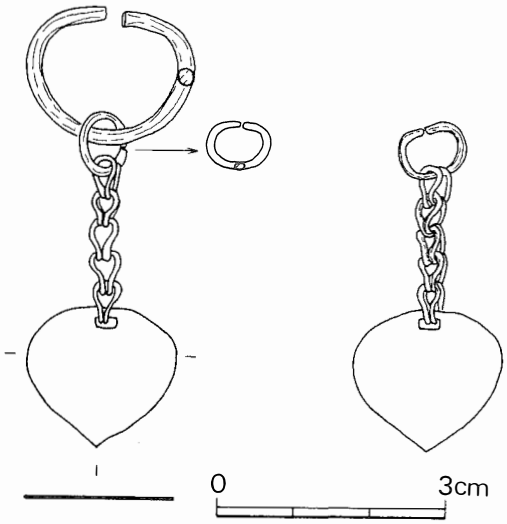


Fig. 190　田川郡香春町長畑１号墳出土垂飾付耳飾り実測図（1/1）

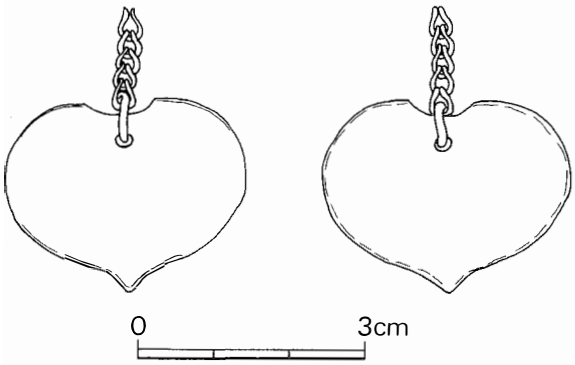


Fig. 191　糸島郡前原町大門古墳出土垂飾付耳飾り実測図（1/1）

参考文献

１．島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第13輯）　1939

２．福岡市教育委員会『下月隈天神森遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第76集）　1981

３．中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第５輯）1930

４．花村利彦「先史時代」（『田川市史』上巻）　1974

５．川述昭人・伊崎俊秋「長畑遺跡発掘調査報告」（郷土史誌『かわら』第16集）　1981

６．ａ．松尾禎作『佐賀県考古大観』　1957
＊
ｂ．松岡史「古代」『唐津市史』　1962

ｃ．唐津湾周辺遺跡調査委員会『末盧国』　1982

7．註6ａ、6ｂに同じ

8．後藤守一「九州北部に於ける古墳の二三(其の一)」 考古学雑誌12－4 1921

註6ｃに同じ

9．佐賀県教育委員会『龍王崎古墳群』 1968

10．梅原末治「豊後国速見郡北石垣村の石室古墳」 考古学雑誌14－4 1924

11．江田船山古墳編集委員会『江田船山古墳』 1980

12．梅原末治他「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」(『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二冊) 1925

13．玉名市教育委員会『史跡大坊古墳保存工事報告 書』 1979

14．原口長之 『臼塚古墳調査報告』(プリント) 熊本県立山鹿高等学校考古学部 1956
**

15．梅原末治『持田古墳群』 1969

16．宮崎市教育委員会『下北方地下式横穴第5号』(宮崎市文化財調査報告 書 第3集) 1977

17．松岡文一「伊予金子山古墳」 古代学研究 17 1957

18．松本敏三「香川県出土の古式須恵器」 瀬戸内海歴史民俗資料館年報 第6号 1981

19．野上丈助氏御教示

20．山陽新聞社『古代のかたち―吉備文化と出土品―』 1974

21．武藤誠「西宮山古墳」(武藤誠先生古稀記念会『兵庫県の古社寺と遺跡』1977 所収)

22．姫路市教育委員会『宮山古墳発掘調査概報』(姫路市文化財調査報告Ⅰ) 1970

23．〃 『宮山古墳第2次発掘調査概報』(姫路市文化財調査報告Ⅳ) 1973

24．加古川市教育委員会『加古川市の埋蔵文化財』 1970

25．大阪府史編集専門委員会『大阪府史』第1巻 1978

26．大阪府教育委員会『大阪府文化財調査概要 1973－Ⅰ』 1974

27．野上丈助氏御教示

28．梅原末治「大和磯城郡島根山古墳に就いて」 歴史と地理10－2 1922

29．小島俊次『星塚古墳』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報 第7輯) 1955

30．奈良県立橿原考古学研究所附属考古博物館『考古博物館 展示解説』 1977

31．奈良県立橿原考古学研究所『新沢千塚古墳群』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第39冊) 1981

32．〃 『新沢千塚126号墳』 1977

33．野上丈助氏御教示

34．和歌山市教育委員会『大谷古墳』 1959

35．〃 『花山西部地区古墳』 1967

36．野上丈助氏御教示

37．藤田亮策「朝鮮及び日本発見の耳飾について」(『朝鮮考古学研究』1948 所収)

38. 浜田耕作・梅原末治『近江国高島郡水尾村鴨の古墳』(京都帝国大学文学部考古学研究報告 第8冊) 1923

39. 三重県教育委員会『三重考古図録』 1954

40. 野上丈助氏御教示

41 a 上田三平「若狭国遠敷郡瓜生村西塚古墳」 考古学雑誌7－4 1916

b 〃 「西塚及び其附近の古墳」(福井県史蹟名勝地調査報告 第一冊) 1920

c 斎藤 優『若狭上中町の古墳』 1970

42. 橋本澄夫「北陸」(心のふるさとをもとめて 日本発見22「古墳の謎」1981)

43. 堀田啓一「冠・垂飾耳飾の出土した古墳と大和政権」 古代学研究49 1967

44. 長野県史刊行会『長野県史 考古資料編 全1巻(1) 遺跡地名表』 1981

45 a 村井嚴雄「千葉県木更津市大塚山古墳出土遺物の研究」 ミュージアム189号 1966

b 千葉県文化財センター『千葉県文化財センター研究紀要4 ―考古学から見た房総文化(古墳時代)―』 1979

46. 註45 b に同じ

47. 茨城県教育委員会『三味塚古墳』 1960

* 南山(玉島)古墳と宮ノ上(半田)古墳については混同があるらしく、例えば山梔子形の垂下飾のある耳りを、6 a・6 b 文献では宮ノ上(半田)古墳出土とするものの、6 c 文献とその他の概説書(『日本の考古学』Ⅴ、『日本の原始美術』⑨など)においては南山(玉島)古墳出土として紹介されている。いずれが正しいのか判然としないが、いまは松岡史氏の御教示に従って、6 a に示された如くとしておく。

**この古墳に耳飾りが存したことについては松岡史氏より御教示を受けた。

Tab. 4　垂飾付耳飾り発見地名表

古墳名	所在地	墳形	規模（全長m）	主体部	出土遺物 耳飾り	装身具	鏡鑑	武器	武具	馬具	農工具	土器	その他	時期	参考文献
立山山8号	福岡県八女市立山	円墳	34	横穴式石室(単)	B－3	勾玉管玉 ガラス玉		鏃	挂甲 弓付属金具	留金具・鈸具 帯締め金具		埴輪 須恵器 土師器		6C前半 ～中葉	
大門	福岡県糸島郡前原町	円墳			B－16	金環・銀環 ガラス玉・金線	1					須恵器 土師器			①
天神森1号	福岡市博多区下月隈	方墳？	7	横穴式石室(単)	B－ （中間飾のみ）	耳環		鏃			斧・刀子	須恵器		5C後半	②
日拝塚	福岡県春日市下白水	前方後円墳	46	横穴式石室(単)	B－3	金環・銀鈴玉 切子玉・棗玉・臼玉 ガラス玉・銀線	獣形鏡	直刀・矛・ 碗・鏃 柄頭		留金具・鈸具 鐙・轡・雲珠 馬鈴		須恵器	座金 金・銀薄板	6C前半	③
セスドノ	福岡県田川市伊田	円墳	36 (56)	竪穴系横口式石室	A－1b 〈1対〉	ガラス玉・棗玉 滑石玉・櫛・耳環	珠文鏡	大刀・短刀 矛・鏃・ 石突	短甲	轡・鈴付杏葉・辻金具 鈸具	刀子	円筒埴輪 陶質土器 土師器	金銅製飾板	6C初	④
長畑1号	福岡県田川郡香春町長畑	円墳	12	横穴式石室	B-1b〈1対〉								銅製品	6C代	⑤
南山 （玉島）	佐賀県東松浦郡 浜玉町南山	円墳		横穴式石室	B－1a	金環・銀環 勾玉管玉・小玉	内行花文鏡 六乳鏡					須恵器			⑥
宮ノ上 （半田）	佐賀県唐津市半田	円墳		横穴式石室	B－3 〈1対〉	勾玉・管玉丸玉		三累環頭							⑦
島田塚	佐賀県唐津市鏡今屋敷	前方後円墳	35	横穴式石室 （舟形石棺）	A－1b	勾玉・管玉小玉 切子玉・冠残欠 銅釧	方格規矩鏡 六獣鏡 鏡片	鏃・刀 三輪玉 剣・石突	眉庇付冑 挂甲	雲珠・鈸具 革金具		須恵器	銅碗 砥石	6C前半	⑧
龍王崎1号	佐賀県杵島郡有明町深浦	円墳	14	横穴式石室	（中間飾のみ）	耳環・銅釧・金銅製冠 勾玉・管玉・水晶玉 丸玉・小玉		鏃・刀			斧・刀子	須恵器 土師器		6C初 ～前半	⑨
鬼の窟	大分県別府市北石垣	円墳		横穴式石室	B－1 （現存せず）	切子玉・管玉 ガラス玉・勾玉・ 耳環		大刀・剣・ 槍身・鏃・ 刀装具		雲珠・鞍		須恵器			⑩
江田船山	熊本県玉名郡 菊水町江田	前方後円墳	46 (61)	家形石棺	B－1b A－1a （2・4） 〈2対〉	冠帽・冠・沓 帯金具・金環 勾玉・管玉・ガラス玉	画文帯神獣鏡 神人車馬 画像鏡 獣帯鏡 四獣鏡	大刀・剣・ 槍身・鏃・ 刀装具	甲・短甲	轡・鐙		須恵器		5C後半	⑪
伝佐山	熊本県玉名市繁根木	円墳	30	横穴式石室 〈刳抜石棺〉	B－4	玉			冑・短甲 頸甲・臑当						⑫
大坊	熊本県玉名市玉名	円墳		横穴式石室 （複室）	B－1 B－2 （2個）	耳環・勾玉・管玉 真珠玉		直刀・矛・ 鏃		杏葉・鐙 飾金具	刀子	須恵器 土師器		6C後半	⑬
臼塚	熊本県	円墳	28.6	横穴式石室	B－1？ （現存せず）	耳環・管玉・切子玉 ガラス玉		鏃		雲珠・杏葉 銜	刀子・鉸	須恵器・土師器 円筒埴輪	石人		⑭
持田28号	宮崎県児湯郡高鍋町	前方後円墳	44	木棺？	（1対） （現存せず）	勾玉・管玉・切子玉	神獣鏡	環頭・直刀						6C代	⑮
下北方地下式2号	宮崎市下北方町	地下式横穴	第7号墳（円墳）の封土下にある		A－1b （1対）	勾玉管玉 ガラス玉	獣形鏡 変形文鏡	刀・剣・矛 石突・鏃	短甲・冑 頸甲・肩甲	鞍金具・輪鐙 馬鐸・三環鈴 杏葉・鏡板	手斧・斧 鎌	須恵器		5C末～ 6C初	⑯
金子山	愛媛県新居浜市	円墳	25	竪立式石室	A-1b(1対)	銅釧・丸玉・小玉・臼玉	神獣鏡 四鈴鏡	刀・剣・鏃	靫			円筒埴輪		5C末	⑰
川向蛇塚 （津頭西）	香川県綾歌郡綾南町 羽床川向	円墳	7	竪穴式石室		銀装具	四神四獣鏡	剣・刀装具 刀・槍身 石突・鏃	短甲・冑 鎧小札	環鈴	斧	須恵器			⑱
丸山	香川県高松市														⑲
八幡大塚	岡山市北浦	円墳	30	横穴式石室（石棺）	B-1b(1対)			刀・剣				須恵器		6C後半	⑳
西宮山	兵庫県竜野市 日山西宮山	前方後円墳	34.6	横穴式石室		冠帽・帯飾金具 玉類	残欠あり	剣・鏃		鞍金具・前橋 後橋・鐙 杏葉・雲珠	刀子・鋤	円筒埴輪 形象埴輪 須恵器 土師器	釘		㉑
宮山	兵庫県姫路市四郷町	円墳	30	竪穴式石室 （第2主体部）	A－1a （1対）	帯金具・玉類	虺龍鏡	環頭太刀・剣 刀・矛・鏃	挂甲・肩甲 頸甲・篠籠手	馬面・飾金具 辻金具・鐙	手斧鍬 鎌・刀子	土師器・須恵器・埴輪	鉄鋌・鎹 砥石	5C後半	㉒
				竪穴式石室 （第3主体部）	A－1b （1対）	玉類・指輪	画文帯神獣鏡	剣・矛・刀 鏃	短甲・頸甲・肩甲・衝角付冑	轡	手斧鍬・鎌 鍬先・刀子	須恵器	鉄鋌・鎹	5C後半	㉓
カンス塚	兵庫県加古川市	前方後円墳	40～50	横穴式石室	A-1a(1対)		あり	刀・鏃							㉔
郡川西塚	大阪府八尾市	前方後円墳	54			玉類	画像鏡・四獣鏡	槍		銅鈴		須恵器			㉕
一須賀B-9号	大阪府南河内郡河南町	円墳	15	横穴式石室	B－3(1対)	耳環		鏃		轡・鈸具	刀子	須恵器	鎹	6C中	㉖
国府遺跡	大阪府藤井寺市総社														㉗
島根山	奈良県	前方後円墳	172	竪穴式石室	B－2	三輪石・勾玉 管玉・臼玉・鍬形石						埴輪	石製刀子 異形 銅製品		㉘
星塚	奈良県天理市上之庄	円墳	40	横穴式石室 （石棺）	B－1b	環・勾玉・丸玉・とんぼ玉・三輪玉・臼玉		剣・刀・ 鏃・槍		辻金具 鈸具	刀子	須恵器 土師器	鉄環 銅碗蓋・釘	6C末	㉙
割塚	奈良県大和郡山市矢田				B－3		画像鏡								㉚
新沢千塚 109号	奈良県橿原市川西町	前方後円墳	28	木棺 （直葬）	A－2 （1対）	小玉・臼玉	獣文鏡 珠文鏡 神獣鏡	剣・刀・ 鏃・槍	短甲 挂甲	三環鈴	鉋	埴輪	鐸 滑石円板	5C後半	㉛
新沢千塚 126号	奈良県橿原市川西町	長方形	11×22	木棺	A－5 （1対）	勾玉・臼玉・垂飾 空玉・腕輪・指輪 銙帯・歩揺	あり	刀				円筒埴輪	熨斗・漆盤 ガラス埦 ガラス皿	5C中 ～後半	㉜
新沢千塚	奈良県橿原市川西町														㉝
大谷	和歌山市大谷	前方後円墳	70	組合石棺	A－2 （2対半）	勾玉管玉・丸玉 棗玉・滑石玉・ 飾金具	素文鏡	刀・剣・矛	冑・短甲 挂甲	杏葉・雲珠・辻金具・鈸具・馬鈴・鐙・鞍・馬甲馬冑	鍬・鎌・手斧 刀子・のみ	円筒埴輪		5C中～ 6C初	㉞
花山6号	和歌山市	前方後円墳	49	横穴式石室		管玉・小玉・空玉						円筒埴輪		5C後半	㉟
背見山(晒山10号)	和歌山市														㊱
羽栗	滋賀県栗太郡羽栗														㊲
鴨稲荷山	滋賀県高島郡高島町鴨	前方後円墳	45	横穴式石室 （家形石棺）	B－2 （1対）	冠・魚佩・沓・ 金銅金具 切子玉・棗玉	あり	環頭大刀 大刀・刀・ 石突		鞍金具・鐙 轡・杏葉 雲珠・銅鈴	刀子・斧	須恵器		6C初	㊳
保子里車塚	三重県鈴鹿市	前方後円墳	50	竪穴式石室？ （組合石棺）	B－3 （1対）	環・勾玉管玉 切子玉・ガラス玉 把頭・刀装具	あり	刀・鏃	甲	鈸具・轡 杏葉・銅鈴	斧・鋤	須恵器 土師器	銅盤 銀容器		㊴
井関3号	三重県一志郡一志町						神人画像鏡 四獣鏡								㊵
西塚	福井県遠敷郡上中町	前方後円墳	67	竪穴式石室	A-1a(1対)	勾玉・管玉・小鈴・帯金具		刀・剣・矛・鏃	短甲・眉庇付冑	雲珠・杏葉・馬鈴	斧			5C中葉	㊶
天神山7号	福井市	円墳			A－2										㊷
小丸山	岐阜県高山市	円墳													㊸
畦地1号	長野県飯田市	円墳	20		A－1a										㊹
大塚山 （祇園・鶴巻）	千葉県木更津市祇園	前方後円墳		箱式石棺	A－2 （4）		画文帯 四仏四獣鏡	鏃・刀・剣	金銅製眉庇付冑 金銅製小札					5C後半	㊺
二子塚	千葉県市原市姉崎	前方後円墳	93	不明		勾玉管玉・棗玉 小玉	蟠虺文鏡 倣製変形文鏡	直刀・矛					石製模造品		㊻
三昧塚	茨城県行方郡玉造町	前方後円墳	85	箱式石棺	B－16	冠・竹櫛・管玉 丸玉・小玉	四神四獣鏡 変形乳文鏡	大刀・剣 鏃・戟	挂甲・短甲 衝角付冑	轡・飾金具	刀子・斧	埴輪	砥石・貝製品　他	6C初 ～前半	㊼

4．竪穴系横口式石室

竪穴系横口式石室を内部主体にもつ古墳は、21号、23号、25号、27号墳である。22号墳も可能性は強いが、破壊されて不明。いずれも浅い小さな周溝をもっている。地山面と石室の天井面とを比較すると、地山の上に天井石だけがでているだけぐらいで、墳丘そのものはあまり高くなかったことがうかがわれる。21号、23号墳はほとんど完全に残っていたが、25号、27号墳は大きくこわされていた。なお、21号墳については、以前、波多野晥三氏によって調査されており、詳細は『筑紫史論』３のなかにのべられている。

構造的にみると、長方形プランの玄室に簡単な羨道のつく構造で、ことさら特筆すべきものではない。玄室の構造では奥壁の腰石に板石を立てて、その上に板石を平積みにしていることは共通しているが、側壁の構造では若干の違いをみせている。

27号墳では基底から板石の平積みを行なっているのに対し、21号、23号、27号墳では、側壁の腰石に奥壁と同様に板石を立てて、その上に板石を平積みにしている。そして、21号、23号墳では支えるためか、内側にも板石を部分的に立てている。天井の構造は21号、23号墳でしか確認できないが、奥壁、羨道の両方から天井石を積んで行き、中央が一番高くなる積み方をしている。

羨道の構造では、板石を立てて袖石としているところは共通しているが、壁の積み方に変化がみられる。羨道の幅は基本的には玄室幅と変りなく、袖石だけがとび出しているような格好になっている。21号墳の壁は一枚の板石を立てているだけで、25号、27号墳では板石を平積みに重ねている。23号墳は河原石を乱雑につみ重ねているだけで、いずれも簡単な構造であることには変りない。閉塞は袖石の外側で、板石を立てかけている。

このようにみてくると、玄室の構造では、①　板石を立てて腰石としたもの。②　板石の平積みのまゝのもの。羨道の構造では、①　板石を立てている。②　板石を平積みに、四、五段積みあげている。③　河原石を乱雑に積みあげただけのもの、に分類できる。しかも、羨道はいずれも、天井を支える構造にはなっていなくて、玄室とは別作りになっている。

これらを構造的にみると、奥壁に板石を立て、側壁と羨道には板石の平積みを行なった27号墳と、玄室は板石を立て腰石とし、羨道を板石を立てただけの21号墳が古く、次いで、25号墳、23号墳となるようにも考えられるが、絶対的なきめ手はなく、逆もまた信なりという現象もみられる。

石組みの部分的な類似性は、調査したほかの古墳に求めることができる。24号墳の内部主体は箱式石棺であるが、四壁は板石を立て、その上に数枚、板石を平積みにし、蓋石をのせるという手法をとっている。板石の平積みの枚数をさらに重ねれば、21号、23号、25号墳と同じ構築法ということができる。30号墳は小さな竪穴式石室であるが、小口は腰石のように石を立て、

その上に平積みをしており、側壁は基底から板石の平積みである。これは27号墳の石の積み方に類似したものである。

こうしてみると、横口部の構造を除けば、基本的には箱式石棺、小竪穴式石室の構築法から生まれてきたもので、それに新来の横口部が付設されたものといえる。この周辺には同種の石室は集中的にみられ、真浄寺２号墳では、２基の石室がこれである。うち１基はすでに竪穴系横口式石室の類型として、広く紹介されているものである。基底には板石を立て、その上に板石を平積みにしている。横口部を含めて、この立山山古墳群の竪穴系横口式石室と同様である。

もう１基は長さが２ｍ、幅が70～80cmぐらいの小形のもので、壁は板石を小口積みにし、西に開口すると思われる入口には板石を立ててふさいでいる。横口部の構造はわからないが、天井石は前後から積み重ね、中央が一番高いという立山山古墳群の石室と同じ構造をとっている。

Tab. 5　立山山古墳群内竪穴系横口式石室計測表　（単位ｍ）

	全長	玄室長	玄室幅	玄室奥高さ	玄室最大高	玄室前高さ	羨道端幅
21号墳	2.82	2.29	1.03 0.92	1.33	1.48	0.9	0.92
23号墳	2.53	2.15	1.2 0.97	1.15	1.21	1.17	0.88
25号墳	2.35	1.98	0.73 0.73	?	?	?	?
27号墳	2.65	2.11	0.93 0.8	?	?	?	0.88

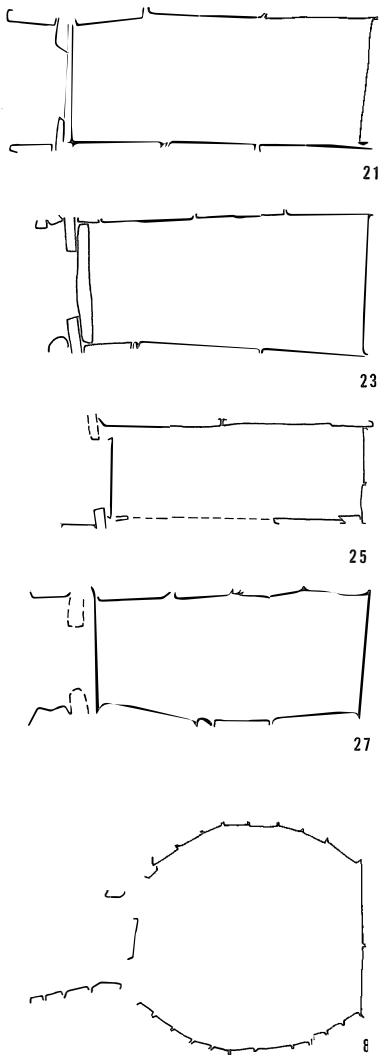


Fig. 192　立山山古墳群
石室平面プラン

5．八女古墳群出土の埴輪

1．はじめに

八女古墳群には埴輪をもつ古墳が多いことは、岩崎光、小田富士雄・真野和夫氏らによって既に指摘されている。近年、筑後考古学研究会によって踏査が進み、更に数が増加している。(註1) それによると、現在まで、24基が確認されている。発掘調査によって出土しているのは、岩戸山古墳、立山山８号墳だけで、あとは表面採集によるものである。(註2)（Tab. 6）

Tab. 6　八女古墳群 埴輪出土古墳地名表

（◎は須恵質）

	古墳名	所在地	墳形	内部構造	出土遺物	埴輪		備考
						円筒	形象	
1	石人山古墳	八女郡広川町一条人形原	前方後円（110m）	横穴式石室 横口式家形石棺	須恵器片	○	人、馬、犬、家、短甲	武装石人
2	瑞王寺古墳	筑後市西牟田大和	円			○	馬(？)、人(？)	
3	欠塚古墳	筑後市欠塚	円		須恵器坏(？)	○		
4	神奈無田古墳	八女郡広川町太田薬師塚	前方後円			○		
5	岩戸山古墳	八女市吉田甚三谷	前方後円（132m）		須恵、土師(墳丘)	○◎	家、琴 人、飾馬、猪、鶏	石人・石馬
6	乗場古墳	八女市吉田乗場	前方後円（70m）	複室構造 横穴式石室	玉類、耳環、帯金具 馬具、刀装具、須恵器	○	人（冠帽） 家、刀(？)	
7	善蔵塚古墳	八女郡広川町六田善蔵塚	前方後円（90m）		須恵器	○	人（肩甲着装）	
8	鶴見山古墳	八女市豊福鶴見山	前方後円（80m）	横穴式石室		○◎	人（武人）	
9	庚申塚古墳	八女市豊福長原	前方後円？			○		
10	釘崎３号墳	八女市豊福久保	前方後円（35m）	横穴式石室	仿製鏡、環頭大刀、直刀、馬具、鉄鏃、鎧、刀子、砥石、須恵器、土師器	○		
11	釘崎２号墳	八女市豊福釘崎	前方後円			○◎	盾（？）	
12	釘崎１号墳	八女市豊福釘崎	前方後円			○		
13	宅間田K－８号墳	八女市豊福釘崎	円(14m)	横穴式石室		○	鶏	
14	一念寺古墳	八女市鹿児島	円(32m)			○	人	
15	宅間田K－27号墳	八女市鹿児島	円(14m)			○	人	
16	宅間田K－12号墳	八女市本鹿児島	円(16m)			○		
17	豊福K－６号墳	八女市豊福上ノ町	？	横穴式石室		○		
18	真浄寺２号墳	八女市本下尼崎	円(35m)	竪穴系 横口式石室(2)	短甲	○	短甲	
19	宅間田K－30号墳	八女市本下尾崎	円(13m)			○		
20	宅間田K－41号墳	八女市立山山	円(20m)			○		
21	宅間田K－43号墳	八女市本立山山	円(18m)			○		
22	立山山８号墳	八女市本立山山	円(30m)	横穴式石室	金製垂飾、挂甲、玉類、鉄鏃	○◎	馬、人、猪、etc.	須恵器
23	丸山古墳	八女市ハスイケ	前方後円			○		
24	忠見K－18・19号墳	八女市忠見中林	円			○		

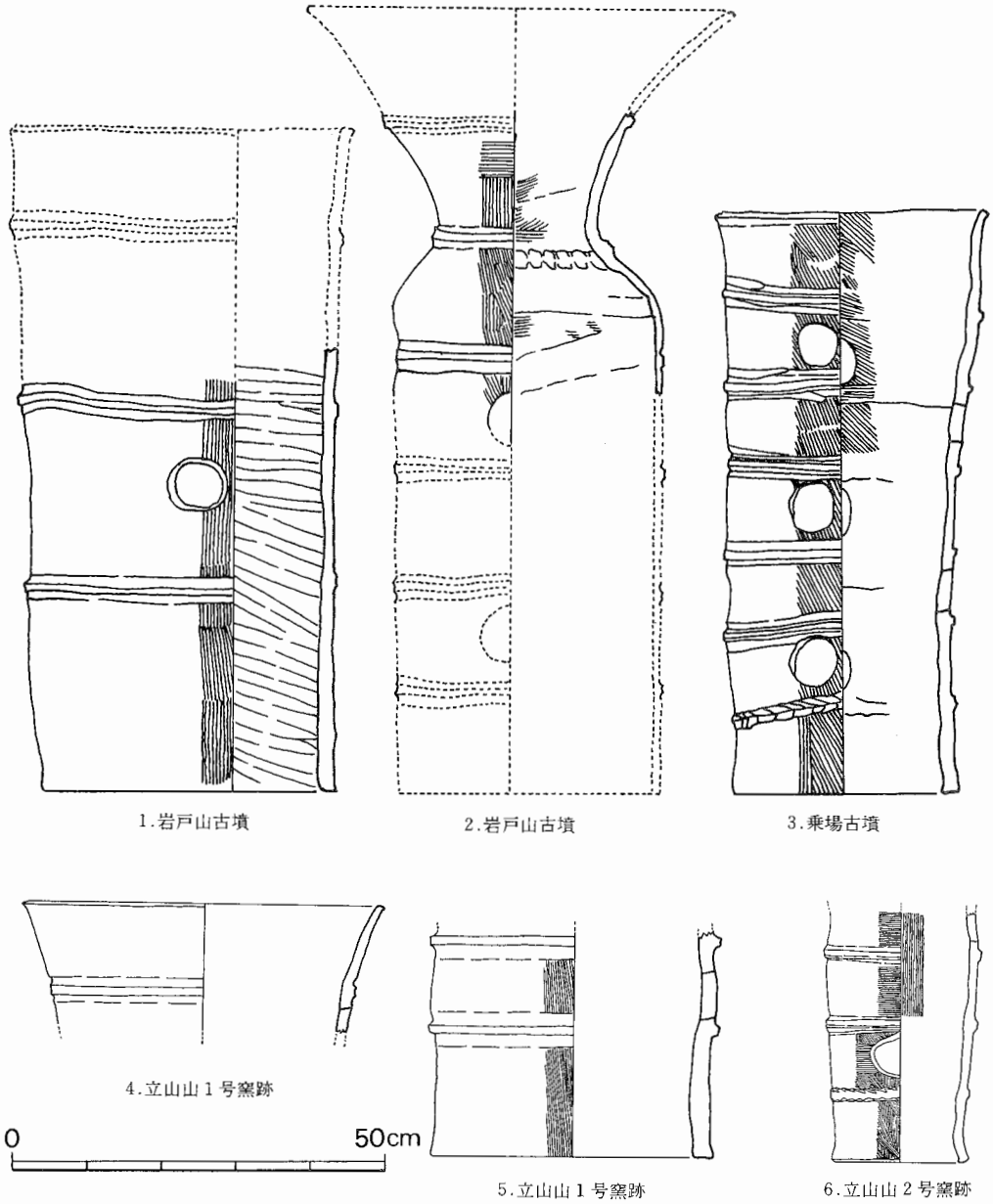


Fig. 193　八女古墳群出土の円筒埴輪①（1/10）

2．古墳出土の埴輪

石人山古墳の円筒埴輪（Fig. 194－1・2・3）

底径が24cm前後、胴部径が22～27cm前後の大きさのものであろうと思われる。胎土には砂粒を含み、あまり精製されていない。表面の色調は茶褐色、赤褐色、白みがかった褐色など一定していない。断面では内側が黒く、焼成のよくないことを示している。突帯は基本的には小さいが、変化に富んでいる。とくに三角形の突帯があることは注目される。採集したものに限れば、表面の仕上げはていねいな横刷毛によっている。

瑞王寺古墳の円筒埴輪

大きさは石人山古墳のものとあまり変らないが、突帯はしっかりしている。台形状の突帯であるが、中がすこしくぼんでいるものもある。表面の仕上げは縦方向の刷毛目である。

真浄寺2号墳の円筒埴輪（Fig. 194－6）

胴部径24cmほどの大きさのものである。突帯は大きく、しっかりしている。仕上げは表面が縦方向と斜め方向の刷毛目で、内面は底部まで、ていねいな横方向と斜め方向の刷毛目である。百済・羅州郡潘南面新村里9号墳の埴輪に類似したものがみられる。

岩戸山古墳の円筒埴輪（Fig. 193－1・2）

底径が20cm代のものと、36～40cmの大形のものの二種がみられる。色調は全体に淡い褐色を示しており、表面はなめらかである。突帯は3本めぐらすものと、6本めぐらすものがあり、器体に比して小さい。基本的には台形状を呈するが、三角形状のものもある。表面の仕上げは縦方向と斜め方向の刷毛目があり、内面は斜め方向の刷毛目とヘラ削りである。

善蔵塚古墳の円筒埴輪（Fig. 194－4・5）

胴部径が22～32cmぐらいの大きさである。器壁の厚いものもある。突帯は台形状で、小さくつくられている。胎土には砂粒がほとんど含まれず、精製されている。仕上げは表面が太目と細かい斜め方向の刷毛目で、内面は横刷毛目、指なでを併用している。

庚申塚古墳の円筒埴輪（Fig. 194－7）

胴部径25cmほどの大きさのもので、器壁は比較的厚い。突帯はしっかりとしたもので、真浄寺2号墳の突帯を少し低くした感じである。器壁は磨耗しており、仕上げはよくわからない。

立山丸山古墳の円筒埴輪（Fig. 194－11・12）

底径36cm、口縁径40cmぐらいの大きさであるが、底部と口縁部の径が同じぐらいのものと、口縁部が開くものとがある。器壁は厚く、つくりはしっかりしている。突帯は器体にくらべて非常に小さく、低い。表面の仕上げは斜め方向の刷毛目で、内面は斜め方向に上半をヘラ削り、下半を指なでによっている。口縁端はヘラ削りによって面取りをしている。

乗場古墳の円筒埴輪（Fig. 193－3）

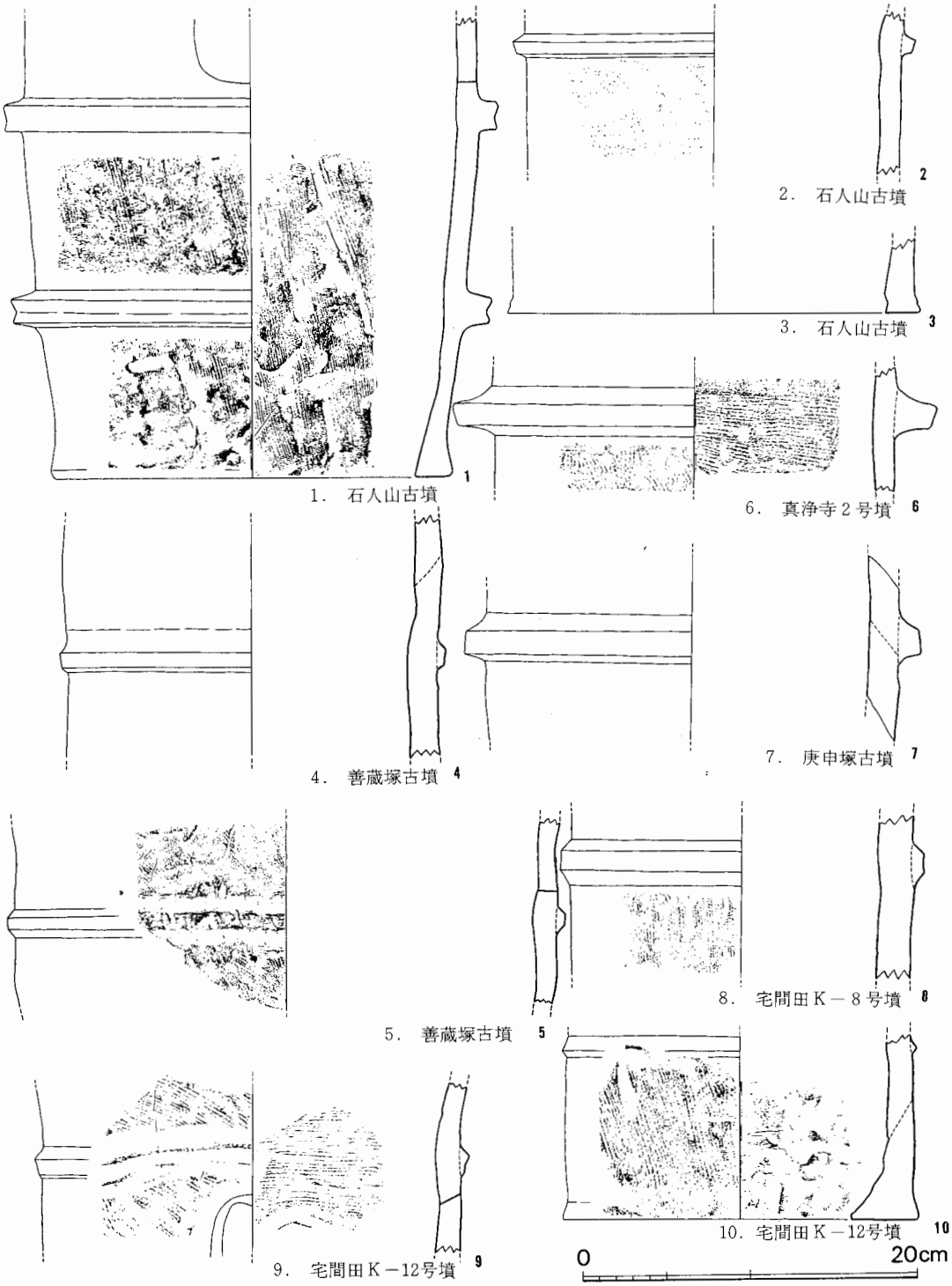
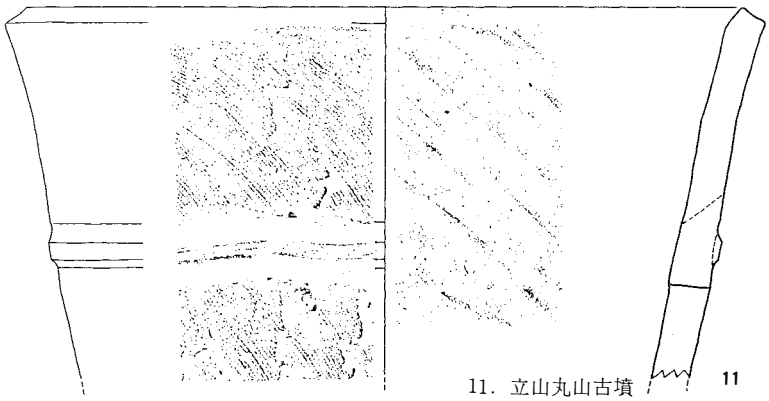


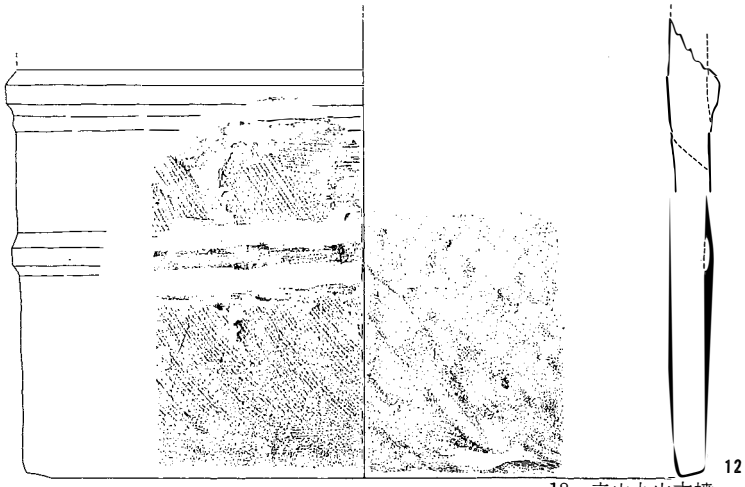
Fig. 194　八女古墳群出土の円筒埴輪②（1/4）



11. 立山丸山古墳 11

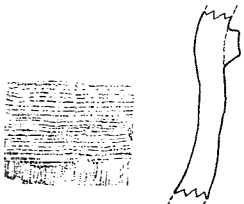
14. 釘崎1号墳 14

15. 釘崎1号墳 15

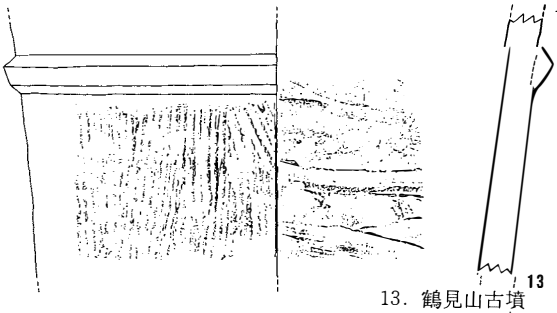


12. 立山丸山古墳 12

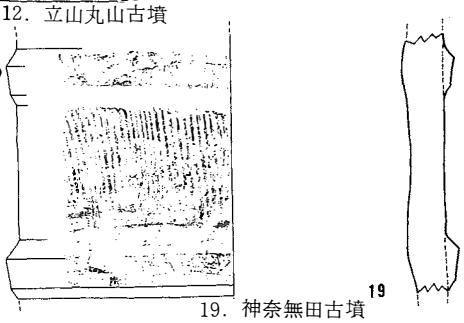
16. 釘崎1号墳 16



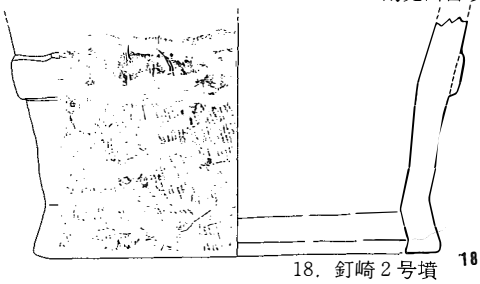
17. 釘崎2号墳 17



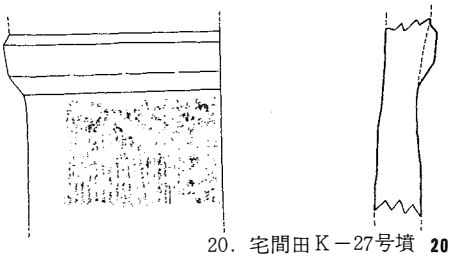
13. 鶴見山古墳 13



19. 神奈無田古墳 19



18. 釘崎2号墳 18



20. 宅間田K－27号墳 20

高さ79cm、底径30.8cm、上縁径37cmで、上半が若干開いている。器壁は比較的厚く、突帯は6本めぐり、小さな台形状を呈するが、形がくずれている。最下段の突帯は貼付けた後を指でおさえたまゝである。表面、内面とも斜め方向の刷毛目であるが、内面下半は指なでのまゝである。

釘崎1号墳の円筒埴輪（Fig. 194－14・15・16）

小破片ばかりで、はっきりとした特徴をもつものはない。器壁は厚くしっかりしている。突帯は幅が広く、台形状の低いものである。仕上げは表面が比較的荒い刷毛目のようである。胎土には砂粒をほとんど含んでいない。

釘崎2号墳の円筒埴輪（Fig. 194－17・18）

上部が広くなっている形態のもので、底部径が21cmぐらいと思われる。底部は稜をもって外側に開いている。最下段の突帯は貼付けたまゝで、指なでによって接合面をととのえることをしていない。仕上げは表面が斜め方向の刷毛目であるが、上半では一部横刷毛目もみられる。内面も同様であるが、荒いヘラ削りのまゝの部分もある。立山山2号埴輪窯のものと類似していることを指摘しておこう。

鶴見山古墳の円筒埴輪（Fig. 194－13）

比較的器壁の厚いもので、突帯は台形状だが、下方がすこし低くなっている。最下段の突帯は貼付けたまゝで、指による接合面の仕上げは行なっていない。表面の仕上げは今まで述べたものとは異なり、非常に荒い縦方向の刷毛目である。内面は荒い刷毛目とヘラ削りのまゝのところがある。

神奈無田古墳の円筒埴輪（Fig. 194－19）

胴部径22.5cmほどの大きさで、器壁が非常に厚いものもある。突帯の形態は鶴見山古墳と同じであるが、幅が広く、低い。表面の仕上げは、荒い縦方向の刷毛目で、内面は斜め方向の指なでを基本としている。表面に丹塗りのものもある。

宅間田K－8号墳の円筒埴輪（Fig. 194－8）

胴部径20.5cmほどの大きさのものである。器壁は厚く、突帯は幅の広い台形状で、中がすこしくぼんでいる。表面の仕上げは細かい縦方向の刷毛目である。非常に焼成がよく、淡赤褐色を呈し、硬い感じを与える。

宅間田K－12号墳の円筒埴輪（Fig. 194－9・10）

底径が21cm程度のもので、突帯は小さく、三角形状を呈している。表面の仕上げは斜め方向の刷毛目で、内面は横方向の刷毛目のところと、斜め刷毛目のところがあり、下端は指なでである。

宅間田K－27号墳の円筒埴輪（Fig. 194－20）

胴部径が21cm程度の大きさで、器壁は厚い。突帯は幅広く、くずれた台形状を呈す。表面の

仕上げは荒い縦方向の刷毛目で、内面は斜め方向のヘラ削りのまゝである。

立山山８号墳の円筒埴輪

本報告書の立山山８号墳の項を参照されたい。

３．埴輪からみた古墳の編年

概略をみたなかで、もっとも古いのは石人山古墳の円筒埴輪で、表面の感じ、突帯の格好、器肉の内部が焼成不足で、黒くなっていることから、ほかの古墳のものとは明らかに異なっている。通常の年代観では、５世紀中葉以降が考えられており、高橋徹氏の編年でもⅢ期に位置づけられている。(註３) これにつづくのは瑞王寺古墳の円筒埴輪である。まだ、表面がざらついた感じで、突帯もしっかりしており、突帯の断面がＭ字状を呈するものもある。表面は縦刷毛目で、石人山古墳の横刷毛目とは異なっているが、筑後市郷土館にある石人山古墳出土と思われる円筒埴輪（Fig. 194－１・２・３）からの変化をみることができる。

石人山古墳、瑞王寺古墳とは異なっているが、近い時期の円筒埴輪として、真浄寺２号墳のものをあげることができる。色調は赤味がかり、焼成の良いことがうかがわれ、突帯は大きく張り出し、八女古墳群のなかでは、もっとも顕著な突帯をもっている。

これらは、一応、５世紀後半代を中心としたものと考えることができる。Ⅲ期の特徴をそなえているが、瑞王寺古墳、真浄寺２号墳にはⅣ期的特徴も若干見られ、石人山古墳よりは後出するものとすることができよう。

岩戸山古墳はⅣ期の円筒埴輪をもつ代表的な古墳である。大きさには大小２種があり、須恵質の埴輪もみられる。器壁の感じも前代のものとは異なり、器体に比して、小さなＭ字状に近い突帯をつけている。立山山１号埴輪窯から供給されたものと考えられている。岩戸山古墳は６世紀前半の築造が考えられているが、今のところ、これに並行する埴輪は八女古墳群ではみられない。(註４)

継続するものとしては、善蔵塚古墳、立山丸山古墳が挙げられる。いずれも器体の大きいものを含み、器体に比して突帯は小さくなっているが、立山丸山古墳の方が幾分幅広気味である。表面の仕上げは斜め刷毛目を基調にしているが、突帯がくずれる感じからすれば立山丸山古墳がわずかに後出するのかも知れない。立山山８号墳の円筒埴輪も立山丸山古墳と非常に類似している。器体は小さいが口縁径40cmぐらいのものも出土しており、ほとんど近い時期を考えることができよう。器体の大小は、樹立する古墳の規模にも左右されるのではなかろうかと考えることもできよう。岩戸山古墳、善蔵塚古墳、立山丸山古墳ともⅣ期に編年されるが、岩戸山古墳が先行することは明らかである。

さらに、真浄寺２号墳につながるものとして、岩戸山古墳と近い時期のものと考えられるのが、庚申塚古墳の円筒埴輪である。突帯は真浄寺２号墳を低くしたような感じで、善蔵塚古墳

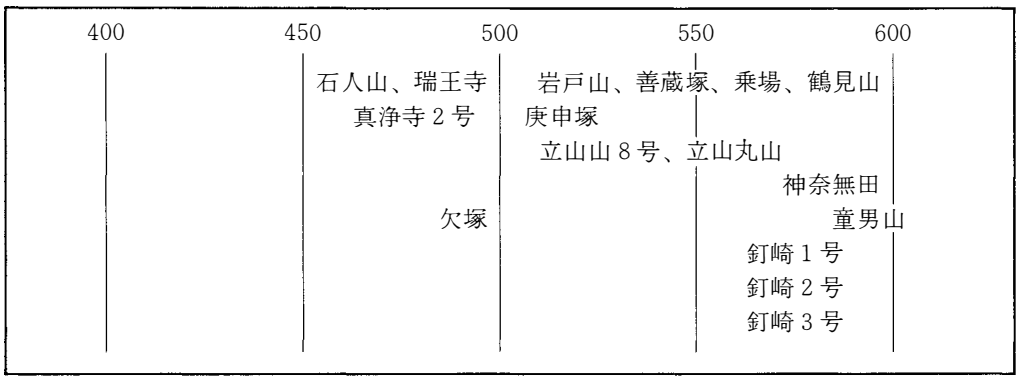
に近いものも採集されている。

第1段突帯が変化する6世紀後半のものと考えられるのは、釘崎1号墳、2号墳、鶴見山古墳、神奈無田古墳である。埴輪は小片で内容がわからないが、釘崎3号墳もこの時期のものである。このなかでは、乗場古墳の円筒埴輪が器体も大きく、岩戸山古墳のものからの系統を考えることができ、古く位置づけることができよう。ほかの古墳では、底径が30cm以下と小さくなり、突帯は幅広く、角のはっきりしない低いものとなっている。顕著な時期差をあらわす現象はみられないが、鶴見山古墳、神奈無田古墳のもののなかには器壁が厚く、非常に粗い縦刷毛目をほどこしたものがあり、抽出できるかも知れない。乗場古墳をV期、ほかの古墳をVI期とすることができよう。

前方後円墳以外では、宅間田K－8号墳、K－12号墳、K－27号墳があるが、器壁は厚く、小形のものであるところからVI期とみて良いと考えるが、K－27号墳は鶴見山古墳、神奈無田古墳に類するものである。

円筒埴輪の変遷からみると、以上のような時代的な流れをみることができる。八女古墳群では5世紀中葉以降から6世紀末近くまで円筒埴輪が使用されていたことが理解できる。共伴している須恵器などから考えられる時期をみると、石人山古墳からは小破片ではっきりしないところもあるが、I型式にぞくすると思われる須恵器が採集されている。岩戸山古墳はあらためていうまでもなく、II型式の須恵器をもっている。乗場古墳、善蔵塚古墳はIII型式、釘崎3号墳もIII型式に近いものをもっている。宅間田K－12号墳でもIIIb型式の坏、高坏が採集されている。

これらのことから、各古墳の年代を示すとTab. 7のようになる。とすると、今まで言われていた古墳の年代観とは異なってきて、系統古墳の流れが複雑なものとなり、一本の線で結ぶことができなくなってくる。ことに神奈無田古墳のとりあつかいは石人山古墳と岩戸山古墳をつなぐものとされていたが、6世紀後半の古墳となってしまい、意義を失なってしまった。



Tab. 7　八女古墳群主要古墳の編年

さらに、周辺にある円墳をみてみると、欠塚古墳からはⅠ型式の須恵器を出しているし、川犬古墳は内部主体に竪穴系横口式石室をもっている。清導寺古墳も異説があるが、石室構造から、ほゞ同じ頃を考えてよいのではなかろうか。竪穴系横口式石室2基をもつ真浄寺2号墳も同じ頃と考えてよく、5世紀後半の産物とすることができよう。

ここで、5世紀後半代の状況を考えれば、筑紫君と考えられる石人山古墳の被葬者が、最高権力者として存在しており、その権力をささえる里長的な存在として、真浄寺2号墳、欠塚古墳、川犬古墳、清導寺古墳などの被葬者をとらえることができよう。地域的にみても、古墳の分布は片よっておらず、地域首長の支配構造の一端を垣間みることができる。

釘崎1号墳、2号墳、3号墳の在り方も一つの問題となろう。3号墳はⅢb型式の須恵器を出土しており、1号墳、2号墳も円筒埴輪をみれば、最終末のもので、いづれも6世紀後半代にぞくしている。しかも、この3基は円墳群のなかにあり、ほかの前方後円墳とは分布状況が異なっている。同じ頃と考えられる乗場古墳、鶴見山古墳とは規模の点でも異なっており、性格の違いをうかがわせる。群集墳中の卓越した古墳としてとりあげることができ、筑紫君本宗家とは違って、須恵器生産など専業集団を背景にもつ、伴造的な性格を被葬者の背景に考えて良いのではなかろうか。

筑紫国造家の奥津城といわれる八女古墳群も、複雑きわまりない古墳群の構成で、スムーズな変遷を必ずしもとれないことが明らかになったと思う。しいて筑紫国造家の本宗をたどれば、石人山古墳(石人と岩戸の間にはなにか介在する)―岩戸山古墳―善蔵塚古墳―乗場古墳―鶴見山古墳という流れを想定することはできよう。ほかの前方後円墳をどう位置づけるかは、問題となるところであるが、釘崎の3基の古墳は前述したように別系統としてとらえ、もう一つは真浄寺2号墳―庚申塚古墳―立山山8号墳―立山丸山古墳という大形の円墳と前方後円墳の組合せの流れを想定することも可能ではないかと考える。庚申塚古墳のところには内容のわからない真浄寺3号墳がくる可能性もある。

筑紫国造家の古墳のなかで最終末に位置づけられていた童男山古墳の処理も残る問題である。6世紀末頃に考えられているこの古墳は、前方後円墳の築造が終った後の大形の円墳としてとらえられていた。立地をみても最奥部にあり、ほかの古墳とは離れている。童男山古墳群と呼ばれる群集墳のなかにあり、構造的に類似した要素をもつ古墳が周辺に4基ある。それらは石棚をもっていたり、石屋形を付設したり、凝灰岩製の棺床をもったりしている。類似した要素をもつところから、一つの集団を想定できると思うが、前の前方後円墳系列のなかに組み込むことができるかどうかは疑問である。八女丘陵全体を背景として考えるよりは、そのなかの地域的小集団を考えてみた方が良いのではなかろうか。

4．筑紫君と水沼君

筑紫君の奥津城がこの八女古墳群であることは既知のことであり、岩戸山古墳は筑紫国造磐井の墳墓である。一方、久留米市大善寺にある御塚古墳、権現塚古墳は水沼君の墳墓と考えられている。八女丘陵の先端と水沼君の墳墓地とは水日をへだてて指呼の間にある。このように、近い距離に豪族の墳墓が相互に位置することは、当然のことながら、両者の関係が気にかかるところである。

古墳のあり方からすれば、いずれも5世紀中頃から6世紀後半までの継続した墳墓築造をみることができる。前方後円墳の数からすれば、筑紫君の方がはるかに多いが、勢力的に凌駕してしまったとは言い切れない。

『日本書紀』景行紀18年条には水沼県主猿大海の名前がみえ、雄略紀10年には水間君の名前がみえるが、以後は全く記録の上にはあらわれない。

筑紫君については、磐井関係の記事を除くと、欽明紀15年に筑紫国造鞍橋君、持統4年に筑紫君薩野馬の名前が出てきて、磐井以降も国造として存続していたことが明らかである。

筑紫君の関連した古墳群については、前述した通りで、構造的に錯相していることが明らかになったと思う。それに対して、水沼君の奥津城は久留米市大善寺にある御塚古墳、権現塚古墳に代表されている。御塚古墳の円筒埴輪は口径が40cm、底径28cm、高さ64cmの大きさで、突帯は器壁に比して小さいが、コ字形に近いものである。時期的には石人山古墳と岩戸山古墳の間に位置づけることが可能である。出土地ははっきりしないが、大善寺小学校には興味ある須恵器が多く所蔵されている。それらをみると、5世紀後半から6世紀前半にわたるものがみられ、漠然とはしているが、両古墳の時期をうかがうことはできよう。

権現塚古墳の内容はよくわからないが、採集されている円筒埴輪から見ると、御塚古墳のものよりは、明らかに新しいものである。また、近くに銚子塚古墳があったことが知られている。今は消滅して、内容がわからないが、萩原裕房氏の復原によれば、全長54m程の帆立貝式に近い前方後円墳ではないかと言われている。すこし離れて、荒木町には、二子塚古墳、鷲塚古墳などの前方後円墳があり、二子塚古墳からはⅢ型式の須恵器と円筒埴輪が出土しており、6世紀後半の時期が考えられている。

八女古墳群と較べると、大形古墳の数は少なく、系統をたどれば、一本の線で結ばれるものと思われ、初現、終末の時期はほとんど変りないと思われる。勢力の強い筑紫君のすぐそばで、連綿として存続したことは、歴史上にはほとんどあらわれない水沼君のしたたかさを示しているものと評価できるのではなかろうか。

たゞ、古墳築造の規模が異なるのは、筑紫君が国造、水沼君が県主という勢力基盤の違いに求められるのではなかろうか。しかし、磐井の乱というような歴史的な大事件を経験している

わりには、筑後において、その結果を顕著にみつけることができないのは、不思議なことである。(註5)

注

(1) 岩崎光『八女・山門』 1967

小田富士雄・真野和夫ほか『立山山窯跡群』 1972

(2) 久留米市の堤諭吉方を事務局としている考古学の好きな人々の集まりである。会の一つの目標として、八女古墳群をもう一度見なおしてみようと、分布調査を継続している。

(3) 高橋徹「九州の埴輪概観」(『二子塚遺跡』) 1976

(4) (3)と同じ。

(5) 佐田茂「筑後地方における古墳の動向—在地豪族の変遷—」

(鏡山猛先生古稀記念『古文化論攷』) 1980

Ⅷ．おわりに

今回の発掘調査の成果を箇条書きにダイジェストしてしめくくりたい。

A．古墳時代については、古墳27基と箱式石棺墓５基、石蓋土壙基４基、木棺基１基を検出した。

1．箱式石棺と竪穴式石室を主体部とする古墳17基は５世紀初頭～前葉に比定され、初期群集墳のあり方の一端が明らかにされた。

2．５世紀中頃以降の竪穴系横口式石室４基は段階的な構造的変遷を知ることができ、貴重な資料を呈示している。

3．23～25号墳出土の珠文鏡・四獣鏡はその類例を追加した。かつまた、古墳群中におけるあり方も、今後問題とすることができよう。

4．24号墳出土の鹿角装剣は直弧文を有しており、これも貴重な類例追加である。

5．24号墳の陶質土器は池の上Ⅱ式に比定されるもので、八女地方でこの種の出土例をみたことは、極めて意義あることといわねばならない。

6．23・27号墳から出土した古式須恵器は陶邑でのⅠ型式第３段階に比定されるものであり、その供給源は明らかでないにしても良好な資料である。

7．８号墳の挂甲は九州にて20例を数え、これも大型の古墳にしか副葬されていない。

8．８号墳の垂飾付耳飾りは本邦にて47遺跡の出土をみる。本例は垂下飾が山梔子形をなす優美なもので、これの故地と目される朝鮮半島に３例ほど、国内に５例の類似品をみる。

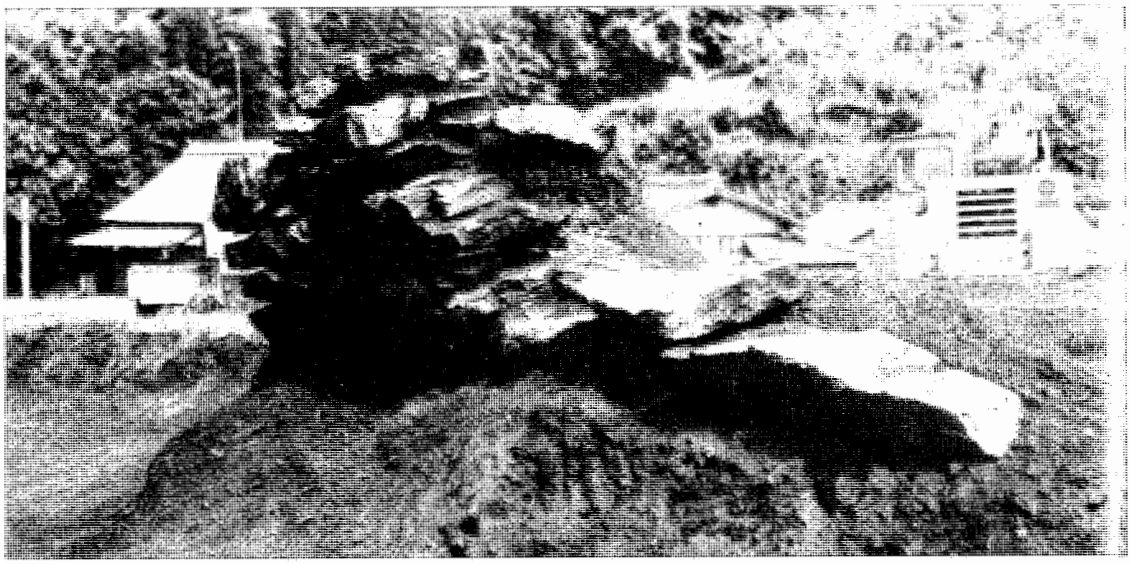
B．縄文時代については、甕棺および埋甕・土壙を３基検出した。また、後～晩期土器片と早期の押型文土器片、そして打製石鏃・磨製石斧・石錘等が出土している。

C．旧石器時代については、終末期の細石器と、前期旧石器の可能性を有する礫器がある。

図　　版

立山山古墳群航空写真（南から）〈大成航空提供〉

(1)



(2)

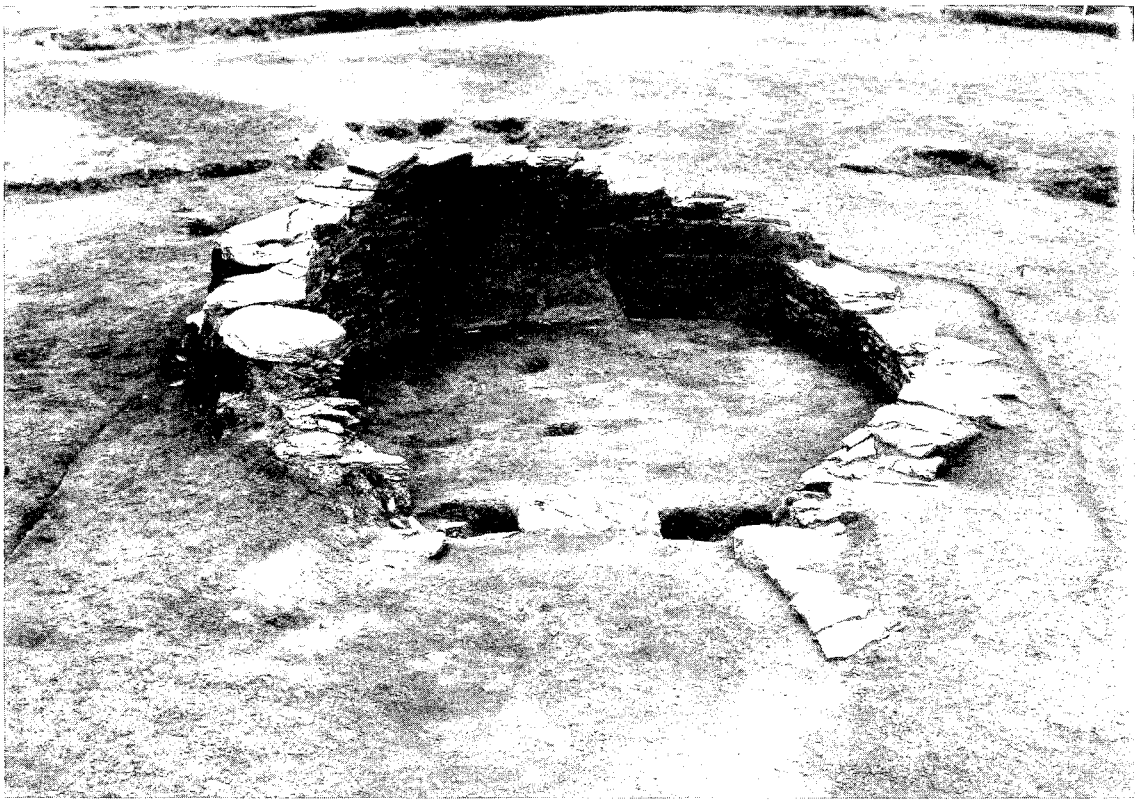
(3)

(1)　2号墳石室〈発掘前〉（南から）　　(2)　2号墳石室〈発掘後〉
(3)　1住居跡全景（西から）

(1) 昭和40年当時の 8 号墳（南南西から）〈江下淳氏提供〉

(2) 調査前（昭和56年）の 8 号墳（南西から）

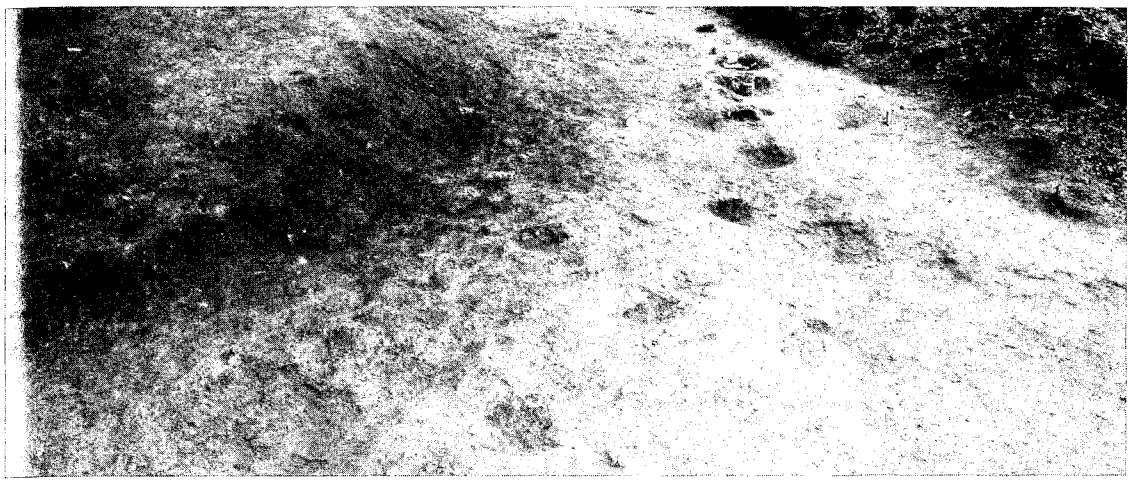
(1)　8号墳全景（南西から）



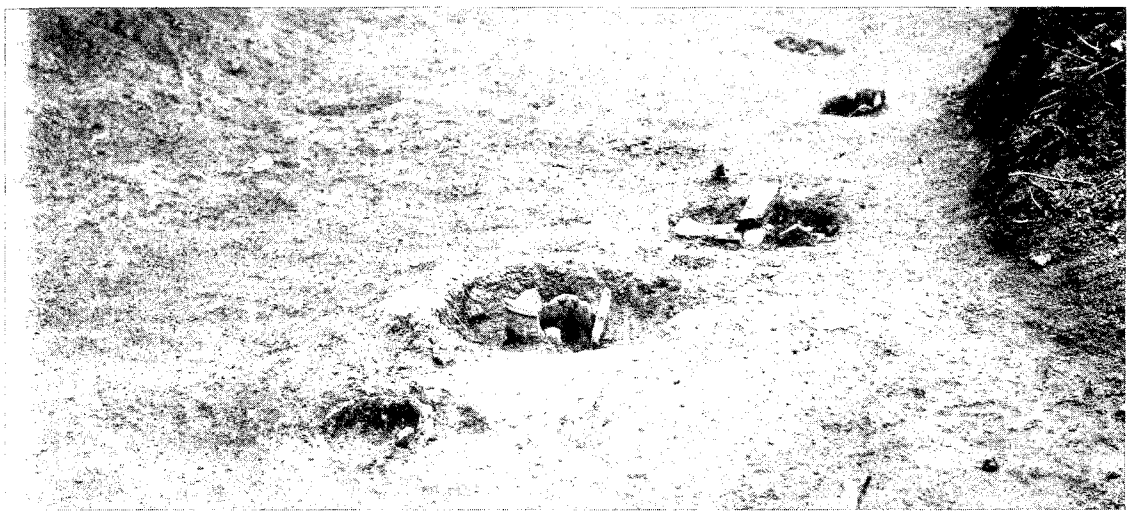
(2)　8号墳石室（南西から）

(1)

(2)



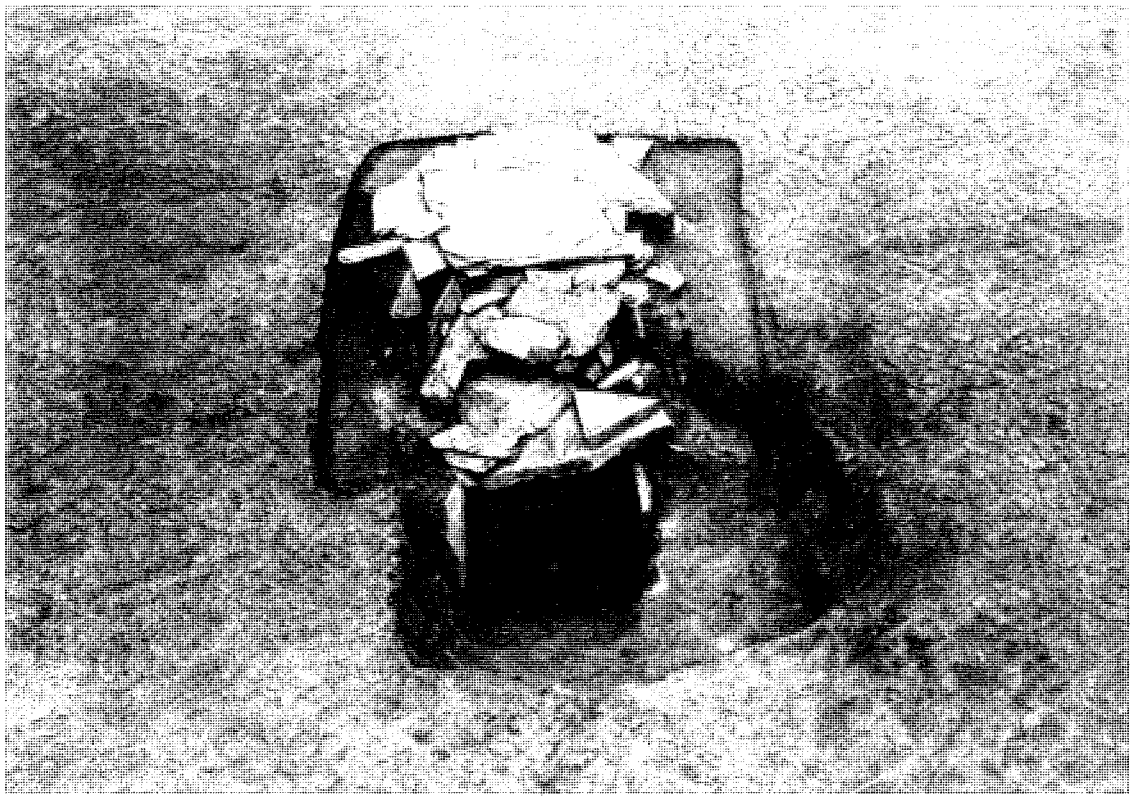
(3)



(4)

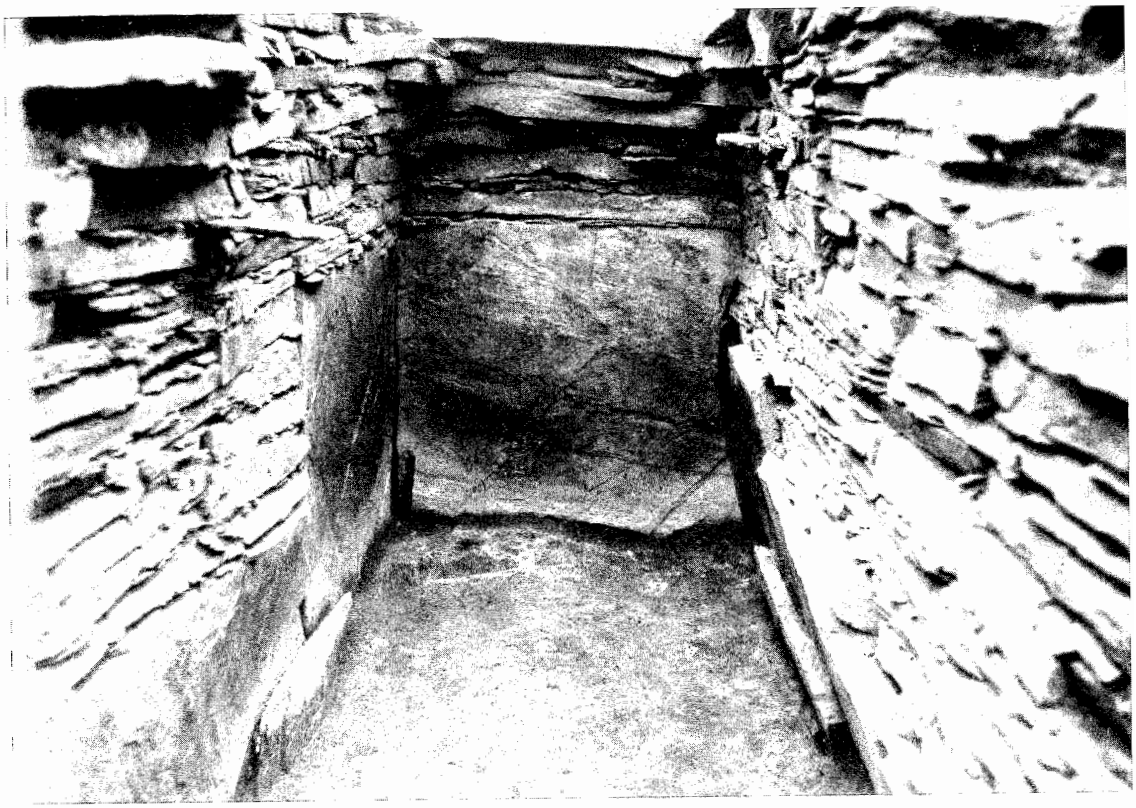
(1) 9号墳遠景（北東から）
(2) 9号墳近景（南から）
(3) 9号墳埴輪出土状態（南から）
(4) 9号墳埴輪出土状態（南から）

(1) 21号墳全景（南西から）

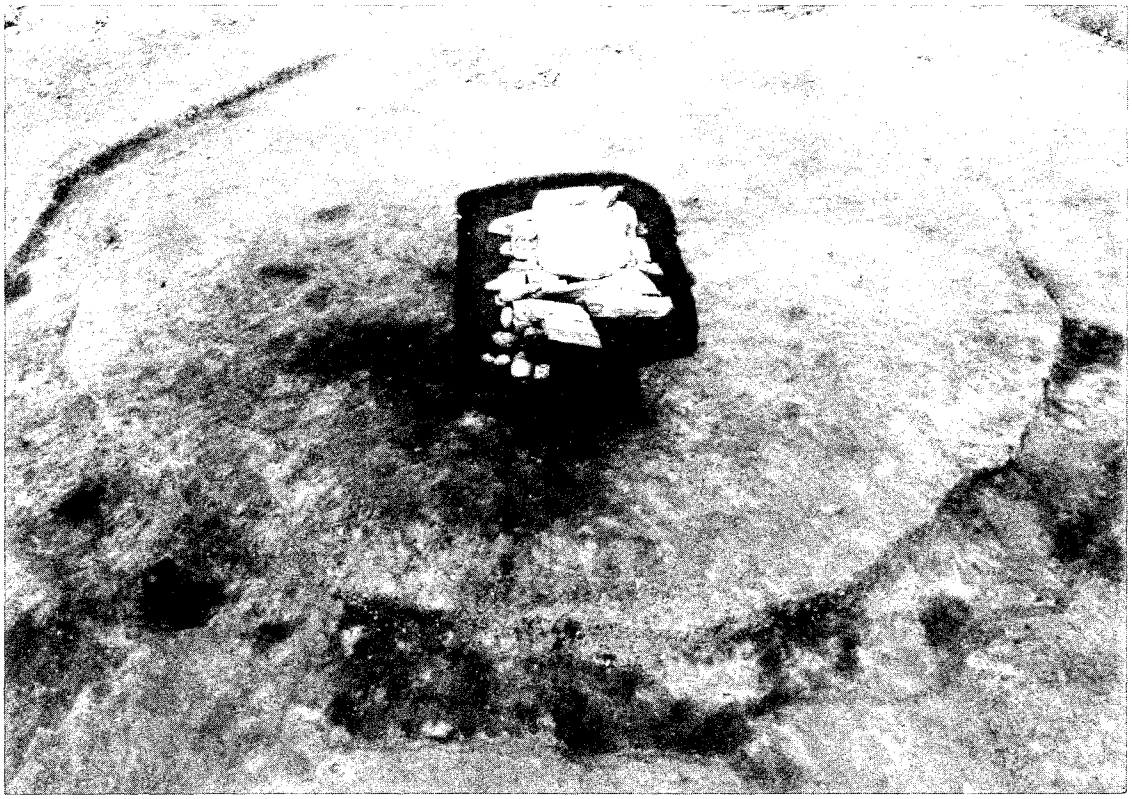


(2) 21号墳石室全景（西から）

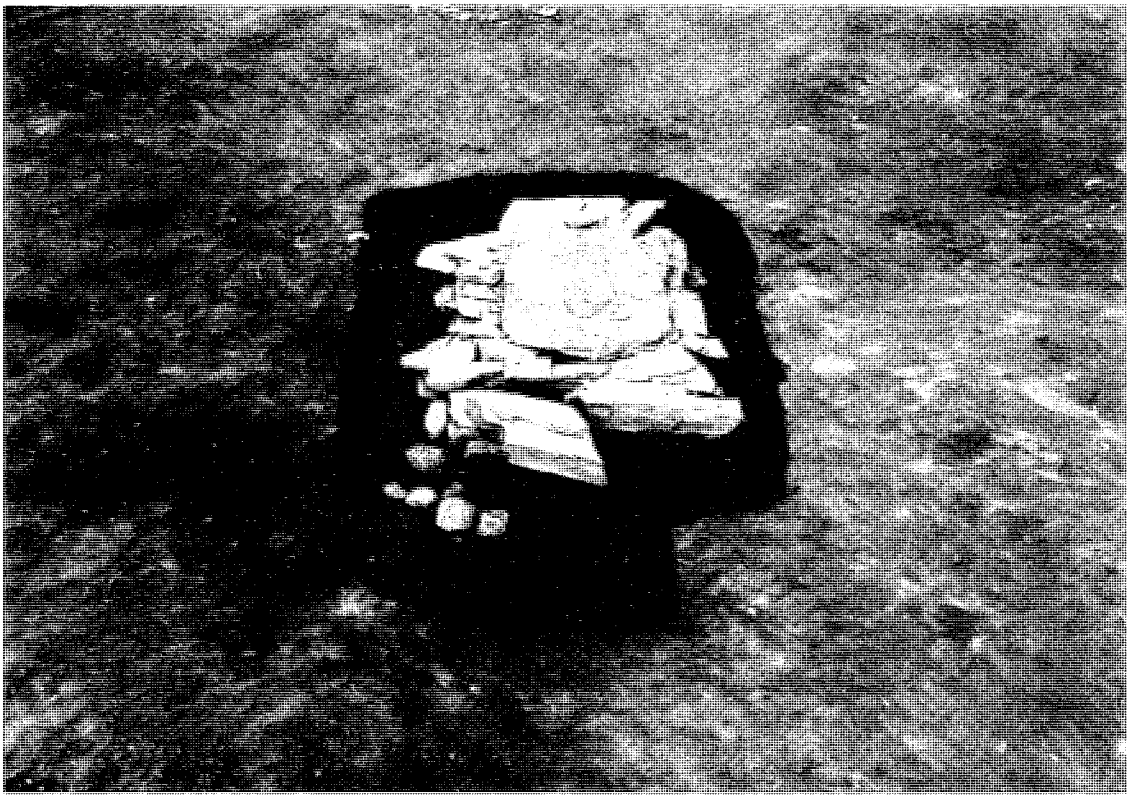
(1) 21号墳石室全景〈天井除去後〉(西から)



(2) 21号墳石室内



(1) 23号墳全景（西から）

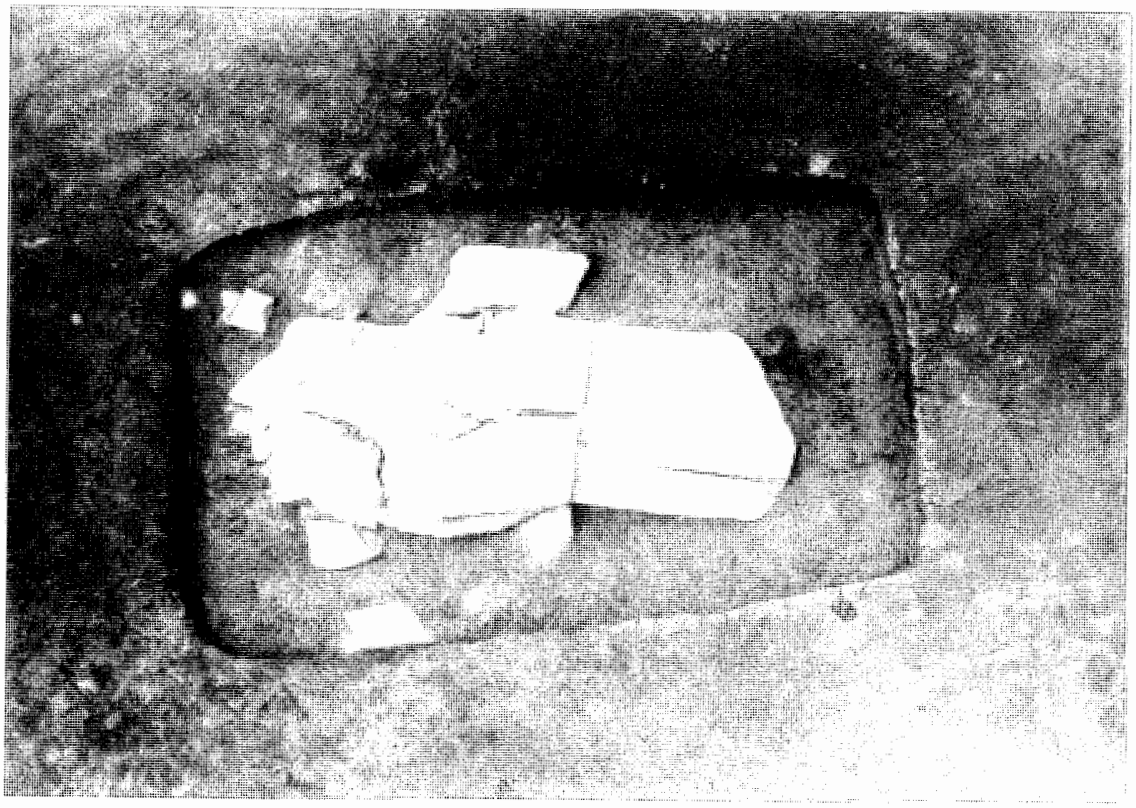


(2) 23号墳全景（西から）

(1) 23号墳石室全景（西から）

(2) 23号墳石室内

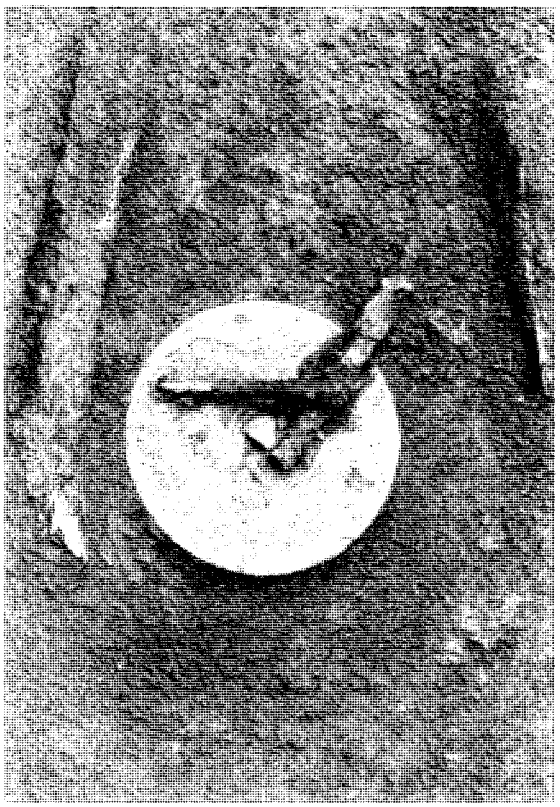
(1) 24号墳全景（東から）



(2) 24号墳主体部（南から）

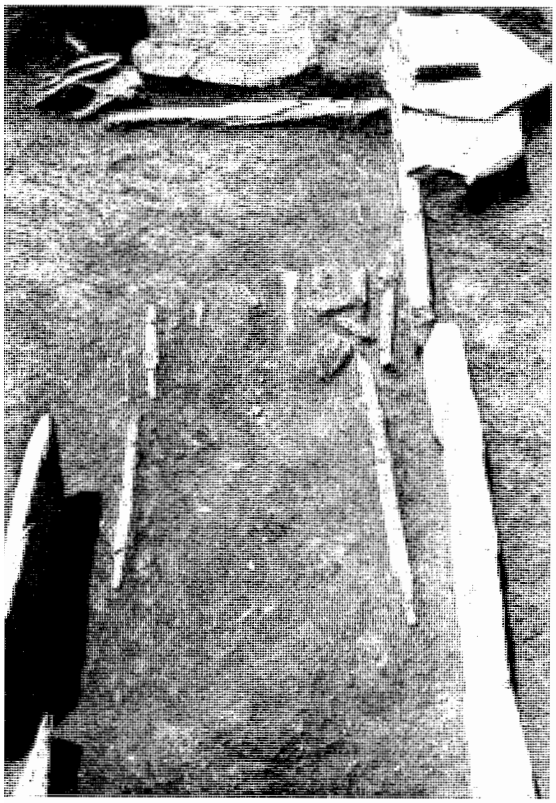
(1) 24号墳主体部（南から）

(2) 24号墳遺物出土状態



(3) 四獣鏡出土状態

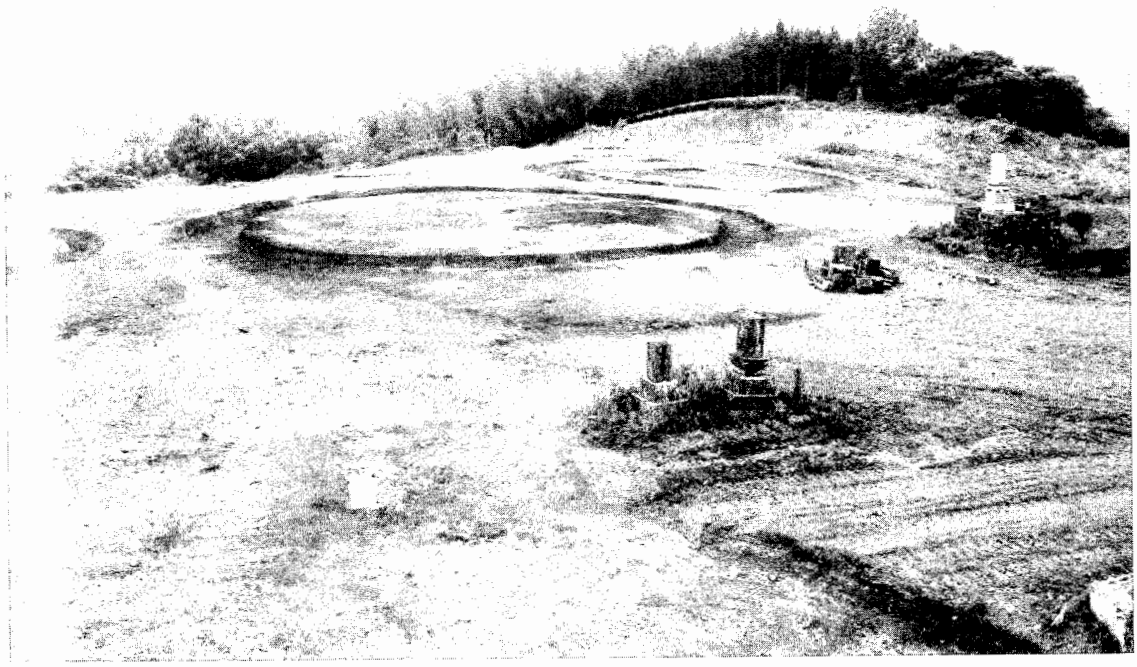
(1) 25号墳石室全景（西から）



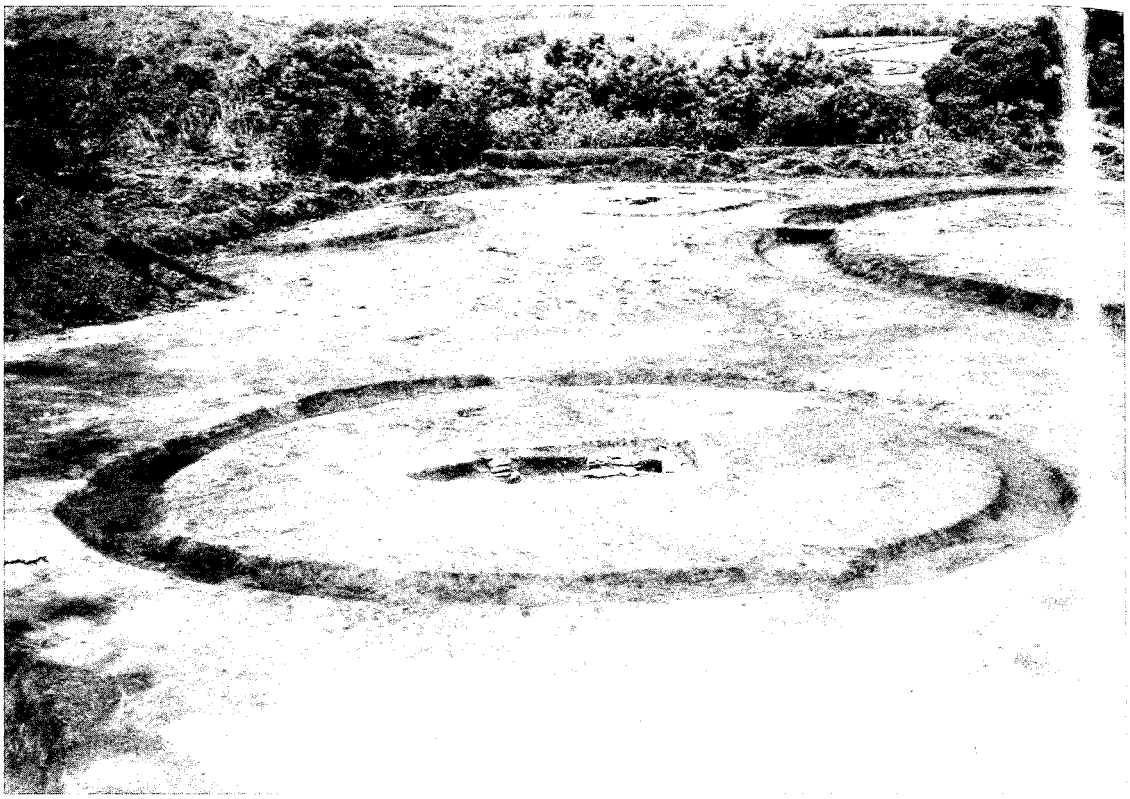
(2) 25号墳遺物出土状態（東から）

(3) 25号墳遺物出土状態（東から）

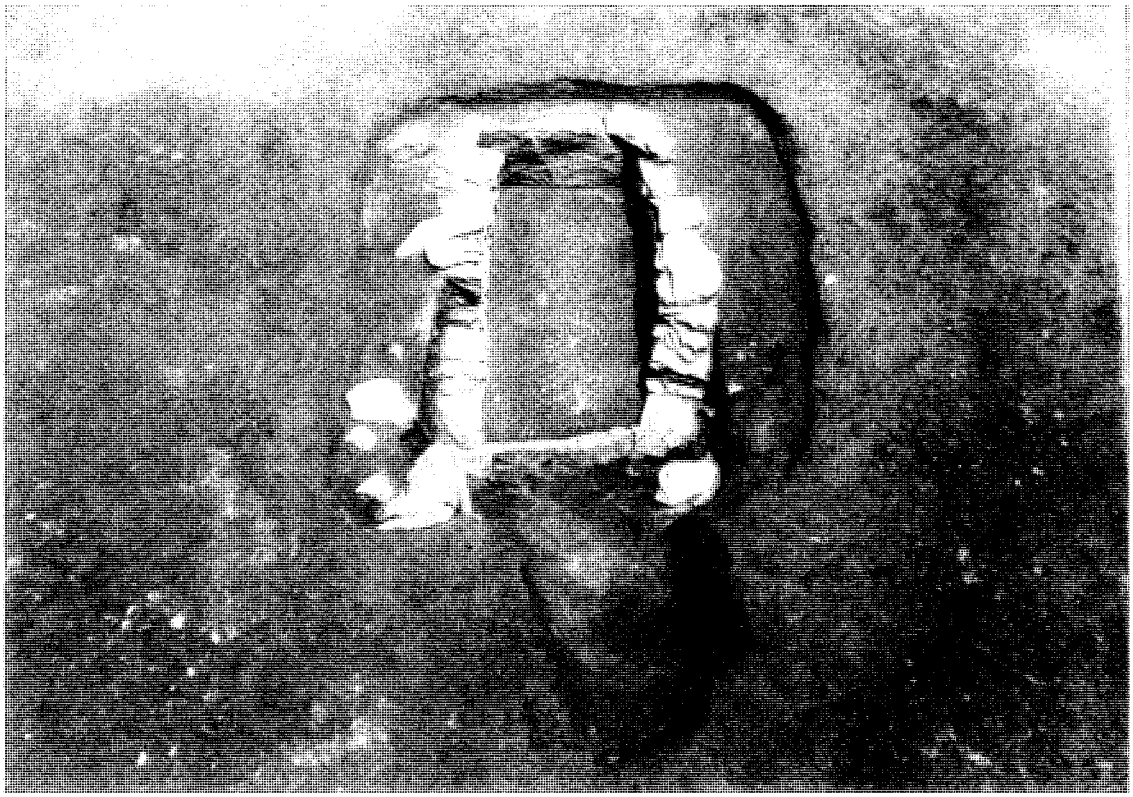
(1) 26号墳全景（南西から）



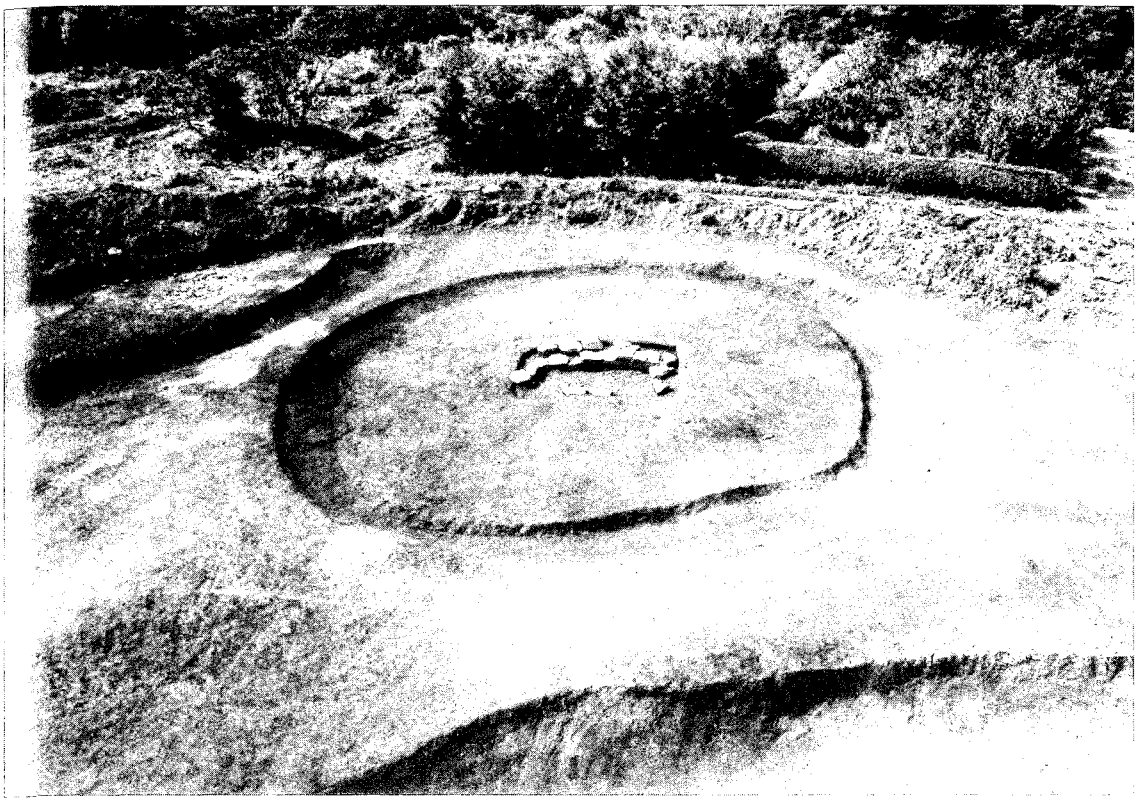
(2) 26号墳全景（北東から）



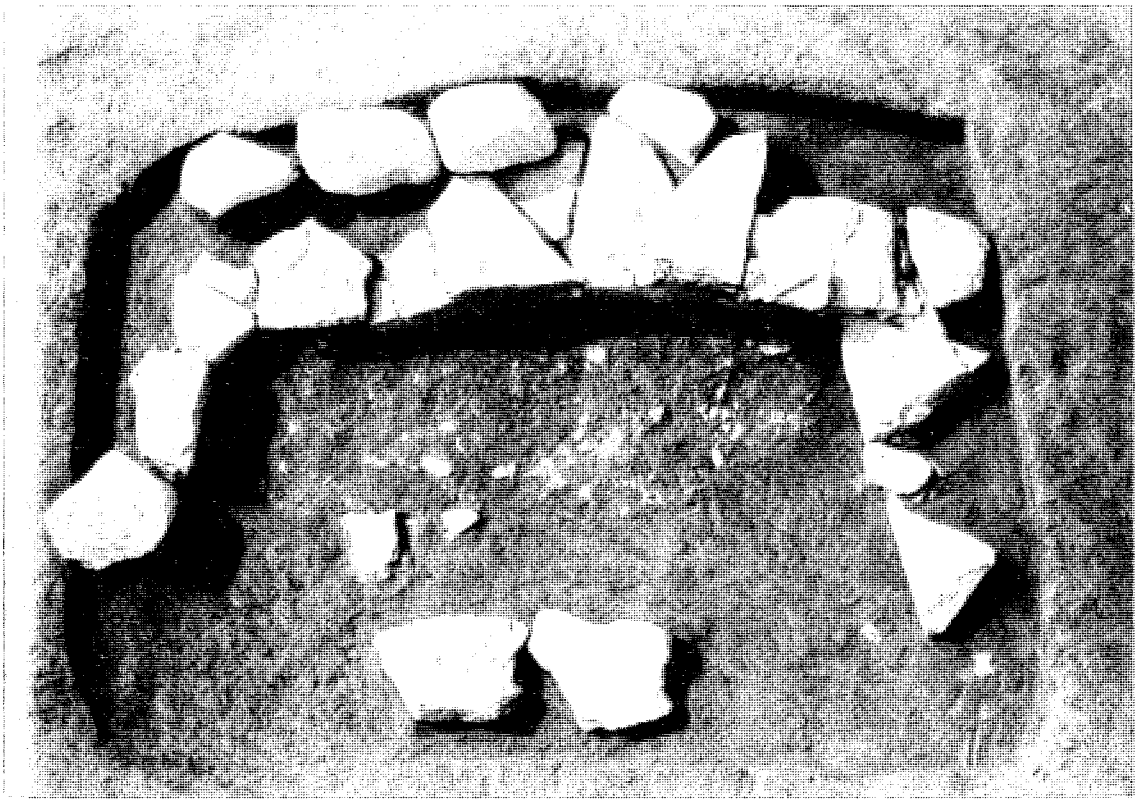
(1) 27号墳全景（南から）



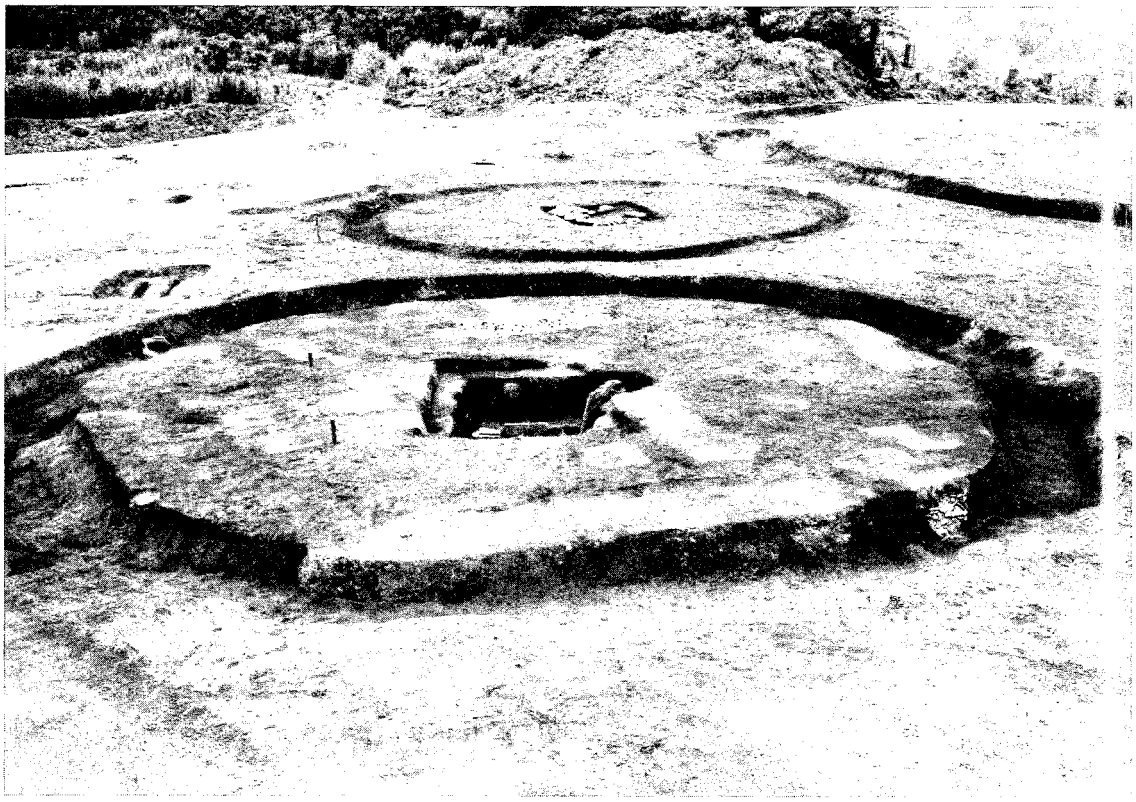
(2) 27号墳石室（西から）



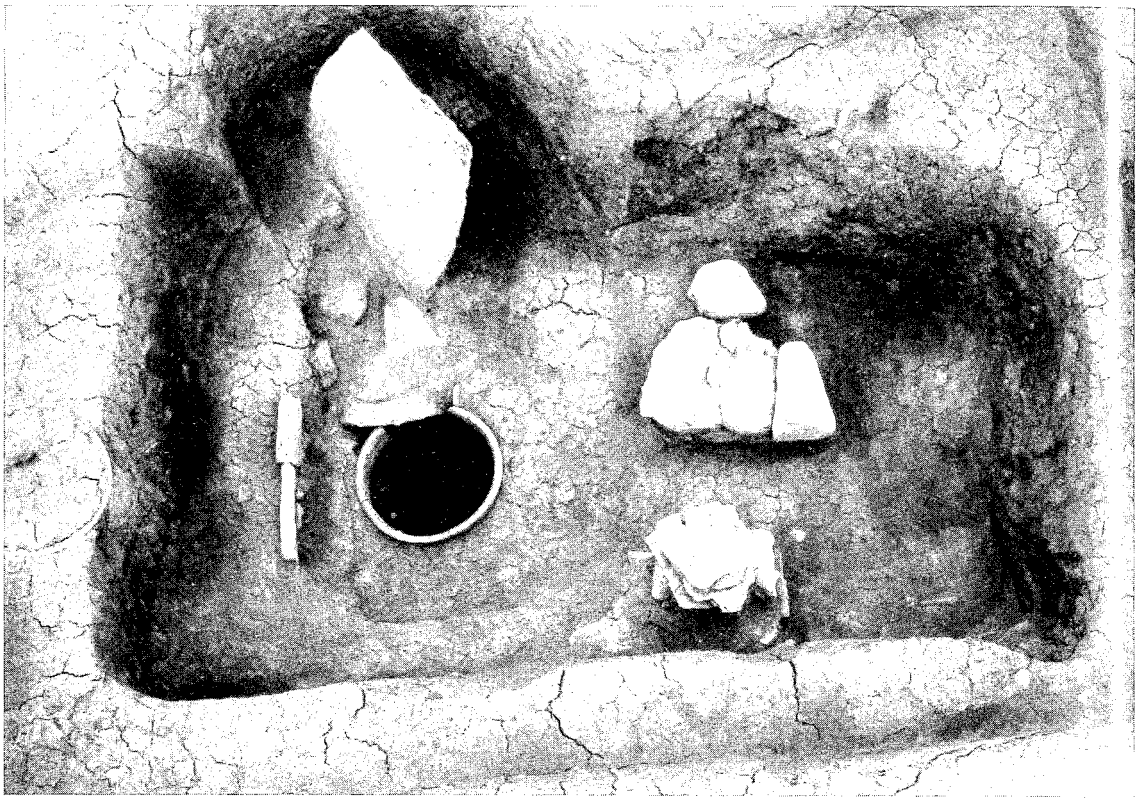
(1) 28号墳全景（南から）



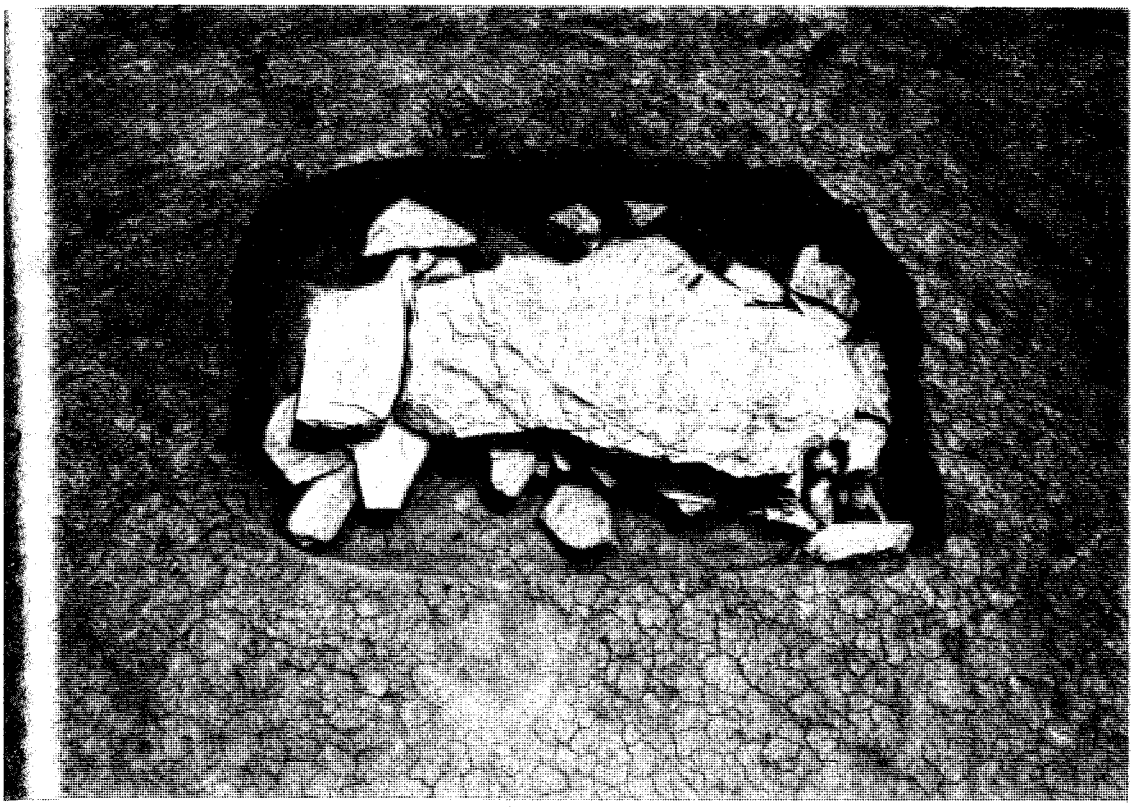
(2) 28号墳主体部（南から）



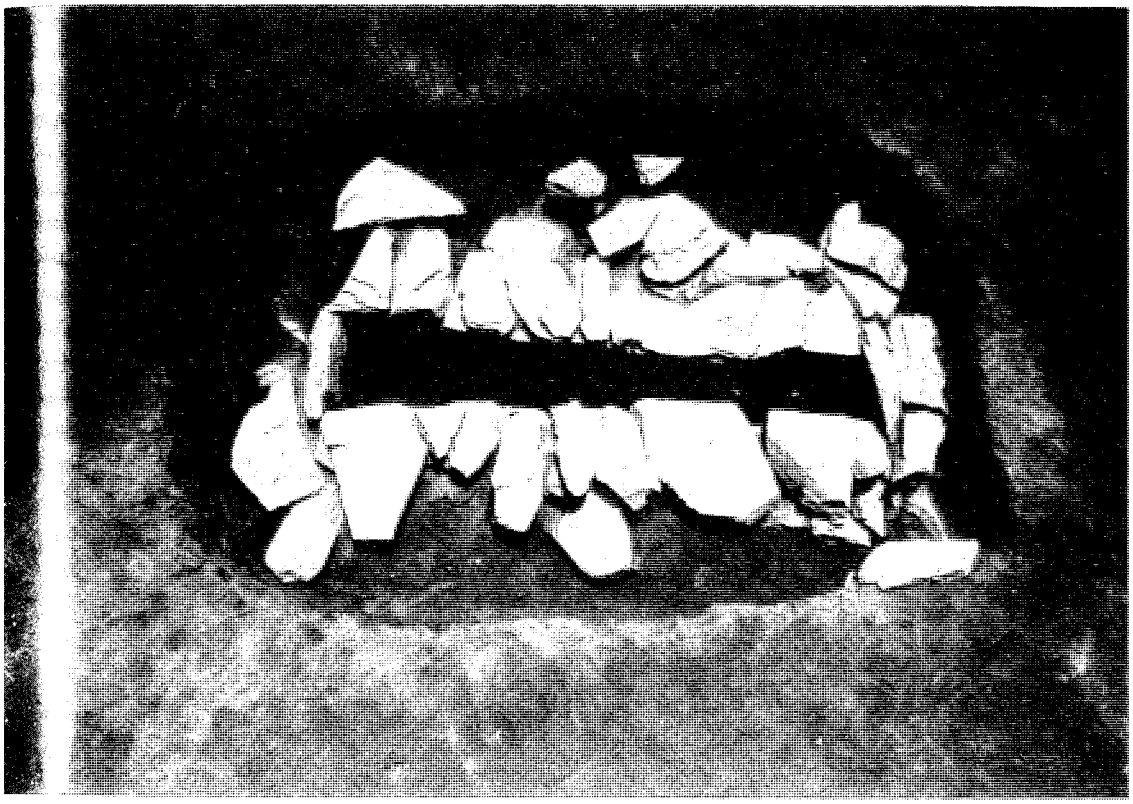
(1) 29号墳全景（西から）



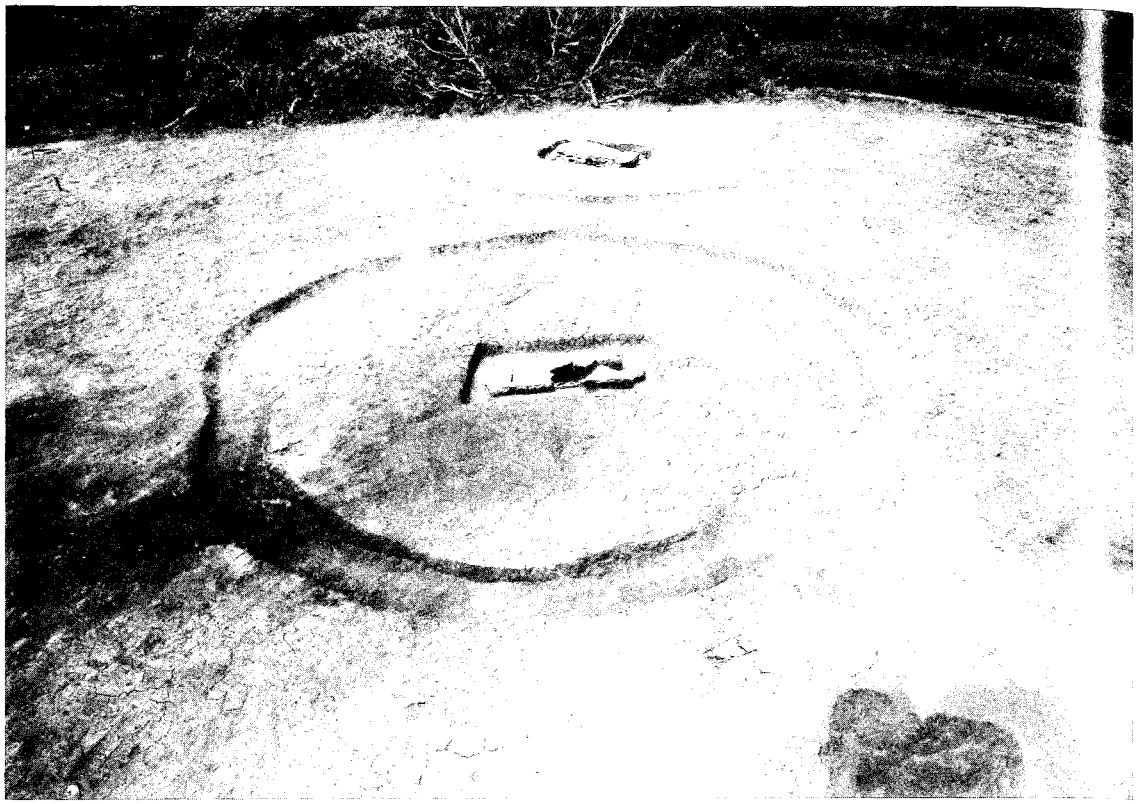
(2) 29号墳主体部（北から）



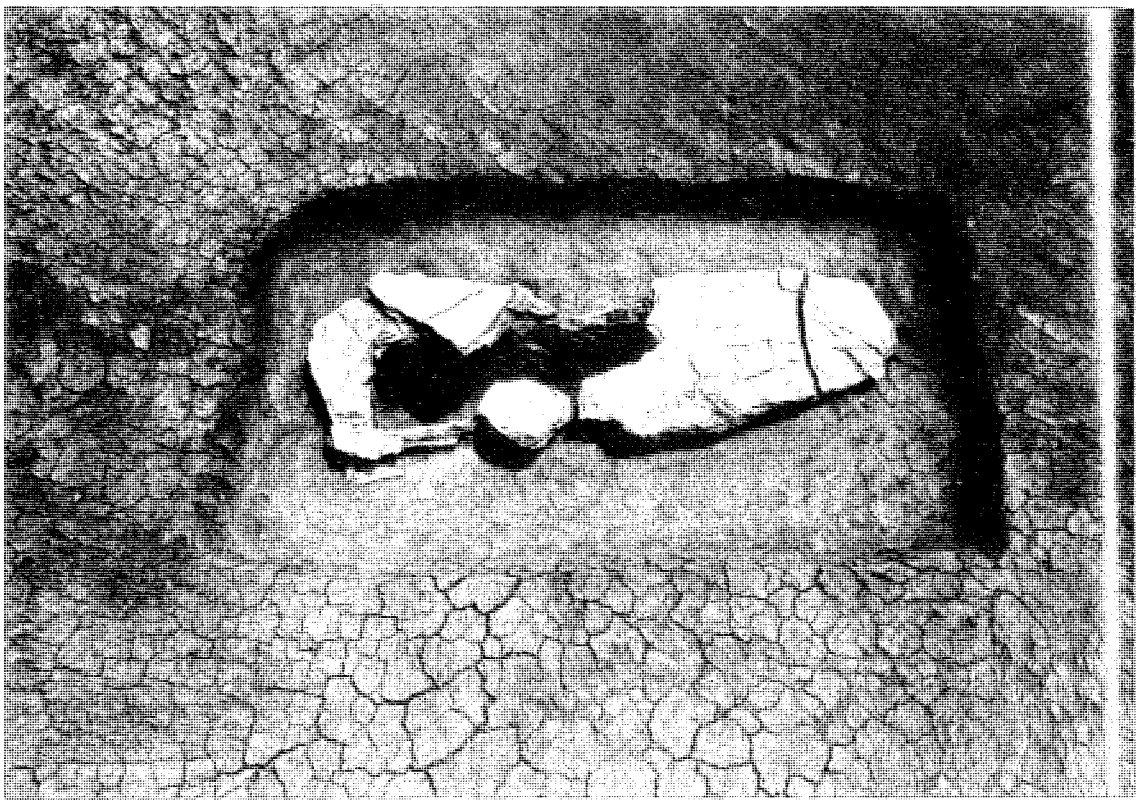
(1) 30号墳主体部（南西から）



(2) 30号墳主体部〈蓋石除去後〉



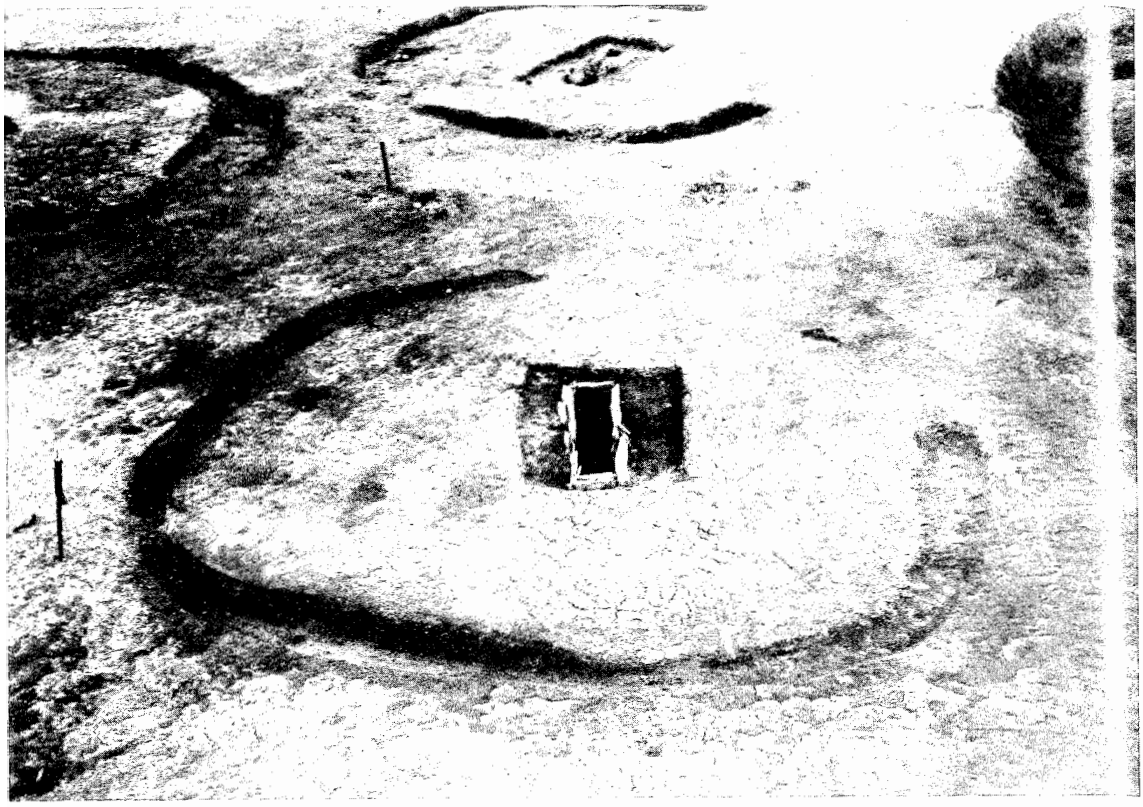
(1) 31号墳全景（南から）



(2) 31号墳主体部（北から）

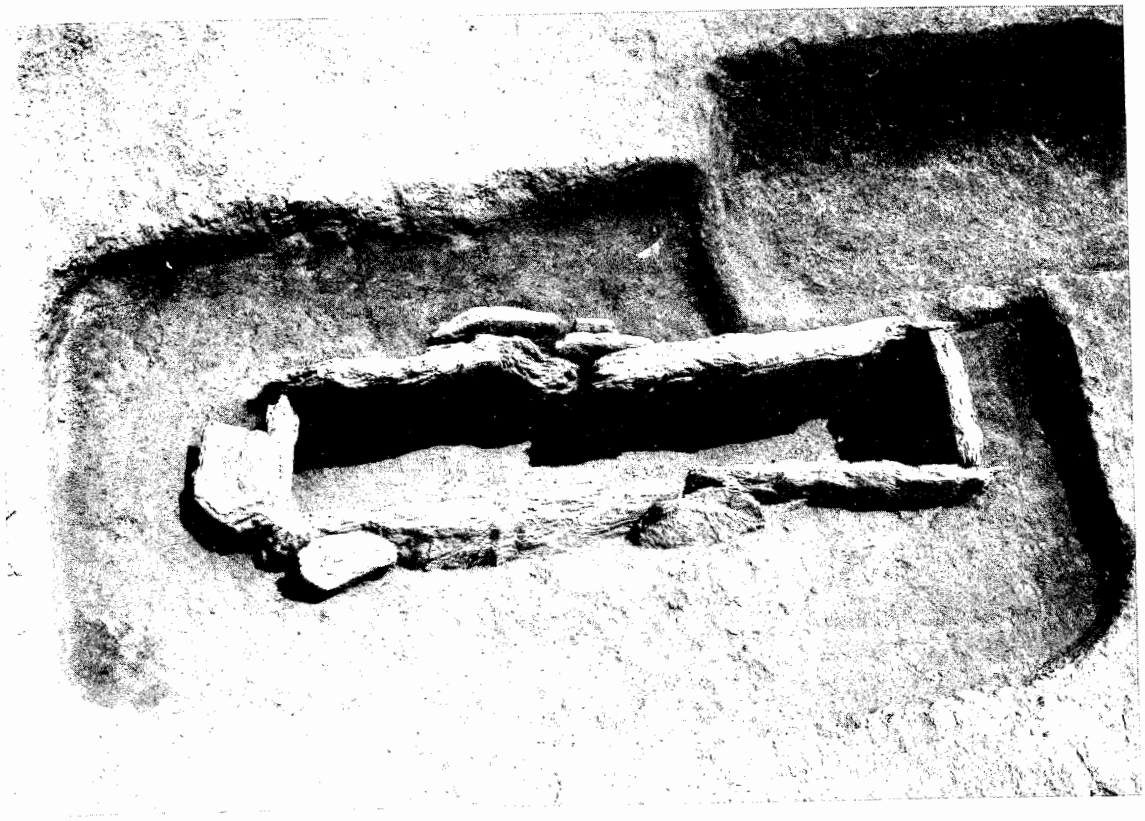
(1) 32号墳全景（東から）

(2) 32号墳主体部（北から）



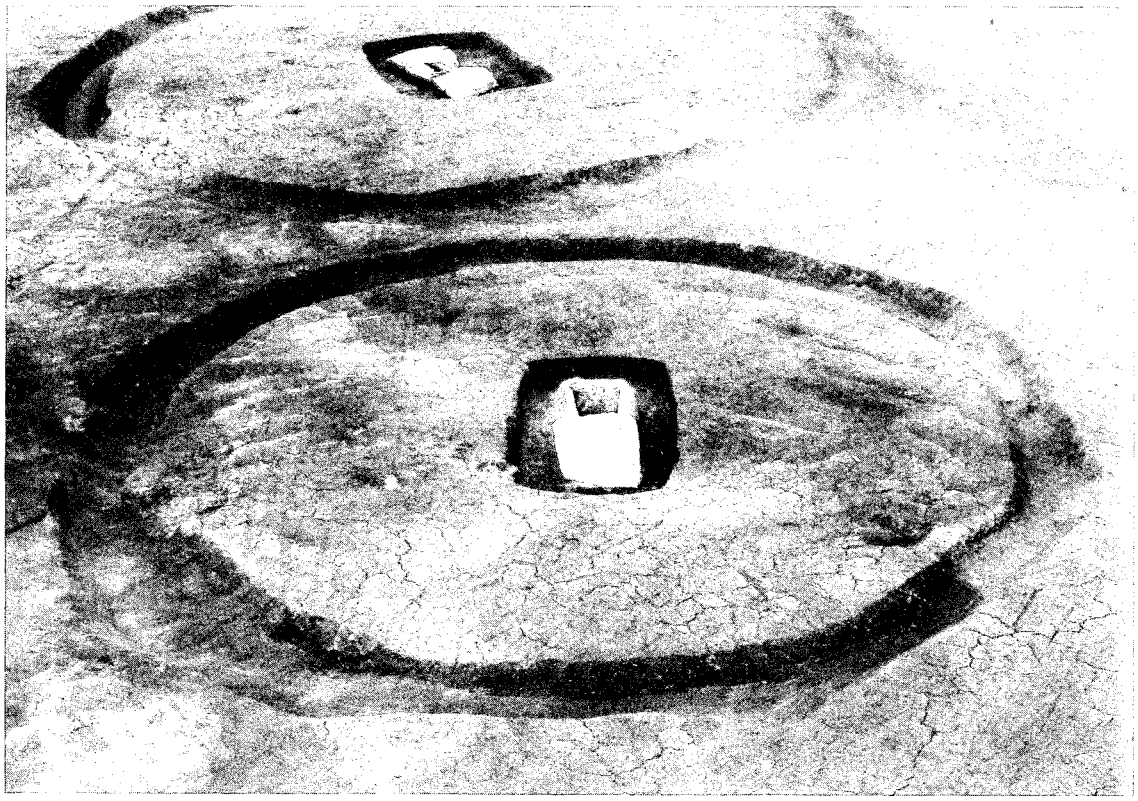
(1) 33号墳全景（西から）

(2) 33号墳主体部（北から）

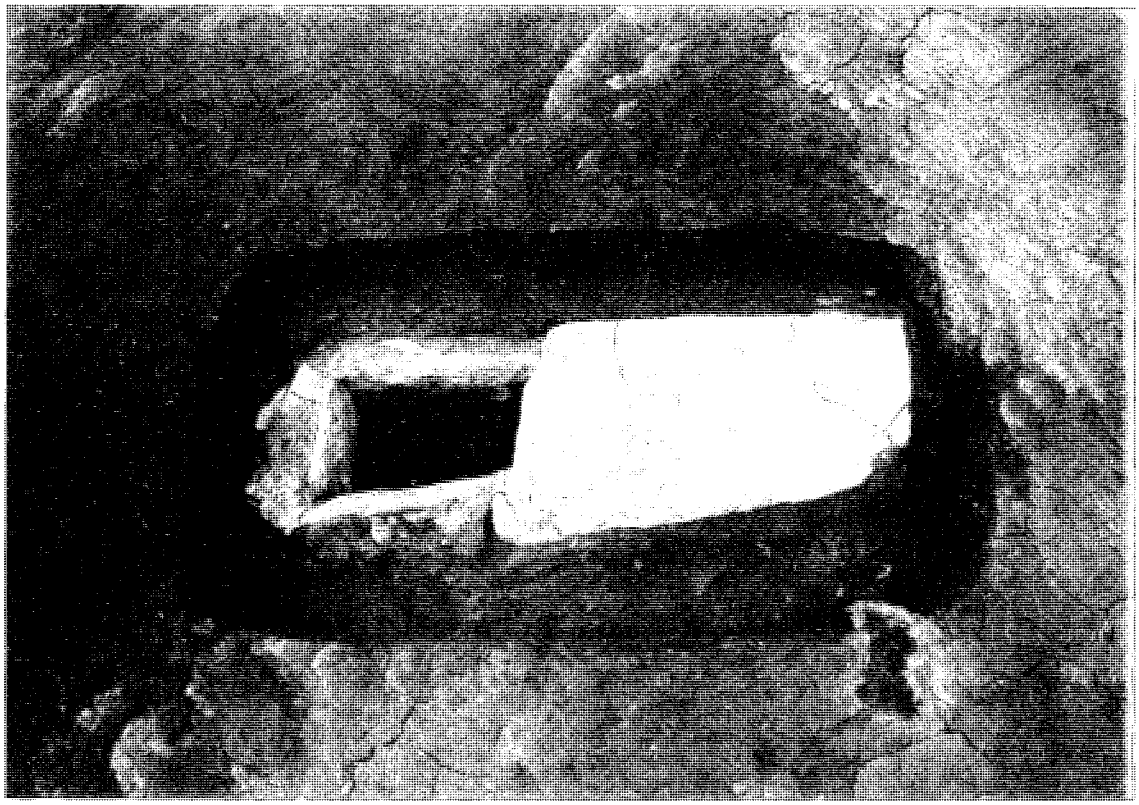


(1) 34号墳主体部（北から）

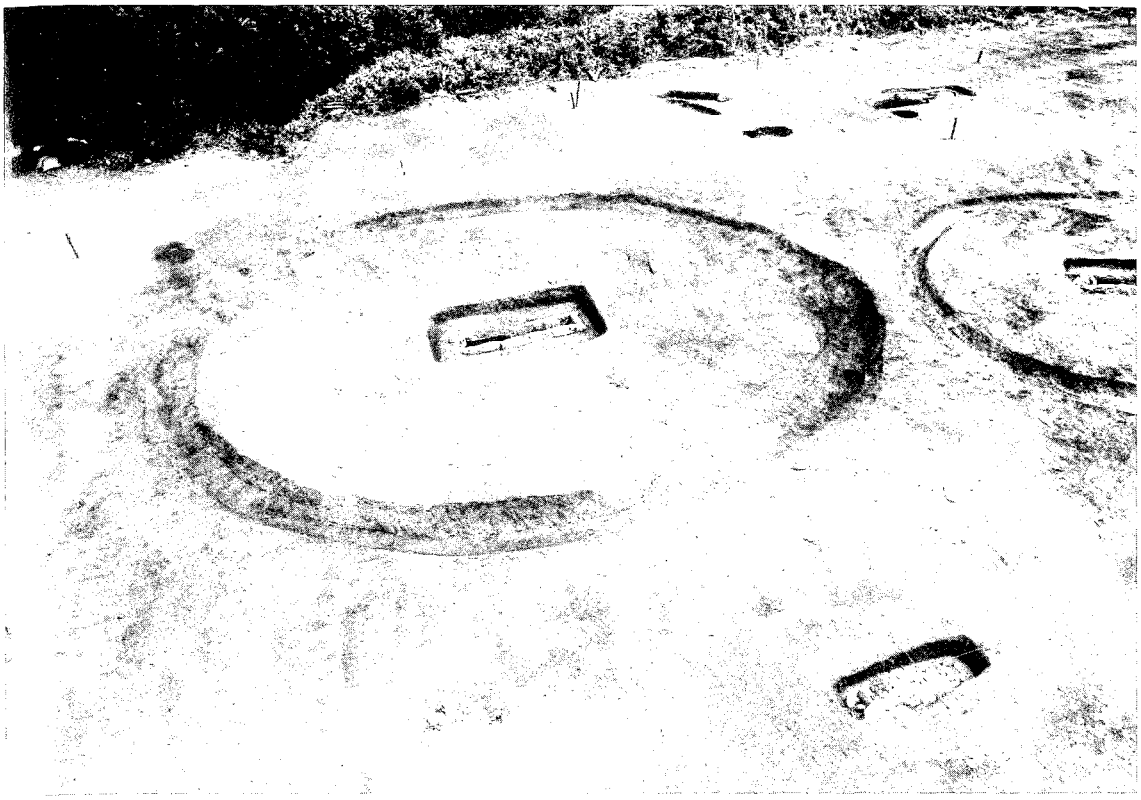
(2) 31～42、11・12号墳全景（東から）



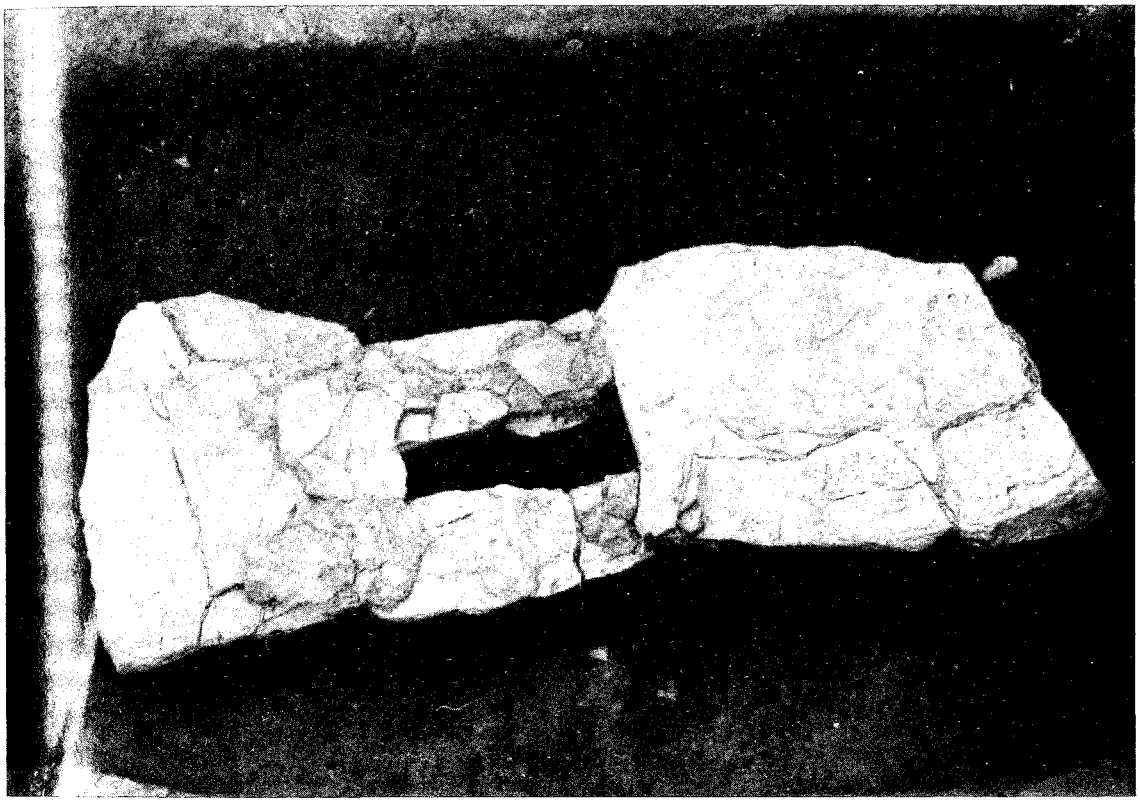
(1) 35号墳全景（東から）



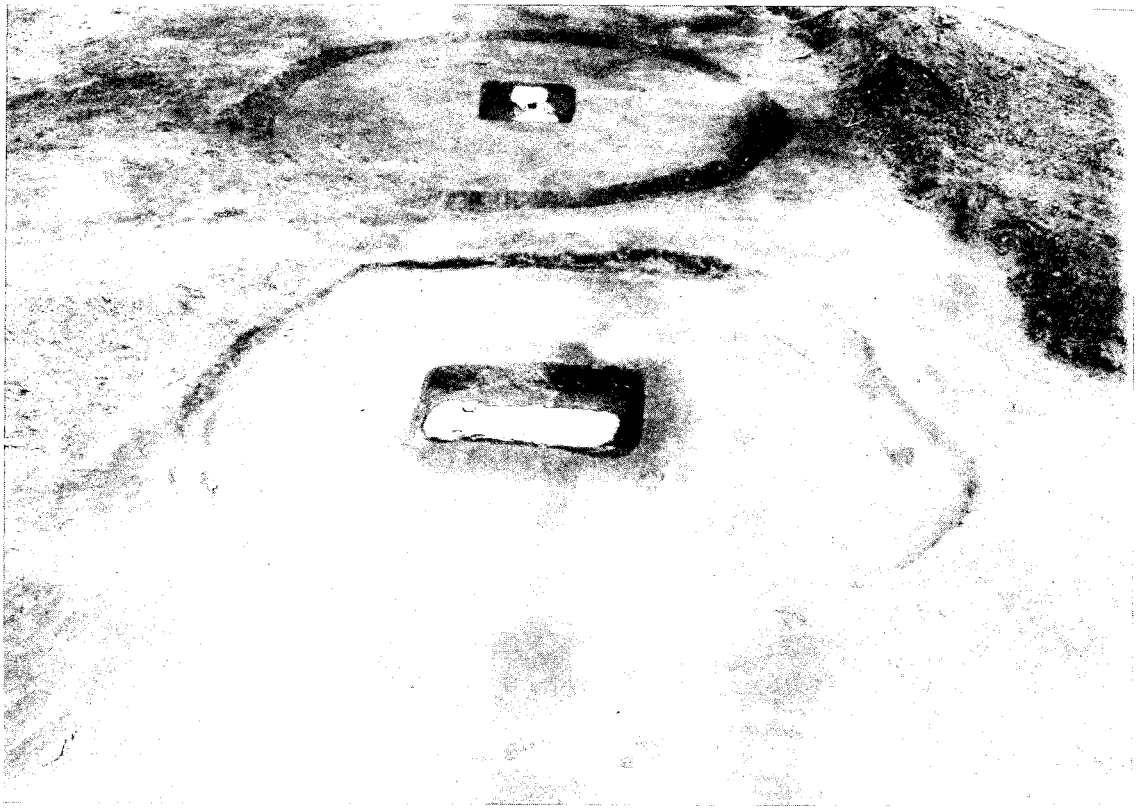
(2) 35号墳主体部（南から）



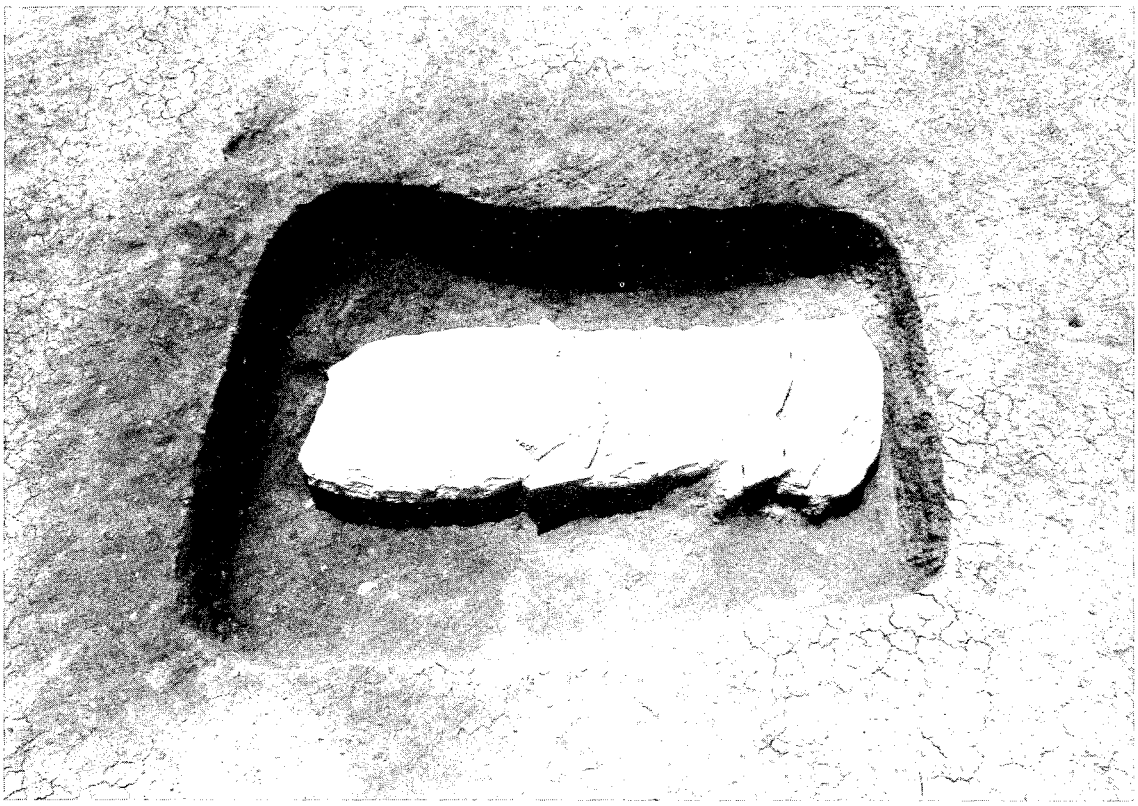
(1) 36号墳全景（南から）



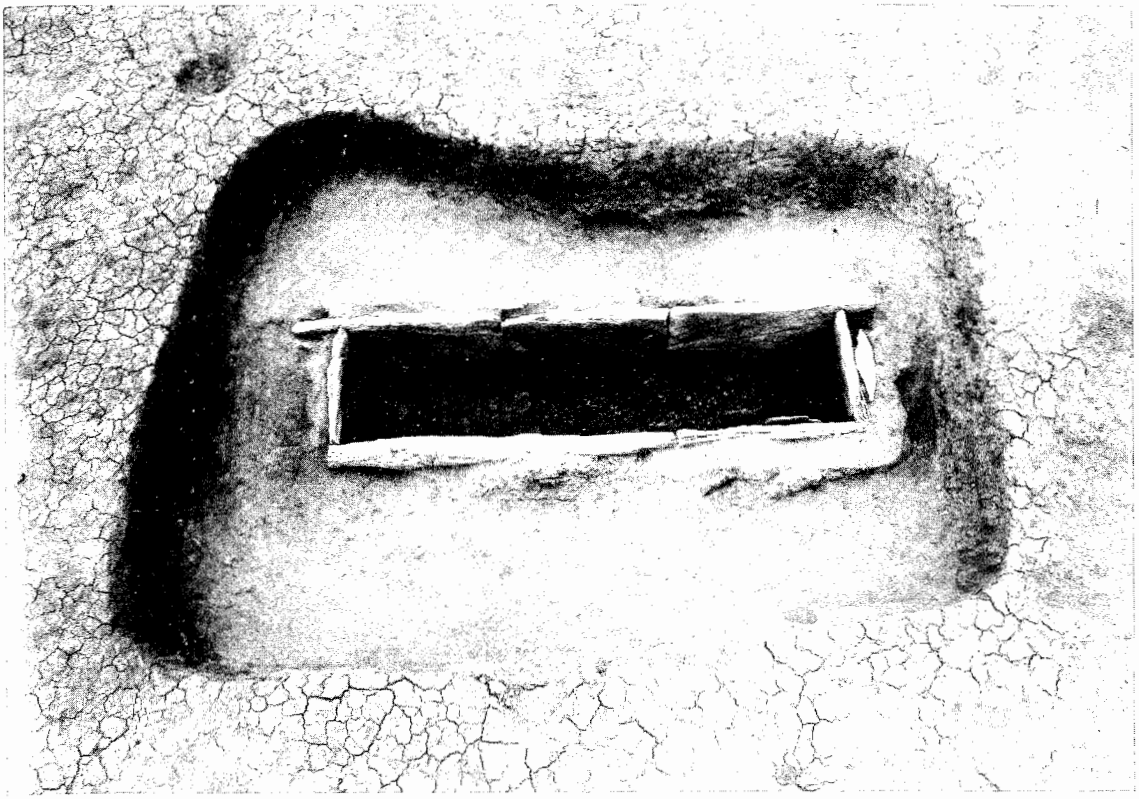
(2) 36号墳主体部（南から）



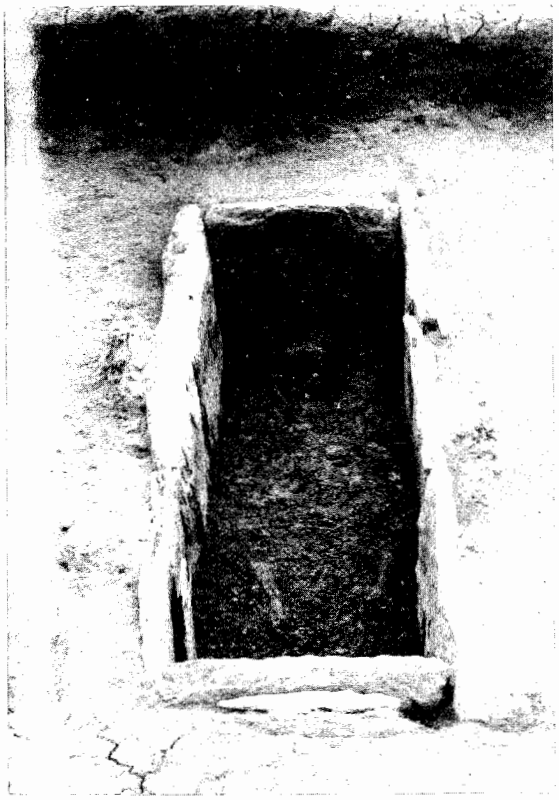
(1) 37号墳全景（西から）



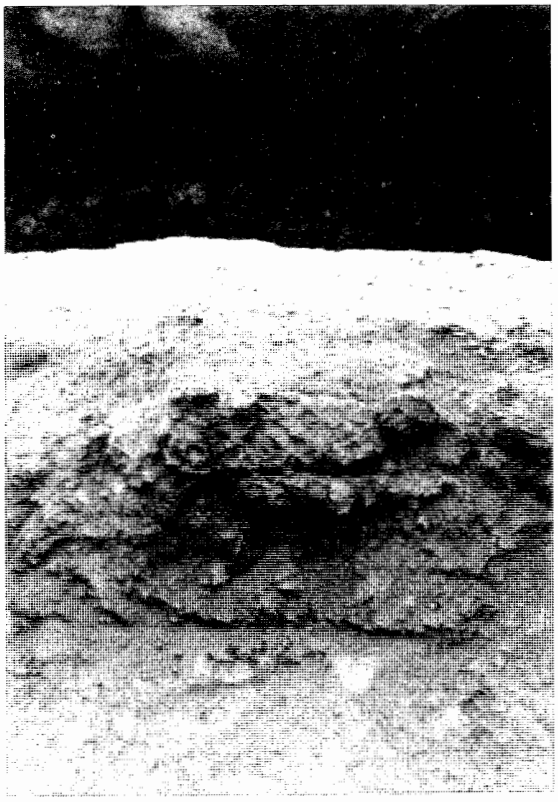
(2) 37号墳主体部（東から）



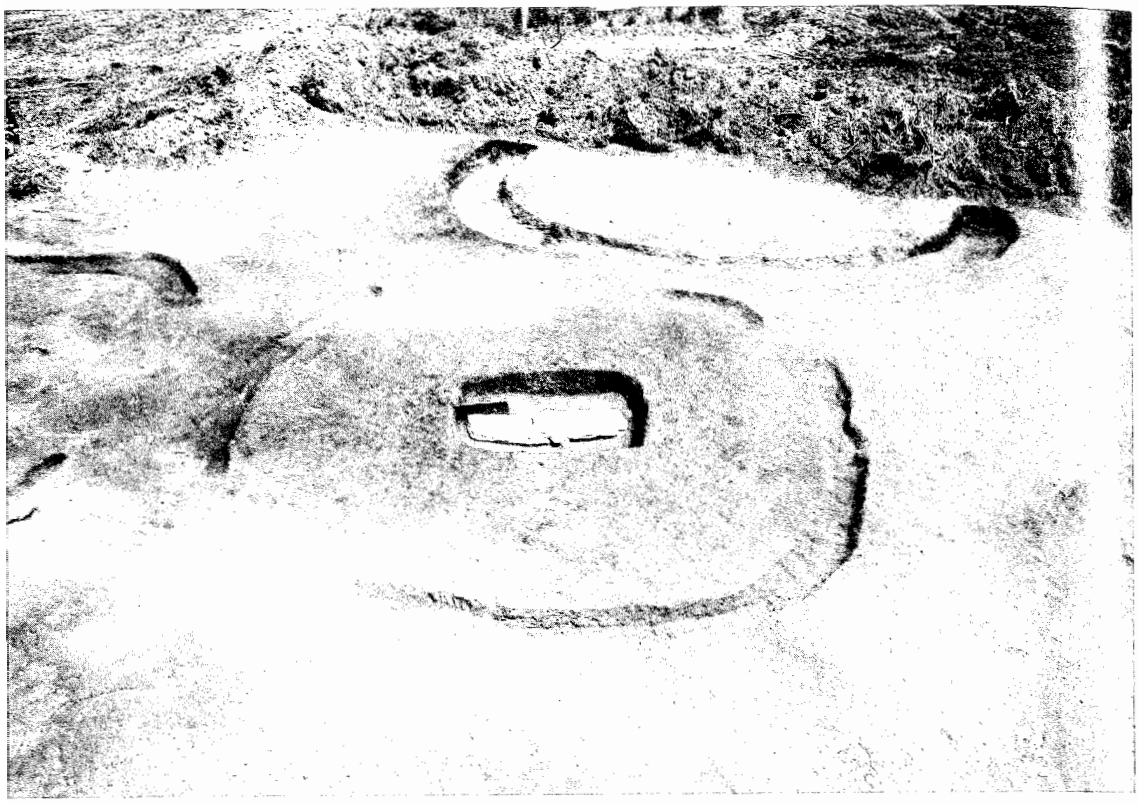
(1) 37号墳主体部〈蓋石除去後〉(東から)



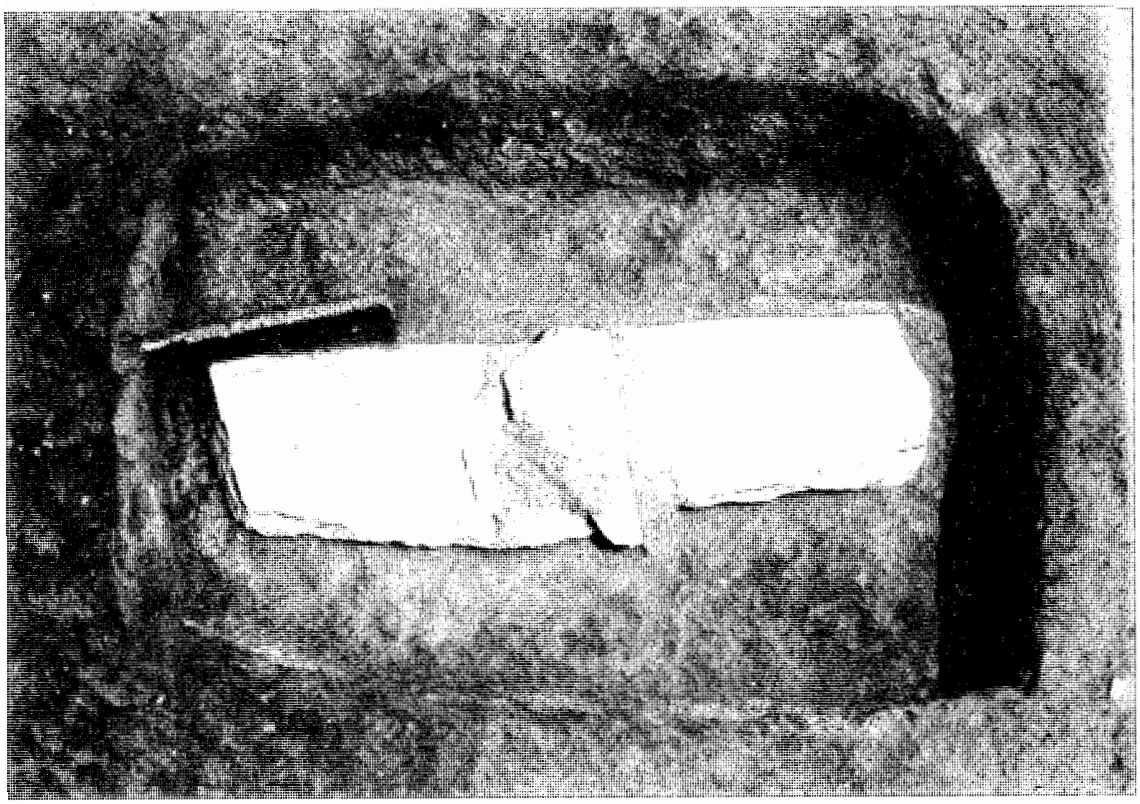
(2) 37号墳主体部〈蓋石除去後〉(北から)



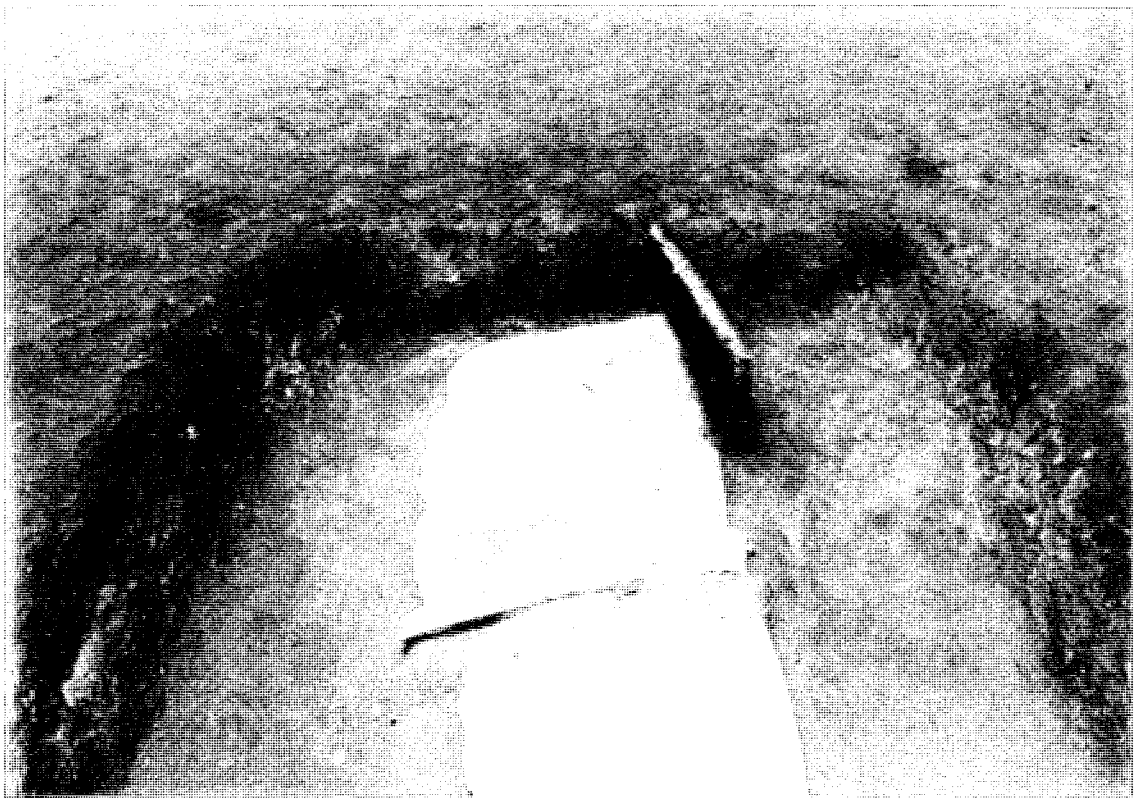
(3) 棺外鉄器出土状態



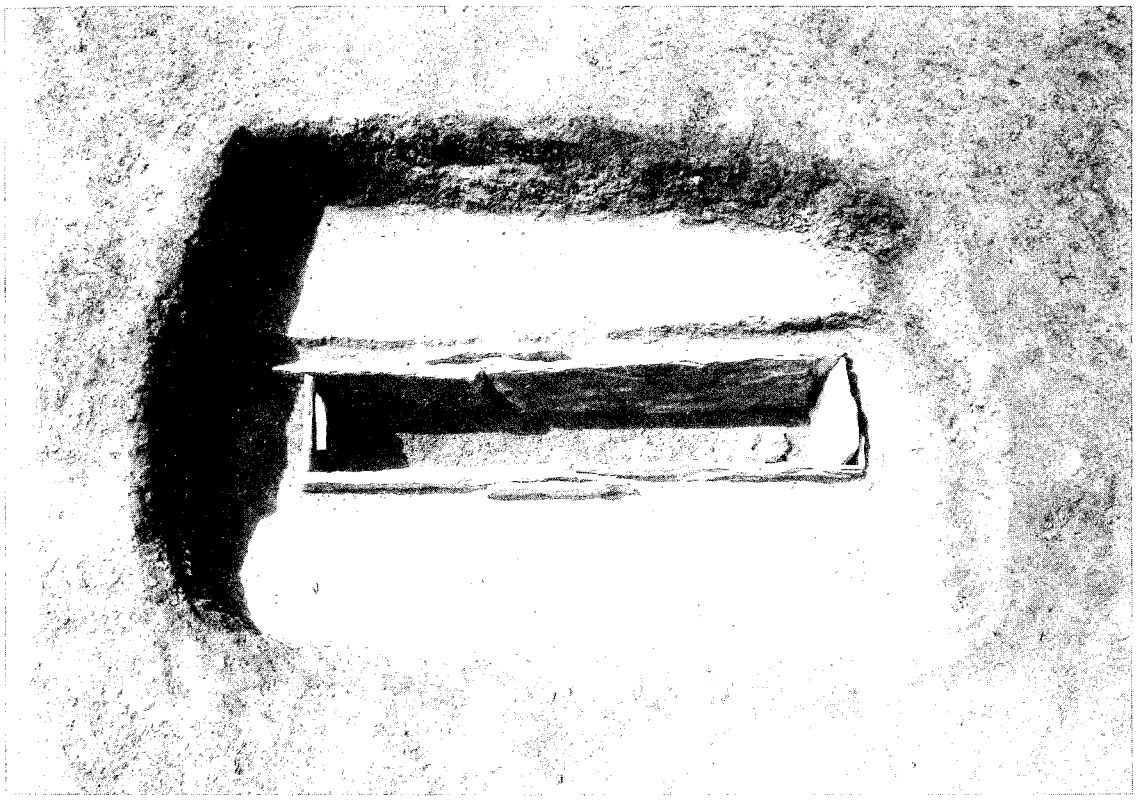
(1) 38号墳全景（北から）



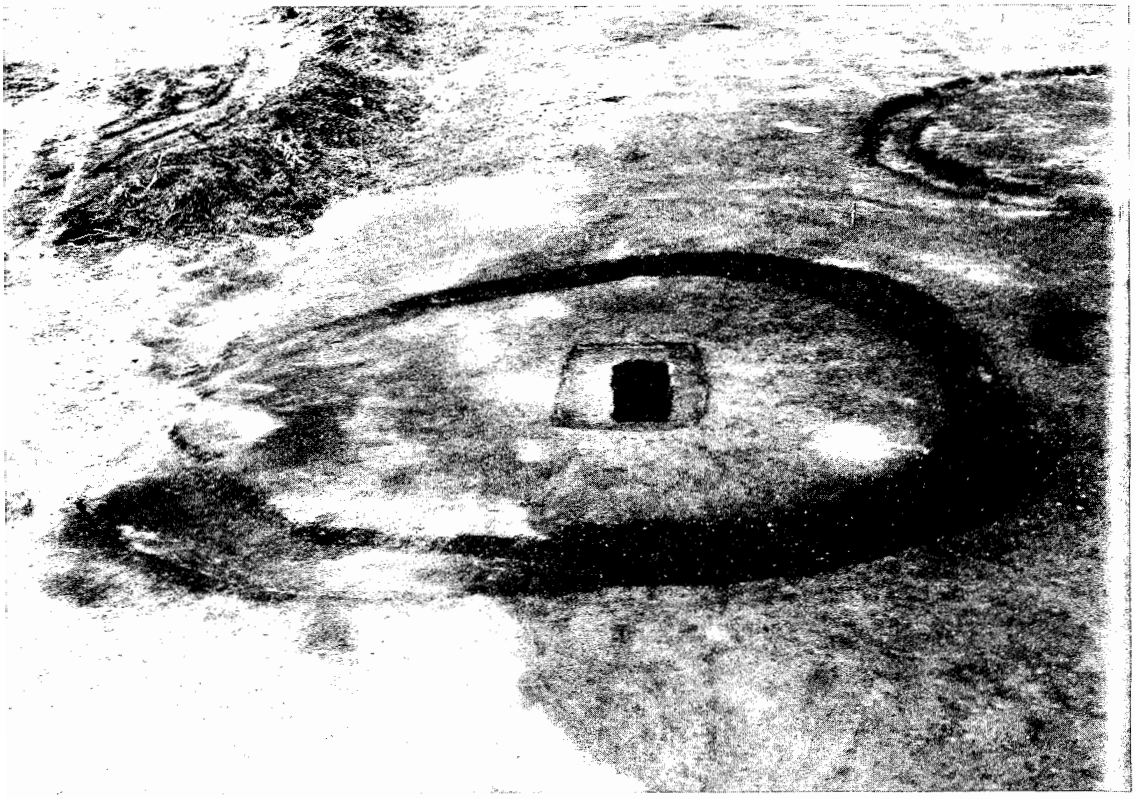
(2) 38号墳主体部



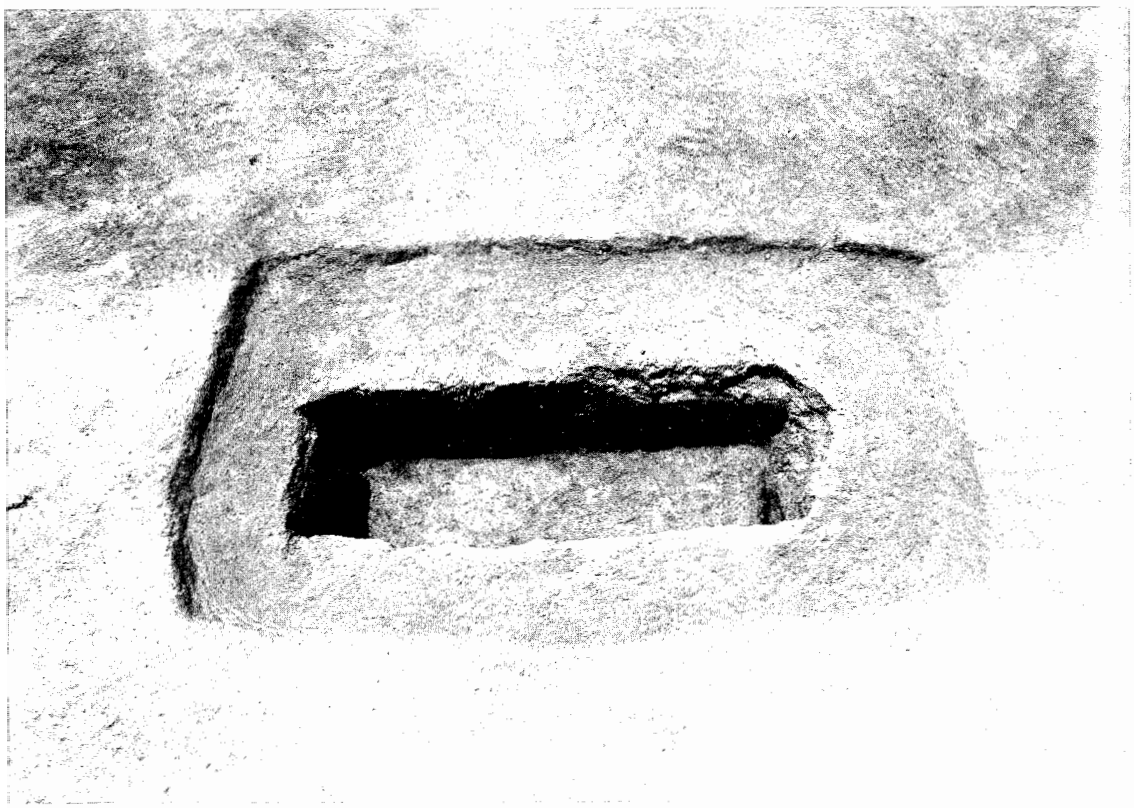
(1) 38号墳鉄刀出土状態



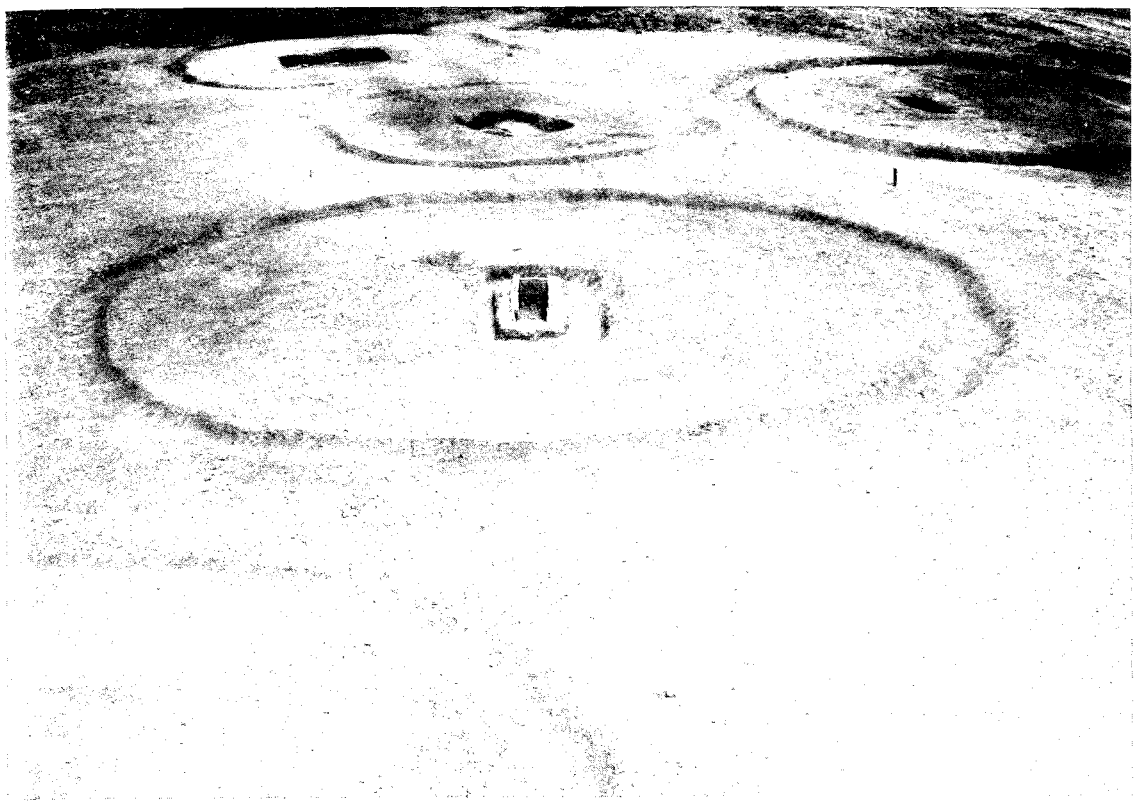
(2) 38号墳主体部〈蓋石除去後〉(南から)



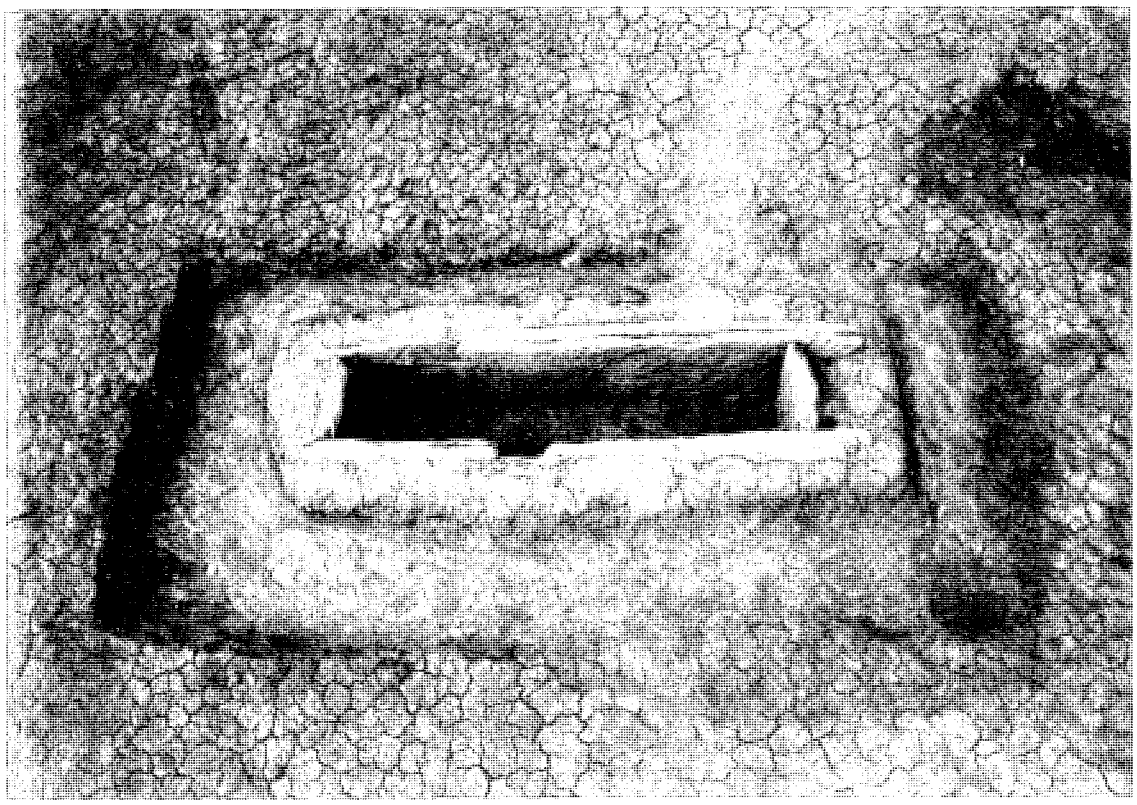
(1) 39号墳全景（東から）



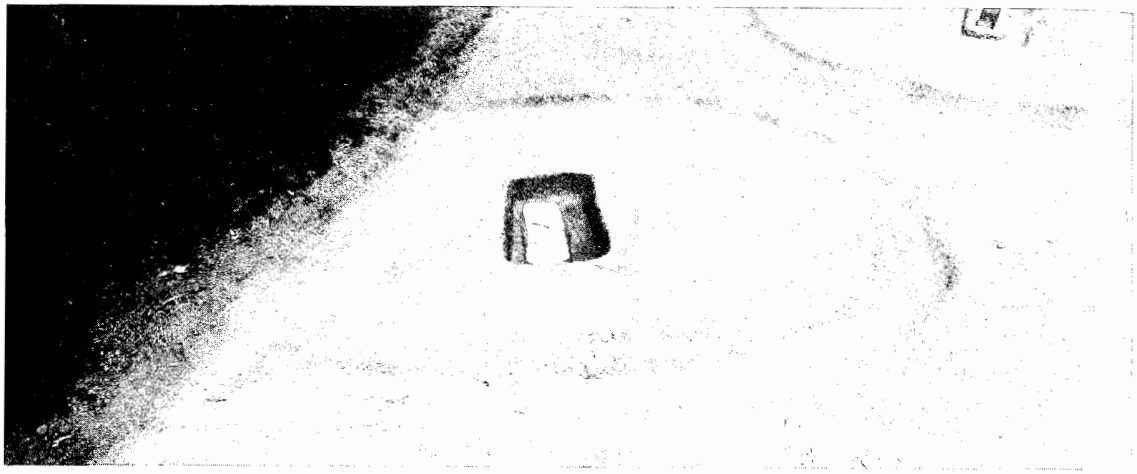
(2) 39号墳主体部（南から）



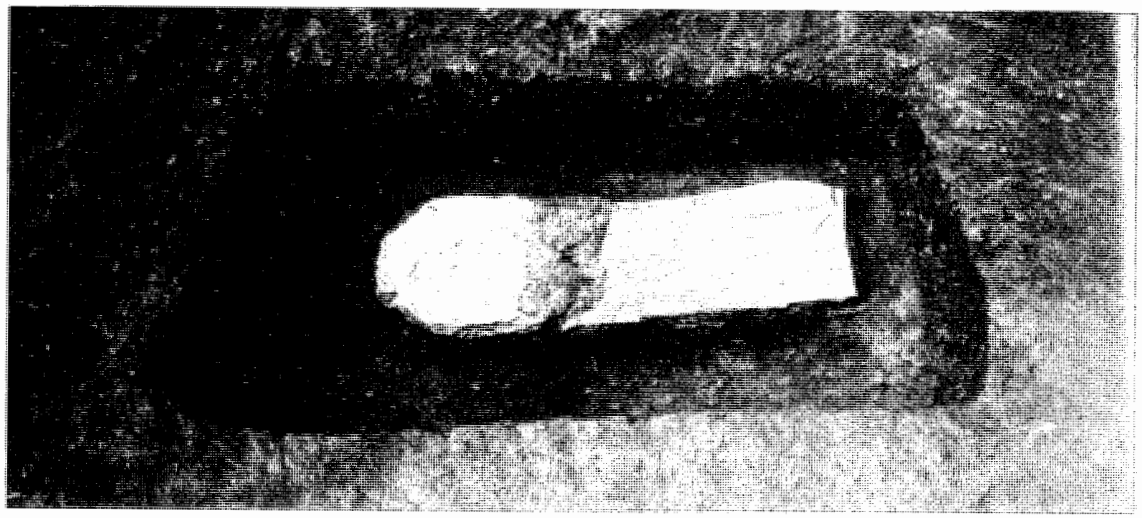
(1) 11号墳全景（西から）



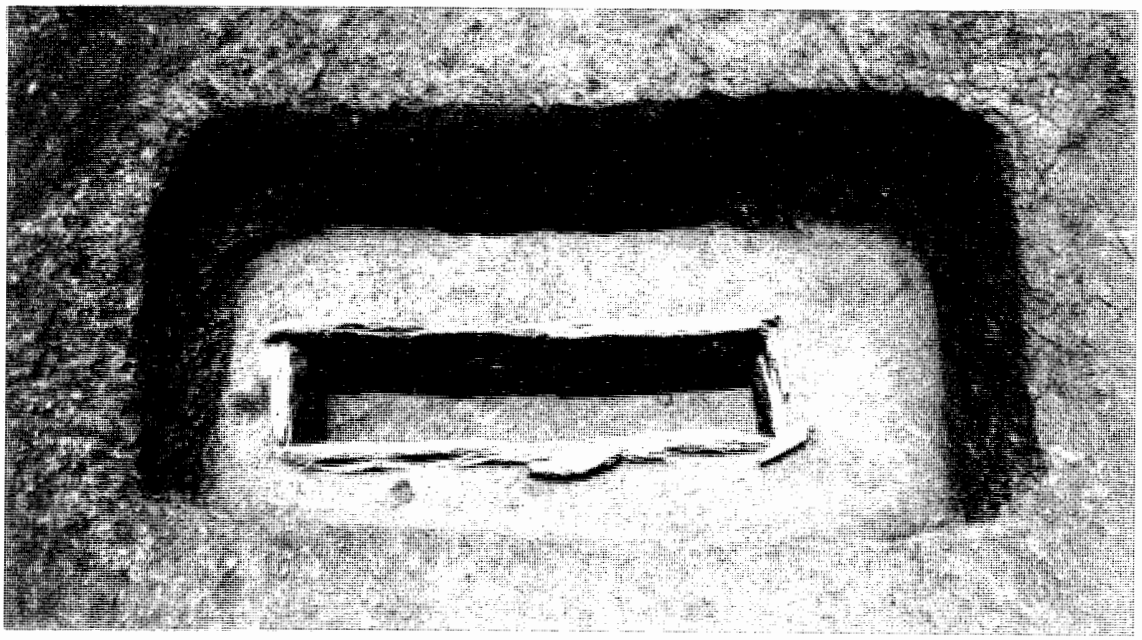
(2) 11号墳主体部（南から）



(1)

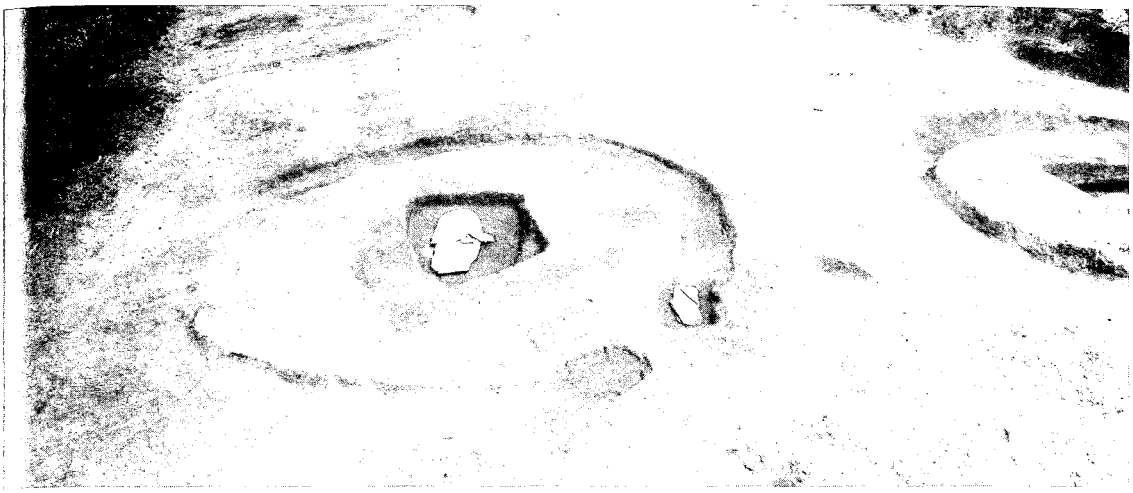


(2)

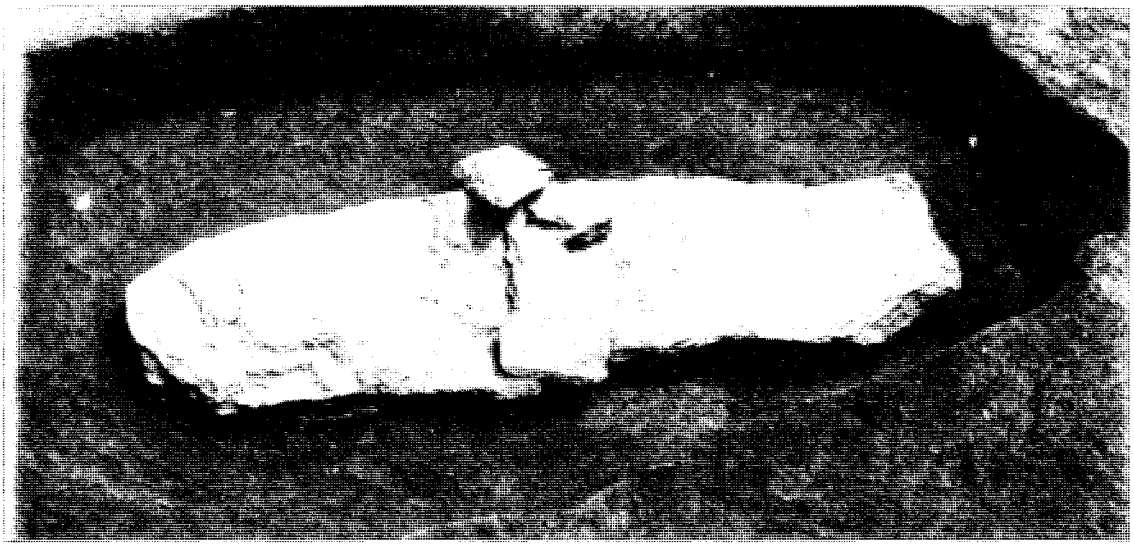


(3)

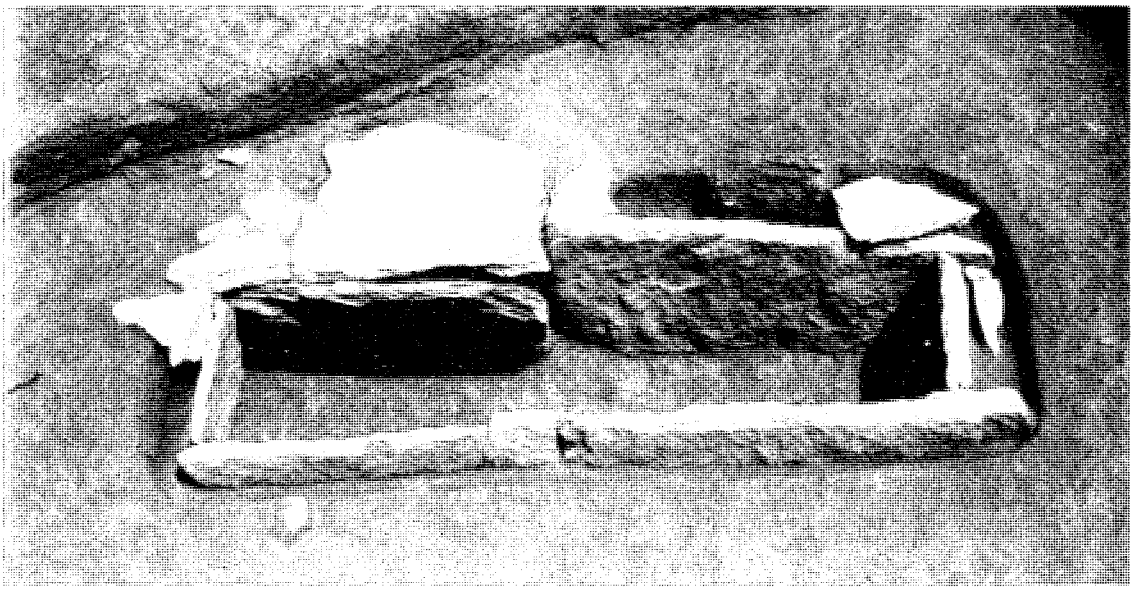
(1)40号墳全景（西から）　(2) 40号墳主体部（南から）　(3) 40号墳主体部〈蓋石除去後〉（北から）



(1)

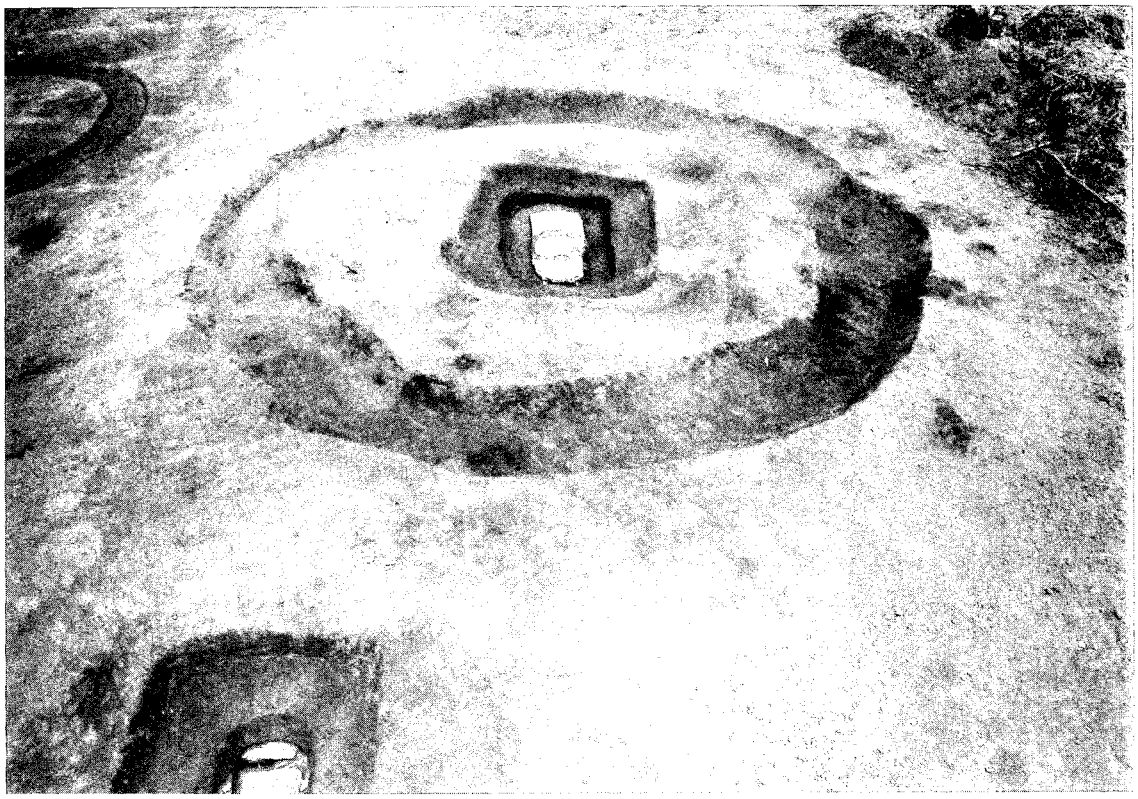


(2)

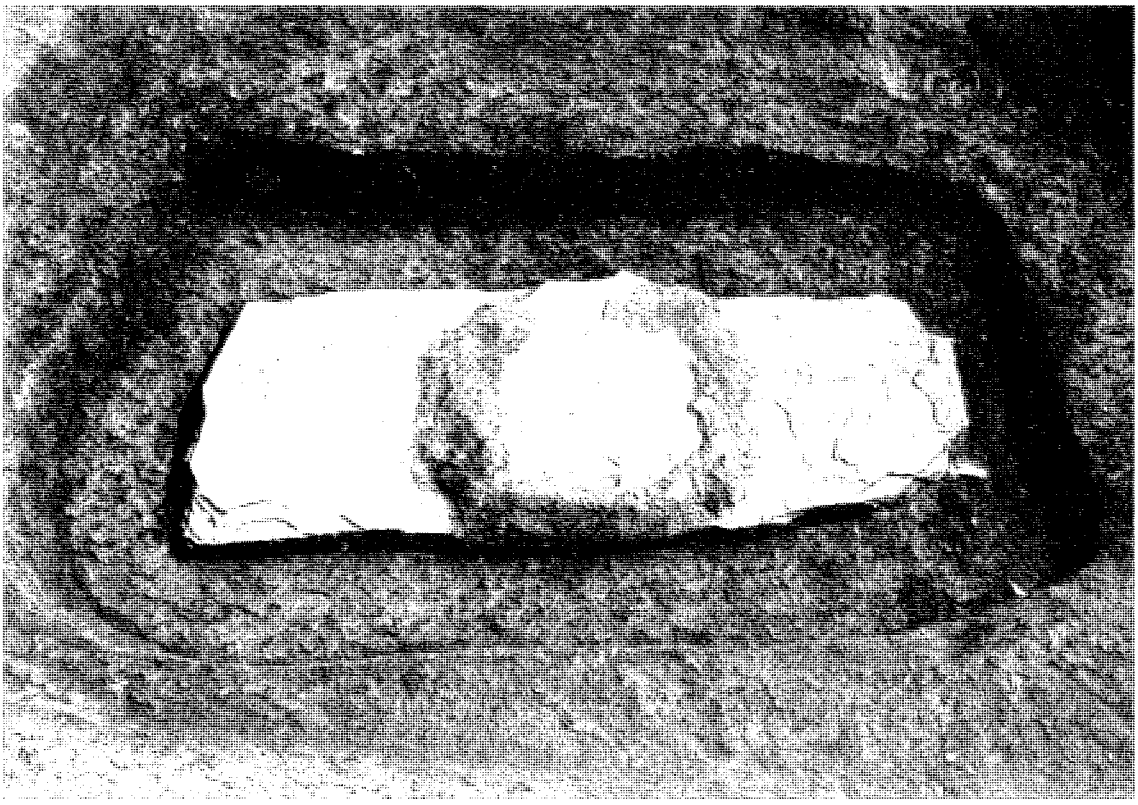


(3)

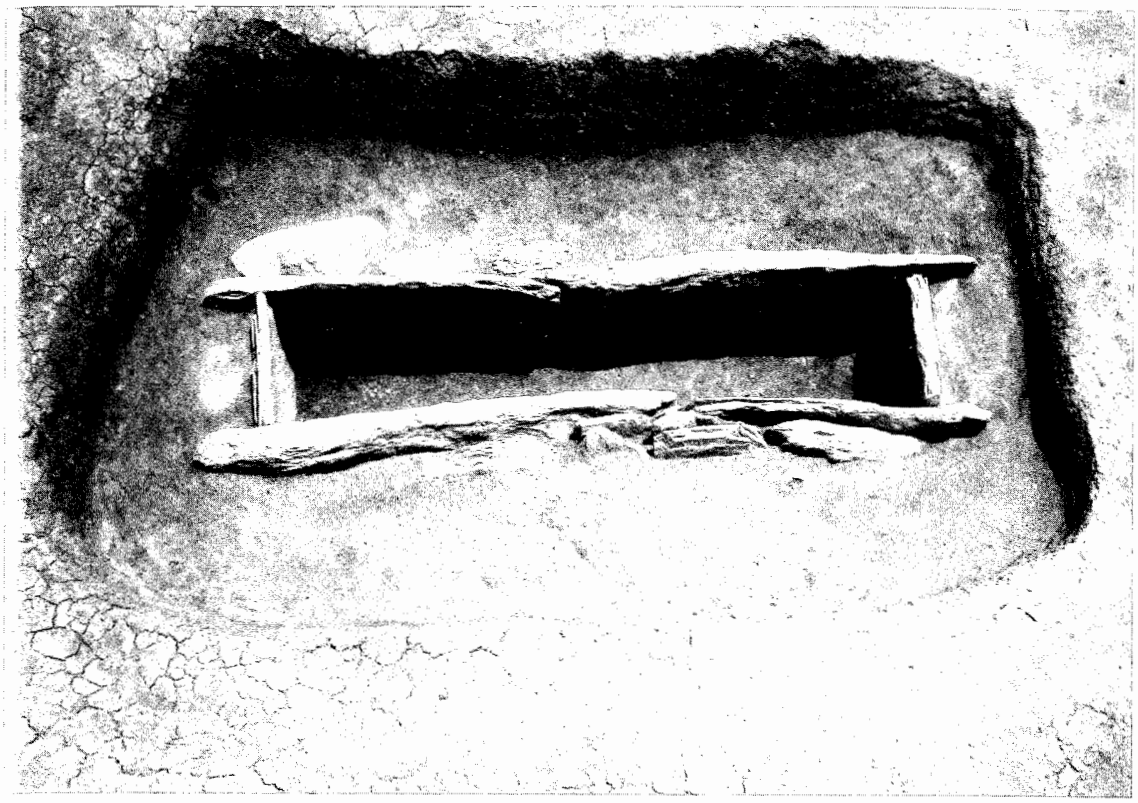
(1) 41号墳全景（西から）　(2) 41号墳主体部（北から）　(3) 41号墳主体部〈蓋石除去後〉（南から）



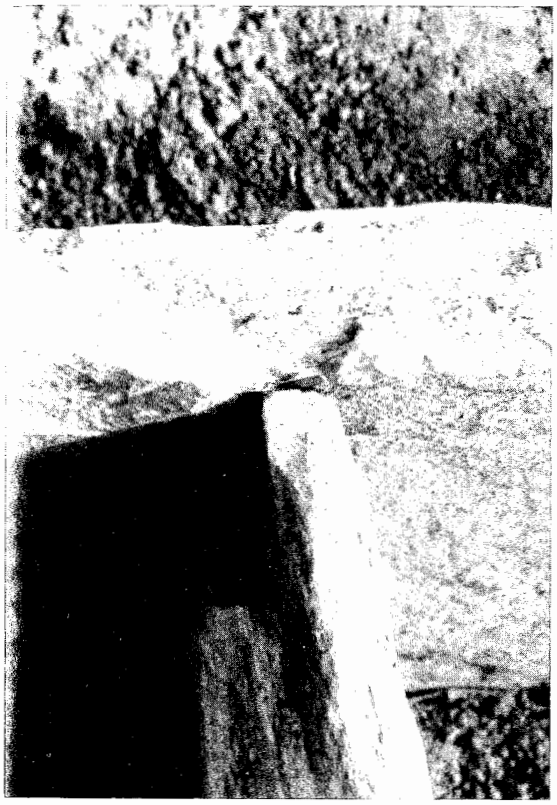
(1) 42号墳全景（西から）



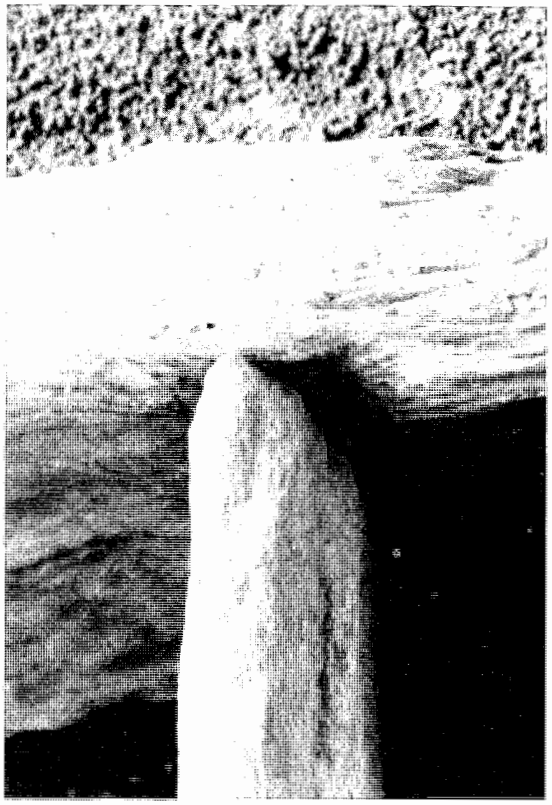
(2) 42号墳主体部（北から）



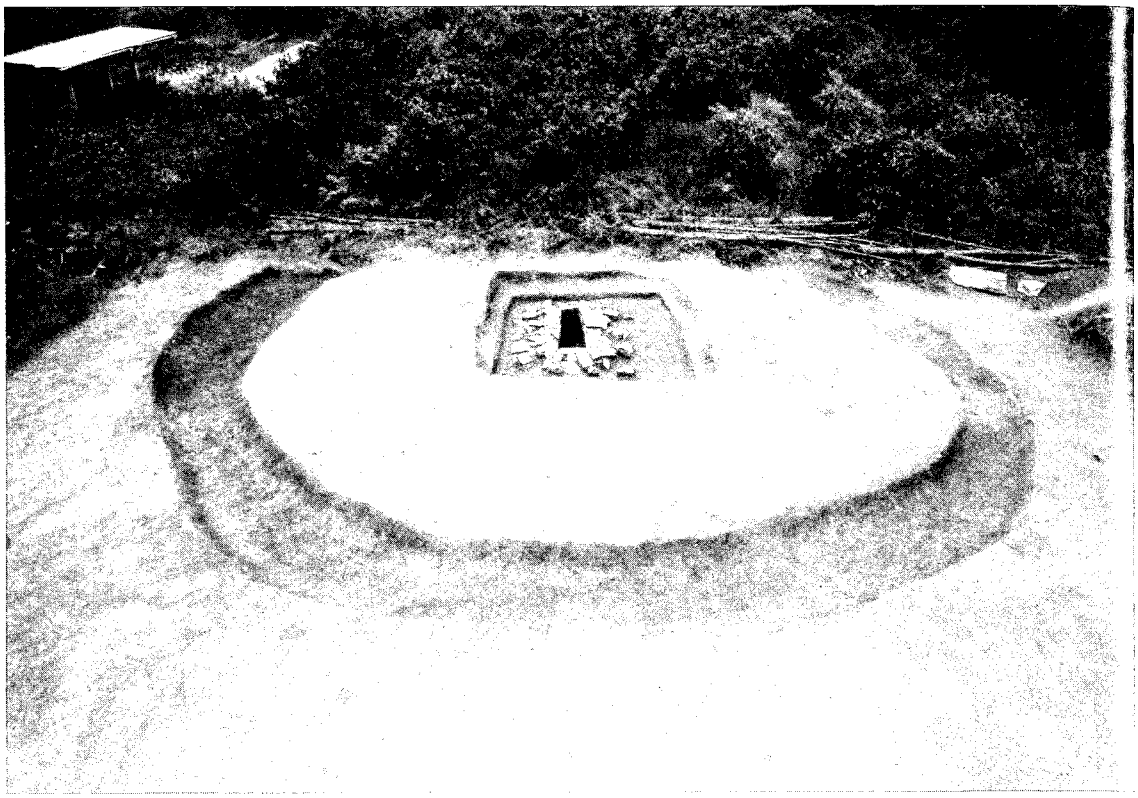
(1) 42号墳主体部〈蓋石除去後〉(北から)



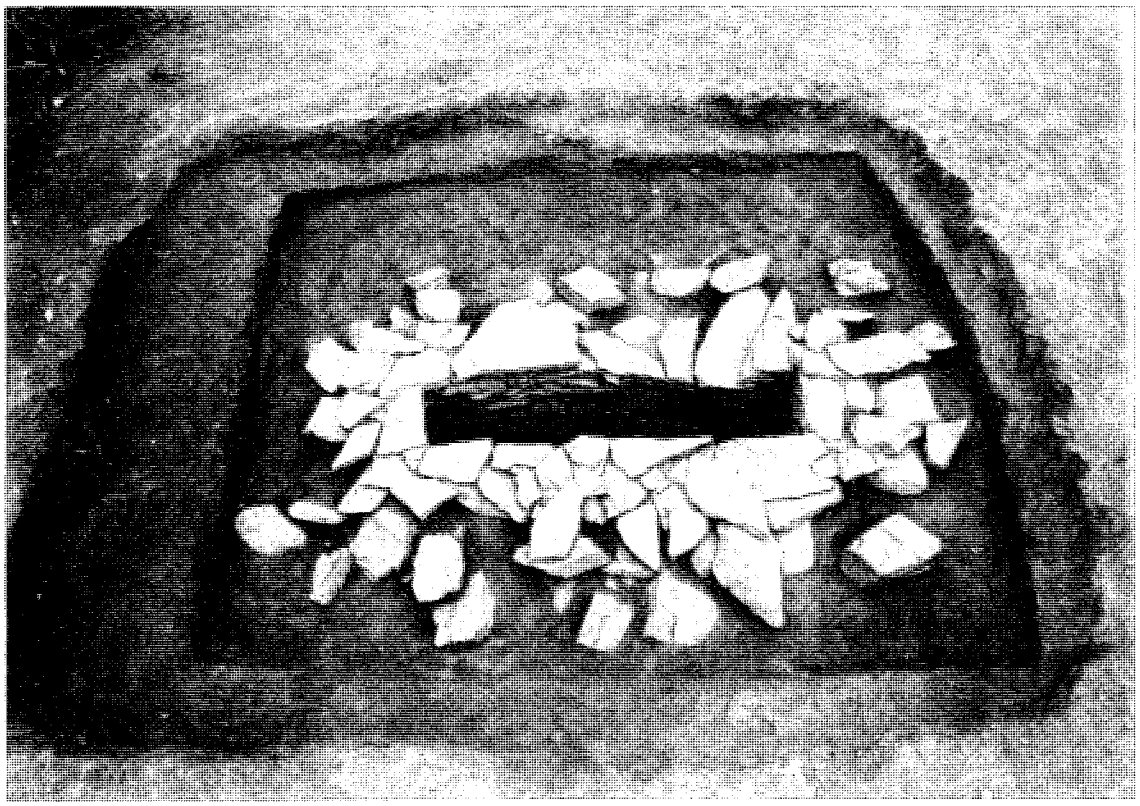
(2) 側堅と小口壁の接点



(3) 側壁と小口壁の接点

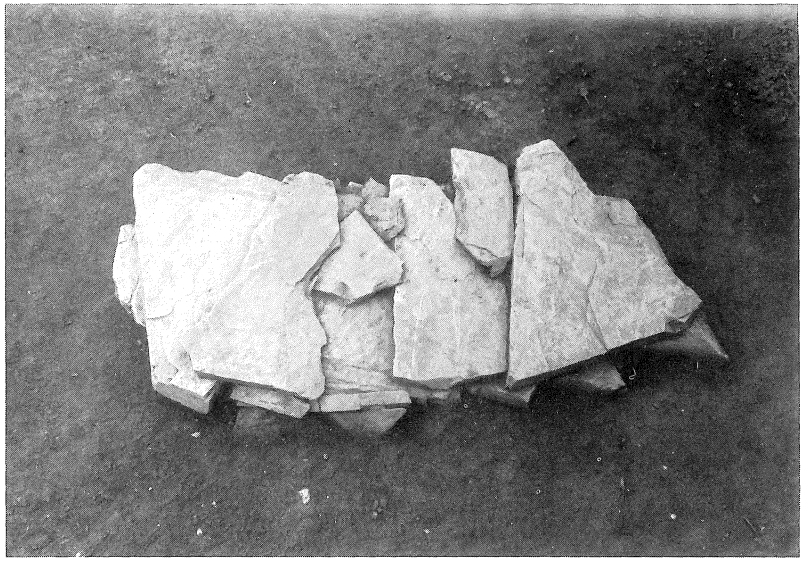


(1) 12号墳全景（東から）

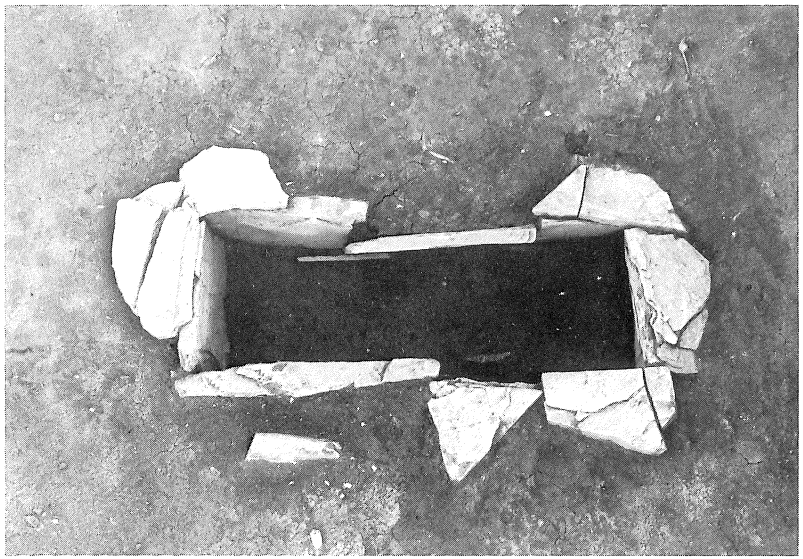


(2) 12号墳主体部（南から）

(1)

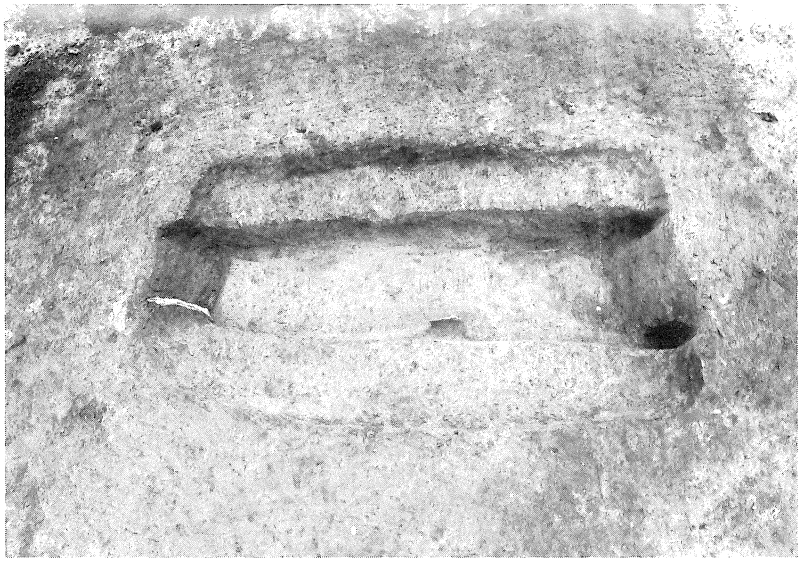


(2)



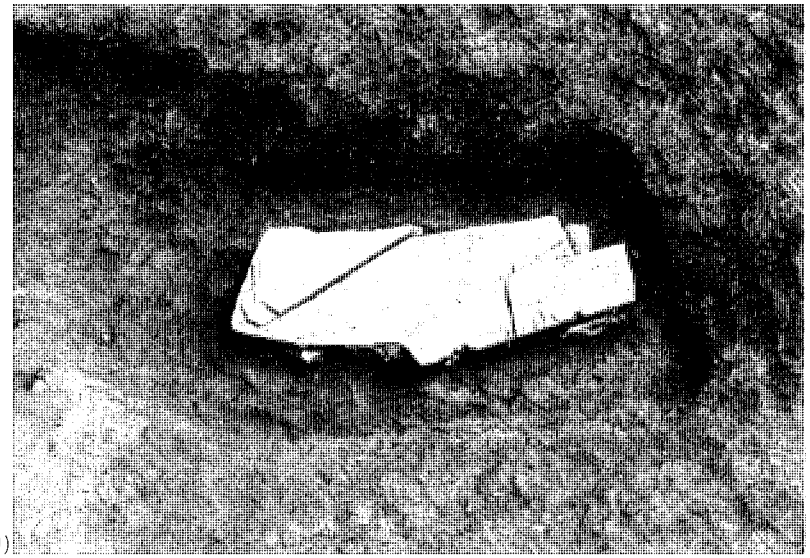
(1)　Ｃ１号（東南から）
(2)　Ｃ１号蓋石除去後（北西から）

(3)

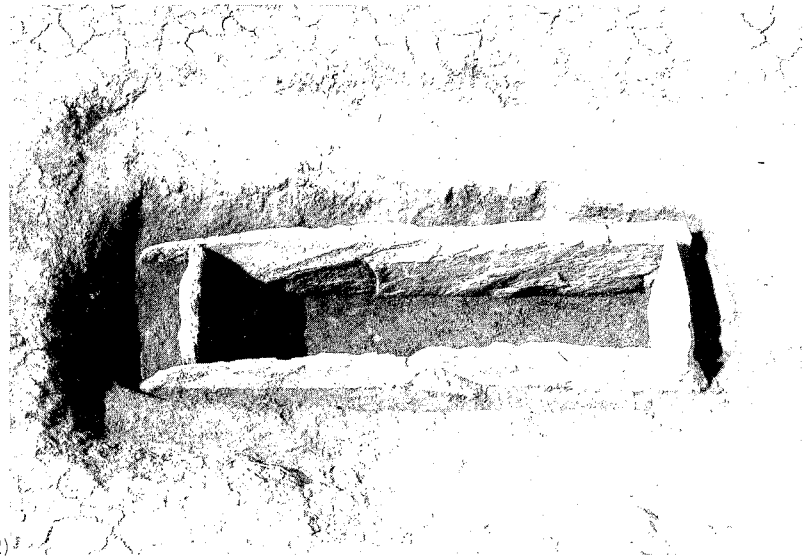


(4)

(3)　Ｃ２号（北から）
(4)　Ｃ３号（北から）

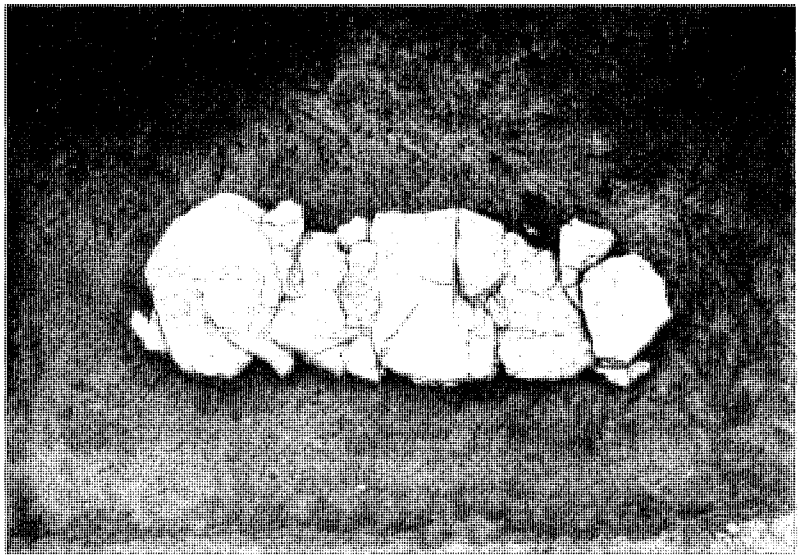


(1)

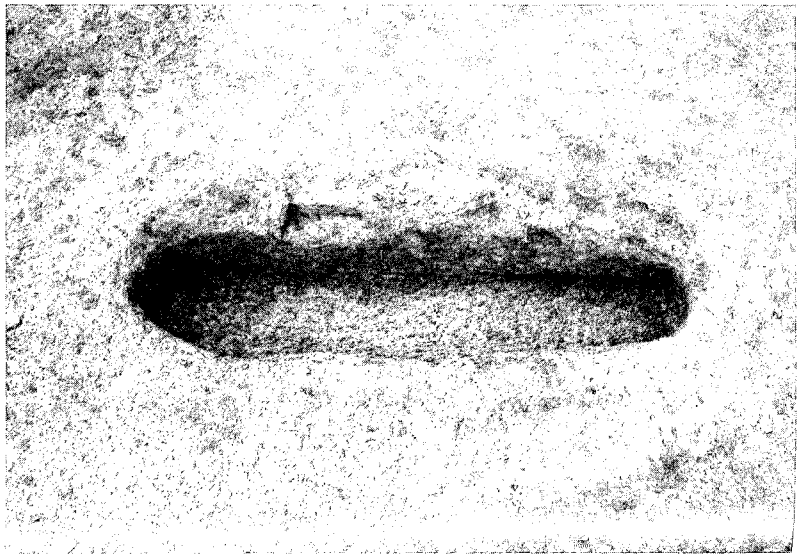


(2)

(1)　Ｃ５号（北から）
(2)　Ｃ５号煮石除去後（南から）

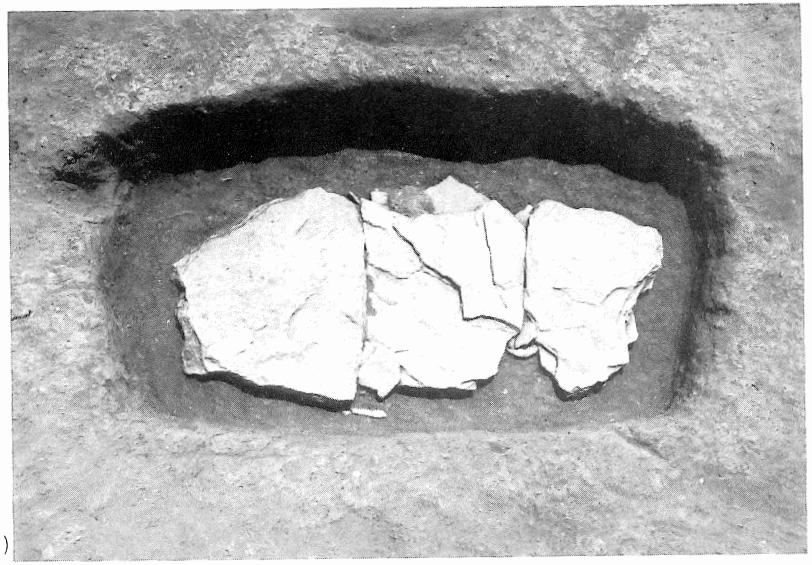


(3)

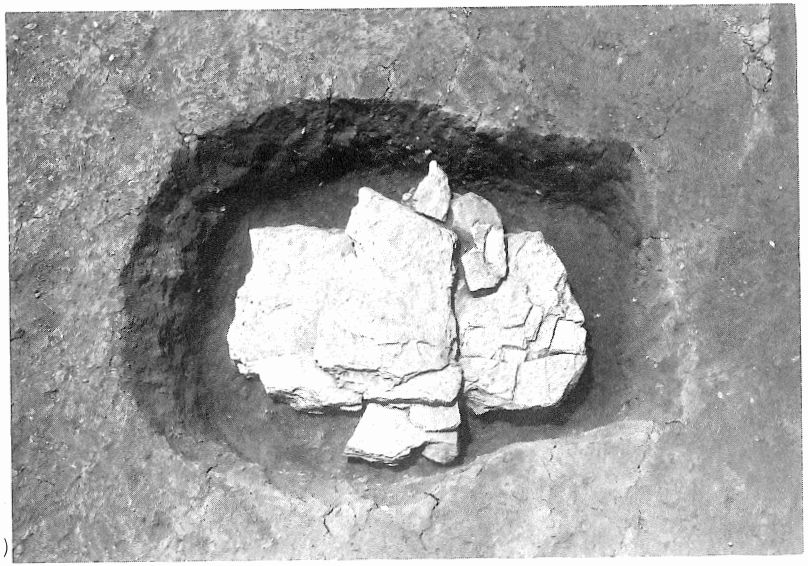


(4)

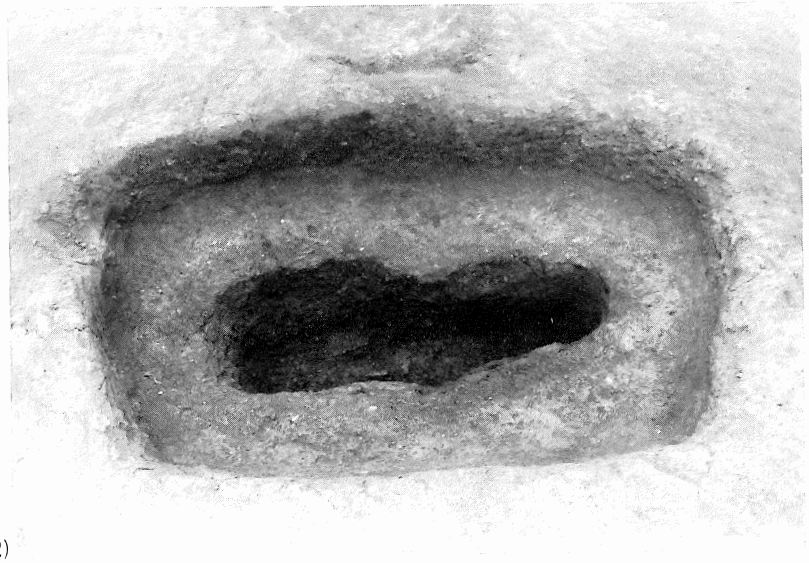
(3)　ＳＣＩ号（北から）
(4)　ＳＣＩ号煮石除去後



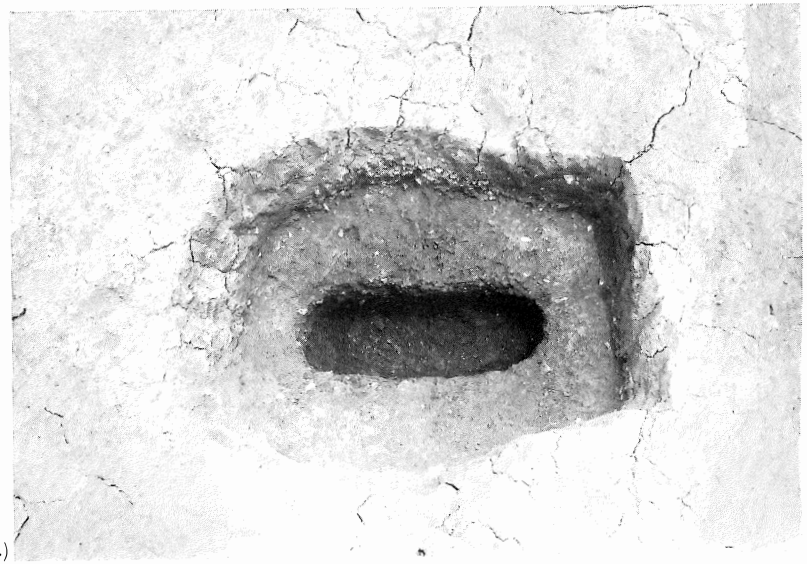
(1)



(3)



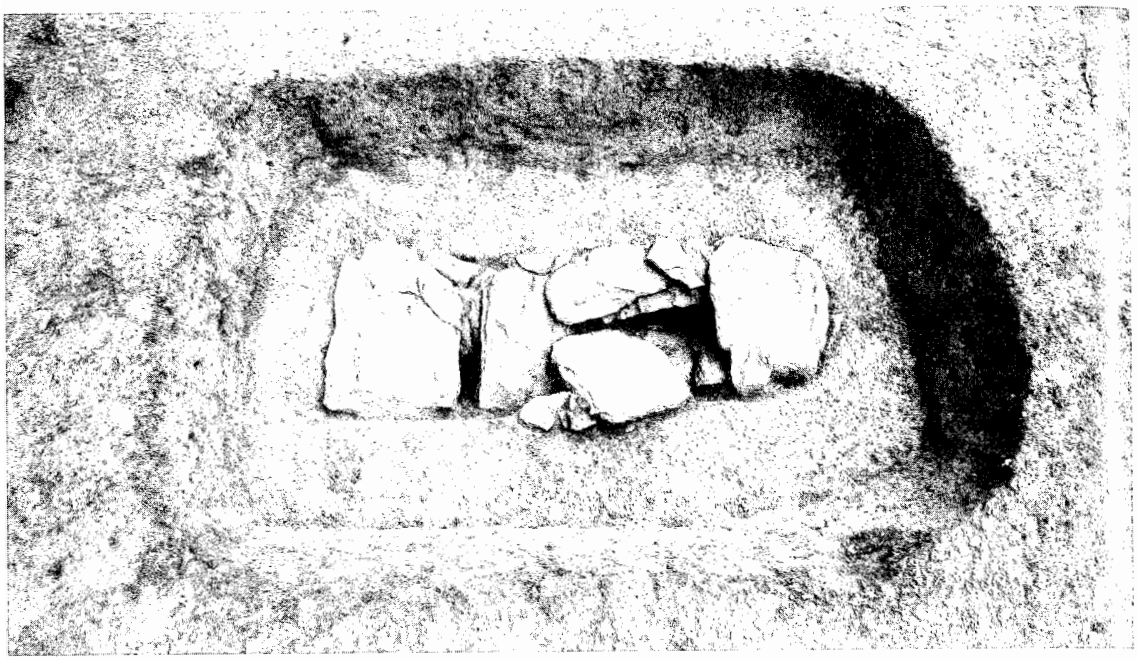
(2)



(4)

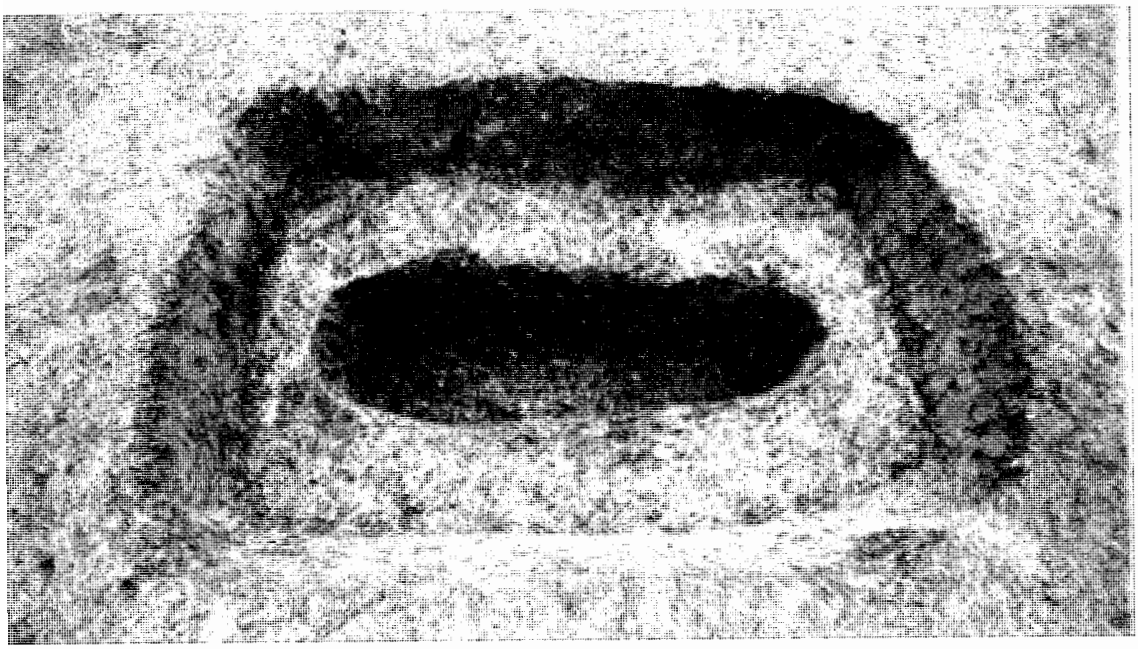
(1) ＳＣ２号（北から）
(2) ＳＣ２号蓋石除去後

(3) ＳＣ３号（南から）
(4) ＳＣ３号蓋石除去後



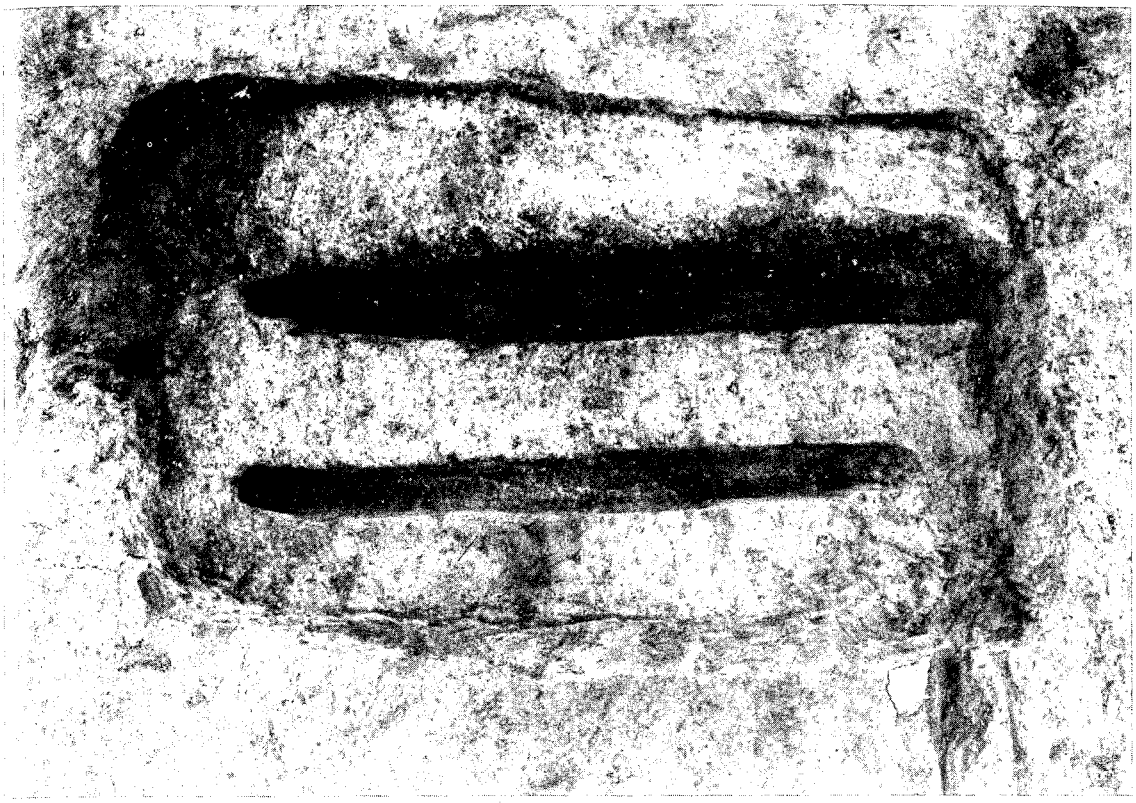
(1)

(2)

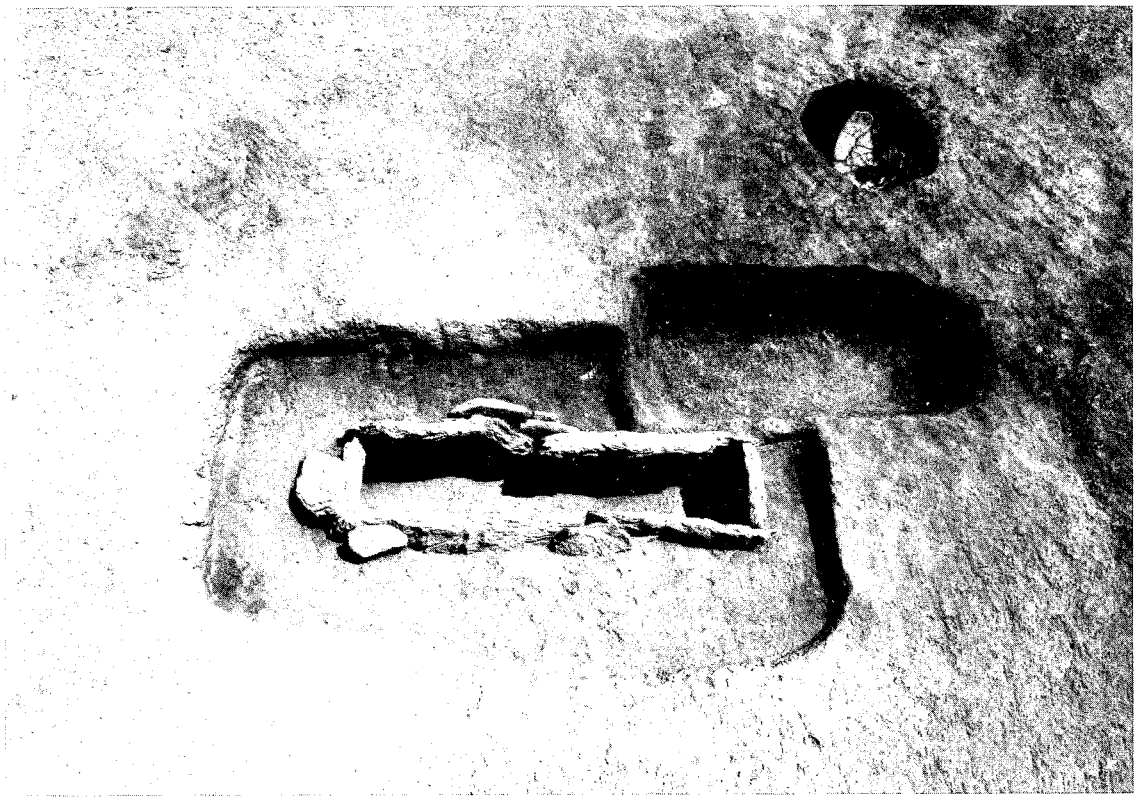


(3)

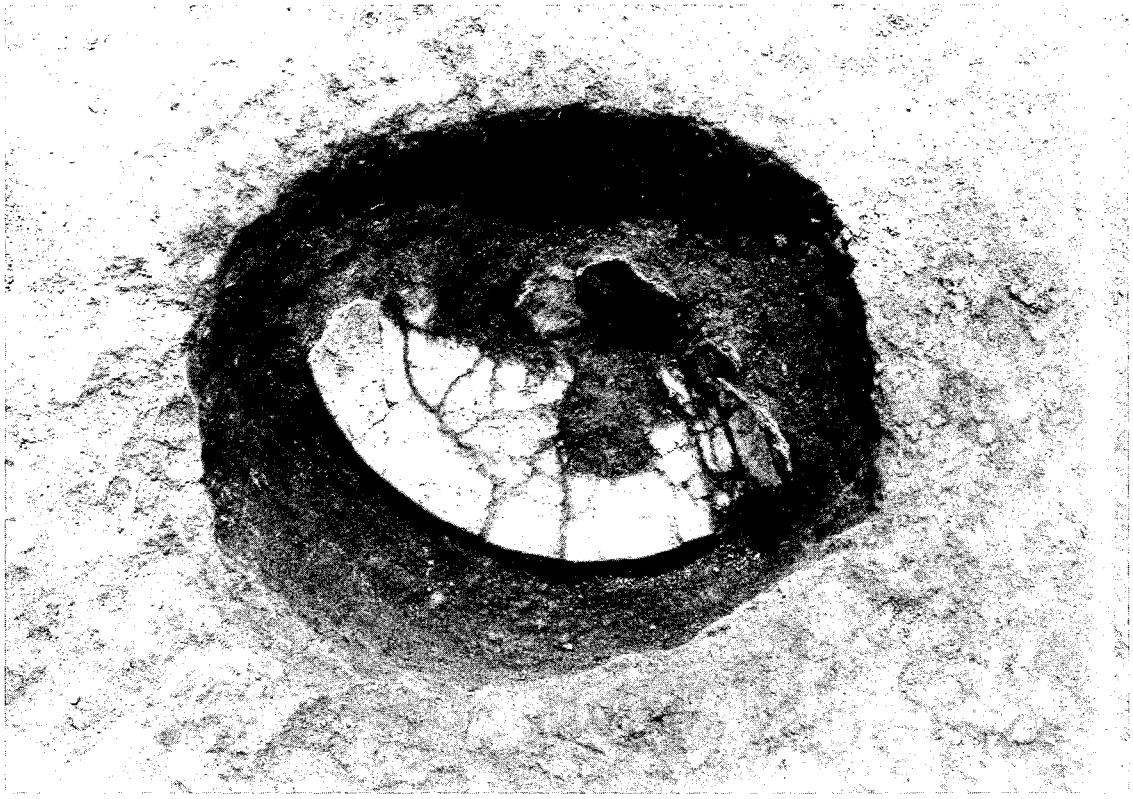
(1) ＳＣ４号（北から）　(2) 棺外鉄剣出土状態　(3) 蓋石除去後（北から）



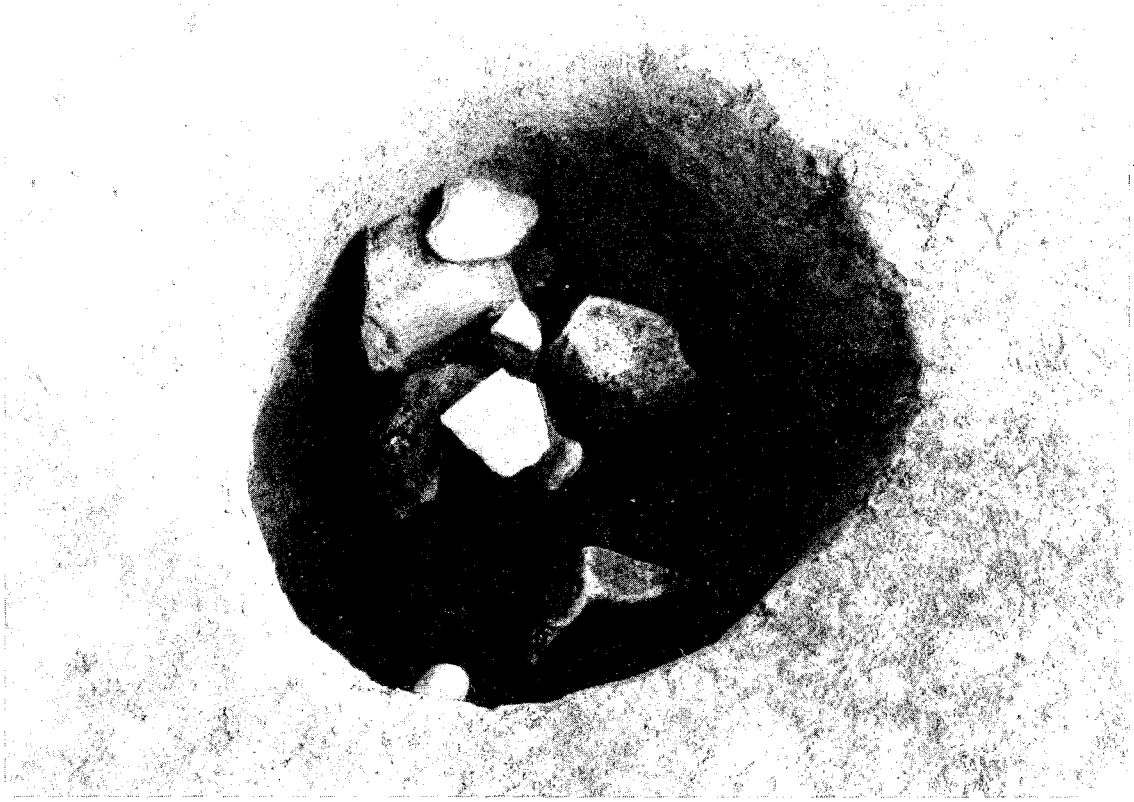
(1) M I 号（北から）



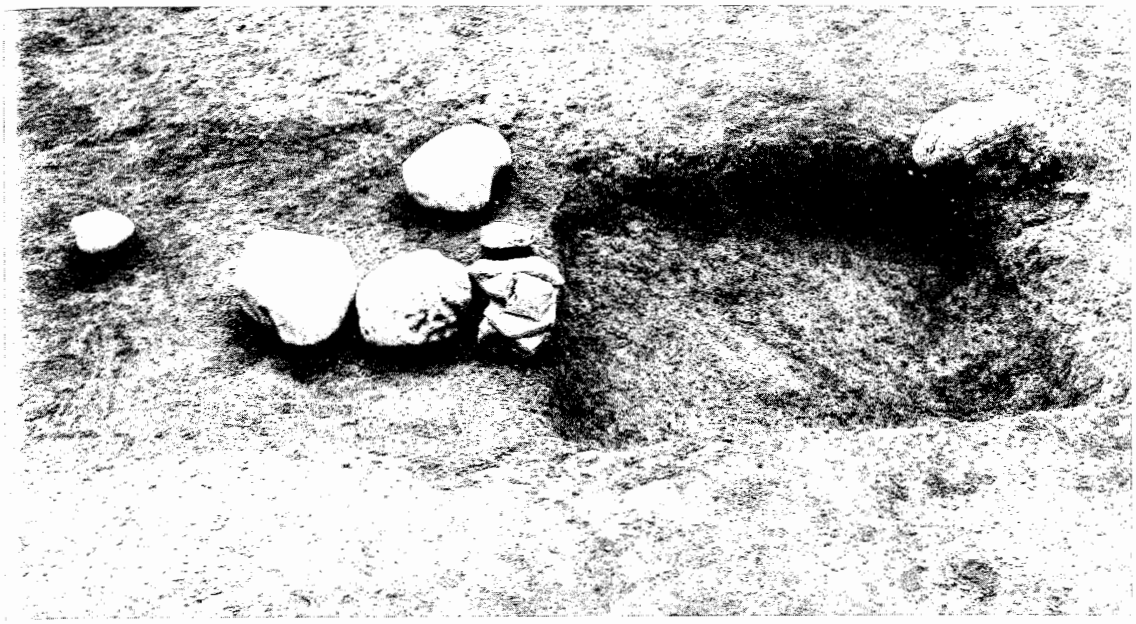
(2) D I 号（北から）



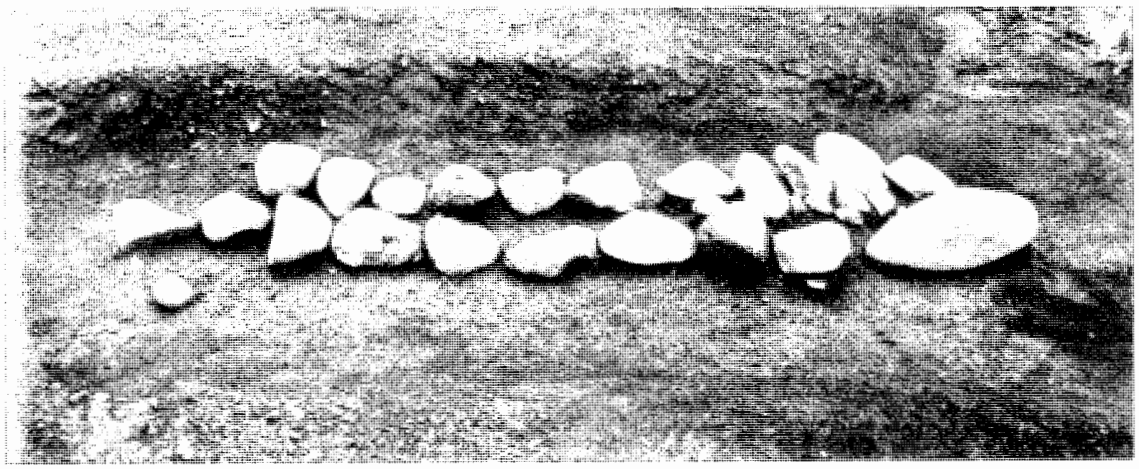
(1) K－2（西から）



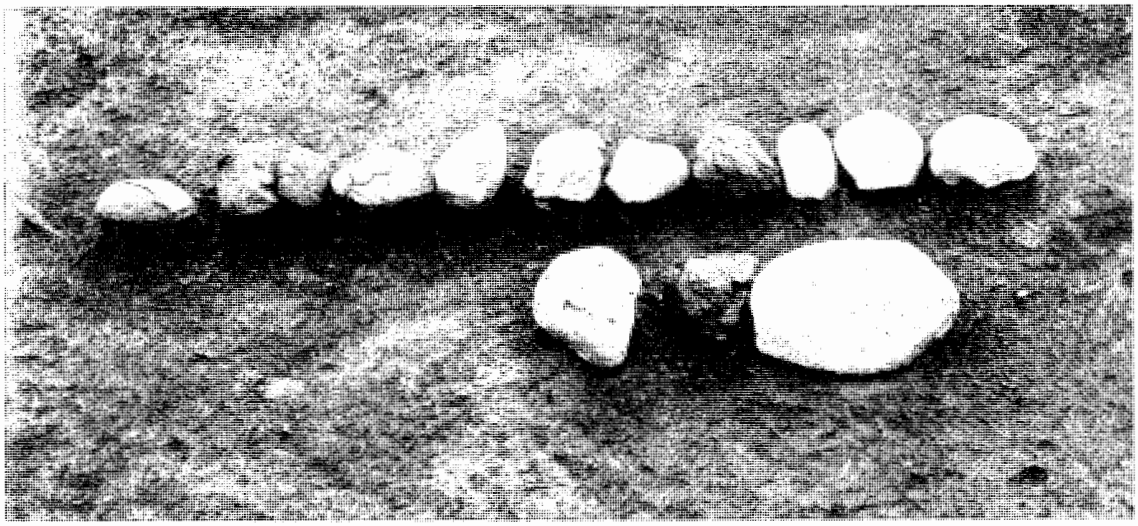
(2) K－3（南から）



(1)



(2)

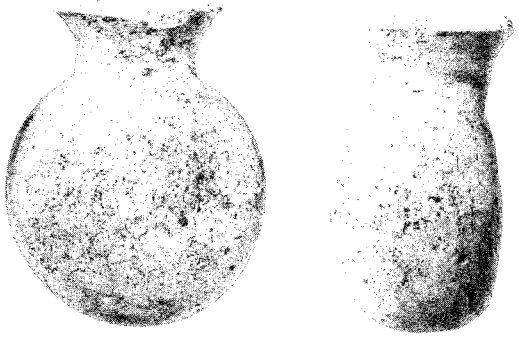


(3)

(1) ＳＲ－１（東から）　(2) ＳＲ－２（西から）　(3) ＳＲ－３（東から）

1号住

9号ー4



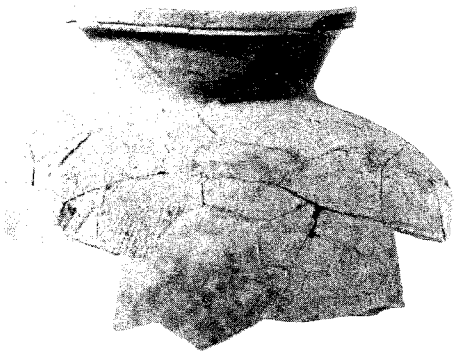
6

8近ー1

8号ー13

8近ー3

8近ー2

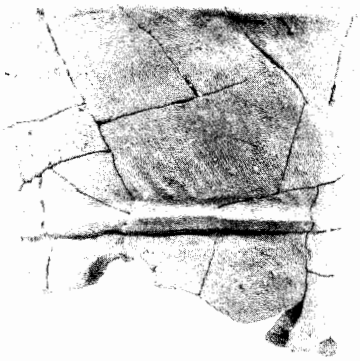


8近ー4

1号住居跡・9号墳・8号墳・8号墳近辺出土土器

1

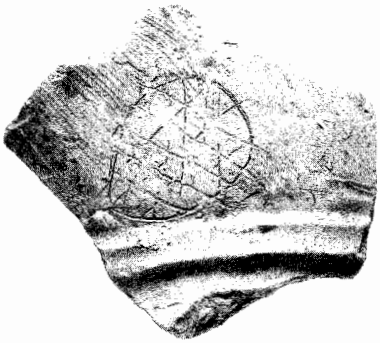
2



88

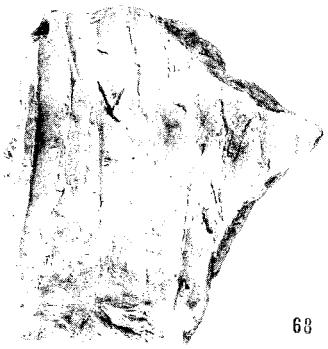
100

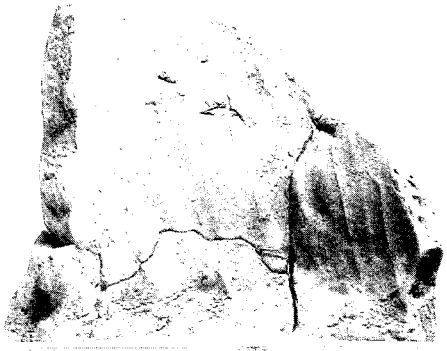
89

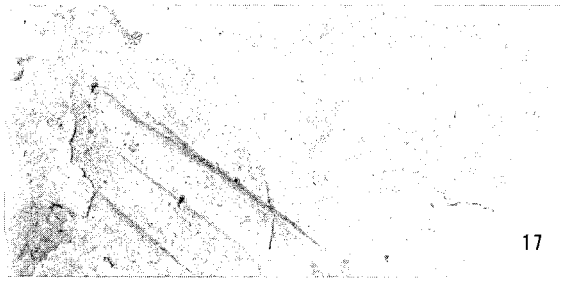


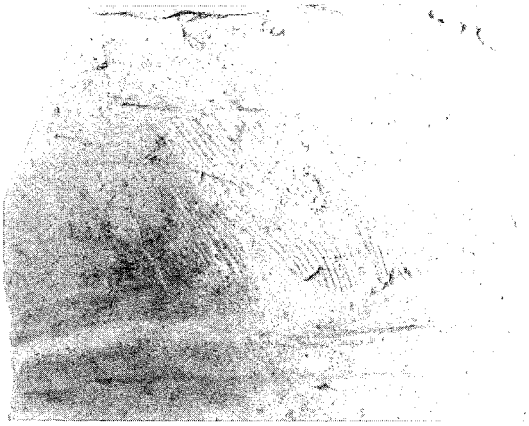
106

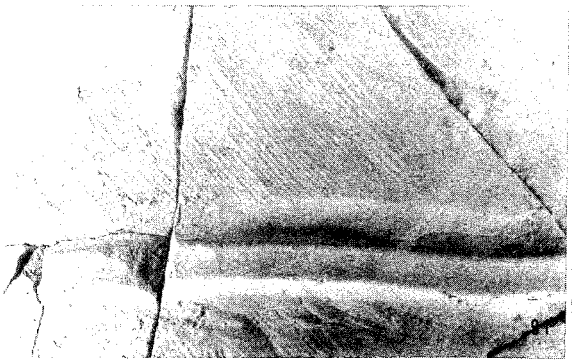
8号墳出土円筒埴輪

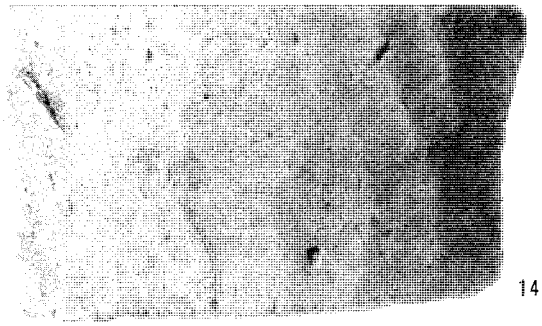


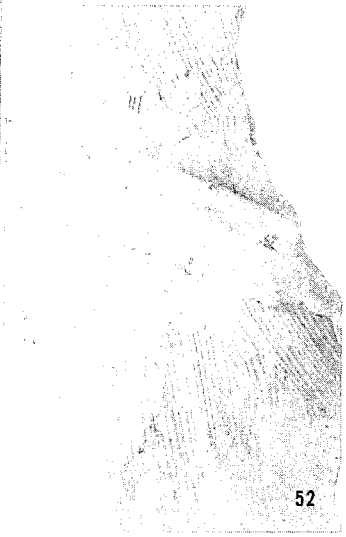




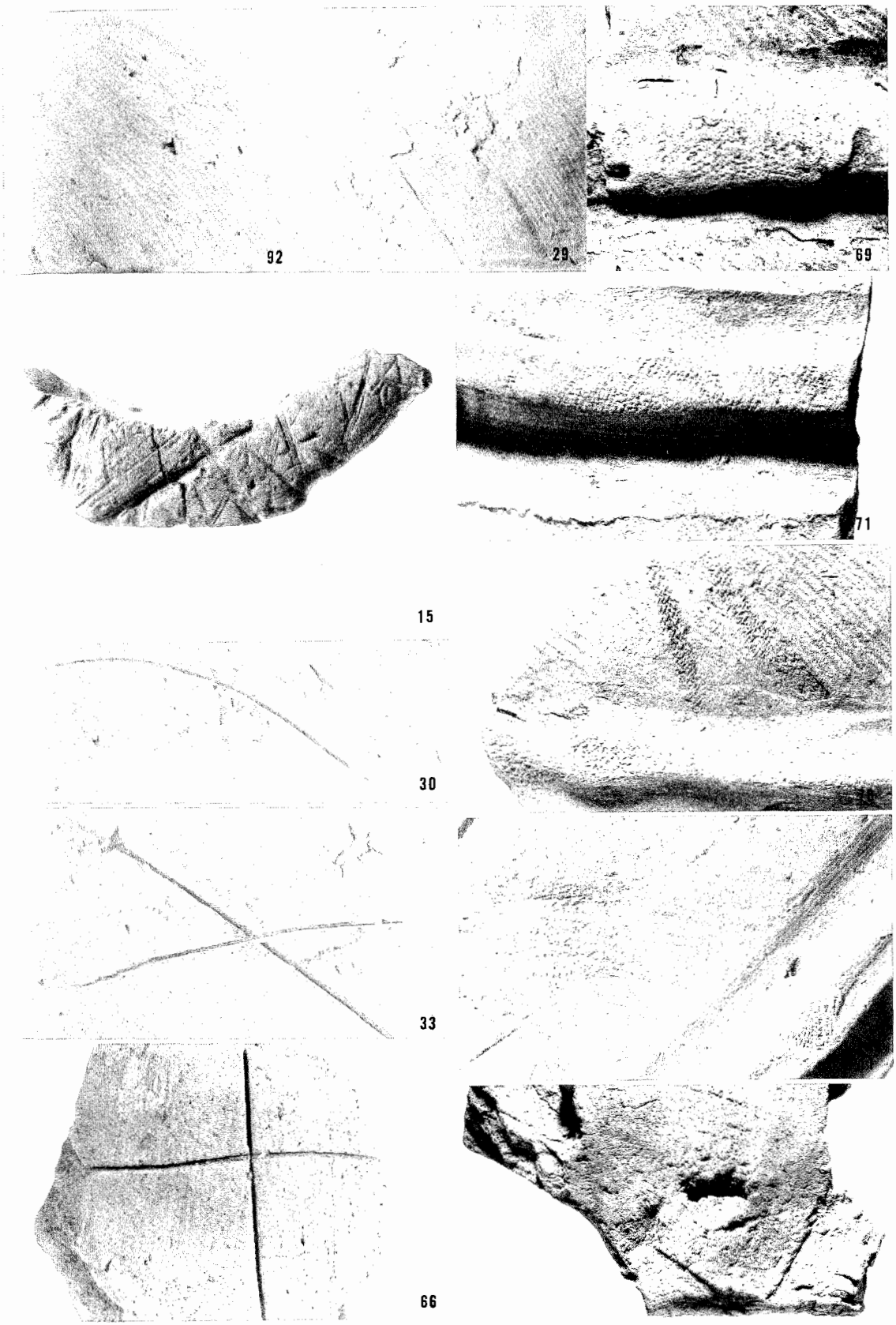




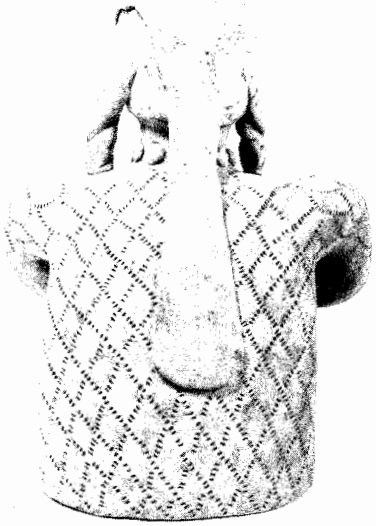




8号墳出土埴輪の調整痕

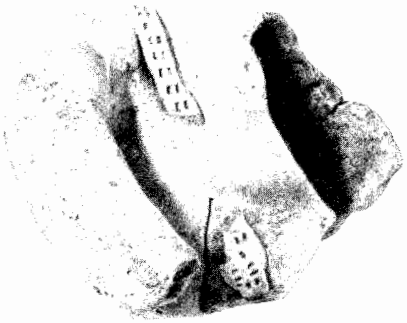


8 号墳出土埴輪の調整痕・布痕・ヘラ記号

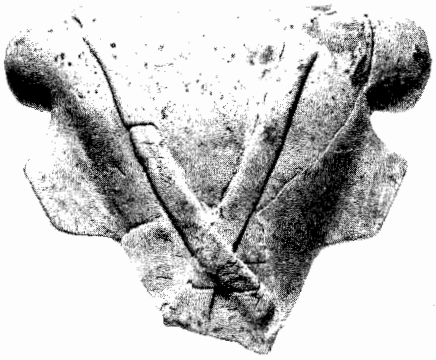


1

2



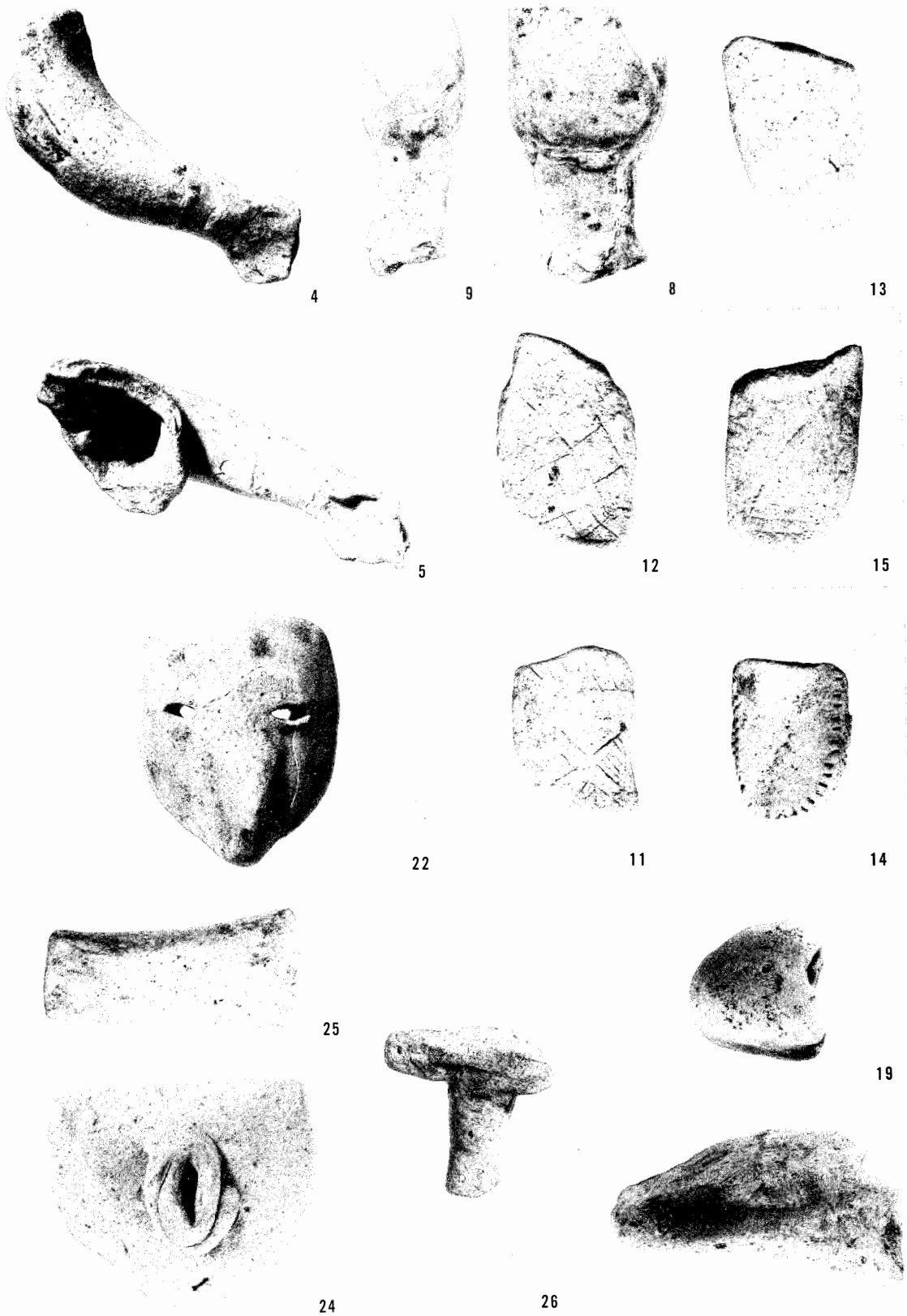
3



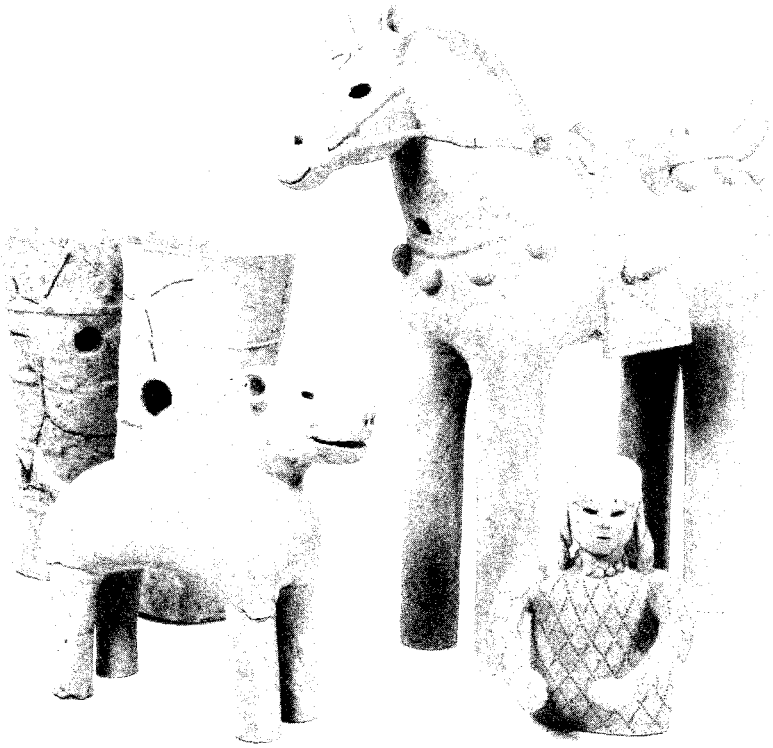
6

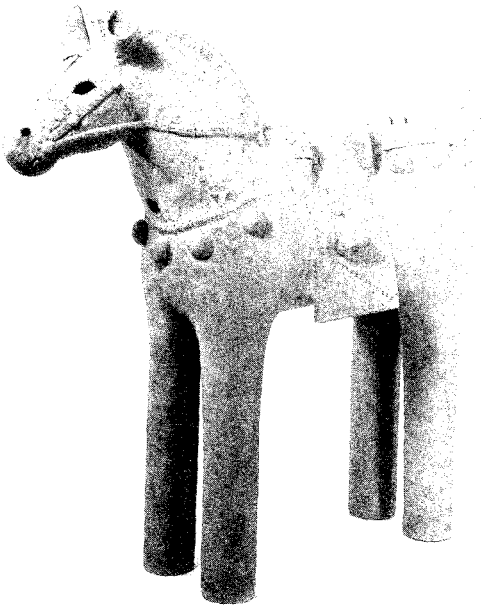
7

8号墳出土形象埴輪①（人物）



8号墳出土形象埴輪②（人物・猿・馬具その他）

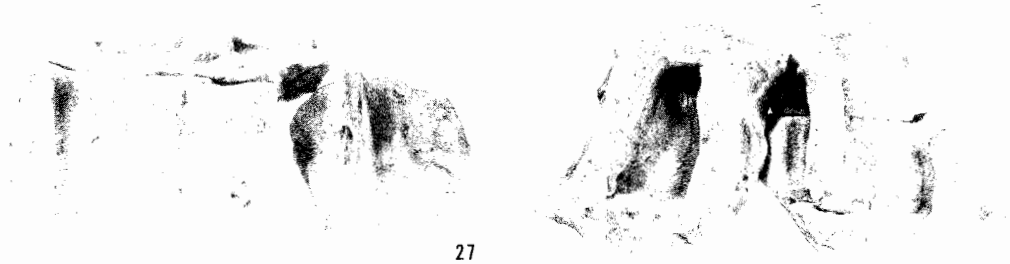




16

21

8号墳出土形象埴輪③（馬・猪）



27

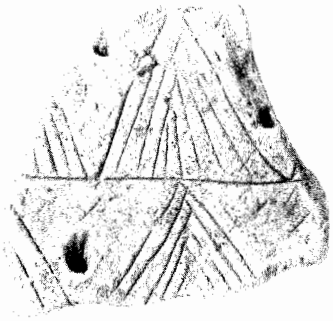
28

29

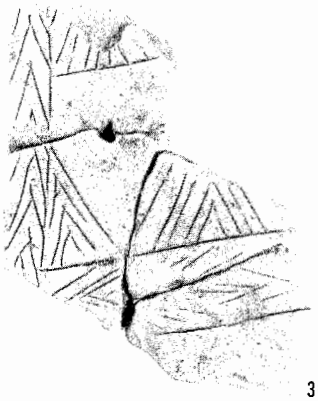
30

31

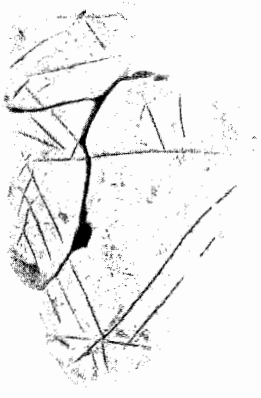
32



35

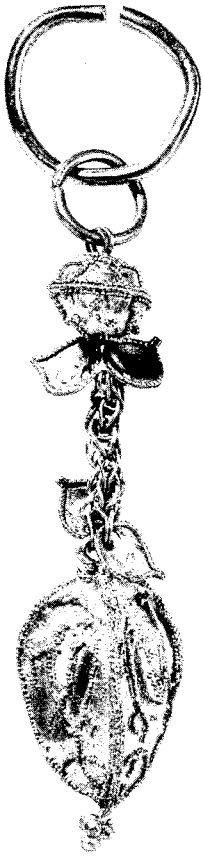


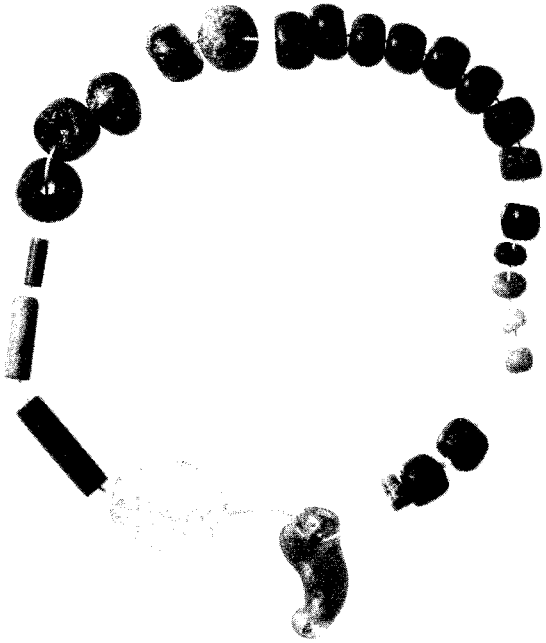
36



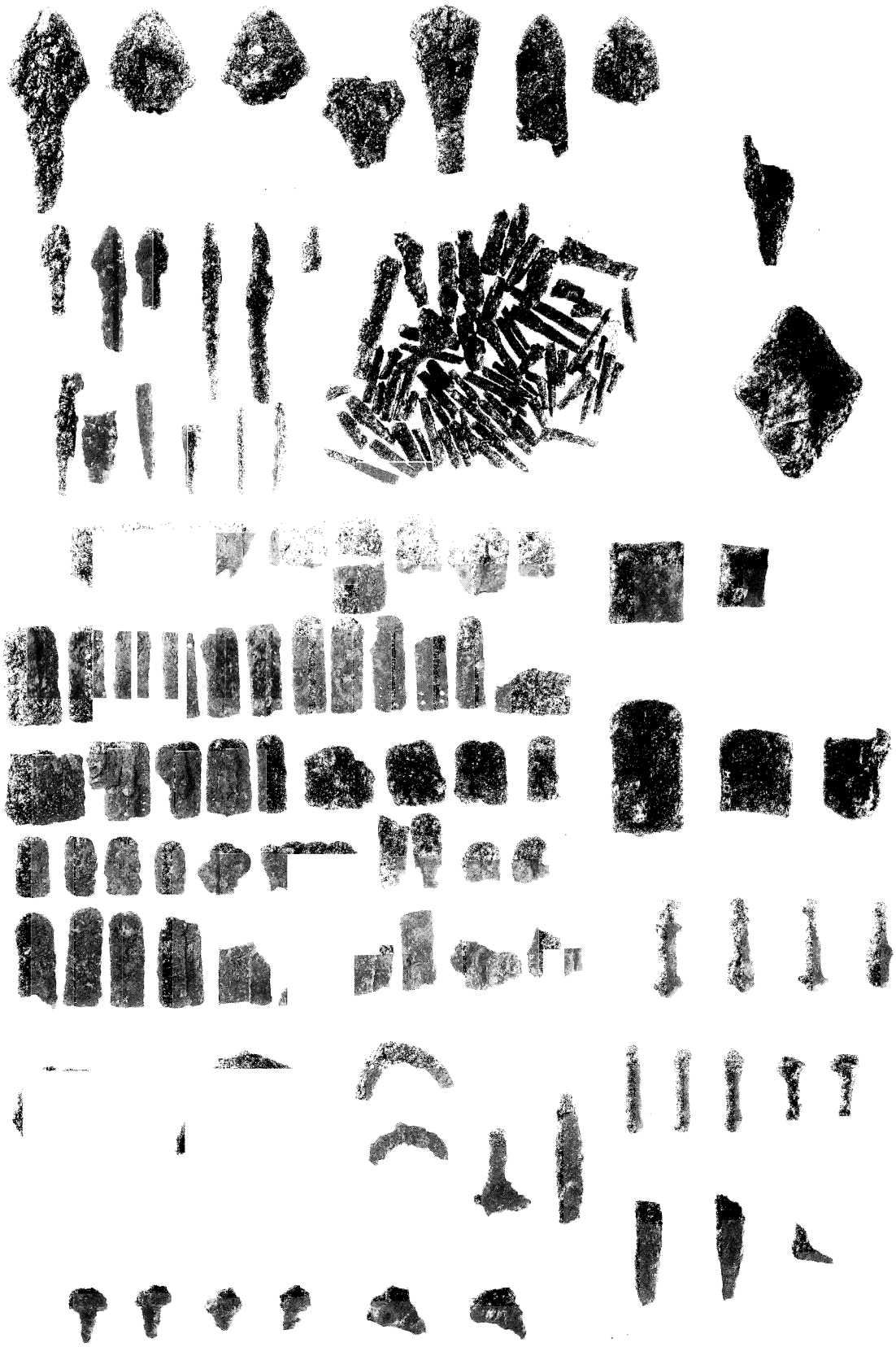
33

8号墳出土形象埴輪④（家・盾）



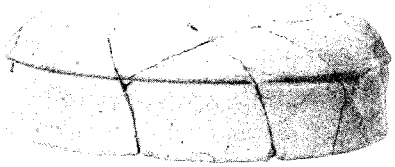


8号墳出土装身具



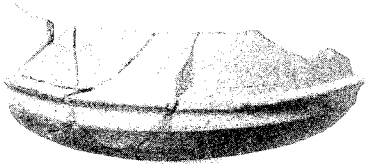
8 号墳出土鉄器

1



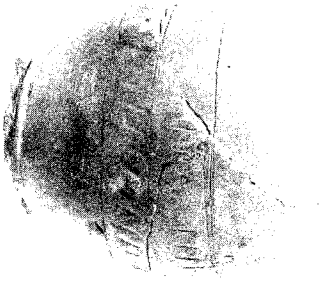
2

3

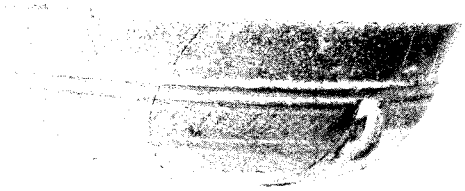


5

7



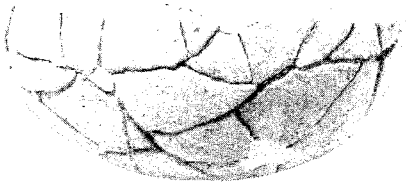
12



13

17

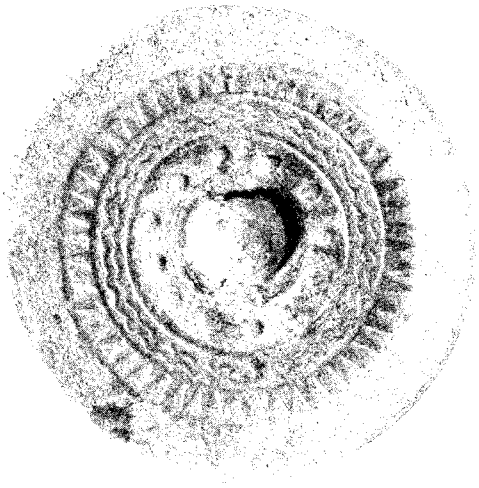
18

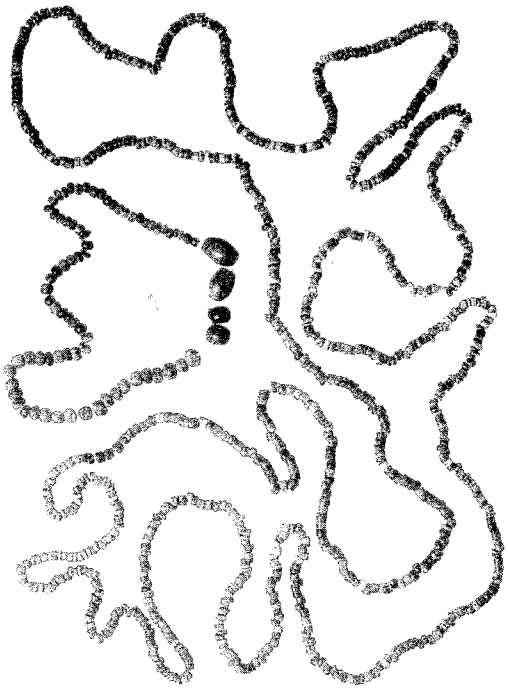


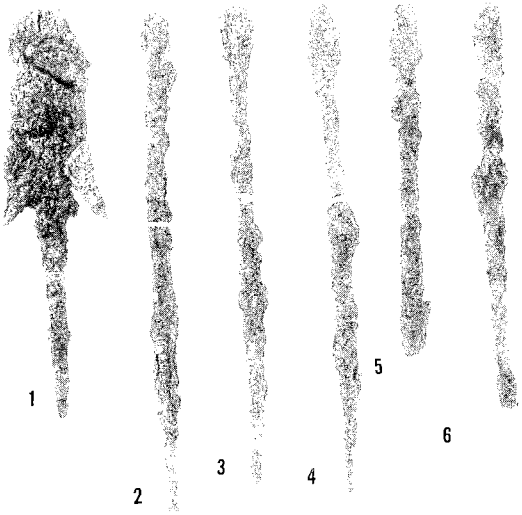
20

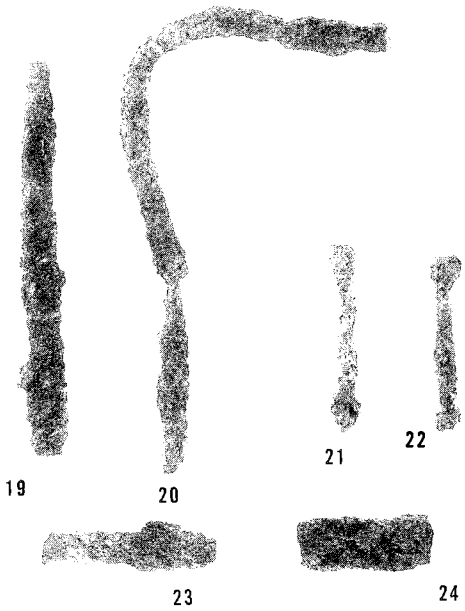
21

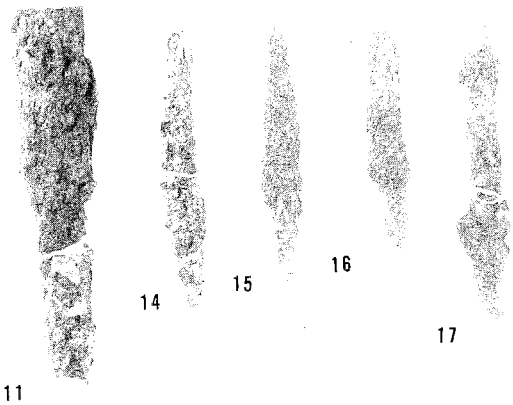
23号墳出土土器







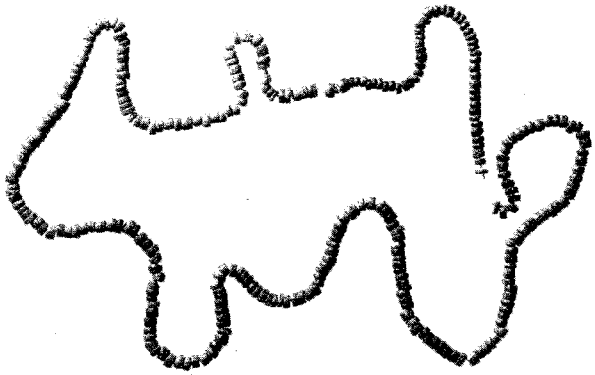


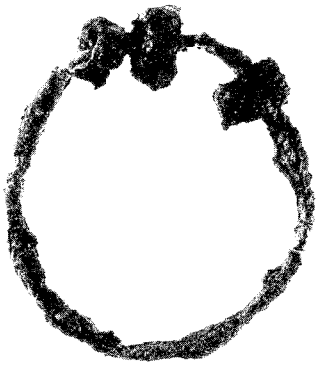


23号墳出土珠文鏡・玉類・鉄器

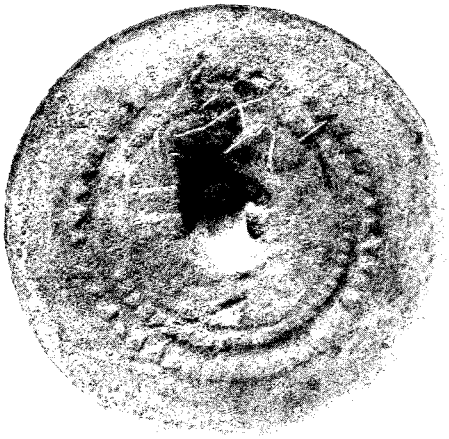
22号－1

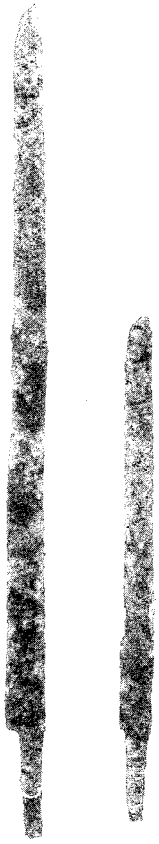
22号墳出土土器・鉄器、24号墳出土土器・四獣鏡





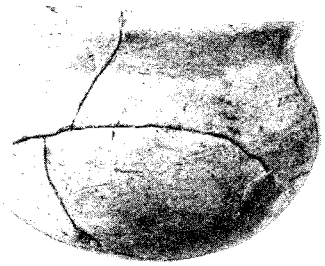
24号墳出土玉類・鉄器・鹿角製刀装具





25号墳出土珠文鏡・鉄器

27号ー1



27号ー11

27号ー5

27号ー9

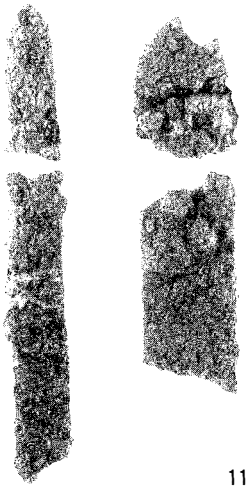
30号

29号

37号

38号

40号

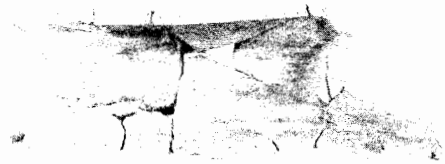


11号

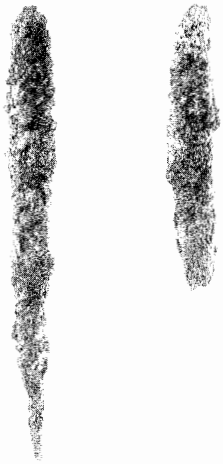
1 2 3 4 5 6

41号

27号墳出土土器、29・30・37・38・11・40・41号墳出土鉄器



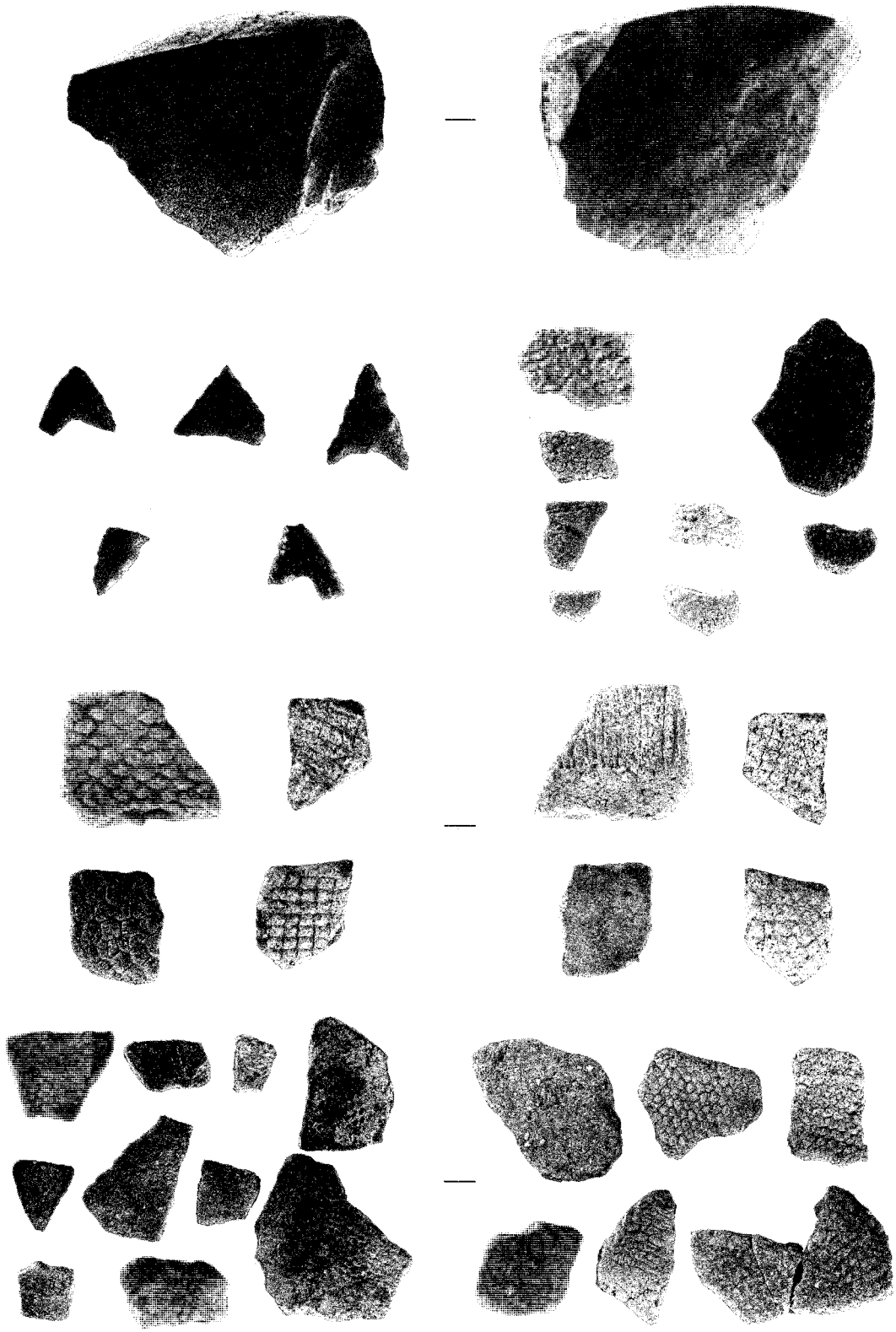
C１号



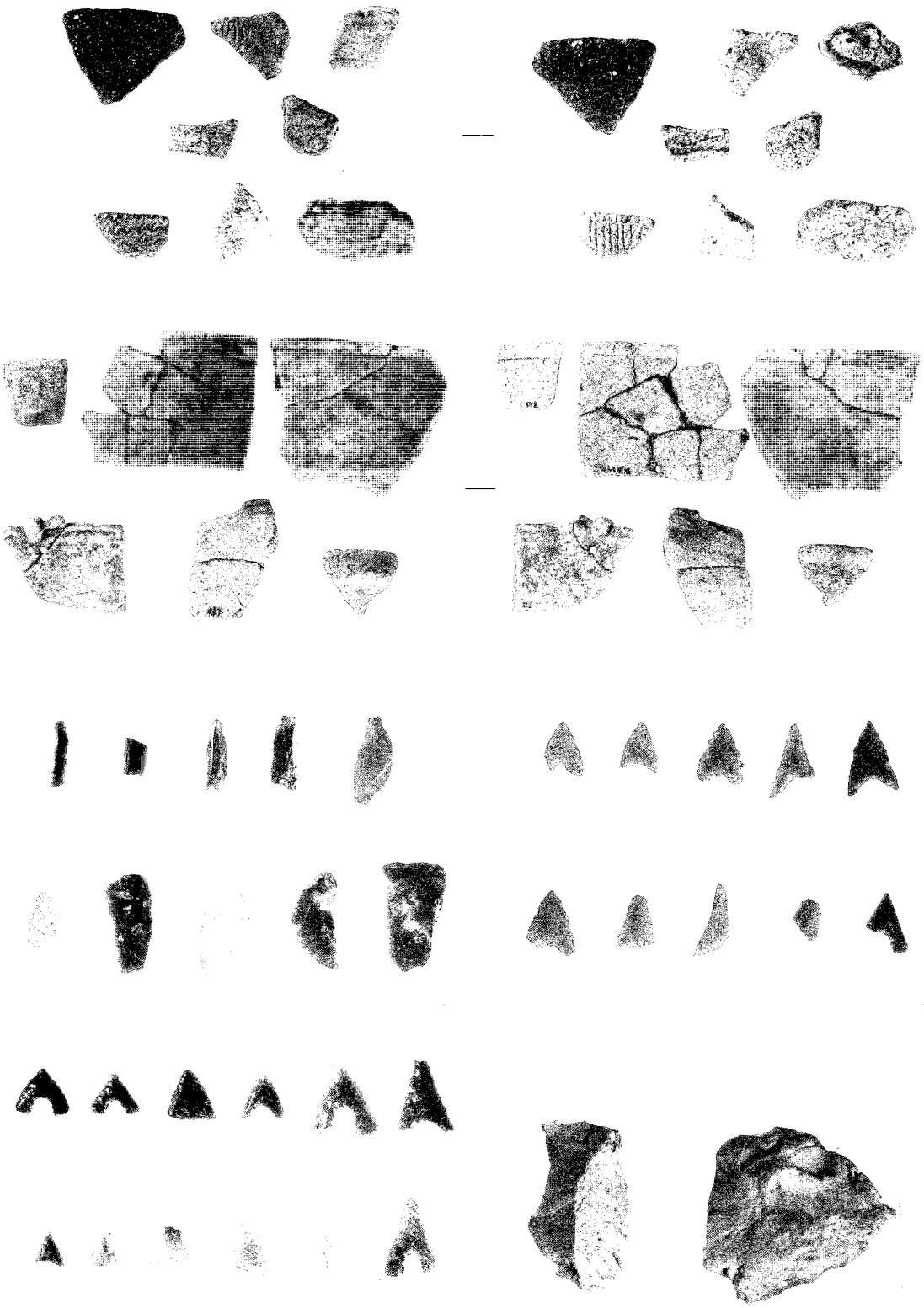
SC２号

SC４号

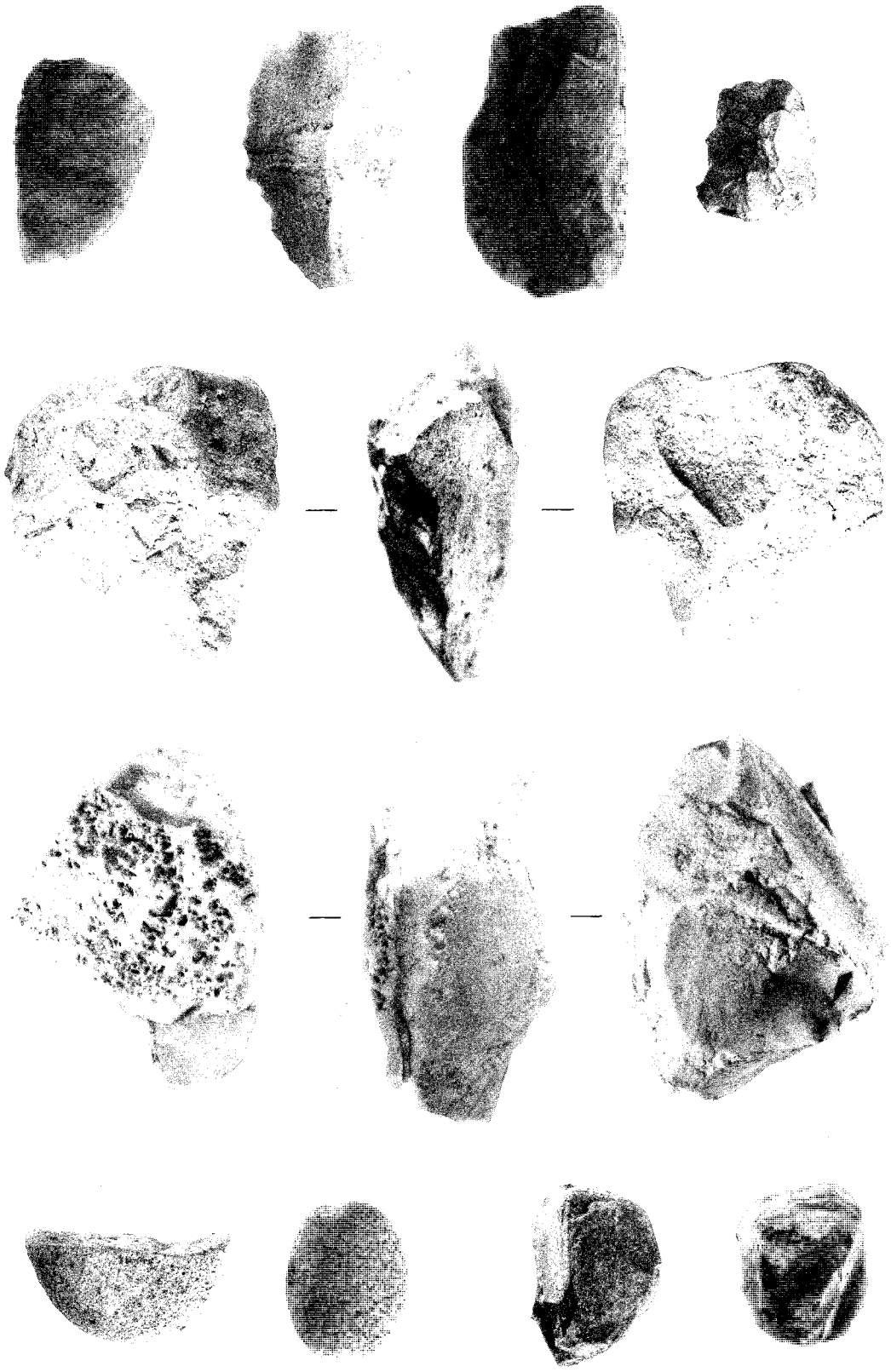
12号墳出土土器・玉類・鉄器、C１、SC２・４号出土鉄器



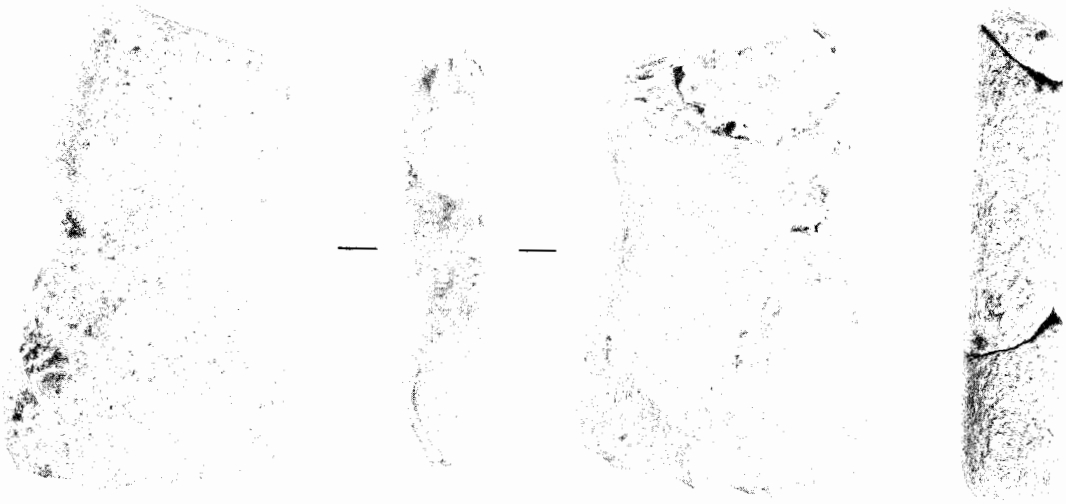
立山山Ｊ区出土石器・土器、採集土器

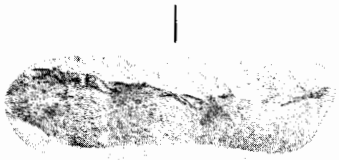


立山山採集土器・石器



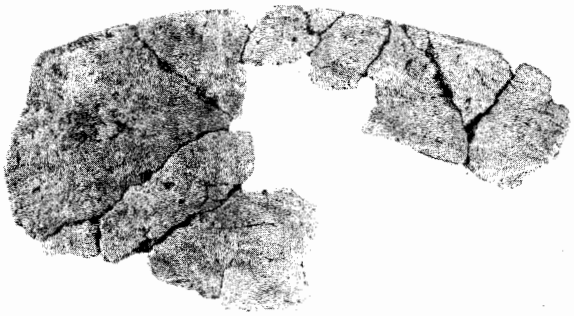
立山山採集石器



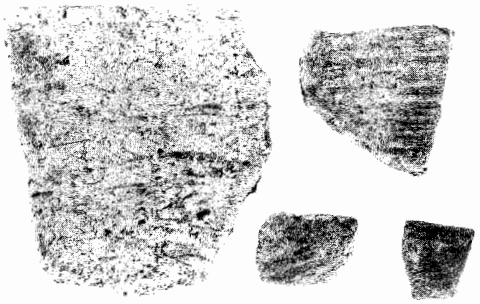


刃部拡大

K－1



K－2



K－3

立山山採集石器、K－1・2・3号土器

あ と が き

1981年４月30日、立山山８号墳から１個の垂飾付耳飾りが出土した。まもなくそれが新聞報道され、立山山古墳群は一躍、衆目の注視するところとなり、かつ、この古墳群の保存云々についても調査中から問い質されるところとなった。その背景には、この古墳群の価値に加え、岩戸山古墳を代表とする大古墳群地帯を形成する八女丘陵に開発の手が伸びてきて、この調査が起爆剤になりはしないかとの懸念も多分にあったことと思う。

その後の社会的あるいは個人的経緯は別にしても、結局、立山山古墳群のうちスポーツ公園の用地内にあった古墳は全て消滅し、いまは、市民が相集う場となっている。

もと古墳が存していた場所に立って周辺をながむるとき、調査者のひとりとして、複雑な心境に陥りざるをえない。

しかし、どのような感傷に浸ったとて、そこから何も生まれてこないことはよくわかっている……

私たちは、やはり現実を直視しつつ将来的展望をもってこの立山山古墳群の意義を考えたい。それを礎として文化財をできうる限り後世に守り伝えてゆかねばなるまい。

末尾ながら、調査中に種々の御協力をいただいた方々、また、出土遺物の整理から報告書作成に至るまでの間にお世話になった方々にお礼を申し上げる。特に、平島文博・大場澄恵両氏には2000個近い玉類の計測をお願いしたが、都合により大半を割愛したことを明記する。また、豊福弥生氏には製図のほとんどをお願いし、きわめて多くの時間を費してもらった。衷心より謝意を表します。

最後に、総数35基の埋葬主体に葬られ、千数百年ののちにその眠りから醒めさせられるとともに、安息の場を失なった諸霊に対し深く頭を垂れたい。

1983年５月

立山山古墳群

八女市文化財調査報告書

第　10　集

昭和58年5月31日

発行　八女市教育委員会
福岡県八女市大字本町647

印刷　青柳工業株式会社
福岡市中央区渡辺通2丁目9の31